

— 南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XX —
（鹿児島西 IC～伊集院 IC）

前 原 遺 跡

（鹿児島市福山町）

（第 I 分冊）

2007年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（107）

前 原 遺 跡
（第 I 分冊）

二〇〇七年一月 鹿児島県立埋蔵文化財センター





前原遺跡空中写真（西から）



A 地点遺構配置（空中写真）



縄文土器（Ⅱ類・Ⅲ類）



石槍・砥石



石皿・凹石・敲石・磨石

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道（鹿児島西 IC～伊集院 IC 間）建設に伴って、平成 3 年度から平成 8 年度にかけて実施した鹿児島市福山町（旧日置郡松元町福山）に所在する前原遺跡の発掘調査の記録です。

前原遺跡は旧松元町中央部の標高180mのシラス台地上にあります。旧石器時代から中世までの遺構・遺物が発見され、特に縄文時代早期の集落跡は全国から注目を集めました。検出された住居跡，道跡，連穴土坑，集石などは，約9500年前の縄文集落の様子をよく伝えています。出土した土器も完形品が多く，この当時の土器製作技術を知るうえで，貴重なものとなっています。

こうした遺跡の成果が積み上げられることによって，鹿児島の縄文文化の解明が進むものと期待しています。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財普及の一助になれば幸いです。

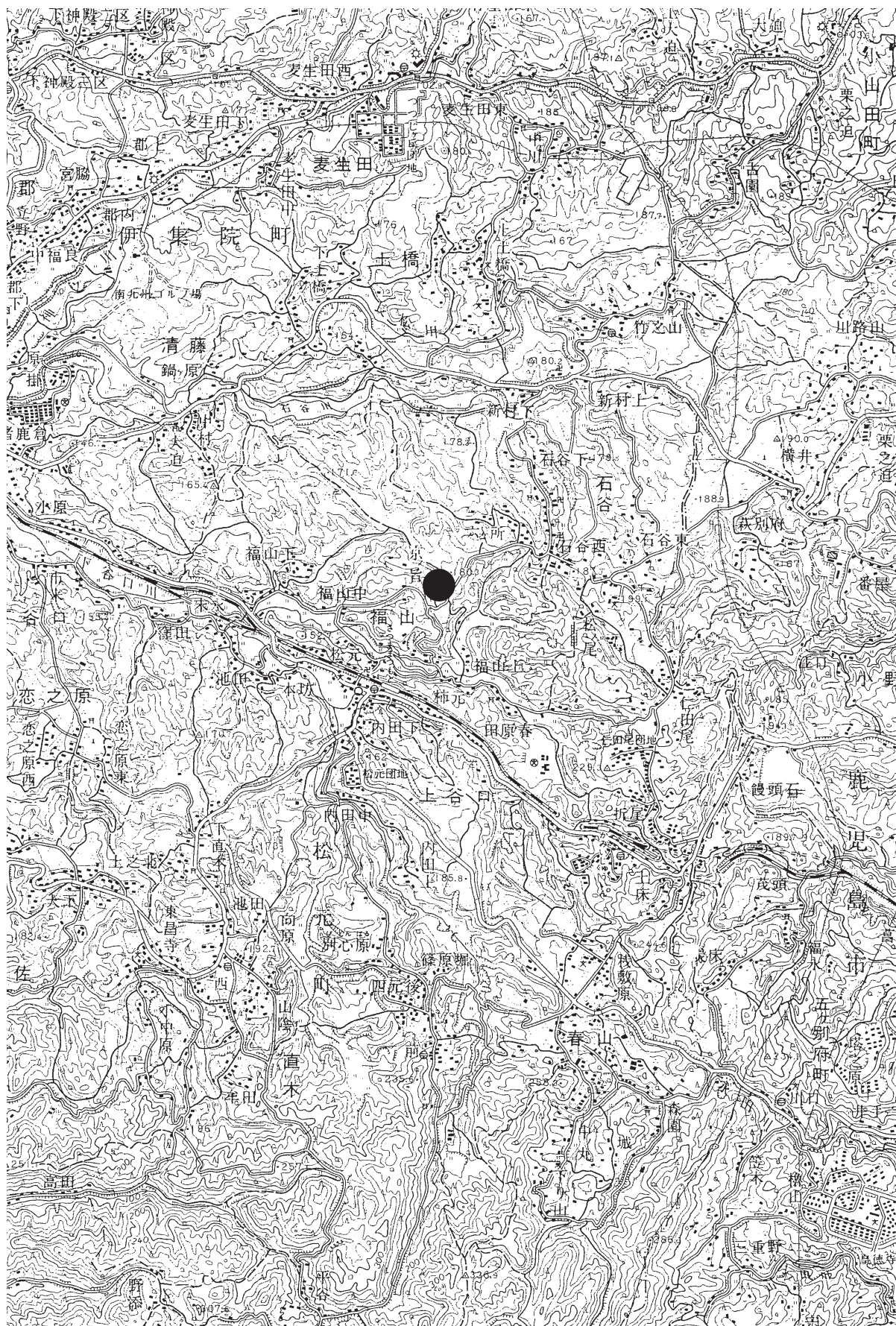
最後に調査にあたりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所や旧松元町教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成19年 1 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長 宮 原 景 信

報告書抄録

ふりがな	まえばる いせき							
書 名	前 原 遺 跡							
副 書 名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻 次	XX							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第107集							
編 著 者 名	牛ノ濱 修・内村 光伸・前迫 亮一							
編 集 機 関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	2007年 1 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 (遺跡面積)	調 査 起 因
		市町村	遺跡番号					
まえばる いせき 前 原 遺 跡	かごしまけん かごしまし 鹿児島県鹿児島市 ふくやまちょう 福山 町 あぎまえばる おに がさこうえ 字前原・鬼ヶ迫上	463647	3116	31° 36′ 35″	130° 26′ 46″	確認調査 1991,8 全面調査 19911001 ～ 19931130 19940107 ～ 19961031	53,500m ² (19,500m ²)	南九州 西回り 自動車 道鹿児 島道路 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項	
前 原 遺 跡	集落	旧石器 縄文 古代・中世	礫群 竪穴住居跡・道跡・ 連穴土坑・土坑・集 石		台形石器・三稜尖頭 器・細石刃等 前平式・吉田式・石 坂式・押型文・岩崎 式・黒川式等 石槍・石皿・磨石・ 石鏃・石斧等 土師器・須恵器			



第1図 前原遺跡位置図 (50,000分の1)

例 言

- 1 この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う前原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿児島市福山町字前原及び字鬼ヶ迫上に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査の任にあたった。
- 4 発掘調査事業は平成3年10月1日～平成8年10月31日にかけて実施し、報告書作成事業は平成16・17年度に実施し、報告書刊行は平成18年度に行った。
- 5 遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の遺物番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 8 発掘調査及び現場における図面の作成・写真の撮影は、調査担当者が行い、遺構実測の一部を(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 9 石器の実測・トレースの大部分を(株)九州文化財研究所及び大成エンジニアリング(株)、完形土器の一部を(株)九州文化財研究所、土器胎土薄片分析を(株)パスコに委託した。
- 10 遺物の写真撮影は、鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事吉岡康弘が行った。
- 11 本書の執筆・編集は牛ノ濱修・内村光伸が主体となり、前迫亮一、黒川忠広、東和幸に実測、原稿を依頼した。また、埋蔵文化財センター職員（立神次郎、池畑耕一、中村耕治、鶴田静彦、上床真、藤崎光洋、日高正人、日高勝博、吉岡康弘、新中なるみ）に協力を得た。森雄二には顔料分析を依頼した。
- 12 遺物は、当センターで保管し、展示・活用する予定である。

目 次

〔第Ⅰ分冊〕	
カラーグラビア	
序 文	
報告書抄録	
例 言	
第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 遺跡の概要	1
第Ⅱ章 調査の経過	6
第1節 調査に至るまでの経過	6
第2節 調査の組織	6
第3節 調査の経過（日誌抄）	8
第4節 整理作業の経過	12
第Ⅲ章 遺跡の位置及び環境	13
第1節 地理的環境	13
第2節 歴史的環境	13
第Ⅳ章 調査の概要	19
第1節 発掘調査の方法	19
第2節 遺跡の層位	23
第3節 旧石器時代の調査	32
1 IX・Ⅷ層の調査	32
2 Ⅶ層の調査	39
第4節 縄文時代早期（Ⅳ・Ⅴ層）の調査	46
1 A地区の調査	57
遺構・遺物	59
2 B地区の調査	183
遺構・遺物	185
3 C地区の調査	383
遺構・遺物	385
〔第Ⅱ分冊〕	
第5節 縄文前期～晩期（Ⅲ層）の調査	1
第6節 古代・中世の調査	31
第Ⅴ章 まとめにかえて	66
科学分析	77
前原遺跡出土土器の胎土分析（パリノ・サーヴェイ株式会社）	77
鹿児島県前原遺跡出土試料の ¹⁴ C年代測定（国立歴史民俗博物館・年代測定グループ）	87
写真図版	1
あとがき	

挿 図 目 次

〔第 I 分冊〕

第 1 図	前原遺跡位置図（50,000分の1）	
第 2 図	鹿兒島西 IC～伊集院 IC 遺跡位置図	5
第 3 図	前原遺跡の位置及び周辺遺跡（1：25,000）	16
第 4 図	確認調査トレンチ配置図	19
第 5 図	平成 3 年度調査範囲図	19
第 6 図	平成 4 年度調査範囲図	20
第 7 図	平成 5 年度調査範囲図	21
第 8 図	平成 6 年度調査範囲図	21
第 9 図	平成 7 年度調査範囲図	22
第10図	平成 8 年度調査範囲図	22
第11図	基本土層	23
第12図	土層配置図	24
第13図	土層①	25
第14図	土層②	26
第15図	土層③	27
第16図	土層④	28
第17図	土層⑤	29
第18図	土層⑥	30
第19図	土層⑦	31
第20図	器種別石器出土状況（Ⅷ・Ⅸ層）	33
第21図	石材別石器出土状況（Ⅷ・Ⅸ層）	34
第22図	旧石器時代石器(1)	35
第23図	旧石器時代石器(2)	37
第24図	礫群	39
第25図	縄文草創期土器	40
第26図	器種別石器出土状況（Ⅶ層）	41
第27図	器種別石器出土状況（Ⅶ層）	42
第28図	細石刃・石鏃	43
第29図	Ⅶ層出土石鏃法量相関（長さ×幅）	44
第30図	石核・石斧	45
第31図	遺構配置図（Ⅳ・Ⅴ層）	47
第32図	1～3 類土器出土状況	48
第33図	4～6 類土器出土状況	49
第34図	7・8 類土器出土状況	50
第35図	器種別石器出土状況（Ⅳ・Ⅴ層）	55
第36図	石材別石器出土状況（Ⅳ・Ⅴ層）	56
第37図	A 地区遺構配置図	58
第38図	A 地区検出の竪穴住居跡位置図	60
第39図	1 号住居跡	62
第40図	2 号住居跡	63
第41図	3 号住居跡	64
第42図	4 号住居跡	65
第43図	5 号住居跡	66
第44図	6 号住居跡	67
第45図	7・8 号住居跡(1)	69
第46図	7・8 号住居跡(2)	70
第47図	9 号住居跡	71
第48図	10号住居跡	72
第49図	11・12号住居跡	73
第50図	集石 1～4 号	74
第51図	集石 5・6 号	75
第52図	集石 7 号(1)	77
第53図	集石 7 号(2)	78
第54図	集石 7 号(3)	79

第55図	集石 8～10号	84
第56図	連穴土坑 1～4	88
第57図	連穴土坑 5	89
第58図	土坑(1)	91
第59図	土坑(2)	92
第60図	土坑(3)	93
第61図	土坑(4)	94
第62図	土坑(5)	95
第63図	土坑(6)	96
第64図	土坑(7)	97
第65図	土坑(8)	99
第66図	土坑(9)	100
第67図	土坑(10)	101
第68図	土坑(11)	102
第69図	土坑(12)	103
第70図	土坑(13)	104
第71図	土坑(14)	105
第72図	遺構遺物(1)	110
第73図	遺構遺物(2)	111
第74図	遺構遺物(3)	112
第75図	遺構遺物(4)	113
第76図	遺構遺物(5)	114
第77図	遺構遺物(6)	115
第78図	遺構遺物(7)	116
第79図	遺構遺物(8)	117
第80図	遺構遺物(9)	118
第81図	2・3 類土器出土状況	120
第82図	2 類土器(1)	121
第83図	2 類土器(2)	122
第84図	2 類土器(3)	123
第85図	2 類土器(4)	124
第86図	3 類土器(1)	126
第87図	3 類土器(2)	127
第88図	4～6 類土器出土状況	129
第89図	4 類土器(1)	130
第90図	4 類土器(2)	131
第91図	4 類土器(3)	132
第92図	4 類土器(4)	133
第93図	5 類土器(1)	135
第94図	5 類土器(2)	136
第95図	5 類土器(3)	137
第96図	6 類土器	139
第97図	5・6 類土器(1)	140
第98図	5・6 類土器(2)	141
第99図	7～9 類土器出土状況	143
第100図	7 類土器(1)	144
第101図	7 類土器(2)	145
第102図	7 類土器(3)	146
第103図	7 類土器(4)	147
第104図	7 類土器(5)	148
第105図	7 類土器(6)	149
第106図	7 類土器(7)	150
第107図	7 類土器(8)	151
第108図	8 類土器	153
第109図	7・8 類土器(1)	154

第110図	7・8類土器(2)……………	155
第111図	7・8類土器(3)……………	156
第112図	9類土器(1)……………	158
第113図	9類土器(2)……………	158
第114図	10・11類土器(1)……………	160
第115図	11類土器(2)……………	161
第116図	12類その他の土器……………	162
第117図	石鍬分類図……………	164
第118図	A地区器種別石器出土状況……………	165
第119図	石鍬(V層)……………	166
第120図	石鍬(IV層)……………	166
第121図	A地区V・IV層出土石鍬法量相関図(長さ×幅) ……………	167
第122図	石槍・石匙・スクレイパー等……………	168
第123図	石斧(IV層)……………	169
第124図	研磨石器……………	170
第125図	凹石・敲石・磨石分類図……………	171
第126図	凹石・敲石(V層)……………	172
第127図	敲石・磨石(V層)……………	173
第128図	磨石(V層)……………	174
第129図	凹石・敲石(IV層)……………	176
第130図	敲石(IV層)……………	177
第131図	磨石(IV層)……………	178
第132図	台石……………	179
第133図	石皿分類図……………	180
第134図	石皿(V層)……………	181
第135図	B地区遺構配置図……………	184
第136図	B地区検出の竪穴住居跡位置図……………	186
第137図	1号住居跡……………	188
第138図	2号住居跡……………	189
第139図	3号住居跡(1)……………	190
第140図	3号住居跡(2)……………	191
第141図	4号住居跡……………	192
第142図	5号住居跡……………	193
第143図	6号住居跡……………	194
第144図	7号住居跡……………	196
第145図	8号住居跡……………	197
第146図	9号住居跡……………	198
第147図	10号住居跡……………	199
第148図	11号住居跡……………	200
第149図	12号住居跡(1)……………	201
第150図	12号住居跡(2)……………	202
第151図	集石1・2号……………	203
第152図	集石3号……………	204
第153図	連穴土坑(1)……………	206
第154図	連穴土坑(2)……………	207
第155図	土坑(1)……………	209
第156図	土坑(2)……………	210
第157図	土坑(3)……………	211
第158図	土坑(4)……………	212
第159図	土坑(5)……………	213
第160図	土坑(6)……………	215
第161図	土坑(7)……………	216
第162図	道跡……………	220
第165図	遺構遺物(1)……………	222
第166図	遺構遺物(2)……………	223
第167図	遺構遺物(3)……………	224

第168図	遺構遺物(4)……………	225
第169図	遺構遺物(5)……………	226
第170図	遺構遺物(6)……………	227
第171図	遺構遺物(7)……………	228
第172図	遺構遺物(8)……………	229
第173図	遺構遺物(9)……………	232
第174図	遺構遺物(10)……………	233
第175図	遺構遺物(11)……………	234
第176図	遺構遺物(12)……………	235
第177図	遺構遺物(13)……………	236
第178図	遺構遺物(14)……………	237
第179図	遺構遺物(15)……………	238
第180図	遺構遺物(16)……………	240
第181図	遺構遺物(17)……………	241
第182図	遺構遺物(18)……………	242
第183図	遺構遺物(19)……………	243
第184図	遺構遺物(20)……………	244
第185図	1～3類土器出土状況(1)……………	245
第186図	1～3類土器出土状況(2)……………	246
第187図	1類土器……………	247
第188図	2類土器(1)……………	248
第189図	2類土器(2)……………	249
第190図	2類土器(3)……………	250
第191図	2類土器(4)……………	251
第192図	2類土器(5)……………	252
第193図	2類土器(6)……………	253
第194図	2類土器(7)……………	255
第195図	2類土器(8)……………	256
第196図	2類土器(9)……………	257
第197図	2類土器(10)……………	258
第198図	2類土器(11)……………	259
第199図	2類土器(12)……………	260
第200図	2類土器(13)……………	261
第201図	2類土器(14)……………	262
第202図	2類土器(15)……………	263
第203図	2類土器(16)……………	264
第204図	2類土器(17)……………	265
第205図	2類土器(18)……………	266
第206図	2類土器(19)……………	268
第207図	2類土器(20)……………	269
第208図	2類土器(21)……………	270
第209図	2類土器(22)……………	271
第210図	2類土器(23)……………	272
第211図	2類土器(24)……………	273
第212図	2類土器(25)……………	274
第213図	2類土器(26)……………	275
第214図	2類土器(27)……………	277
第215図	2類土器(28)……………	278
第216図	2類土器(29)……………	280
第217図	2類土器(30)……………	281
第218図	2類土器(31)……………	282
第219図	2類土器(32)……………	283
第220図	2類土器(33)……………	284
第221図	2類土器(34)……………	285
第222図	2類土器(35)……………	286
第223図	2類土器(36)……………	287
第224図	2類土器(37)……………	288

第225図	2 類土器(8)	289
第226図	2 類土器(9)	290
第227図	2 類土器(10)	292
第228図	2 類土器(11)	293
第229図	2 類土器(12)	294
第230図	2 類土器(13)	295
第231図	2 類土器(14)	296
第232図	2 類土器(15)	297
第233図	2 類土器(16)	298
第234図	3 類土器(1)	299
第235図	3 類土器(2)	300
第236図	3 類土器(3)	301
第237図	3 類土器(4)	302
第238図	3 類土器(5)	303
第239図	3 類土器(6)	304
第240図	3 類土器(7)	305
第241図	3 類土器(8)	306
第242図	3 類土器(9)	307
第243図	3 類土器(10)	308
第244図	3 類土器(11)	309
第245図	3 類土器(12)	310
第246図	3 類土器(13)	311
第247図	3 類土器(14)	312
第248図	3 類土器(15)	313
第249図	3 類土器(16)	314
第250図	3 類土器(17)	315
第251図	3 類土器(18)	316
第252図	3 類土器(19)	318
第253図	3 類土器(20)	319
第254図	3 類土器(21)	320
第255図	3 類土器(22)	321
第256図	3 類土器(23)	322
第257図	3 類土器(24)	324
第258図	3 類土器(25)	325
第259図	3 類土器(26)	326
第260図	3 類土器(27)	327
第261図	3 類土器(28)	328
第262図	3 類土器(29)	329
第263図	3 類土器(30)	330
第264図	3 類土器(31)	331
第265図	3 類土器(32)	332
第266図	3 類土器(33)	333
第267図	3 類土器(34)	334
第268図	3 類土器(35)	335
第269図	3 類土器(36)	336
第270図	3 類土器(37)	337
第271図	3 類土器(38)	338
第272図	3 類土器(39)	339
第273図	3 類土器(40)	340
第274図	3 類土器(41)	341
第275図	3 類土器(42)	342
第276図	8 類土器(1)	344
第277図	8 類土器(2)	345
第278図	その他の土器	346
第279図	土製品	347
第280図	B地区器種別石器出土状況	349
第281図	石鏃（V層）	350

第282図	石鏃（IV層）	351
第283図	B地区V・IV層出土石鏃法量相関図	353
第284図	磨製石鏃ほか	354
第285図	研磨石器	356
第286図	礫器	357
第287図	砥石	358
第288図	石斧（V層）	359
第289図	石斧（V層）	360
第290図	石斧（IV層）	361
第291図	凹石（V層）	363
第292図	凹石（V層）	364
第293図	凹石・敲石（V層）	365
第294図	敲石・磨石（V層）	366
第295図	磨石（V層）	367
第296図	磨石（V層）	368
第297図	凹石（IV層）	369
第298図	凹石・敲石（IV層）	370
第299図	敲石・磨石（IV層）	371
第300図	台石	374
第301図	石皿(1)	375
第302図	石皿(2)	376
第303図	石皿(3)	377
第304図	石皿(4)	378
第305図	C地区遺構配置図	384
第306図	1号住居跡	385
第307図	集石1・2号	386
第308図	土坑(1)	388
第309図	土坑(2)	389
第310図	土坑(3)	390
第311図	土坑(4)	391
第312図	土坑(5)	392
第313図	土坑(6)	393
第314図	土坑(7)	394
第315図	土坑(8)	395
第316図	土坑(9)(10)	396
第317図	遺構内遺物	401
第318図	1～3 類土器出土状況	403
第319図	1 類土器	404
第320図	1～3 類土器	405
第321図	3 類土器	406
第322図	4～6 類土器出土状況	407
第323図	4 類土器(1)	408
第324図	4 類土器(2)	409
第325図	4 類土器(3)	410
第326図	4 類土器(4)	411
第327図	4 類土器(5)	412
第328図	5 類土器(1)	414
第329図	5 類土器(2)	415
第330図	5 類土器(3)	416
第331図	その他の土器	417
第332図	石鏃（V層）	418
第333図	C地区V・IV層出土石鏃法量相関図（長さ×幅）	418
第334図	C地区器種別石器出土状況	419
第335図	石鏃（IV層）	420
第336図	磨製石槍・砥石出土状況図	422
第337図	磨製石槍・砥石	423

第338図	スクレイパー・石斧	424
第339図	凹石・敲石	425
第340図	C地区 石皿	426
〔第II分冊〕		
第341図	前期・中期土器	2
第342図	前期・中期土器出土状況	3
第343図	阿高式土器完形	4
第344図	後期・晩期土器出土状況	5
第345図	後期土器(1)	6
第346図	後期土器(2)	7
第347図	後期土器(3), 晩期土器(1)	9
第348図	晩期土器(2)	10
第349図	晩期土器(3)	11
第350図	晩期土器(4)	13
第351図	晩期土器(5), 弥生土器	15
第352図	器種別石器出土状況 (III層)	17
第353図	石材別出土状況 (III層)	18
第354図	石鏃 (A地区)	19
第355図	石鏃 (A地区)	20

第356図	石鏃 (B地区)	21
第357図	石鏃 (C地区)	23
第358図	III層出土石鏃法量相関図 (長さ×幅)	23
第359図	磨製石鏃・石錐	25
第360図	三日月形石器・石匙	26
第361図	礫器・砥石	27
第362図	石斧	28
第363図	凹石・敲石・磨石	29
第364図	台石・石皿	30
第365図	遺物出土状況	32
第366図	土師器	33
第367図	B地区1・3類土器接合状況	68
第368図	B地区2類土器接合状況	69
第369図	A地区4～6類土器接合状況	70
第370図	A地区7・8類土器接合状況	71
第371図	土器使用痕(1)	72
第372図	土器使用痕(2)	73
第373図	土器使用痕(3)	74
第374図	土器使用痕(4)	75

目 次

〔第I分冊〕		
第1表	南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表	4
第2表	周辺遺跡地名表(1)	17
第3表	周辺遺跡地名表(2)	18
第4表	旧石器一覧表 (VIII・IX層)	38
第5表	VII層出土石器一覧表	44
第6表	縄文石器 器種・層位別分類表	54
第7表	A地区検出の竪穴住居跡	59
第8表	A地区集石礫一覧表(1)	76
第9表	A地区集石礫一覧表(2)	80
第10表	A地区集石礫一覧表(3)	81
第11表	A地区集石礫一覧表(4)	82
第12表	A地区集石礫一覧表(5)	83
第13表	A地区集石礫一覧表(6)	85
第14表	A地区集石礫一覧表(7)	86
第15表	A地区検出の連穴土坑	87
第16表	A地区検出の土坑(1)	106
第17表	A地区検出の土坑(2)	107
第18表	A地区検出の土坑(3)	108
第19表	A地区検出の土坑(4)	109
第20表	A地区 V・IV層 石鏃一覧表	167
第21表	石器一覧表	168
第22表	石斧一覧表	169
第23表	凹石・敲石・磨石 一覧表	175
第24表	A地区出土石皿 一覧表	181
第25表	B地区検出の竪穴住居跡	185
第26表	B地区検出の連穴土坑	205
第27表	B地区検出の土坑(1)	217
第28表	B地区検出の土坑(2)	218
第29表	B地区検出の土坑(3)	219
第30表	B地区 V・IV層 石鏃一覧表	352
第31表	B地区V・IV層石器一覧表	358
第32表	B地区V・IV層石斧一覧表	362
第33表	凹石・敲石・磨石一覧表 (V層)	372
第34表	凹石・敲石・磨石一覧表 (IV層)	373

第35表	B地区石皿一覧表(1)	379
第36表	B地区石皿一覧表(2)	380
第37表	B地区石皿一覧表(3)	381
第38表	C地区検出の竪穴住居跡	385
第39表	C地区検出の土坑(1)	398
第40表	C地区検出の土坑(2)	399
第41表	C地区検出の土坑(3)	400
第42表	C地区 V・IV層 石鏃一覧表	421
第43表	出土縄文石器一覧C地区 凹石・磨石 一覧表 石皿一覧表	427
〔第II分冊〕		
第44表	石鏃一覧表 (1)	20
第45表	石鏃一覧表 (2)	22
第46表	石鏃一覧表 (3)	23
第47表	土器一覧表1 (A地区遺構)	34
第48表	土器一覧表2 (A地区遺構)	35
第49表	土器一覧表3 (B地区遺構)	36
第50表	土器一覧表4 (B地区遺構)	37
第51表	土器一覧表5 (B地区遺構)	38
第52表	土器一覧表6 (A地区)	39
第53表	土器一覧表7 (A地区)	40
第54表	土器一覧表8 (A地区)	41
第55表	土器一覧表9 (A地区)	42
第56表	土器一覧表10 (A地区)	43
第57表	土器一覧表11 (A地区)	44
第58表	土器一覧表12 (A地区)	45
第59表	土器一覧表13 (B地区)	46
第60表	土器一覧表14 (B地区)	47
第61表	土器一覧表15 (B地区)	48
第62表	土器一覧表16 (B地区)	49
第63表	土器一覧表17 (B地区)	50
第64表	土器一覧表18 (B地区)	51
第65表	土器一覧表19 (B地区)	52
第66表	土器一覧表20 (B地区)	53
第67表	土器一覧表21 (B地区)	54

第68表	土器一覧表22 (B地区)	55
第69表	土器一覧表23 (B地区)	56
第70表	土器一覧表24 (B地区)	57
第71表	土器一覧表25 (B地区)	58
第72表	土器一覧表26 (B地区)	59
第73表	土器一覧表27 (C地区)	60

第74表	土器一覧表28 (C地区)	61
第75表	土器一覧表29 (C地区)	62
第76表	土器一覧表30 (縄文前期～晩期)	63
第77表	土器一覧表31 (縄文前期～晩期)	64
第78表	土器一覧表32 (縄文前期～晩期)	65

図 版 目 次

〔第Ⅰ分冊〕

カラーグラビア

- 1 前原遺跡遺跡空中写真 (西から)
- 2 A地点遺構配置 (空中写真)
- 3 縄文土器 (Ⅱ類・Ⅲ類)
- 4 石槍・砥石
石皿・凹石・敲石・磨石

〔第Ⅱ分冊〕

図版 1	遺跡空中写真 (西から), 遺跡空中写真 (東から)	1
図版 2	A地区空中写真 (東から), A地区空中写真	2
図版 3	A地区空中写真, A地区近景 (西から)	3
図版 4	A地区空中写真 (住居群)	4
図版 5	B地区空中写真 (遺構群)	5
図版 6	B, C地区近景	6
図版 7	C地区空中写真 (東から)	7
図版 8	C地区空中写真 (遺構群), C地区空中写真 (土坑群)	8
図版 9	調査前 (西から), 確認調査風景	9
図版10	確認調査	10
図版11	土層 (A地区)	11
図版12	土層 (B地区)	12
図版13	土層 (C地区)	13
図版14	A地区住居跡	14
図版15	A地区住居跡	15
図版16	A地区住居跡	16
図版17	A地区集石	17
図版18	A地区集石	18
図版19	A地区連穴土坑	19
図版20	A地区土坑	20
図版21	A地区土坑	21
図版22	A地区土坑	22
図版23	B地区住居跡	23
図版24	B地区住居跡	24
図版25	B地区住居跡	25
図版26	B地区道跡 (東から), B地区道跡 (北から)	26
図版27	B地区道跡 (北から), B地区道跡 (南から)	27
図版28	B地区集石	28
図版29	B地区連穴土坑	29
図版30	B地区土坑	30
図版31	土器出土状況	31
図版32	土器出土状況	32
図版33	土器出土状況	33
図版34	石器出土状況	34
図版35	石器出土状況	35
図版36	C地区集石	36

図版37	C地区土坑	37
図版38	C地区土坑	38
図版39	C地区石槍・砥石出土状況	39
図版40	C地区石槍出土状況	40
図版41	縄文時代早期土器	41
図版42	2類土器・3類土器	42
図版43	1類土器・2類土器	43
図版44	2類土器	44
図版45	2類土器・3類土器	45
図版46	3類土器・4類土器	46
図版47	5類土器～8類土器	47
図版48	9類土器・阿高式土器・縄文後期土器	48
図版49	縄文晩期土器・縄文草創期土器	49
図版50	2類土器(1)	50
図版51	2類土器(2)	51
図版52	3類土器	52
図版53	4類土器	53
図版54	5・6類土器	54
図版55	7・8類土器	55
図版56	11類土器	56
図版57	その他の土器	57
図版58	旧石器(1)・旧石器(2)・細石刃・石鏃	58
図版59	A地区 石鏃 (V・IV層)・石槍・石匙	59
図版60	A地区 石斧・研磨石器	60
図版61	A地区 凹石・敲石	61
図版62	A地区 磨石・石皿	62
図版63	B地区 石鏃 (V・IV層)・磨製石鏃ほか	63
図版64	B地区 研磨石器	64
図版65	B地区 礫器	65
図版66	B地区 砥石	66
図版67	B地区 石斧 (V層)	67
図版68	B地区 石斧 (IV層)	68
図版69	B地区 凹石	69
図版70	B地区 敲石	70
図版71	B地区 磨石・石皿	71
図版72	B地区 石皿	72
図版73	石鏃	73
図版74	C地区 磨製石槍・砥石	74
図版75	C地区 敲石・磨石・石皿	75
図版76	Ⅲ層 石鏃・磨製石鏃	76
図版77	Ⅲ層 スクレイパー・礫器・砥石	77
図版78	Ⅲ層 石斧	78
図版79	Ⅲ層 凹石・敲石・磨石	79
図版80	マスコミ取材	80
図版81	体験学習	81
図版82	調査指導	82

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内に埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成2年8月に鹿児島西IC～伊集院IC間の埋蔵文化財の分布調査を行ったところ、23か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成3年度から平成15年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内（鹿児島西IC～伊集院IC）の遺跡の概要については、以下の通りである。

第2節 遺跡の概要

- 1 山ノ中 鹿児島市西別府町山ノ中に所在し、標高100～133mの急峻な地形に立地する。山頂には中世城館の一つである小田城跡が良好な状態で残っている。調査面積は9,200㎡で、縄文時代後期前の竪穴住居跡17基が検出された。出土土器は、指宿式土器に先行する土器が主体となり南福寺式や磨消縄文、それに指宿式土器が少量出土した。また、高知県でみられる松ノ木式土器もみつかった。石器も石斧・石皿・磨石が多量に出土した。その他、弥生時代の磨製石鏃や古墳時代の成川式土器、平安時代の土師器・須恵器・墨書土器が出土した。中世では古道跡が検出され、陶磁器や古銭も出土した。
- 2 宮尾 鹿児島市石谷町字宮尾に所在し、仁田尾の割合に狭小な台地から東に張り出した標高約200mの小台地端部に立地する。調査面積は8,400㎡である。旧石器時代ではナイフ形石器文化期のブロック1か所、縄文時代では早期の集石4基と平椀式・塞ノ神式・条痕文土器、石鏃・石匙・石皿などが出土したほか、後期と推定される落とし穴を主とする土坑101基が検出された。その他、奈良～平安時代の土師器・須恵器と古代の掘立柱建物跡1棟が焼土域7か所や土師器とともに検出された。
- 3 仁田尾 鹿児島市石谷町字仁田尾・高塚に所在し、標高約190mのシラス台地上に立地する。調査面積は11,000㎡である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化）、縄文時代（草創期～晩期）、平安時代の遺構・遺物が発見された。ナイフ形石器文化はシラス直上から43か所のブロック、56基の礫群と2万点を越える遺物が出土している。遺物はナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・搔器・削器・彫器・石錐・敲石等が出土している。細石刃文化は薩摩火山灰層の下位から68か所のブ

ロック、6基の礫群、16基の落とし穴と9万点を上回る遺物が出土した。縄文時代では、遺構が集石10基（早期4，前～後期6），土坑11基（早期7，晚期4），落とし穴2基（晚期）が検出され、また、アカホヤ火山灰層の上面で晩期の掘立柱建物跡が検出された。土器は（草創期）無文土器，（早期）前平式・吉田式・手向山式・押型文土器，（前期）轟式・曾畑式・深浦式土器，（中期）船元式土器，（後期）指宿式・市来式土器，（晚期）黒川式土器の浅鉢・深鉢や布目圧痕土器・丹塗土器が出土した。石器は石鏃・石匙・削器・石斧・磨石・石皿等が出土した。平安時代では掘立柱建物跡・溝・土坑等の遺構が土師器・須恵器・陶磁器と一緒に検出された。

- 4 西ノ原B 鹿兒島市石谷町字西ノ原に所在し、仁田尾遺跡の隣接地で、小さな谷を挟んだ北側に突出した標高約190mの痩せ尾根上の台地に立地する。調査面積は1,300㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化から細石刃文化と古墳時代の遺物が出土した。旧石器時代では礫群1基と14か所のブロックが検出され、ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・細石刃・細石刃核・スクレイパーが出土した。古墳時代の遺物は成川式土器であった。

- 5 前山 鹿兒島市石谷町字前山に所在し、標高約200mの台地北側に立地する。調査面積は9,600㎡である。遺跡は、A・B地区に分かれ、旧石器時代が主体である。ナイフ形石器文化期の二時期と細石刃文化期の遺構・遺物が発見された。シラスの腐植土層の下位から台形石器・ナイフ形石器・スクレイパーが出土し、上位からはナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器・台形石器や敲石などが出土し、2基の礫群が検出された。細石刃文化期からは細石刃・細石刃核・スクレイパー等が4基の礫群とともに出土した。縄文時代では、早期の吉田式土器と集石、前期の轟式土器が出土し、古墳時代では成川式土器が出土した。

- 6 栢堀 鹿兒島市石谷町字栢堀に所在し、標高約195mのシラス台地縁辺部に立地する。谷を隔てた台地には前山遺跡がある。調査面積は2,700㎡である。旧石器時代では細石刃文化期のブロックが19か所検出され、遺物は三稜尖頭器・台形石器・スクレイパー・細石刃・細石刃核が出土した。縄文時代では早期の集石、晩期の土坑と溝状遺構が検出され、遺物は岩本式・前平式・平椀式・轟式・阿高式・黒川式土器等が出土し、石器は石鏃・石匙・磨石・砥石等が出土した。また、古墳時代の成川式土器や古代～中世の須恵器・土師器・瓦器・青磁・白磁が出土した。

- 7 前原 鹿兒島市福山町字前原・鬼ヶ迫上に所在し、標高は約180mの舌状を呈するシラス台地先端部に立地する。調査面積は19,400㎡である。旧石器時代（ナイフ形石器文化・細石刃文化）、縄文時代（草創期・早期・前期・晩期）の遺構・遺物が発見されたが、主体は縄文時代早期前半である。この時期の遺構はA・B・Cの三地区に分けられる。（A）12基の竪穴住居跡が2支群に分かれ、連穴土坑を含む土坑約130基と集石14基が、前平式・石坂式土器と検出された。（B）竪穴住居跡13基、連穴土坑35，土坑45，集石4，祭祀遺構1と幅1.5～2mの道跡2条が前平式・吉田式・石坂式土器と検出された。（C）竪穴住居跡3基，土坑131，落とし穴1基が吉田式・石

坂式土器と検出された。石器は、石斧・石皿・磨石・削器・石鏃・軽石製品・石剣・砥石等が出土した。縄文早期後半では、塞ノ神式土器が落とし穴2基、溝1条と出土し、押型文土器・手向山式土器も出土した。また、縄文時代晩期の黒色研磨土器・組織痕土器を主体に、少量の曽畑式土器も出土した。

- 8 フミカキ 鹿児島市福山町字フミカキに所在し、標高約170mのシラス台地上に立地する。調査面積は5,400㎡で縄文時代を主とする遺跡である。早期の連穴土坑2基・集石10基が検出され、早期の吉田式・石坂式・政所式・押型文・中原式土器や前期の曽畑式・轟式、晩期の黒川式土器が出土した。晩期では平織りの組織痕土器が出土した。また、弥生時代後期の土器や平安時代の須恵器も少量出土した。
- 9 山下堀頭 鹿児島市福山町字山下堀頭に所在し、シラス台地に囲まれた開析谷の標高約133mの台地裾部に立地する。調査面積は4,800㎡で、縄文時代前期の曽畑式土器と後期の土器が少量出土した。弥生時代後期では竪穴住居が3基検出され、遺物は中津野式土器や鉄剣等が出土した。住居内からは軽石製品が出土し、周辺からは磨製石鏃も10数点出土している。平安時代末頃の方形周溝状遺構が1基検出され、主体部からはなにも出土しなかったが、周溝から小型の軽石製石塔の笠石片が出土した。

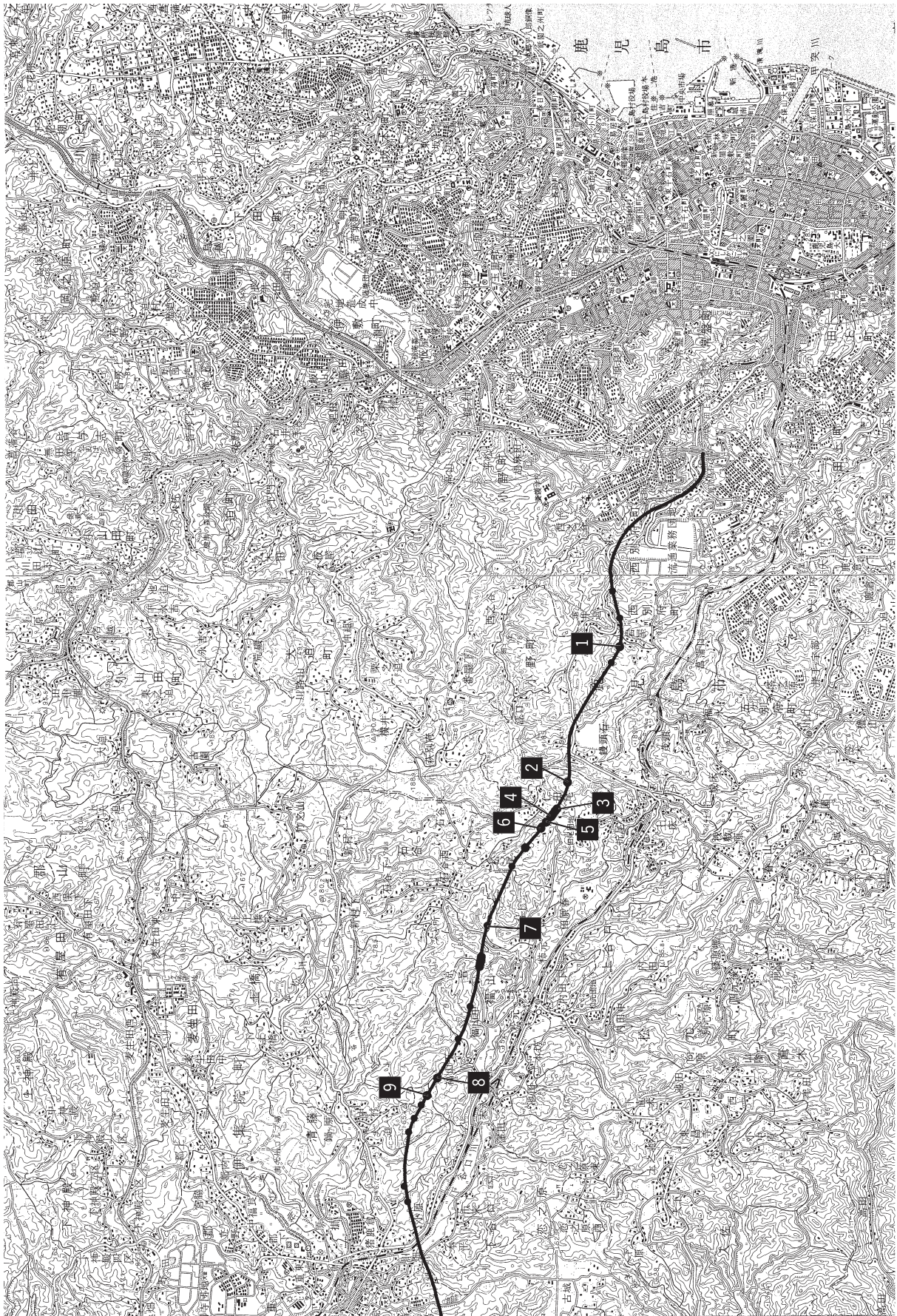
※ 刊行報告書

- 「朽堀遺跡・西ノ原B遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（30） 2002.3
- 「宮尾遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（73） 2004.3
- 「フミカキ遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（74） 2004.3
- 「山下堀頭遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（95） 2005.3
- 「山ノ中遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（103） 2006.3

第1表 南九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

(鹿児島西IC～伊集院IC)

番号	遺跡名	所在地	調査面積 (m ²)	調査期間	調査員	時代	概要
1	山ノ中	鹿児島市西別府町	12,000	H 6. 5～6 H 7. 5～H 8. 3	東・菅牟田・西園	縄文 古墳 平安	住居跡、指宿式・中原式・松ノ木式・石皿・磨石 成川式土器 土坑、須恵器・土師器 (県埋文センター報告書 2006刊行)
2	宮尾	鹿児島市石谷町	8,400	H 5. 12～H 6. 3 H 8. 4～9	牛ノ濱・東・繁昌・三垣	旧石器 縄文 奈良・平安	剥片・砕片 集石、陥し穴、土坑、条痕文・塞ノ神式土器 掘立柱建物跡、須恵器・土師器 (県埋文センター報告書73 2004刊行)
3	仁田尾	鹿児島市石谷町	55,000	H 5. 4～H 6. 3 H 6. 4～H 7. 3 H 7. 7～H 8. 3	池畑・宮田・今村・寺原・園田・前村・牛ノ濱・常田・繁昌・三垣	旧石器 縄文 古墳～平安	礫群、陥し穴、ブロック ナイフ・尖頭器・台形石器・細石刃核・細石刃 掘立柱建物跡、溝、集石・陥し穴・土坑 前平式・吉田式・轟式・菅畑式・黒川式土器 掘立柱建物跡、溝、須恵器・土師器
4	西ノ原B	鹿児島市石谷町	1,600	H 6. 10～11	牛ノ濱・園田	旧石器 古墳	礫群、ナイフ・三稜尖頭器・細石刃核・細石刃 成川式土器 (県埋文センター報告書30 2001刊行)
5	前山	鹿児島市石谷町	9,600	H 7. 5～H 8. 3 H 8. 4～9	鶴田・桑波田・橋口・元田	旧石器 縄文 古墳	台形様石器・ナイフ・剥片尖頭器・細石刃核 前平式・轟式土器 成川式土器
6	柵堀	鹿児島市石谷町	11,000	H 4. 12～H 5. 3 H 5. 4～6	牛ノ濱・新町・元田	旧石器 縄文 平安	細石刃核・細石刃 溝、前平式・平格式・轟式・黒川式・石槍・砥石 青磁・須恵器・土師器・石鍋 (県埋文センター報告書30 2001刊行)
7	前原	鹿児島市福山町	53,200	H 3. 10～H 5. 11 H 6. 1～H 8. 10	牛ノ濱・新町・前迫・前村・元田・東・園田・菅牟田	旧石器 縄文	礫群、台形石器・三稜尖頭器・細石刃 竪穴住居跡、道跡、連穴土坑、土坑、集石 前平式・吉田式・石坂式・押型文・黒川式土器 石槍・石皿・磨石・石鏃・石斧 (本報告書)
8	フミカキ	鹿児島市福山町	7,200	H 6. 10～H 7. 3 H 7. 5～6	東・菅牟田・西園	縄文 平安	集石、石坂式・押型文・黒川式土器 須恵器 (県埋文センター報告書74 2004刊行)
9	山下堀頭	鹿児島市福山町	5,500	H 6. 6～10	東・菅牟田	縄文 弥生 平安	菅畑式土器 住居跡、鉄剣・石鏃・軽石製品 周溝墓、須恵器 (県埋文センター報告書92 2005刊行)



第2図 鹿児島西IC～伊集院IC遺跡位置図

第Ⅱ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局（中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局改称）は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内に埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課（組織改革により平成8年度より文化財課に改称）に照会した。この計画に伴い、文化課が平成2年8月に鹿児島西IC～伊集院IC間の埋蔵文化財の分布調査が行われ、23か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

23か所の確認調査の結果、山ノ中・宮尾・仁田尾・西ノ原B・前山・栢堀・前原・フミカキ・山下堀頭Bの9か所で遺物包含層が確認されたが、取添・中野・仲間ヶ迫・木ヶ暮・西ノ原A・前田・木場田・京旨後平・中柿ヶ迫・山下堀頭A・立迫・土筆・西衾キ山・上寺山では遺物包含層は確認されなかった。

前原遺跡については、平成3年8月1日～10月8日まで確認調査を行い、遺跡の範囲や性格等を把握した。これを受けて平成3年10月9日～平成8年10月31日まで発掘調査を実施し、報告書作成を平成10・16・17年度に行った。調査面積は53,500㎡である。

第2節 調査の組織

発掘調査

（平成3年度）

事業主体者 建設省鹿児島国道工事事務所

調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	向山 勝貞
企画	〃	課長補佐	濱松 巖
	〃	主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長	吉元 正幸
調査担当	〃	主査	牛ノ濱 修
〃	〃	文化財調査員	新町 正
事務担当	〃	主幹兼係長	濱崎 琢也
〃	〃	主査	枇杷 雄二
〃	〃	主事	新屋敷 由美子

（平成4～8年度）

事業主体者 建設省鹿児島国道工事事務所

調査責任者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	大久保忠昭（４・５年度）
			〃	内村 正弘（６・７年度）
			〃	吉元 正幸（８年度）
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長 兼 総 務 課 長	水口 俊雄（４・５年度）	
			〃	川原 信義（６・７年度）
			〃	尾崎 進（８年度）
調査担当者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋（４～８年度）	
			調 査 課 長 補 佐	新東 晃一（８年度）
			主 任 文 化 財 主 事	立神 次郎（７年度）
		主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一（８年度）	
			文 化 財 主 事	牛ノ濱 修（４～７年度）
			〃	繁昌 正幸（７年度）
		文 化 財 研 究 員	前迫 亮一（４・５年度）	
			〃	東 和幸（５年度）
			〃	湯之前 尚（８年度）
		文 化 財 調 査 員	新町 正（４年度）	
			〃	元田 順子（４年度）
			〃	前村 真次（４年度）
			〃	西久保敦美（６年度）
			〃	常田 和彦（６年度）
			〃	菅牟田 勉（７年度）
			〃	西園 勝彦（８年度）
			〃	宮田 茂樹（８年度）
調査事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主 査	下園 勝一（４・５年度）	
			〃	成尾 雅明（６～８年度）
			〃	前屋敷裕徳（８年度）
		主 事	中村 和代（４～７年度）	
			〃	追立ひとみ（８年度）

整理作業

平成14・16・17年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで整理作業を行い、平成18年度に報告書を刊行した。

（平成14・16年度）

事業主体者 国土交通省鹿児島国道事務所

調査責任者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター 所 長 井上 明文（14年度）

		木原 俊孝 (16年度)
調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長 兼 総 務 課 長 田中 文雄 (14年度)
		賞雅 彰 (16年度)
	主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
	調 査 課 長 補 佐	立神 次郎
	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱 修
	文 化 財 主 事	前迫 亮一
	〃	吉岡 康弘
	文 化 財 研 究 員	内村 光伸
	主 査	脇田 清幸

(平成17・18年度)

事業主体者 国土交通省鹿児島国道事務所

調査責任者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長 上今 常雄 (～18年7月)
		宮原 景信 (18年8月～)

調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	次 長 兼 総 務 課 長 有川 昭人
		次 長 新東 晃一
	調 査 第 二 課 長	立神 次郎
	主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長	牛ノ濱 修
	文 化 財 研 究 員	内村 光伸
	総 務 係 長	寄井田正秀
	主 査	蒲地 俊一

報告書作成検討委員会 上今所長ほか11名 平成17年3月28日

報告書作成指導委員会 新東次長ほか3名 平成17年3月25日

第3節 調査の経過 (日誌抄)

平成3年度 (平成3年5月7日～平成4年3月27日)

担当 牛ノ濱・新町

5月7日より南九州西回り自動車道関連遺跡の確認調査に入る。(21か所)

5月7日～10日 西ノ原B遺跡

台地中央部に4m×2mのトレンチを3か所設定して調査した結果、Ⅶ層から旧石器時代の黒曜石・石英が出土した。

5月10日～7月3日 仁田尾遺跡

STA.350とSTA.355を基準に10m間隔の区割りを設定した。その区割りに沿って19か所のトレンチ(4m×2m=12か所, 10m×2m=2か所, 14m×2m=1か所, 16m×2m=2か所, 18m×2m=2か所)で確認調査を行った。その結果、縄文時代後・晩期の遺物がⅢ層から、早期の

遺物がⅣ・Ⅴ層から出土した。また、Ⅶ層の粘土層からは旧石器時代の遺物が出土した。

5月27・28日 木ヶ暮遺跡

昭和27年に河口貞徳氏により発掘調査され、縄文時代後期の指宿式土器を多く出土した遺跡で、遺跡の隣接地が建設予定地であったため、緊急に確認調査を行った。その結果、予定地内は削平されていて、包含層及び遺物は発見されなかった。

6月28日～7月3日 西ノ原A地区

台地中央部に20m×2mのトレンチを設定して調査した結果、包含層は削平されていてシラスが検出された。

7月1日～8月2日 前山遺跡

STA.318とSTA.319の南側境界杭を基準に10m間隔の区割りを設定した。その区割りに沿って、7か所のトレンチ（5m×2m＝2か所、8m×2m＝1か所、10m×2m＝2か所、15m×2m＝1か所、16m×2m＝1か所）で確認調査を行った。その結果、Ⅴ層の黒褐色土層から縄文時代早期の集石が検出され、Ⅶ層の粘土層からは旧石器時代の遺物が出土した。

8月1日～10月8日 前原遺跡確認調査（後述）

9月5日～24日 フミカキ遺跡

STA.159とSTA.159の北側境界線を基準に10m間隔の区割りを設定した。その区割りに沿って6か所のトレンチ（16m×2m＝1か所、18m×2m＝1か所、20m×2m＝2か所、30m×2m＝2か所）で確認調査を行った。その結果、弥生時代の土器がⅢ層上部から、縄文時代早期の吉田式・石坂式・押型文土器がⅣ・Ⅴ層から出土した。

9月20日 山下堀頭A遺跡

詳細分布調査及び試掘調査の結果、表層下位はシラスであり、包含層及び遺物はなかった。

9月19日～10月9日 山下堀頭B遺跡

STA.140とSTA.141の南側境界杭を基準に10m間隔の区割りを設定した。その区割りに沿って、2か所のトレンチ（15m×2m＝1か所、30m×2m＝1か所）で確認調査を行った。その結果、古墳時代の成川式土器が出土した。

10月15日 京旨後平

台地中央部に10m×2mのトレンチを設定し、確認調査を行ったが、表層下位は黄シラスで包含層は削平され、遺構・遺物は発見できなかった。

10月15日 西柵キ山，上寺山

詳細分布調査及び試掘調査の結果、表層下位はシラスであり、包含層及び遺物はなかった。

10月16～18日 土筆

STA.114とSTA.115の北側境界杭を基準に10m間隔の区割りを設定した。その区割りに沿って10m×2mのトレンチで確認調査を行った結果、表層下位は黄シラスで包含層は削平され、遺構・遺物は発見できなかった。

11月12日 前田・木場田

詳細分布調査及び試掘調査の結果、表層下位はシラスであり、包含層及び遺物はなかった。

11月14日 山ノ中遺跡

詳細分布調査の結果、曲輪等が残存していることが判明した。この地は、中世山城「小田城」であり、本丸の位置はずれているが縄張りの範疇である。

11月14日 取添・中野・仲間ヶ迫

詳細分布調査及び試掘調査の結果、表層下位はシラスであり、包含層及び遺物はなかった。

11月19日～25日 立迫

STA.125と STA.128を基準に10m間隔の区割りを設定した。その区割りに沿って3か所のトレンチ（16m×2m＝2か所、20m×2m＝1か所で確認調査を行った結果、予定地内は削平を受け、攪乱層とシラスであり、包含層及び遺構は検出されなかった。

12月16日～20日 中柿ヶ迫

STA.183と北側境界杭を基準に10m間隔の区割りを設定した。その区割りに沿って、20m×2mのトレンチで確認調査を行った。その結果、III層下位の層位は確認されたが、遺構・遺物は発見されなかった。

前原遺跡では、8月1日～10月8日まで確認調査を行い、その結果に基づいて、10月9日～3月27日まで本調査を行った。

前原遺跡 確認調査（トレンチ調査 388㎡）

STA.235と STA.240を基準に10m間隔の区割りを設定した。その区割りに沿って13か所のトレンチ（8m×2m＝4か所、10m×2m＝1か所、16m×2m＝2か所、18m×2m＝1か所、20m×2m＝2か所、30m×2m＝2か所）で確認調査を行った。その結果、縄文時代後期の土器がIII層から、縄文時代早期の前平式・吉田式・石坂式土器がIV・V層から出土した。

前原遺跡 本調査（本調査 2,500㎡）

C・G-22・23

C・D-22・23区 III・IV・V層

E・F・G-22・23区 III～V層

B～H-25～30区 III～V層

調査概要

遺物出土約11,000点、III層2182点で縄文時代後期のもので、黒色研磨土器・組織痕文土器が主体となっている。IV層5761点、V層2755点である。IV・V層の土器は縄文時代早期のもので、石坂式・吉田式・前平式土器が主体となり、ほとんどが円筒形土器であるが、一部角筒土器も出土している。また、押型文・手向山式・曾畑式土器が少量ではあるが出土している。石器は石鏃・石匙・磨石・石皿・剥片が出土した。また石材については、黒曜石・チャート・頁岩・鉄石英・石英・安山岩・砂岩がみられた。遺構は集石8基と住居跡数基、土坑10数基が検出された。

（指導者）11/7 河口貞徳

（見学者）6/4 松元町文化財保護審議員、11/28 石谷小6年、12/3 東昌小5・6年

平成4年度（平成4年4月21日～平成5年3月26日）

担当 牛ノ濱・前迫・新町・元田・前村

A地区（5,800m²） A～G—22～30区 III～V層

C地区（3,500m²） A～H—1～8区 III～V層

平成5年度（平成5年4月26日～11月12日）

牛ノ濱修・東和幸・前迫亮一

A地区 A～G—22～30区 遺構検出及びⅦ層（薩摩火山灰）下位の調査

B地区 確認トレンチ調査

C地区 A～H—1～8区 遺構検出及びⅦ層（薩摩火山灰）下位の調査

昨年からの継続調査の縄文時代早期前葉の遺構群の検出。未調査部分および「薩摩火山灰」下層の調査を行った。その結果、縄文時代早期に二時期、縄文時代草創期、旧石器時代の四文化層が確認され、複合遺跡であるという結果が得られた。

旧石器時代では、三稜尖頭器・台形石器・ナイフ形石器・剥片が出土し、「薩摩火山灰」の直下より縄文時代草創期の土器と石鏃が出土した。土器は、今まで出土例がなく、鋭い串状の施文具を刺して文様としたものである。

縄文時代早期では多くの遺物と多彩な遺構が確認された。塞ノ神式土器に伴う落とし穴2、溝状遺構が検出されたほか、貝殻条痕文土器には、住居跡12、集石13、連穴土坑3、大型二段掘り土坑4、ピット付土坑31、その他の土坑108が検出された。

このように、縄文時代早期の集落形態について多くの情報が得られ、また、草創期から旧石器時代について、層位的に把握できたことは、大きな成果であった。

平成6年度（平成7年1月9日～3月24日）

担当 牛ノ濱・西久保

A地区 現道路敷き部分の全面調査とE・F・G・H—20・21区のⅢ層の調査を行う。その結果、遺構（土坑・ピット）や深浦式、黒川式土器や石鏃が検出された。

C地区 「薩摩火山灰」より下層の調査を行った。その結果、縄文時代草創期から旧石器時代細石刃文化までの石鏃・細石刃・石核・剥片及び礫群が検出された。

平成7年度（平成7年4月23日～平成8年3月22日）

担当 牛ノ濱・菅牟田・繁昌・三垣

A地区 20・21区の縄文時代早期の調査を行う。A地区調査終了。

B地区 10～18区の旧石器時代～縄文時代早期の調査を行う。その結果、遺構（竪穴住居跡、土坑、落とし穴）や前平式（角筒・円筒）、吉田式（角筒・円筒）、石坂式土器や石器（石皿・磨石・凹石・石鏃・削器等）が出土した。

C地区 「薩摩火山灰」より下層の調査を行った。その結果、縄文時代草創期から旧石器時代細石刃文化までの遺物（石鏃・細石刃・剥片）が出土した。C地区調査終了。

8月7日 仁田尾遺跡調査開始（繁昌・三垣）

（指導者）11/9 岡村道雄，1/11 森脇広，1/18 西健一郎，1/24 下野敏見，1/31 新田栄治，2/16 中村直子，2/21 小林博昭，3/1 大西智和，3/4 木下尚子，3/12 河口貞徳

（見学者）6/7 日新小5・6年，6/14 折尾長寿会，7/29 県民セミナー発掘体験学習
8/2 埋文友の会，8/10 伊敷台小，8/24 阿多小文化財少年団，9/26 KTS 県政番組「日曜の茶の間」撮影，1/11 KYT「ズームイン朝」全国放送

平成8年度（平成8年4月22日～12月12日）

担当 池畑・湯之前・西園・宮田

B地区 E・F—7～9区，E～H—10～14区，A～H—15～21区のⅢ層～Ⅴ層の調査を行う。

縄文時代早期の前平式・吉田式を中心に数多くの遺物が出土した。また，Ⅵ層上面で遺構の確認を行い，竪穴住居跡・連穴土坑・集石・遺跡・土坑等を検出した。平成3年度から行われた発掘調査は，今年度で終了した。

（指導者）10/11 小林達雄（國學院大學教授），10/14 森淳一郎（佐賀県立博物館副館長）

（見学者）5/15 春山小5・6年，7/23 加世田小，8/10 遺跡見学会（139名），8/12 松元町文化財審議委員，9/20 日置教育事務所管内指導主事，9/25 松元小6年

第4節 整理作業の経過

整理作業は平成14・16・17年度に，霧島市国分上野原の県立埋蔵文化財センターで行った。大まかな整理作業及び報告書作成作業の経過は下記のとおりである。

平成14年度…注記，遺物選別，接合，復元

平成16年度…遺物選別，接合，復元，石器実測委託，土器実測，遺物観察表作成

平成17年度…土器復元，遺構図作成，トレース，拓本，レイアウト，写真撮影，文章作成

平成18年度…印刷製本，校正

第Ⅲ章 遺跡の位置及び環境

第1節 地理的環境

前原遺跡は、鹿児島市福山町字前原・鬼ヶ迫上（旧日置郡松元町福山）に所在し、JR薩摩松元駅から北側に約1km離れた、標高約180mの舌状を呈するシラス台地の先端部近くに位置する。台地には湧水があり、また周辺を石谷川・下谷口川が流れている。これらの水源は、近世から現代まで畑地・水田等に利用されていることから、付近一帯は比較的水に恵まれ、遺跡の立地条件として良好な場所であることがうかがえる。実際、近隣にはフミカキ遺跡などの縄文時代の遺跡が数多く所在している。

遺跡の所在する松元地区は、薩摩半島のほぼ中央に位置し、東部は鹿児島市の犬迫町・西別府町・五ヶ別府町、西部は日置市（旧伊集院町・日吉町・吹上町）に隣接している。本地区は1889年（明治22）4月に上谷口・福山・春山・直木・入佐・石谷の6か村を統合、上伊集院村として発足した。その後1960年（昭和35）4月の町制施行により松元町と改称、さらに2004年（平成16）11月1日に吉田・郡山・喜入・桜島の4町と共に鹿児島市と合併統合し、人口604,387人〔2005（平成17）年10月1日現在〕となり現在に至っている。

本地区の地形は、東西に7.4km、南北に11.0kmのほぼ三角形で、その大部分をシラスに覆われている。地区の北部から中部にかけては概ね150～200mの台地状で、多数の丘陵と谷部からなる。また、中部から南部にかけては高さを増し、300m級の山岳と溪谷からなる。丘陵の大部分は茶畑と林野が占め、沢をなす流域は山田・迫田を形成している。集落は、沖積平野や台地縁辺部に立地していることが多いが、最近では地区内各地に小規模団地が造成されており、それに伴い人口も増加傾向にある。

本地区東部の地区境は、鹿児島湾側と東シナ海側との分水嶺をなし湾と海へ続いている。分水嶺より西側は緩やかに降下し、神之川水系の下谷口川・福山川・石谷川等が東シナ海へ向かう。一方、東側は急傾斜をなして下り、新川系河川の永田川が鹿児島湾に注ぐ。本地区の先史時代の遺跡は分水嶺に沿って分布するが、これらの河川流域周辺にも多く見られる。

第2節 歴史的環境

松元地区では、昭和20年代後半に河口貞徳氏により東昌寺遺跡等の発掘調査が行われたが、昭和59年度発行の遺跡地名表でさえも15か所の遺跡が紹介されるにとどまっていた。しかし、南九州西回り自動車道建設や県道整備に伴う発掘調査等の増加により、60か所近い遺跡が確認された。遺跡は旧石器から近世のものまで存在し、長期間この地区に人々が生活していた痕跡を残している。ここでは、主要な遺跡の概略を時代順に紹介したい。

1 旧石器時代

昨今の発掘調査の増加に伴い、旧石器時代の遺跡の調査例も増えてきている。特に仁田尾台地周

辺は旧石器時代遺跡の宝庫であり、中でも仁田尾遺跡は、遺跡の規模・出土遺物の多さで九州最大規模の旧石器時代の遺跡といわれている。遺物数は約12万点を超え、ナイフ形石器文化と細石刃文化の2文化層からブロックを形成して出土した。遺構は礫群を伴い、細石刃文化期の落とし穴が検出された。仁田尾遺跡の南に位置する仁田尾中B遺跡では、20万点を超える遺物が出土し、遺構として礫群が100基以上検出されている。栢堀遺跡では、細石刃文化期のブロックが19か所検出され、細石刃核・細石刃・三稜尖頭器・台形石器等が出土した。栢堀遺跡に隣接する宮ヶ迫遺跡では、ナイフ形石器・台形石器・剥片尖頭器・細石刃核・細石刃が出土した。栢堀遺跡と谷を隔てた前山遺跡では、AT火山灰の下位から台形様石器、ナイフ形石器、スクレイパー等が出土している。

2 縄文時代

本地区の縄文時代の遺跡は、早期から晩期まで存在する。仁田尾遺跡では草創期の土器や石鏃、早期の前平式・吉田式、前期の轟式・曾畑式土器が出土した。晩期では、黒川式土器に伴って掘立柱建物跡が検出されている。前原遺跡にほど近いフミカキ遺跡では、早期の集石遺構と石坂式・押型文・黒川式土器が出土し、台地から谷への傾斜面に形成された木ヶ暮遺跡では、後期の指宿式土器とごく少量の市来式土器が出土している。同じく後期の遺跡の宮尾遺跡では、落とし穴状遺構を含む土坑が101基検出されている。また、地区を越えた東側に位置する山ノ中遺跡では、竪穴住居跡が傾斜面に検出され、後期の指宿式・中原式土器が出土している。さらに、本地区に隣接する日置市伊集院町下谷口の永迫平遺跡では、早期の遺物が竪穴住居跡、集石遺構、連穴土坑などの遺構に伴い出土しているが、前原遺跡の遺構と類似したものが多い。中でも前平式・加栗山式土器は酷似しており、当該時期の様相を知る上で貴重な資料となるだろう。

3 弥生時代

本地区は、台地が多いため弥生時代の遺跡は少なく、東昌寺遺跡などの数遺跡に限られる。東昌寺遺跡は、標高137mの谷頭の舌状台地上に所在している。ここは県内で弥生時代前期の土器が出土した最初の遺跡であり、高橋Ⅰ式、夜臼式土器などが出土している。また、山下堀頭遺跡では、中津野式土器の時期の竪穴住居跡が3基検出され、その内部からは鉄剣や軽石製品が出土し、周辺からも磨製石鏃が10数点出土している。

4 古墳時代

古墳時代の遺跡では、集落等は発見されていないが、前山遺跡や仁田尾遺跡などで成川式土器が出土している。また、西ノ原A遺跡では成川式土器の小型壺の完形品が出土している。

5 古代～中世

古代から中世にかけては、遺物の出土のみの遺跡が多い。山下堀頭遺跡では、平安時代の方形周溝状遺構が1基検出され、周溝から小型の軽石製石塔が出土している。周辺からは、須恵器・土師器・陶磁器等も出土している。また、仁田尾遺跡で掘立柱建物跡や溝状遺構・土坑が検出され、宮尾遺跡で掘立柱建物跡1棟・焼土域・溝状遺構が多く出土している。遺

物としては、フミカキ遺跡で赤色土器が数点出土しているが、赤色土器は他の遺跡でも多数出土している。室町期になると、石谷城や谷口城などの山城が築かれ、本地区も戦乱の中にあったことがうかがえる。近辺では、日置市伊集院町にある黒木田、碓ノ谷、上稲荷原などの遺跡で古代の遺物が出土している。

参考文献

松元町誌編さん委員会「松元町郷土史」1986

松元町教育委員会「松山原遺跡」松元町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）2003

鹿児島県教育委員会「朽堀遺跡・西ノ原B遺跡」

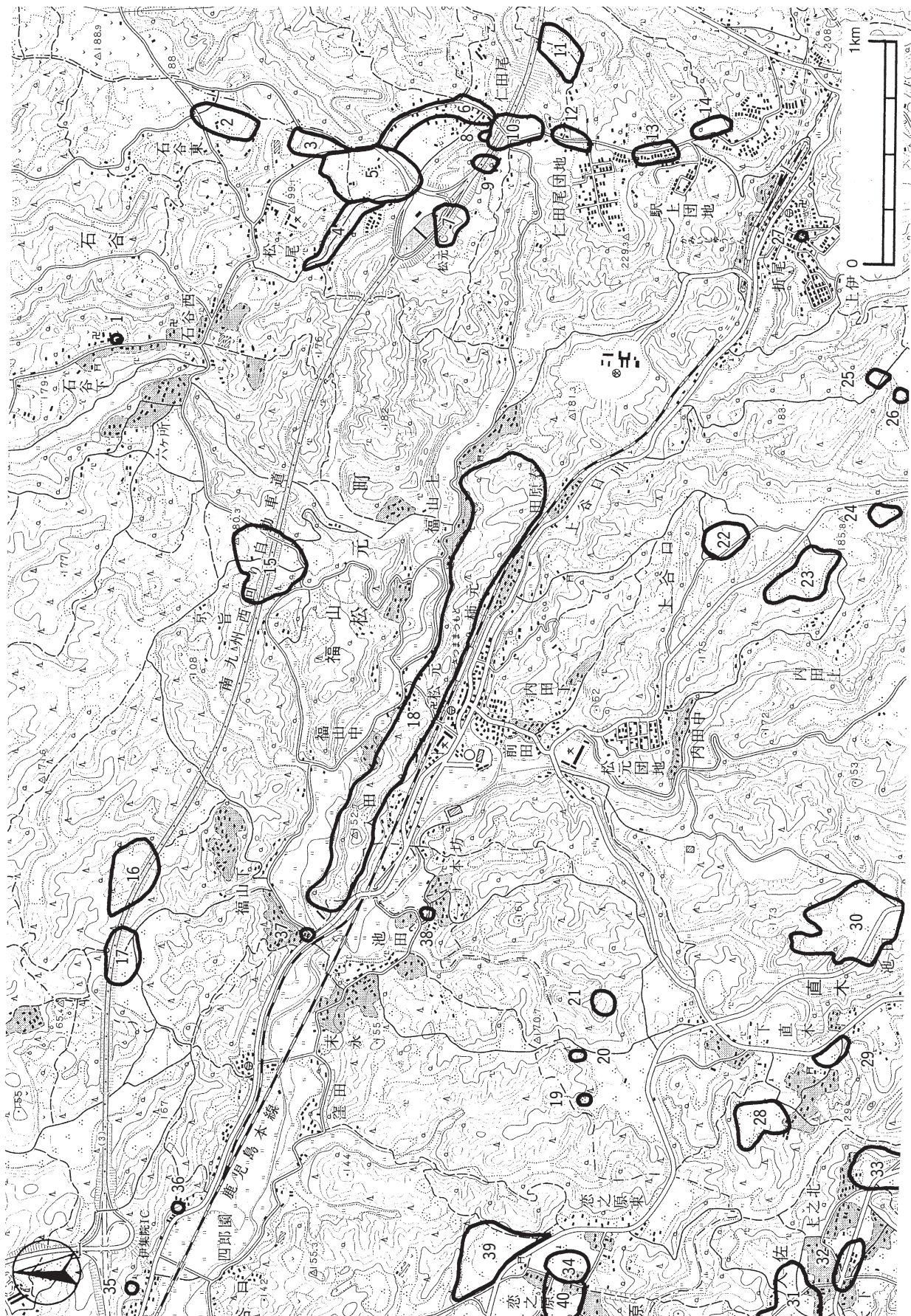
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（30）2002

鹿児島県教育委員会「宮尾遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（73）2004

鹿児島県教育委員会「フミカキ遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（74）2004

鹿児島県教育委員会「山下堀頭遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（92）2005

鹿児島県教育委員会「永迫平遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（93）2005



第3図 前原遺跡の位置及び周辺遺跡 (1 : 25,000)

第2表 周辺遺跡地名表（1）

	遺 跡 名	所 在 地	地形	時 代	遺 物 等	備 考
1	石 谷 城 跡	鹿児島市石谷字朽堀	台地	室町後期	空堀・井戸・堀割跡	
2	伏 野	鹿児島市石谷字伏野	台地	旧石器	細石刃・剥片	H12確認調査
3	隠 迫	鹿児島市石谷字濡ヶ丸	台地	旧石器	三稜尖頭器・細石刃・剥片	H12確認調査
				縄文	石匙・手向山式・曾畑式・指宿式等	
4	宮 ヶ 迫	鹿児島市石谷字前山	台地	旧石器	ナイフ・台形石器・尖頭器・石鏃・細石刃・細石刃核等	松元町埋文報(3)
5	朽 堀 A	鹿児島市石谷字朽堀	台地	旧石器	礫群・台形石器・スクレイパー・三稜尖頭器・石鏃・石槍 細石刃・細石刃核等	H 4 ～ 9 本調査
				縄文	溝・集石・石鏃・石皿・砥石・剥片等 前平式・平楯式・黒色研磨・組織痕文等	
				平安	青磁・須恵器・土師器等	
6	朽 堀 B	鹿児島市石谷字朽堀	台地	旧石器	細石刃	H12確認調査
				縄文	晩期土器・石斧・石鏃・磨石・石皿等	
7	前 山	鹿児島市石谷字西ノ原	台地	旧石器	ナイフ・台形様石器・細石刃・細石刃核・尖頭器・石鏃等	H 7 ～ 8 本調査
				縄文	集石・前平式・轟式	
				古墳	成川式	
8	西ノ原 A	鹿児島市石谷字田ノ免	台地	弥生・古墳	成川式	「鹿県考古学紀要」 2号S12発掘調査
9	西ノ原 B	鹿児島市石谷字西ノ原	台地	旧石器	礫群・ナイフ・台形石器・三稜尖頭器・細石刃等	H 6 本調査
				古墳	成川式	
10	仁 田 尾	鹿児島市石谷字仁田尾	台地	旧石器	礫群・落とし穴・磨石集積遺構 ナイフ・尖頭器・台形石器・細石刃核等	H 5 ～ 9 ・ 11本調査
				縄文	掘建柱建物跡・溝・集石・落とし穴 前平式・吉田式・轟式・市来式・黒川式等	
				古墳～平安	掘建柱建物跡・溝・須恵器・土師器	
11	宮 尾	鹿児島市石谷字宮尾	台地	旧石器	剥片・三稜尖頭器	H 8 本調査
				縄文	集石・落とし穴・土坑・塞ノ神式・平楯式等 石鏃・石匙・石皿等	
				奈良・平安	掘建柱建物跡・須恵器・土師器	
12	御 仮 屋 跡	鹿児島市石谷字仁田尾	台地	旧石器	三稜尖頭器・剥片尖頭器・細石刃核等	H14本調査
13	仁田尾中A	鹿児島市石谷字仁田尾	台地	旧石器	ナイフ・尖頭器・細石刃核等	H12本調査
				縄文	集石・石鏃・曾畑式等	
14	仁田尾中B	鹿児島市石谷字仁田尾	台地	旧石器	礫群・ナイフ・三稜尖頭器・彫器・敲石・台石・細石刃・細石刃核等	H 3 ～ 8 本調査
				縄文	草創期土器・石鏃・彫器	
15	前 原	鹿児島市福山字前原・鬼ヶ迫上	台地	旧石器	礫群・石鏃・台形石器・三稜尖頭器・細石刃等	H 3 ～ 8 本調査 本報告書
				縄文	住居跡・道跡・連結土坑・集石・土坑 前平式・吉田式・石坂式等・晩期土器等 礫器・石錐・石剣・石槍・石皿・磨製石鏃等	
16	フミカキ	鹿児島市福山字フミカキ・小長迫	台地	縄文	連結土坑・集石・石坂式・押型文・黒川式等 石鏃・スクレイパー・打製石斧・磨石等等	H 6 ～ 7 本調査
				弥生～平安	古道・成川式・須恵器・土師器	

第3表 周辺遺跡地名表（2）

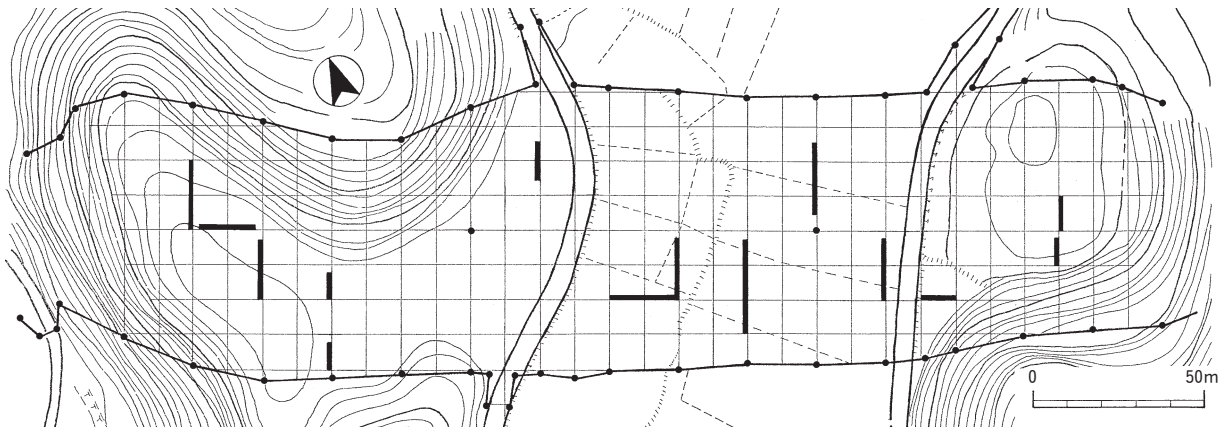
	遺 跡 名	所 在 地	地形	時 代	遺 物 等	備 考
17	山下堀頭	鹿児島市福山字山下堀頭	台地	縄文 弥生～平安	曾畑式・出水式・西平式 住居跡・中津野式・鉄剣・石鏃・軽石製品 周溝墓・須恵器	H 6 本調査
18	谷口城跡 （上柵城） （下柵城）	鹿児島市上谷口 鹿児島市福山下	台地	室町後期	水無壕跡 水無壕跡	
19	火ノ字都	鹿児島市上谷口字火之字都	台地	弥生・古墳		H 2 分布調査
20	大山	鹿児島市上谷口 字井谷ヶ迫・大山	台地	縄文中期		H 2 分布調査
21	喜次郎岡	鹿児島市上谷口 字喜次郎岡・喜次郎	台地	古墳～平安	土器片	H 3 分布調査
22	谷頭原	鹿児島市上谷口 字谷頭原	台地	縄文～古墳	土器片	H 3 分布調査
23	詰土原	鹿児島市上谷口字詰土原	台地	古墳		H 8 分布調査
24	立番上	鹿児島市上谷口 字立番上・谷頭原	台地		土器片	H 3 分布調査
25	大堀原	鹿児島市上谷口字大堀原	台地	縄文・古墳		H 7 確認調査
26	耳田原	鹿児島市上谷口 字柳田原・小耳田原	台地	縄文・古墳		H 7 確認調査
27	屋村	鹿児島市上谷口字折尾平	段丘	縄文	大型石斧	
28	西ノ迫	鹿児島市直木 字西ノ迫・久保	台地	古墳	石斧・尖頭器・押形文・貝殻条痕文等	H14確認調査
29	下東ヶ谷	鹿児島市直木字下東ヶ谷	台地	古墳	磨製石器，市来式，弥生土器	H 8 分布調査
30	向原	鹿児島市直木 字茶木ヶ迫・向原・川口迫	台地	縄文	須恵器・土師器	H14確認調査
31	堀内	鹿児島市入佐 字堀内・柿内・八石・大下	台地	縄文	石坂式・吉田式	松元町埋文報（1） H 6 本調査
32	松山原	鹿児島市入佐字松山原	台地	弥生・古墳	道跡・石鏃・成川式・土師器	H13本調査
33	堂ノ原	鹿児島市入佐 字堂ノ原・久万田	台地			H 6 分布調査
34	恋之原	日置市伊集院町恋之原	台地	縄文	壺形土器	
35	破鞋墓地	日置市伊集院町向江	平地	中世・近世	五輪塔，宝塔外	
36	梅岳寺墓地	日置市伊集院町四郎園	台地	中世・近世	五輪塔，宝塔外	
37	末永	日置市伊集院町窪田郵便局前	平地	中世・近世	五輪塔・相輪	
38	末永	日置市伊集院町末永八幡神社横	山地	中世・近世	五輪塔・宝塔外	
39	上稻荷原	日置市伊集院町恋之原	台地	古墳・古代		H 7 分布調査
40	稻荷原	日置市伊集院町恋之原	台地	縄文早期	石鏃・石槍・剥片・前平式・吉田式等	H 8 本調査

第Ⅳ章 調査の概要

第1節 発掘調査の方法

STA.235とSTA.240を基準に10m間隔の区割りを設定した。その区割りに沿って13か所のトレンチ（ $8\text{m} \times 2\text{m} = 4$ か所、 $10\text{m} \times 2\text{m} = 1$ か所、 $16\text{m} \times 2\text{m} = 2$ か所、 $18\text{m} \times 2\text{m} = 1$ か所、 $20\text{m} \times 2\text{m} = 2$ か所、 $30\text{m} \times 2\text{m} = 2$ か所）で確認調査を行った。

その結果、縄文時代後・晩期の土器がⅢ層から、縄文時代早期の前平式・吉田式・石坂式土器と石器がⅣ・Ⅴ層から出土した。



第4図 確認調査トレンチ配置図

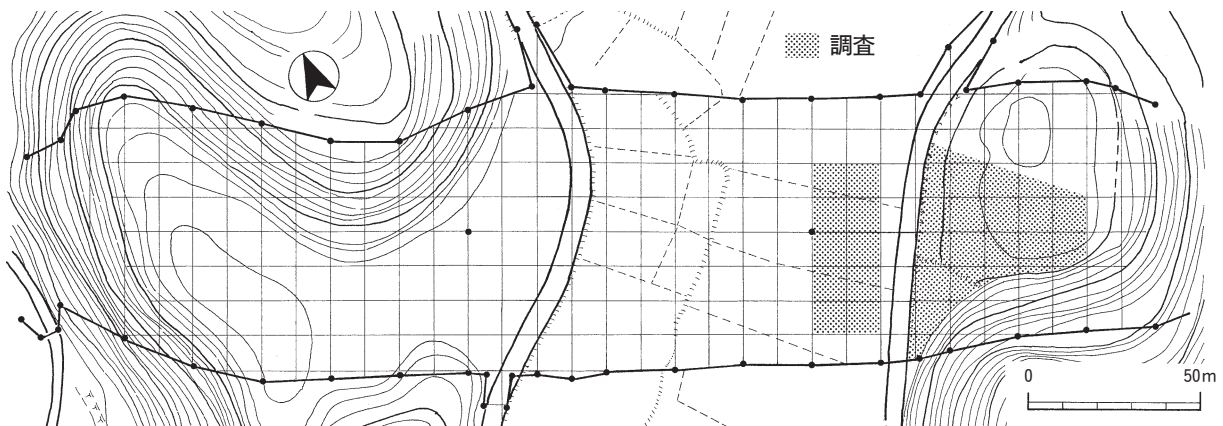
平成3年度（平成3年10月9日～平成4年3月27日）

確認調査の成果により、平成3年10月9日から本調査を行った。

本調査を始めるに伴い、地形に沿って調査順に、東からA地区（21～30区）、B地区（10～29区）、C地区（1～9区）の3か所に分類した。

遺物出土約11,000点、Ⅲ層は縄文時代後・晩期の遺物で2,182点が出土した。縄文時代晩期の黒色研磨土器、組織痕土器が主体となっている。

Ⅳ・Ⅴ層の遺物は縄文時代早期のもので、Ⅳ層5,761点、Ⅴ層2,755点である。石坂式・吉田式・

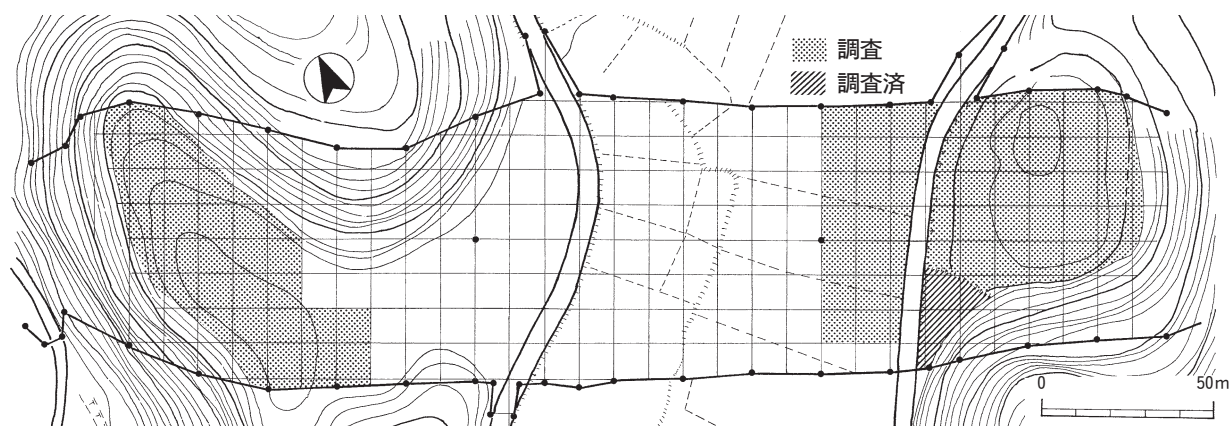


第5図 平成3年度調査範囲図

前平式土器が主体となり、ほとんどが円筒土器であるが、一部、角筒土器も出土している。また、押型文・手向山式・曾畑式土器が少量ではあるが出土している。石器は、石鏃・石匙・磨石・石皿等が出土した。石材については、黒曜石・チャート・頁岩・鉄石英・石英・安山岩・砂岩がみられた。

遺構は、集石 8 基と竪穴住居跡数基、土坑10数基が検出された。

平成 4 年度（平成 4 年 4 月 21 日～平成 5 年 3 月 26 日）



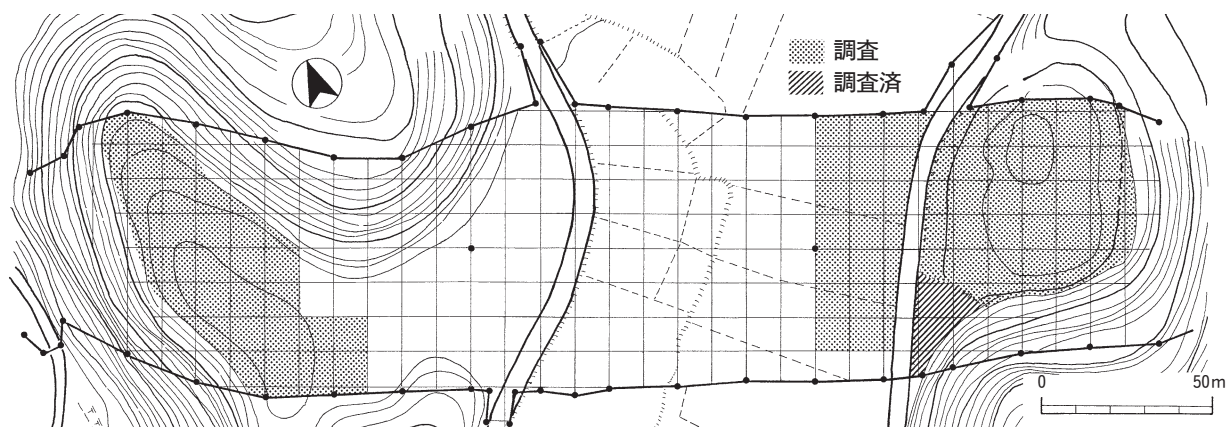
第 6 図 平成 4 年度調査範囲図

平成 5 年度（平成 5 年 4 月 26 日～11月12日）

昨年からの継続調査であり、縄文時代早期前葉の遺構群の検出。未調査部分および「薩摩火山灰」下層の調査を行った。その結果、縄文時代早期に二時期、縄文時代草創期、旧石器時代の 4 文化層が確認され、複合遺跡であるという結果が得られた。

旧石器時代では、三稜尖頭器・台形石器・ナイフ形石器・剥片が出土し、「薩摩火山灰」の直下より縄文時代草創期の土器と石鏃が出土した。土器は、今まで出土例がなく、鋭い串状の施文具をさして文様としたものである。

縄文時代早期では多くの遺物と多彩な遺構が確認された。塞ノ神式土器に伴う落とし穴 2，溝状遺構が検出されたほか、貝殻条痕文土器には、竪穴住居跡12軒，集石13基，連穴土坑 3 基，大形二段掘り土坑 4 基，ピット付土坑31基，その他の土坑108が検出された。



第7図 平成5年度調査範囲図

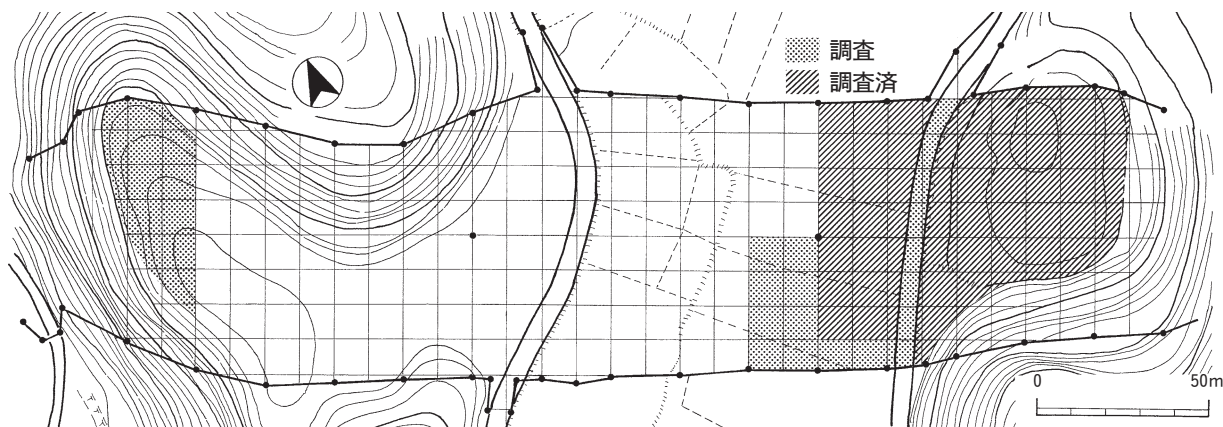
平成6年度（平成7年1月9日～3月24日）

A地区

現道路敷き部分の全面調査とE・F・G・H-20・21区のIII層の調査を行う。その結果、遺構（土坑・ピット）や深浦式、黒川式土器や石鏃が出土した。

C地区

「薩摩火山灰」より下層の調査を行った。その結果、縄文時代草創期から旧石器時代細石刃文化までの石鏃・細石刃・石核・剥片及び礫群が検出された。



第8図 平成6年度調査範囲図

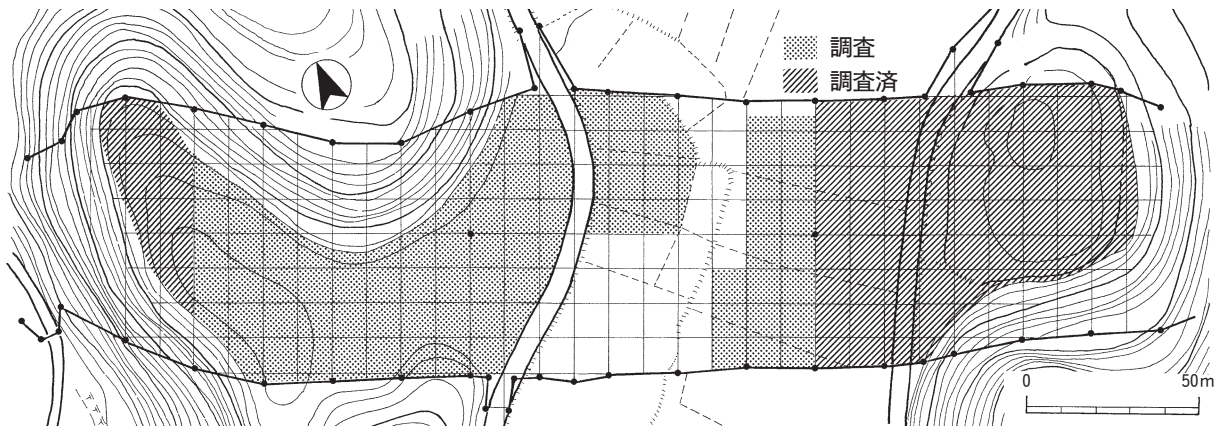
平成7年度（平成7年4月23日～平成8年3月22日）

A地区 20・21区の縄文時代早期の調査を行う。

B地区 10～18区の旧石器時代～縄文時代早期の調査を行う。その結果、遺構（住居跡・土坑・落とし穴）や土器（前平式・吉田式・石坂式ほか）や石器（石皿・磨石・凹石・石鏃ほか）が出土した。

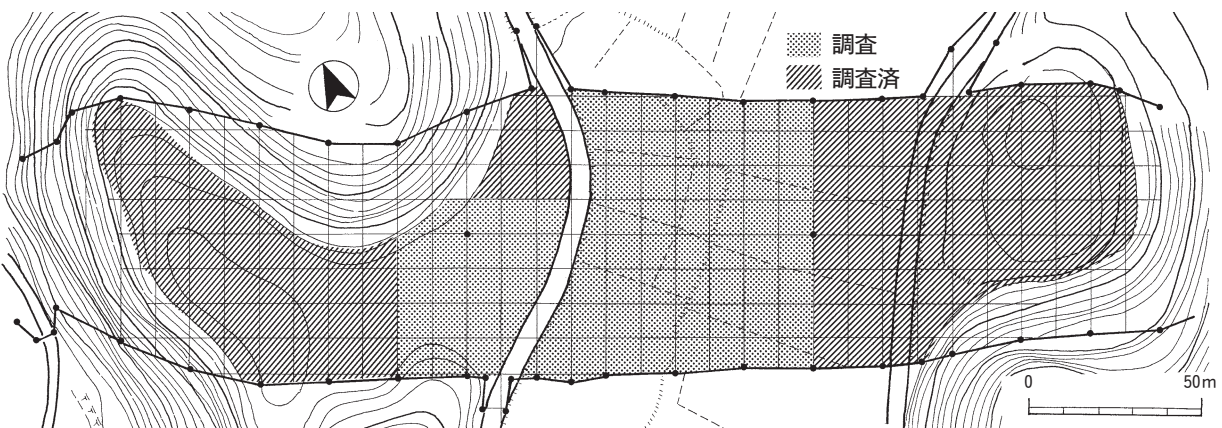
C地区 「薩摩火山灰」より下層の調査を行った。その結果、縄文時代草創期から旧石器時代細石刃文化までの遺物（石鏃・細石刃・剥片）が出土した。

平成7年度（平成7年4月23日～平成8年3月22日）



第9図 平成7年度調査範囲図

平成8年度（平成8年4月22日～10月31日）



第10図 平成8年度調査範囲図

平成8年度（平成8年4月22日～12月12日）

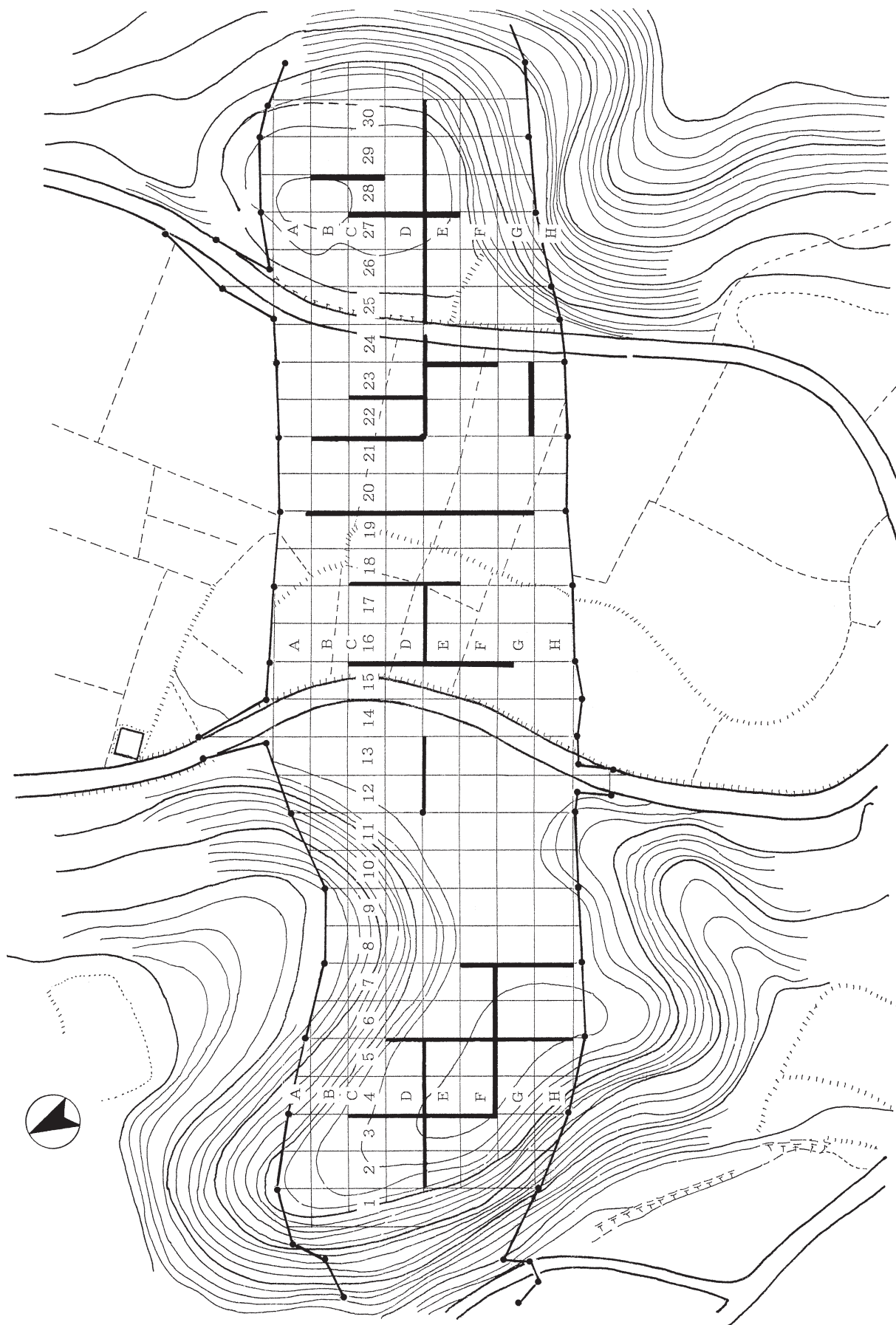
B地区 7～21区の調査を行った。III層からは縄文時代晩期の黒川式土器や石鏃・磨石等が出土した。IV～V層にかけては、縄文時代早期の前平式土器・吉田式土器を中心に数多くの遺物が出土した。また早期の遺物（住居跡・連穴土坑・集石・遺跡・土坑等）が数多く検出された。

第2節 遺跡の層位

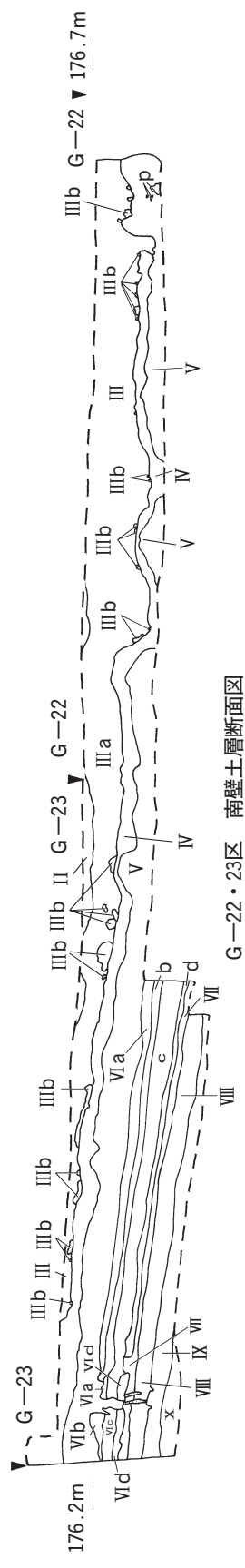
前原遺跡は、約180m級のシラス台地の先端部付近に立地し、調査区は谷を隔てA・B・Cの3地区に分けられる。調査区中央部にあたるB地区の一部は、近世以降の造成によって削平を受けている。前原遺跡における土層は下図の通りである。

I	褐色土	I 層	表土である。畑地として利用されている。
II	黒色腐植土	II 層	弥生～平安時代にかけての遺物包含層。部分的にしか見られない。
III a	黄褐色土	III a 層	縄文時代前期～晩期にかけての遺物包含層。
III b	黄橙色軽石	III b 層	アカホヤ火山灰。約6,300～6,400年前の鬼界カルデラ起源の火山灰層である。
IV	茶褐色土	IV 層	下部に縄文時代早期の遺物が含まれる。
V	黒色硬質土	V 層	上部に縄文時代早期の遺物が含まれる。
VI	黄橙色砂質層	VI 層	薩摩火山灰。約11,500年前の桜島起源の火山灰層である。
VII	暗茶褐色粘質土	VII 層	縄文時代草創期の遺物包含層である。部分的にa～cに分層可能である
VIII	赤茶褐色粘質土	VIII 層	旧石器時代細石刃文化期の遺物包含層である。
IX	暗褐色粘質土	IX 層	旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。
X	シラス	X 層	砂質が強い。

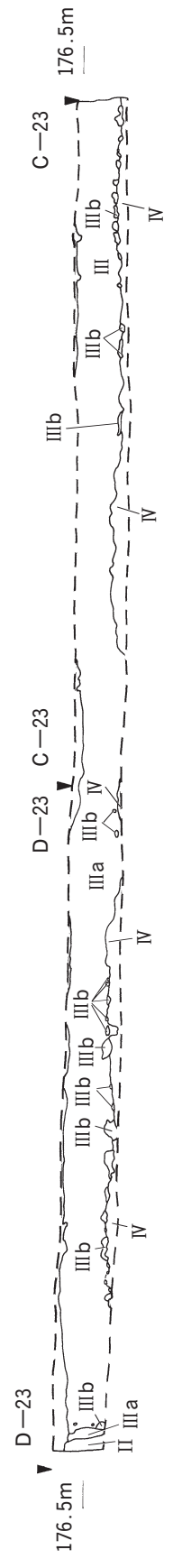
第11図 基本土層



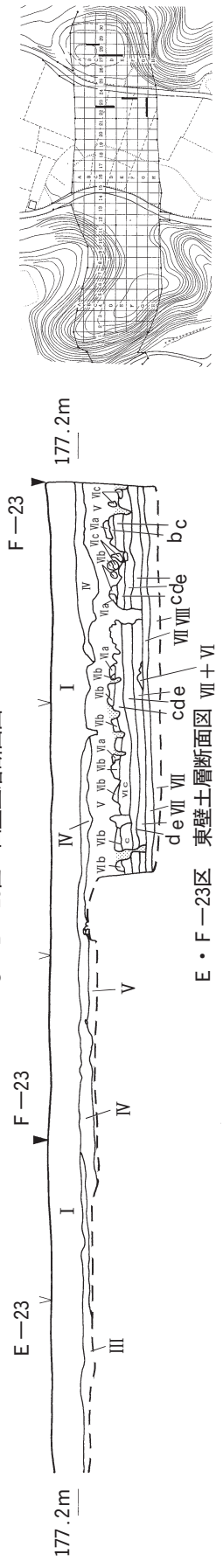
第12図 土層配置図



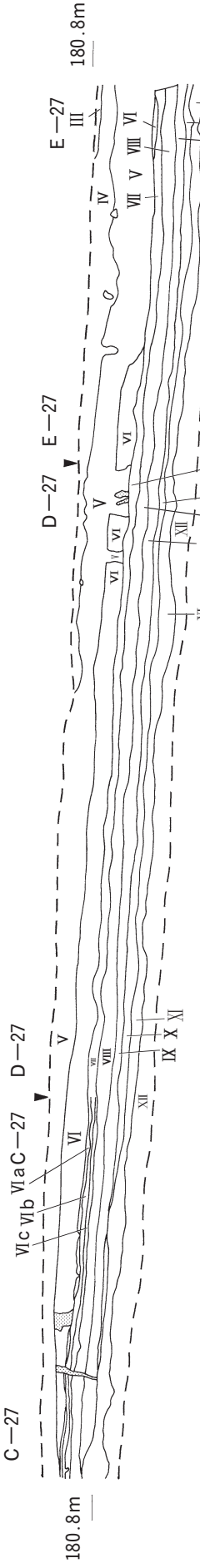
G-22・23区 南壁土層断面图



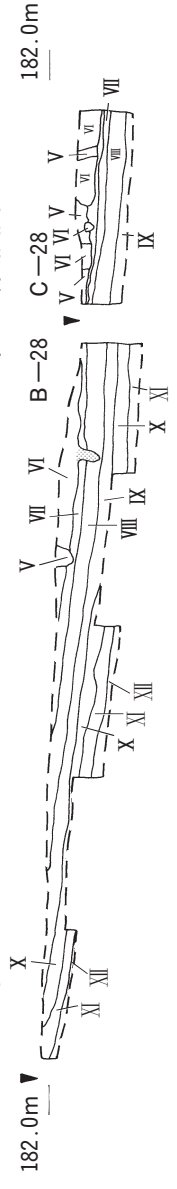
C・D-23区 西壁土層断面图



E・F-23区 東壁土層断面图 VII+VI

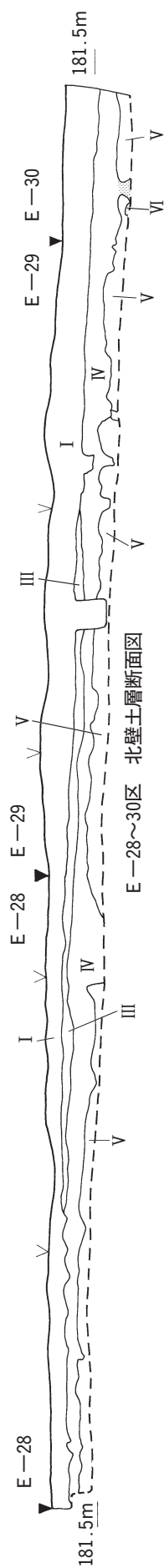
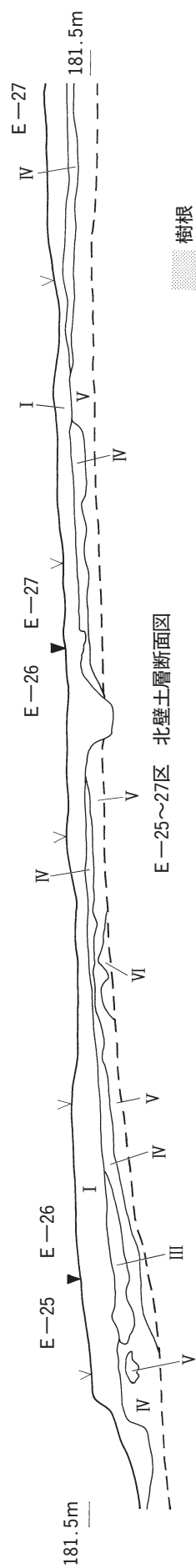
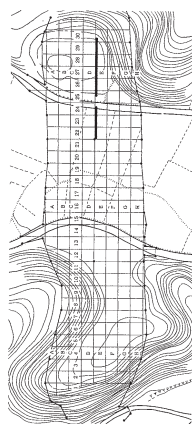
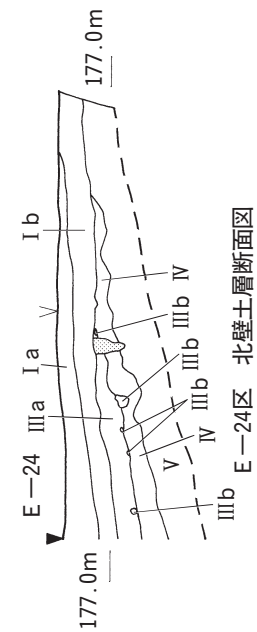
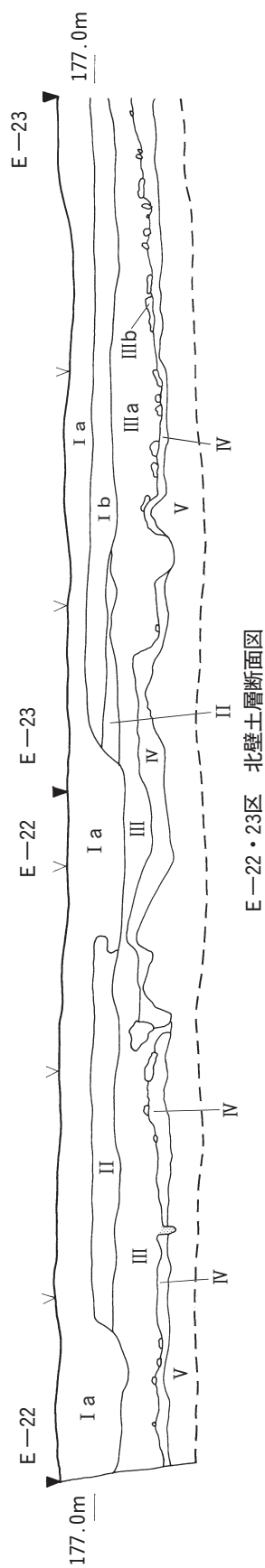


C・D・E-27区 東壁土層断面图

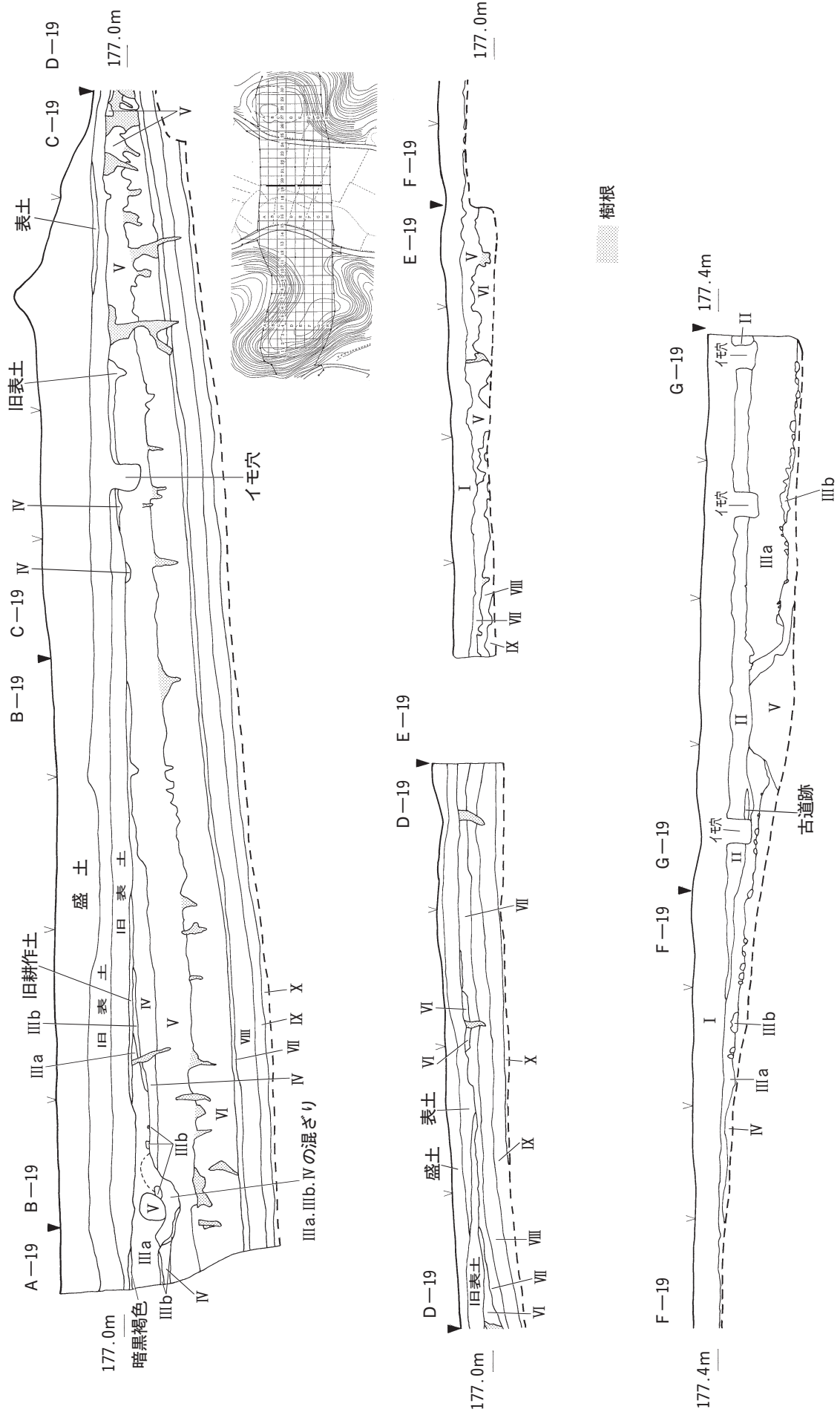


B・C-28区 東壁土層断面图

第13图 土層①

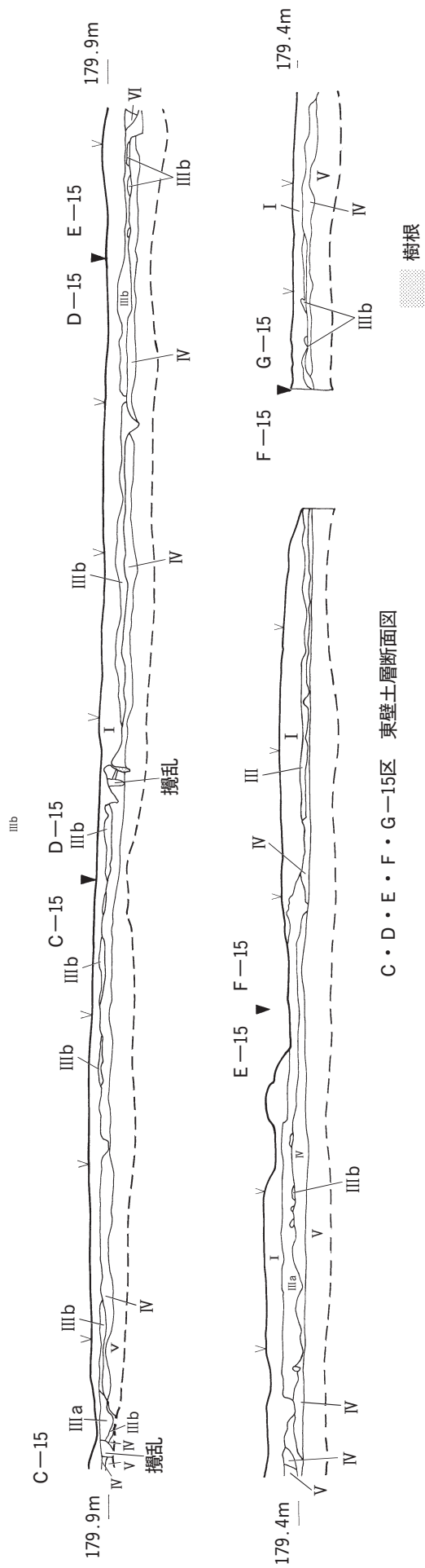


第14図 土層②

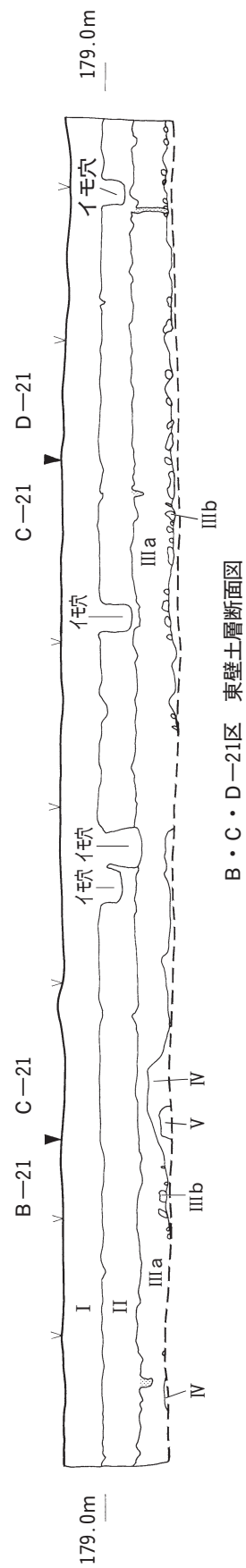
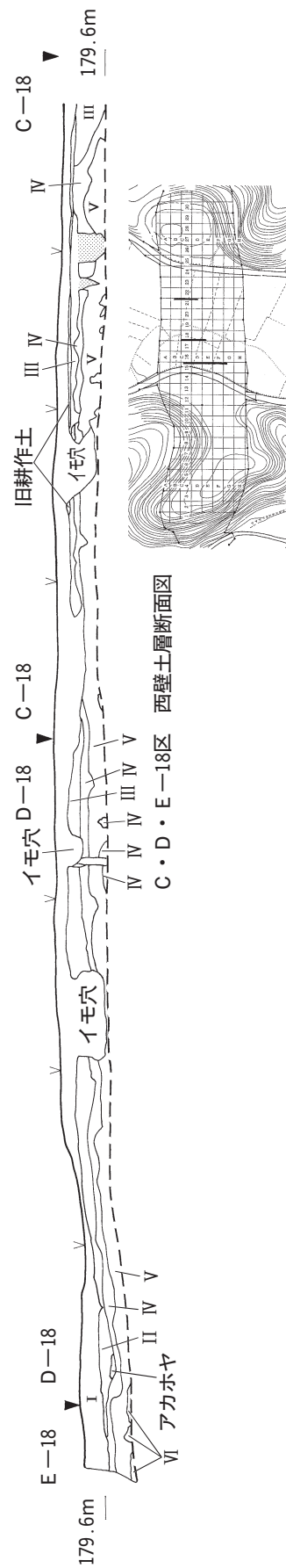


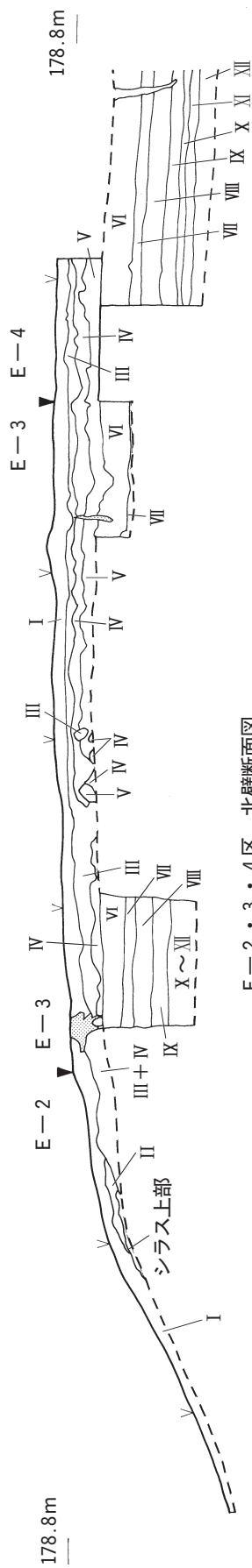
A・B・C・D・E・F・G-19区 東壁断面図

第15図 土層③

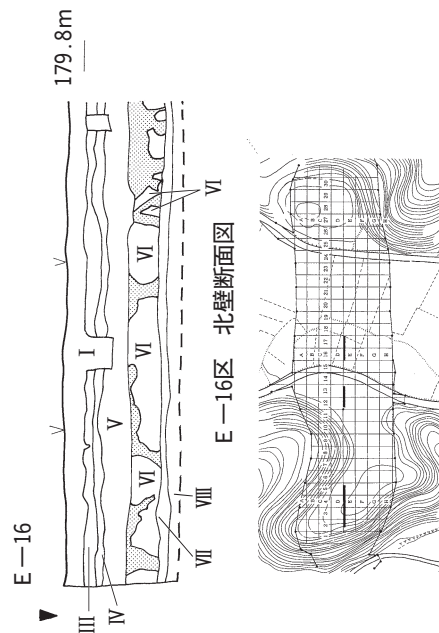
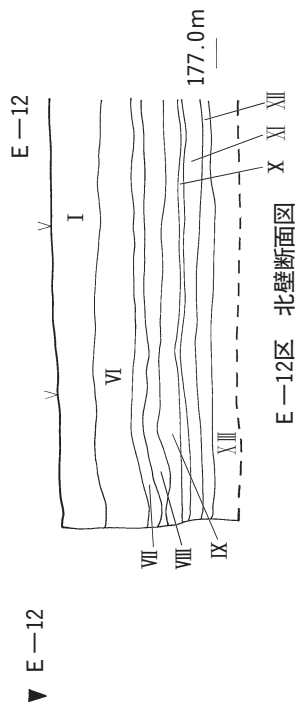


第16図 土層④

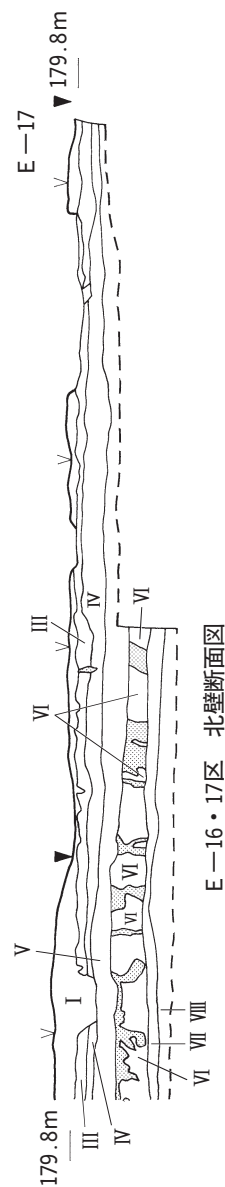
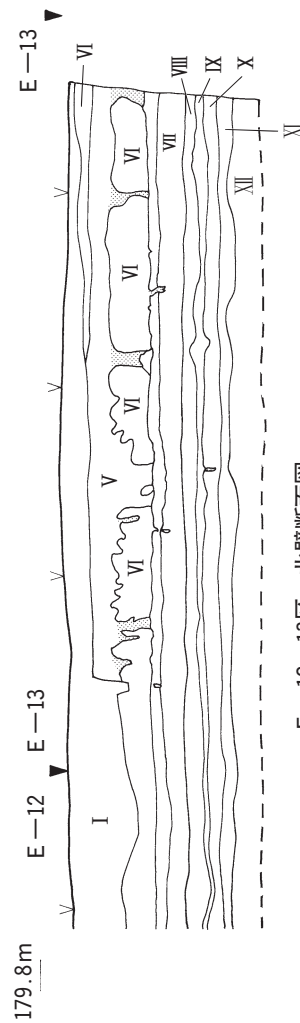
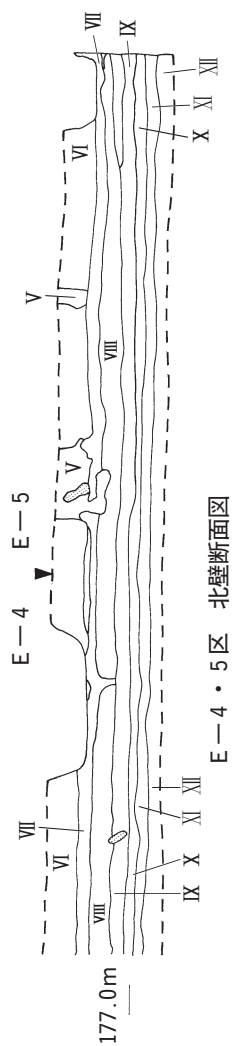




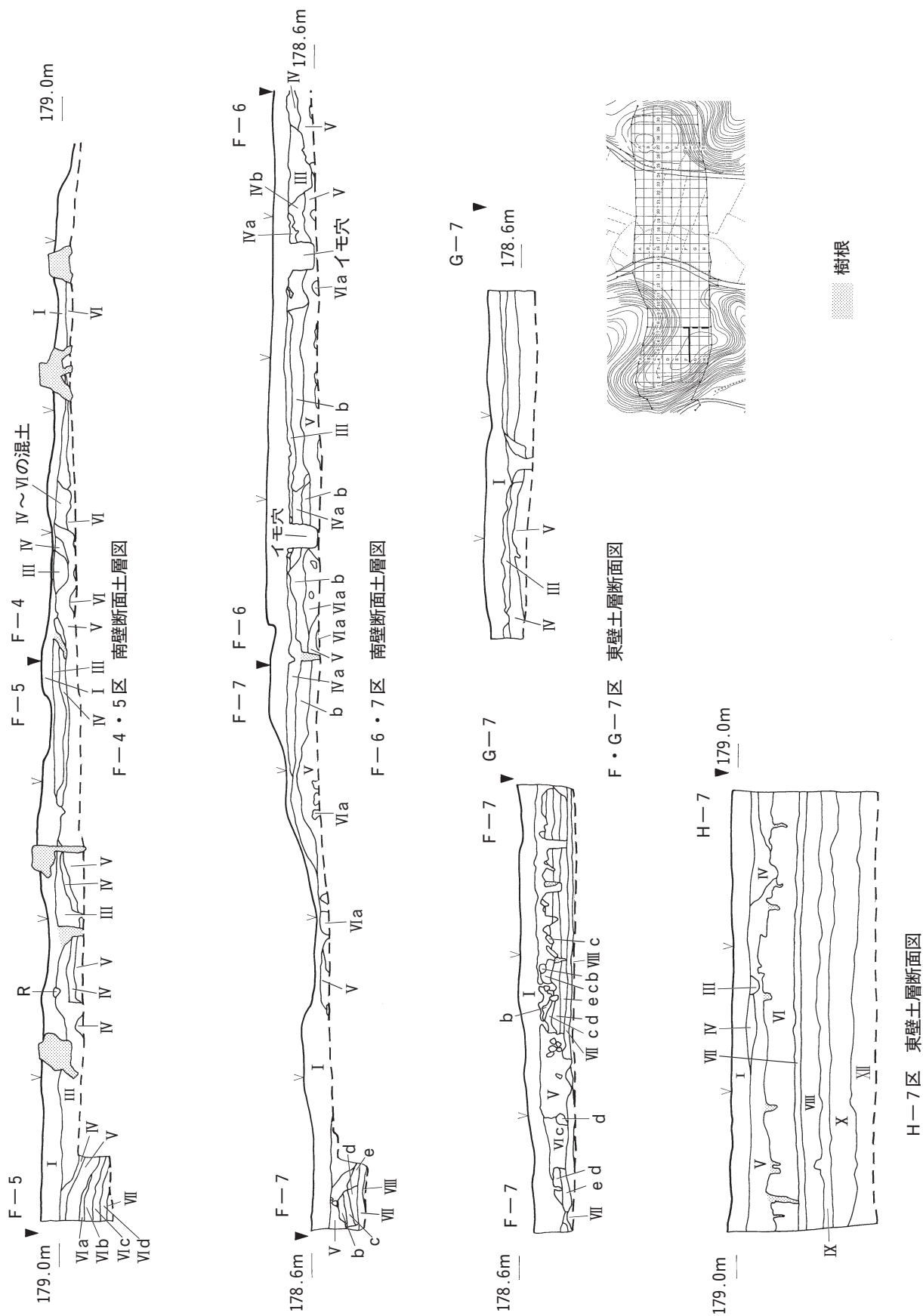
E-2・3・4区 北壁断面図



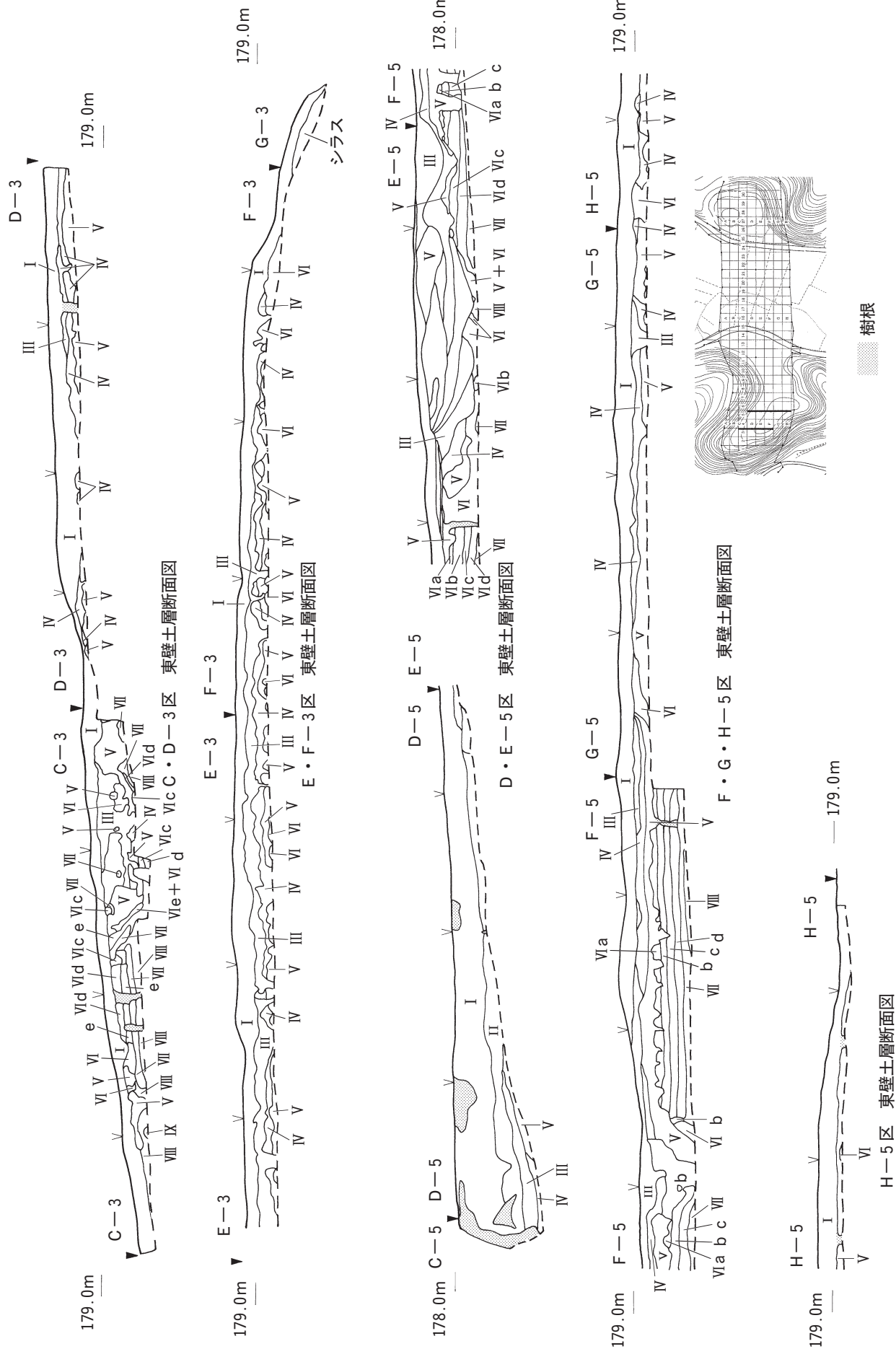
樹根



第17図 土層⑤



第18図 土層⑥



第19図 土層⑦

第3節 旧石器時代の調査

旧石器時代の遺物は、A地区では、B28区に集中し、Ⅶ層39点、Ⅷ層77点、Ⅸ層157点で計273点が出土した。Ⅶ層では細石刃・石鏃・石核、Ⅷ・Ⅸ層では三稜尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー・剥片等が出土した。B地区では、Ⅶ層で石鏃が出土したのみである。

C地区は、すべてⅦ層からで細石刃・石刃・石核・剥片が出土した。

石材は黒曜石・頁岩・流紋岩・安山岩・チャート・鉄石英などであり、黒曜石は肉眼的観察により県内産の三船、上牛鼻・平木場、県外産の腰岳、針尾島などがみられた。

石材

旧石器時代の石器に用いられた石材には黒曜石・頁岩・流紋岩・安山岩・チャート・鉄石英などがあり、黒曜石については肉眼的観察によって下記の通り分類した。

黒曜石三船……黒色を呈する黒曜石であり、気泡が多く県内では根占町長谷、鹿児島市三船、大口市日東・猩々・五女木などにあるが、本遺跡の黒曜石は、鹿児島市吉野町三船原産の特徴がみられるため三船原産とした。

三船の原石は、強く溶結した柱状節理の発達した吉野火砕流の中にレンズ状の黒曜石が含まれている。黒曜石は灰色っぽい黒い線がはいることもある。

黒曜石上牛鼻……ガラス質が弱く、一見石炭を思わせるものである。風化が著しく進み、淡黒色を呈するが内面は真っ黒であり光を通さない。気泡は少なく軽石が若干混じる良質の黒曜石である。褐色のベルトが入ることもある。薩摩郡樋脇町上牛鼻、日置郡東市来町平木場の石材と推定される。

黒曜石腰岳……ガラス質で黒色を呈するもので、気泡が少なく良質の黒曜石である。佐賀県腰岳の石材と推定される。

黒曜石針尾……ガラス質が弱く、灰褐色を呈し光を通さない。気泡は少なく良質の黒曜石である。長崎県針尾島周辺の石材と推定される。

1 IX・Ⅷ層の調査

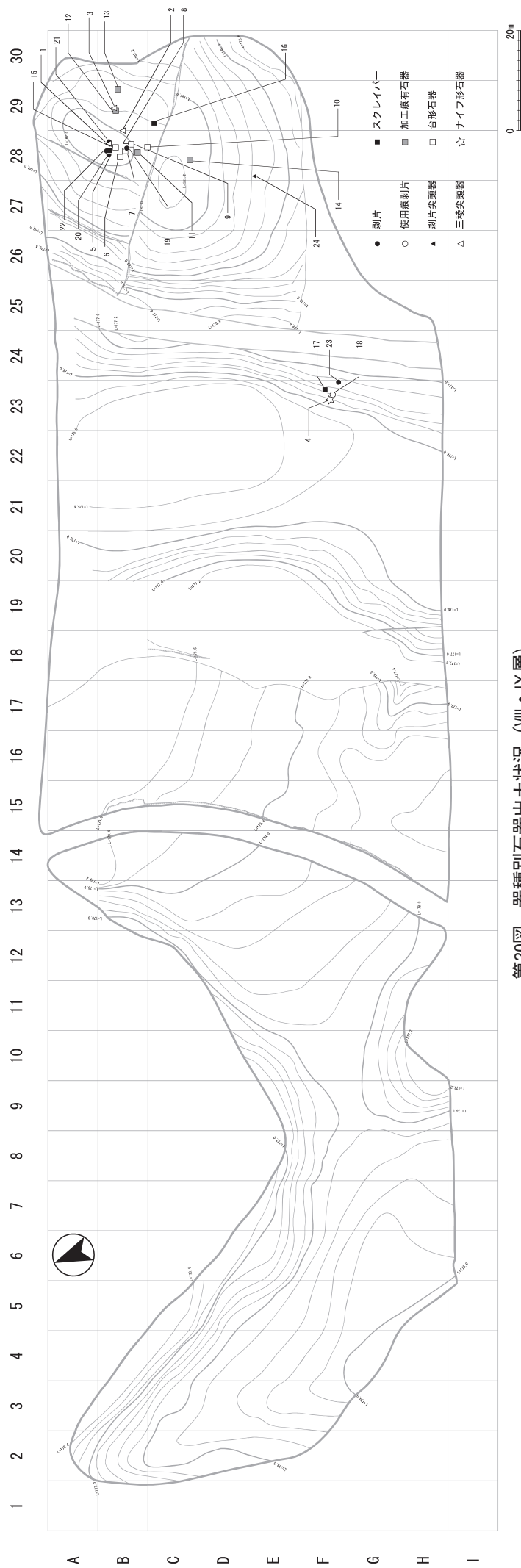
遺物

三稜尖頭器

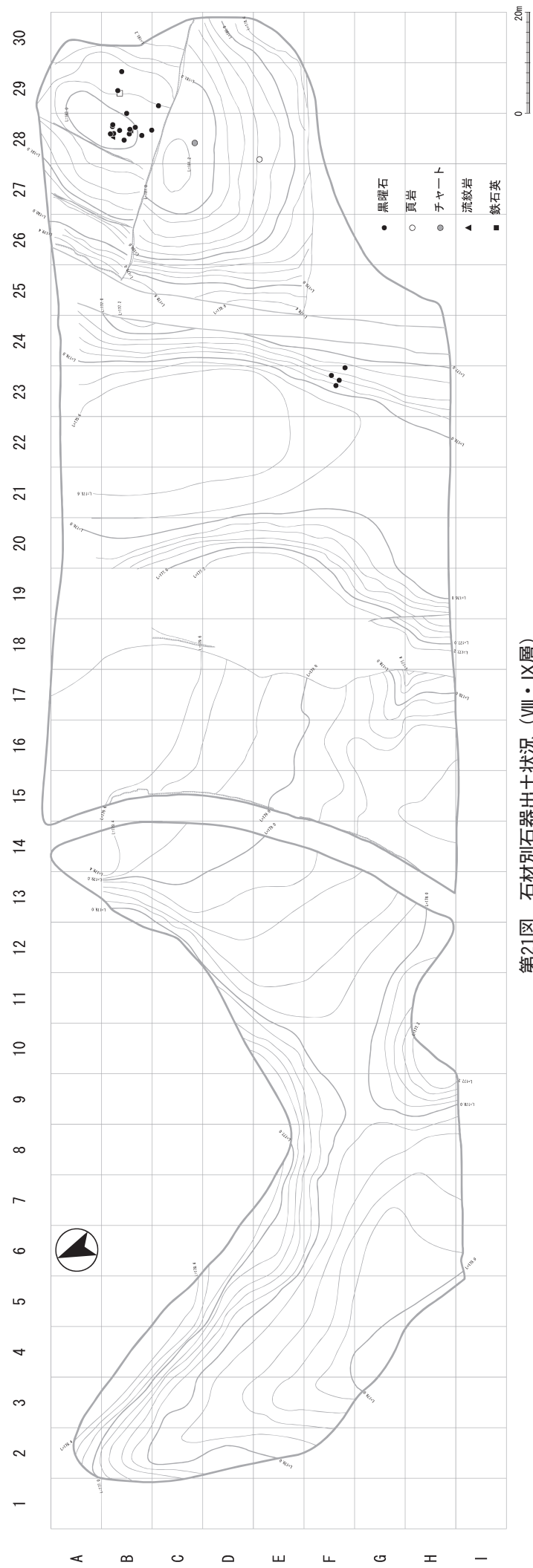
1は上牛鼻原産の黒曜石で、厚みのある縦長剥片を素材にした三稜尖頭器である。一面に剥離面をもち、二面に調整剥離のあるもので先端部は鋭い。約5m離れていたものが接合したものである。断面は台形を呈す。0002も上牛鼻原産の黒曜石で、やはり厚みのある縦長剥片を素材にし、調整剥離が二面あり、一面が剥離面をもつものである。先端部は鈍く直線的である。断面は三角形を呈す。0003は頁岩で厚みのある長めの縦長剥片を素材に用いた三稜尖頭器で、やはり一面に剥離面をもち、二面に調整剥離のあるもので、先端部は鈍く直線的である。断面は台形を呈す。

剥片尖頭器

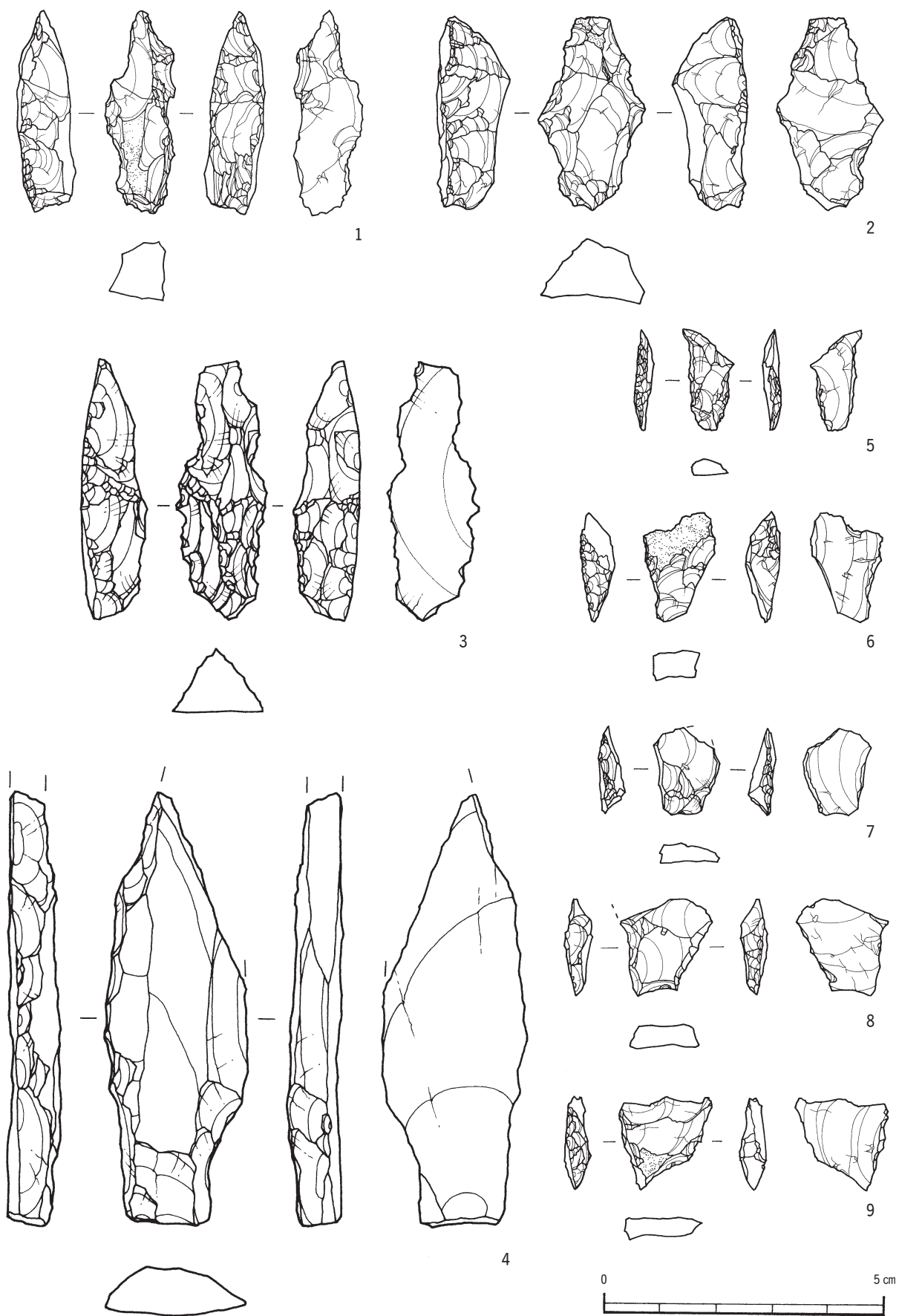
4は頁岩を素材に用いた剥片尖頭器である。E28区Ⅲ層からの出土であるが、石器の形態より旧石器時代の項で取り上げた。



第20図 器種別石器出土状況 (Ⅷ・Ⅸ層)



第21図 石材別石器出土状況（Ⅷ・Ⅸ層）



第22図 旧石器時代石器(1)

ナイフ形石器

5は三船原産の黒曜石を用いたナイフ形石器である。片側面は片面からのブランディングにより丁寧な整形を施し、基部は片面からのブランディングを施している。

台形石器

6～9は上牛鼻産黒曜石を用いた台形石器である。6は不定形剥片を横位に利用し、両側縁は片面からのブランディングと平坦剥離により整形されている。7も不定形剥片を横位に利用し、両側縁ともブランディングにより整形されている。8・9もブランディングと平坦剥離により整形されたものである。

10・11は三船産の黒曜石を用いた台形石器で、不定形剥片を横位に利用し、両側縁ともブランディングにより整形されている。

加工痕のある石器

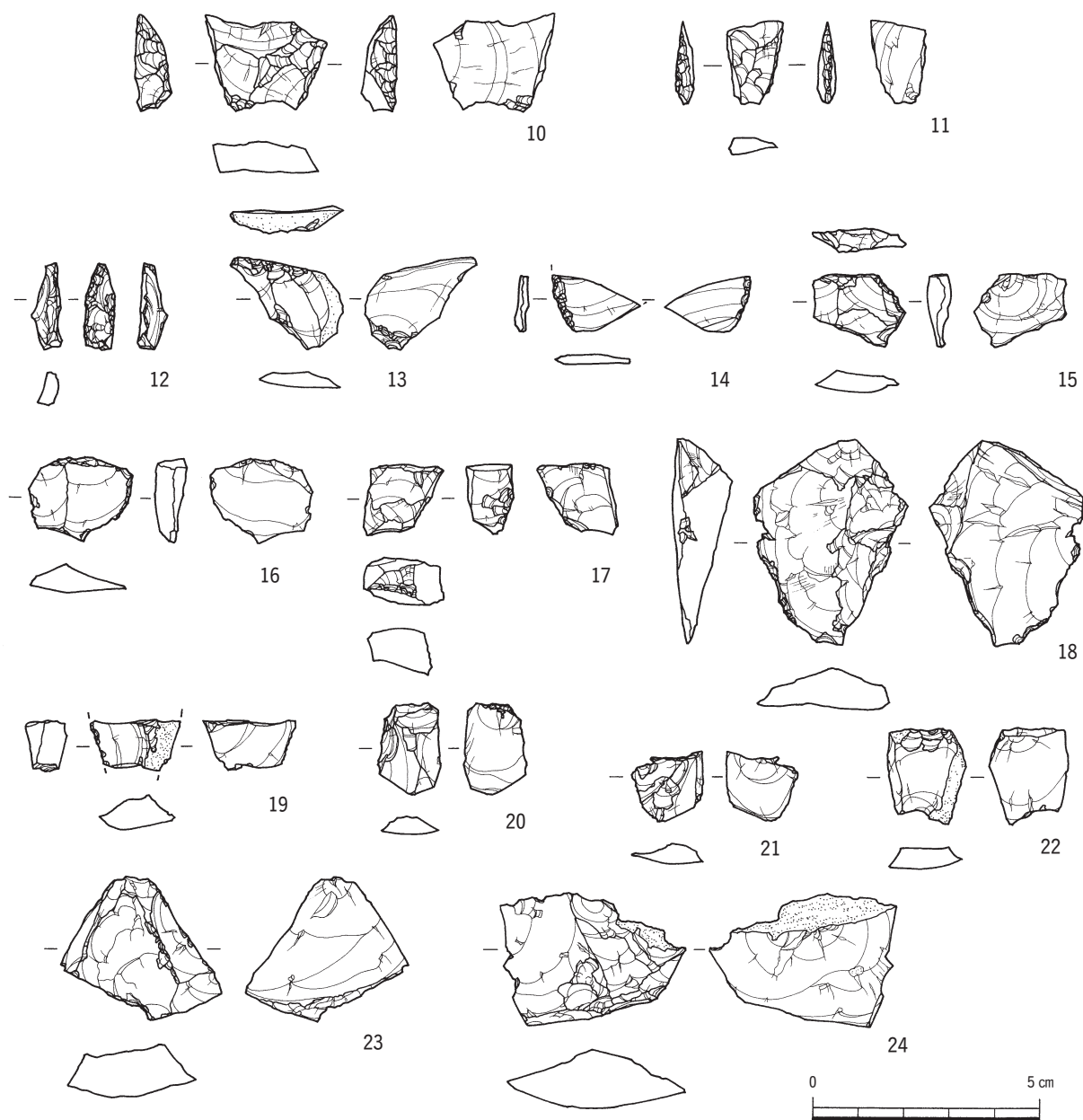
12は上牛鼻産の黒曜石を用いた加工痕のある剥片である。一側面に刃潰し的なブランディングがみられナイフ形石器の可能性もあるが、欠損品のため加工痕のある石器にした。13は鉄石英を石材に用いたもので、片側縁部に調整剥離があるものである。14は佐賀県腰岳産の良質な黒曜石の剥片の側縁部に交互剥離を施した石器である。15はチャートを石材に用いたもので、片側縁部に調整剥離があるものである。Ⅶ層からの出土である。

スクレイパー

16～18はスクレイパーである。16は上牛鼻産の黒曜石剥片を用いたもので、二側縁部にブランディングを施している。17・18は三船産の黒曜石剥片を用いたものである。17は側縁部にブランディングを施したもので、刃部の角度から搔器に分類される。

剥片

19～24は剥片である。19はやや厚めの上牛鼻産の黒曜石剥片を用いたもので、側縁部に使用痕がみられる。20・21は流紋岩を用いた剥片である。



第23図 旧石器時代石器(2)

第4表 旧石器一覧表（Ⅷ・Ⅸ層）

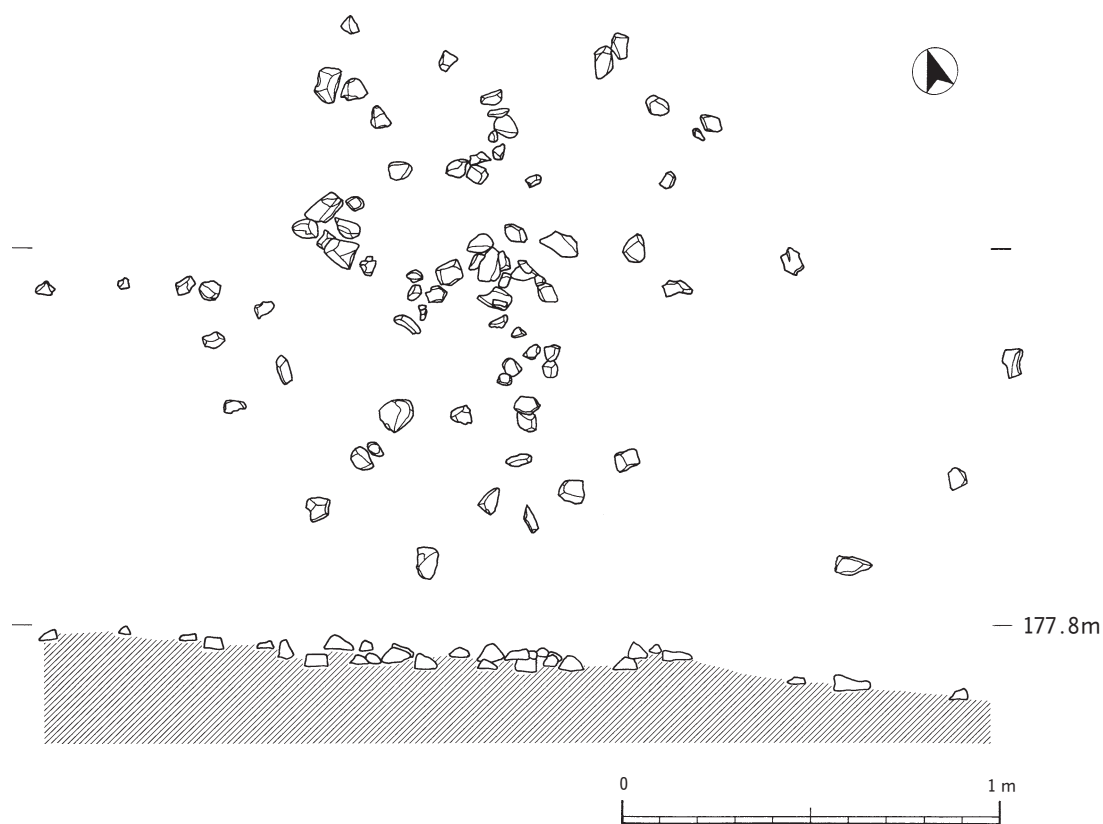
番号	器 種	石 材	地区	区	層	標 高	遺物番号	重量 g	長さ cm	幅 cm	厚み cm	備 考
1	三稜尖頭器	黒曜石上牛鼻	A	B29	Ⅸ	181.69	18305	4.1	3.6	1.2	1.0	18316と接合
2	三稜尖頭器	黒曜石上牛鼻	A	B28	Ⅸ	181.58	19820	6.4	3.5	1.9	1.4	
3	三稜尖頭器	頁岩	A	B28	Ⅶ			7.0	4.1	1.6	1.2	
4	剥片尖頭器	頁岩	A	E28	Ⅲ	180.915	2022	22.5	7.7	2.6	1.0	
5	ナイフ形石器	黒曜石三船	A	F23	Ⅸ	175.05	18568	0.4	1.8	0.9	0.4	
6	台形石器	黒曜石上牛鼻	A	B28	Ⅸ	181.97	18325	1.2	2.0	1.3	0.6	
7	台形石器	黒曜石上牛鼻	A	B28	Ⅸ	181.91	18332	0.7	1.6	1.2	0.5	
8	台形石器	黒曜石上牛鼻	A	B28	Ⅸ	181.90	18336	0.9	1.8	1.6	0.5	
9	台形石器	黒曜石上牛鼻	A	B28	Ⅸ	181.72	18448	0.9	1.7	1.7	0.5	
10	台形石器	黒曜石三船	A	B28	Ⅸ	181.39	18504	1.1	1.4	1.8	0.5	
11	台形石器	黒曜石三船	A	B28	Ⅷ	181.47	18370	0.2	1.1	0.8	0.3	
12	加工有石器	黒曜石上牛鼻	A	B28	Ⅸ	181.47	18513	0.7	1.9	0.7	0.7	
13	加工有石器	鉄石英	A	B28	Ⅸ	181.61	18583	1.8	2.0	2.5	0.6	
14	加工有石器	黒曜石腰岳	A	B29	Ⅷ	181.59	18287	0.5	1.2	2.0	0.3	
15	加工有石器	チャート	A	C28	Ⅶ	180.88	19781	1.4	1.6	2.0	0.5	
16	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	A	B28	Ⅸ	182.01	18434	2.2	1.9	2.3	0.7	
17	スクレイパー	黒曜石三船	A	C29	Ⅸ	180.90	19619	2.5	1.6	1.8	1.1	
18	スクレイパー	黒曜石三船	A	F23	Ⅶ	175.82	14966	13.4	4.6	3.4	1.3	
19	使用痕剥片	黒曜石上牛鼻	A	F23	Ⅸ	175.25	18570	1.7	1.1	2.0	0.9	
20	剥片	流紋岩	A	B28	Ⅸ	181.66	18340	1.3	2.0	1.4	0.4	
21	剥片	流紋岩	A	B28	Ⅸ	181.97	18430	0.9	1.6	1.6	0.5	
22	剥片	黒曜石上牛鼻	A	B28	Ⅸ	181.99	18431	2.2	2.1	1.7	0.5	
23	剥片	黒曜石上牛鼻	A	B28	Ⅸ	181.88	18437	11.4	3.2	3.6	1.2	
24	剥片	黒曜石上牛鼻	A	F23	Ⅸ	175.77	14970	12.5	2.9	4.1	1.3	

2 VII層の調査

遺構

礫群

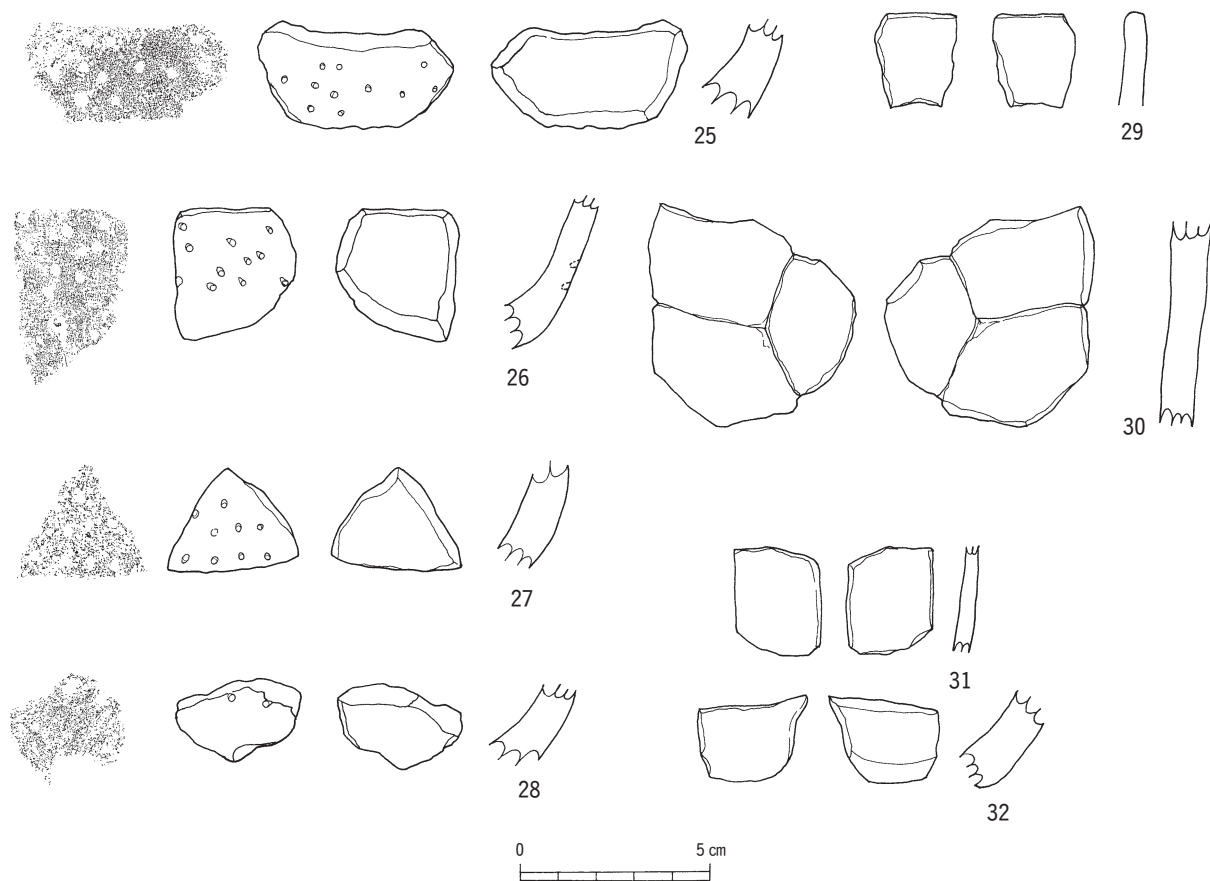
遺構は、C地区から検出された礫群のみである。礫群はC-3区、VII層から検出され、78個の安山岩の円・角礫が2.5m×1.5mの楕円形状の範囲に散在しているもので、炭化物等はみられなかった。また、掘り込みなど土層の変化もみられなかった。



第24図 礫群

遺物

VII層からは、土器と石器が出土した。土器は縄文草創期の突き刺し文と無文土器である。ほとんどの土器がA地区のD-28・30区から出土しているが、C地点のG-5区からも1点出土している。石器は、細石刃・石鏃・石核・打製石斧・剥片・碎片が出土した。

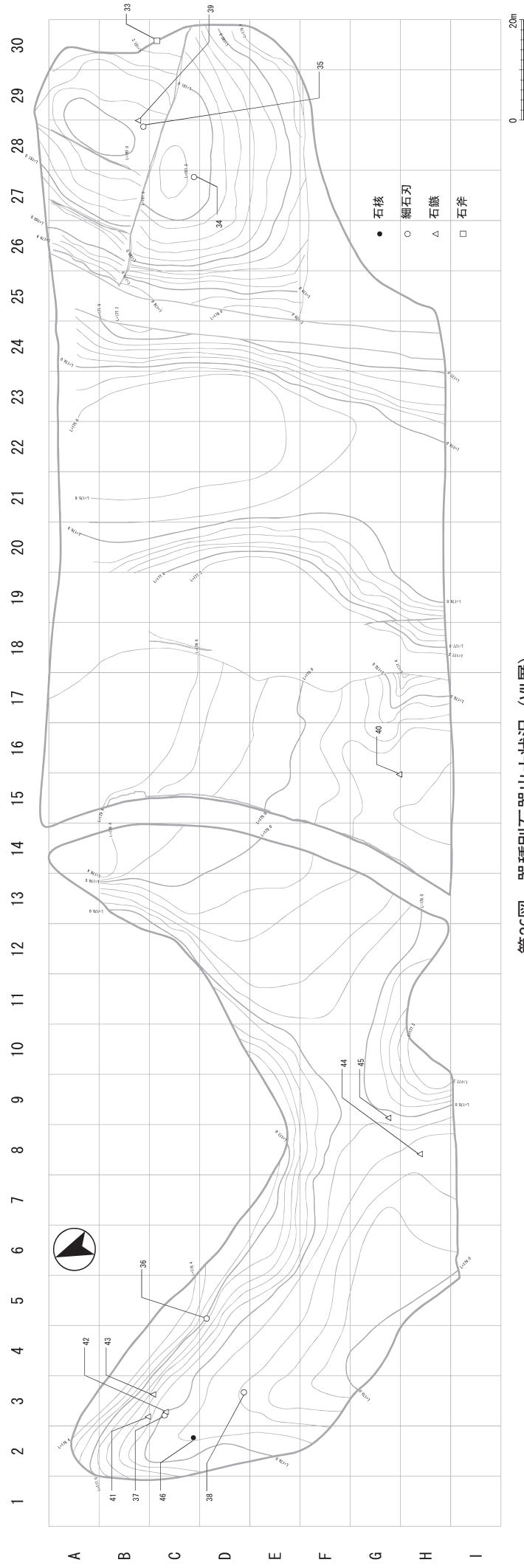


第25図 縄文草創期土器

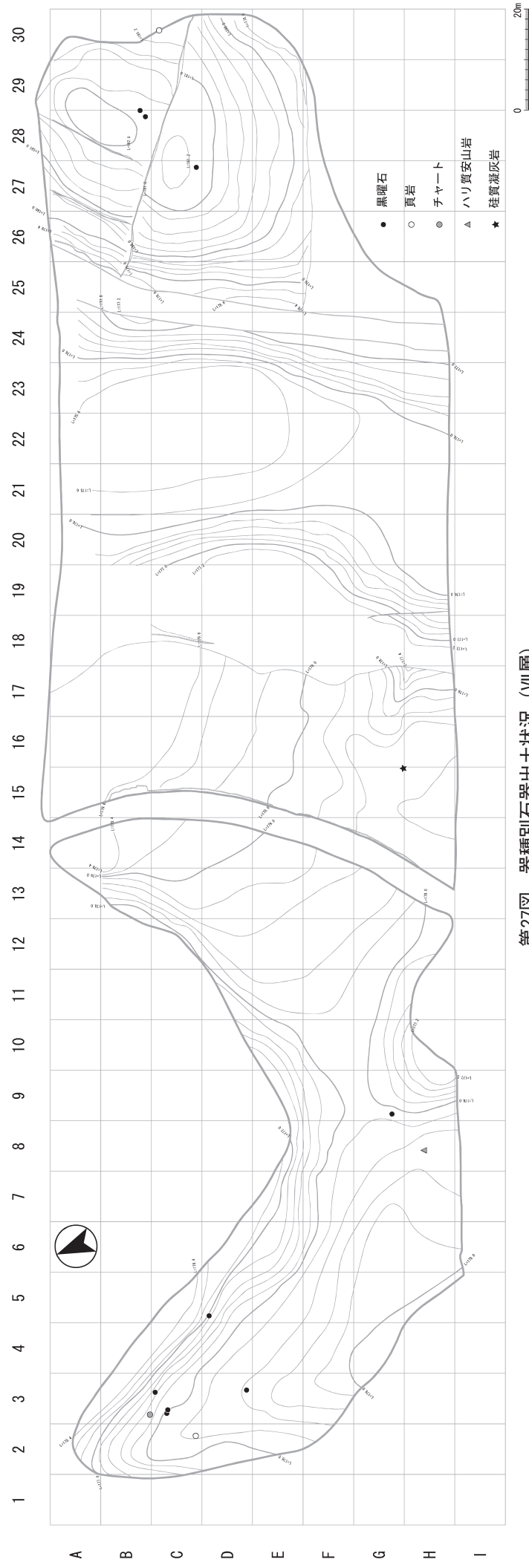
土器

VII層からは8点の土器が出土した。25～28はC・D—28区から出土したもので、表面に鋭利な串状の施文具を斜め方向から突き刺した土器である。不規則な突き刺しを行っている。小片であるため器形の復元は出来なかったが、25・26は底部付近と考えられる。胎土は細砂粒を含み、外面は指ナデを行っている。焼成は27を除いて良好である。

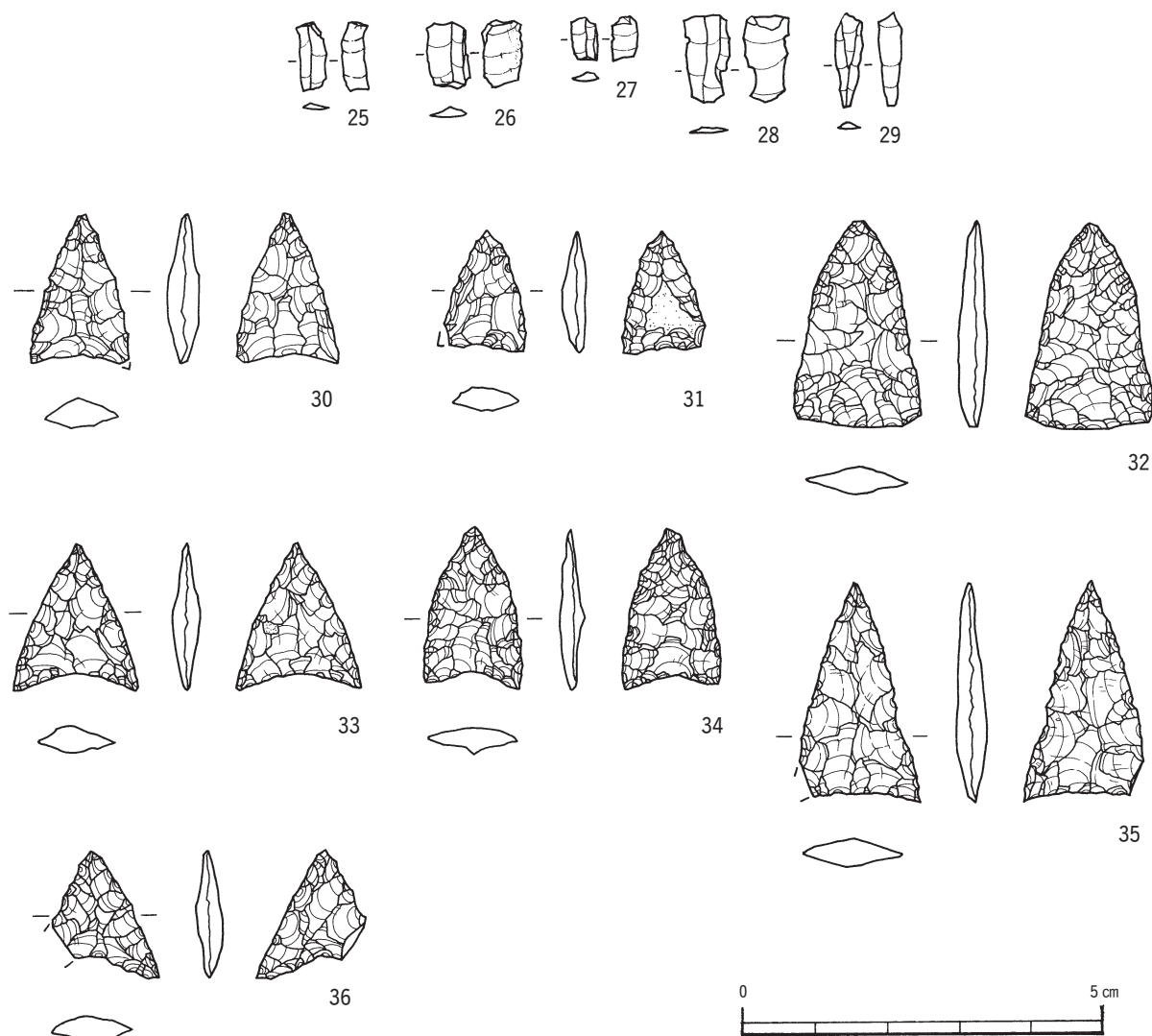
29～32は無文土器である。29は口縁部で、32は底部付近と考えられる。



第26図 器種別石器出土状況（Ⅶ層）



第27図 器種別石器出土状況（Ⅶ層）



第28図 細石刃・石鏃

石器

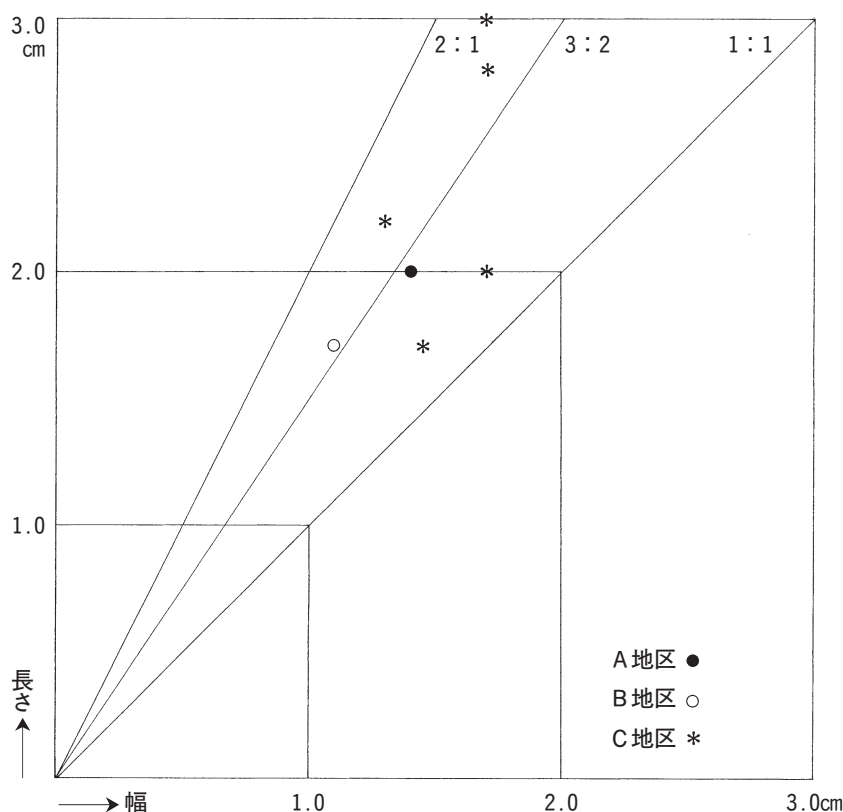
細石刃

25・26はA地区から出土したものである。25は上牛鼻産の黒曜石を用い、頭部を半截し、中間部・尾部を残すものである。両側辺部には使用痕がみられる。26も上牛鼻産の黒曜石で、頭部・尾部を半截し中間部を残すものである。片側辺部に使用痕がみられる。層位はIX層であるが、B-28区はVII～IX層の層位が薄く、また区別が難しかったことからVII層の可能性もある。

27～29はC地区から出土したもので、27は上牛鼻産の黒曜石を用いたもので、頭部・尾部を半截し中間部を残すものである。28は気泡のない透明感のある佐賀県腰岳産の良質の黒曜石を用い、頭部を半截し、中間部・尾部を残すものである。片側辺部には使用痕が認められる。29も気泡のない良質の腰岳産の黒曜石を用い、尾部を半截している。やはり、片側辺部に使用痕がみられる。

石鏃

30は上牛鼻産の黒曜石を素材に用いた石鏃で、薩摩火山灰下位のVII層上部から出土していることから、縄文時代草創期の遺物と想定される。先端部は鋭く、側辺は外弯的で最大幅が下方にある。



第29図 VII層出土石鏃法量相関（長さ×幅）

基部は、逆刺が鋭く、抉りはやや浅い。31は硅質凝灰岩を素材に用いた石鏃でVII層から出土している。先端部は鋭く、側面は外弯的で最大幅が下方にある。基部は片脚が欠損しているが、逆刺が鋭く抉りは浅い。

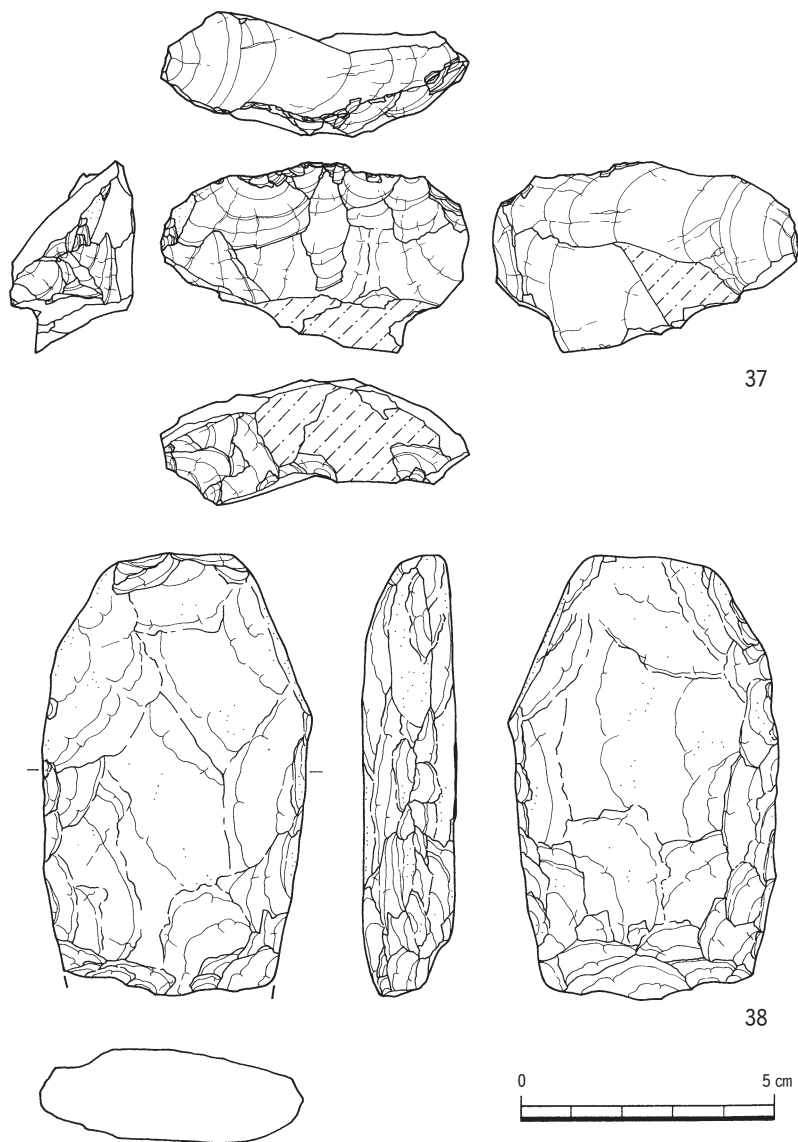
32はチャートを石材に用い、先端部は鋭く側面は外弯的で最大幅が下方にある。

基部は膨らみをもつものである。33は灰褐色の黒曜石を石材に用いたもので、先端部は鋭く側面は外弯的で最大幅が欠損しているが鋭く、側面は外弯し鋸歯状を呈す。基部は片脚が欠損しているが、逆刺が鋭く抉りは浅い。34は腰

岳原産の黒曜石を用いたもので、先端部は欠損しているが鋭く、側面は外弯し鋸歯状を呈す。基部は逆刺が鋭く抉りは浅い。35はハリ質安山岩を石材に用い、先端は欠損しているが鋭く、側面は外弯し鋸歯状を呈す。基部は片脚が欠損しているが鋭く、逆刺が鋭く抉りは浅い。36は姫島の黒曜石を石材に用いたもので、先端は欠損しているが鋭く、側面は直線的である。基部は片脚が欠損しているが抉りは深い。

第5表 VII層出土石器一覧表

番号	器種	石材	地区	区	層	標高	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
38	石斧	頁岩	A	C30	VII	180.55	18270	128.5	8.8	5.3	1.9	
25	細石刃	黒曜石	A	C27	VII	180.72	19570		1.2	0.6	0.1	
26	細石刃	黒曜石上牛鼻	A	B28	IX	181.35	19560		0.6	0.4	0.1	
27	細石刃	黒曜石上牛鼻	C	D5	VII	176.99	43681		0.9	0.6	0.2	
28	細石刃	黒曜石	C	C3	VII	177.63	20015		1.3	0.4	0.1	
29	細石刃	黒曜石腰岳	C	D3	VII	177.92	20006		0.9	0.4	0.1	
30	石鏃	黒曜石上牛鼻	A	B28	VII	181.68	19825	0.9	2.0	1.4	0.4	
31	石鏃	硅質凝灰岩	B	G15	樹根	178.69	62146	0.5	1.7	1.1	0.3	片脚欠損
32	石鏃	チャート	C	B3	VII	177.54	20018	1.7	2.8	1.8	0.4	
33	石鏃	黒曜石灰色	C	C3	VII	177.64	20016	0.7	2.0	1.7	0.4	
34	石鏃	黒曜石西北九州	C	C3	VII	177.31	20017	0.7	2.1	1.3	0.3	
35	石鏃	ハリ質安山岩	C	H8	VII	177.76	38235	1.3	3.0	1.7	0.4	片脚欠損
36	石鏃	黒曜石姫島	C	G9	VII	177.56	38236	0.5	1.7	1.5	0.4	片脚欠損
37	石核	頁岩	C	C2	VII	177.88	20009	45.0	3.6	6.1	2.5	



石斧

38はC-30区から出土した刃部を欠損した打製石斧である。石材は頁岩を素材に用い、側辺部を左右両側縁からの平坦な荒い調整によって、厚みを取り除くように全面を加工したものである。

石核

37はC-2区から出土した石核である。石材は頁岩を素材に用いたもので、4面の剥離痕がみられる。

第30図 石核・石斧

第4節 縄文時代早期（Ⅳ・Ⅴ層）の調査

縄文時代早期の土器は、Ⅳ層からⅤ層にかけて出土した。層ごとに単独の土器型式だけが出土することはなく、様々な型式が出土するという状況であった。しかし、出土傾向は地区ごとに偏りが見られる。したがって、土器は器形や文様などの属性分析によって主に分類を行っている。

各地区の出土状況については、以下のとおりである。なお、それぞれの土器型式の特徴については別途記載する。

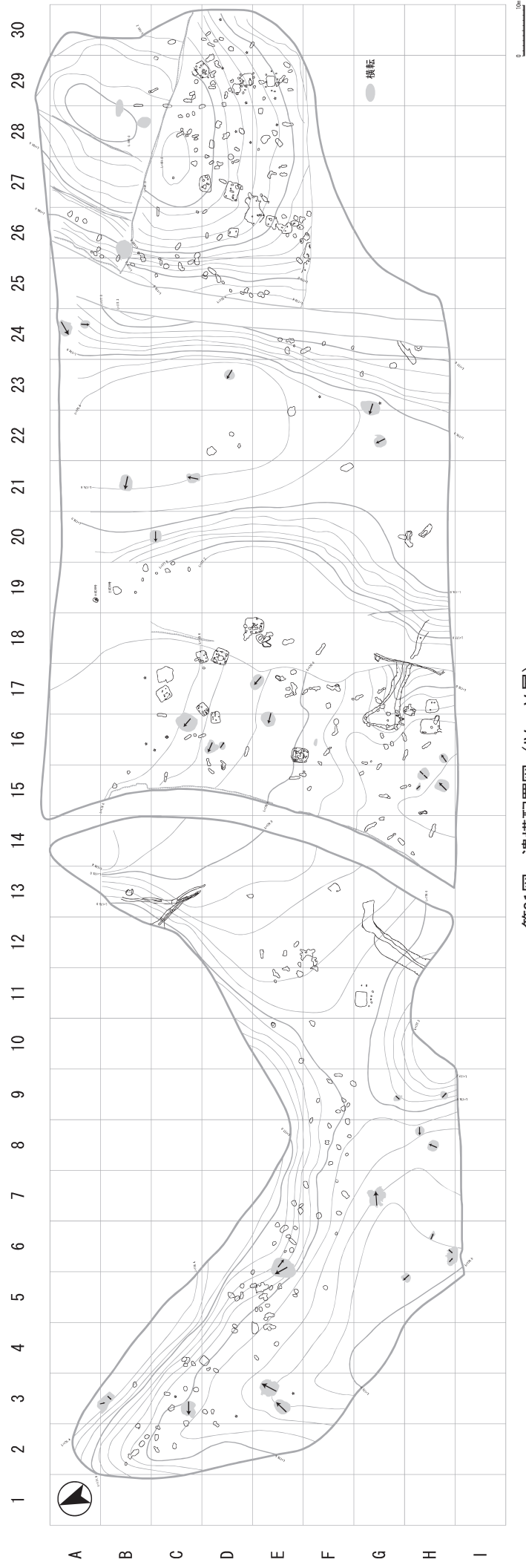
A地区では、特に住居跡周辺から7・8類の土器が大量に出土している。これらは、本地区の中心遺物であると考えられる。また、4類土器等の他の土器型式についても同様の傾向が見られるため、住居との関連性が高いものと思われる。

一方、9、10、11、12類等のように本地区でしか確認できていない土器型式も見られるが、それぞれ1個体もしくは数個体分の遺物量しか確認できないため、当地作製の土器ではなく、搬入土器の可能性が高い。また、本遺跡の中心遺物である2類土器は、ほとんど見られなかった。

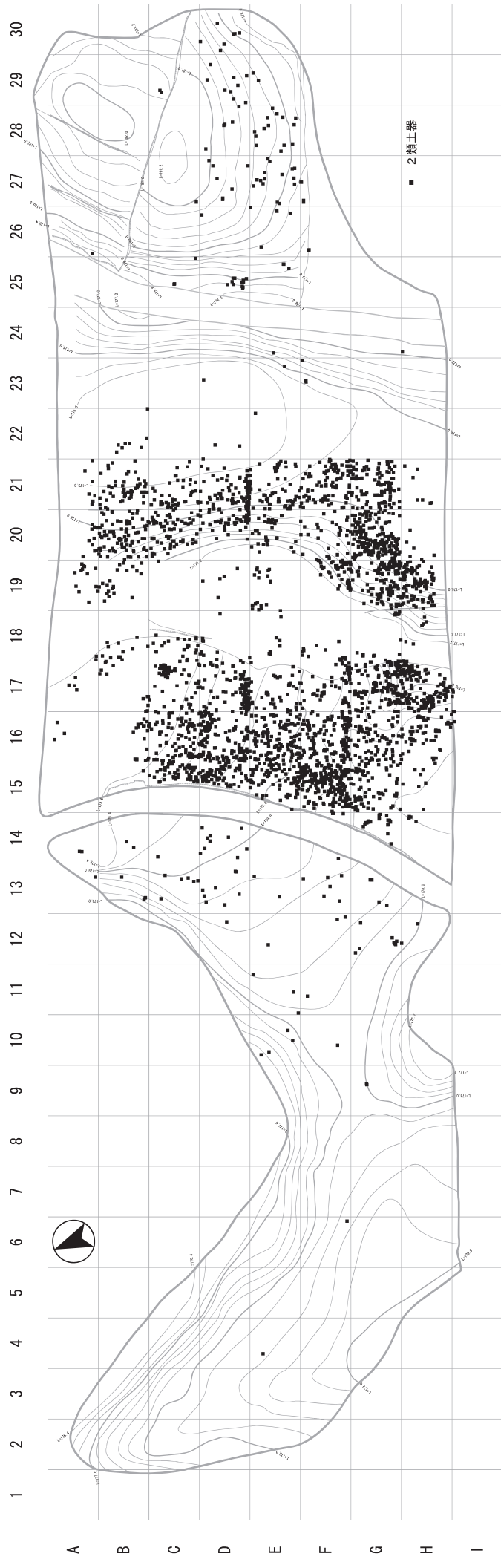
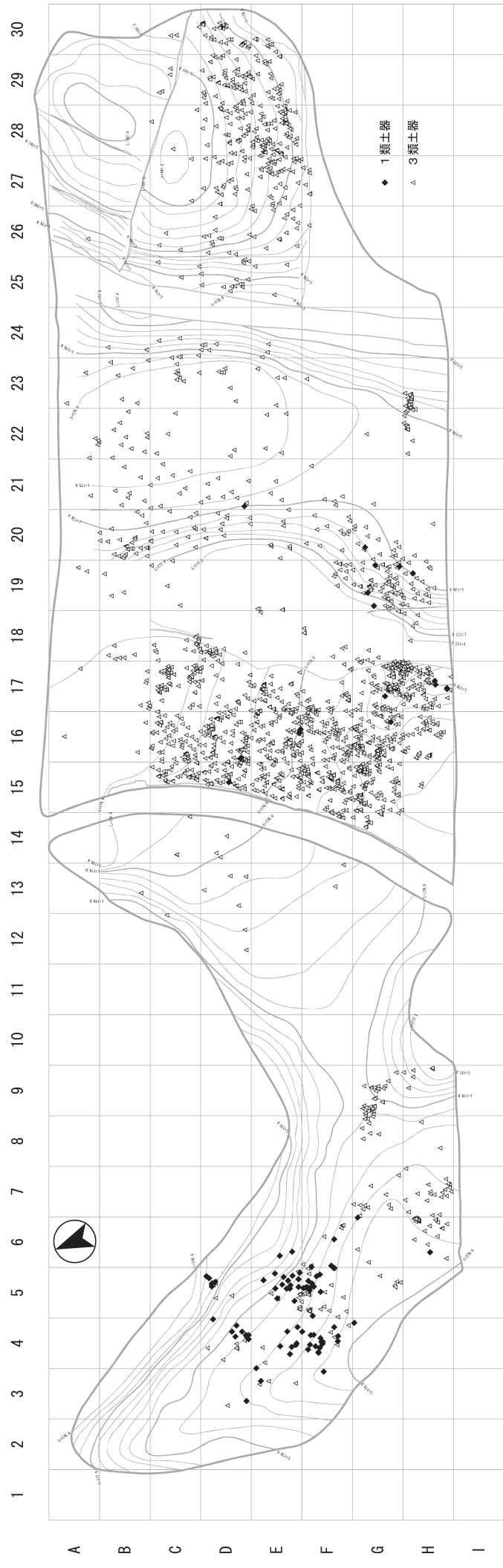
B地区では、道路によって一部削平されてはいるが、地区中央のB-14区～H-21区付近に遺物は集中している。特に2類土器については、遺跡全体から出土した遺物量の40%以上を占めるため、本遺跡の中心遺物であると考えられる。胴部の施文のバリエーションは豊かで、器形が角筒形を呈すると見られるものが大部分であることも特徴の一つである。

なお、他の土器型式については、3類土器が2類土器と同様の範囲から多数出土しているが、これら以外の土器型式については、極めて少量しか確認できていない。

C地区では、他の地区に比べると土器の出土量は極端に少なかったが、土坑周辺を中心として、3類及び4類土器が集中している箇所が確認できた。

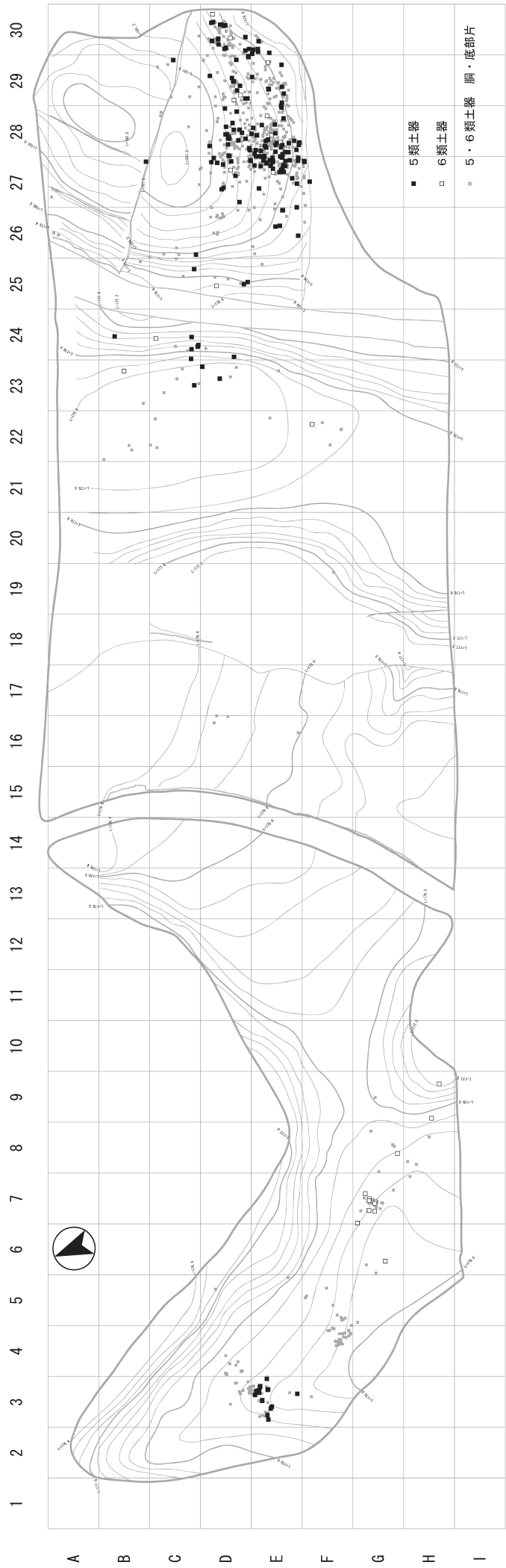
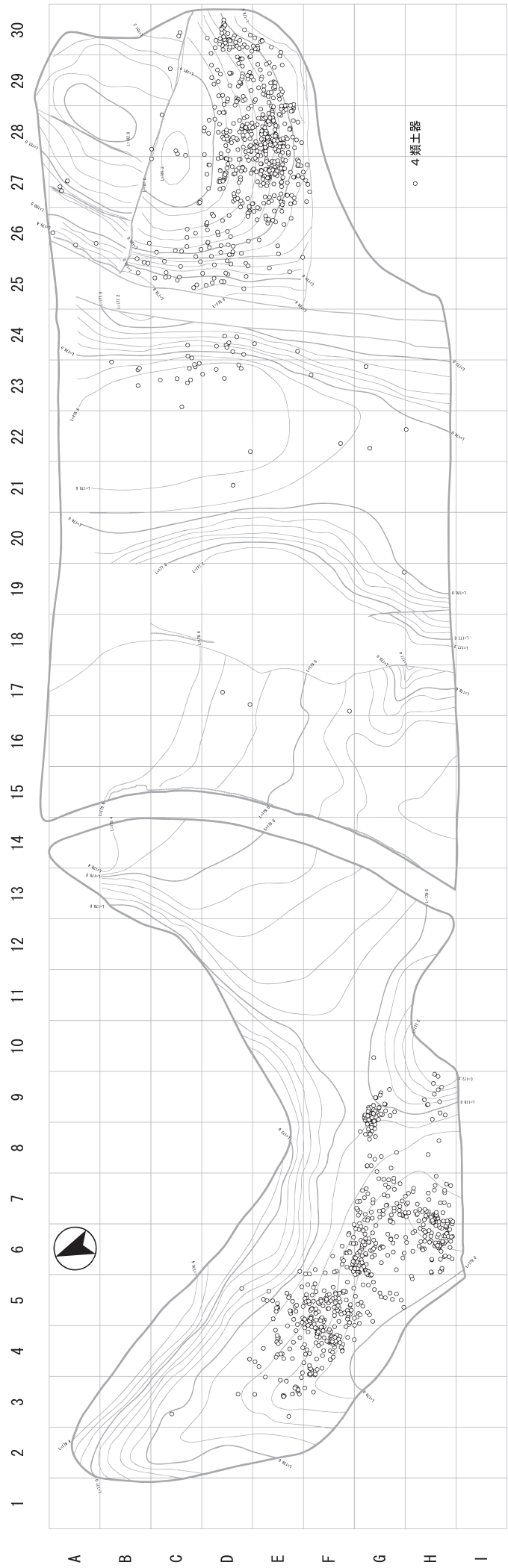


第31図 遺構配置図 (IV・V層)

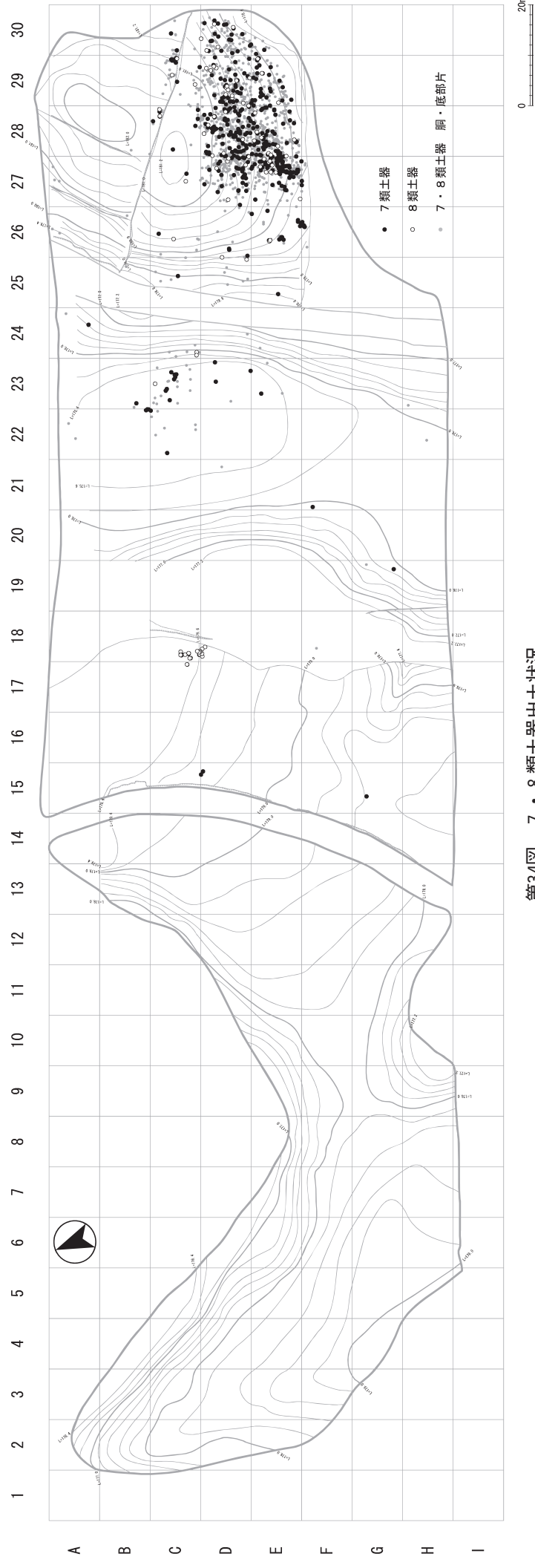


第32図 1～3類土器出土状況

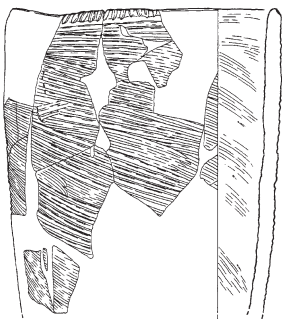
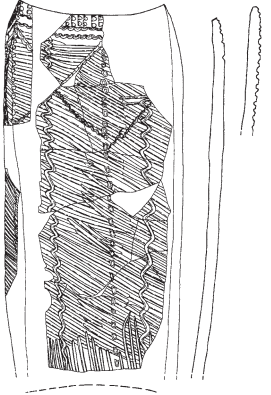
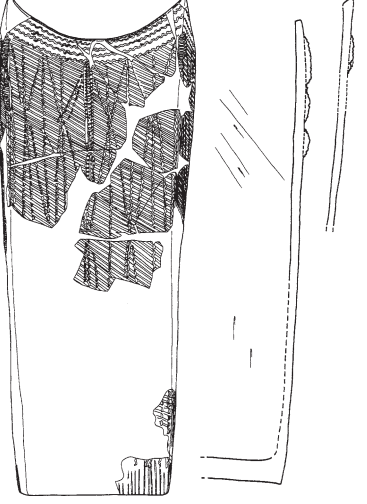
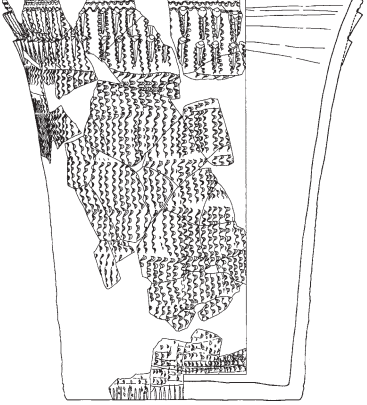
0 20m

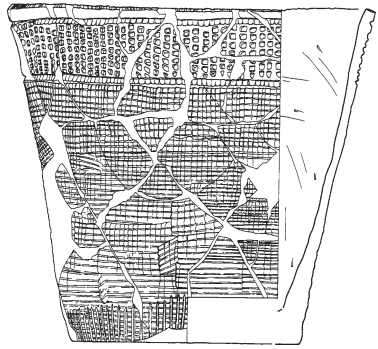
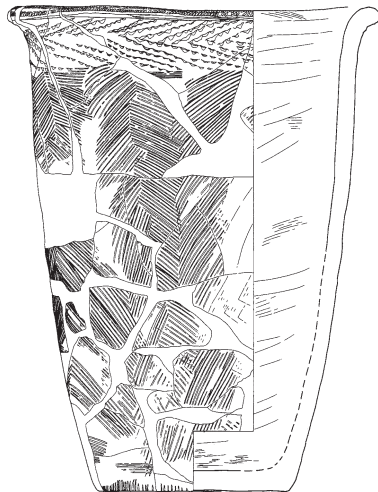
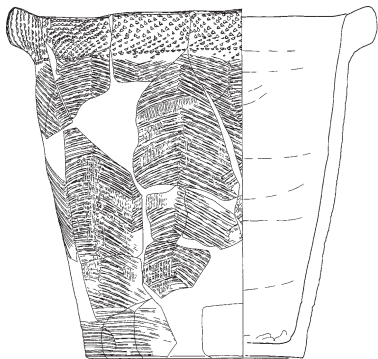


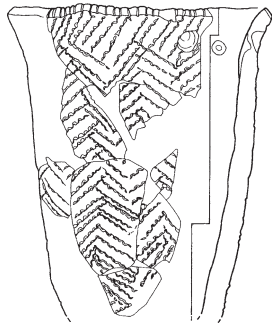
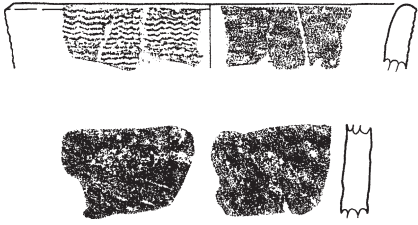
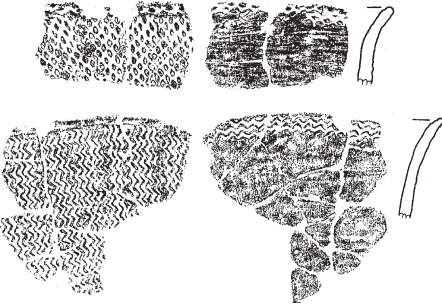
第33図 4～6類土器出土状況



第34図 7・8 類土器出土状況

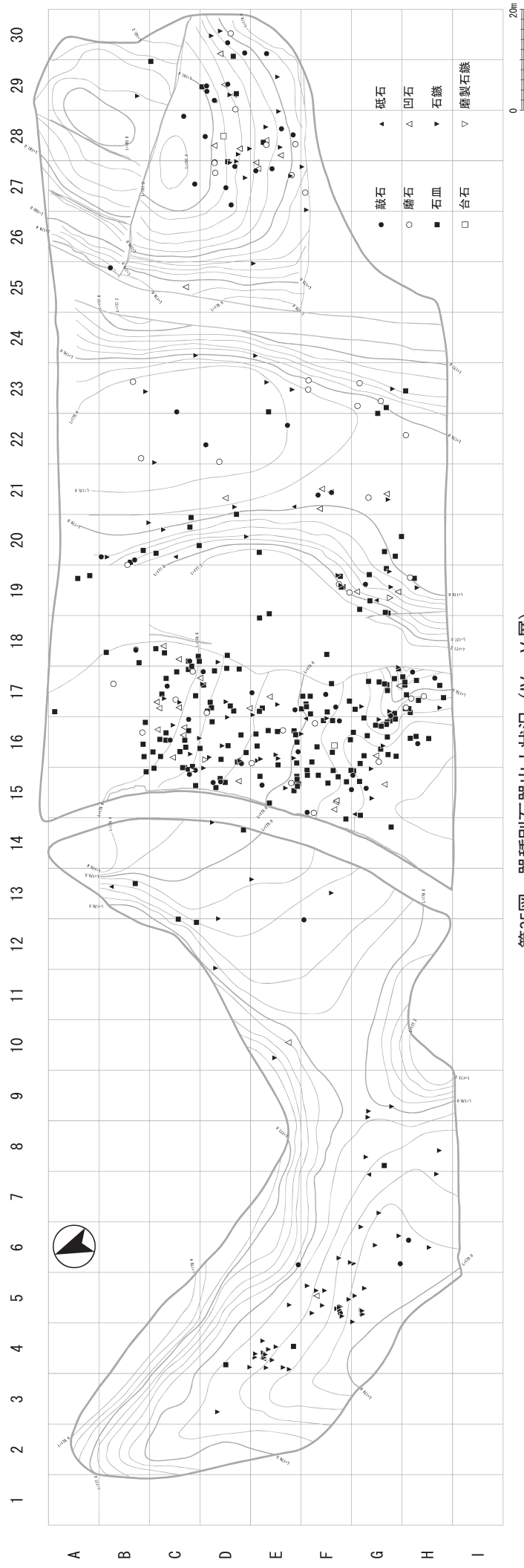
1 類	器形 口縁部がほぼ直線的に立ち上がる円筒形を基本とする。底部は平底である。 文様 口縁部に刺突文をめぐらせ、胴部は貝殻条痕文が全面に施されている。 調整 内面にはケズリ痕が見られ、口縁部では横位、胴部では縦位を基本としている。 土器型式 前平式土器 図番号 第186図など	
2 類	器形 口縁部がほぼ直線的に立ち上がる円筒形と口縁部に4つの波頂部を有する角筒形と、2つの波頂部を有することで口縁部上面観がレモン形を呈するものの他に、円筒形から角筒形へと変化した上角下円タイプの器形も見られる。 文様 口縁部に、貝殻腹縁による押圧文と貝殻刺突文とをめぐらせる。胴部は、貝殻条痕文の上に連点文や貝殻条痕文などを重ねる。 調整 内面にはケズリ痕が見られ、口縁部では横位、胴部では縦位を基本としている。 備考 本遺跡出土土器の約40%を占める。 土器型式 志風頭式土器 図番号 第83図など	
3 類	器形 口縁部から底部に至るまで直線的な器形を呈するが、口縁部がわずかに外反するものもある。円筒形、角筒形、レモン形の3つの器形を有する。 文様 口唇部に刻みを施す。口縁部には貝殻刺突文がめぐる。その下には貼付文が見られるものもある。貼付文は、粘土紐状のものと楔状を呈するものとの2種類がある。胴部は、貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねる。 また、貝殻刺突文が2本1組の単位で構成され、それぞれがある程度の間隔を持って施文されるものも存在する。これは2類の沈線を踏襲しているものとして捉え、霧島市上野原遺跡でまとまって出土しており、今回上野原タイプと称して報告している。 調整 内面にはケズリ痕が見られ、口縁部では横位、胴部では縦位を基本としている。貼付文の付くものでは、このケズリの後にミガキ状の調整が丁寧に施されている。 土器型式 加栗山式土器 図番号 第87図など	
4 類	器形 口縁部が外反し、胴部は直線的に底部へ至る筒形の器形を呈する。 文様 口唇部に刻みを施す。口縁部には貝殻刺突文がめぐる。その下には貼付文が見られるものがある。胴部は、貝殻刺突文もしくは貝殻押圧文を密接に施す。 調整 内面にはケズリ痕が見られ、口縁部では横位、胴部では縦位を基本としている。貼付文の付くものでは、このケズリの後にミガキ状の調整が丁寧に施されている。 土器型式 小牧3Aタイプ 図番号 第90図など	

5 類	器形 口縁部が外反し、胴部は直線的に底部へ至る筒形の器形を呈する。 文様 口唇部に刻みを施す。口縁部には貝殻刺突文がめぐる。その下には、貝殻刺突文をV字状などに密接に施文することで楔状を意識したものとなっている。胴部は、貝殻押引文が展開する。 調整 内面は丁寧にナデが施され、特に口縁部内面は横位のナデが顕著に観察できる。 土器型式 吉田Ⅱ式土器 図番号 第94図など	
6 類	器形 口縁部が外反し、胴部は直線的に底部へ至る筒形の器形を呈する。 文様 口唇部に刻みを施す。口縁部には貝殻刺突文がめぐる。その下には、胴部文様である貝殻押引文が見られ、楔状あるいはそれを意識した貝殻刺突文などは見られない。 調整 内面は丁寧にナデが施され、特に口縁部内面は横位のナデが顕著に観察できる。 土器型式 吉田Ⅲ式土器 図番号 第97図	
7 類	器形 口縁部が外反し、頸部でやや締まり胴部でわずかに膨らみつつ底部へ至る。口縁部は、平口縁と波状口縁になるものの2種類が見られる。 文様 外反する口唇部と底部に米粒状の刻みが施され、口縁部には、貝殻刺突文が横位や「く」字状などに施される。胴部は、貝殻条痕文による綾杉文を全面に施すが、中には、この前に縦位の貝殻条痕文を施すものもある。 調整 内面は丁寧にナデが施され、特に口縁部内面は横位のナデが顕著に観察できる。 土器型式 石坂Ⅰ式土器 図番号 第101図など	
8 類	器形 口縁部が直行し、直線的な胴部を経て平底の底部へ至る。全体的な器形はややバケツ形を呈する。口縁部に、瘤状突起が付くものもある。 文様 7類と大差なく、胴部片のみでは両者の区別は困難である。 調整 内面は丁寧にナデが施され、特に口縁部内面は横位のナデが顕著に観察できる。 土器型式 石坂Ⅱ式土器 図番号 第109図など	

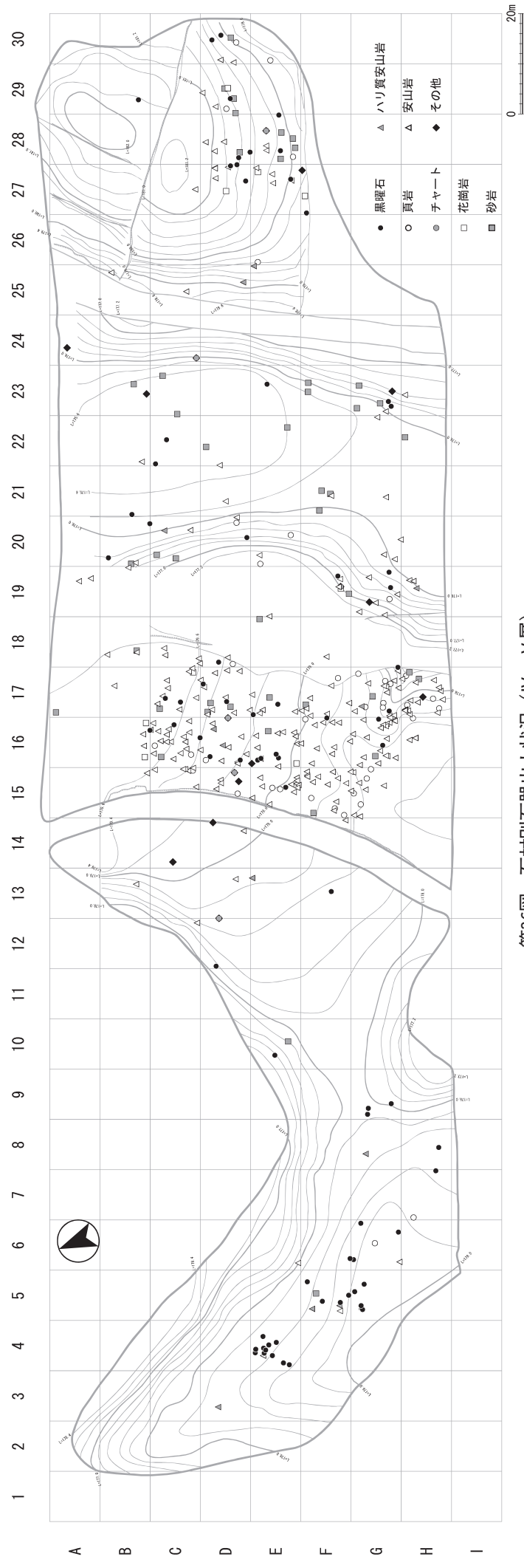
9 類	器形 口縁部が直行ないしわずかに内湾する。胴部は直線的もしくはやや締めながら底部へ至る筒形の器形を呈する。 文様 口縁部から底部に至るまで貝殻刺突文のみで構成されるものである。 調整 内面はケズリを基本とする。 土器型式 下剥峯式土器 図番号 第113・114図	
10 類	器形 口唇部がやや丸みを呈する。胴部でわずかに膨らんで平底の底部へ至る。 文様 文様は、口縁部に集約されている。口縁部に、横位に条痕文がめぐる。資料によってはこの条痕文が小波状を呈しているものも見られる。 調整 内面調整は丁寧なナデが施されている。 備考 角閃石を含む資料が多い。 土器型式 中原式土器 図番号 第115図	
11 類	器形 口唇部には平坦面を有し、口縁部が外反する。胴部は膨らんで、平底の底部へとやや曲線的に至るものと思われる。 文様 外面及び口唇部、口縁部内面に押型文を施す。楕円文と山形文の2種類が出土している。押型文は、口縁部では縦位に、胴部では横位ないし斜位に施されている。 調整 内面調整は丁寧なナデが施されている。 土器型式 押型文土器 図番号 第115・116図	
12 類	器形は、口縁部断面は三角形状を呈する。口縁部は外反し、頸部で締め胴部は膨らんで上げ底状の底部へと移行する。文様は、沈線文と連点文を組合せることで幾何学的な文様構成が見られる。胴部には結節縄文が施される。内面調整は丁寧なナデが施される、 土器型式 平椀式土器 図番号 第117図	
13 類	器形は、口縁部が外反し、胴部内面に稜線を残すものと、口縁部が直行し胴部がわずかに膨らむものがある。文様は、撚糸文系と貝殻腹縁による刺突連点文、貝殻腹縁またはへう描きによる菱形格子文を施す貝殻文系に別れ、それぞれさらに細分される。内面調整はナデが施される。 土器型式 塞ノ神式土器 図番号 第117図など	
14 類	器形は、口縁形態が波状口縁もしくは平口縁を呈し、口唇部を丸く収め、口縁部は肥厚せずそのまま外反するものと、口唇外面に小さな三角形の突帯をめぐらすものがある。文様は、口縁部文様帯から頸部文様帯にかけて刻目突帯をめぐらす。また、突帯部に刻みを横位方向へ羽状に施すもの、胴部文様帯に単節斜行縄文を施すものも見られる。内面調整はナデが施される。小破片しか確認できないので土器型式を断定することは難しいが、妙見式または天道ヶ尾式土器に相当するものと思われる。 土器型式 妙見式または天道ヶ尾式土器 図番号 第331図	
15 類	器形は、口縁部は直行し、口唇部は平坦に仕上げて内傾する。また、口唇部内側には明瞭な稜を有し、断面は三角形を呈する。文様は、貝殻腹縁やへう状工具で短線の引き描きで綾杉文を施すが、平坦な口唇部には文様は施さない。器壁の厚さは均一で比較的整っている。内面調整はミガキが施される。 土器型式 桑ノ丸式土器 図番号 第278図	

第6表 縄文石器 器種・層位別分類表（前原遺跡）

器 種	A 地 区			B 地 区			C 地 区			計		総 計
	層	数量	計	層	数量	計	層	数量	計	層	数量	
石 鍬	III	32	56	III	26	69	III	5	39	III	63	164
	IV	16		IV	20		IV	30		IV	66	
	V	8		V	23		V	4		V	35	
磨 製 石 鍬	III			III	7	10	III			III	7	10
	IV			IV	2		IV			IV	2	
	V			V	1		V			V	1	
石 槍	III		1	III		3	III			III		4
	IV			IV	3		IV			IV	3	
	V	1		V			V			V	1	
石 匙	III	2	3	III		1	III			III	2	4
	IV	1		IV	1		IV			IV	2	
	V			V			V			V		
スクレイパー	III	1	4	III		1	III			III	1	5
	IV	2		IV	1		IV			IV	3	
	V	1		V			V			V	1	
石 錐	III			III	2	2	III			III	2	2
	IV			IV			IV			IV		
	V			V			V			V		
三日月形石器	III	1	1	III		2	III			III	1	3
	IV			IV			IV			IV		
	V			V	2		V			V	2	
楔 形 石 器	III			III		1	III			III		1
	IV			IV	1		IV			IV	1	
	V			V			V			V		
使用痕石器	III		1	III	1	1	III			III	1	2
	IV	1		IV			IV			IV	1	
	V			V			V			V		
磨 製 石 斧	III		4	III	2	23	III		1	III	2	28
	IV	4		IV	10		IV	1		IV	15	
	V			V	11		V			V	11	
研 磨 石 器	III		1	III		5	III			III		6
	IV	1		IV	1		IV			IV	2	
	V			V	4		V			V	4	
打 製 石 斧	III			III	2	10	III	1	1	III	3	11
	IV			IV	4		IV			IV	4	
	V			V	4		V			V	4	
礫 器	III			III	1	4	III			III	1	4
	IV			IV	2		IV			IV	2	
	V			V	1		V			V	1	
凹 石	III		10	III	2	28	III		2	III	2	40
	IV	4		IV	10		IV	2		IV	16	
	V	6		V	16		V			V	22	
敲 石	III		18	III	1	19	III			III	1	37
	IV	11		IV	8		IV			IV	19	
	V	7		V	10		V			V	17	
磨 石	III		12	III	4	21	III		3	III	4	36
	IV	6		IV	4		IV	3		IV	13	
	V	6		V	13		V			V	19	
砥 石	III			III	1	5	III			III	1	5
	IV			IV	1		IV			IV	1	
	V			V	3		V			V	3	
台 石	III		1	III		1	III			III		2
	IV			IV			IV			IV		
	V	1		V	1		V			V	2	
石 皿	III	1	8	III	11	144	III		2	III	12	154
	IV	3		IV	51		IV	2		IV	56	
	V	4		V	82		V			V	86	
計	120			350			48			総計 518		



第35図 器種別石器出土状況 (IV・V層)



第36圖 石材別石器出土狀況 (IV・V層)

A 地 区

1 A地区の調査

平成3年に確認調査を行った。まず、STA.235とSAT.240を基準に10m間隔の区割りを設定し、西側より1～30区、北側よりA～I区と名称した。調査区が広いため地形の沿って、東からA地区(22～30区)、B地区(10～21区)、C地区(1～9区)の3か所に調査区域を設定した。工事の関係で調査区番号と地区番号に齟齬が生じた。

A地区の確認調査は、8m×2m=2か所、10m×2m=1か所、18m×2m=1か所でおこなった。その結果、縄文時代後・晩期の土器・石器がⅢ層から、縄文時代早期の土器・石器がⅣ・Ⅴ層から出土した。

確認調査の成果を踏まえて、平成3年10月から本調査を行った。平成3年度は2,500㎡であるが、約11,000点の遺物が出土している。Ⅲ層からは2,182点で、その内訳は土器片1,827点、石器及び石片168点、礫187点である。Ⅳ層からは5,761点で、土器片3,997点、石器及び石片169点、礫1,595点である。Ⅴ層からは総数2,755点で、土器片1,709点、石器等77点、礫969点である。

Ⅲ層の土器は縄文後・晩期のもので、黒色研磨土器・組織痕文土器が主体となっている。Ⅳ・Ⅴ層の土器は縄文時代早期のもので、志風頭式・加栗山式・吉田式・石坂式土器が主体となり、ほとんど円筒形土器であるが、一部角筒土器が出土している。

石器は、石鏃・石匙・磨石・石皿・剥片が出土した。また、石材については、黒曜石・チャート・頁岩・鉄石英・安山岩・砂岩がみられた。

遺構については、集石・竪穴住居跡・土坑が検出されたが、平成4年度に継続して調査を行った。

平成4年度は、早期集落の精査および集落部分の下層の調査を行った。調査面積は3,900㎡である。その結果、Ⅷ・Ⅸ層からナイフ形石器文化、Ⅶ層から細石刃文化～縄文時代草創期の遺物が出土した。

遺構も多数検出されているが、特筆されるのは縄文時代早期前半の集落形態についての情報が多く得られたことである。

A地区では、12基の竪穴住居跡が略馬蹄形に検出され、その周辺に集中する約130基の土坑群(連穴土坑・落し穴)、10基の集石遺構と合わせて、極めて注目される集落形態を有することが確認された。

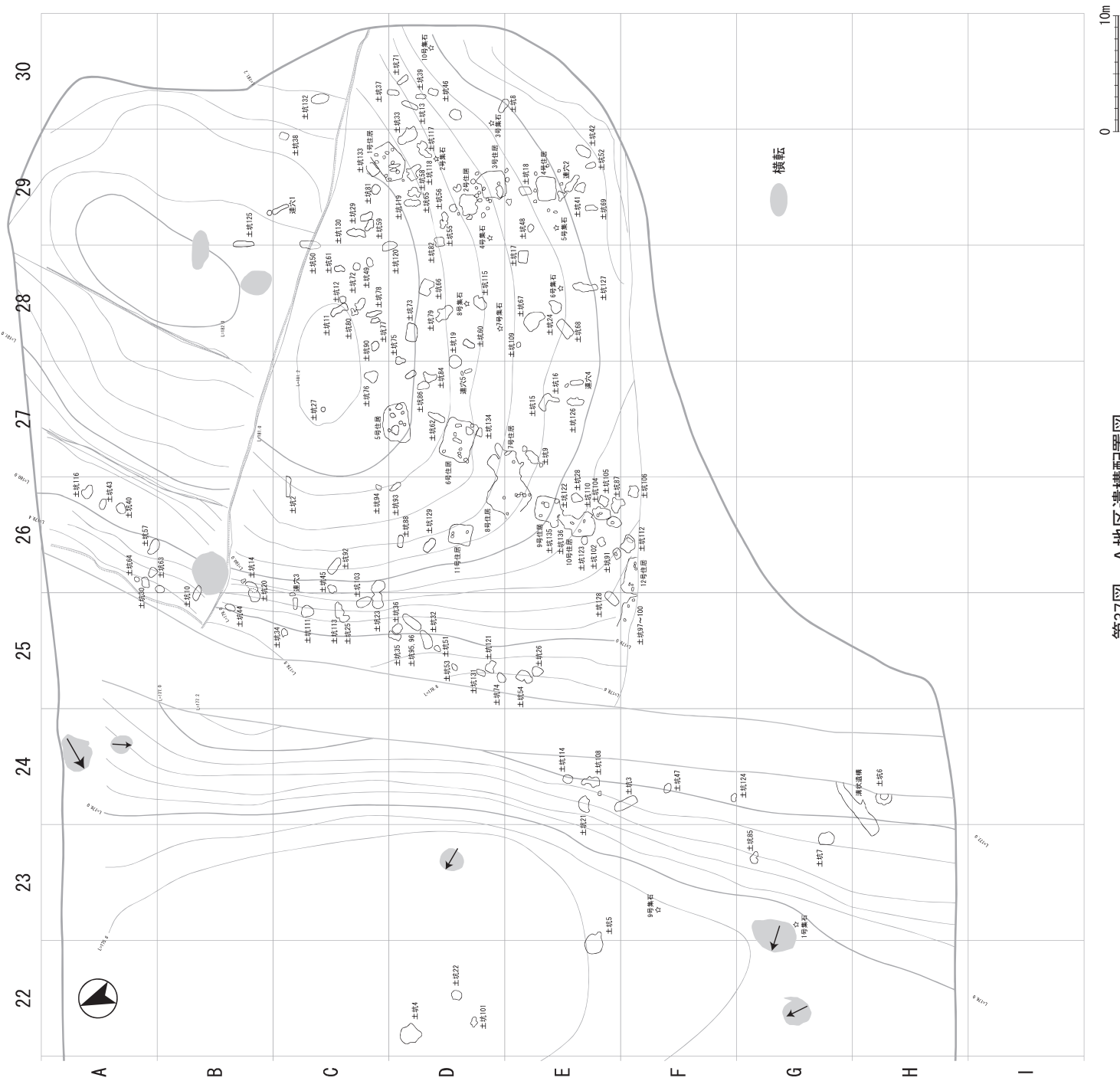
平成5年度の調査面積は、7,300㎡であった。

昨年からの継続調査の、縄文時代早期前半の遺構群の検出。未調査部分および「薩摩火山灰」より下層の調査を行った。

その結果、縄文時代早期に2時期、縄文時代草創期、旧石器時代の4文化層が確認され複合遺跡であるという結果が得られた。

A地区においては、約2万点の遺物が出土している。旧石器時代では、三稜尖頭器・台形石器・ナイフ形石器等が出土し、「薩摩火山灰」の下から縄文時代草創期の土器と石鏃が出土した。土器は出土例がないもので、鋭い串状の施文具で突き刺して文様としたものである。

縄文時代早期は多くの遺物と多彩な遺構が確認された。竪穴住居跡12軒、集石13基、連穴土坑5基、土坑136基が検出された。このように、縄文時代早期の集落形態について多くの情報が得られ、また、草創期から旧石器時代について、層位的に把握できたことは大きな成果であった。



第37図 A地区遺構配置図

(1) 竪穴住居跡

前原遺跡のA地区からは、12基の竪穴住居跡が検出された。これらは、いずれも方形を基本とする平面プランをもつもので、後述する本遺跡のB、C地区で検出された竪穴住居跡とほぼ同じ様相を呈している。

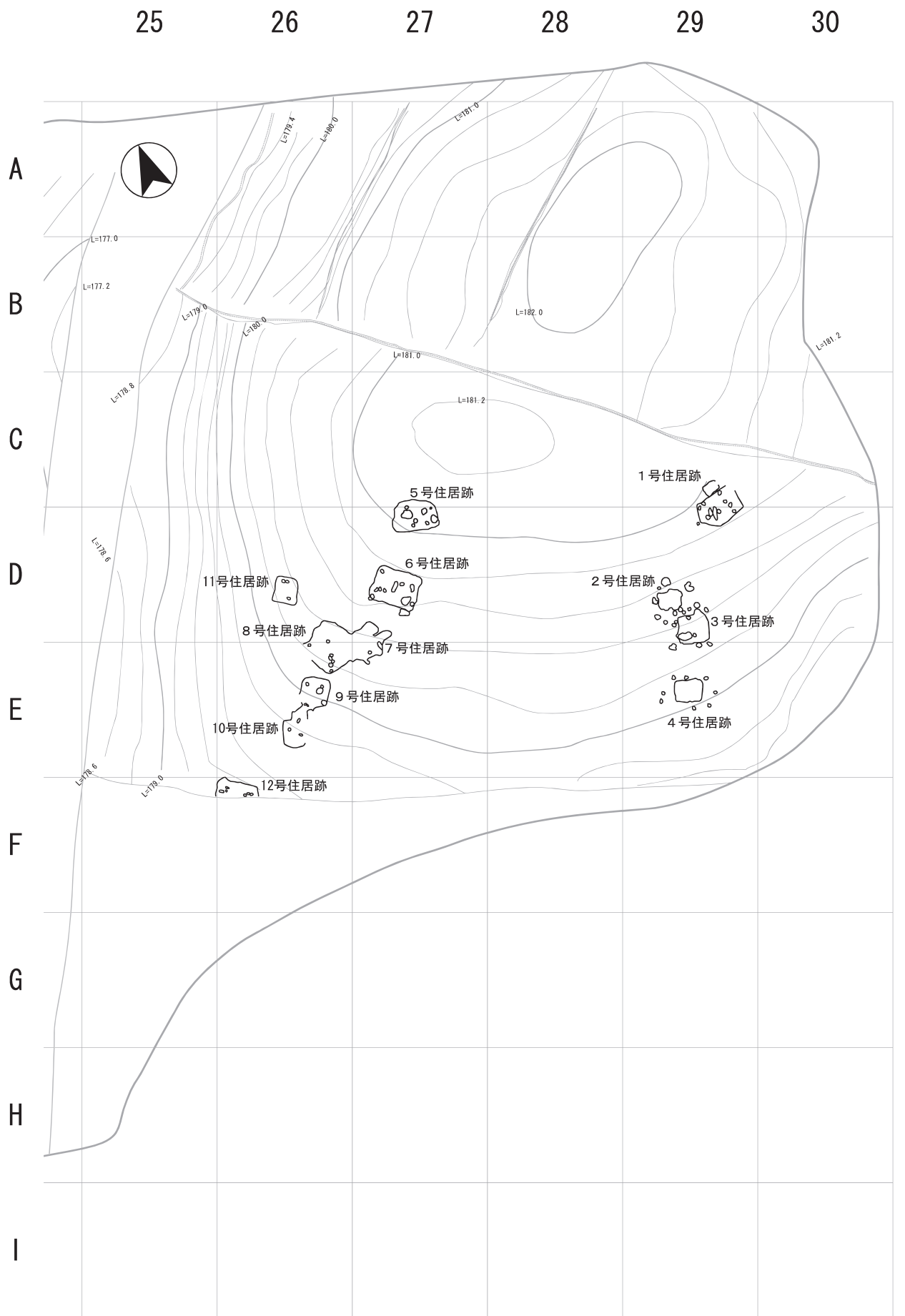
第38図からもわかるように、12基は4基、8基に分かれ、「ハ」の字形にほぼ並んで検出された。それぞれの列で、近接や重複がみられることから、12基すべてが同時に存在したわけではないが、ある一定時間の中で、土地利用に関する何らかの意識が働いていた可能性は高いと考えられる。具体的な時期設定については、遺構内出土遺物に2類（志風頭式）土器、3類（加栗山式）土器、6類（吉田Ⅲ式）土器、7類（石坂Ⅰ式）土器などがあり、ある程度の参考にはなるが、全体的に量が少なく、良好な資料が少ないために、決め手に欠けるのが現状である。A地区の遺物包含層出土の土器型式の在り方も含めて検討する必要があるだろう。

竪穴住居跡の床面積を平均すると、5.14㎡となる（欠損部の多い12号は含まない）。比較的大型の1、5、6、8号とその他に分類されそうであるが、注目される遺構に2、3、4号がある。これらは、それぞれ2.05、4.41、2.9㎡と、住居跡としては狭小な遺構であるが、柱穴状のピットが遺構の周囲を巡っているという特徴がある。後年調査された、国分市（現霧島市）の上野原遺跡で検出されて注目された形態に類似するもので、中央の竪穴と周囲のピット群を含めた空間を遺構内として捉えれば、他の大型の住居跡と同様な規模が得られる可能性がある。

住居跡のイメージは、竪穴遺構だけが目立って出来上がる場合が多い中、これら3基の検出は、周辺部の状況をセットとして捉え直す必要性を示してくれた事例といえよう。

第7表 A地区検出の竪穴住居跡

遺 構 名	検 出 区	平 面 形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 からの 深さ (cm)	床面積 (㎡)	炉跡	ピット	遺物 総数	挿図 番号	備 考
1号竪穴住居跡	C・D29	隅丸長方形	342	238	28	(6.69)	無	14	86	39	133号土坑と近接、一部欠
2号竪穴住居跡	D29	方形	168	160	35	2.05	無	0	22	40	周囲にピット（9個）あり
3号竪穴住居跡	D・E29	隅丸方形	237	199	38	4.41	無	3	13	41	周囲にピット（8個）あり
4号竪穴住居跡	E29	隅丸方形	206	153	32	2.9	無	0	28	42	周囲にピット（8個）あり
5号竪穴住居跡	C・D27	隅丸長方形	318	228	28	6.74	無	8	9	43	
6号竪穴住居跡	D27	長方形	334	258	27	8.13	無	12	27	44	
7号竪穴住居跡	D・E26・27	隅丸方形	240	(230)	40	(4.62)	無	1	17	45・46	8号住居跡、134号土坑と重複
8号竪穴住居跡	D・E26・27	隅丸方形	360	340	24	(9.91)	無	7	11	45・46	7号住居跡と重複、一部欠
9号竪穴住居跡	E26	隅丸方形	281	208	32	3.8	無	4	無	47	135号土坑と重複、一部欠
10号竪穴住居跡	E26	隅丸方形	210	180	25	(3.32)	無	2	2	48	123、136号土坑と重複、一部欠
11号竪穴住居跡	D26	方形	225	194	18	3.99	無	3	無	49	
12号竪穴住居跡	F26	(長方形)	320	125	21	3.9+ α	無	6	無	49	一部（半？）欠



第38図 A地区検出の竪穴住居跡位置図

① 1号竪穴住居跡

1号はC・D29区で検出された。北東隅を現代の芋穴でカットされているが、ほぼ隅丸の長方形の平面プランをもつ。A地区検出の竪穴住居跡の中では大型の部類に入る。東西2列に分かれる住居跡列の東側にあり、その中では最も北に位置している。

床面で13個のピットが検出されているが、主柱の有無についての決め手はない。平行に近接して検出された133号土坑（方形）も注目される。土坑の機能はもちろん、この土坑も含めた空間が住居空間である可能性も含め、検討すべき形態であろう。

比較的多く出土した遺物は、床面から浮いた状態のものがほとんどであった。目立つのは、2類（志風頭式）土器で、円筒と角筒土器片が出土している。また、7、8類の石坂式土器片も出土しており、遺構の時期設定が難しい状況である。

② 2号竪穴住居跡

2号はD29区で3号と近接して検出された。床面積約2㎡の小型方形竪穴である。注目されるのは、竪穴の周囲に9個の柱穴状ピットが巡っていることである（ちなみに竪穴内にはピット無し）。これらのピットを竪穴とセットとして捉えられるかという問題もあるが、ピットを取り込んだ空間は約3m四方となり、大型の住居跡とほぼ同様な面積となる。

出土遺物には6類（吉田Ⅲ式）土器がある。胴部の押引文が明瞭な資料であるが、口唇部の浅い刻みなどは、7類（石坂Ⅰ式）土器に近い様相がみられる土器である。

③ 3号竪穴住居跡

3号はD・E29区で2号と近接して検出された。床面積約4.4㎡の隅丸方形竪穴である。床面に3個のピットがみられるが、2号と同様に竪穴の周囲にも柱穴状ピット（8個）が巡っている。それらも取り込んだ空間は、3.2×3.5m程度の広さがあり、やはり大型住居跡と同規模の面積となる。近接している2号との同時存在は不可能であろう。

④ 4号竪穴住居跡

4号はE29で検出された。床面積約3㎡の長方形竪穴である。東側住居跡列（計4基）の中で、最も南に位置する住居跡である。

床面でピットは検出されていないが、竪穴の周囲に8個の柱穴状ピットがあり、前述した2、3号と同じ様相を呈している。竪穴の東南部で近接して検出された2号連穴土坑とピットが重複している可能性もあり、竪穴部周辺のピットは2間×2間の掘立柱建物跡状の柱配置も想定される。棟持柱的なP2、P6が若干外へ開いていることから、六角形の柱配置も考えられ注目される。

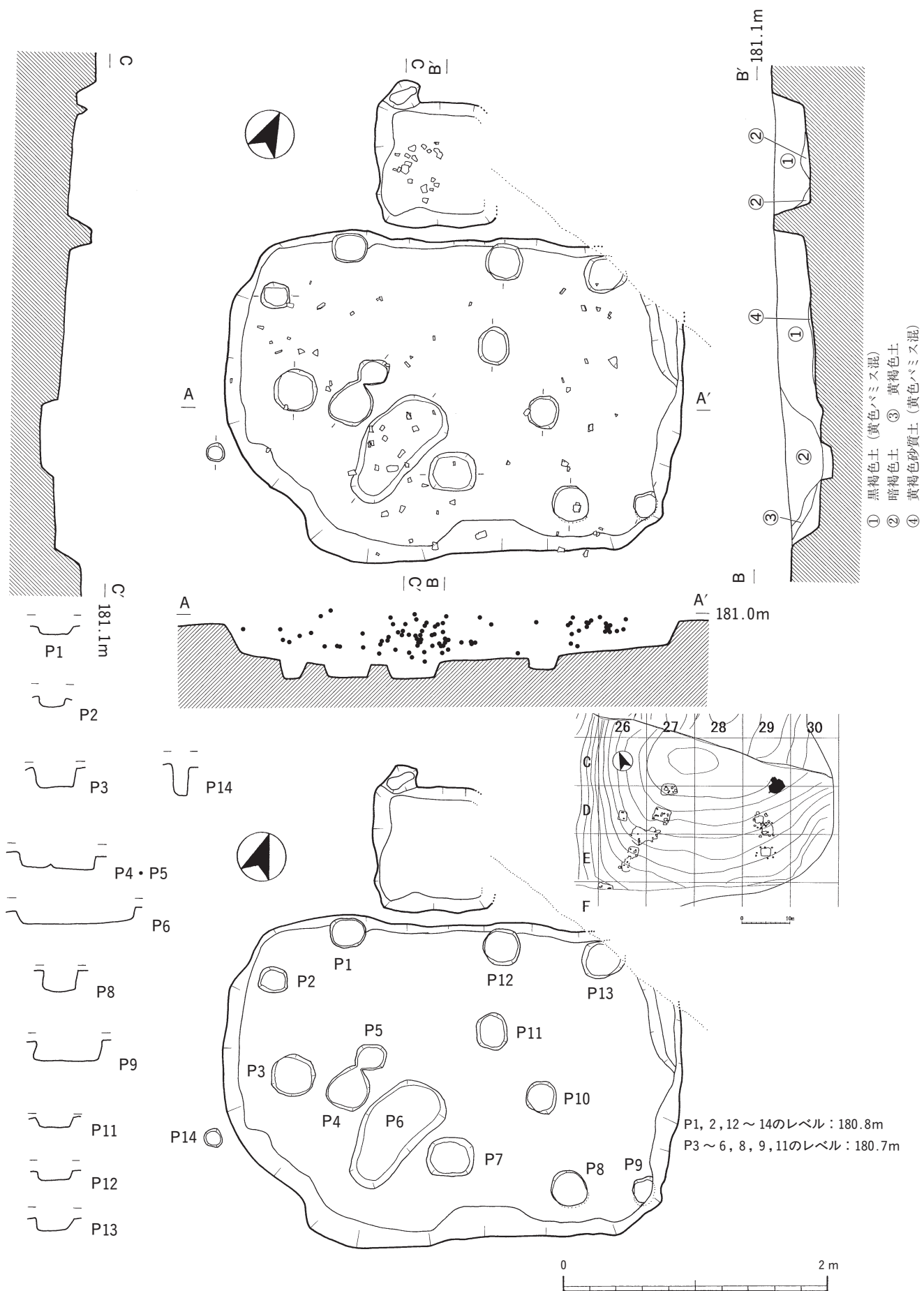
遺物は小片で図化できなかったが、7類（石坂Ⅰ式）土器が出土している。

⑤ 5号竪穴住居跡

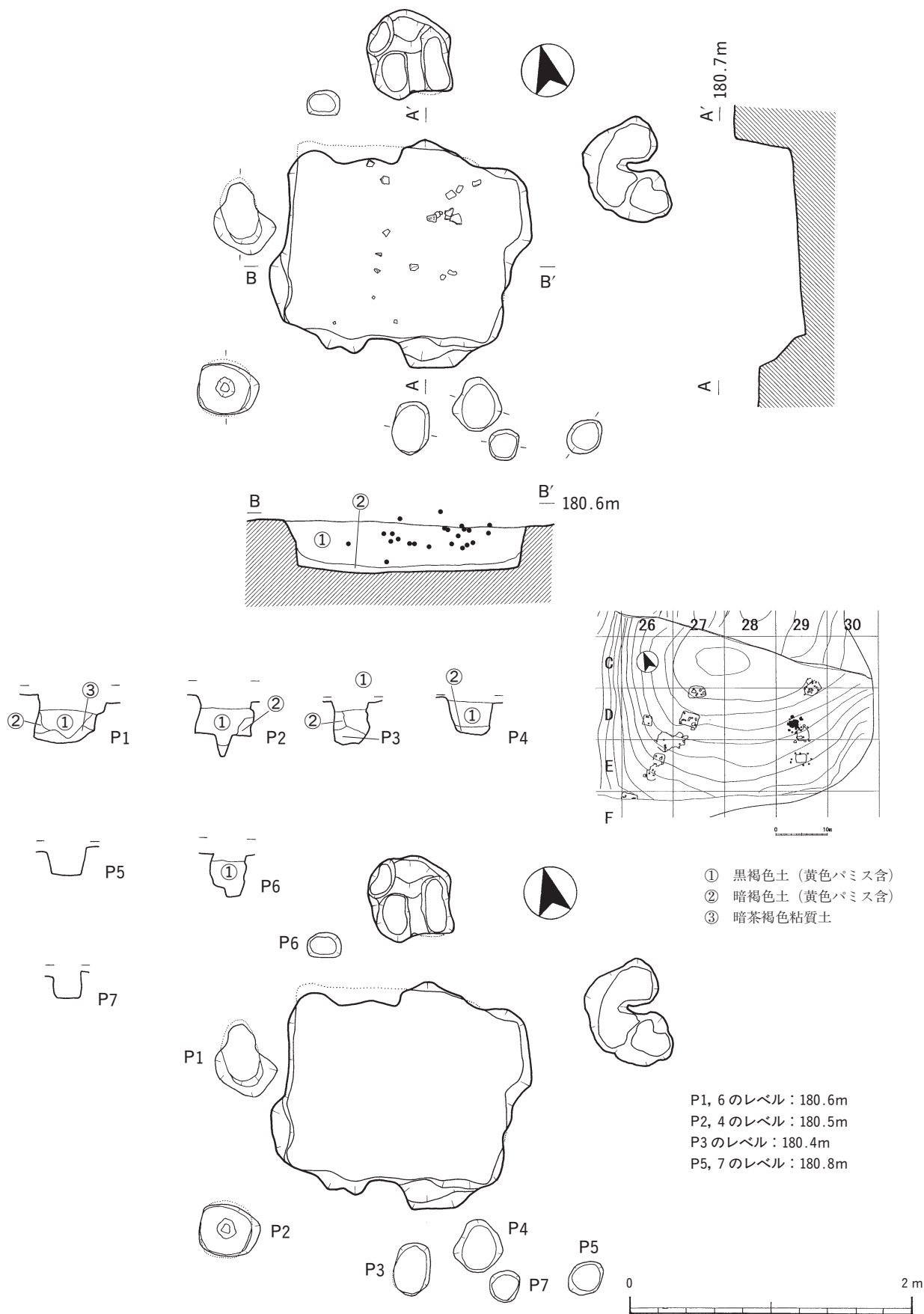
5号はC・D27区で検出された。平面プランは隅丸長方形で、床面積が6.74㎡とA地区の中では大型の部類に入る。西側住居跡列の中では、最も北側に位置する。

床面で大小8個のピットが検出されているが、いずれも浅く、建物の構造復元までに至る資料とはなっていない。

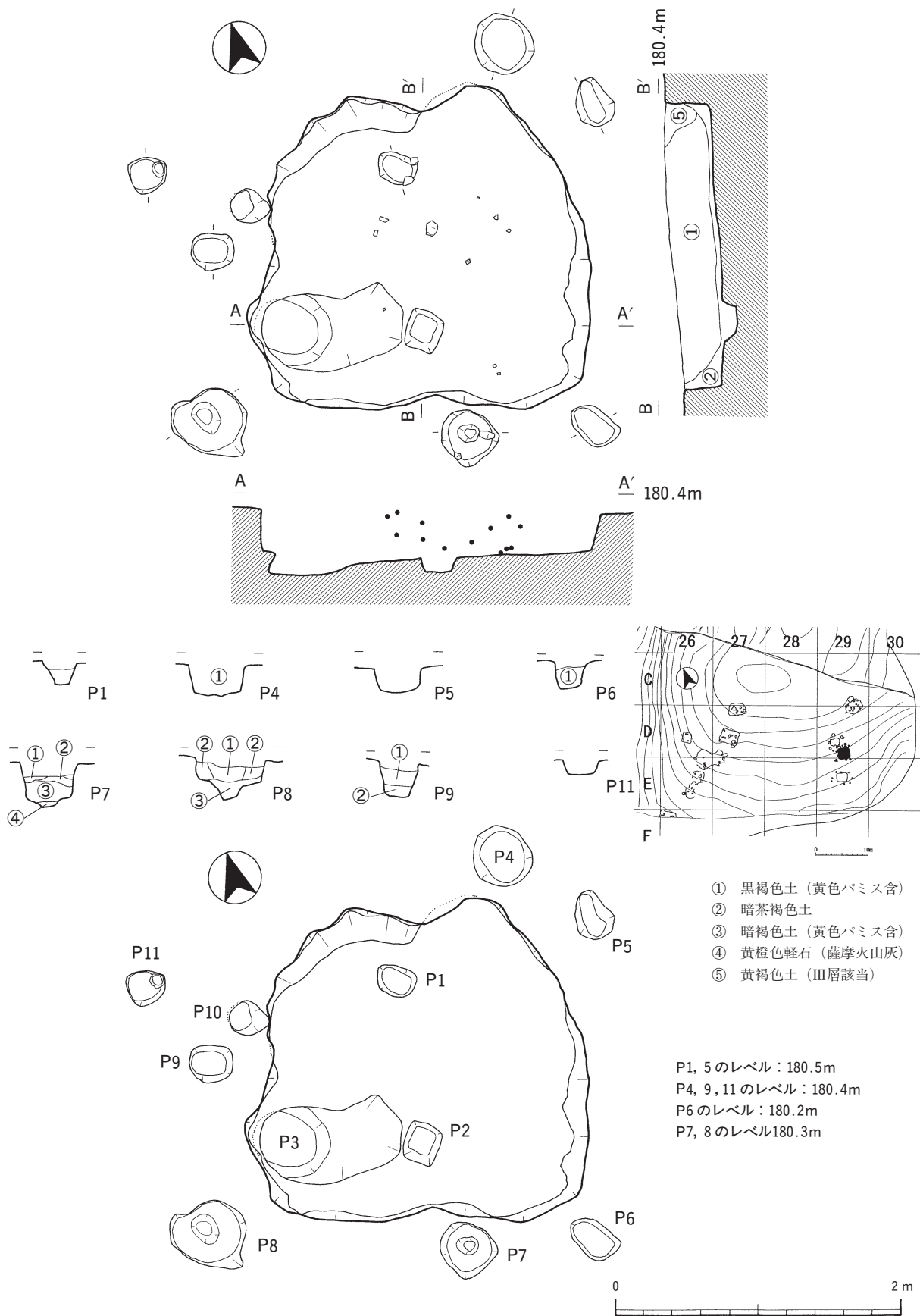
出土遺物は9点と少なく、ほとんど検出面前後の資料である。7類（石坂Ⅰ式）土器の口縁部が出土している。



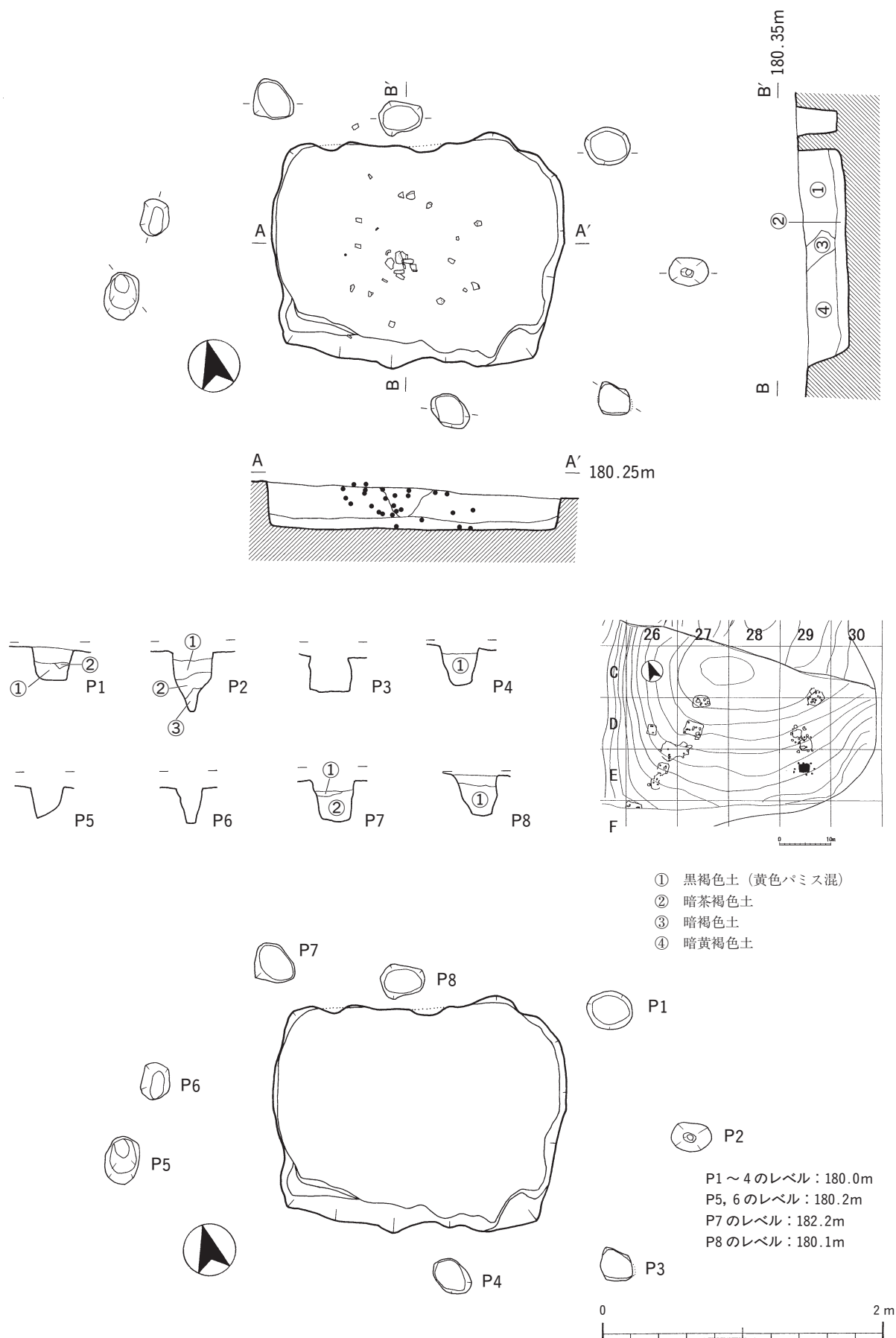
第39図 1号住居跡



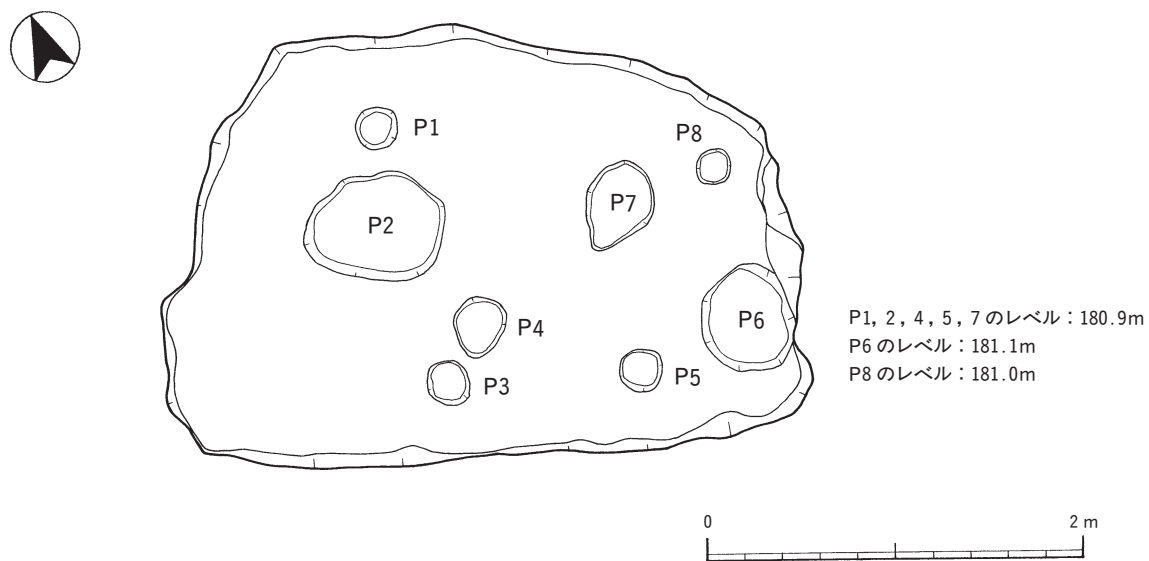
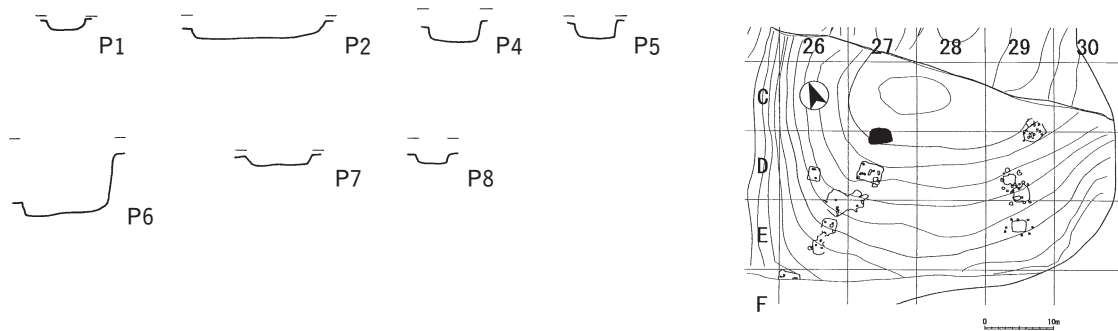
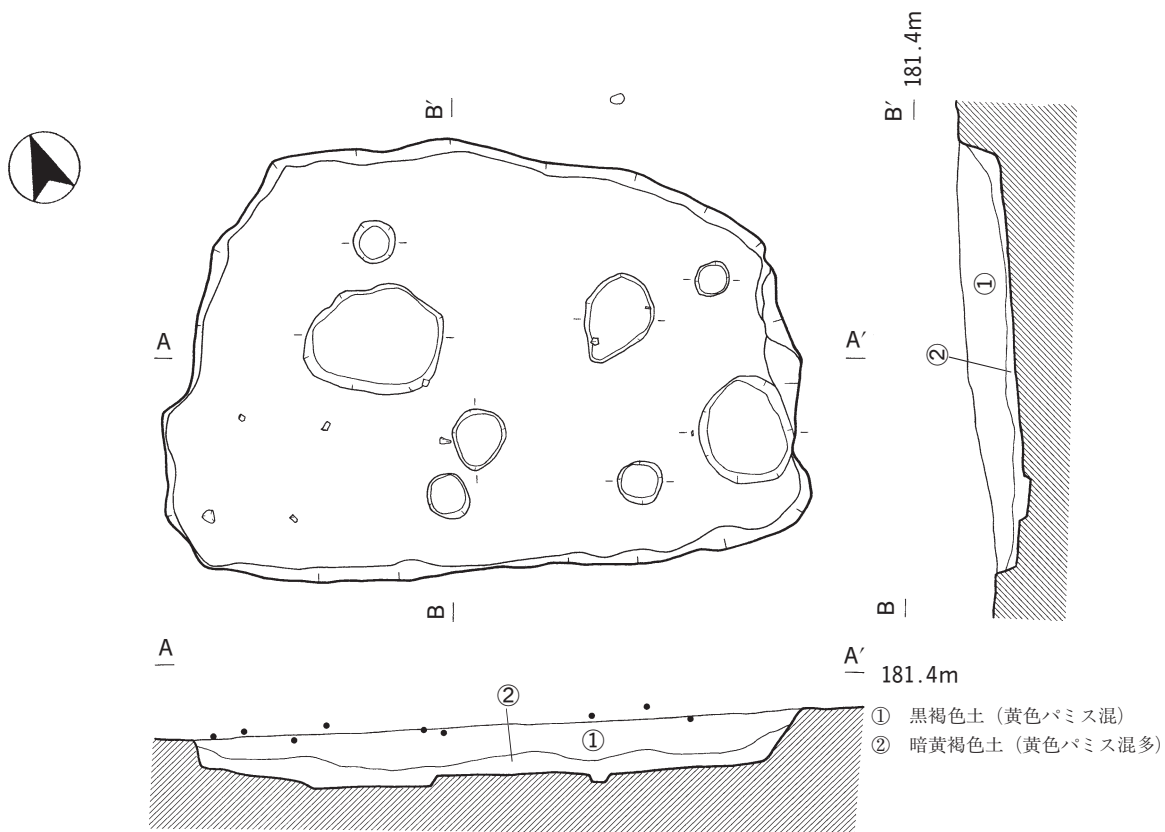
第40図 2号住居跡



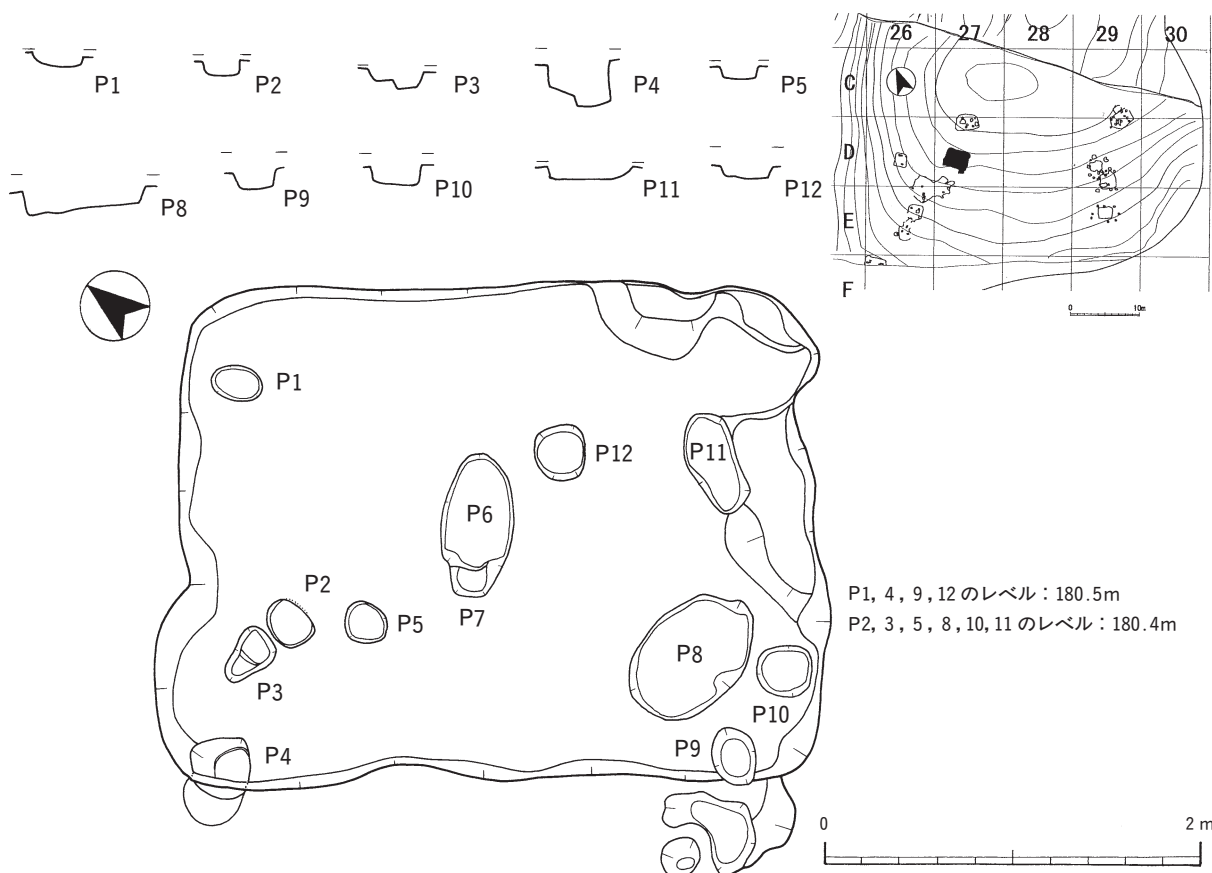
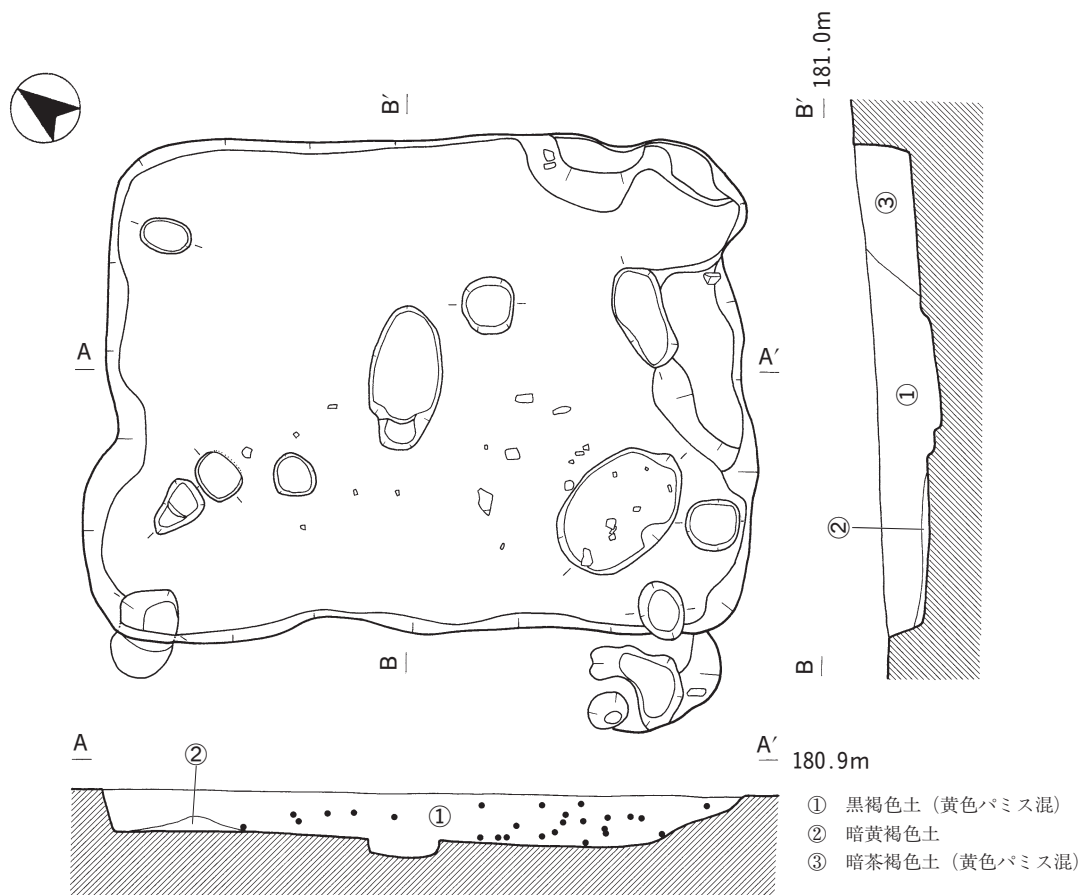
第41図 3号住居跡



第42図 4号住居跡



第43図 5号住居跡



第44図 6号住居跡

⑥ 6号竪穴住居跡

6号はD27区で検出された。平面プランは長方形で、床面積8.13㎡と大型の部類に入る住居跡である。床面で大小12個のピットが検出されている。やはり、建物の構造復元までの資料としての決め手に欠ける。ただ、中央部に位置する大型のピット（P 6）は注目される。埋土中から炉跡らしき痕跡はつかめていないが、注意しておく必要がある。

出土遺物には、2類（志風頭式）土器の円筒土器片や5ないし6類（吉田式）土器と考えられる押引文をもつ胴部片がある。

⑦ 7号竪穴住居跡

7号はD・E26・27区で検出された。竪穴の西側で8号と重複している。また、東側では134号土坑と重複している。いずれも前後関係は不明である。

推定する平面プランは隅丸方形で、推定床面積は5㎡弱となっている。竪穴内でピットが1個検出されている。

⑧ 8号竪穴住居跡

8号もD・E26・27区で検出された。竪穴の東側で7号と重複している。推定する平面プランは隅丸方形で、7号と同様な形状が考えられるが、床面積が10㎡弱とほぼ2倍の規模となっている。床面から7個の柱穴状ピットが検出されている。

出土遺物には、3類（加栗山式）の円筒土器胴部片がある。

⑨ 9号竪穴住居跡

9号はE26区で検出された。竪穴の東南部で135号土坑と重複しているが、前後関係は不明である。床面積3.8㎡で平面プランは隅丸方形を呈する。

床面で4個のピットが検出されている。P 1とP 4の2個が主柱である可能性も考えられるであろう。

⑩ 10号竪穴住居跡

10号はE26区で検出された。竪穴の東西で123、136号の2基の土坑と重複しているが、前後関係は不明である。

床面で2個のピットが検出されている。2本を主柱とする構造の建物である可能性も考えられよう。床面積が3.5㎡弱であることから、9号と類似した様相の遺構である。

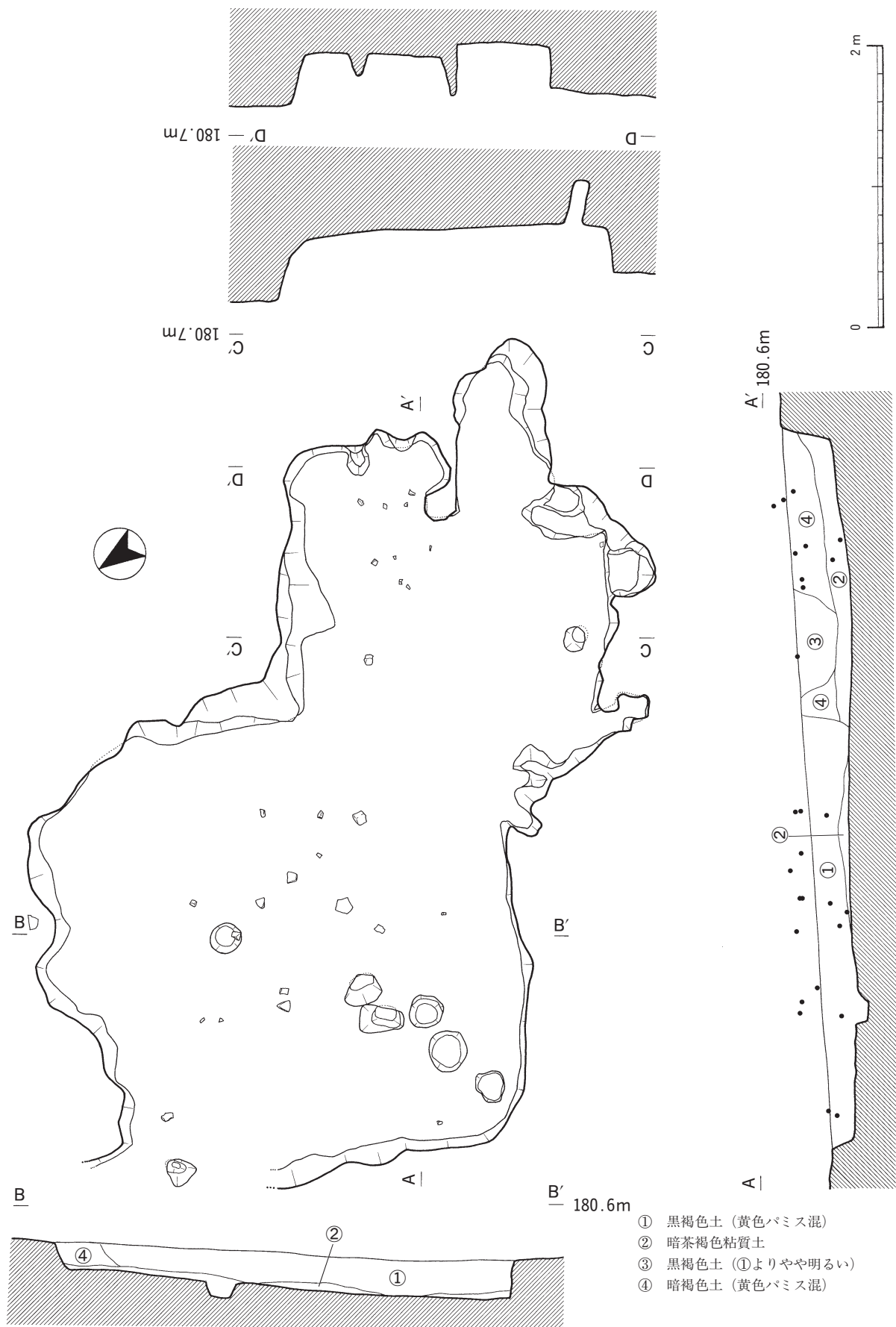
⑪ 11号竪穴住居跡

11号はD26区で検出された。床面積約4㎡で、方形の平面プランをもつ。検出地点は、7基がほぼ一列に並んでいる西側住居跡列からは若干はずれるが、基本的なまとまりの中には含まれるものとする。床面からは3個の浅いピットが検出されている。

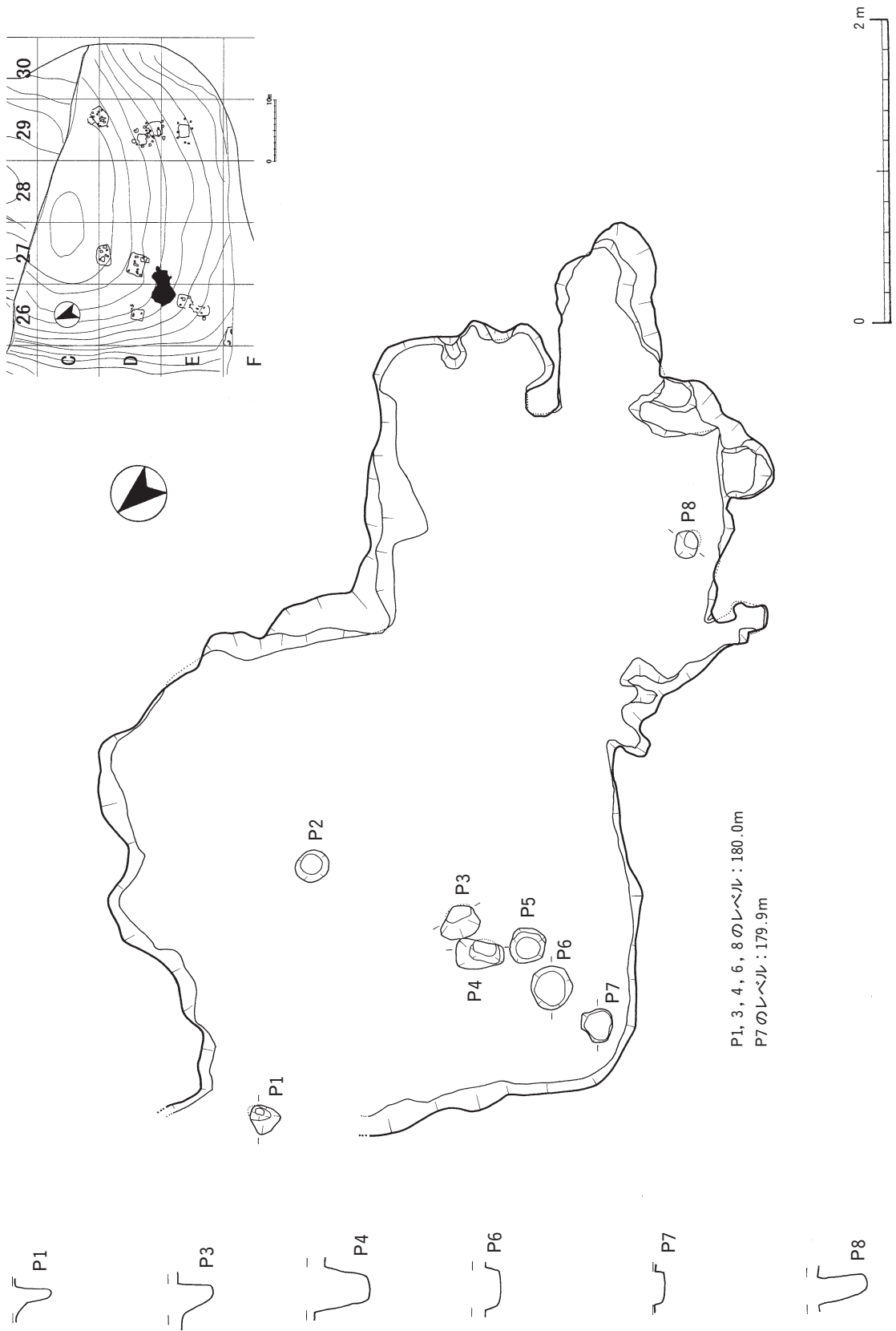
⑫ 12号竪穴住居跡

12号はF26区で検出された。工事用道路建設のために既に削平された部分から検出された。ほぼ半分が失われているものと考えられる。想定平面プランは長方形である。西側住居跡列の中では、最も南側で検出された遺構である。

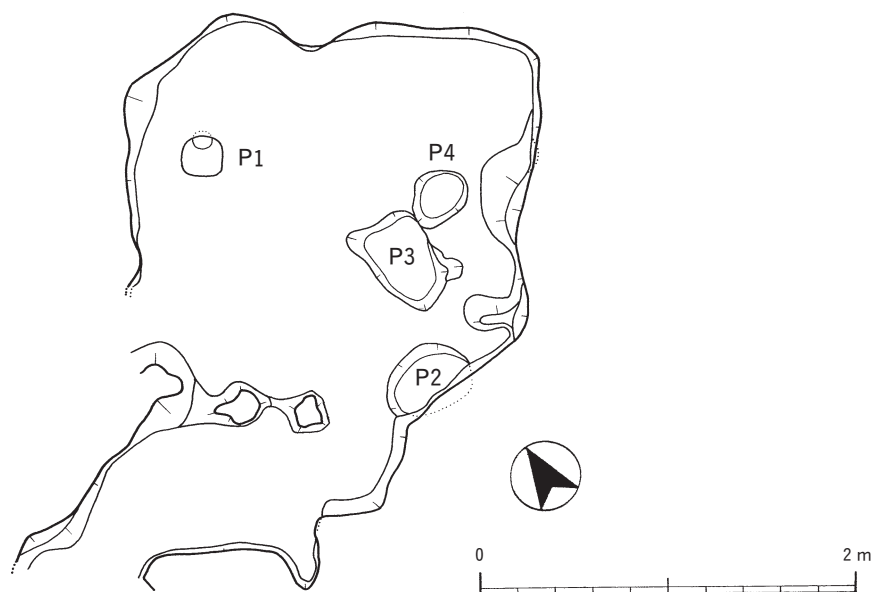
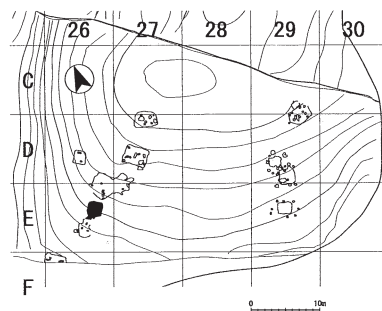
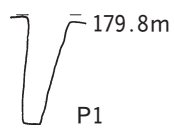
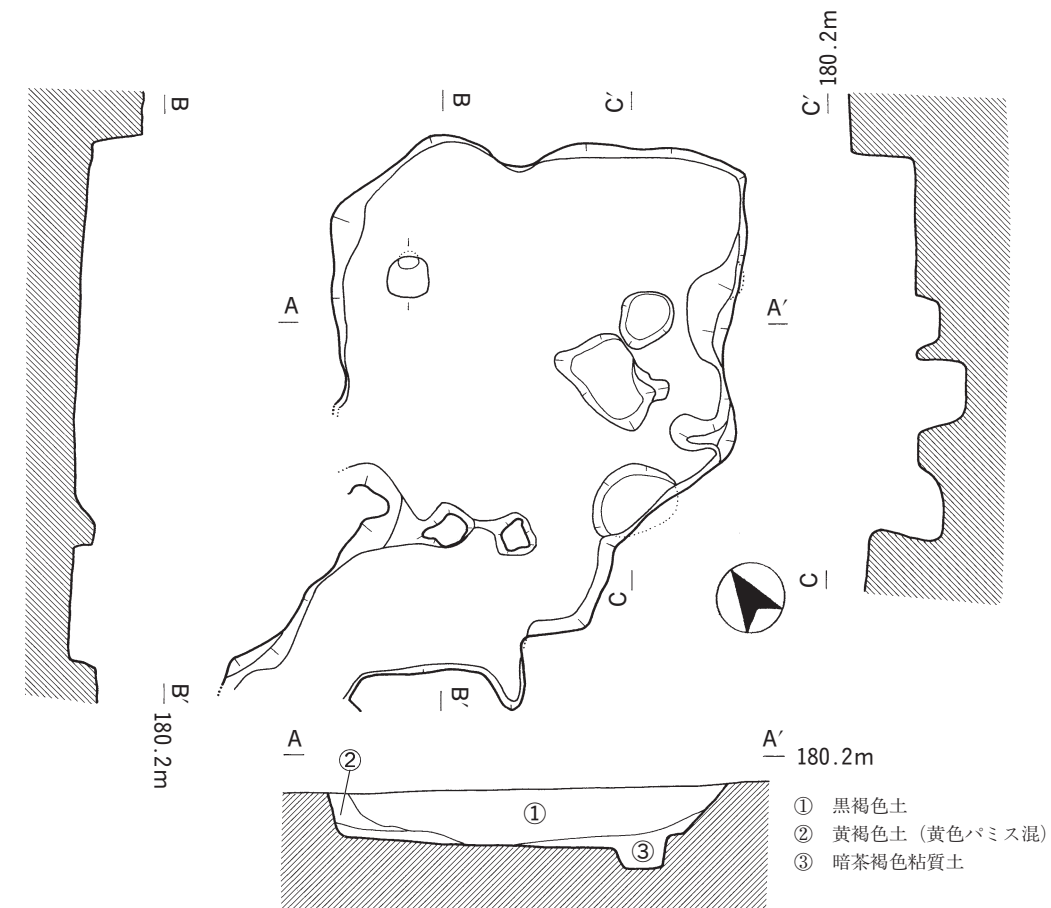
床面から6個のピットが検出されている。いずれも20～30cmの深さがあり、建物構造との関係が注目される。



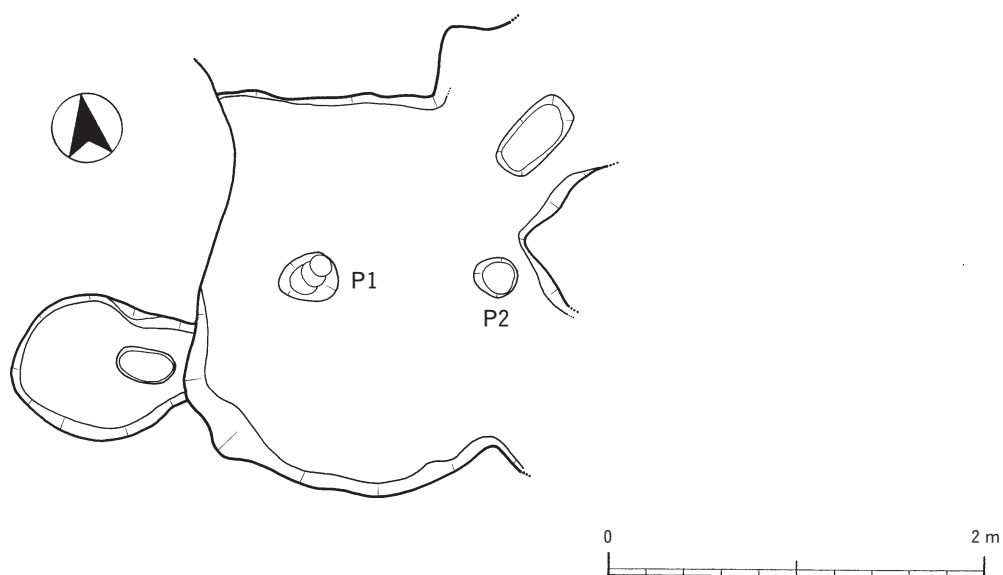
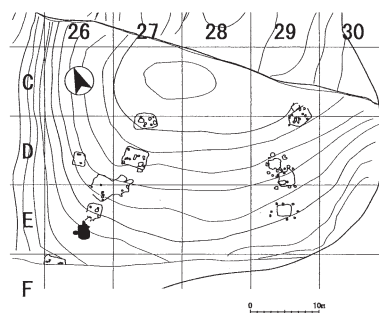
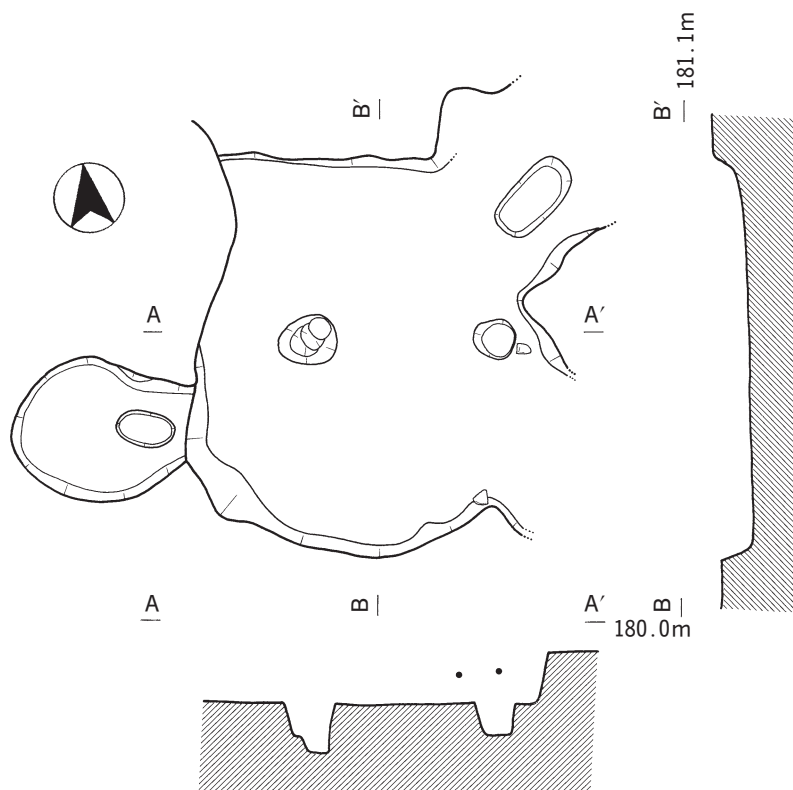
第45図 7・8号住居跡(1)



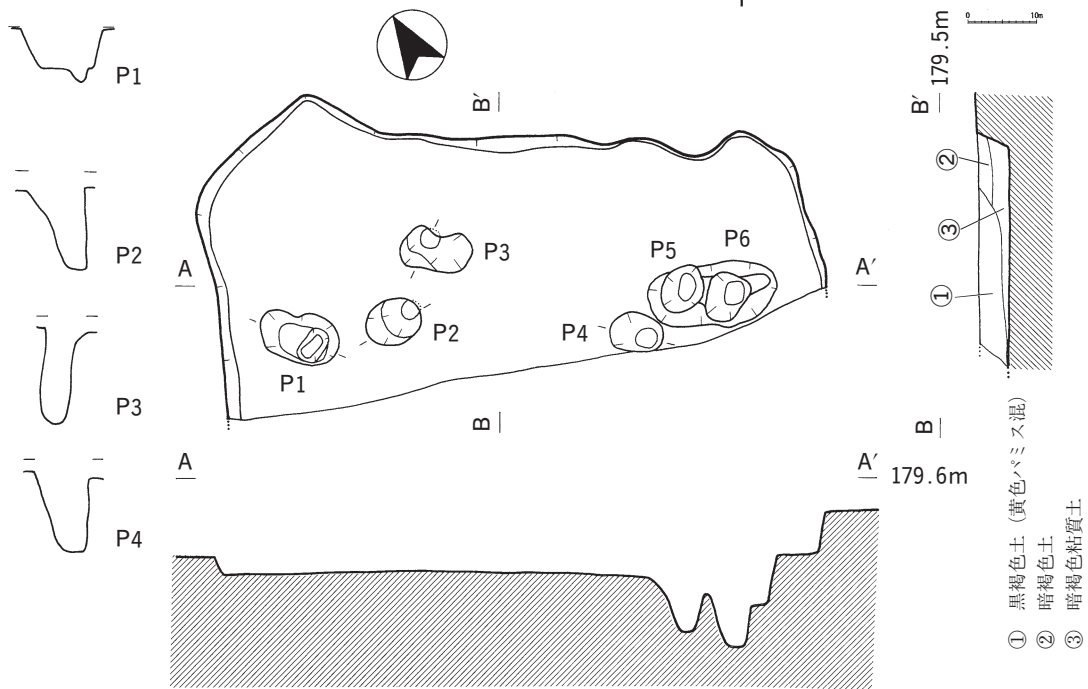
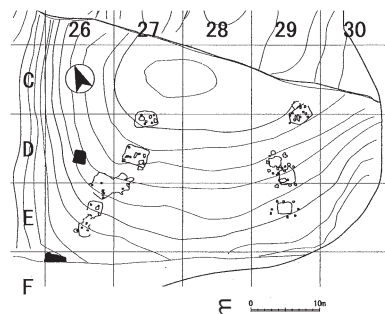
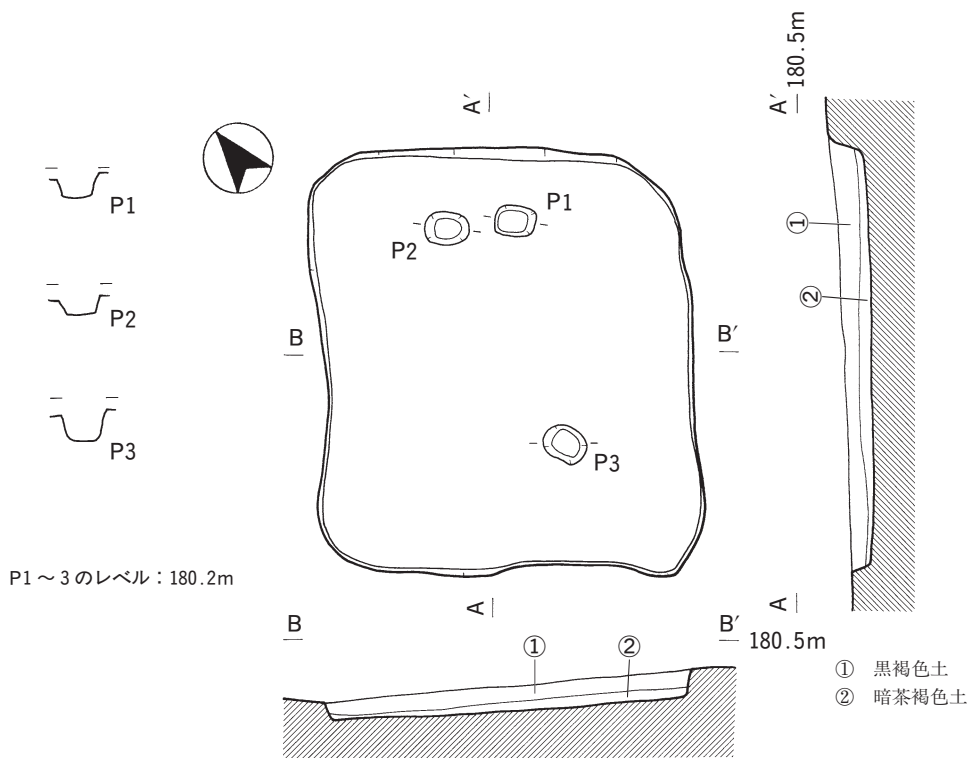
第46図 7・8号住居跡(2)



第47図 9号住居跡



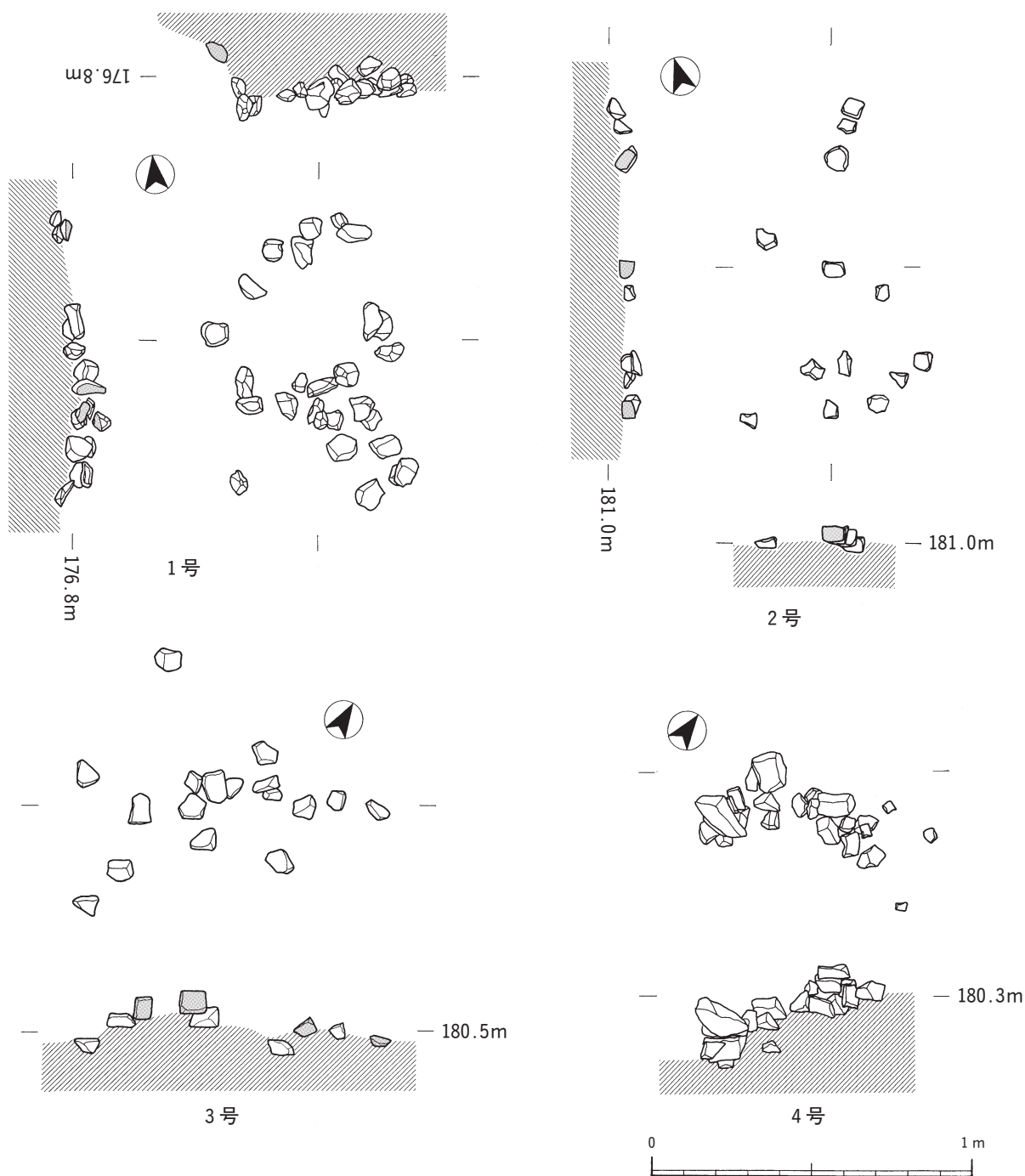
第48図 10号住居跡



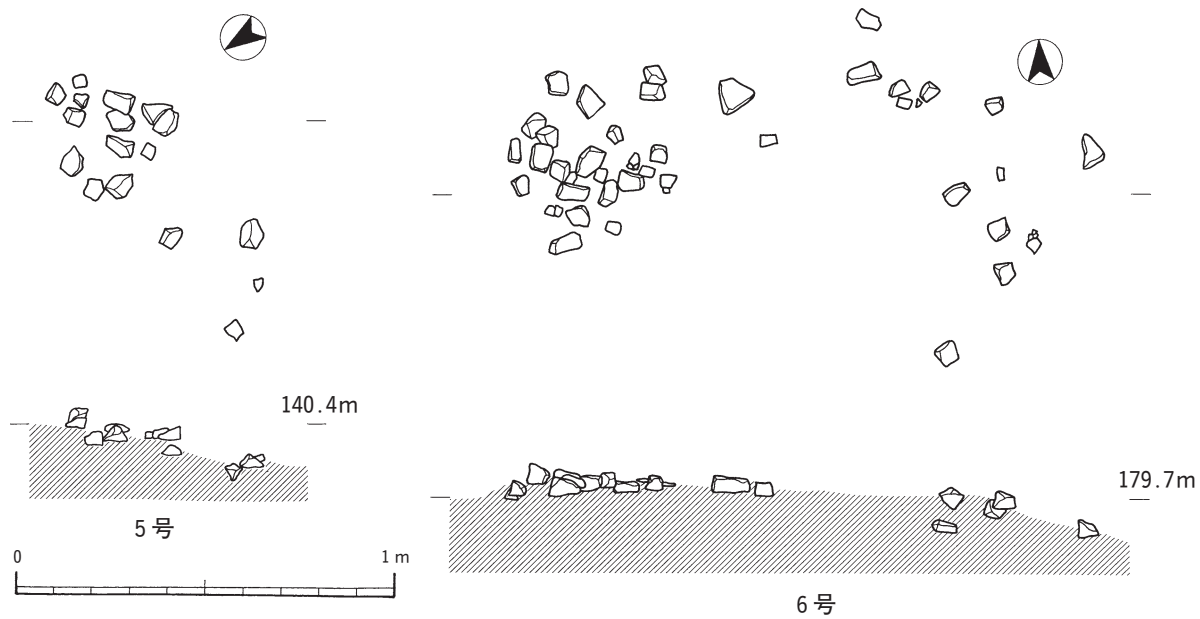
第49図 11・12号住居跡

(2) 集石

A地区で検出された縄文時代早期の時期に属する集石は10基を数えた。調査では検出した順番に集石遺構番号を振りながら進めたため、遺跡全体を概観すると、集石番号に規則性がなく検索しづらい状況となっている。



第50図 集石 1～4号

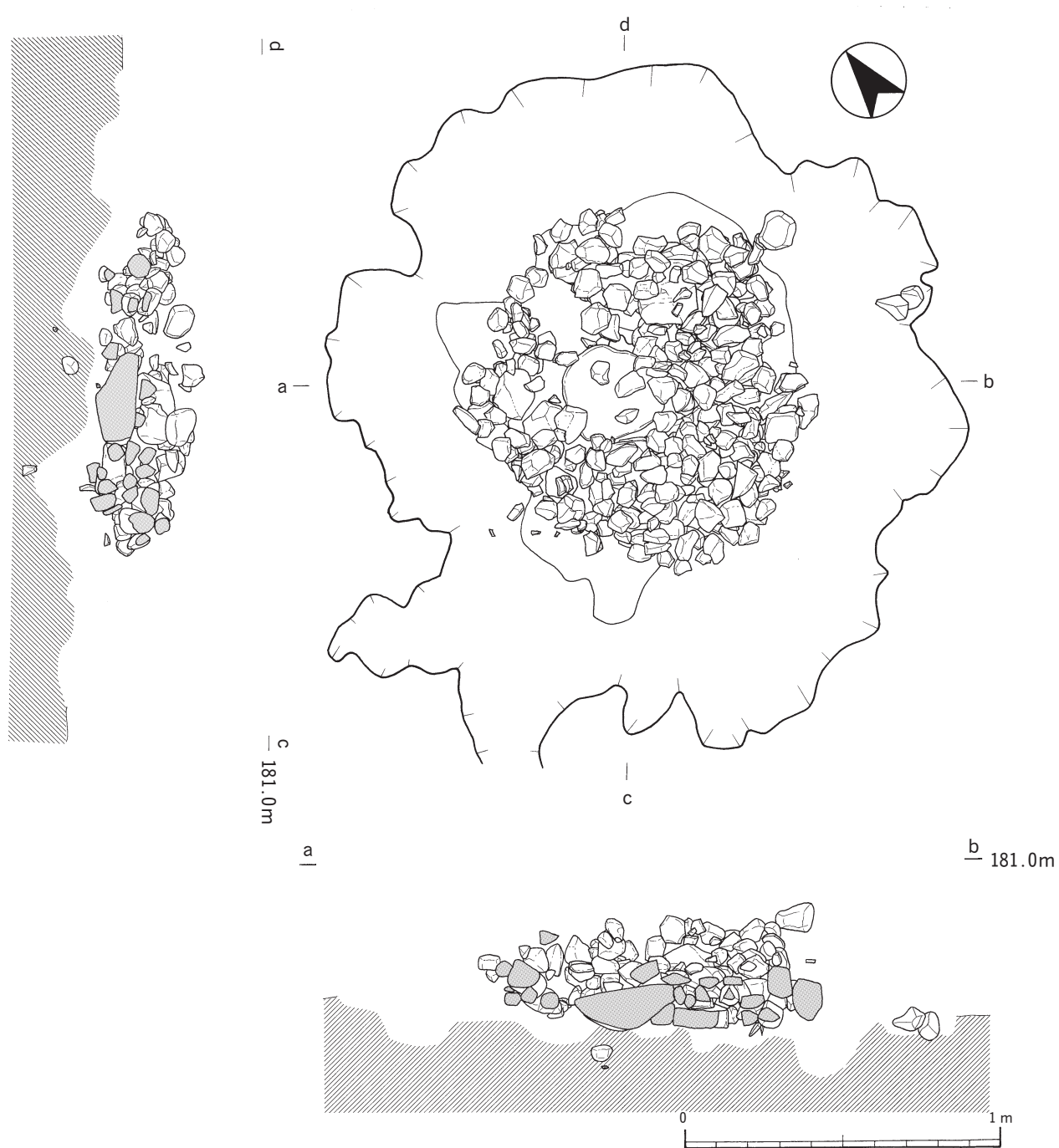


第51図 集石5・6号

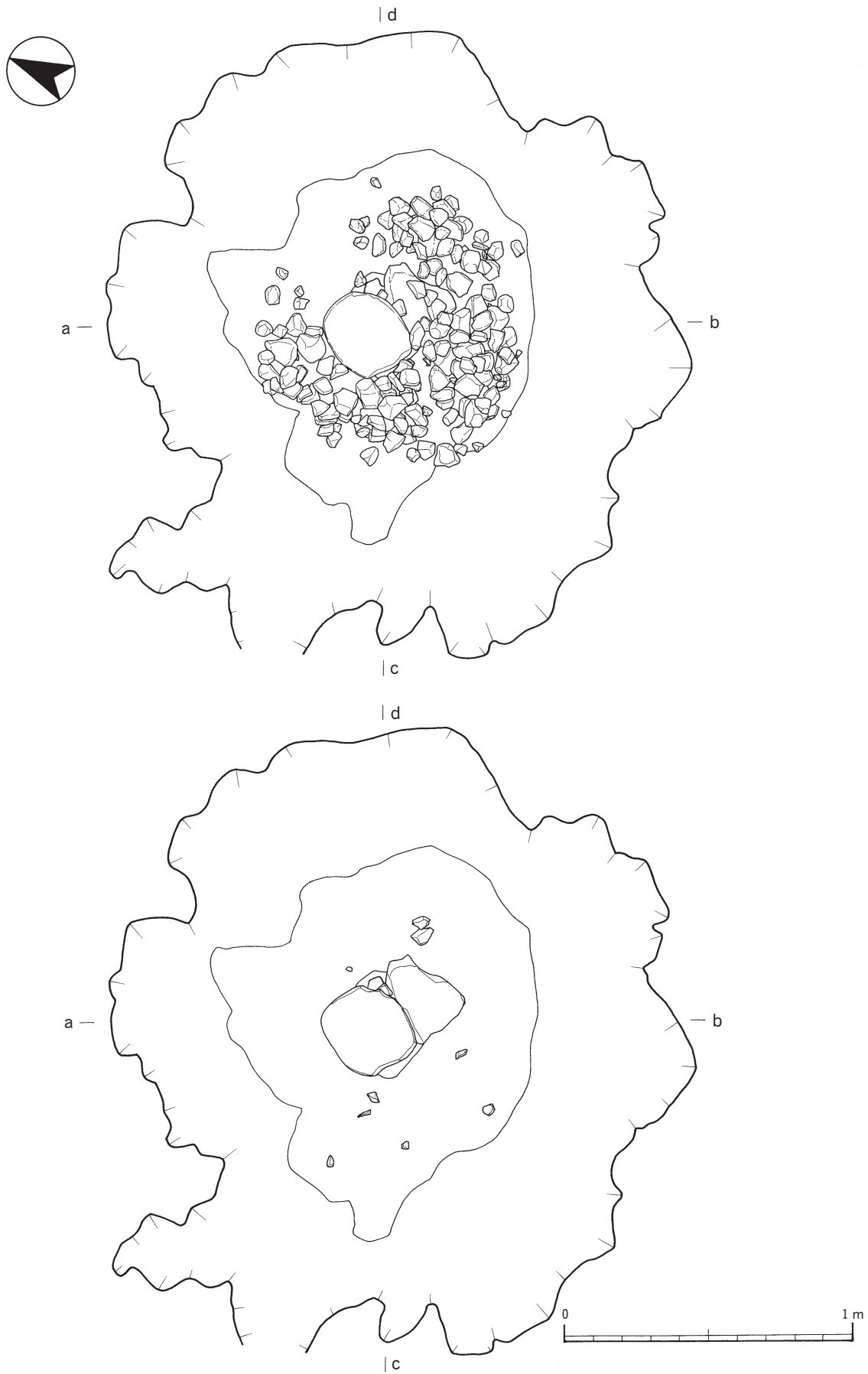
第 8 表 A 地区集石礫一覽表(1)

集石No.	礫No.	重量 (g)	長径 (cm)	短径 (cm)	被加熱	石 材
A-1	1	230	8.6	6.3	○	安 山 岩
	2	400	11.1	8.8	○	安 山 岩
	3	365	8.8	7.2	○	安 山 岩
	4	290	8.2	6.3	○	安 山 岩
	5	420	11.4	10.2	○	安 山 岩
	6	305	8.7	5.7	○	安 山 岩
	7	105	6.9	4.8	○	安 山 岩
	8	345	9.1	6.9	○	安 山 岩
	9	120	7.2	4.9	○	安 山 岩
	10	195	8.9	6.8	○	安 山 岩
	11	390	8.8	8.3	○	安 山 岩
	12	310	8.0	5.9	○	安 山 岩
	13	275	10.9	6.1	○	安 山 岩
	14	390	11.3	7.5	○	安 山 岩
	15	450	10.8	9.2	○	安 山 岩
	16	420	7.6	7.4	○	安 山 岩
	17	215	6.9	5.5	○	安 山 岩
	18	390	10.3	7.1	○	安 山 岩
	19	380	12.1	6.6	○	安 山 岩
	20	375	9.2	7.6	○	安 山 岩
	21	580	11.8	8.5	○	安 山 岩
	22	325	13.2	6.4	○	安 山 岩
	23	525	10.3	7.7	○	安 山 岩
	24	195	7.6	6.2	○	安 山 岩
	25	290	8.2	7.2	○	安 山 岩
	26	300	11.2	7.0	○	安 山 岩
	27	205	8.2	6.1	○	安 山 岩
A-2	1	230	7.0	6.0	○	安 山 岩
	2	145	7.0	6.3	○	安 山 岩
	3	300	8.6	6.4	○	安 山 岩
	4	100	7.1	5.2	○	安 山 岩
	5	210	6.8	5.4	○	安 山 岩
	6	55	5.0	3.9	○	安 山 岩
	7	110	5.1	4.3	○	安 山 岩
	8	45	4.5	4.2	○	安 山 岩
	9	120	6.3	5.4	○	砂 岩
	10	110	7.0	4.1	○	安 山 岩
	11	80	5.4	4.4	○	砂 岩
	12	145	7.7	4.8	○	安 山 岩
	13	80	5.5	3.6	○	安 山 岩
A-3	1	40	3.9	3.9	○	安 山 岩
	2	135	7.7	4.7	○	安 山 岩
	3	180	6.5	5.0	○	安 山 岩
	4	265	8.8	7.3	○	安 山 岩
	5	350	10.4	6.6	○	安 山 岩
	6	210	8.0	7.0	○	頁 岩
	7	155	7.5	5.5	○	安 山 岩
	8	355	7.9	7.1	○	安 山 岩
	9	90	7.0	4.5	○	安 山 岩
	10	3445	10.2	7.6	○	安 山 岩
	11	60	6.1	4.3	○	安 山 岩
	13	330	8.6	5.9	○	安 山 岩
	14	345	9.4	8.0	○	砂 岩
	15	70	6.3	4.0	○	安 山 岩
	16	300	9.0	8.0	○	安 山 岩
	17	110	7.3	4.3	○	安 山 岩
A-4	1	135	7.0	6.0	○	安 山 岩
	2	125	8.7	6.0	○	安 山 岩
	3	140	6.5	5.3	○	安 山 岩
	4	170	9.0	6.4	○	安 山 岩

集石No.	礫No.	重量 (g)	長径 (cm)	短径 (cm)	被加熱	石 材
A-4	5	405	9.5	8.0	○	安 山 岩
	6	765	10.3	9.7	○	安 山 岩
	7	219	8.7	6.6	○	安 山 岩
	8	265	8.6	5.4	○	安 山 岩
	10	335	8.0	6.6	○	安 山 岩
	11	210	7.7	6.0	○	安 山 岩
	12	610	10.0	9.5	○	安 山 岩
	13	502	10.2	7.5	○	安 山 岩
	14	299	8.0	7.4	○	安 山 岩
	16	150	8.2	5.0	○	安 山 岩
	17	155	7.3	6.4	○	安 山 岩
	18	230	9.7	4.9	○	安 山 岩
	19	200	8.4	6.3	○	安 山 岩
	20	222	8.6	6.2	○	安 山 岩
A-5	1	98	5.3	4.9	○	安 山 岩
	2	45	5.0	3.7	○	安 山 岩
	3	70	5.8	4.1	○	安 山 岩
	4	95	7.3	5.2	○	安 山 岩
	5	185	7.8	6.1	○	安 山 岩
	6	65	7.7	4.8	○	安 山 岩
	7	50	7.9	4.3	○	安 山 岩
	8	110	8.5	6.0	○	安 山 岩
	9	120	6.6	5.8	○	安 山 岩
	10	165	7.5	5.4	○	砂 岩
	11	90	8.0	5.4	○	安 山 岩
	12	135	7.3	5.8	○	安 山 岩
	13	110	5.3	4.9	○	砂 岩
	14	180	8.3	4.8	○	安 山 岩
	15	100	7.3	4.8	○	砂 岩
	16	5	2.9	2.4	○	安 山 岩
	17	65	5.7	3.9	○	安 山 岩
	18	55	5.8	4.6	○	安 山 岩
	19	35	4.2	4.2	○	安 山 岩
	20	159	6.4	5.6	○	安 山 岩
	21	91	4.8	4.1	○	安 山 岩
	31	110	5.7	4.9	○	安 山 岩
A-6	1	170	8.3	6.2	○	安 山 岩
	2	120	7.9	3.4	○	砂 岩
	3	130	6.8	5.4	○	安 山 岩
	4	150	7.8	6.3	○	安 山 岩
	5	150	7.8	6.8	○	安 山 岩
	6	150	7.9	4.8	○	安 山 岩
	7	340	9.3	7.2	○	頁 岩
	9	230	8.6	5.0	○	安 山 岩
	10	150	8.3	5.0	○	安 山 岩
	11	40	4.1	3.8	○	安 山 岩
	12	70	8.1	4.7	○	安 山 岩
	14	225	9.7	5.1	○	安 山 岩
	15	45	4.8	3.3	○	安 山 岩
	16	80	5.5	4.1	○	砂 岩
	17	90	5.6	5.1	○	安 山 岩
	19	110	7.2	4.9	○	砂 岩
	20	120	8.4	4.2	○	砂 岩
	21	65	4.9	3.2	○	安 山 岩
	23	175	6.5	4.1	○	安 山 岩
	24	230	8.1	5.8	○	砂 岩
	25	310	11.6	10.1	○	凝 灰 岩
	26	60	6.4	4.6	○	安 山 岩
	27	80	6.8	3.7	○	砂 岩
	28	160	9.2	6.3	○	安 山 岩



第52図 集石 7 号(1)



第53図 集石 7号(2)



第54図 集石 7号(3)

第 9 表 A 地区集石礫一覽表(2)

集石No.	礫No.	重量 (g)	長径 (cm)	短径 (cm)	被加熱	石 材
A-6	29	75	6.2	4.0	○	安 山 岩
	30	25	4.4	3.4	○	安 山 岩
	32	105	5.3	4.1	○	安 山 岩
	33	230	9.7	5.1	○	安 山 岩
	35	135	7.5	4.7	○	安 山 岩
	36	150	7.1	6.7	○	安 山 岩
	38	155	7.3	5.5	○	安 山 岩
	39	115	5.7	5.5	○	安 山 岩
	40	120	6.2	4.7	○	安 山 岩
	1	270	9.7	7.4	○	安 山 岩
A-7	2	75	6.7	3.7	○	安 山 岩
	3	40	6.1	3.0	○	安 山 岩
	4	185	10.6	4.7	○	安 山 岩
	5	130	9.1	7.0	○	安 山 岩
	6	70	5.3	4.5	○	安 山 岩
	7	830	12.0	8.7	○	安 山 岩
	8	240	8.6	6.0	○	安 山 岩
	9	15	3.5	3.0	○	砂 岩
	10	410	9.5	8.5	○	安 山 岩
	11	10	3.9	3.3	○	安 山 岩
	12	430	11.2	7.5	○	安 山 岩
	13	120	6.5	5.4	○	安 山 岩
	14	65	11.5	4.5	○	安 山 岩
	15	480	13.3	9.4	○	安 山 岩
	16	220	9.5	5.9	○	安 山 岩
	17	600	11.4	7.6	○	安 山 岩
	18	85	6.9	5.1	○	安 山 岩
	19	415	8.4	8.3	○	安 山 岩
	20	235	8.6	6.0	○	安 山 岩
	21	390	8.6	8.5	○	安 山 岩
	22	135	7.2	5.1	○	安 山 岩
	24	40	4.7	3.5	○	安 山 岩
	25	280	7.3	6.5	○	安 山 岩
	28	20	3.6	3.2	○	安 山 岩
	29	65	6.2	5.2	○	安 山 岩
	30	780	11.8	8.6	○	安 山 岩
	31	190	7.1	6.1	○	安 山 岩
	32	200	6.9	5.6	○	安 山 岩
	33	90	6.9	4.4	○	砂 岩
	34	80	8.6	8.1	○	砂 岩
	35	150	5.7	4.6	○	砂 岩
	36	210	8.4	7.2	○	安 山 岩
	37	1180	11.8	6.9	○	安 山 岩
	38	40	5.4	3.5	○	安 山 岩
	39	920	13.6	13.4	○	安 山 岩
	40	340	10.1	8.6	○	安 山 岩
	41	540	11.6	9.4	○	安 山 岩
	42	360	9.3	9.1	○	安 山 岩
	44	480	11.0	7.9	○	安 山 岩
	45	180	8.2	6.0	○	安 山 岩
	46	160	7.1	5.7		砂 岩
	47	20	7.6	2.9	○	凝 灰 岩
	48	270	10.5	5.1	○	安 山 岩
	48	155	7	6	○	安 山 岩
	48	65	6.5	5.1	○	安 山 岩
	49	50	4.9	4.8	○	安 山 岩
	49	530	11	9	○	砂 岩
	50	475	9.1	6.2	○	安 山 岩
	50	60	6	5		安 山 岩
	51	950	11.6	9.0	○	安 山 岩
	52	800	13.1	8.6	○	安 山 岩
A-7	53	220	8.1	5.2		安 山 岩
	54	180	8.0	6.0	○	安 山 岩
	55	330	9.6	6.3	○	安 山 岩
	56	100	7.9	4.1	○	安 山 岩
	57	370	11.6	7.8	○	安 山 岩
	59	70	5.4	4.2	○	安 山 岩
	60	192	7.1	5.0		安 山 岩
	60	200	9	4	○	安 山 岩
	62	40	5.0	4.3	○	安 山 岩
	64	400	11.5	7.6	○	安 山 岩
	65	400	10.6	7.3	○	安 山 岩
	66	180	7.5	5.3	○	安 山 岩
	67	285	6.9	4.9		安 山 岩
	68	305	9.7	7.0	○	安 山 岩
	69	280	9.3	7.9	○	安 山 岩
	69	115	6	5	○	安 山 岩
	70	333	14.6	6.6	○	安 山 岩
	71	775	11.2	8.3		安 山 岩
	72	425	8.2	6.7	○	安 山 岩
	74	30	4.1	3.9	○	安 山 岩
	75	450	11.5	8.4	○	安 山 岩
	77	220	9.8	6.6	○	安 山 岩
	78	20	4.2	3.5	○	安 山 岩
	79	260	9.1	5.7	○	安 山 岩
	80	98	6.3	5.0	○	砂 岩
	81	275	8.0	5.3	○	安 山 岩
	82	210	7.1	5.8	○	安 山 岩
	83	50	5.1	4.5	○	安 山 岩
	84	155	7.0	5.9	○	安 山 岩
	85	335	11.3	7.7	○	安 山 岩
	87	310	10.4	6.9	○	安 山 岩
	88	245	7.1	6.4		安 山 岩
	89	270	9.2	5.8	○	安 山 岩
	90	90	7.2	5.0	○	安 山 岩
	91	440	11.5	8.7	○	安 山 岩
	93	90	7.6	4.7	○	安 山 岩
	94	170	6.6	5.9	○	安 山 岩
	95	348	9.9	5.3	○	安 山 岩
	96	160	6.3	5.5	○	安 山 岩
	97	630	9.8	8.4		安 山 岩
	98	190	7.3	7.1	○	安 山 岩
	99	640	10.5	9.3	○	安 山 岩
	100	80	6.1	4.7	○	安 山 岩
	101	160	7.5	5.2		安 山 岩
	102	165	7.0	4.6		安 山 岩
	103	405	9.4	7.4	○	安 山 岩
	104	535	11.4	10.0	○	安 山 岩
	104	140	7	6	○	凝 灰 岩
	105	562	10.7	8.6		安 山 岩
	106	192	8.3	6.5	○	安 山 岩
	107	350	9.8	7.6	○	安 山 岩
	108	30	4.8	3.1	○	安 山 岩
	109	102	6.8	4.9		安 山 岩
	111	165	6.4	5.1	○	安 山 岩
	112	20	4.2	3.6	○	安 山 岩
	113	580	12.5	9.0		安 山 岩
	114	200	6.8	6.3		安 山 岩
	115	560	12.4	7.8	○	安 山 岩
	117	260	9.6	7.5	○	安 山 岩
	118	20	4.0	2.1	○	安 山 岩
	119	15	3.7	2.5	○	安 山 岩

第10表 A地区集石礫一覽表(3)

集石No.	礫No.	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	被加熱	石 材
A-7	120	280	10.1	6.2	○	安 山 岩
	121	230	8.0	6.0	○	安 山 岩
	122	295	9.3	7.2	○	安 山 岩
	123	290	9.1	6.9	○	安 山 岩
	124	20	4.1	3.0	○	砂 岩
	125	225	9.2	5.0	○	安 山 岩
	126	290	8.3	5.9	○	安 山 岩
	127	100	5.6	4.6	○	安 山 岩
	128	170	7.4	4.8	○	砂 岩
	129	60	5.8	4.7	○	安 山 岩
	130	440	8.5	7.1	○	安 山 岩
	131	1660	16.7	11.3	○	安 山 岩
	132	270	7.4	5.6	○	安 山 岩
	133	275	9.5	6.7	○	安 山 岩
	134	360	10.3	6.8	○	安 山 岩
	135	280	9.7	5.1	○	砂 岩
	136	235	11.6	6.7	○	安 山 岩
	138	195	9.7	6.0	○	安 山 岩
	139	240	7.8	7.5	○	砂 岩
	140	375	9.1	8.1	○	安 山 岩
	141	130	9.0	5.2	○	安 山 岩
	142	210	7.5	6.5	○	安 山 岩
	143	275	8.5	6.0	○	安 山 岩
	144	340	8.8	7.2	○	安 山 岩
	145	270	7.2	6.3	○	安 山 岩
	147	190	8.3	6.4	○	安 山 岩
	148	765	12.8	7.7	○	安 山 岩
	149	175	8.2	5.4	○	安 山 岩
	150	1830	19.2	16.3	○	安 山 岩
	151	270	8.2	7.0	○	安 山 岩
	152	70	4.7	4.1	○	安 山 岩
	153	140	7.6	5.3		安 山 岩
	154	205	7.2	5.7		安 山 岩
	155	325	9.8	6.1	○	安 山 岩
	156	470	9.4	6.5		安 山 岩
	157	50	6.3	3.8	○	安 山 岩
	158	552	12.3	10.4		安 山 岩
	159	60	6.7	5.2	○	安 山 岩
	160	340	9.9	6.5		安 山 岩
	161	550	10.9	8.4		安 山 岩
	162	540	9.6	7.7	○	安 山 岩
	163	460	10.4	8.1	○	安 山 岩
	163	490	5	5	○	砂 岩
	164	400	9.0	6.6	○	安 山 岩
	165	219	7.5	6.5	○	安 山 岩
	166	221	7.9	5.7		安 山 岩
	167	460	11.8	7.0	○	安 山 岩
	168	390	10.1	8.0	○	安 山 岩
	169	50	6.1	4.4		安 山 岩
	170	300	9.6	5.4	○	安 山 岩
	171	310	6.2	5.3	○	砂 岩
	172	740	12.2	8.1	○	安 山 岩
	173	310	8.5	5.6	○	安 山 岩
	174	100	6.9	5.4	○	安 山 岩
	175	175	7.5	5.8	○	安 山 岩
	175	255	9	7	○	安 山 岩
	176	130	7.0	5.8	○	安 山 岩
	177	140	8.3	7.9	○	安 山 岩
	180	55	5.7	4.6	○	安 山 岩
	180	200	6	6		砂 岩
	182	165	7.2	5.9	○	砂 岩

集石No.	礫No.	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	被加熱	石 材
A-7	183	295	10.3	8.6	○	安 山 岩
	183	1075	12	7		安 山 岩
	185	40	4.4	3.2	○	凝 灰 岩
	186	25	4.6	1.4	○	凝 灰 岩
	187	140	5.6	4.7	○	安 山 岩
	188	260	8.2	6.9	○	凝 灰 岩
	190	5	2.7	2.1		安 山 岩
	191	375	9.2	7.0	○	砂 岩
	192	55	5.3	4.0		安 山 岩
	193	460	10.0	6.1	○	安 山 岩
	194	240	8.7	5.2	○	安 山 岩
	195	240	8.5	6.3	○	安 山 岩
	197	175	6.3	5.8	○	安 山 岩
	198	165	7.7	4.6	○	安 山 岩
	201	405	10.4	6.5	○	安 山 岩
	202	440	9.7	6.4	○	安 山 岩
	203	85	6.6	4.2	○	砂 岩
	204	300	7.1	5.7		安 山 岩
	206	115	6.9	4.7	○	安 山 岩
	207	230	9.2	6.3	○	安 山 岩
	209	25	4.6	3.0	○	砂 岩
	209	185	8	6	○	砂 岩
	211	275	8.4	6.9	○	安 山 岩
	214	120	6.8	4.9	○	安 山 岩
	215	170	7.0	5.6	○	安 山 岩
	216	480	12.2	8.1	○	安 山 岩
	217	133	7.0	5.8	○	安 山 岩
	217	5	3	1	○	安 山 岩
	218	350	8.5	7.8	○	安 山 岩
	219	290	11.4	7.0	○	安 山 岩
	221	270	8.1	5.2	○	安 山 岩
	222	368	8.5	7.9	○	安 山 岩
	223	100	6.2	4.6	○	安 山 岩
	225	15	4.0	3.1	○	砂 岩
	226	10	3.2	1.7	○	砂 岩
	227	130	5.8	4.9	○	安 山 岩
	228	85	6.6	4.7	○	安 山 岩
	229	70	5.6	3.3	○	安 山 岩
	230	665	9.3	8.3	○	安 山 岩
	231	50	4.7	4.6	○	安 山 岩
	232	255	8.1	6.3	○	安 山 岩
	233	105	6.6	4.1	○	安 山 岩
	234	530	12.8	8.1	○	安 山 岩
	235	455	12.6	8.2	○	安 山 岩
	236	270	7.3	5.4	○	砂 岩
	238	90	5.9	4.6	○	安 山 岩
	239	325	9.3	7.5	○	安 山 岩
	240	673	10.4	7.3	○	安 山 岩
	241	283	7.9	7.3	○	安 山 岩
	242	130	8.2	4.3	○	安 山 岩
	243	90	4.7	4.4	○	安 山 岩
	244	150	6.4	6.1	○	安 山 岩
	245	720	9.6	8.5	○	安 山 岩
	246	133	5.9	5.6	○	安 山 岩
	247	180	7.1	5.8	○	安 山 岩
	250	40	4.1	3.5	○	安 山 岩
	251	220	8.7	5.6	○	安 山 岩
	252	255	7.7	6.5	○	安 山 岩
	253	395	10.2	7.6	○	安 山 岩
	254	318	10.9	8.0	○	安 山 岩
	255	165	7.9	5.1		安 山 岩

第11表 A地区集石礫一覽表(4)

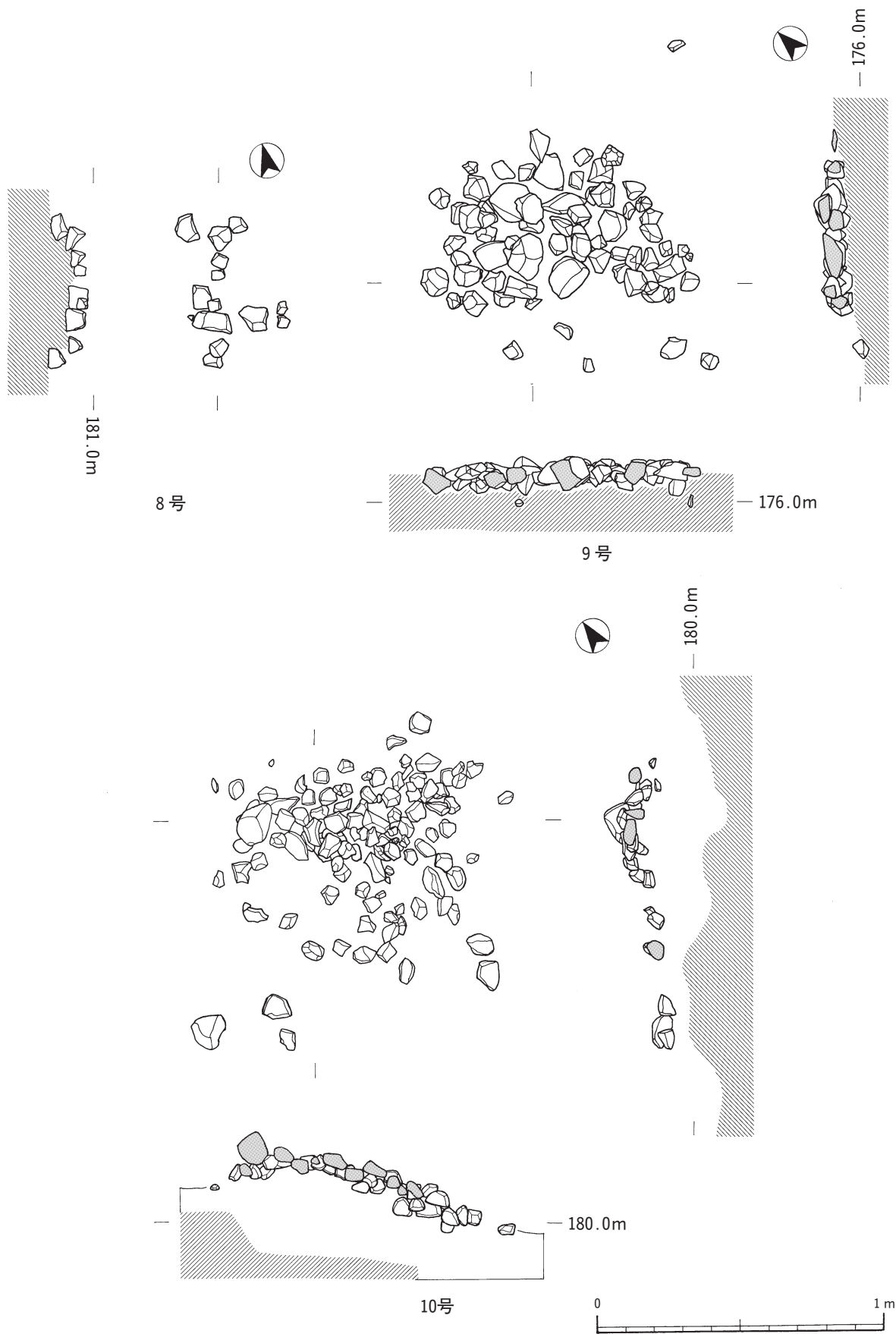
集石No.	礫No.	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	被加熱	石 材
A-7	255	370	11	7	○	安 山 岩
	256	140	7.2	5.5	○	安 山 岩
	256	120	8	5	○	安 山 岩
	259	350	9.4	5.7	○	安 山 岩
	260	100	6.8	4.8	○	安 山 岩
	261	340	12.2	7.3	○	安 山 岩
	262	110	5.5	5.1	○	安 山 岩
	263	470	11.2	8.5	○	砂 岩
	264	210	7.8	6.0	○	安 山 岩
	265	140	7.8	6.0	○	安 山 岩
	266	510	12.2	8.6	○	安 山 岩
	267	20	3.5	2.6	○	砂 岩
	268	120	7.0	5.0	○	安 山 岩
	269	210	6.4	5.5	○	安 山 岩
	270	330	10.3	7.2	○	安 山 岩
	272	270	8.1	7.2	○	安 山 岩
	272	210	9	6	○	安 山 岩
	274	155	7.2	5.1	○	安 山 岩
	275	200	6.8	6.6	○	安 山 岩
	276	170	7.5	5.6	○	安 山 岩
	277	205	7.2	5.1	○	安 山 岩
	278	340	10.2	7.6	○	安 山 岩
	280	180	8.1	4.5	○	安 山 岩
	280	380	10	6	○	安 山 岩
	281	920	11.5	8.4	○	安 山 岩
	283	280	8.3	6.1	○	安 山 岩
	285	340	8.4	7.0	○	安 山 岩
	287	110	6.7	5.2	○	安 山 岩
	288	930	11.5	11.2	○	安 山 岩
	289	30	5.0	3.5	○	安 山 岩
	290	280	8.2	5.9	○	安 山 岩
	291	180	8.3	6.1	○	砂 岩
	293	95	6.8	4.2	○	安 山 岩
	294	230	6.7	5.4	○	安 山 岩
	295	140	7.1	6.3	○	安 山 岩
	297	395	10.3	9.2	○	安 山 岩
	298	75	5.2	4.5	○	安 山 岩
	299	190	8.1	5.0	○	安 山 岩
	300	160	7.2	6.6	○	安 山 岩
	303	115	6.2	4.8	○	安 山 岩
	304	180	8.8	8.2	○	安 山 岩
	305	270	7.7	7.0	○	安 山 岩
	306	720	13.1	9.3	○	安 山 岩
	307	195	7.0	5.9	○	安 山 岩
	308	269	7.8	6.5	○	安 山 岩
	309	200	6.5	6.2	○	安 山 岩
	310	220	9.1	4.7	○	安 山 岩
	310	175	9	6	○	安 山 岩
	311	155	6.9	5.0	○	安 山 岩
	312	170	7.9	5.6	○	安 山 岩
	313	230	6.8	6.4	○	安 山 岩
	314	315	10.8	8.2	○	安 山 岩
	315	450	11.2	8.9	○	安 山 岩
	316	280	7.8	6.0	○	安 山 岩
	317	125	5.5	4.8		凝 灰 岩
	318	55	5.8	3.6	○	安 山 岩
	319	455	10.3	8.8	○	安 山 岩
	320	40	5.0	4.2	○	安 山 岩
	322	205	8.2	6.9	○	安 山 岩
	323	160	8.1	6.3	○	砂 岩
	324	470	8.8	7.3	○	砂 岩

集石No.	礫No.	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	被加熱	石 材
A-7	325	85	5.3	5.0	○	安 山 岩
	326	380	9.4	7.5	○	安 山 岩
	326	60	6	5	○	安 山 岩
	327	320	10.3	6.2	○	安 山 岩
	328	170	7.7	3.8		安 山 岩
	329	148	6.6	5.4	○	安 山 岩
	330	370	10.4	7.8	○	安 山 岩
	330	50	5	3	○	安 山 岩
	331	320	7.7	6.7		安 山 岩
	333	110	6.0	5.4	○	安 山 岩
	335	100	6.2	4.8	○	安 山 岩
	335	150	7	5	○	安 山 岩
	338	505	11.9	8.7	○	安 山 岩
	339	330	8.7	7.5	○	安 山 岩
	340	150	5.8	5.2	○	安 山 岩
	341	390	8.9	7.6	○	安 山 岩
	342	135	6.1	5.9	○	安 山 岩
	343	170	7.8	6.1	○	安 山 岩
	344	2500	19.6	13.0	○	安 山 岩
	346	150	7.1	6.2	○	安 山 岩
	347	530	11.3	8.1	○	安 山 岩
	348	120	6.5	5.9	○	安 山 岩
	349	130	5.7	5.5	○	安 山 岩
	350	20	3.8	3.6	○	安 山 岩
	351	210	10.4	5.3	○	安 山 岩
	352	135	6.0	4.7	○	安 山 岩
	354	160	7.6	6.4	○	砂 岩
	355	50	6.0	3.9	○	真 岩
	356	130	8.3	5.2	○	安 山 岩
	357	1245	13.3	10.1	○	安 山 岩
	358	210	6.4	4.9		安 山 岩
	360	180	7.7	4.5	○	安 山 岩
	361	145	6.2	5.5	○	安 山 岩
	362	135	6.5	5.5	○	安 山 岩
	363	520	10.3	7.4		安 山 岩
	364	30	4.8	4.2	○	砂 岩
	365	130	6.9	5.0	○	安 山 岩
	367	140	6.6	4.8	○	安 山 岩
	368	135	8.3	4.1	○	安 山 岩
	369	85	5.6	4.8	○	安 山 岩
	370	120	7.9	6.6	○	安 山 岩
	371	205	9.4	5.6	○	安 山 岩
	373	660	10.5	9.1		安 山 岩
	374	170	7.1	5.5	○	安 山 岩
	376	445	8.9	8.5	○	安 山 岩
	377	155	6.3	5.2	○	安 山 岩
	378	30	4.6	3.7	○	安 山 岩
	379	208	7.0	6.0	○	安 山 岩
	380	15	-	-		軽 石
	381	105	6.9	4.9	○	安 山 岩
	382	185	8.5	5.4	○	安 山 岩
	384	172	8.4	5.3	○	安 山 岩
	385	75	5.1	4.2	○	安 山 岩
	386	155	7.4	5.5	○	安 山 岩
	386	222	9	6	○	安 山 岩
	387	195	8.5	6.6	○	安 山 岩
	388	300	8.2	7.0	○	安 山 岩
	389	510	10.8	9.1	○	安 山 岩
	390	175	7.6	5.2	○	安 山 岩
	391	200	7.1	7.0	○	安 山 岩
	393	415	10.7	5.2		安 山 岩

第12表 A地区集石礫一覽表(5)

集石No.	礫No.	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	被加熱	石 材
A-7	395	80	6.0	4.6	○	安 山 岩
	397	405	10.4	7.7	○	砂 岩
	398	160	7.7	4.9	○	砂 岩
	400	120	6.8	4.7	○	安 山 岩
	401	125	5.5	5.4	○	安 山 岩
	402	110	6.8	5.5	○	安 山 岩
	402	15	4	3	○	安 山 岩
	404	490	9.8	6.5	○	安 山 岩
	404	10	4	2		安 山 岩
	405	90	5.7	3.8	○	安 山 岩
	406	280	9.5	7.0	○	安 山 岩
	407	170	7.8	5.8	○	安 山 岩
	409	90	6.6	5.8	○	安 山 岩
	411	440	10.0	8.4	○	安 山 岩
	412	230	9.2	6.8	○	安 山 岩
	412	690	14	12	○	安 山 岩
	413	320	10.4	6.5	○	安 山 岩
	413	235	7	6		安 山 岩
	414	270	7.7	6.9	○	安 山 岩
	414	235	7	6	○	安 山 岩
	415	90	6.6	5.0	○	安 山 岩
	416	105	-	-	○	安 山 岩
	418	120	7.1	5.6	○	砂 岩
	419	230	8.0	6.2	○	安 山 岩
	420	330	8.1	6.5	○	砂 岩
	421	200	8.6	7.0	○	安 山 岩
	423	150	7.2	5.6		安 山 岩
	424	370	9.5	7.7	○	安 山 岩
	425	440	10.6	7.0	○	安 山 岩
	426	200	9.1	5.0	○	安 山 岩
	427	140	9.2	4.5	○	砂 岩
	428	75	5.5	4.4	○	砂 岩
	429	140	7.8	5.5	○	安 山 岩
	431	20	4.4	3.0	○	砂 岩
	431	175	8	6	○	安 山 岩
	432	320	8.7	7.0	○	安 山 岩
	433	345	9.4	8.2	○	安 山 岩
	434	205	7.9	5.6	○	安 山 岩
	438	110	5.9	5.0	○	頁 岩
	440	55	8.7	4.5	○	砂 岩
	441	20	5.1	2.6	○	砂 岩
	443	220	7.7	6.0	○	安 山 岩
	444	85	6.5	4.1	○	砂 岩
	445	115	7.8	5.5	○	安 山 岩
	447	575	9.4	8.6	○	安 山 岩
	448	60	5.7	5.3	○	砂 岩
	450	210	8.6	5.6	○	安 山 岩
	450	100	7	5	○	安 山 岩
	451	165	7.2	6.2	○	安 山 岩
	452	210	8.0	6.0	○	安 山 岩
	453	185	8.3	6.1	○	安 山 岩
	454	70	5.6	4.5	○	安 山 岩
	455	255	9.9	6.1	○	安 山 岩
	456	220	8.8	6.4	○	安 山 岩
	456	280	9	7	○	安 山 岩
	457	240	6.9	6.2	○	安 山 岩
	459	55	4.7	3.9	○	安 山 岩
	460	120	6.9	5.1	○	安 山 岩
	461	30	4.7	3.3	○	安 山 岩
	462	58	5.4	4.7	○	砂 岩
	463	375	9.7	8.6	○	安 山 岩

集石No.	礫No.	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	被加熱	石 材
A-7	464	7	10.2	8.6	○	安 山 岩
	465	160	7.5	5.5	○	砂 岩
	467	330	9.0	6.3	○	安 山 岩
	468	380	15.5	4.9	○	安 山 岩
	468	270	8	8	○	安 山 岩
	470	45	4.8	4.4	○	安 山 岩
	471	200	8.5	5.7	○	安 山 岩
	472	350	10.3	7.6	○	安 山 岩
	472	750	15	10	○	安 山 岩
	473	235	7.4	6.0	○	安 山 岩
	476	70	5.0	4.5	○	安 山 岩
	477	275	7.5	6.4	○	安 山 岩
	478	490	11.0	10.9	○	安 山 岩
	479	40	7.2	5.1	○	砂 岩
	481	40	5.3	3.7	○	砂 岩
	482	125	6.4	5.4	○	安 山 岩
	483	150	7.9	5.0	○	安 山 岩
	485	50	5.2	4.5	○	安 山 岩
	488	70	6.5	4.4	○	安 山 岩
	491	60	4.3	3.6		安 山 岩
A-8	1	505	10.0	9.3	○	安 山 岩
	2	128	6.3	5.8	○	安 山 岩
	3	340	9.2	6.8	○	安 山 岩
	4	118	7.0	5.2	○	安 山 岩
	5	112	5.5	4.4	○	安 山 岩
	6	400	10.0	7.1	○	安 山 岩
	7	110	6.4	4.3	○	安 山 岩
	8	965	14.5	9.0	○	安 山 岩
	9	188	6.9	5.2	○	安 山 岩
	10	158	7.2	5.9	○	安 山 岩
	11	385	10.9	9.4	○	安 山 岩
	12	70	5.8	4.0	○	安 山 岩
	13	90	6.0	4.5	○	安 山 岩
A-9	1	280	9.6	5.9	○	砂 岩
	2	125	6.3	5.6	○	砂 岩
	3	460	8.5	6.7	○	安 山 岩
	4	352	10.3	6.7	○	安 山 岩
	5	575	9.5	8.5	○	安 山 岩
	6	2100	16.3	11.5	○	安 山 岩
	7	599	13.7	8.6	○	安 山 岩
	8	445	10.1	9.9	○	安 山 岩
	9	190	10.4	7.0	○	安 山 岩
	10	130	9.6	5.2	○	安 山 岩
	11	90	5.7	4.4	○	安 山 岩
	12	65	5.4	4.2	○	安 山 岩
	13	325	9.5	8.3	○	安 山 岩
	14	280	8.6	8.3	○	砂 岩
	15	310	8.2	7.8	○	安 山 岩
	16	240	7.5	5.2	○	安 山 岩
	17	295	10.2	7.1	○	安 山 岩
	18	225	8.4	6.3	○	安 山 岩
	19	250	9.6	5.4	○	砂 岩
	20	350	9.1	8.5	○	安 山 岩
	21	505	11.0	9.4	○	安 山 岩
	22	320	10.8	7.4	○	安 山 岩
	23	1385	17.8	8.8	○	安 山 岩
	24	230	9.3	7.1	○	安 山 岩
	25	99	6.8	4.0	○	砂 岩
	26	90	4.7	4.1	○	黑 曜 石
	27	148	7.1	5.8	○	安 山 岩
	28	435	9.0	8.2	○	安 山 岩



第55図 集石 8～10号

第13表 A地区集石礫一覽表(6)

集石No.	礫No.	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	被加熱	石 材
A-9	29	360	10.3	8.5	○	安 山 岩
	30	185	6.8	6.3	○	安 山 岩
	31	305	10.2	6.1	○	安 山 岩
	32	599	11.4	9.1	○	安 山 岩
	33	250	7.5	6.5	○	安 山 岩
	34	775	14.8	10.4	○	安 山 岩
	35	120	-	-	○	安 山 岩
	36	630	13.4	7.5	○	安 山 岩
	37	95	7.4	4.2	○	砂 岩
	38	160	6.9	6.1	○	安 山 岩
	39	565	10.9	10.4	○	安 山 岩
	40	20	4.8	3.7	○	安 山 岩
	41	1310	17.5	12.0	○	安 山 岩
	42	375	10.6	10.3	○	安 山 岩
	43	350	8.2	7.4	○	黒 曜 石
	44	220	9.6	5.8	○	安 山 岩
	45	620	12.0	9.2	○	安 山 岩
	46	150	-	-	○	安 山 岩
	47	180	10.6	6.6	○	真 岩
	48	600	12.4	10.5	○	安 山 岩
	49	75	5.9	5.4	○	安 山 岩
	50	200	8.9	5.2	○	安 山 岩
	51	280	9.4	5.9	○	砂 岩
	52	290	-	-	○	安 山 岩
	53	125	-	-	○	安 山 岩
	54	1700	15.2	12.5	○	安 山 岩
	55	190	7.9	5.2	○	砂 岩
	56	430	10.8	9.6	○	安 山 岩
	57	255	9.1	6.6	○	安 山 岩
	58	98	-	-	○	安 山 岩
	59	585	11.5	10.6	○	安 山 岩
	60	180	6.2	5.5	○	砂 岩
	61	290	6.7	6.5	○	安 山 岩
	62	220	9.1	6.0	○	安 山 岩
	63	75	5.5	4.2	○	砂 岩
	64	165	7.8	6.6	○	安 山 岩
	65	59	6.2	4.6	○	砂 岩
	66	140	6.1	4.9	○	安 山 岩
	67	155	7.3	4.2	○	安 山 岩
	68	85	5.9	3.7	○	安 山 岩
	69	485	11.0	8.5	○	安 山 岩
	70	180	7.7	7.0	○	安 山 岩
	71	35	4.6	3.2	○	砂 岩
	72	150	7.0	5.4	○	安 山 岩
	73	25	-	-	○	安 山 岩
	1	660	13.4	10.4	○	安 山 岩
	2	250	9.3	5.4	○	安 山 岩
	3	340	9.8	7.6	○	安 山 岩
	4	520	9.8	6.4	○	安 山 岩
	5	135	8.2	4.4	○	安 山 岩
	6	110	7.9	7.2	○	安 山 岩
	7	10	3.4	2.7	○	安 山 岩
	8	125	6.5	4.8	○	安 山 岩
	9	290	8.6	6.9	○	安 山 岩
	10	230	7.5	6.7	○	安 山 岩
	11	315	7.7	6.9	○	安 山 岩
	12	215	13.4	8.5	○	安 山 岩
	13	180	7.2	5.8	○	安 山 岩
	14	1695	14.9	14.0	○	安 山 岩
	15	250	8.3	7.7	○	安 山 岩
	16	140	6.6	5.5	○	安 山 岩

集石No.	礫No.	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	被加熱	石 材
A-10	17	170	7.3	5.8	○	安 山 岩
	18	245	8.7	5.9	○	安 山 岩
	19	160	8.4	5.0	○	安 山 岩
	20	10	3.4	2.0	○	安 山 岩
	21	90	6.4	6.0	○	安 山 岩
	22	245	11.4	6.2	○	安 山 岩
	23	190	8.2	5.5	○	安 山 岩
	24	170	7.5	6.6	○	安 山 岩
	25	70	6.6	5.5	○	砂 岩
	26	265	8.7	6.4	○	安 山 岩
	28	33	4.9	4.2	○	安 山 岩
	29	50	4.3	3.4	○	安 山 岩
	30	132	6.3	4.9		安 山 岩
	31	195	7.1	5.0		安 山 岩
	32	30	4.1	3.0	○	安 山 岩
	33	260	7.7	6.6	○	安 山 岩
	34	330	7.6	7.4		安 山 岩
	35	130	7.2	4.3	○	真 岩
	36	45	6.1	3.9	○	安 山 岩
	37	465	9.0	8.0		安 山 岩
	38	385	10.5	7.5	○	安 山 岩
	39	30	6.2	2.8		安 山 岩
	40	220	7.0	6.7	○	安 山 岩
	41	40	3.9	3.3		安 山 岩
	42	205	7.4	6.5	○	安 山 岩
	43	95	6.8	5.5	○	安 山 岩
	44	275	7.9	6.6		安 山 岩
	45	260	9.8	6.2		安 山 岩
	46	200	9.1	5.5	○	安 山 岩
	47	170	8.8	6.7	○	安 山 岩
	48	170	7.5	6.3	○	安 山 岩
	49	125	5.8	5.4		安 山 岩
	50	140	6.8	5.6	○	砂 岩
	51	215	7.0	5.8	○	安 山 岩
	52	149	6.0	5.2	○	安 山 岩
	53	235	6.8	6.4		安 山 岩
	54	90	5.6	4.3	○	安 山 岩
	55	272	8.3	7.1	○	安 山 岩
	56	150	6.5	5.8	○	安 山 岩
	57	110	6.6	6.2		安 山 岩
	58	190	8.8	5.1	○	安 山 岩
	59	48	4.4	3.3		安 山 岩
	60	255	10.5	6.4	○	安 山 岩
	61	55	6.5	5.3		安 山 岩
	62	190	7.8	5.6		安 山 岩
	63	587	11.5	8.2		安 山 岩
	65	230	8.5	5.4	○	安 山 岩
	66	75	5.5	4.3	○	安 山 岩
	67	120	6.8	5.2	○	安 山 岩
	68	405	11.2	6.5		安 山 岩
	69	122	6.4	6.1	○	安 山 岩
	70	155	6.6	5.9		安 山 岩
	71	170	9.7	6.1	○	安 山 岩
	72	160	8.5	6.1	○	安 山 岩
	73	240	6.1	6.0		安 山 岩
	74	175	8.0	6.5	○	砂 岩
	75	190	7.0	6.2	○	安 山 岩
	76	170	7.1	5.6		安 山 岩
	77	252	8.0	7.0	○	安 山 岩
	79	190	8.2	7.1	○	安 山 岩
	80	530	10.9	8.1	○	安 山 岩

第14表 A地区集石礫一覽表(7)

集石No.	礫No.	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	被加熱	石 材
A-10	81	28	4.3	2.1	○	安 山 岩
	82	120	7.2	6.3	○	安 山 岩
	83	260	9.2	6.1	○	安 山 岩
	84	245	9.3	6.4	○	安 山 岩
	85	350	9.3	7.4	○	安 山 岩
	86	120	6.9	4.8		安 山 岩
	87	100	7.4	5.5	○	安 山 岩
	88	90	5.8	4.6	○	安 山 岩
	89	175	6.7	5.9	○	安 山 岩
	90	150	6.3	6.0	○	砂 岩
	91	160	8.8	5.6	○	安 山 岩
	92	320	9.7	5.8	○	砂 岩
	93	30	3.6	2.5	○	安 山 岩
	94	120	5.6	4.3	○	安 山 岩

集石No.	礫No.	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	被加熱	石 材
A-10	95	200	7.9	5.1	○	安 山 岩
	96	500	10.3	7.7	○	安 山 岩
	97	150	6.5	6.0	○	安 山 岩
	98	200	8.8	5.7	○	安 山 岩
	99	295	9.9	7.6	○	安 山 岩
	100	230	6.8	6.4	○	砂 岩
	101	240	7.7	6.4	○	安 山 岩
	102	150	6.3	5.2		安 山 岩
	103	180	6.9	6.2		安 山 岩
	104	95	7.4	4.6	○	安 山 岩
	105	215	8.2	5.1		安 山 岩
	106	10	4.5	2.3	○	安 山 岩
	108	289	7.8	6.0		安 山 岩

(3) 連穴土坑

前原遺跡のA地区からは、5基の連穴土坑が検出された。いずれも2つの土坑がトンネルで繋がったもので、トンネルの上部、いわゆるブリッジ部分が残ったものを連穴土坑として取り上げた。ブリッジが崩落した可能性のある土坑については、次項で述べることにする。

5基はいずれもVI層（薩摩火山灰層）上面で検出されたもので、ブリッジ部分が薩摩火山灰の硬化した軽石部分となっている。埋土は黄色パミスを若干含む黒褐色土をベースとしているが、床面近くでは、暗茶褐色の粘質土がみられるものもある。

遺構の壁面や床面、ブリッジの天井部等からは、土坑内で火を用いた痕跡を確認することができなかった。また、埋土中からも炭化物や焼土等が検出されることは無かった。

連穴土坑の検出状況としては、5基が比較的分散した状態でまとまりはみられない。ただ、いずれの連穴土坑も、小穴のほうが等高線の高い位置にあるという共通項はあった。

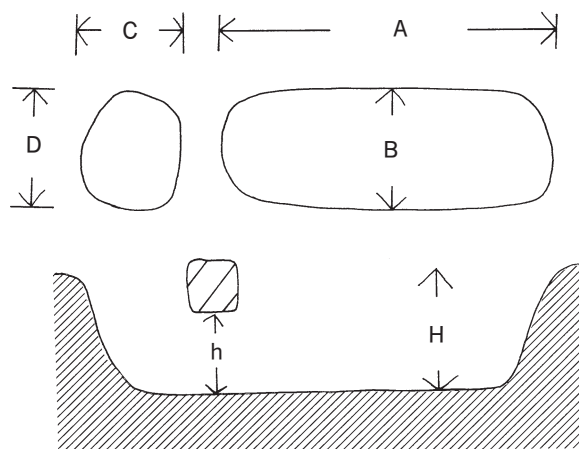
第15表やB地区の第25表で示したように、連穴土坑の計測については、鹿児島県で初めて検出され、「連穴土坑」という名称も初めて用いられた鹿児島市の加栗山遺跡の調査報告書で用いられた凡例を利用した。

右下に計測の模式図を掲載した。連穴土坑を構成する大穴と小穴の長軸×短軸を、それぞれA×B、C×Dとした。また、連穴土坑本体の深さをH、床面からブリッジの天井部までの高さをhとして計測を行った。連穴土坑本体の長軸が250cmを越えるものもあれば、100cmをやっと越えるものもある。大きさと機能の関係についても注目されるところである。

① 1号連穴土坑

1号はB・C29区で検出された。中央に現代の芋穴があり、多くを欠損した状態であった。

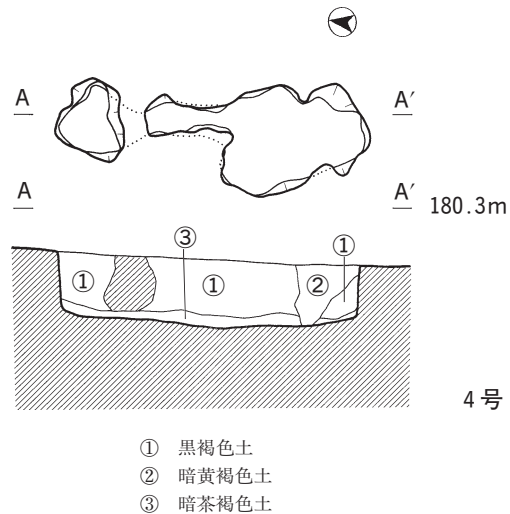
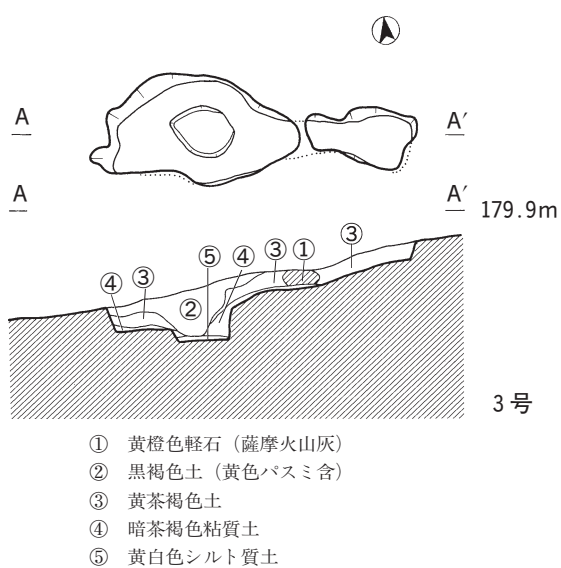
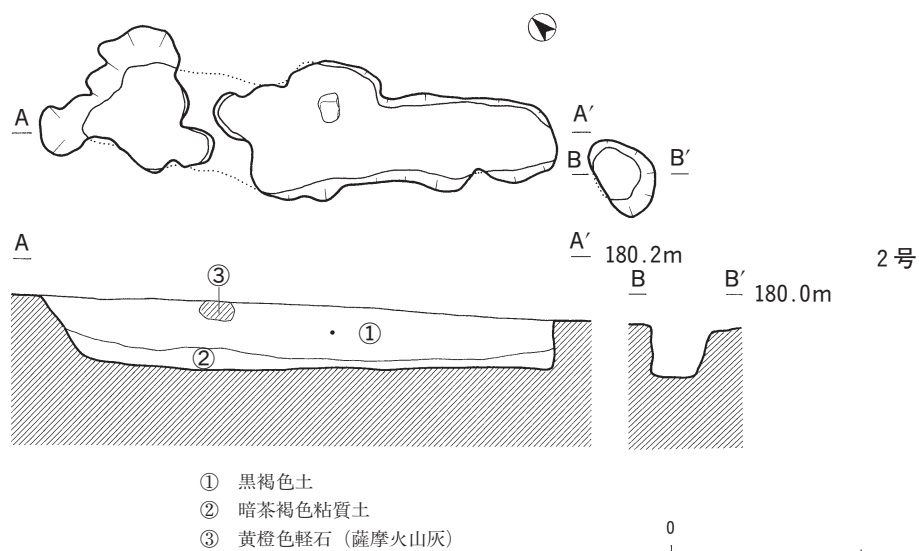
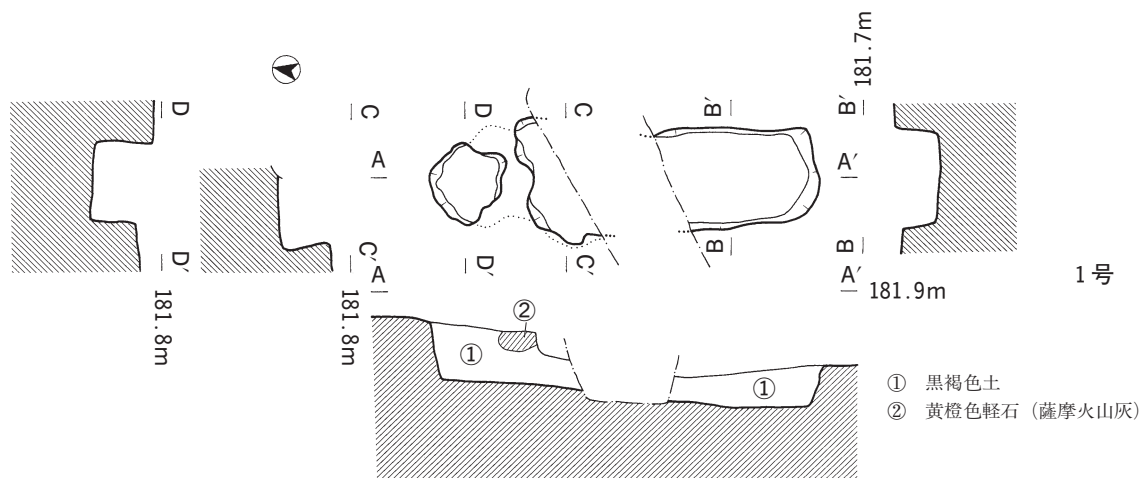
連穴土坑本体の長さは204cmを測る。検出された一帯は、茶畑造成のためにかなり削平が進んでいたところで、ブリッジはかろうじて残存していたという状態であった。実際は倍以上の深さがあったと考えられる。



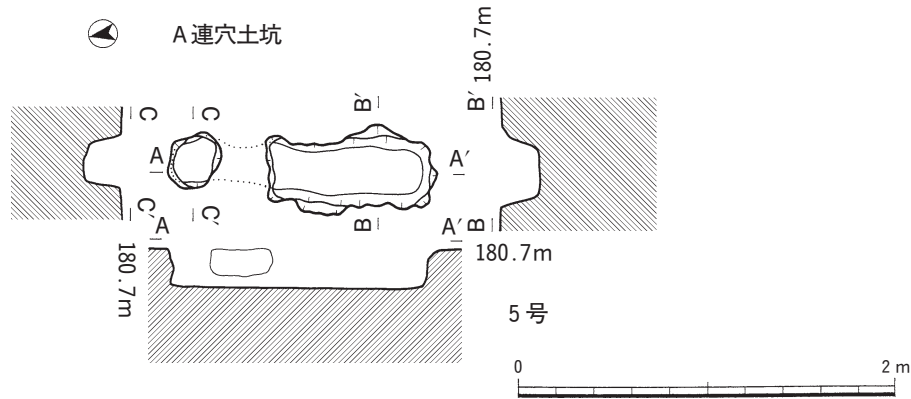
連穴土坑計測模式図

第15表 A地区検出の連穴土坑

遺 構 名	検出区	検 出 面	A×B	H	C×D	h	備 考	旧番号	挿図
1号連穴土坑	B・C29	VI層上面	150×53	19	43×38	17	一部欠	112	56
2号連穴土坑	E29	VI層上面	172×69	33	88×75	26	近接してピットあり	59	56
3号連穴土坑	C25	VI層上面	100×58	18	58×31	2	床面に浅いピットあり	138	56
4号連穴土坑	E27	VI層上面	115×58	32	41×31	4		95	56
5号連穴土坑	D27	VI層上面	85×42	20	27×24	5		120	57



第56図 連穴土坑 1～4



第57図 連穴土坑 5

② 2号連穴土坑

2号はE29区で、4号竪穴住居跡や41号土坑と近接して検出された。特に4号竪穴住居跡は、竪穴の周囲にピットが巡るタイプの住居跡で、ピットが本遺構の一部と重複している可能性があることは前述したとおりである。

連穴土坑本体の長さは272cmを測り、A地区の連穴土坑の中では最も大きいものである。長軸方向に1個のピットがあり、関係が注目される。

③ 3号連穴土坑

3号はC25区で検出された。B地区をのぞむ斜面上に位置している。残存状態は悪く、本体の深さは20cmにも満たない。また、床面とブリッジ天井部の高さが2cmと低いことや、大穴側の床面中央に浅いピットが検出されていることなどが特徴的である。

連穴土坑本体の長さは172cmと小型である。

④ 4号連穴土坑

4号はE27区で検出された。「ハ」字状に検出された竪穴住居跡の東西列に挟まれた部分に位置している。

連穴土坑本体の長さは167cmと3号同様に小型の遺構であるが、40cm近い深さがあり、残存状態は良好である。床面とブリッジ天井部の高さが4cmと低いが、ブリッジそのものは約30cmの厚さを保っている。この状態が実態により近いものと考えられる。ただし、大穴のブリッジ側に幅20cm弱で長さが約40cmの細長く伸びる部分がある。これは、ブリッジの一部が崩落した可能性も考えられる。そうすると、ブリッジが50cm以上もあり、他の連穴土坑との相違点として注目されるところである。

⑤ 5号連穴土坑

5号はD27区で検出された。4号と同様に東西の住居跡列に挟まれた部分に位置している。近接して19号土坑がある。

連穴土坑本体の長さが125cmと、A地区で検出された中では最も小型の連穴土坑である。大穴部分の短軸（幅）も24cmと狭い。また、床面とブリッジ天井部の高さも5cmと低い。しかし、小型ながらもブリッジの厚さが約15cmあり、連穴土坑全体の形状としては、A地区の中では最も安定した状態で検出されたものと考えることができよう。

(4) 土 坑

前原遺跡のA地区では、136基の土坑が検出された。第37図をみると、これらの土坑は、「ハ」字形に検出された竪穴住居跡の周辺部と、B地区をのぞむ斜面上、そしてB地区との間にある谷部分の3か所に集中していることがわかる。特に、B地区をのぞむ斜面からは、東西に連なるように土坑が検出されている。ほぼ平行して町道が走っていることを考慮すれば、削平された遺構も数多くあったものと考えられる。また、茶畑造成のために包含層がすでに削平されていたA・B26～30区付近は、検出された遺構こそ少ないものの、調査区で最も高い部分でもあることから、当時（縄文時代早期前半）においても、何らかの土地利用があったものと考えられる。

136基の土坑は、形態からいくつかのタイプに分けられそうであるが、あえてタイプ別の分類はしていない。136基のもつ特徴を整理しながら概要を紹介していきたい。

① 1～7号土坑

これらの土坑は、陥し穴としての機能が考えられるもので、2種類7基が検出された。

1つは隅丸長方形の平面プランをもつタイプで、1～3号が該当する。長軸が184～264cm、短軸が66～116cmと、細長い形態を呈している。検出面からの深さは66～110cmで、前原遺跡で検出された土坑の中では、最も深い数値をもっている。土坑の断面形をみると、1号が中位付近、2号と3号は底面付近がそれぞれ袋状に広がっている。底面で杭跡らしき小ピットは検出されていない。また、2号と3号からは炭化物が多く検出されていることも特徴的である。陥し穴以外の機能についても含みをもたせておきたい。

もう1つは、平面形が円形もしくは隅丸長方形を呈するもので、土坑の上位がラッパ状に大きく開くという特徴をもつタイプである。4～7号が該当する。土坑の直径および長軸が140～198cmで、深さが60～70cmとほぼ一定である。底面ではやはり杭跡状の小ピットを確認することができなかった。

興味深いのは、これらの土坑が検出された位置である。2号土坑を除き、すべてA地区とB地区の間にある谷部分から検出されているのである。特に4～7号の4基は南北にほぼ一直線（約46m）上に並んで検出されている。4号と5号間が28m、5号と7号間が22m、6号と7号間が6mの間隔をもつ。また、この一直線を挟んだ両側に1号と3号が長軸を平行にした状態で検出されている。一直線からはそれぞれ15m、11m離れたところで検出された。

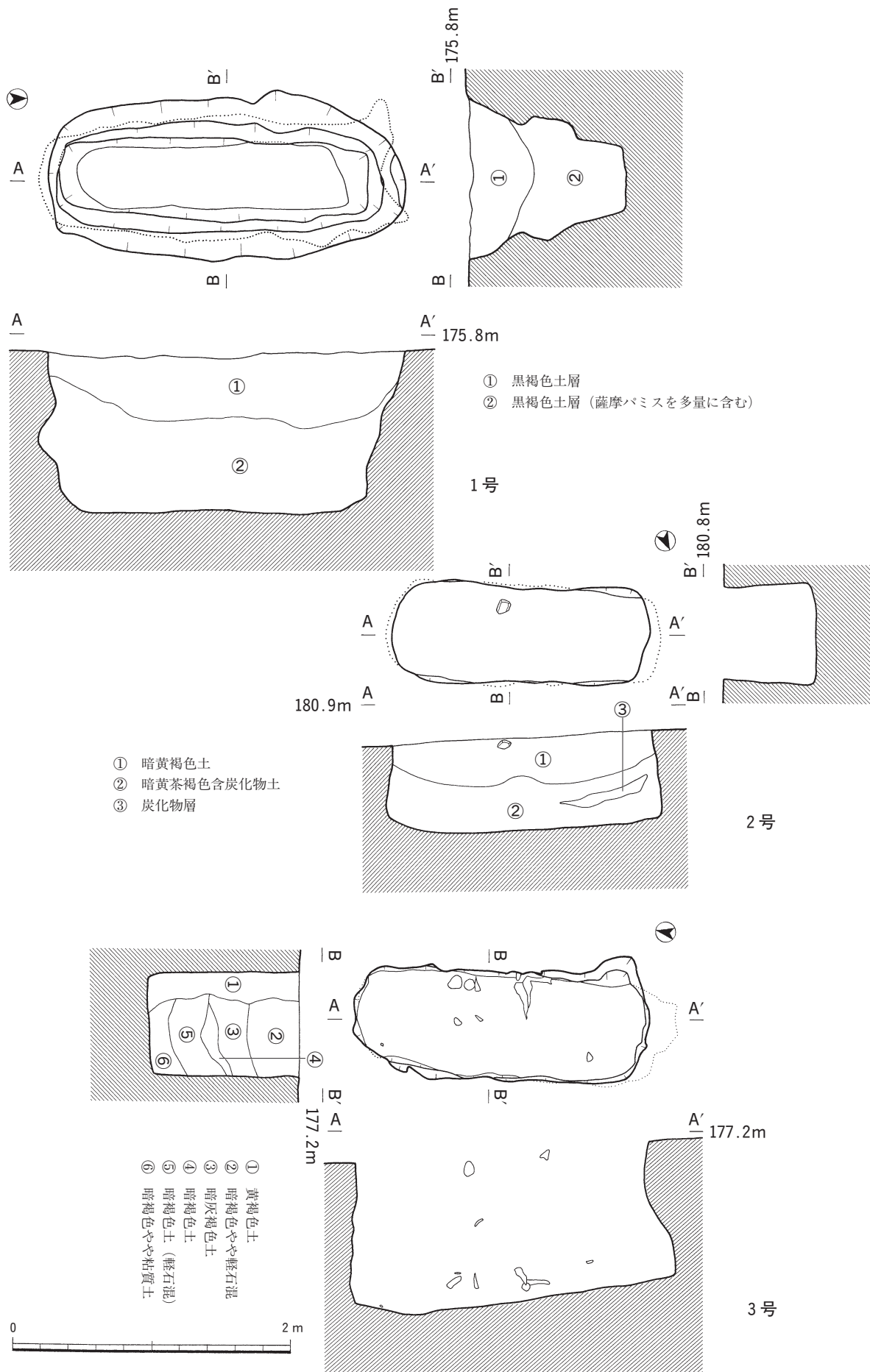
これら7基は、底面に小ピットこそ無いものの、形状や検出された位置関係から、陥し穴としての機能をもった土坑である可能性が高いと考えられよう。

また、これらの多くは黒褐色土をベースとする埋土をもつことから、縄文時代早期前半期のものと考えられるが、2号と3号については、時間的に下る可能性も考慮しておきたい。

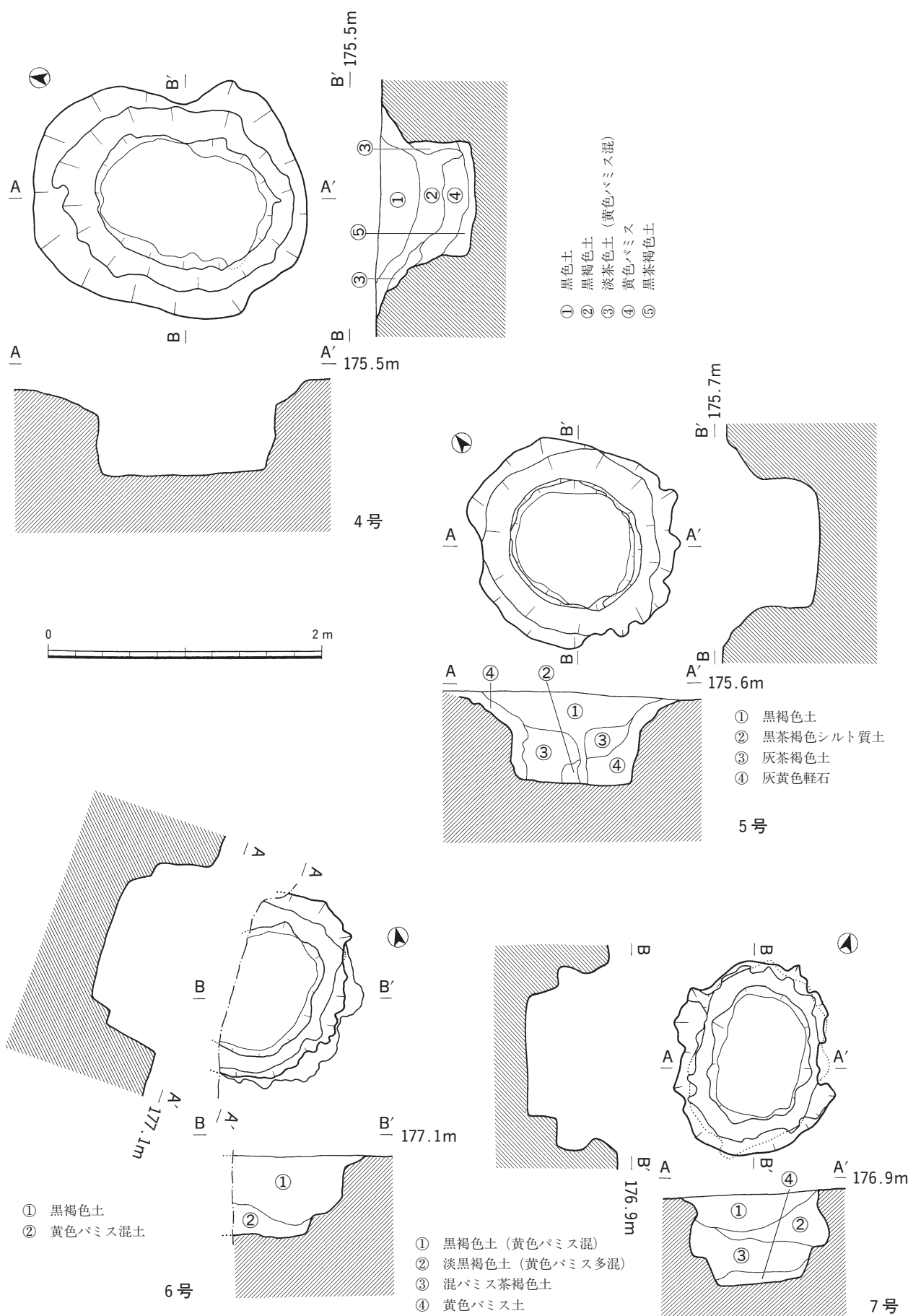
② 8～11号土坑、13～15号土坑、78号土坑、125～132号土坑、134号土坑

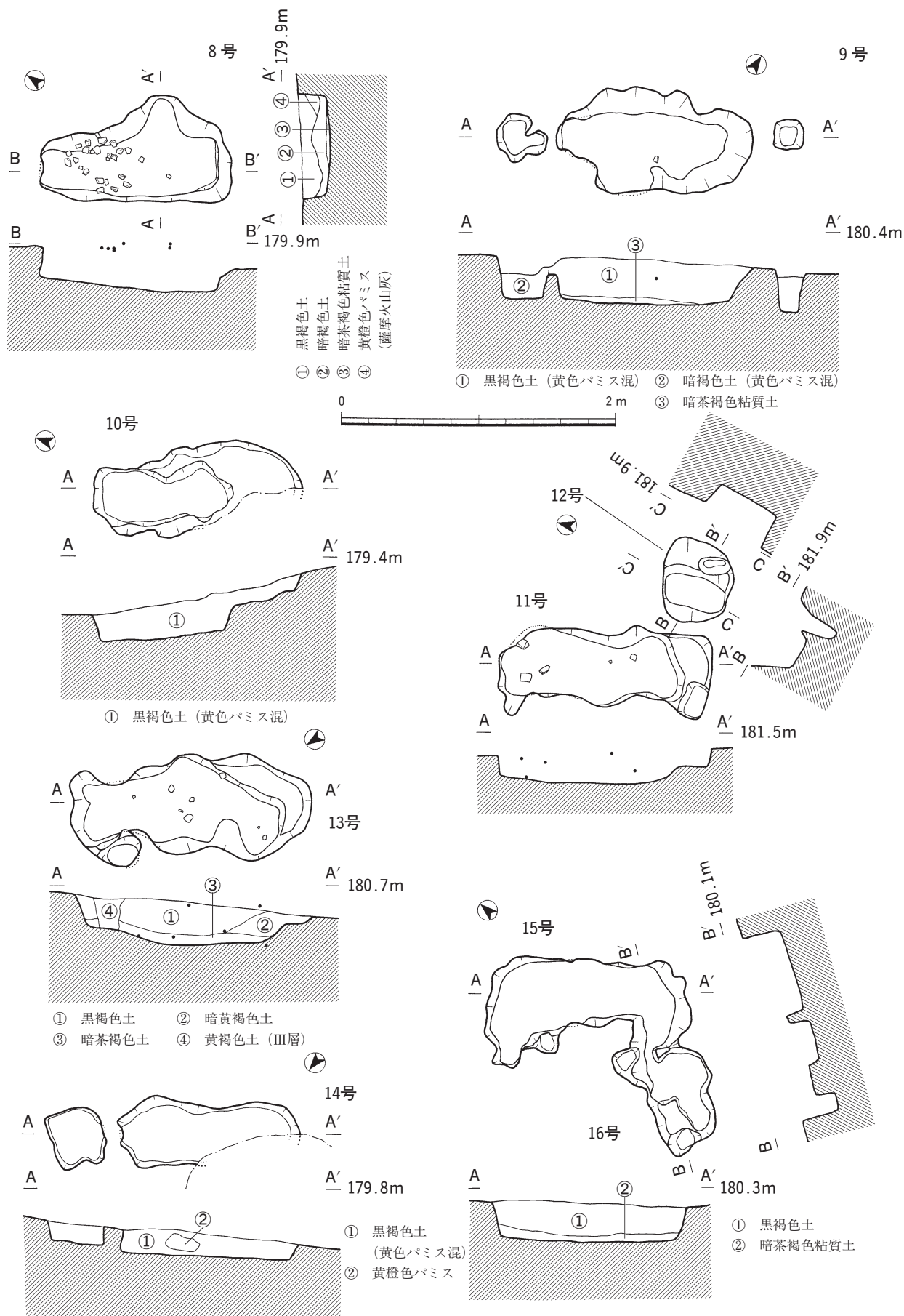
これらの土坑は、（隅丸）長方形の平面プランをベースとするものである。短軸÷長軸の数値が0.5以下、おおむね0.2～0.4に収まり、一見細長い感じのする平面形をもつ土坑である。

9号、13～15号、127号、130号、131号などは、前項で述べたように連穴土坑のブリッジが崩落したものである可能性も考えられる土坑である。9号と14号は、長軸側に隣接してピットが存在する。一見、連穴土坑の平面形のような感を抱くが、土坑とピットは繋がっていない。2号連穴土坑

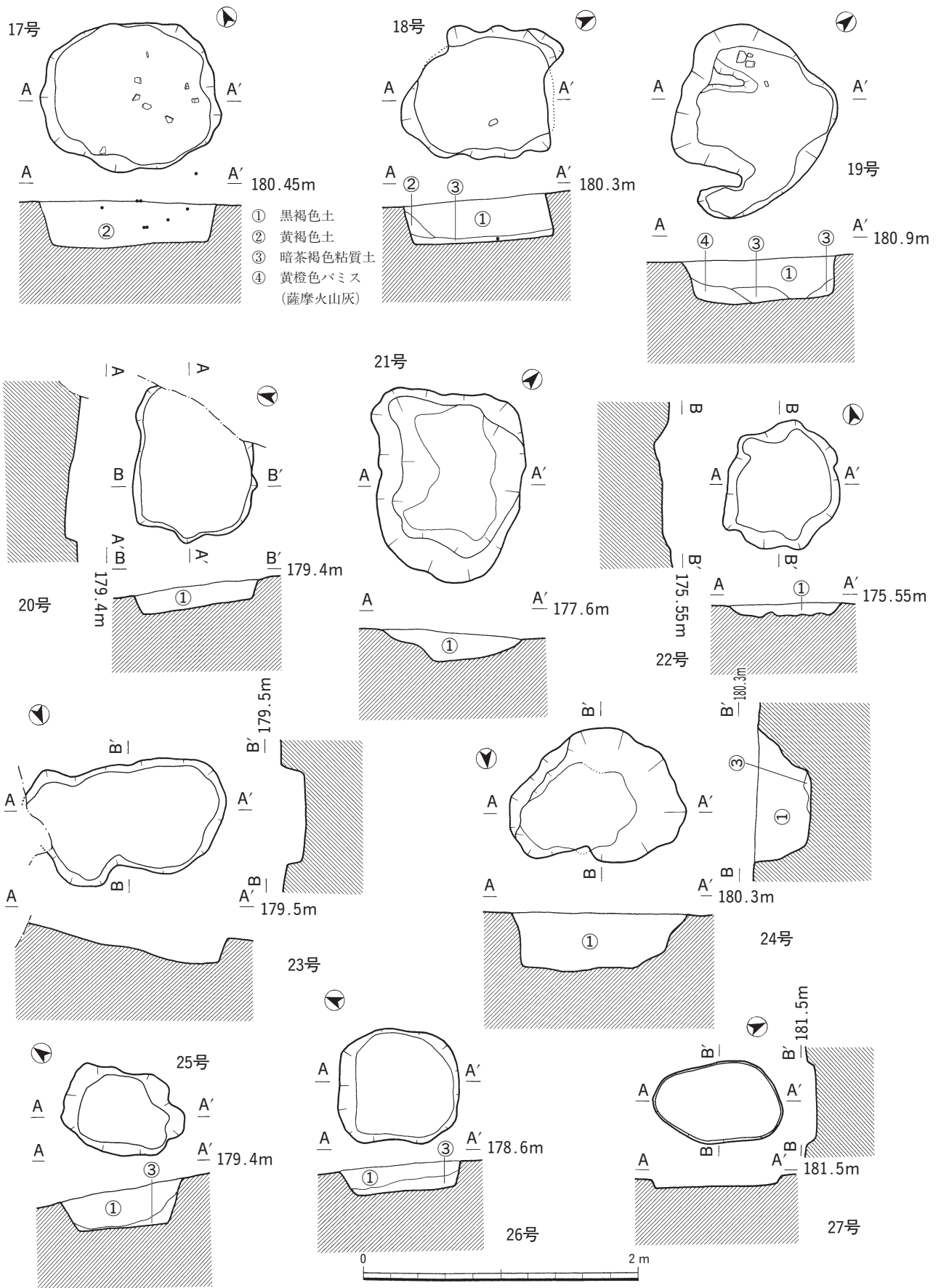


第58図 土坑(1)

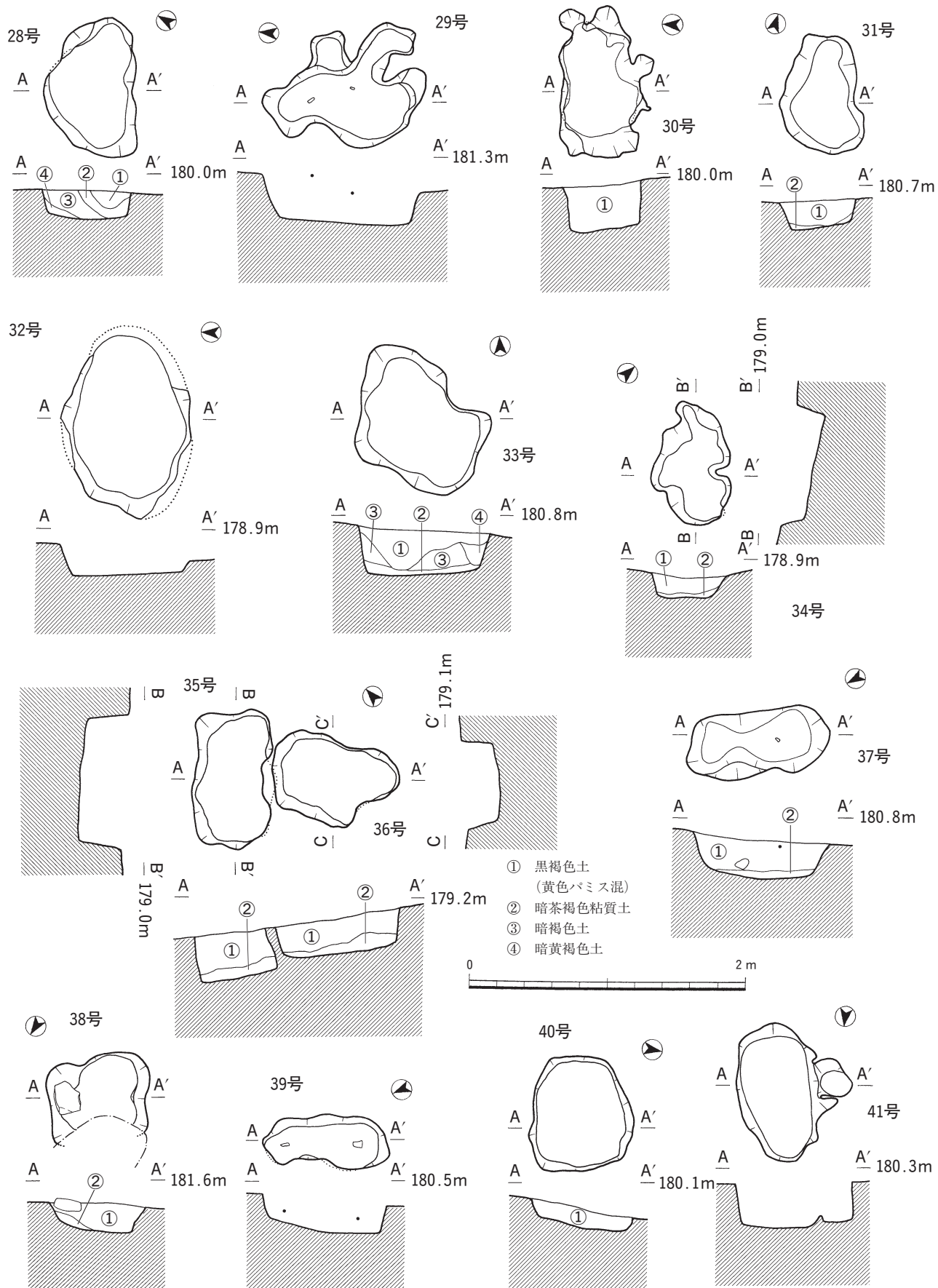




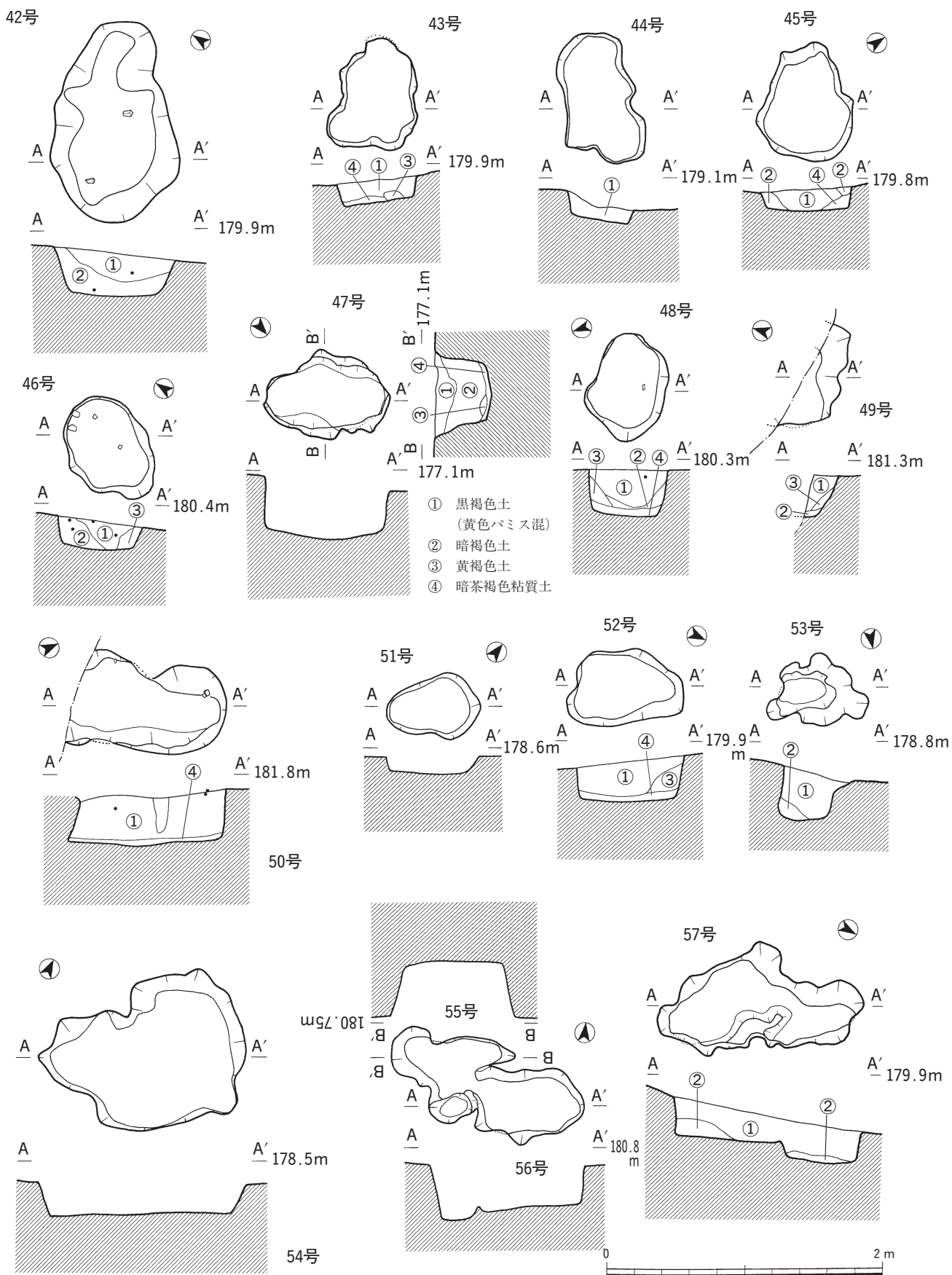
第60図 土坑(3)



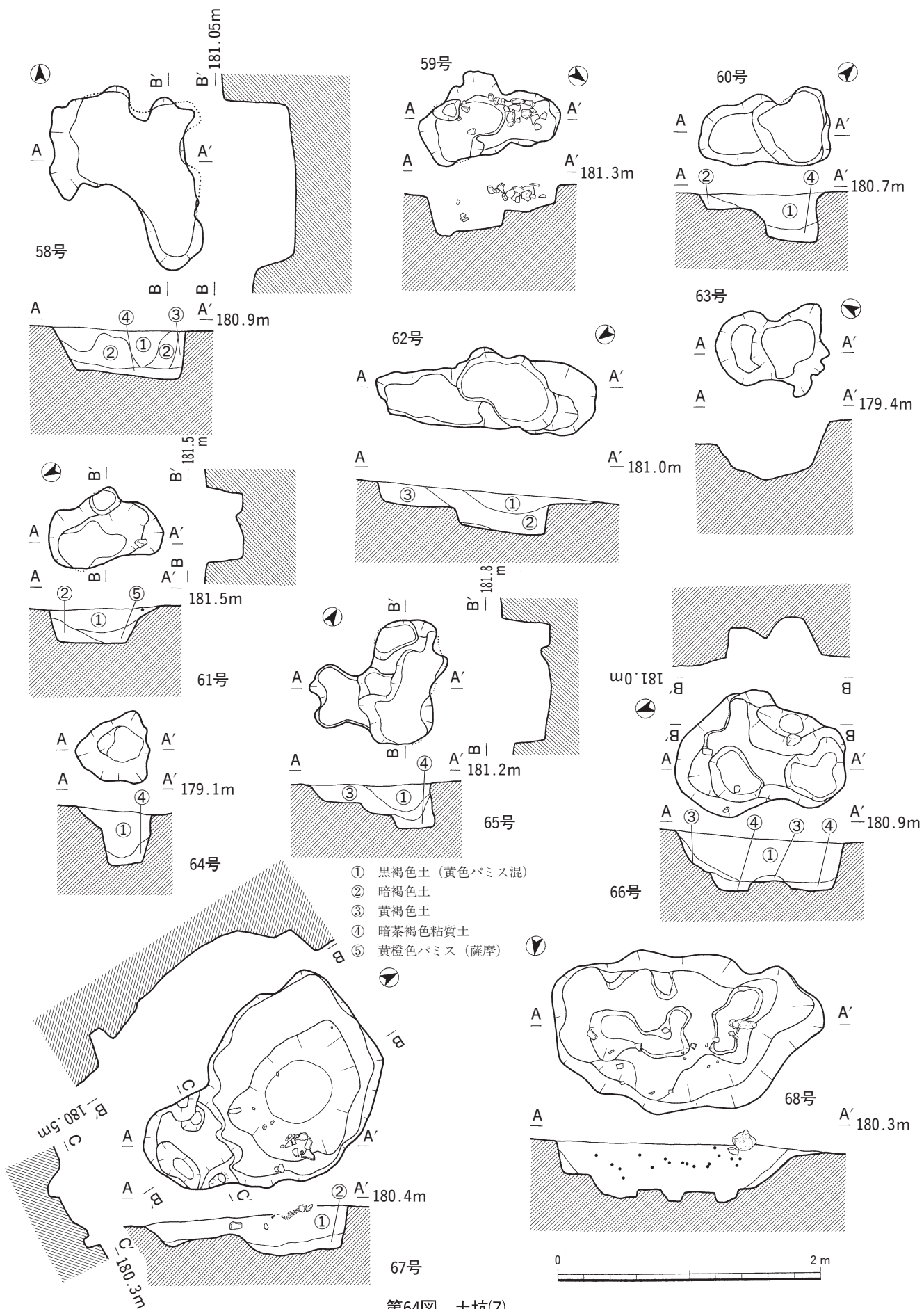
第61図 土坑(4)



第62図 土坑(5)



第63図 土坑(6)



第64図 土坑(7)

にも近接してピットが検出されていることから、関連が注目される。また、78号は、北側に隣接して2個の柱穴状ピットが検出されている。あわせて注意しておきたい事例である。

134号は、7号竪穴住居跡と重複して検出された土坑である。住居跡との前後関係は不明である。竪穴住居跡と重複して検出される連穴土坑は、加栗山遺跡や上野原遺跡などに類例があることから、本土坑がそれと同類のものである可能性も考えられよう。

11号からは、7類（石坂Ⅰ式）土器の口縁部片が出土している。

③17～58号土坑、77号土坑、95号土坑、133号土坑

これらの土坑は、平面プランが（楕）円形あるいは隅丸（長）方形、小判形等を呈するもので、検出された土坑の中では比較的小型のものである。底面はフラットで、ピットはみられない。35号と36号、55号と56号のように近接、重複して検出されたものもある。54号、57号や58号などは2基が重複している可能性もある。

18号、20号、26号、40号、133号は、四隅が丸くならず方形度が高い土坑で、平面形もほぼ正方形を呈している。

④59～76号土坑、79～86号土坑

これらの土坑は、平面形が比較的不定形で、底面に段差やピットが存在する土坑である。複数の土坑が重複した可能性のあるものも含まれている。

59号は底面に段差のある土坑で、4類（小牧3Aタイプ）土器の口縁部片が出土している。

62号、65号、67号、85号などは、2基あるいはそれ以上の土坑が重複している可能性もある。67号からは、検出面付近を中心に多くの遺物が出土している。中でも、口縁部下に楔形貼付文の名残と考えられる刺突文が施された5類（吉田Ⅱ式）土器の資料は、破片も大きく、良好な資料である。同様な資料は、近接して検出された68号からも出土している。2基の土坑から、個体の違う5類土器の好資料（3種）が出土しているということになる。

この68号は底面に2個のピットがあり、複雑な構造を呈している。同様に底面に複数の浅いピットをもつ土坑に、66号、69号、70号、73号、74号、82号、84号、86号などがある。

73号は長軸の底面両隅に柱穴状ピット（比較的深い）が存在する。土坑中央部も段差をもっており、かなり複雑な構造となっている。

76号は1つの土坑として取り扱っているが、少なくとも2基の土坑が重複している可能性が高い。これは79号、80号についてもいえることであるが、いずれもC・D27・28区で検出されており、土坑群としての捉え方も可能であろう。

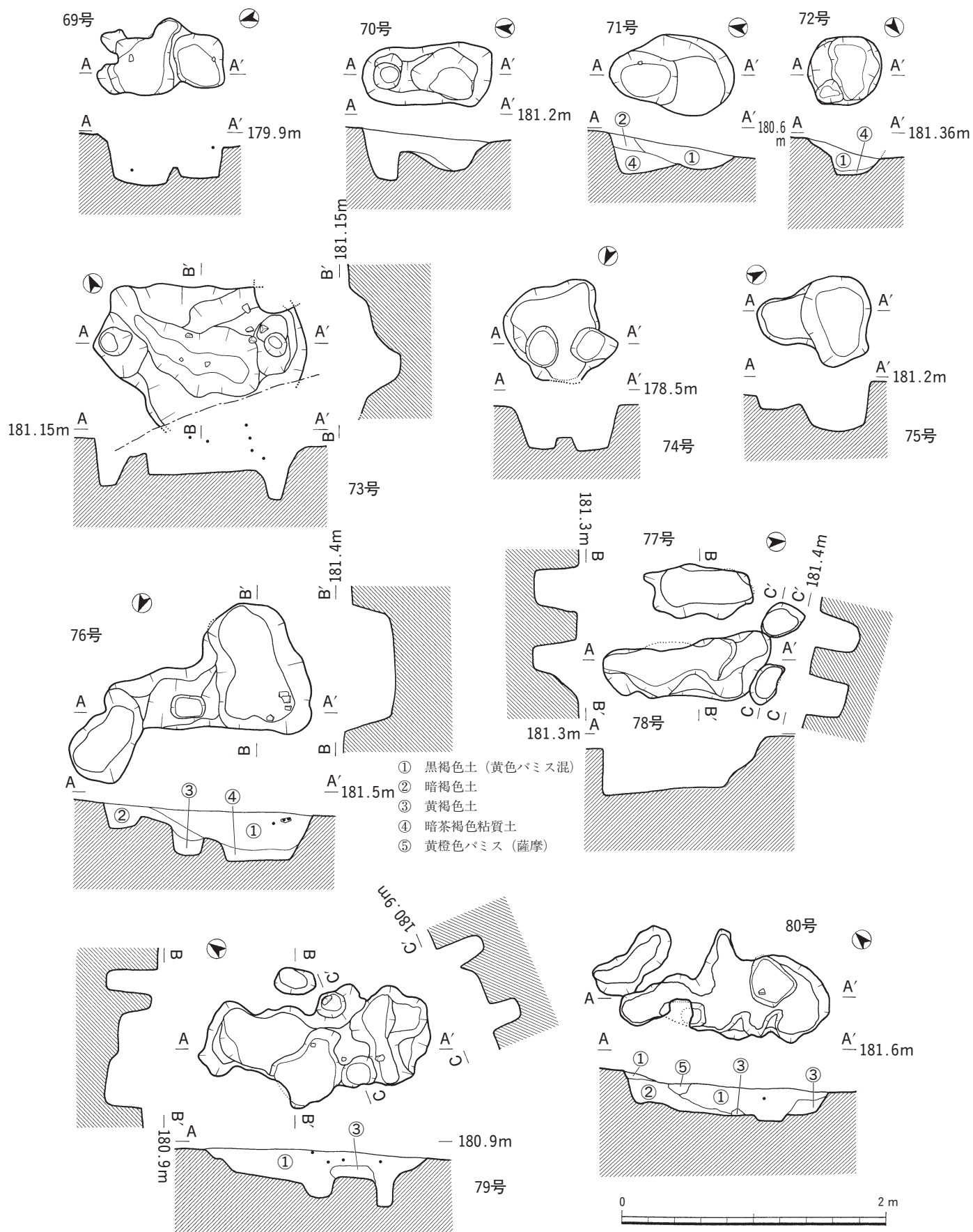
81号は底面中央にピットがある。82号や84号、86号は異なる平面形をもつが、底面に3個のピットがあるという共通項がある。

⑤87～94号土坑、96～114号土坑

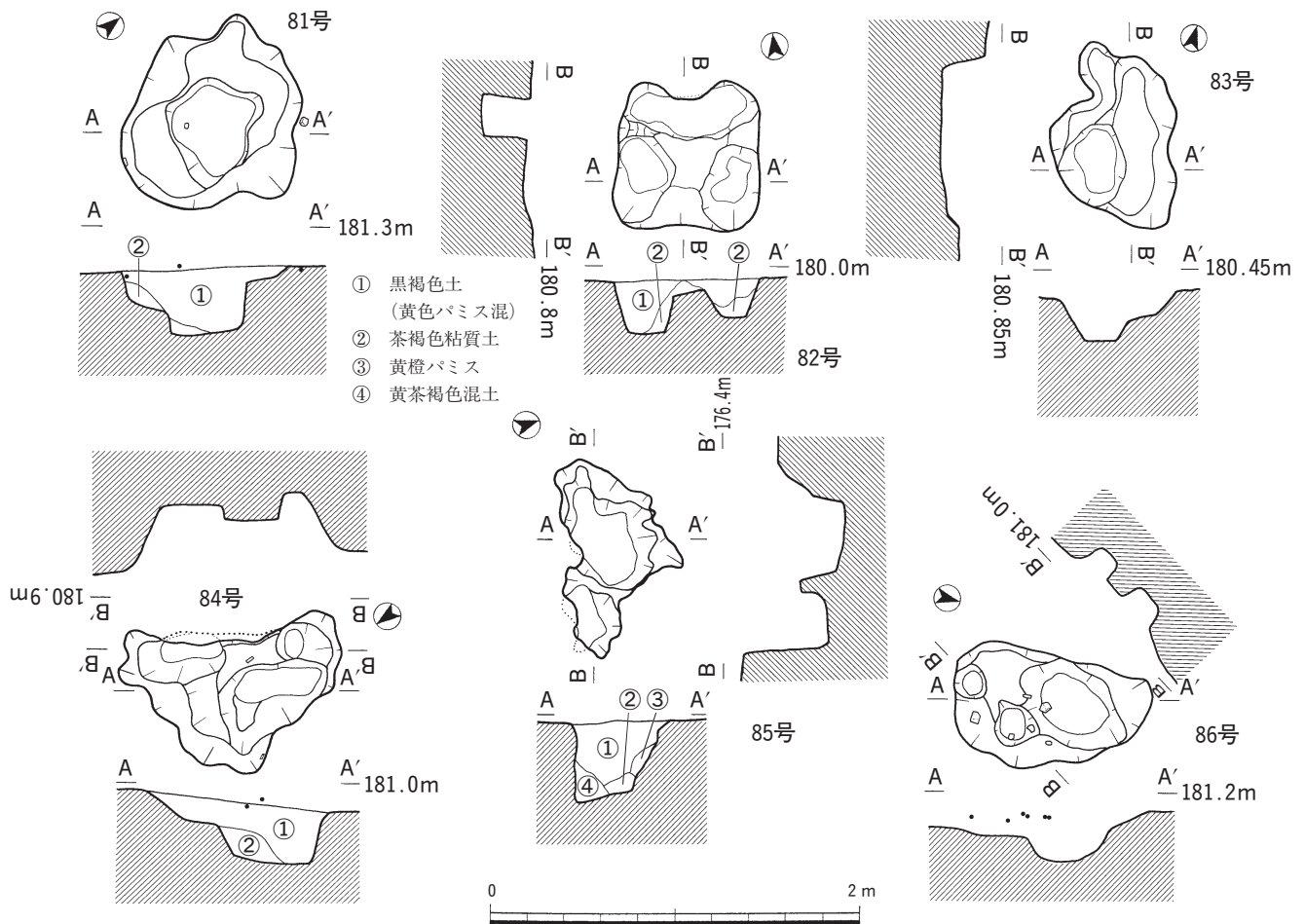
これらの土坑は、底面の中央あるいは壁際に深いピットをもつタイプである。典型的なのは88号や96号で、前原地区のC地区で多く検出されたタイプの土坑である。

このタイプの土坑は、C25・26区、E25・26区の2か所で集中的に検出されており、その機能もあわせて注目される遺構である。

87～90号、94号、96号、111号等のように底面の壁際に深いピットをもつもの、91号、101号、



第65図 土坑(8)



第66図 土坑(9)

104号、106号、113号、114号等のように底面のほぼ中央に深いピットをもつものなどがある。これらの深いピットの多くは、斜めに掘られている場合が多い。

93号は隅丸長方形の平面プランを呈する底面の両端で柱穴状ピットが検出されている。

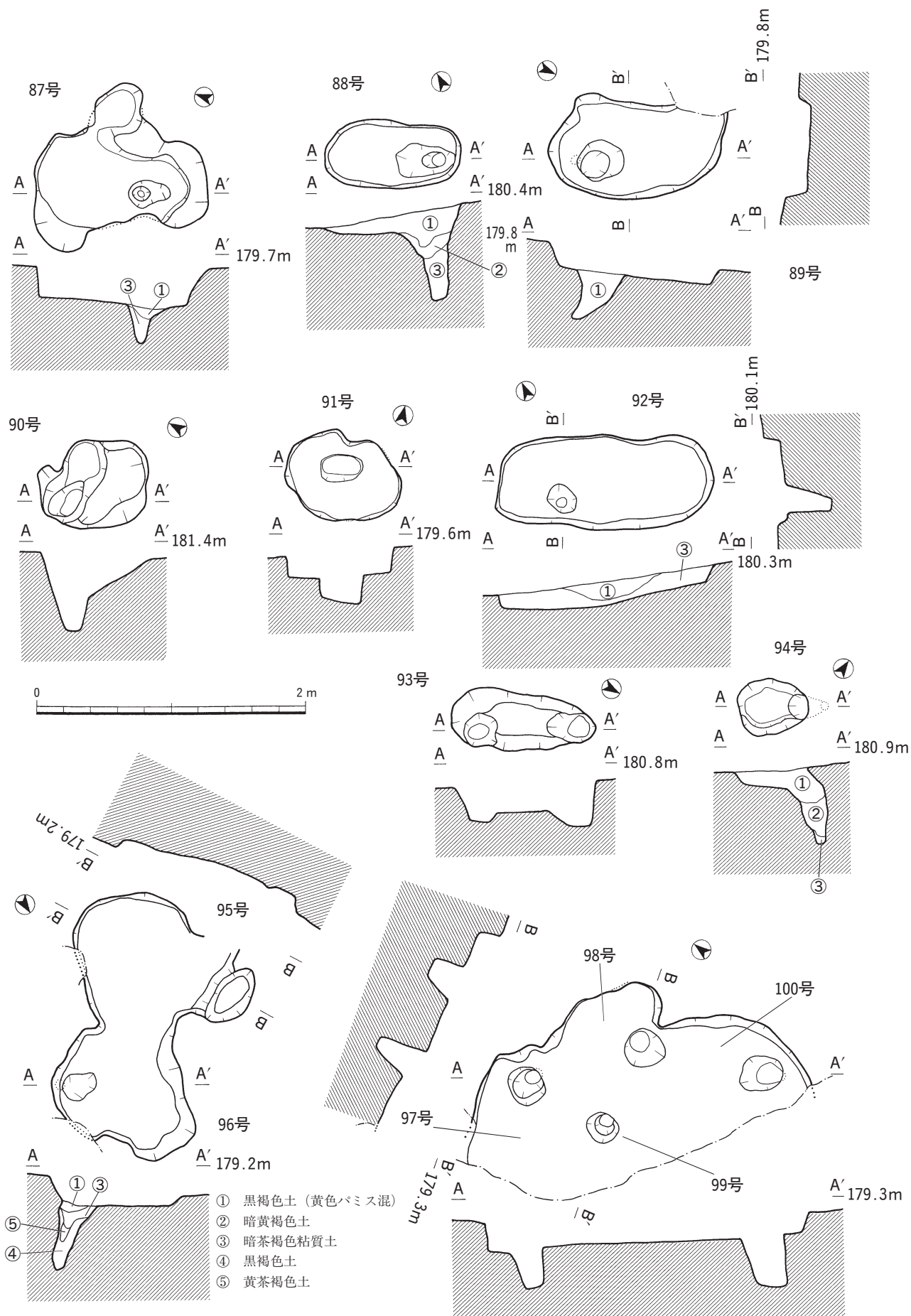
97～100号は、当初竪穴住居跡である可能性を考えていた。この遺構が、「ハ」字形に並ぶ住居跡のうち、西側の住居跡列の延長線上にあったこともその感を強くさせていた。しかし、床面で4個の柱穴状ピットが検出された。そしてそれらは、それぞれ斜めに掘られたピットであった。また、残存する遺構の掘り込みラインも、出入りの多いものであったことから、少なくとも4基の土坑が重複している遺構という捉え方に落ち着いた。それぞれの前後関係については不明である。99号を除く3基の土坑は、掘り込みラインとピットとの関係がおおむね捉えられそうである。

このような状況は、前原遺跡のC地区にもあり、この底面ピットをもつ土坑の機能を検討する上で注目すべき事例となろう。

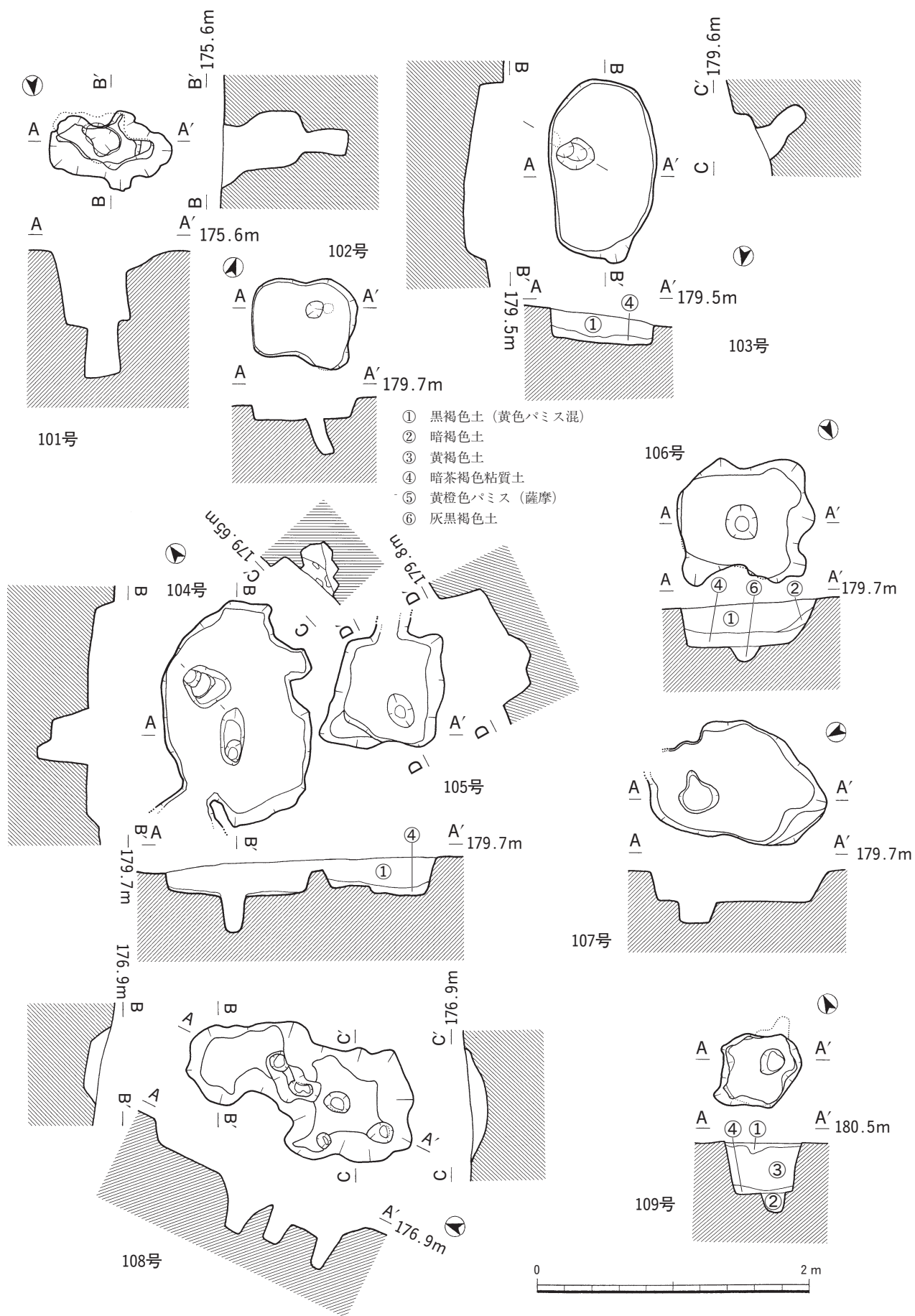
105号や106号などは、四隅が丸くならず、平面形がほぼ正方形を呈している。前述した18号や20号等と同様に方形度の高い土坑といえる。相違点は、底面ピットの有無だけである。

⑥115～124号土坑

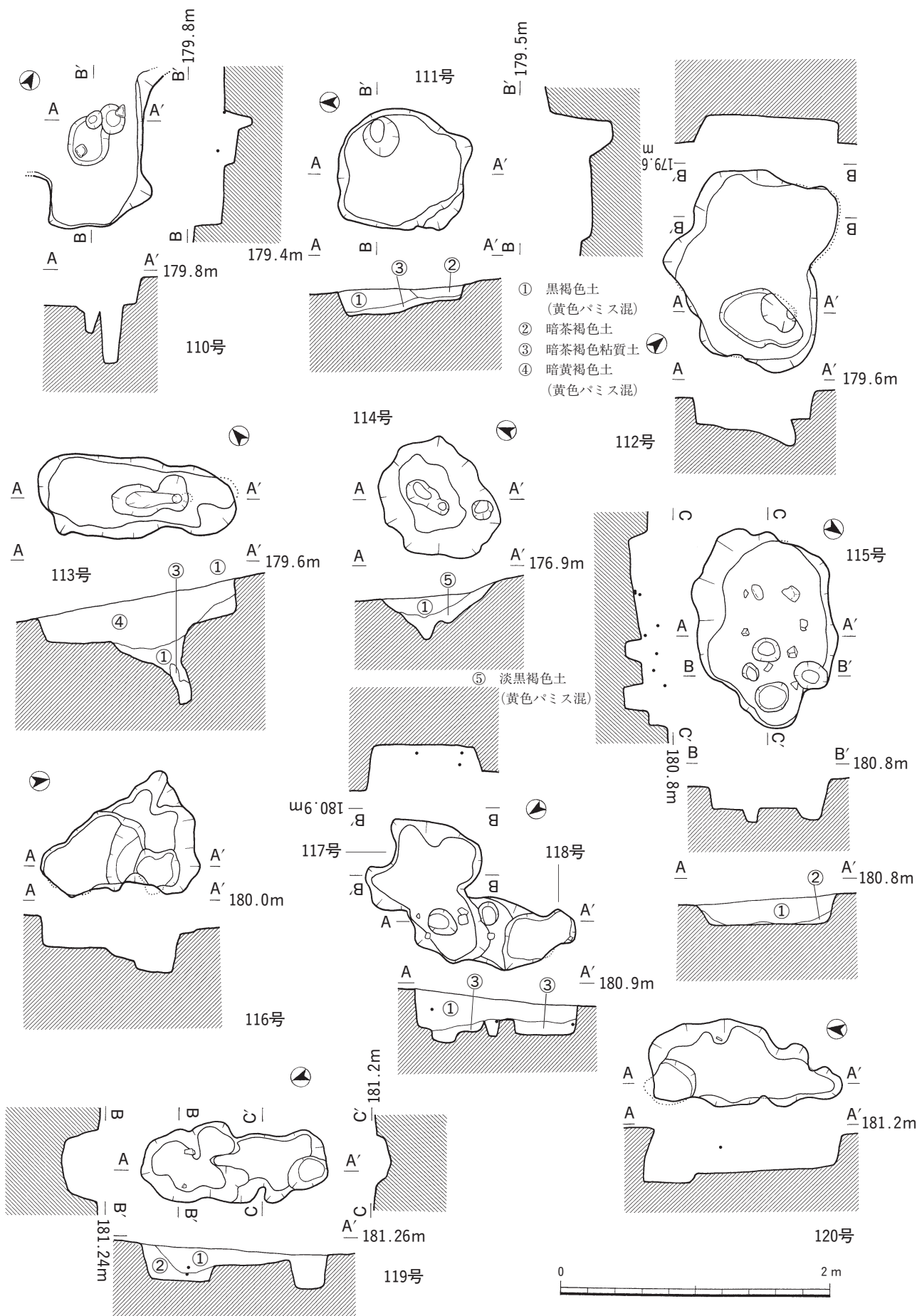
これらの土坑は、⑤（前項）と同じく底面にピットを有するものの、浅くて規則性がみられないタイプのものである。



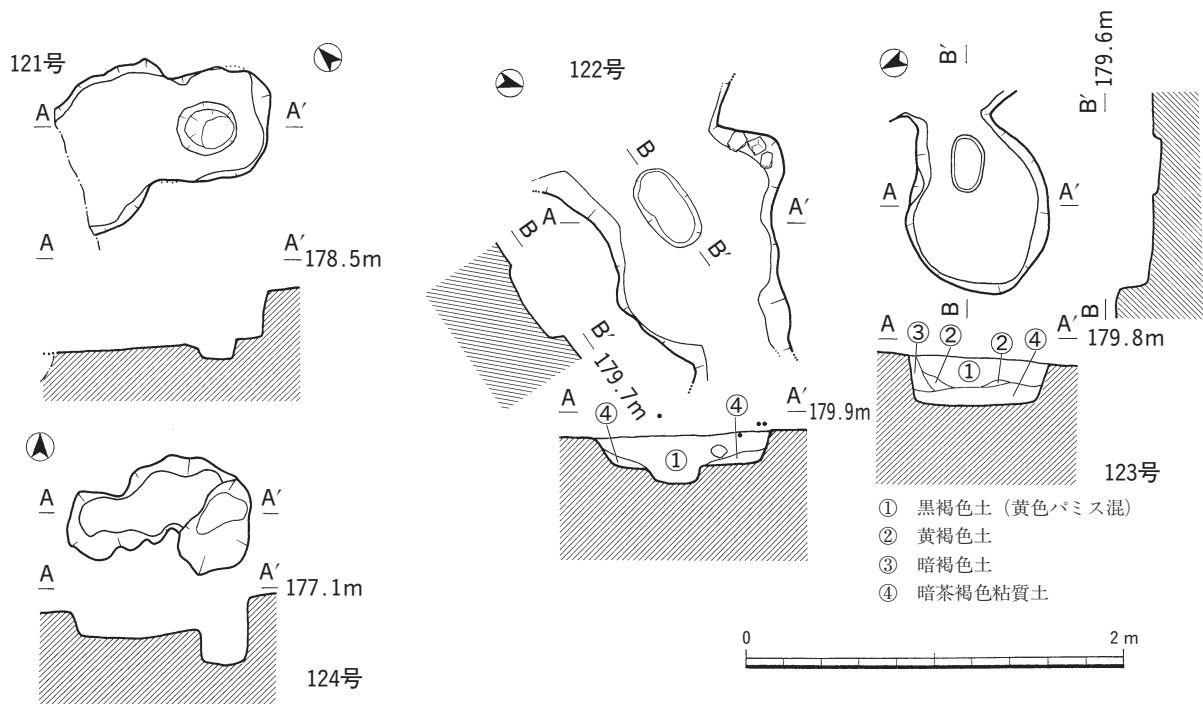
第67図 土坑(10)



第68図 土坑(11)



第69図 土坑(12)



第70図 土坑(13)

115号の底面には、3個のピットがみられるが、いずれも浅い。

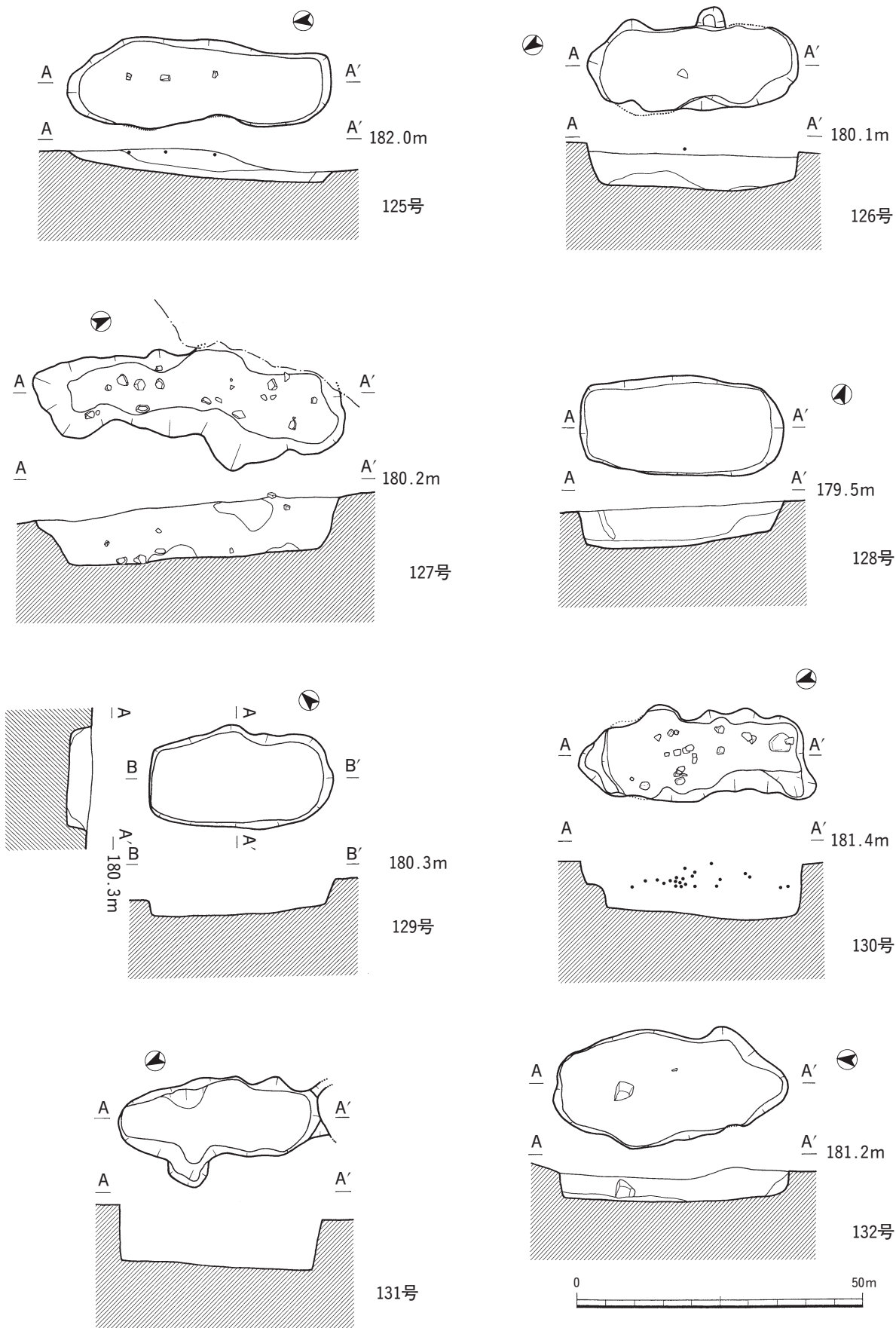
117号と118号は重複した土坑として捉えた。前後関係は不明である。2つの土坑の重複部分にピットが1個みられる状況は、76号や108号と類似している。

120号は、壁際にピットを有するタイプの土坑であるが、底面からの深さが8cmと浅い。全体の形状からは、⑤のタイプに近いことから、ピットの検出不足である可能性もあるかもしれない。このことは、121～123号や136号にもいえそうである。

123号は10号竪穴住居跡と重複して検出された土坑である。2つの遺構の前後関係は不明である。10号竪穴住居跡は、136号とも重複している。136号は9号住居跡と重複している135号とも重複しており、2つの土坑を介して、9号と10号の竪穴住居跡が繋がった形で検出されたということになる。

以上、A地区から検出された土坑についての概要を述べた。ほとんどが縄文時代早期前半期のものと考えられる遺構であるが、詳細な時期設定については厳しいといわざるを得ない。遺物包含層からの出土土器をみると、7類および8類土器の、いわゆる石坂式土器系統のものが最も多く出土していることがわかる。続いて4～6類土器の吉田式土器系統のものや、2類（志風頭式）や3類（加栗山式）土器がみられる。A地区は石坂式や吉田式系統の土器が用いられた時期の所産である土坑が多いと捉えておきたい。

この他、調査区からは多くの柱穴状ピットが検出された。VI層（薩摩火山灰）上面まで掘り下げると点々と見えてくる円形小ピット（黒褐色埋土）のことである。樹痕との見極めが難しいということもあり、今回は積極的に取り上げていないが、今後、遺構内ピットの残存や掘立柱建物（状）の痕跡であることも考慮していく必要があろう。



第71図 土坑(14)

第16表 A地区検出の土坑（1）

遺 構 名	検出区	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物番号	備 考	旧番号	挿図 番号
1号土坑	F21	VI層上面	264	116	110		陥し穴状	—	59
2号土坑	C26	VI層上面	185	66	66		陥し穴状	137	59
3号土坑	E・F24	VI層上面	211	75	109		陥し穴状	1	59
4号土坑	D22	VI層上面	198	154	69		陥し穴状	4	60
5号土坑	E22・23	VI層上面	150	145	69		陥し穴状	3	60
6号土坑	H24	VI層上面	142	97	58		陥し穴状，一部欠	150	60
7号土坑	G23	VI層上面	140	102	66		陥し穴状	2	60
8号土坑	D・E30	VI層上面	137	77	21			20	61
9号土坑	E27	VI層上面	222	67	31		近接してピット2個あり	118	61
10号土坑	B25・26	VI層上面	151	64	24		一部欠	133	61
11号土坑	C28	VI層上面	155	47	23	103	12号と近接	33	61
12号土坑	C28	VI層上面	59	51	25		11号と近接	34	61
13号土坑	D30	VI層上面	173	44	33	102		16	61
14号土坑	B26	VI層上面	183	44	18		一部欠，近接してピットあり	136	61
15号土坑	E27	VI層上面	148	56	29		16号と重複	93	61
16号土坑	E27	VI層上面	68	48	25		15号と重複	94	61
17号土坑	E28	VI層上面	128	95	33	104,105		13	62
18号土坑	E29	VI層上面	105	91	32			14	62
19号土坑	D27・28	VI層上面	140	114	31	106,107,135		40	62
20号土坑	B25・26	VI層上面	105	89	15		一部欠	135	62
21号土坑	E24	VI層上面	137	104	22			6	62
22号土坑	D22	VI層上面	90	81	10			8	62
23号土坑	C25	VI層上面	144	72	19		一部欠	143	62
24号土坑	E28	VI層上面	127	84	42			115	62
25号土坑	C25	VI層上面	90	59	27			106	62
26号土坑	E25	VI層上面	88	81	20			77	62
27号土坑	C27	VI層上面	93	59	5			97	62
28号土坑	E26	VI層上面	100	64	20			66	63
29号土坑	C29	VI層上面	113	85	28	108		30	63
30号土坑	A26	VI層上面	110	57	33			130	63
31号土坑	D29	VI層上面	85	55	20			22(1)	63
32号土坑	D25	VI層上面	128	92	17			89	63
33号土坑	D29, 30	VI層上面	95	57	33			47	63
34号土坑	C25	VI層上面	86	54	14			140	63

第17表 A地区検出の土坑（2）

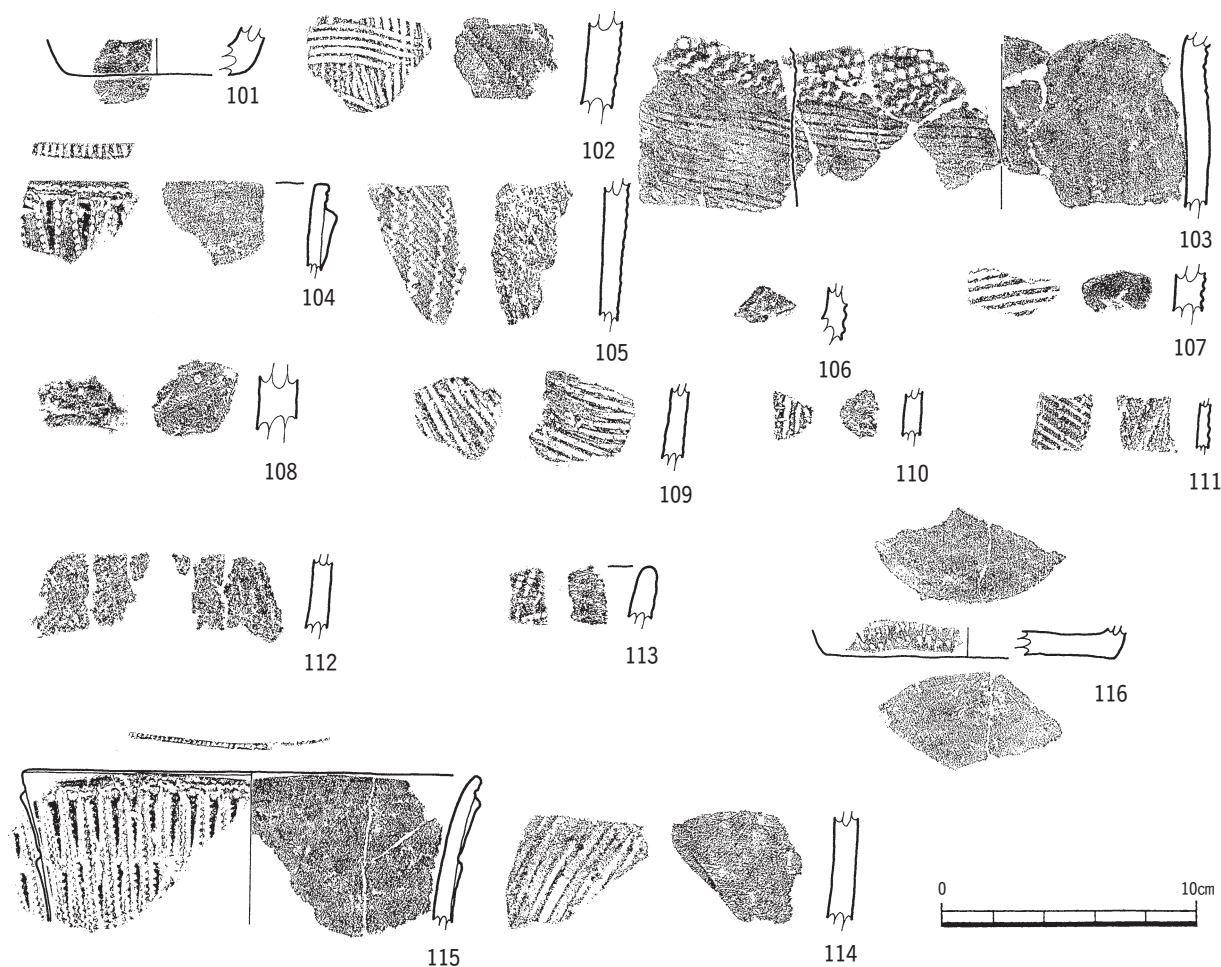
遺 構 名	検出区	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物番号	備 考	旧番号	挿図 番号
35号土坑	D25	VI層上面	98	58	34		36号と隣接	98	63
36号土坑	D25	VI層上面	90	63	27		35号と隣接	99	63
37号土坑	D30	VI層上面	99	42	26			17	63
38号土坑	C29	VI層上面	69	44	20	109	一部欠	53	63
39号土坑	D30	VI層上面	89	30	26			11	63
40号土坑	A26	VI層上面	83	74	13			127	63
41号土坑	E29	VI層上面	99	84	28			55	63
42号土坑	E29	VI層上面	145	94	32			56	64
43号土坑	A26	VI層上面	80	56	16			126	64
44号土坑	B25	VI層上面	92	48	10			134	64
45号土坑	C26	VI層上面	85	65	15			104	64
46号土坑	D30	VI層上面	69	61	21	110		18	64
47号土坑	F24	VI層上面	90	64	40			5	64
48号土坑	E29	VI層上面	78	57	33			54	64
49号土坑	C・D28	VI層上面	78	25	30		一部欠	52	64
50号土坑	C28・29	VI層上面	112	54	34	111～113	一部欠	61	64
51号土坑	D25	VI層上面	68	40	13			88	64
52号土坑	E29	VI層上面	76	53	27			58	64
53号土坑	D25	VI層上面	48	36	35			146	64
54号土坑	E25	VI層上面	146	110	23		2 基重複？	78, 79	64
55号土坑	D29	VI層上面	89	32	39		56号と重複	91	64
56号土坑	D29	VI層上面	112	43	35		55号と重複	92	64
57号土坑	A・B26	VI層上面	137	41	27		2 基重複？	128	64
58号土坑	D29	VI層上面	130	100	47		2 基重複？	45	65
59号土坑	C29	VI層上面	101	37	29	114～116		111	65
60号土坑	D28	VI層上面	96	45	12			41	65
61号土坑	C28	VI層上面	84	57	26			29	65
62号土坑	D27	VI層上面	166	50	14		2 基重複？	60	65
63号土坑	A26	VI層上面	86	51	30			131	65
64号土坑	A26	VI層上面	56	48	42			129	65
65号土坑	D29	VI層上面	94	92	31		重複？	49	65
66号土坑	D28	VI層上面	129	66	24	117, 118		24	65
67号土坑	E28	VI層上面	187	71	26	119～121	2 基重複？	107	65
68号土坑	E28	VI層上面	203	116	34	122～127	床面に浅いビットあり	100	65

第18表 A地区検出の土坑（3）

遺構名	検出区	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物番号	備 考	旧番号	挿図 番号
69号土坑	E29	VI層上面	95	44	35		床面にピットあり	57	66
70号土坑		VI層上面	98	49	22		床面にピットあり	137	66
71号土坑	D30	VI層上面	95	53	16			12	66
72号土坑	C28	VI層上面	55	46	10			35	66
73号土坑	D28	VI層上面	161	94	26	128～130	一部欠，床面に深いピットあり	25	66
74号土坑	D25	VI層上面	81	70	24	131	床面にピットあり	80	66
75号土坑	D27・28	VI層上面	86	35	11			36	66
76号土坑	C27	VI層上面	157	95	35	132	重複？	43	66
77号土坑	C28	VI層上面	72	35	33		78号と近接	32	66
78号土坑	C28	VI層上面	128	50	36		77号と近接	32	66
79号土坑	D28	VI層上面	169	77	25	133	重複？，床面にピットあり	38	66
80号土坑	C28	VI層上面	156	56	24		重複？	116	66
81号土坑	C29	VI層上面	93	91	22	134		27	67
82号土坑	D28,29	VI層上面	79	68	7		床面にピットあり	90	67
83号土坑	D29	VI層上面	92	63	21		床面にピットあり	22(2)	67
84号土坑	D27	VI層上面	116	72	30			42	67
85号土坑	G23	VI層上面	100	51	43		重複？	149	67
86号土坑	D27	VI層上面	106	56	26	136,137	床面にピットあり	39	67
87号土坑	E・F26	VI層上面	128	61	30		床面に深いピットあり	63	68
88号土坑	D26	VI層上面	100	40	12		床面に深いピットあり	109	68
89号土坑		VI層上面	136	74	18		一部欠，床面に深いピットあり	—	68
90号土坑	C28	VI層上面	78	65	29		床面に深いピットあり	96	68
91号土坑	E26	VI層上面	80	58	18		床面に深いピットあり	68	68
92号土坑	C26	VI層上面	168	64	16		床面に深いピットあり	103	68
93号土坑	D26	VI層上面	105	40	20		床面に深いピットあり	144	68
94号土坑	C26	VI層上面	52	36	12		床面に深いピットあり	145	68
95号土坑	D25	VI層上面	94	-73	22		96号と重複	101	68
96号土坑	D25	VI層上面	85	-114	17		95号と重複，床面に深いピットあり	102	68
97号土坑	F25	VI層上面	—	—	22		97～100は重複，床面に深いピットあり	121	68
98号土坑	F25	VI層上面	—	—	16		97～100は重複，床面に深いピットあり	122	68
99号土坑	F25	VI層上面	—	—	19		97～100は重複，床面に深いピットあり	123	68
100号土坑	F25	VI層上面	—	—	16		97～100は重複，床面に深いピットあり	124	68
101号土坑	D22	VI層上面	86	49	60		床面に深いピットあり	7	69
102号土坑	E26	VI層上面	77	54	12		床面に深いピットあり	72	69

第19表 A地区検出の土坑（4）

遺 構 名	検出区	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物番号	備 考	旧番号	挿図 番号
103号土坑	C25	VI層上面	131	76	21		床面に深いピットあり	141	69
104号土坑	E26	VI層上面	167	107	13		2基重複？, 105号と近接	69	69
105号土坑	E26	VI層上面	81	79	32		104号と近接, 床面に浅いピットあり	70	69
106号土坑	F26	VI層上面	99	72	31		床面に浅いピットあり	62	69
107号土坑	E26	VI層上面	129	92	22		一部欠, 床面にピットあり	67	69
108号土坑	E24	VI層上面	176	83	16		2基重複？, 床に深いピットあり	10	69
109号土坑	E28	VI層上面	57	50	37		床面にピットあり	119	69
10号土坑	E26	VI層上面	(108)	67	20		一部欠, 床面に深いピットあり	75	70
111号土坑	C25	VI層上面	93	85	19		床面にピットあり	139	70
112号土坑	F26	VI層上面	156	138	23		床面にピットあり	64,65	70
113号土坑	C25	VI層上面	145	44	25		床面に深いピットあり	105	70
114号土坑	E24	VI層上面	87	82	31		床面にピットあり	9	70
115号土坑	D28	VI層上面	144	90	13	140	床面にピットあり	23	70
116号土坑	A26	VI層上面	117	38	23		床面にピットあり	125	70
117号土坑	D29	VI層上面	101	52	32		118号と重複, 床面にピットあり	46	70
118号土坑	D29	VI層上面	48	29	23	138,139	117号と重複	19	70
119号土坑	D29	VI層上面	137	54	26	141	2基重複？	21	70
120号土坑	D29	VI層上面	140	61	31		床面に浅いピットあり	26	70
121号土坑	D25	VI層上面	108	53	31		一部欠, 床面に浅いピットあり	81	71
122号土坑	E26	VI層上面	115	106	17	142	一部欠, 床面に浅いピットあり	71	71
123号土坑	E26	VI層上面	94	74	15		一部欠, 床面に浅いピットあり	74	71
124号土坑	F24	VI層上面	93	38	15		床面にピットあり	148	71
125号土坑	B28・29	VI層上面	184	52	18			84	72
126号土坑	E27	VI層上面	147	57	22			44	72
127号土坑	E28	VI層上面	212	45	38	143,144	一部欠	114	72
128号土坑	E25,26	VI層上面	143	69	23			76	72
129号土坑	D26	VI層上面	128	66	17			108	72
130号土坑	C29	VI層上面	156	52	40	101		28	72
131号土坑	D25	VI層上面	141	51	36			82	72
132号土坑	C30	VI層上面	161	74	23			83	72
133号土坑	C29	VI層上面	97	(80)	27		一部欠, 1号住居跡と近接	15	39
134号土坑	D27	VI層上面	(130)	64	30		7号住居跡と重複	—	45
135号土坑	E26	VI層上面	132	74	16		9号住居跡と重複, 一部欠	73	47
136号土坑	E26	VI層上面	108	(60)	—		10号住居跡と重複, 床面にピットあり	—	48



第72図 遺構遺物(1)

遺構内遺物

A地区の遺構内遺物については、土坑に関連する遺物59点、住居跡に関連する遺物20点、計79点を図化し、掲載する。

土坑内出土遺物

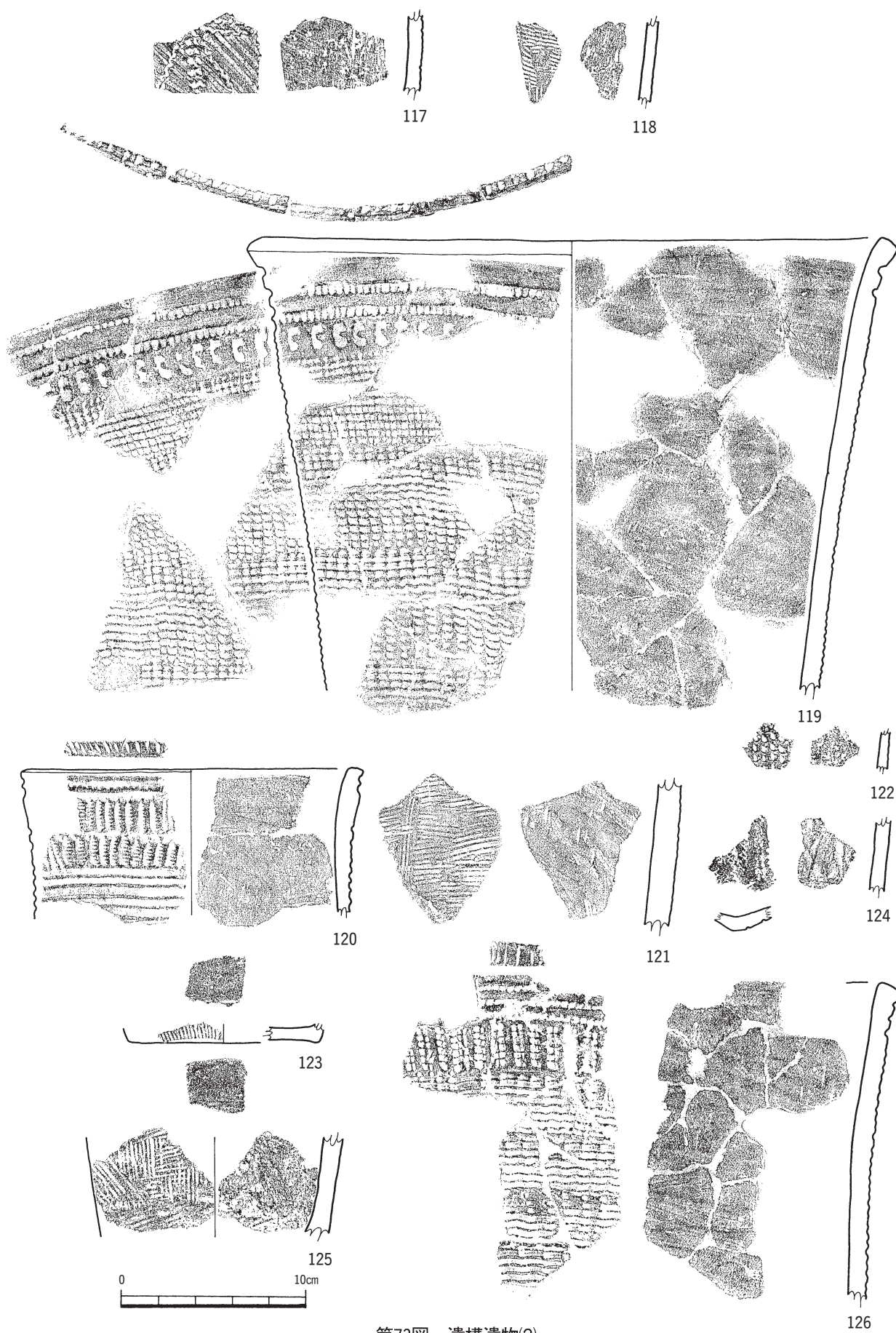
土坑内の出土遺物については、44点を図化した。

130号土坑

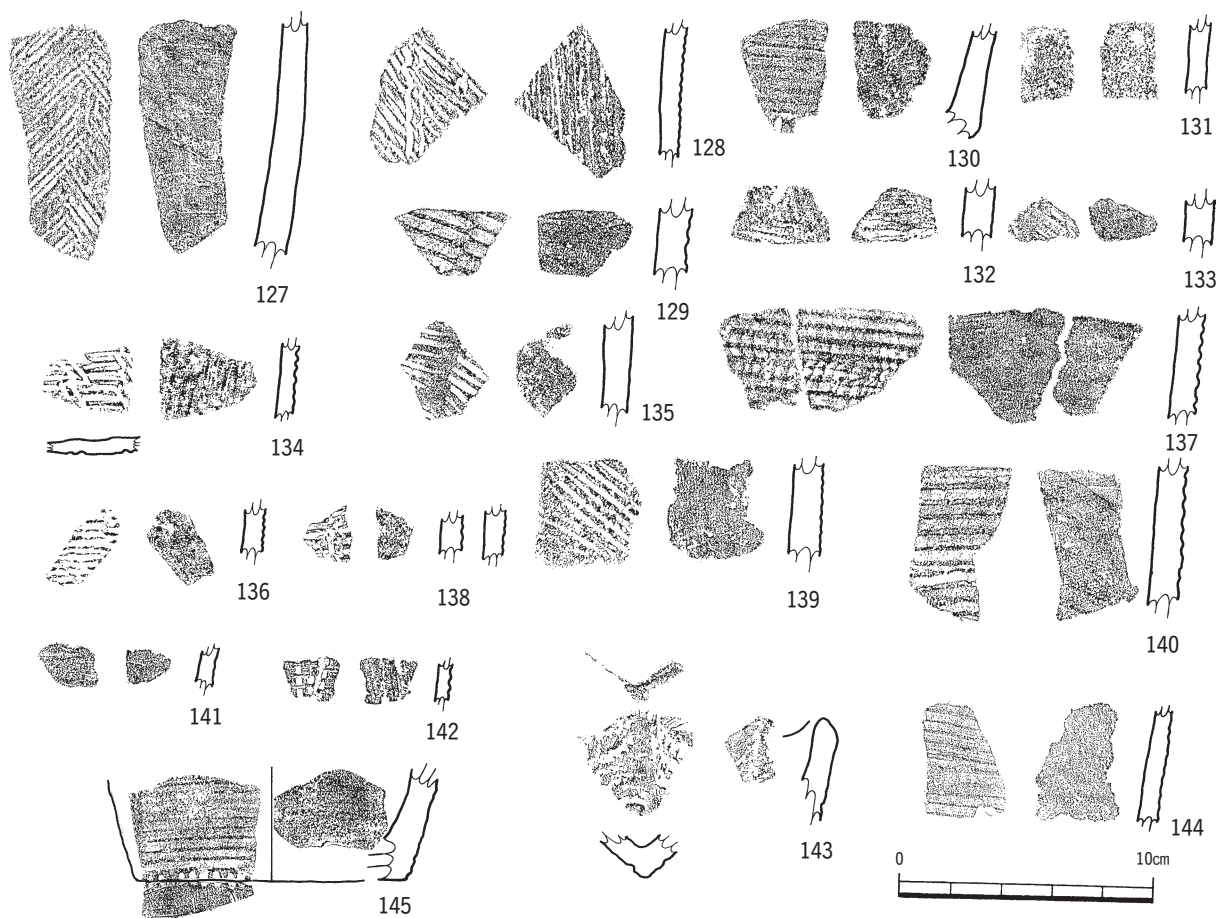
130号土坑からは、1点を図化する。101は、土器型式不明の底部片である。胴部の立ち上がり部分には、丁寧なナデが施されている。

13号土坑

13号土坑からは、1点を図化する。102は、7類もしくは8類の胴部片であると思われる。縦位の貝殻条痕文を施した後、横位に近い貝殻条痕文を重ねている。器壁は厚い。



第73図 遺構遺物(2)



第74図 遺構遺物(3)

11号土坑

11号土坑からは、1点を図化する。103は、5類の口縁から胴部にかけての破片である。口縁部には、横位の貝殻刺突文がめぐり、直下に斜位の貝殻刺突文が角度を変えて2段施される。なお、横位の貝殻刺突文と上段の斜位貝殻刺突文は凹点状に施されている。また、胴部の貝殻押引文は、異なる施文具で施される。

17号土坑

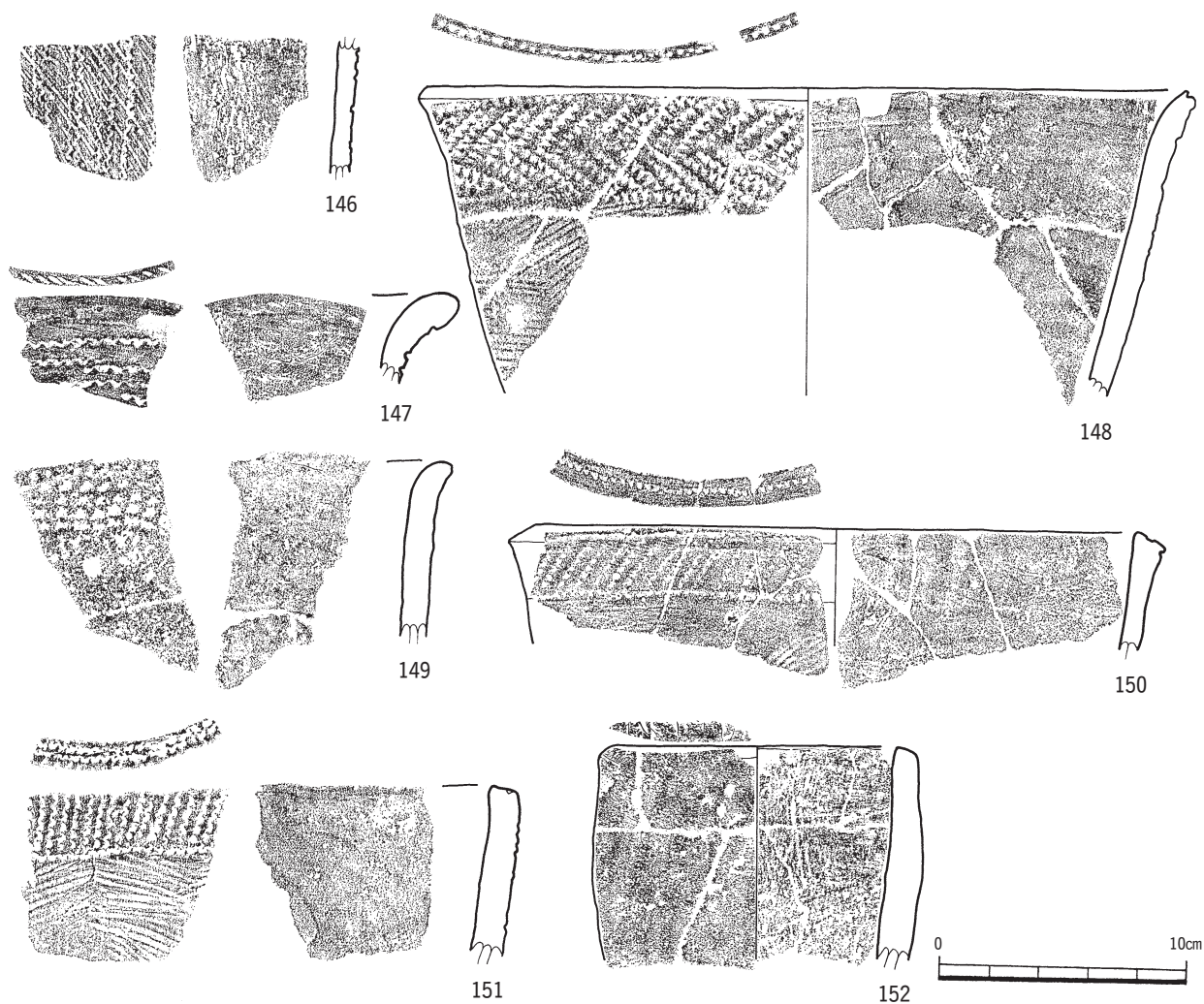
17号土坑からは、2点を図化する。104は、4類の口縁部片である。横位貝殻刺突文が2条めぐり、左右に刺突を施した楔形貼付文を貼り付ける。105は、3類の円筒の胴部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をX字状に重ねるとされる。

19号土坑

19号土坑からは、2点を図化する。106、107は、5類もしくは6類の胴部片である。明瞭な貝殻押引文が施されている。

29号土坑

29号土坑からは、1点を図化する。108は、土器型式不明の胴部片である。器壁は厚く、貝殻刺突らしき痕跡も見られる。



第75図 遺構遺物(4)

38号土坑

38号土坑からは、1点を図化する。109は、1類の胴部片の可能性が高い。斜位の貝殻条痕文が外面及び内面に施される。

46号土坑

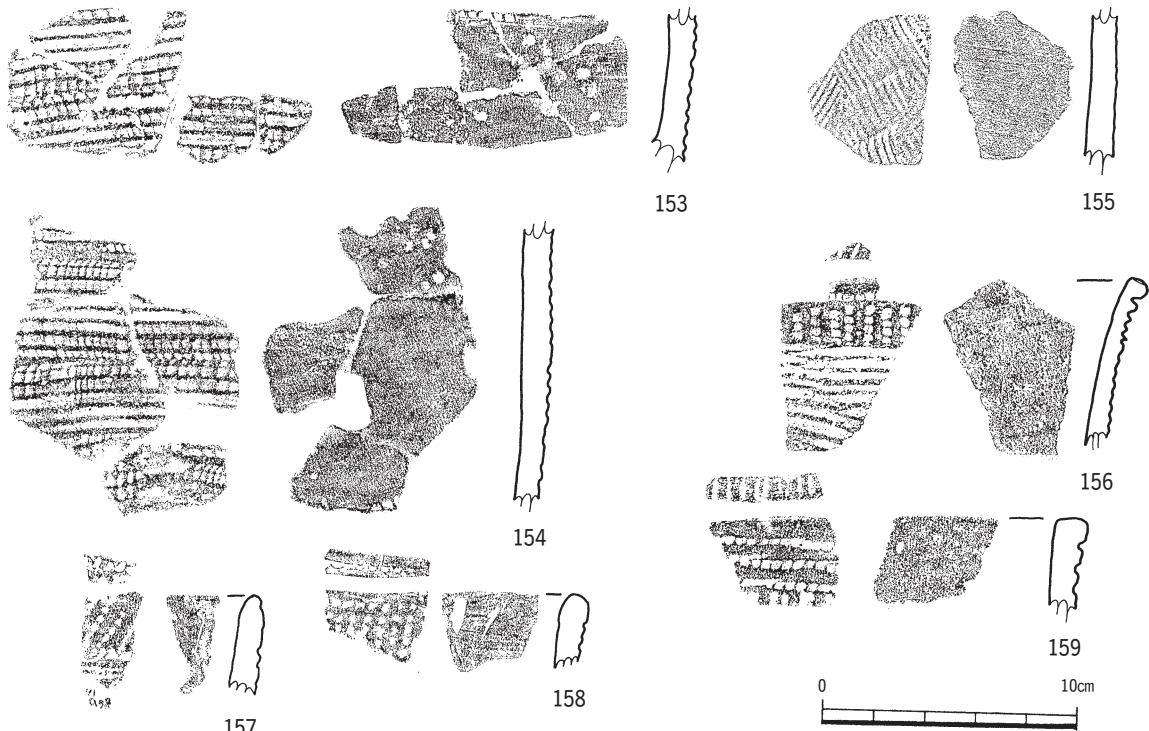
46号土坑からは、1点を図化する。110は、2類の胴部片であると思われる。

50号土坑

50号土坑からは、3点を図化する。111は、3類角筒の胴部片である。112は、3類円筒の胴部片の可能性が高い。斜位の貝殻条痕文の上に二重に貝殻刺突が施されるが、かなり摩耗しており、文様は不明瞭である。113は、8類の口縁部片の可能性が高い。肋5条程度の斜位の貝殻刺突文が施され、直下に横位の貝殻刺突文がめぐる。

59号土坑

59号土坑からは、3点を図化する。114は、3類円筒の底部片である。胴部の立ち上がり部分は丁寧なナデで調整されており、胴部の貝殻刺突文が最下部まで施されている。内外面共にナデで調整される。115は、4類のやや外反する口縁部片である。横位の貝殻条痕文が2条めぐり、直下に



第76図 遺構遺物(5)

楔形貼付文が2段貼り付けられる。貼付文の左右には刺突，上部には刻みが付される。116は，7類もしくは8類の胴部片である。斜位の貝殻条痕文が施されるが，綾杉状になるかは不明である。

66号土坑

66号土坑からは，2点を図化する。117は，2類角筒の口縁部片である。口縁部には横位の貝殻刺突文が施される。胴部には，斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突が施され，斜位の貝殻刺突文をV字もしくはX字状に重ねると思われる。118は，4類の胴部下部片である。施文は，小形の貝殻背面を連続して押圧し，結果的に押引文様の効果を表現している。

67号土坑

67号土坑からは，3点を図化する。119は，5類の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部には方形状の刺突が2段めぐり，直下に大型の貝殻による刺突が1段施される。胴部は明瞭な貝殻押引文が施されている。120は，5類の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部には横位貝殻刺突文が2段めぐり，直下に肋6条程度の貝殻刺突を施して楔様とし，これを2段施す。胴部の貝殻押引文は不明瞭である。121は，7類もしくは8類の胴部片である。横位に近い貝殻条痕文が左右から交互に施されている。また，一部に縦位の貝殻条痕文も見られる。

68号土坑

68号土坑からは，6点を図化する。122，123は，3類角筒の胴部片である。丁寧なナデ調整の後，縦位の貝殻刺突文が施される。124は，3類もしくは4類の円筒の底部片である。胴部の立ち上がり部分には，縦位の刻みが施される。また，底部の内外面共にナデで調整される。125は，5類の口縁から胴部にかけての破片である。口縁部には方形状の横位貝殻刺突文が3条めぐり，直下には肋5条の貝殻押圧文を施し，楔様とする。胴部は明瞭な貝殻押引文を施す。126は，7類もしくは8類の胴部片である。縦位の貝殻条痕文を施した後，斜位の貝殻条痕文を綾杉状に施すが，施



第77図 遺構遺物(6)

文の順が逆になる箇所もある。127も同様である。綾杉条痕文が施されている。

73号土坑

73号土坑からは、3点を図化する。128は、2類の胴部片である。129は、5類もしくは6類の胴部片である。貝殻押引文はややルーズに施されている。130は、5類もしくは6類の胴部下部片である。貝殻押引文は浅く、ややルーズに施されている。また、全体的に摩耗している。胴部の立ち上がり部分には、刻みが確認できる。

74号土坑

74号土坑からは、1点を図化する。131は、3類の角筒の胴部片の可能性が高い。斜位の貝殻条痕文が確認できるが、焼成が粗く、全体的に摩耗しており不明瞭である。

76号土坑

75号土坑からは、1点を図化する。132は、2類の円筒の胴部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、流水文と貝殻刺突とを施すが、全体的に摩耗しており、文様は不明瞭である。

79号土坑

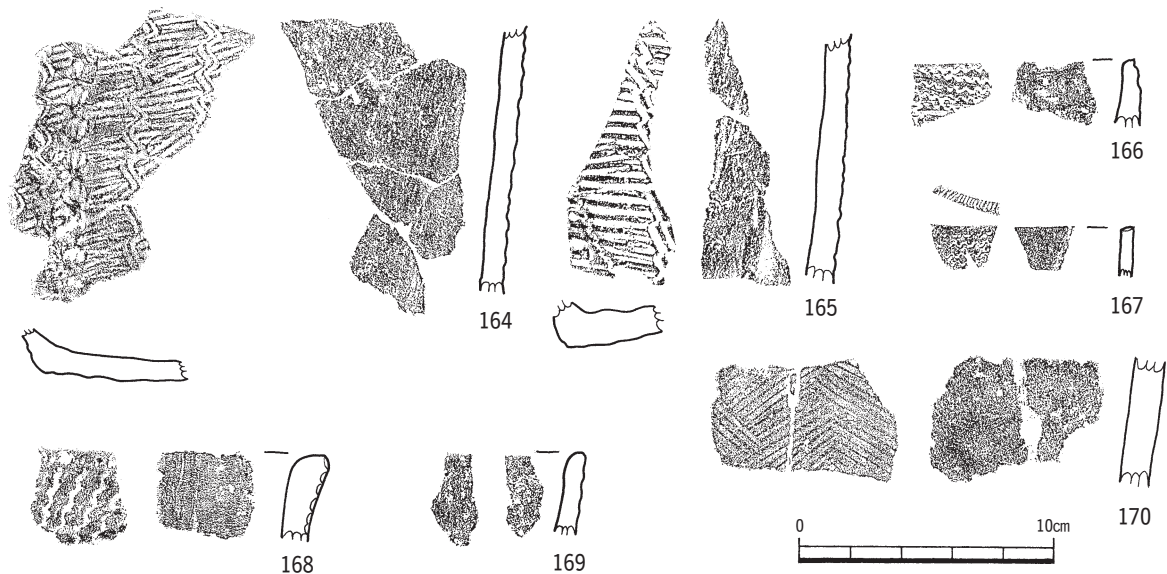
79号土坑からは、1点を図化する。133は、土器型式不明の底部片である。器壁は厚く、斜位の貝殻条痕文と思われる文様が施されている。

81号土坑

81号土坑からは、134の2類角筒の胴部片1点を図化する。

19号土坑

19号土坑からは、135の4類の胴部片と思われる1点を図化する。



第78図 遺構遺物(7)

86号土坑

86号土坑からは、2点を図化する。136は、5類もしくは6類の胴部片である。明瞭な貝殻押引文が施されている。137も5類もしくは6類の胴部片と思われるが、外面は摩耗している。

118号土坑

118号土坑からは、2点を図化する。138は、2類の胴部片であると思われる。流水文の一部が確認できる。139は、7類もしくは8類の胴部片である。斜位の貝殻条痕文は、綾杉状に施された貝殻条痕文の一部ではないかと思われる。

115号土坑

115号土坑からは、1点を図化する。140は、5類もしくは6類の胴部片である。貝殻押引文はややルーズに施されている。

119号土坑

119号土坑からは、1点を図化する。141は、10類の胴部片の可能性が高い。

122号土坑

122号土坑からは、1点を図化する。142は、3類の円筒の口縁部片である。ナデ調整の後、方形状の縦位と斜位の貝殻刺突文を組み合わせて施す。

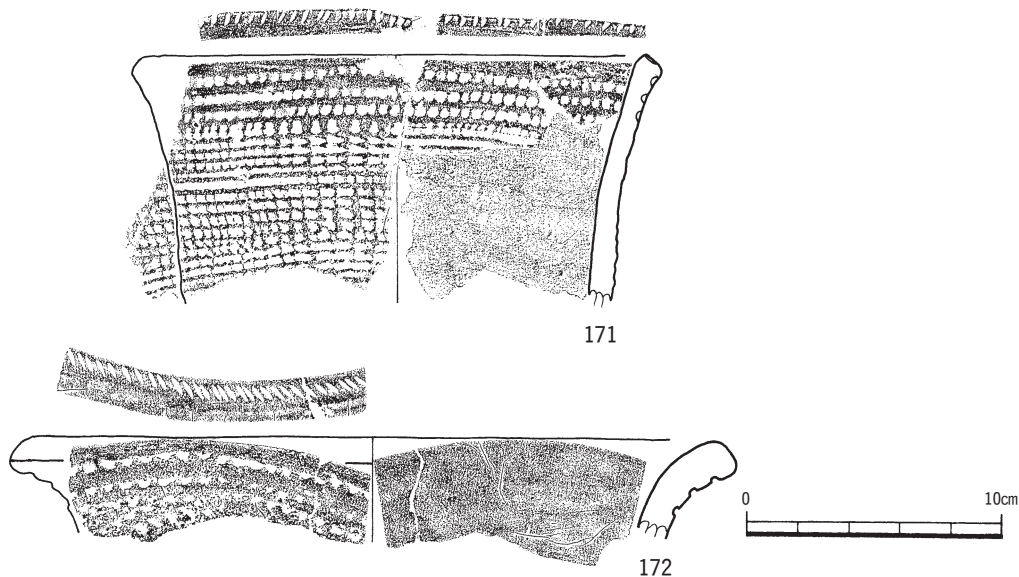
旧114号土坑

127号土坑からは、2点を図化する。143は、2類もしくは3類の口縁部片である。口縁部には横位の貝殻刺突文が3～4条施され、角部には貝殻刺突が施されるが、胴部の文様は確認できない。144は、5類もしくは6類の胴部片である。貝殻押引文がややルーズに施されている。

土坑周辺の遺物

次の15点は、土坑近辺から出土した遺物である。土坑内遺物の可能性もあるので、ここに掲載する。

145は、5類もしくは6類の底部片である。底部の立ち上がり部分には、小さな円状の刺突が施される。146は、3類円筒の胴部片である。斜位の貝殻条痕文を施した後、ナデで調整し、貝殻刺突文を施す。147は、7類の口縁部片である。148は、横転内から出土した7類の口縁部から胴部の



第79図 遺構遺物(8)

破片である。口縁部には、横位の貝殻刺突文が2条めぐり、その間にく字状の斜位の貝殻刺突が施される。一部に貝殻による綾杉条痕文を施す。149は、7類の口縁部片である。焼成が粗いためか全体的に不明瞭である。150, 151は、8類の口縁部片である。152は、胴から口縁部にかけて直行する、無文の土器片である。ナデ調整が施される。口唇部には浅い刻みを付するが、不明瞭である。153, 154は、86号土坑周辺から出土した5類もしくは6類の胴部片である。明瞭な貝殻押引文が施されている。155は、127号土坑周辺から出土した7類もしくは8類の胴部片である。貝殻条痕文を綾杉状に施すが、1単位の施文の長さは短い。156は、7類の口縁部片である。胴部に押圧気味の貝殻刺突文が縦位に施される。胎土に金色の雲母片が確認できる。157, 158は60号土坑周辺から出土した。157は、8類の口縁部片である。肋6状の斜位の貝殻刺突文が施され、下部には貝殻条痕が施される。158は、8類の口縁部片である。縦位の凹点状の刺突が施される。159は、68号土坑周辺から出土した。4類の口縁部片である。口縁部直下に縦位の貝殻押圧文の一部が確認できる。

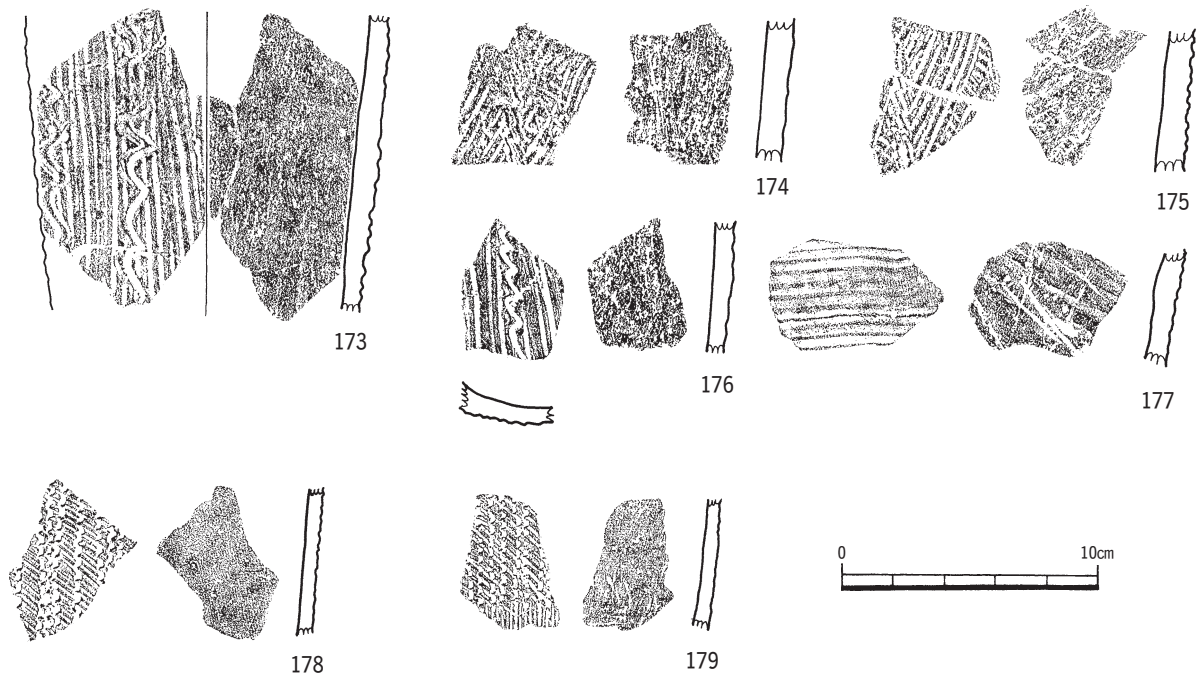
住居跡出土遺物

住居跡の出土遺物については、20点を図化する

1号住居跡

1号住居跡の出土遺物は、160～170の11点を図化する。

160～166は2類に分類され、さらに160, 161は円筒形、162～166は角筒形を呈するものと思われる。いずれも文様は、横位もしくは斜位の貝殻条痕文の上に流水文を重ねている。なお、161は胴部の立ち上がり部分に縦位の貝殻条痕文を施し、162, 163は口縁部に肋3条の縦位の貝殻刺突文を、166は3条の横位貝殻刺突文をそれぞれ施す。また、165は斜位の貝殻刺突文をX字状に施すものと思われる。167は、3類の角筒の口縁部片の可能性が高い。横位の貝殻刺突文が4条めぐり。168は、7類の口縁部片である。肋5～6条の斜位の大型の貝殻による貝殻刺突文が施される。170は、7類もしくは8類の胴部片である。貝殻による綾杉条痕文が施されている。169は、胴から口縁部にかけて直行する、無文の土器片である。丁寧なナデで調整される。



第80図 遺構遺物(9)

2 号住居跡

2 号住居跡の出土遺物は、171の 1 点を図化する。

171は、6 類のやや外反する口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部には、方形状の貝殻刺突文が 3 条めぐり、胴部には明瞭な貝殻押引文が施されている。

5 号住居跡

5 号住居跡の出土遺物は、172の 1 点を図化する。

172は、7 類の口縁部片である。口唇部はやや肥厚し丸みを帯び、頂部に斜位の刻みを付する。

6 号住居跡

6 号住居跡の出土遺物は、173～177の 5 点を図化する。

173～176は、2 類の円筒形に分類される。文様は、いずれも縦位もしくは縦位の貝殻条痕文を施した後、流水文を重ねている。なお、175の貝殻条痕文は、左上がりに施した後、右上がりのものを重ねている。177は、5 類もしくは 6 類の胴部片である。横位の貝殻殻押引文を施す。

8 号住居跡

8 号住居跡の出土遺物は、178, 179の 2 点を図化する。

どちらも 3 類の円筒形に分類される。178は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文を V 字状に重ねる。179は、斜位の貝殻条痕文を施した後、底部の立ち上がり部分に縦位の沈線を施す。胴部には縦位の貝殻刺突文が施される。

2 土器

① 2 類

器形は、円筒形、角筒形、口縁部上面観がレモン形を呈するものの3タイプの他に、円筒形から角筒形へと作り変えられる途中の、いわゆる「上角下円」タイプのものも存在すると思われる。本地区においては、出土数が少なく、細分化することが困難なため、詳細についてはB地区において報告したい。

器形が円筒形を呈すると確認できたものは、1点のみ掲載する。

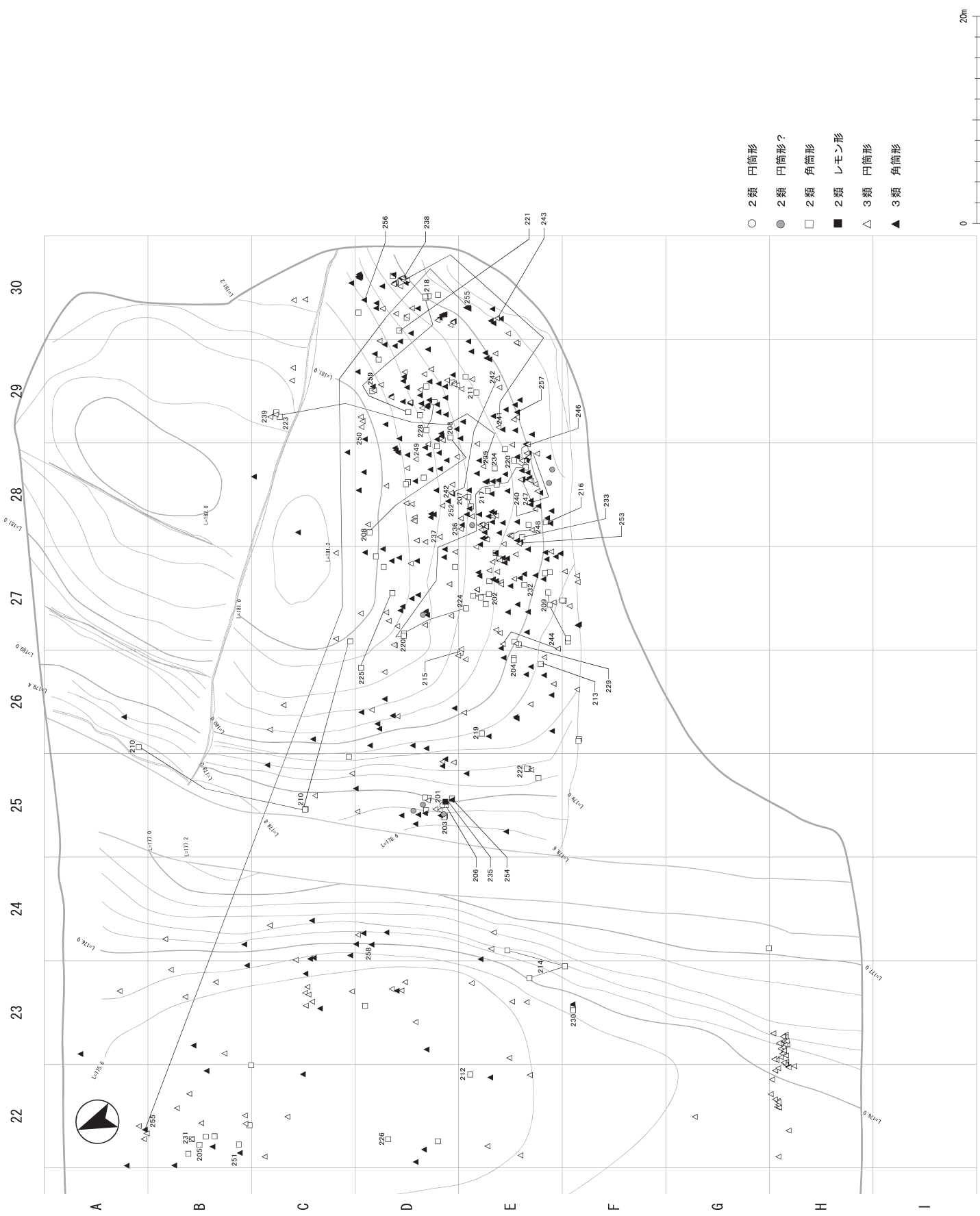
201は、口縁部片である。口縁部には貝殻刺突を縦位に施す。胴部は縦位の貝殻条痕文を施し、縦位2本の流水文を重ねる。口唇部は上部になるほど薄くなる。内面はミガキで調整される。

202～234は、器形が角筒形を呈するタイプである。

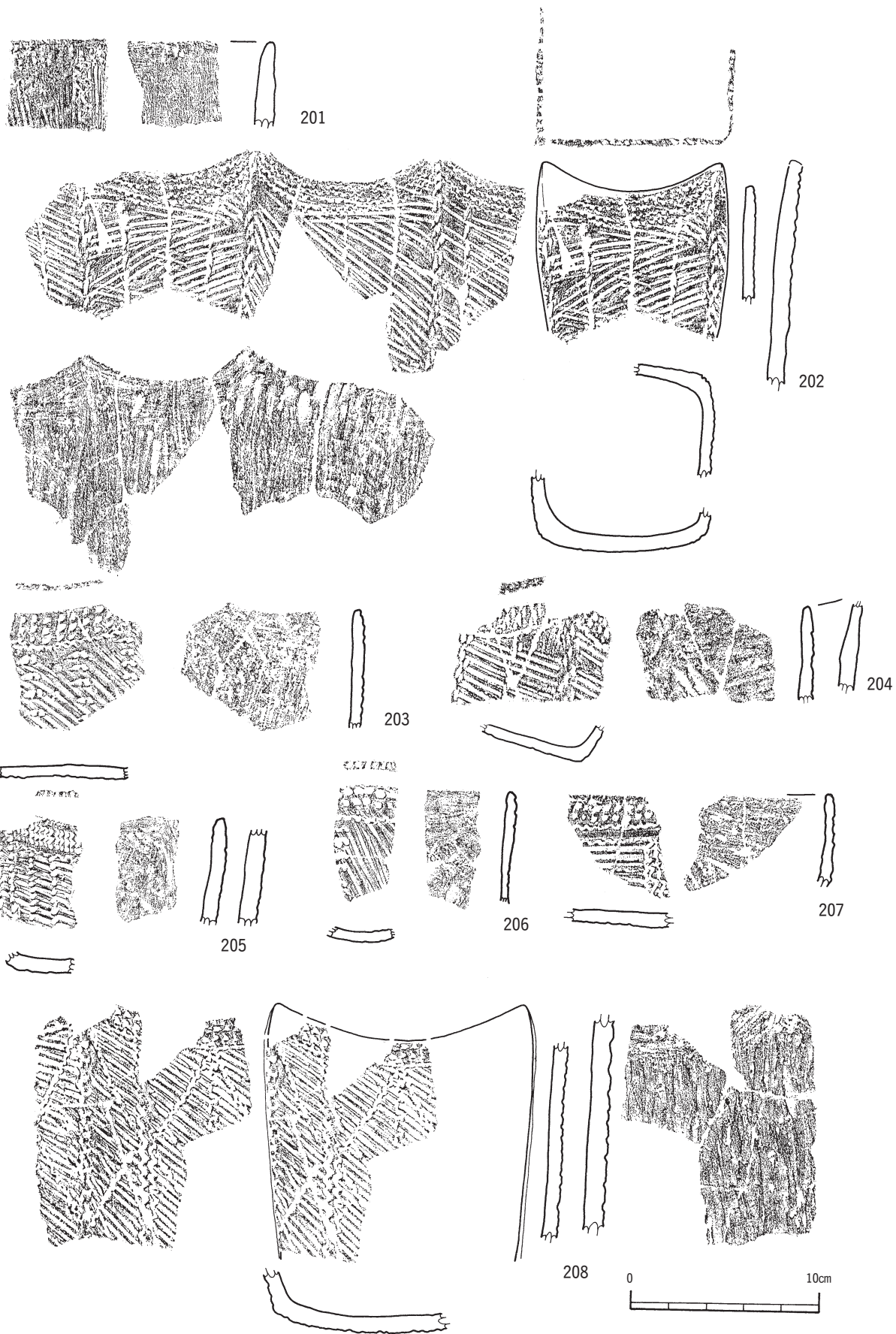
202～216は、口縁部片である。202～206は、口縁部直下に縦位もしくは斜位の貝殻刺突文を施さない一群である。202は、口径9.6cmを測る。口縁部に横位の貝殻刺突文が4条程度めぐり、断続する縦位の貝殻刺突線文を面に対して3条施す。203, 204, 206は貝殻刺突を、205は凹点状の刺突をそれぞれ施す。なお、口縁部には肋3～4条程度の縦位の貝殻押圧文が施されており、204の外面には炭化物が付着している。

207～216は、口縁部直下に縦位もしくは斜位の貝殻刺突文を施す一群である。口縁部には肋3条程度の貝殻押圧文を施す。207は、縦位2本の流水文を施し、これを挟む形で縦位の貝殻刺突文を施す。外面は被熱により黒く変色している。208は、口径13.3cmを測る。斜位の貝殻条痕文の上に、斜位の貝殻刺突文をX字状に施し、その交点を通るように流水文を重ねる。流水文は面に対して3条であると思われる。209, 217は同一個体の可能性が高い。口径9.3cmを測り、左上がりの斜位の貝殻条痕文を角部から面の中央部まで施した後、反対側には右上がりのものを重ねる。胴部には断続的な貝殻刺突線文を面に対して3条配し、斜位の貝殻刺突文をV字状に2組施す。胴部の立ち上がりには、縦位の貝殻条痕文を浅く施す。210は、2本1組の直線状流水文を縦位に施す。211～216は小破片であるが、縦位の流水文とV字もしくはX字状の斜位貝殻刺突文を組み合わせる。なお、214は貝殻刺突文が二重に施され、216は口縁部直下に幅広の楔形貼付文を貼り付ける。貼付文は頂部に縦位の刺突を施した後、側面に斜位の貝殻条痕文を施す。

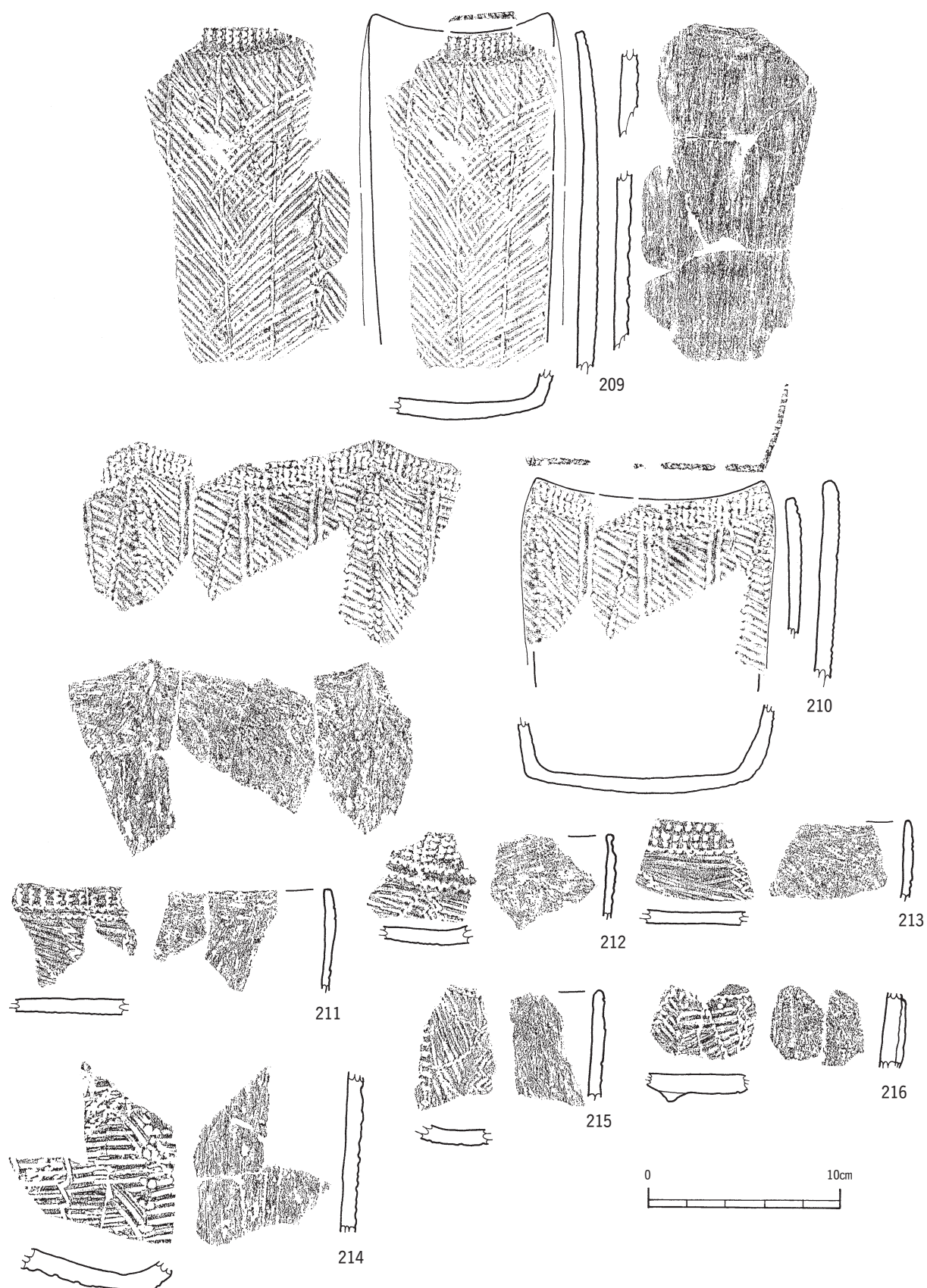
217～231は胴部片である。218は、斜位の貝殻条痕文の上に肋3条の斜位の貝殻刺突を密に施し、これを挟む形で縦位の貝殻刺突文を左右に1本ずつ施す。これを1組として面に対して3組施す。219, 225は貝殻刺突を施す。外面には炭化物が付着している。220, 221, 224, 226, 228, 229, 231は、縦位の流水文を施す。222, 224は縦位2本の流水文を、223は縦位の流水文と断続的な肋1条の貝殻刺突とを交互に施す。いずれも斜位の貝殻刺突文をV字状に重ねる。なお、224は円筒形に近い形状を有するため、上角下円タイプの可能性もある。227は、縦位の貝殻刺突文の上に、斜位の貝殻条痕文を左右からX字状に重ね、さらに断続的な短沈線文を上から下に施す。230は、明瞭な斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突を施すが、一部条痕を切る形で沈線を施す。



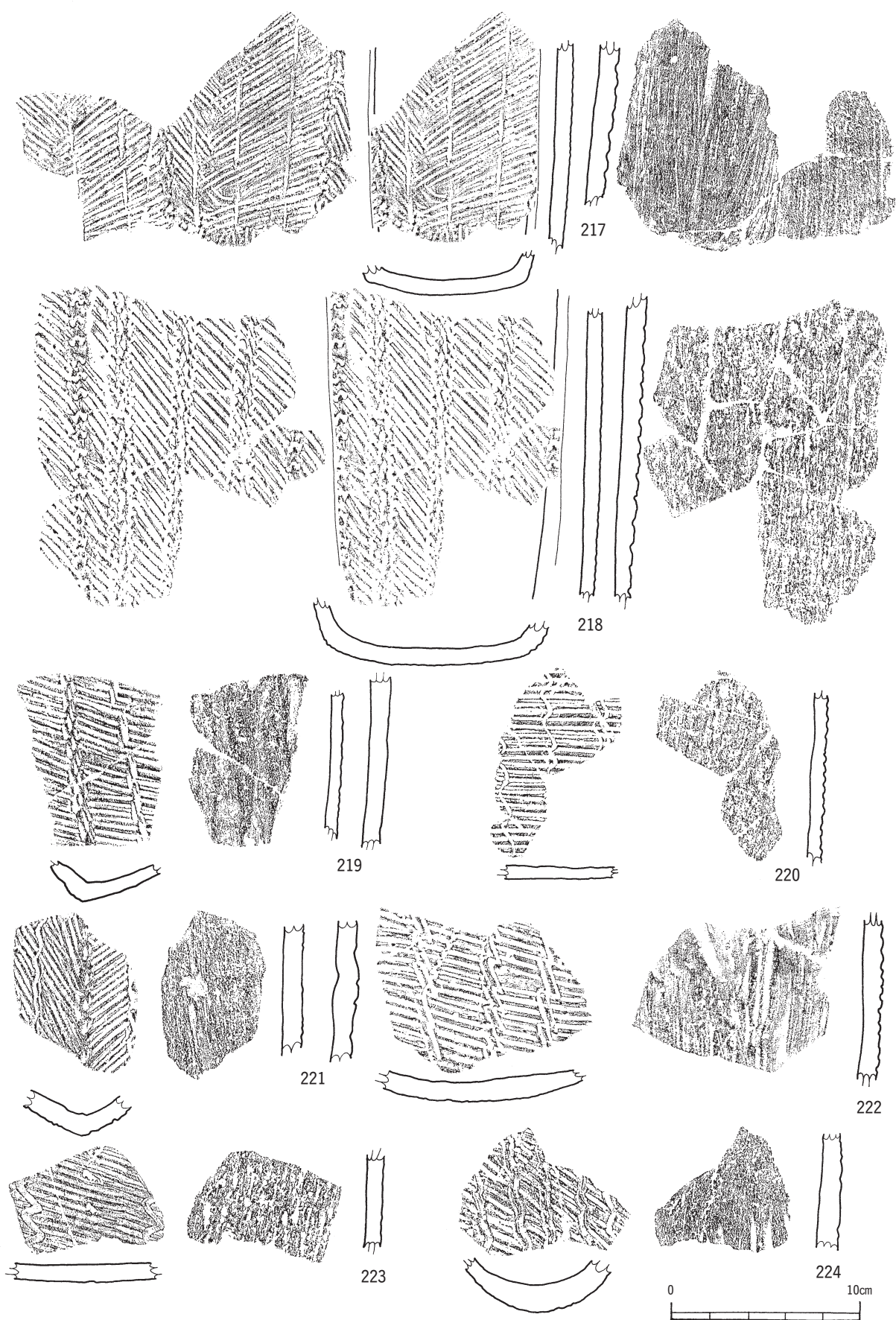
第81図 2・3類土器出土状況



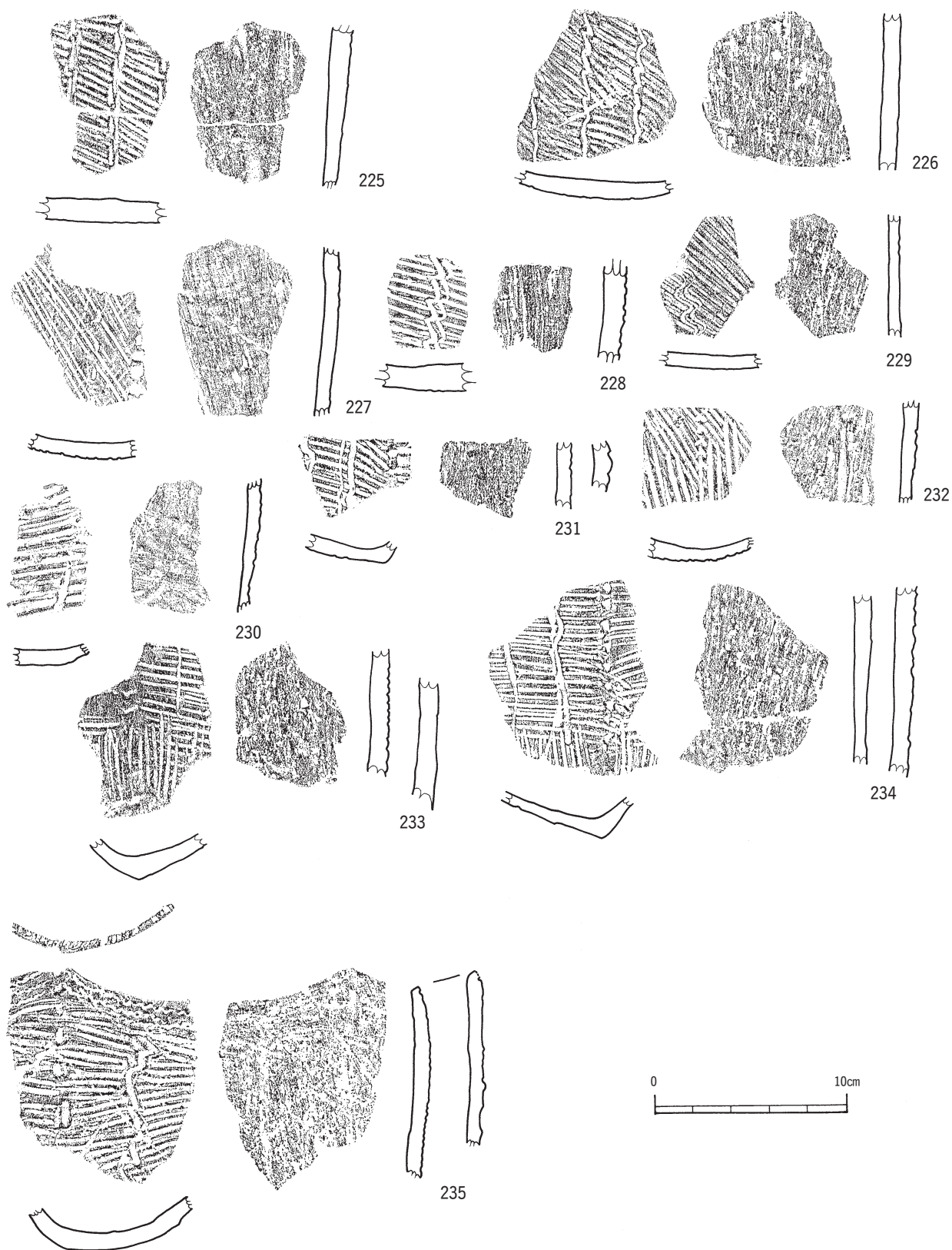
第82図 2類土器(1)



第83図 2類土器(2)



第84図 2類土器(3)



第85図 2類土器(4)

232～234は、胴部下部片である。斜位もしくは横位の貝殻条痕文を施した後、胴部の立ち上がり部分に縦位の貝殻条痕文を施す。胴部の文様は、232は貝殻刺突を、233、234は直線に近い流水文をそれぞれ施す。なお、234は外面に炭化物が付着している。

235は、レモン形の口縁部から胴部までの破片である。横位の貝殻条痕文を施すが、口縁部のみナデで調整される。胴部には縦位の流水文を施し、角部には断続的な短沈線文を上から下に施す。

② 3 類

円筒形及び角筒形の2タイプが出土している。2類同様に出土数は少ない。円筒形の一部には、口縁部がわずかに外反するものも見られる。

236～249は、円筒形を呈する一群である。

236～241は、口縁部直下に左右に刺突を施した楔形貼付文をもつ口縁部片である。236、237は同一個体の可能性が高い。縦長の楔形貼付文を2段貼り付けるが、237には補修孔が確認できる。238は、斜位の貝殻条痕文を施した後、ナデで調整している。胴部には縦位の貝殻刺突文を密に施し、楔形貼付文を2段貼り付けるが、貼付文の一部は剥落している。239は、ナデ調整の後、斜位の貝殻刺突文をK字状に施し、楔形貼付文を3段貼り付ける。外面には炭化物が付着している。240は、縦位の貝殻刺突文に、斜位の貝殻刺突文をX字状に重ね、楔形貼付文を貼り付ける。241は、縦方向のナデ調整の後、縦位の貝殻刺突文をやや密に施し、楔形貼付文を貼り付ける。

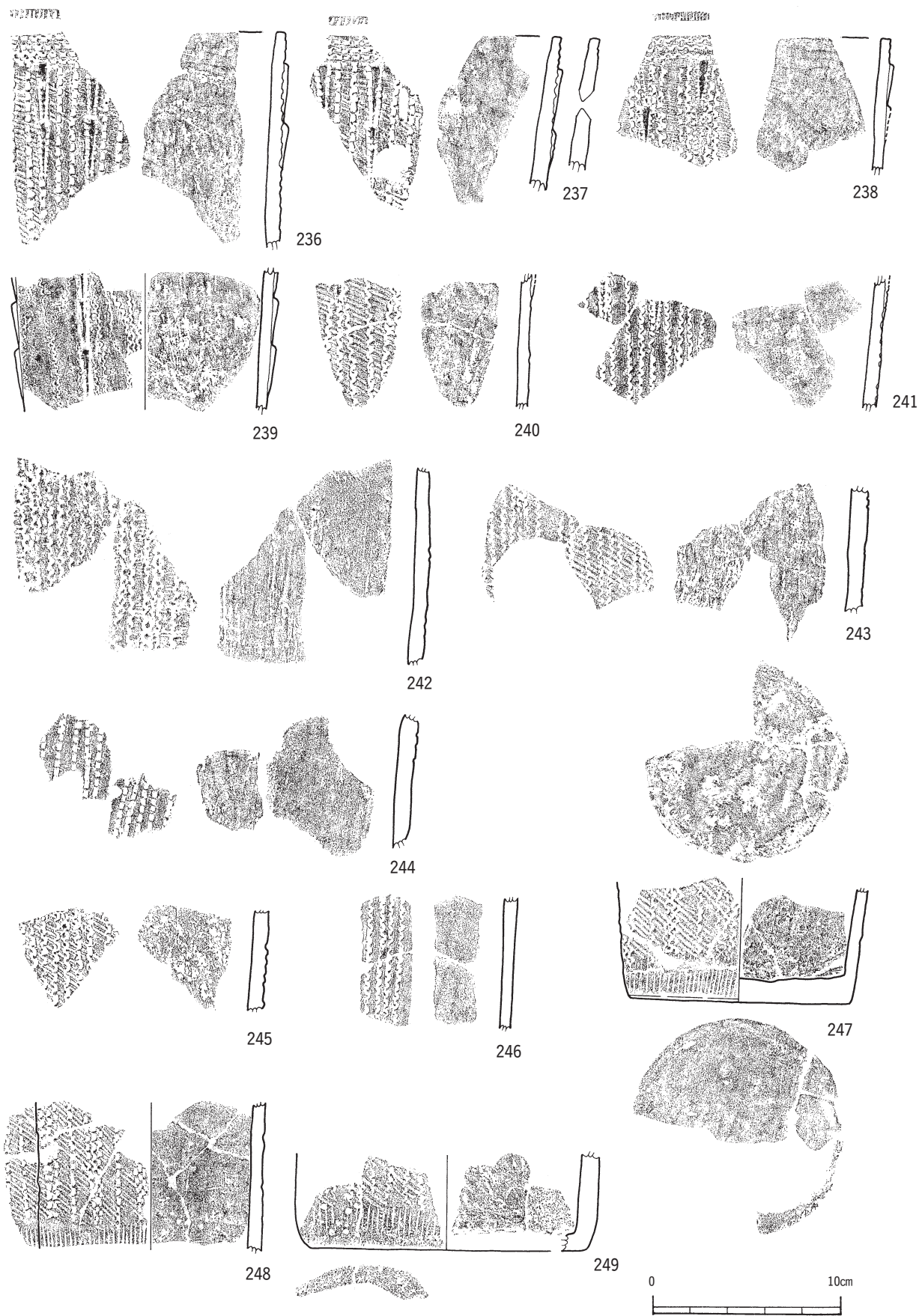
242～246は、胴部片である。242は、貝殻刺突文の間隔がやや乱れる。243、244は、外面のナデ調整が丁寧である。245は、刺突文が方形状を呈する。246は、縦位の貝殻刺突文をやや密に施す。施文具は、肋5条程度の貝殻腹縁であることが確認できる。

247～249は、胴部下部もしくは底部片である。胴部の立ち上がり部分は、ナデで調整され、側面に縦位の刻みをもつ。247は、底径11.7cmを測る。胴部には縦位の貝殻刺突文に斜位の貝殻刺突文をV字状に重ねている。248も同様の施文だが、斜位の貝殻刺突文は縦位に近い角度で施されている。249は、底径14.4cmを測る。胴部の立ち上がり部分は摩耗のため丸くなっている。

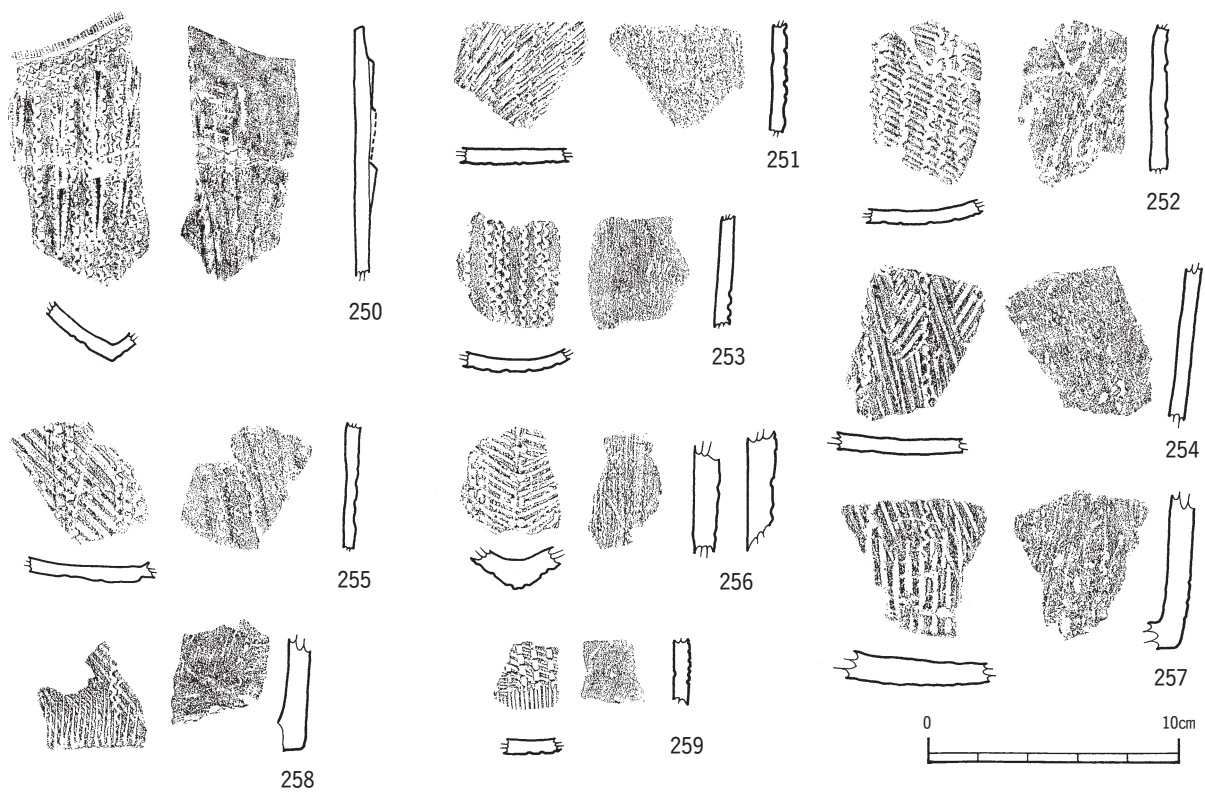
250～259は、角筒形を呈する一群である。

250は、縦位の貝殻刺突文を施した後、口縁部直下に左右に刺突をもつ楔形貼付文が3段施される。角部にも、楔形貼付文が3段貼り付けられる。251～256は胴部片である。251は、小形の貝殻による縦位の貝殻刺突文に、斜位の貝殻刺突文をV字あるいはX字状に重ねる。252も同様の文様を施すが、黒色化が進んでいる。253は、丁寧なナデ調整の後、縦位の貝殻刺突文をやや密に施す。254は、左上がりと右上がりの斜位の貝殻条痕文を交互に重ねて施し、縦位の貝殻刺突文を間隔をおいて施す。255、256は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の二重貝殻刺突文を施す。

257～259は底部片である。257は、胴部の立ち上がり部分に縦位の沈線を施す。胴部には縦位の二重貝殻刺突文が施される。258も同様の文様を施すが、刺突文は方形状を呈する。259は、立ち上がり部分に縦位の貝殻条痕文を施す。胴部の縦位貝殻刺突文は間隔をおいて施す。



第86図 3類土器(1)



第87図 3 類土器(2)

③ 4 類

完形復元土器を 1 点含む。貼付文や貝殻腹縁部による胴部の施文方法が異なるものが確認できる。

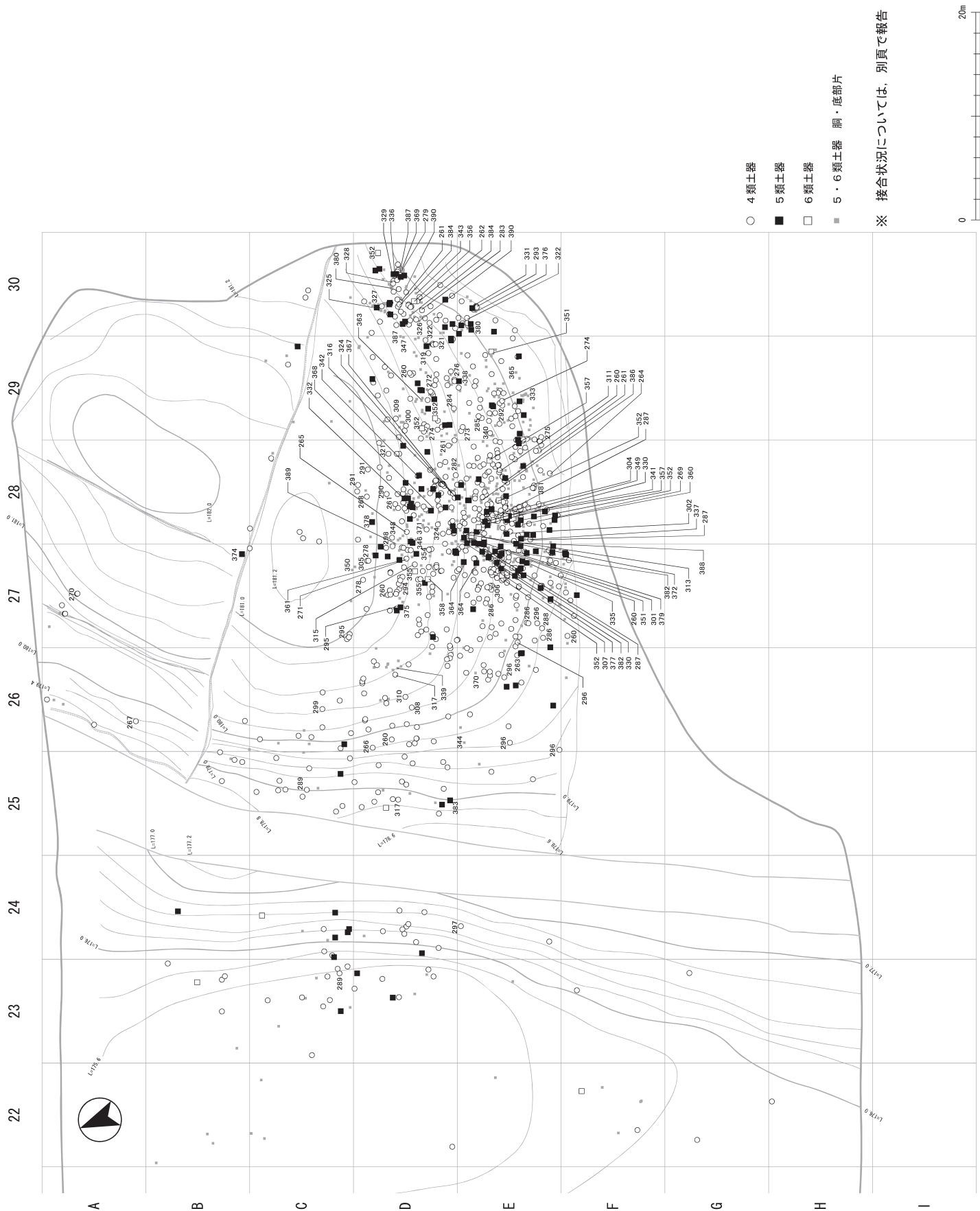
260～285は、口縁部に横位の貝殻刺突文が 2～3 条めぐり、直下に楔形貼付文を貼り付ける一群である。260は、器高31.7cm、口径28.6cm、底径18.8cmの完形復元土器である。口縁部が外反し、緩やかに底部へ至る器形を呈する。文様は、口縁部に楔形貼付文が 2 段めぐる。楔の貼り付けは、貼り付けの後にナデが施され、頂部には凹点に近い刺突文が、左右には貝殻刺突文が施されている。胴部は、貝殻押引文が施されるが、上下の切り合い関係は不明であった。口唇部と底部外面に刻みが施されている。器面調整は、内面で丁寧なナデが施されている。使用の痕跡を留めるものとして、器面色調について観察所見を記す。内面は、胴部下半1/3のところで黒色化が見られ、それより上位では黒色化は見られない。底部内外面及び胴部立ち上がり部分には黒色化は見られない。また、外面では内面の黒色化が消失する部分に対応するように、それより上位で黒色化が見られる。つまり、胴部においては外面で黒色化が見られる部分の内面はそれが見られず、外面でそれが見られない部分は内面に黒色化が見られるという関係が観察できる。この土器で見ると、土器を用いた煮炊きの場合、阿部氏が指摘しているように外面からの加熱のみではなく、底面からも加熱されていた可能性を指摘することができる。

261～285は、口縁部もしくは胴部上部片である。261は、口唇部はやや丸みを帯び、浅い刻みを付する。貼付文は 2 段貼り付ける。262は、鋭く整形した貼付文を 2 段ナデで貼り付け、上部に刻みを施す。263は、貼付文を 2 段貼り付けるが、貼付文の向かって右側面には刺突とその際に生じた刻みが、左側面にはナデの痕跡が確認できる。また、上部には工具による刻みが、最下部には再度横位の貝殻刺突文が施されている。264も同様の文様を施すが、貼付文周辺にも貝殻刺突文を施す。265は、右下がりの貝殻条痕文をナデで消した後、縦長の貼付文を貼り付ける。貼付文は V 字と I 字状とに交互に並び、上下には鋭い刻みが、左右には刺突と刺突を短く押し引いた痕が施される。V 字状の内側側面については、ナデの痕が残る。267、280は同一個体の可能性が高い。右へやや弧を描く貼付文がハ字状に並び、貼付文の左右には二重に刺突が施される。268は、貼付文を貼り付ける際の整形痕が側面に残る。270、274は同一個体の可能性が高い。ナデ調整の後、貼付文を 3 段ナデで貼り付け、上部に刻みを施す。271は、貝殻押圧文がやや間隔を開けて施され、その間に縦長の楔形貼付文がナデで貼り付けられる。272は、貼付文の頂部は平坦である。胎土には金色の雲母片が含まれる。273は、縦位の貝殻押圧文の上に貼付文の下端が確認できる。275、276、277は、貝殻押圧文が密に施される。279は、貼付文を 2 段貼り付けるが、Y 字と I 字状とに交互に並ぶ。281は小形の貼付文を貼り付ける。281、283は同一個体の可能性が高い。

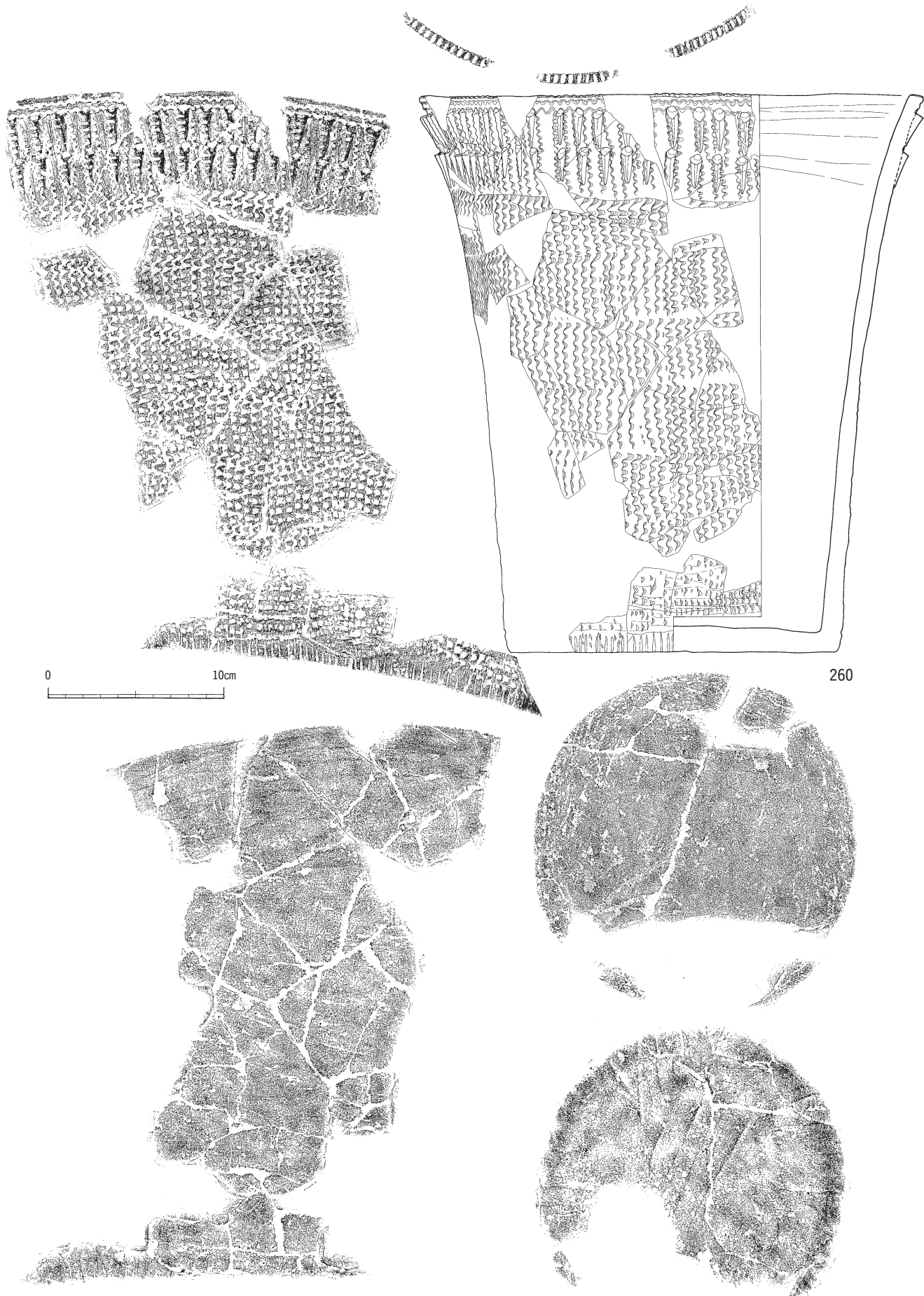
286～293については、口縁部直下に楔形貼付文等を貼り付けない一群である。

286、287は、押圧気味の縦位の貝殻刺突文を密に施す。それぞれ口径は22.2cm、15.0cmを測る。288も同様の文様を施す。289は、縦位の貝殻刺突文が密に施され、290～293では、押圧気味に施される。

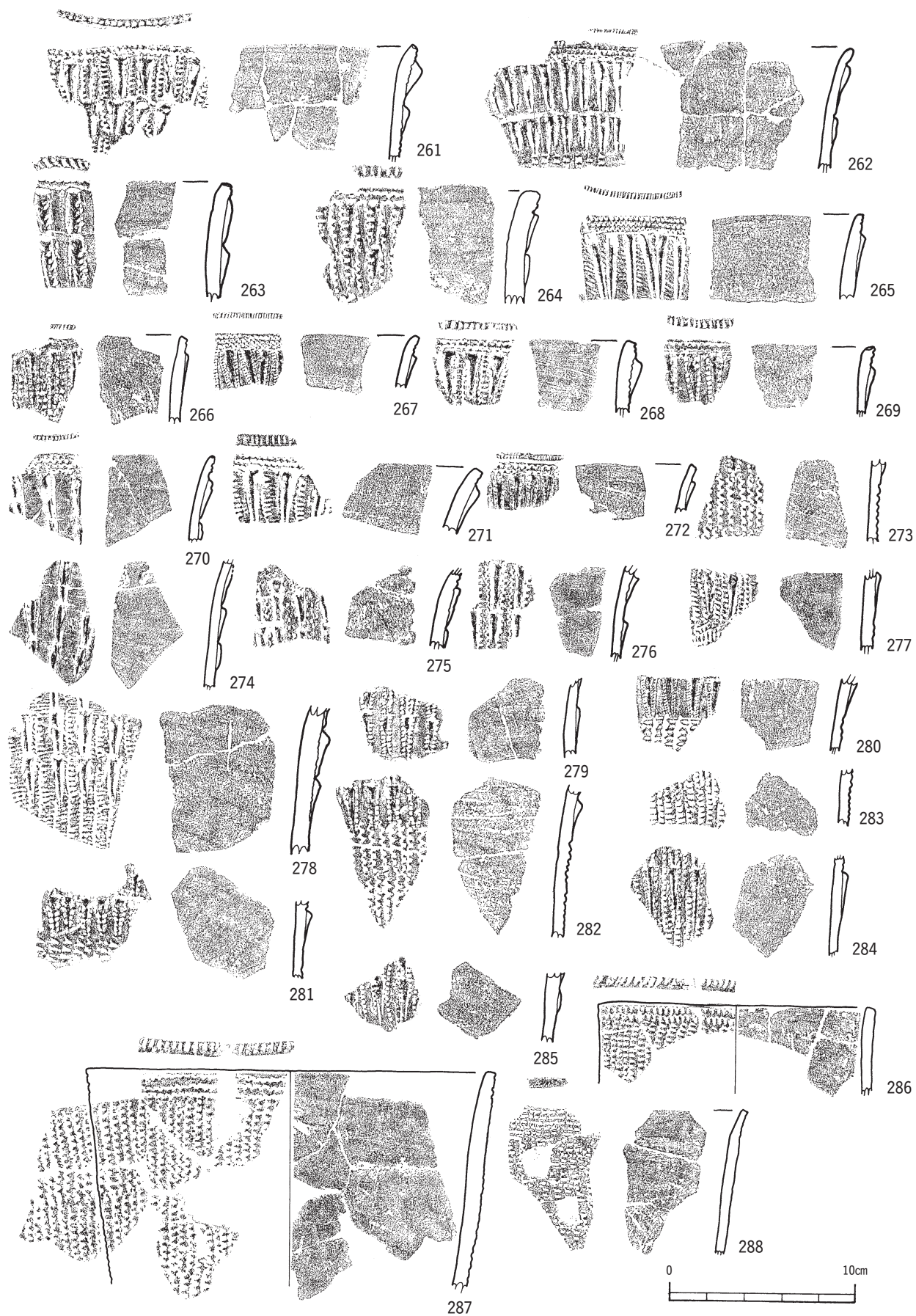
294～306は、胴部片である。294は、ナデ調整後、幅 3～5 mm 間隔で縦位の短い貝殻押引文が施



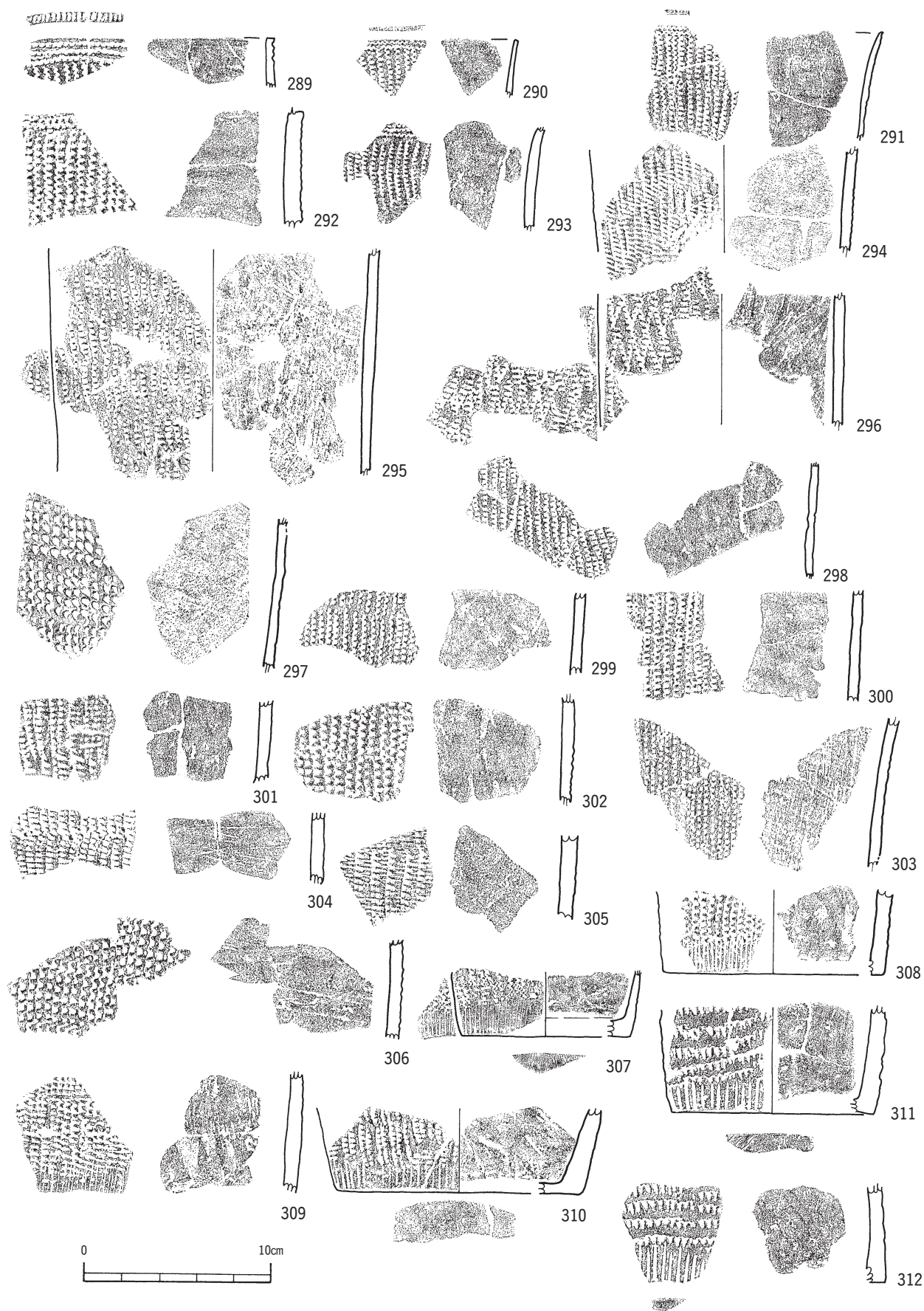
第88図 4～6 類土器出土状況



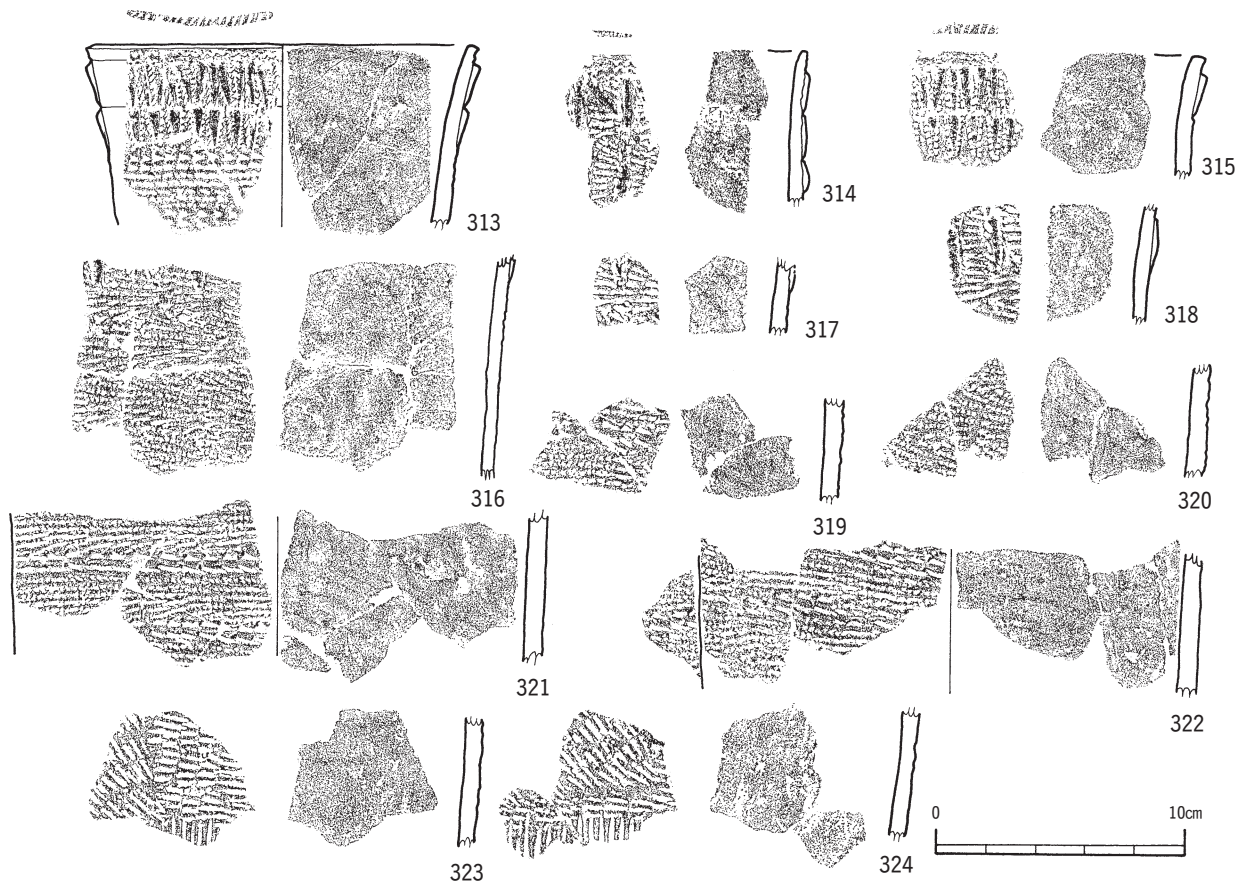
第89図 4類土器(1)



第90図 4類土器(2)



第91図 4類土器(3)



第92図 4類土器(4)

される。一部に刻み状の工具痕が残る。295は、肋7～8条の縦位の貝殻刺突文が密に施される。296は、押圧気味の貝殻刺突文がX字状に施される。297～306は、縦位の貝殻刺突文を密に施すが、297は大型の貝殻が、302は肋5条程度の施文具が用いられる。

307～312は、底部片である。307～310は、縦位の貝殻刺突文を施した後、胴部の立ち上がり部分をナデで調整し、浅い沈線を施す。307は底径9.1cm、308は底径11.9cmを測る。310はナデ調整の後、2～5mm間隔で縦位の短い貝殻押圧文を密に施す。底径は13.2cm、底面の厚さは7mmを測る。また、内面はケズリ後、丁寧なナデで調整される。

311、312は同一個体と思われる。文様は、通常の4類と異なり、丁寧にミガキが施された後、肋3～4条の横位の貝殻刺突文を上下に間隔を開け、押圧気味に施す。立ち上がり部分には、縦位の浅い沈線が施される。本遺跡では、1個体と思われる破片が確認されるだけである。

313～324は、肋5～6条の貝殻背面を連続して押圧し、結果的に押引文様の効果を表現している一群である。口縁部には、横位の貝殻刺突文が2～3条めぐり、直下にナデ調整の後、楔形貼付文もしくは粘土紐貼付文を貼り付けるものもある。

313～318は、口縁部もしくは胴部上部の破片である。313と315は同一個体と思われる。口径15.6

cmを測る。楔形貼付文を2段貼り付ける。貼付文はY字とI字状とに交互に配され、左右には刺突、上部には刻みが施される。貼付文の直下には、幅4mm間隔で貝殻押圧文が施される。314は、貝殻押圧文を施した後、粘土紐貼付文を3段ナデで貼り付ける。なお、1段目はN字状に配し、3段目のみ側面に刺突を付する。316は、貝殻押圧文がやや長めに施される。317、318は同一個体の可能性が高い。粘土紐貼付文が2段以上貼り付けられるが、貼付文は最下部のみ側面に刺突を施す。

319～322は胴部片である。319～322は、肋5～6条の貝殻押圧文が施される。押圧文の向きは横位あるいは斜位であり、一巡りすると、肋2条の断続的な短沈線文が横位に施され、再度押圧文がめぐらされる。このような手法を交互に繰り返して施文する。320は、一部黒色化が確認できる。

320、321は同一個体の可能性がある底部片である。横位もしくは斜位の貝殻押圧文が施されるが、胴部の立ち上がり部分には、縦位の浅い条痕文を付する。

④ 5 類

口縁部にバリエーション豊かな刺突が施され、楔状の様相を呈する一群である。胎土に1mm大の長石及び金色の雲母片を多量に含むものが観察できる。

325～340は、口縁部をナデで調整した後、横位の貝殻刺突文を1～2条めぐらせ、直下に楔状貝殻刺突文を施した一群である。

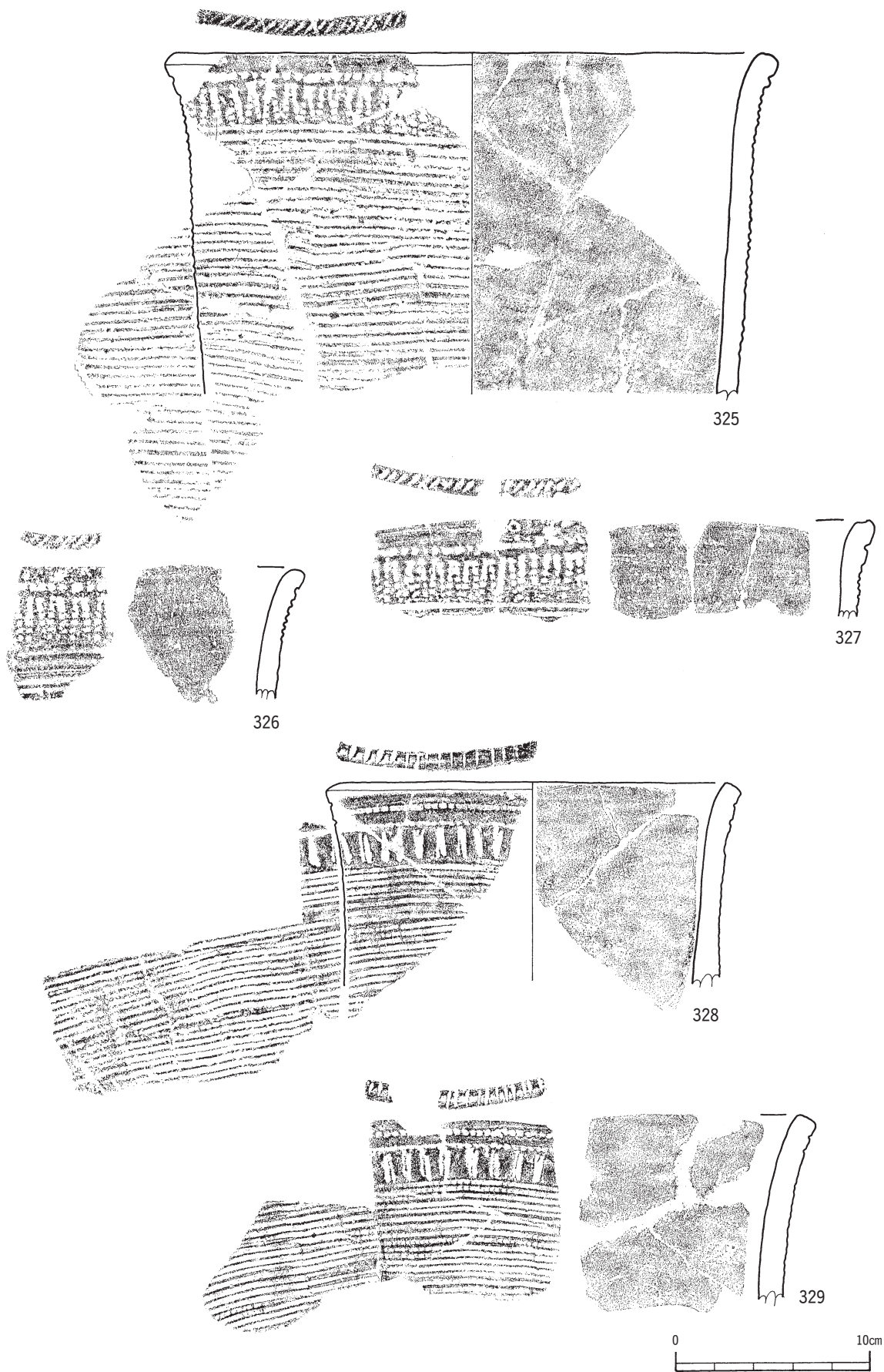
325～327は同一個体の可能性が高い。口径は31.6cmを測り、口唇部には斜位の刻みを付する。口縁部直下に斜位の貝殻刺突文をV字状に施す。刺突文はいずれも方形状を呈している。328、329も同一個体の可能性が高い。口径は21.4cmを測る。工具によるV字状の刻みを間隔を開けて施す。胴部には、小形の貝殻を用いた貝殻押引文を施す。330、331は、口唇部がやや肥厚し、丸みを帯びる。口縁部には横位の工具による刺突文が1条めぐり、直下に肋7条程度の斜位の貝殻刺突文をV字状に密接に施す。332は、口径は18.2cmを測る。333、337は、肋5～6条の貝殻刺突文を縦位に施して楔様とし、2段程度形成する。336は、縦位に近い貝殻刺突文をV字状に施し、楔様を形成する。口径は20.4cmを測る。335、339も同様の文様が施されるが、同一個体の可能性が高い。340は、口縁部直下に肋7～8条の斜位の貝殻を上下交互にV字状に動かし、繰り返して施文する。

341、342は、口縁部の楔状貝殻刺突文をC字状の半截竹管状の施文具で施している一群である。

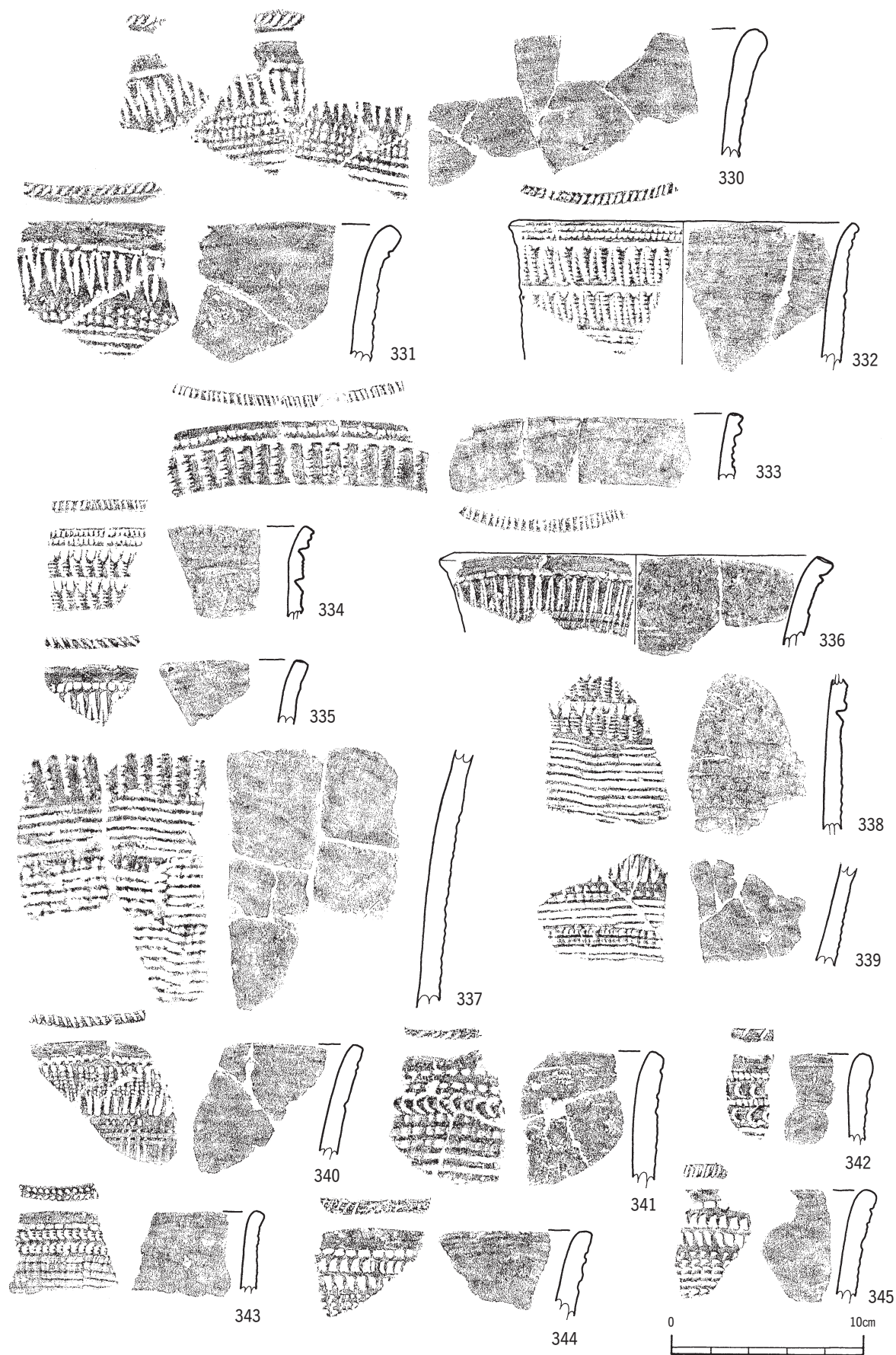
341は、口縁部に凹点状の刺突が横位に2条めぐり、直下にC字状の刺突を施す。342は刺突を2段施し、刺突の上部には2段とも凹点状の横位貝殻刺突文を施す。胎土には1mm大の長石及び金色の雲母片を含む。

343～349は、口縁部に貝殻刺突もしくはへう状工具による刺突を施す一群である。

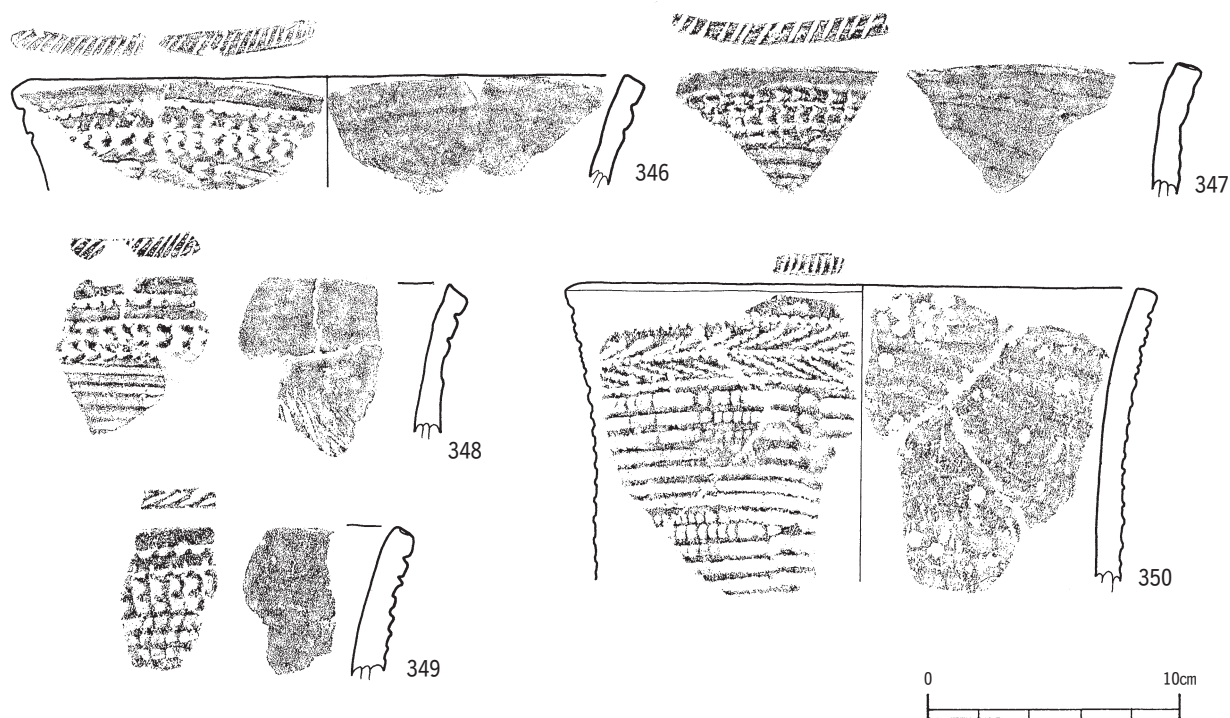
343は、小形の貝殻による刺突が2段施される。口唇部は丸みを帯び、肋2条の貝殻刺突を縦位に付する。344、345は、口縁部に凹点状の刺突文が横位に1条めぐり、直下にへう状工具を上下交



第93図 5類土器(1)



第94図 5 類土器(2)



第95図 5 類土器(3)

互にV字状に繰り返し施文することで楔様とする。346は、口径25.0cmを測る。口縁部には大型の貝殻による横位の貝殻刺突文が1条めぐり、直下に肋2条の縦位の貝殻押圧文を重ね、これを切るように再び横位の貝殻刺突文が1条めぐる。347、348も同様の施文とする。349は、横位貝殻刺突文で肋1条程度の縦位の貝殻刺突を上下から挟んでいる。

350は、刺突文を組み合わせるタイプである。口径23.4cmを測り、口縁上部に斜位の貝殻刺突文を羽状に施す。さらに、刺突文の上下及び羽状文の中心に横位の貝殻刺突文を計3条めぐらせる。胴部は貝殻押引文を施すが、焼成は粗い。

⑤ 6 類

5 類と比較すると、出土数はかなり少ない。5 類同様、胎土に 1 mm 大の長石及び金色の雲母片を多量に含むものが観察できる。

351～358は口縁部片である。351～353は、口縁部に凹点状の横位の貝殻刺突文が 2 条めぐり、口径はそれぞれ 21.8cm, 15.1cm, 17.1cm を測る。また、353には補修孔が確認できる。354も同様である。355は、口径 10.8cm を測る。胴部は、貝殻押引文だが、押圧文の特徴を色濃く残す。いずれの施文も小形の貝を利用したと見られる。356は、波状口縁を呈し、口縁部に横位の凹点状の貝殻刺突文が 3 条めぐり、胴部は、押圧文に近い貝殻押引文が施されるが、一部に貝殻刺突文が見られる。357, 358は、口縁部上部のみの破片である。横位の貝殻刺突文が 2 条以上めぐると思われる。

359～390は、5 類もしくは 6 類の胴部及び底部片であるが、正確に分類することが困難なため、まとめて掲載する。

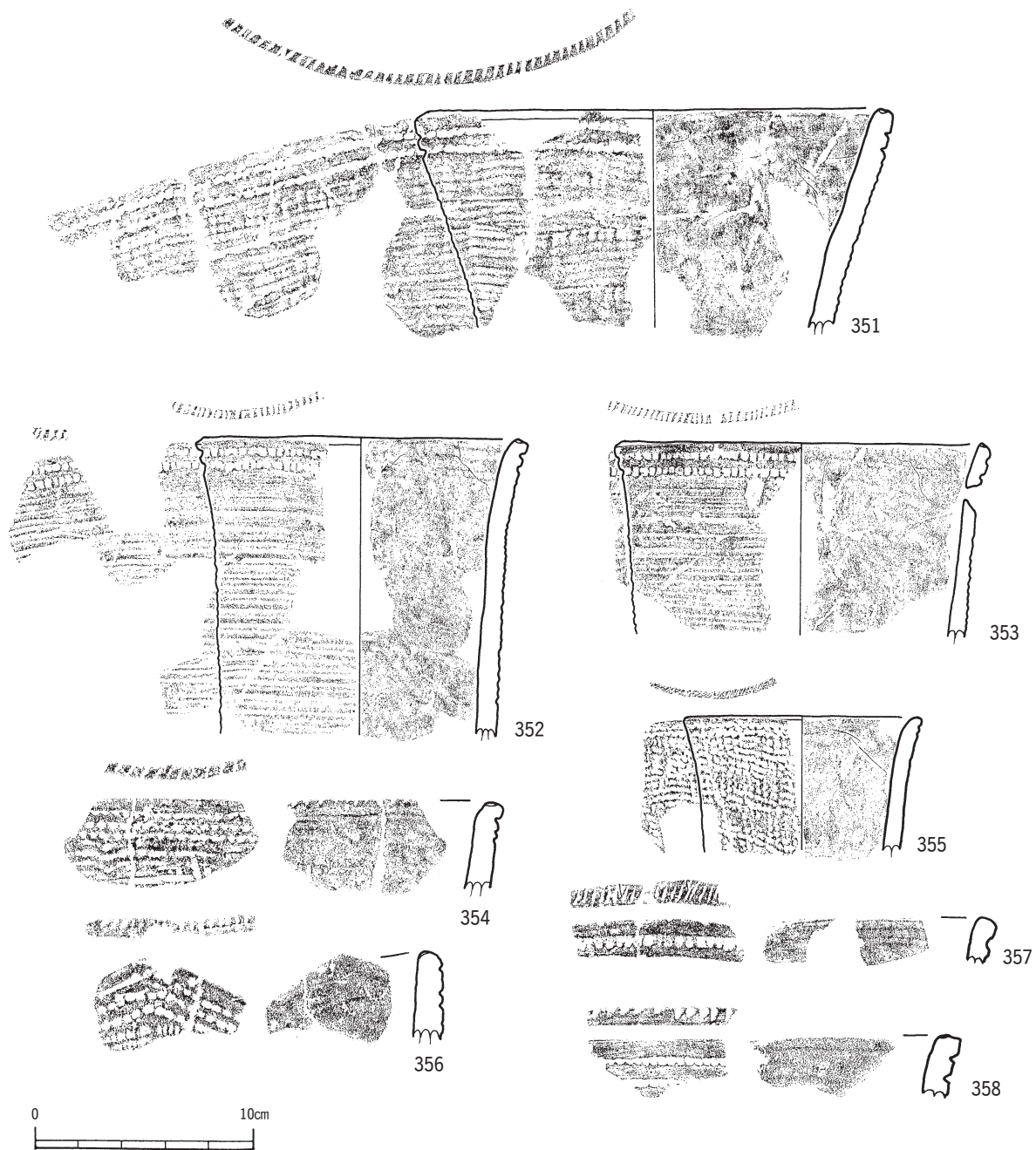
359～378は、胴部の貝殻押引文が、比較的しっかりと施されている一群の胴部片である。

359, 361は、同一個体の可能性が高い。上部に肋 3～4 条の方形状の貝殻押圧文が施されるため、口縁部付近の可能性もある。360は、縦位もしくは斜位の貝殻刺突文を横位を意識して施すが、刺突文はやや押圧文に近い。施文方法としては、まず縦位肋 2 条の貝殻刺突を横位に施した後、直下に縦位肋 3～4 条の貝殻刺突を器面に対して斜位に構え、横位に繰り返し押圧を加えたものと思われる。これを 1 組として、上部から順に数回繰り返して施文する。366は、大型の貝殻で施文される。367は、一部凹点状の刺突をめぐらせる。368, 369は、肋 7 条の貝殻押引文を施すが、369の焼成は粗い。375の押引文は、一度に 1.2cm 程度の長さで施している。376, 377は、焼成が粗く、外面は摩耗している。378は、小形の貝殻による押引文を施すが、内面は黒色化している。

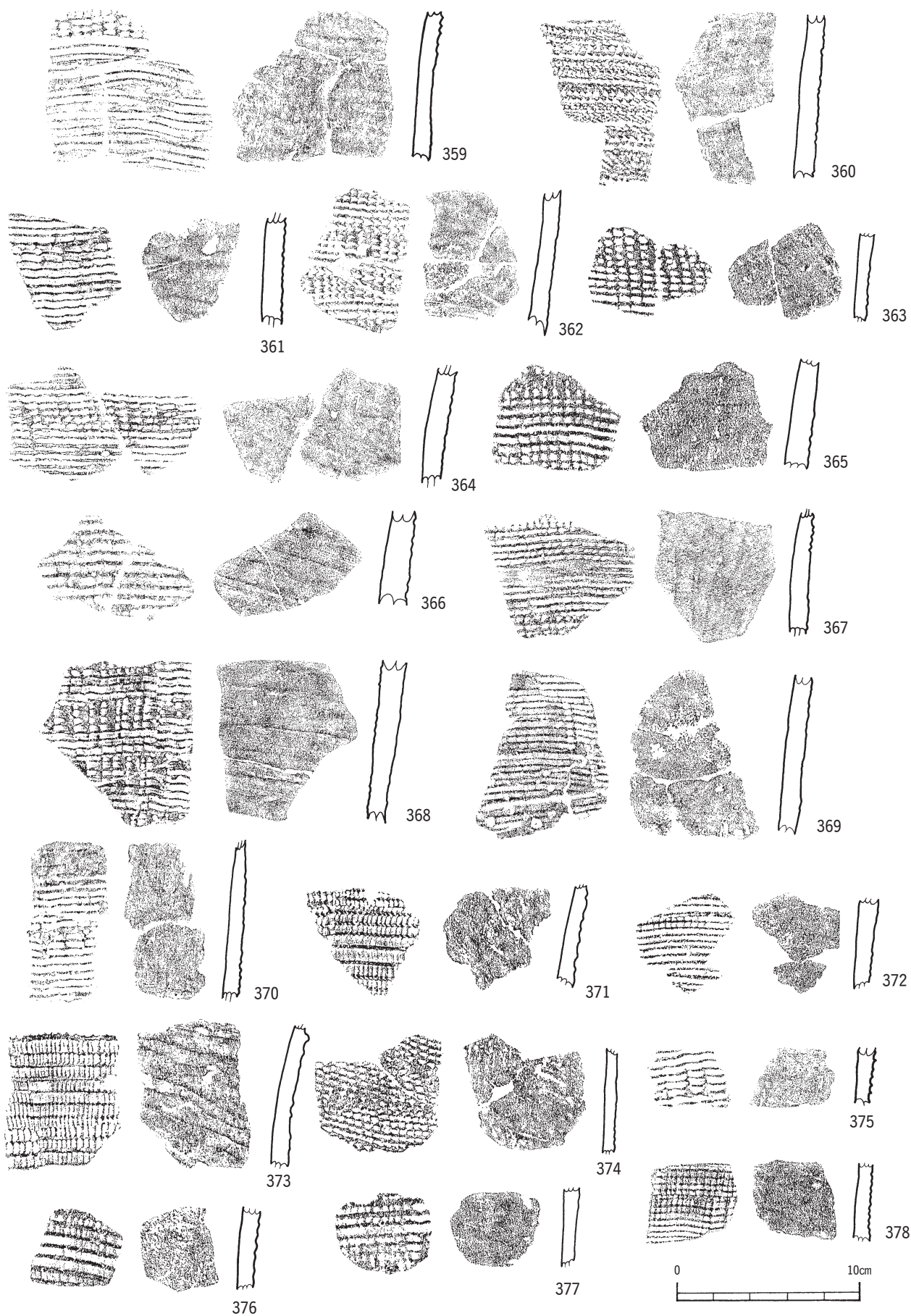
379～384は、胴部の貝殻押引文がやや不明瞭な一群の胴部片である。

379は、肋 7 条程度の貝殻押引文を施した後、ナデで調整される。380は、外面に炭化物が付着している。381は、大型の貝殻が用いられる。382は、全体的に浅い押引文を施す。383は、表面がやや摩耗している。384は、胎土に角閃石を多量に含み、外面には炭化物が付着している。

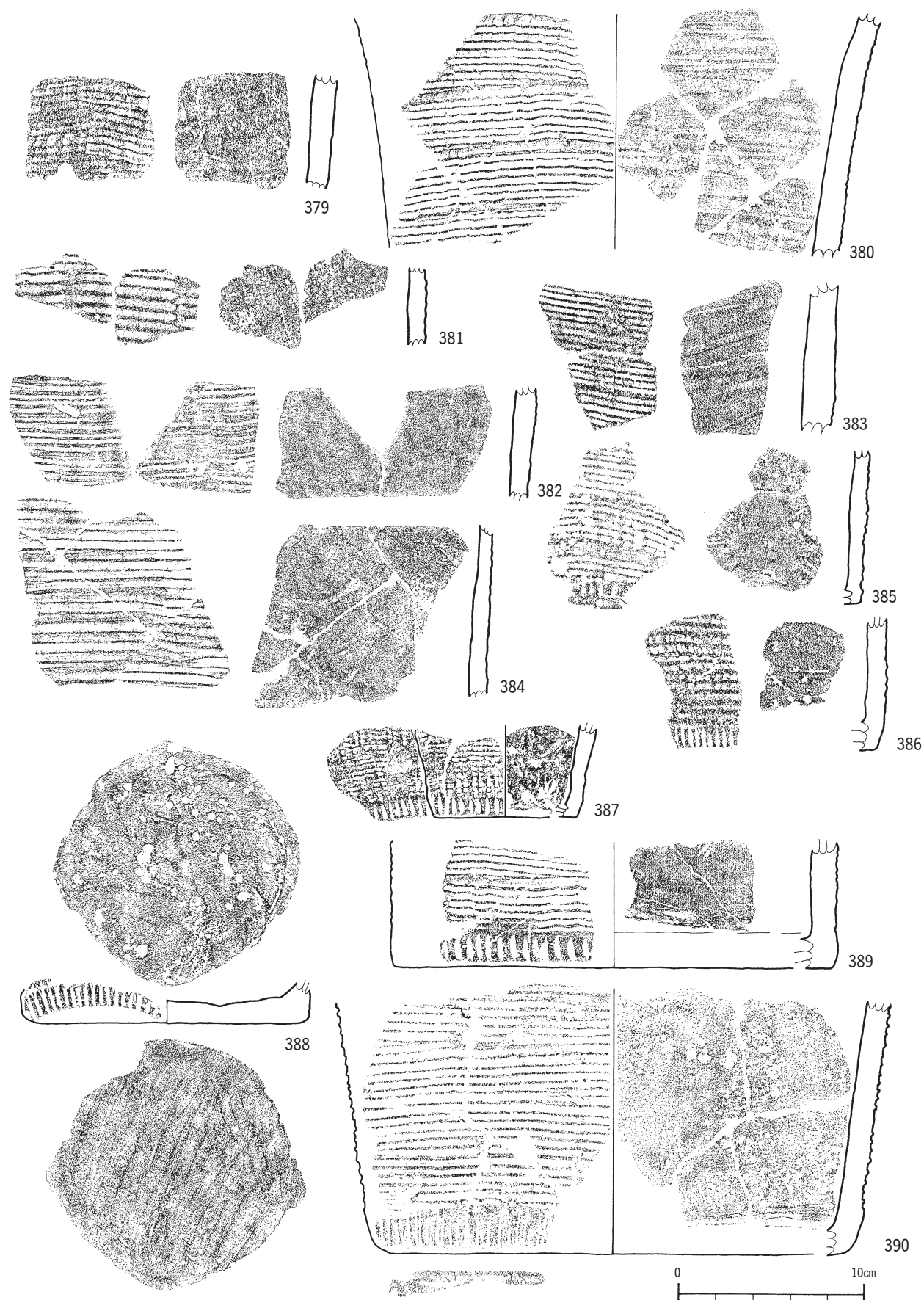
385～390は、胴部下部片及び底部片である。いずれも胴部の立ち上がり部分には、縦位の刻みを施す。385は、表面がやや摩耗しており、内部は黒色化が進む。387は、底径 7.6cm の小型の土器の破片である。388は、底径 15.5cm を測る。底部内面はナデ、底部外面は丁寧なミガキによって調整される。389は、胴部がほぼ垂直に立ち上がり、施される刻みも鋭く長い。胎土に 6 mm 大の赤色粒子を含み、底径は 23.8cm を測る。390も同様の文様を施し、底径は 25.5cm を測る。



第96図 6類土器



第97図 5・6類土器(1)



第98図 5・6類土器(2)

⑥ 7 類

口縁部の貝殻刺突文のバリエーションが豊富なのが特徴である。完形復元土器を 1 点含む、本地区の中心的な土器である。

391～409は、口縁部に横位貝殻刺突文を 2～3 条施し、斜位の貝殻刺突文を施す一群である。

391, 392は、口唇部が肥厚し、平坦で外を向き、斜位の刻みを付する。口径はそれぞれ31.0cm, 29.4cmを測る。390は、口径32.2cmを測る。口縁部には左上がりの貝殻刺突文が施される。口唇部は肥厚し、斜位の刻みを付するが、頂部は摩耗により消えている。394, 396は、それぞれ口径25.0cm, 18.8cmを測る。395は、口径15.2cmを測る。口縁部には小形の貝殻による横位貝殻刺突文が 2 条めぐり、直下に肋 6 条程度の斜位の貝殻刺突文を施す。胴部は縦位の貝殻条痕文に綾杉条痕文を重ねる。397も同様の文様を施す。口径は20.0cmを測る。398, 399は、口縁部上面観がレモン形を呈する。398は、大きく外反し、二対の波頂部を有する。口唇部は丸みを帯び、やや肥厚し、斜位の刻みを付した後、ナデで消している。口径は21.7cmを測る。399は、1 対の波頂部を有する。口唇部はやや丸みを帯び、斜位の刻みを付する。口径は17.9cmを測る。401, 408は大型の貝殻で施文されるが、綾杉条痕文は小形の貝殻で施される。403は大きく外反する。404の貝殻刺突は、口縁部に貝殻腹縁部を斜位に刺突した後、縦位に押し引く。409は、肋 4 条の斜位の刺突文を施す。胴部には緩やかな綾杉条痕文が施される。

410～423は、口縁部に斜位の貝殻刺突文を組み合わせて羽状に施す一群である。

410は、器高40.4cm、口径31.2cm、底径16.0cmの完形復元土器である。口縁部が強く外反し、頸部でやや締まり緩やかに底部へと至る器形を呈する。文様は、丸みのある口唇部に米粒状の刻み目を 2 条めぐらせる。口縁部には、斜位の貝殻刺突文を組み合わせて、「く」字状あるいは羽状を呈する。胴部には貝殻による綾杉条痕文を全面に施す。底部は横位の貝殻条痕文を施し、接地面外周には口唇部と同様に米粒状の刻み目文を施す。器面調整は丁寧なナデを基本とする。口縁部では特に横方向の調整痕が明瞭に観察できる。また、土器内面には黒色化している部分が見られ、オコゲの可能性が考えられる。これは、胴部の立ち上がりよりやや上位から上へ10cm程度帯状に見られる。なお、全体的に器面が摩滅している印象を受ける。

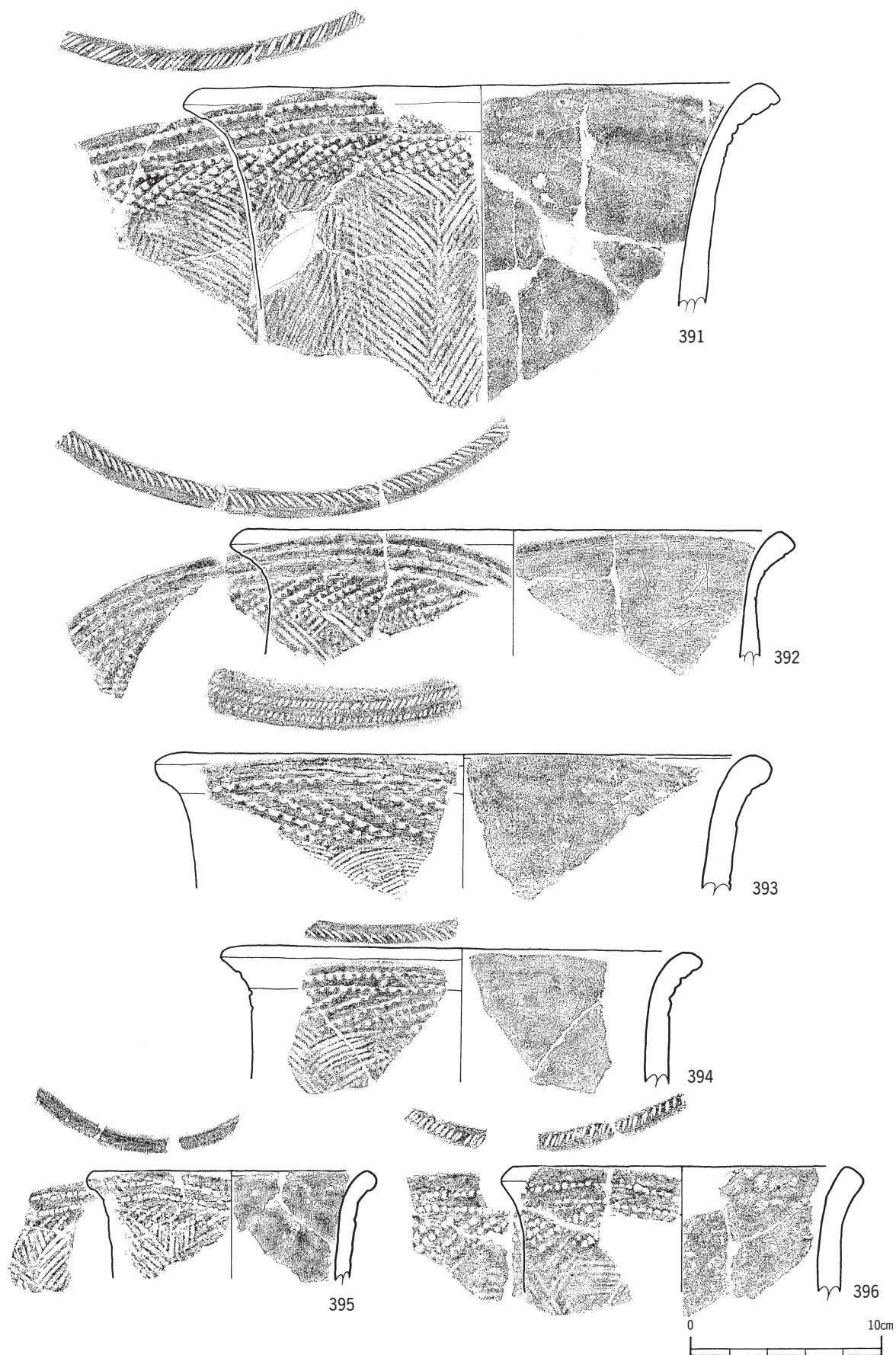
411は、口径40.2cmを測る。口唇部は平坦で、米粒状の刻みを付し、口縁部には肋 7 条程度の羽状文を施す。412, 413も同様の文様を施すが、羽状文の向きは逆になる。口径はそれぞれ31.8cm, 27.9cmである。414は、口径26.2cmを測る。口縁部が大きく外反する器形を呈し、口唇部は完全に外を向く。羽状文は肋 5 条程度の大型の貝殻によって施される。415は、口径24.2cmを測る。羽状文の下には縦位の細かい条痕文を施すが、全体的に摩耗している。416は、大型の貝殻によって縦位の貝殻条痕文を施した後、小形の貝殻による綾杉条痕文を重ねる。口径は22.4cmを測る。417は、羽状文をやや押圧気味に施している。418は、口唇部直下から羽状文を施すが、上部の貝殻刺突文は縦位に近い角度で施す。

424～435は、口縁部に横位の貝殻刺突文のみを 2～4 条施す一群である。

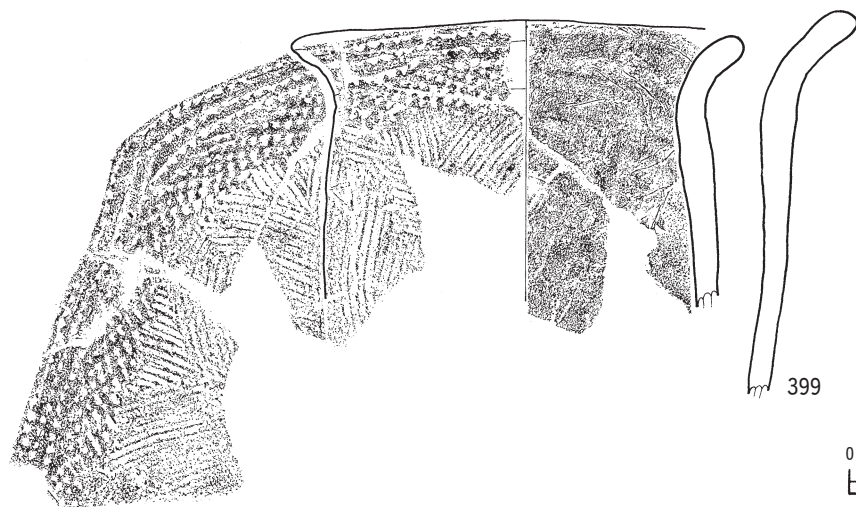
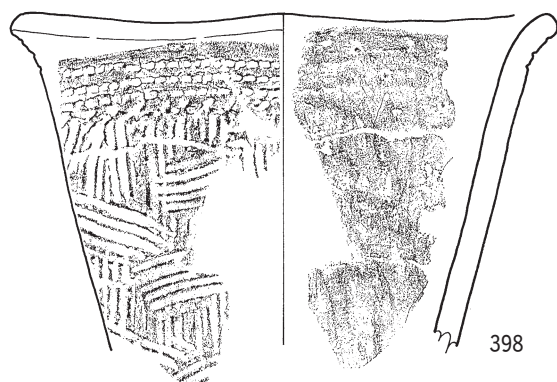
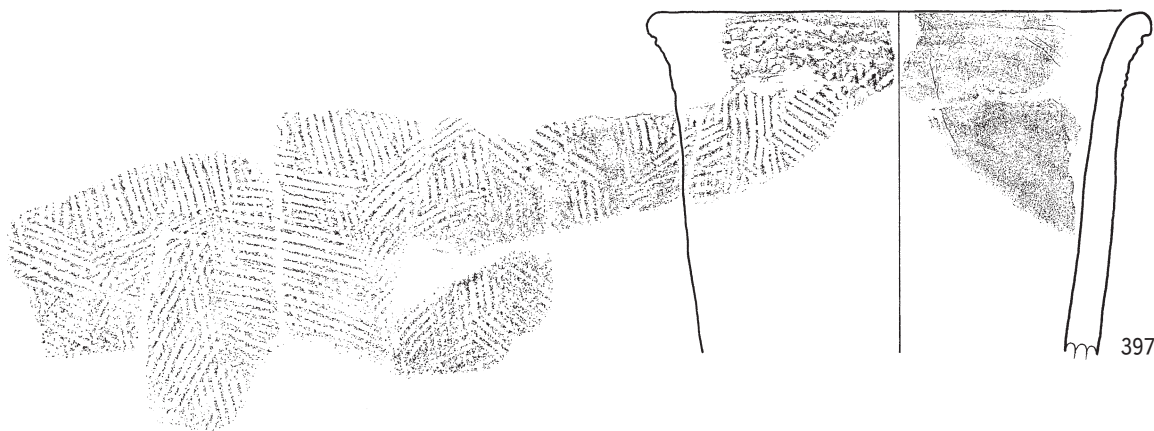
424は、口径15.3cmを測る。口縁部に横位の貝殻刺突文が 5 条めぐり、胴部には、縦位の浅い貝



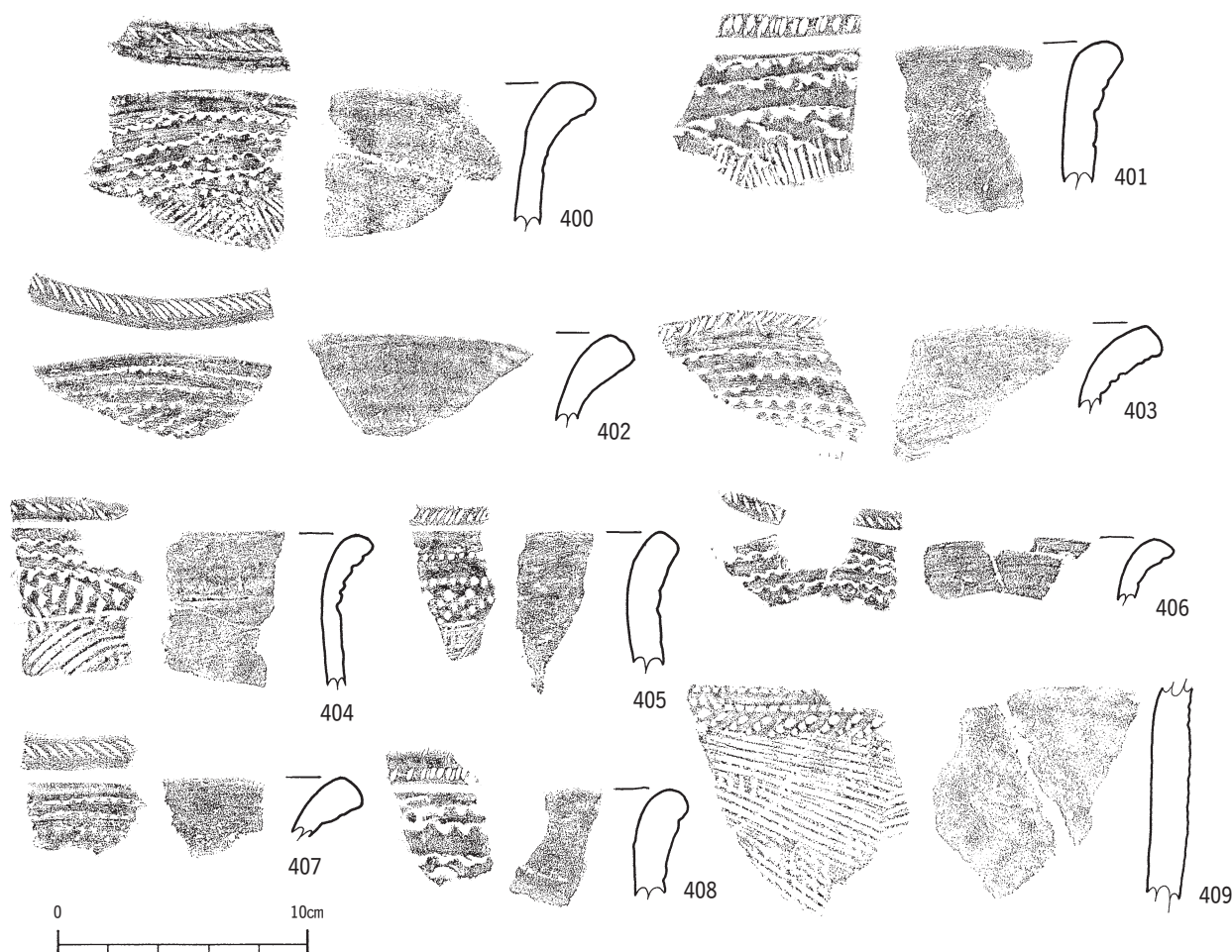
第99図 7～9 類土器出土状況



第100図 7類土器(1)



第101図 7類土器(2)

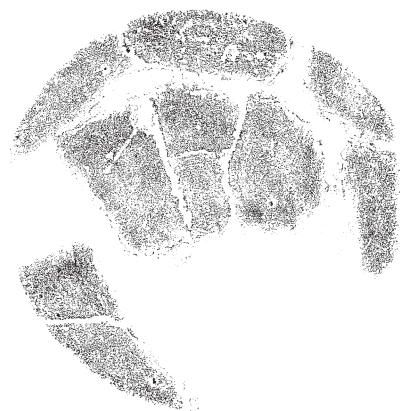
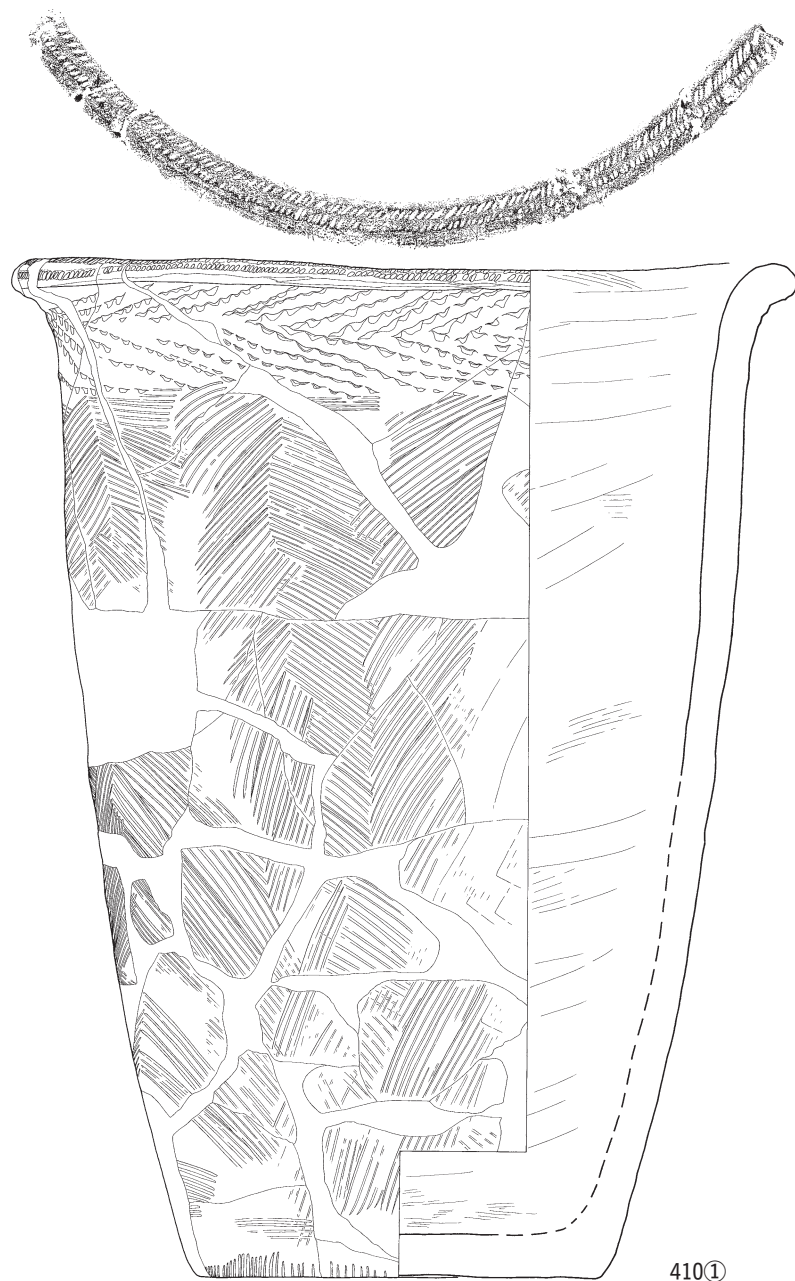


第102図 7類土器(3)

殻条痕文が施される。425, 427, 432は同一個体の可能性が高い。口径は16.1cmを測る。口唇部は丸みを帯び、楕円状の刻みを付する。426は、口唇部の平坦面に貝殻刺突文が1条めぐる。口径は17.8cmを測る。428, 429は同一個体の可能性が高い。口径は16.7cmを測る。内外面共に黒色化が進んでいる。430は、口径19.8cmを測り、口縁部直下に米粒状の刻みが1周めぐる。431～434は、口唇部が丸みを帯びて肥厚し、斜位の刻みを付する。431, 432はそれぞれ口径23.7cm, 30.3cmを測る。

436～441は、口縁部に斜位の貝殻刺突文のみを施す一群である。

436は、大型の貝殻で施文される。胴部は縦位の貝殻条痕文を施した後、綾杉を意識した斜位の条痕文を施す。437は、口径24.4cmを測る。口縁部に肋8条の貝殻押圧文をやや縦位に施す。口唇部は平坦で、斜位の刻みを付する。439も同様である。438は、口径19.9cmを測るが、一部に爪痕が残る。441は、肋1条の斜位貝殻刺突を横位に4段めぐらせて斜位の貝殻刺突文状としている。口唇部はやや丸みを帯び、平坦面に横位の貝殻刺突文を口唇部に沿って1条めぐらせる。口径は15.3cmを測る。



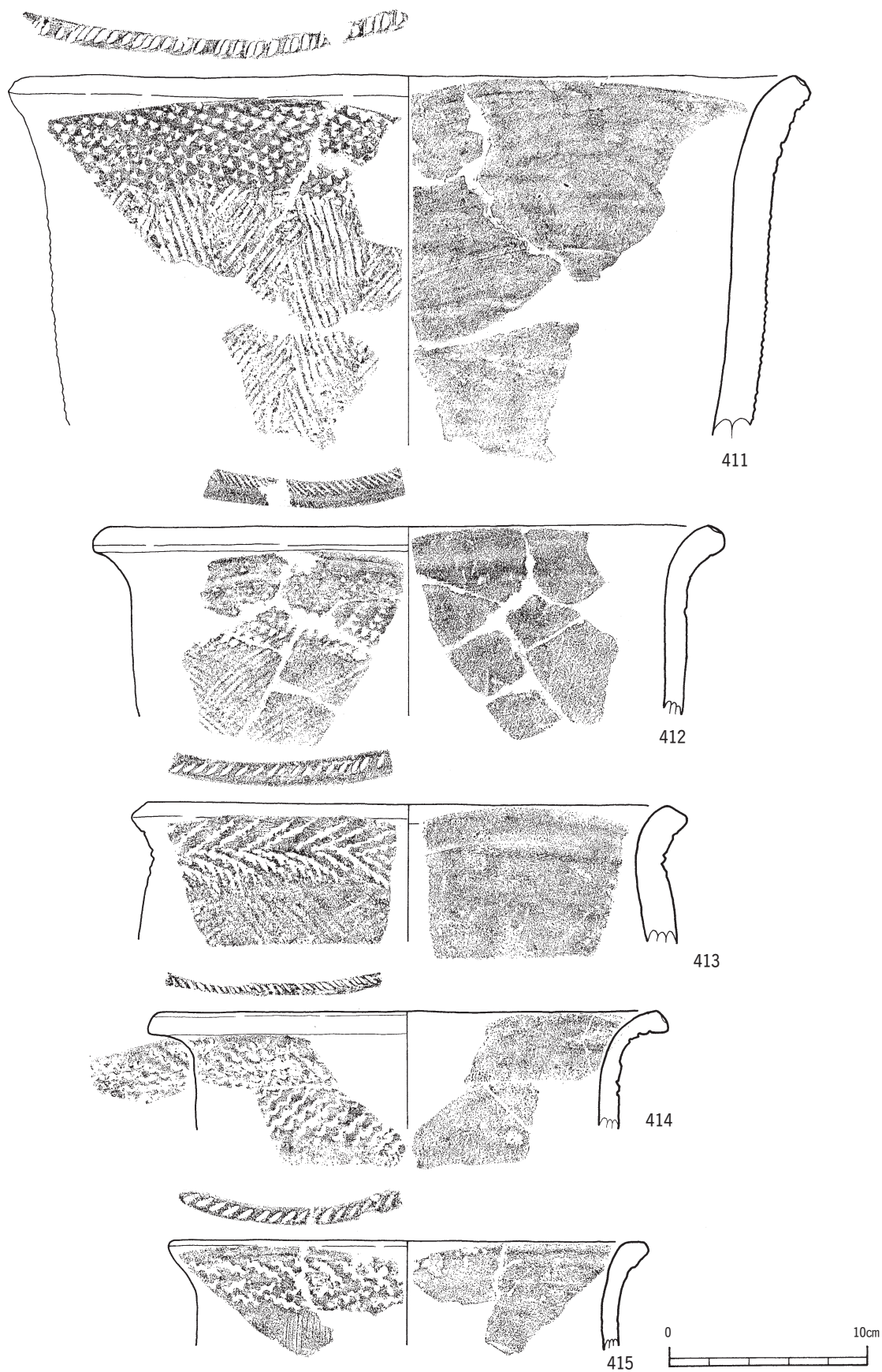
410①

0 10cm

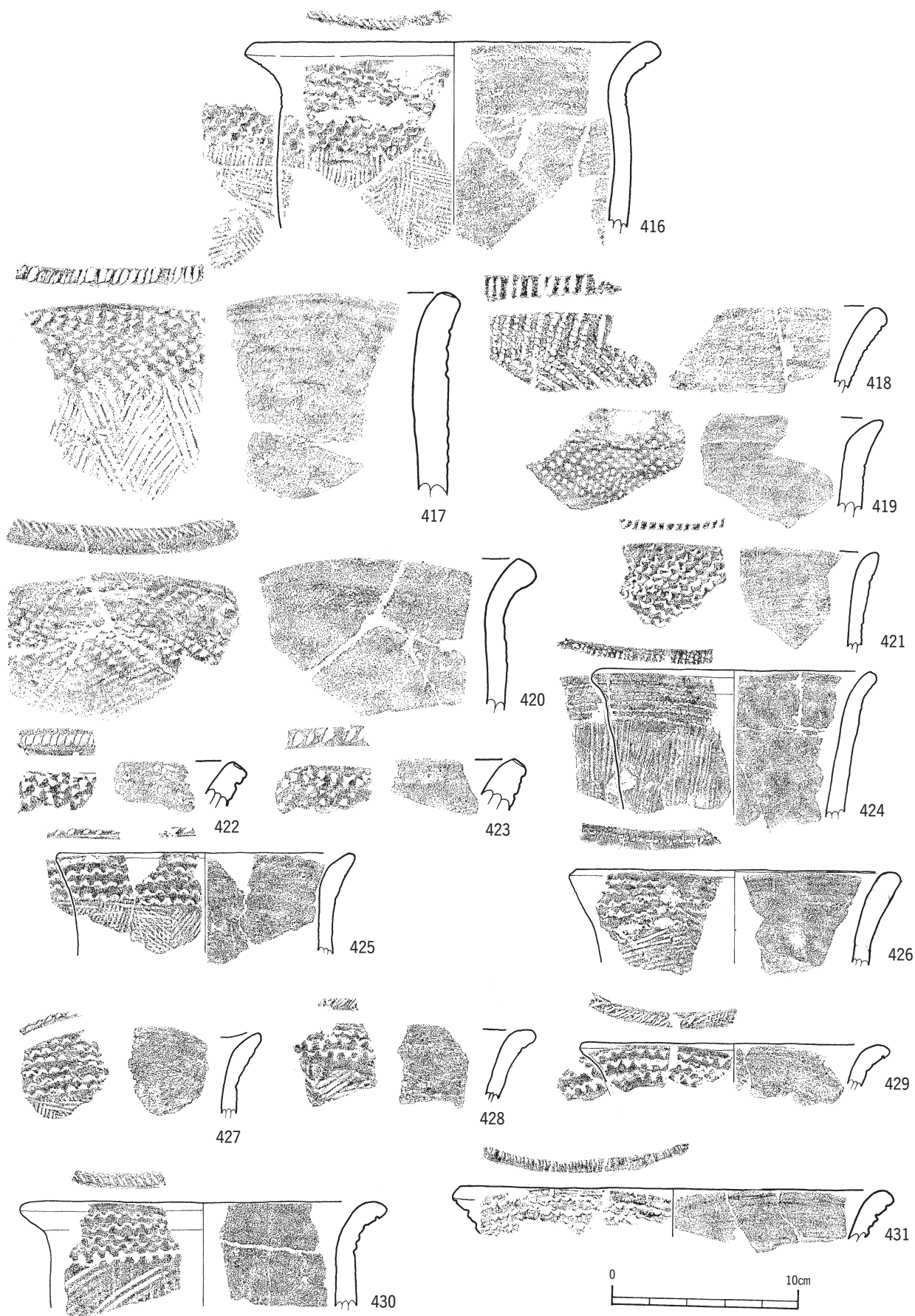
第103図 7類土器(4)



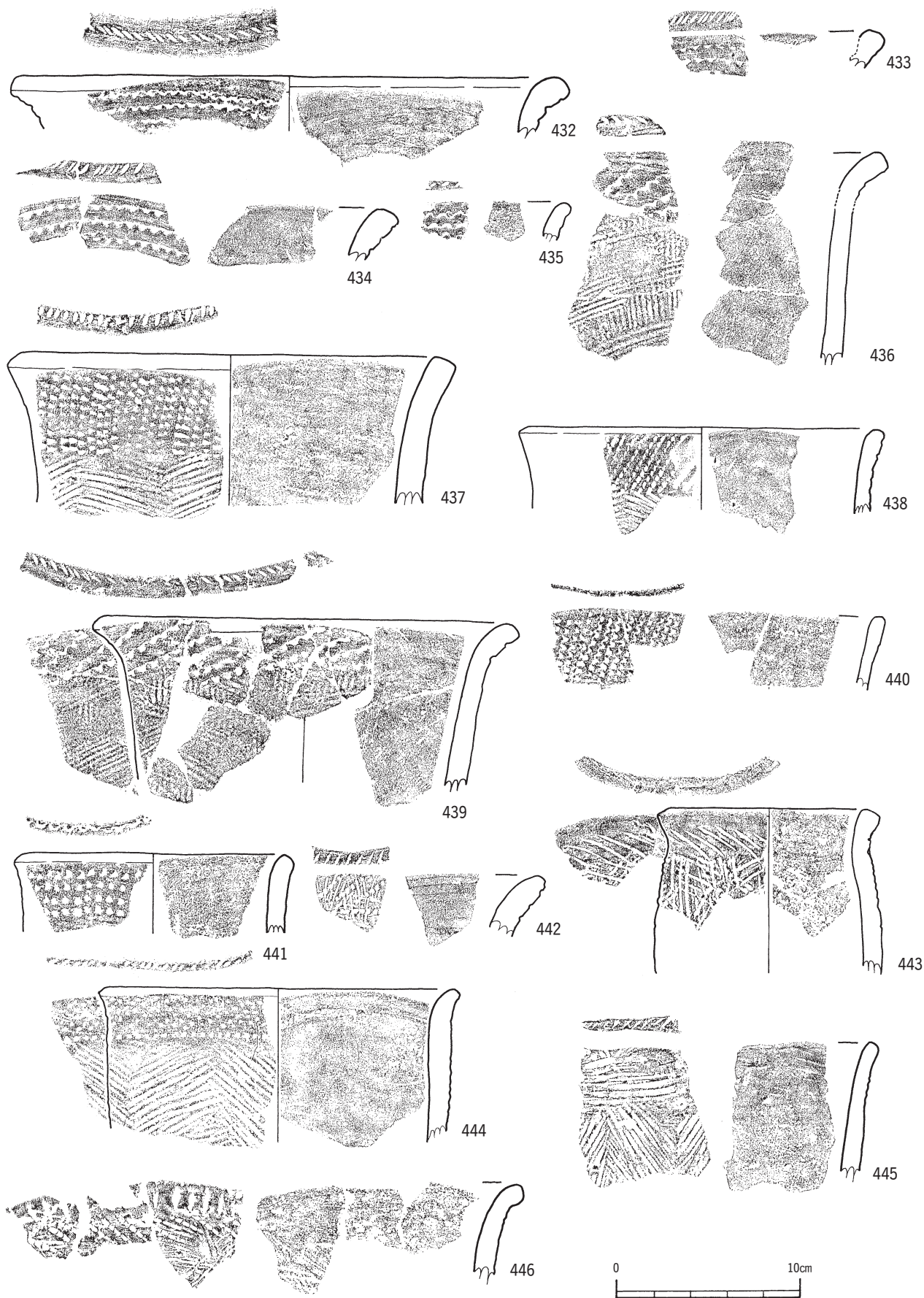
第104図 7類土器(5)



第105図 7類土器(6)



第106図 7類土器(7)



第107図 7類土器(8)

442, 444は、口縁部に斜位の貝殻刺突文を施した後、横位の貝殻刺突文が1条めぐる一群である。

442は、ナデ調整の後、浅い沈線を縦位もしくは斜位にランダムに施す。刺突文は凹点状に施される。444は、口縁部に肋7条の斜位貝殻刺突文を施した後、直下に横位の貝殻刺突文が1条めぐらる。口唇部は上部になるほど薄くなり、斜位の刻みを付する。口径は19.6cmである。

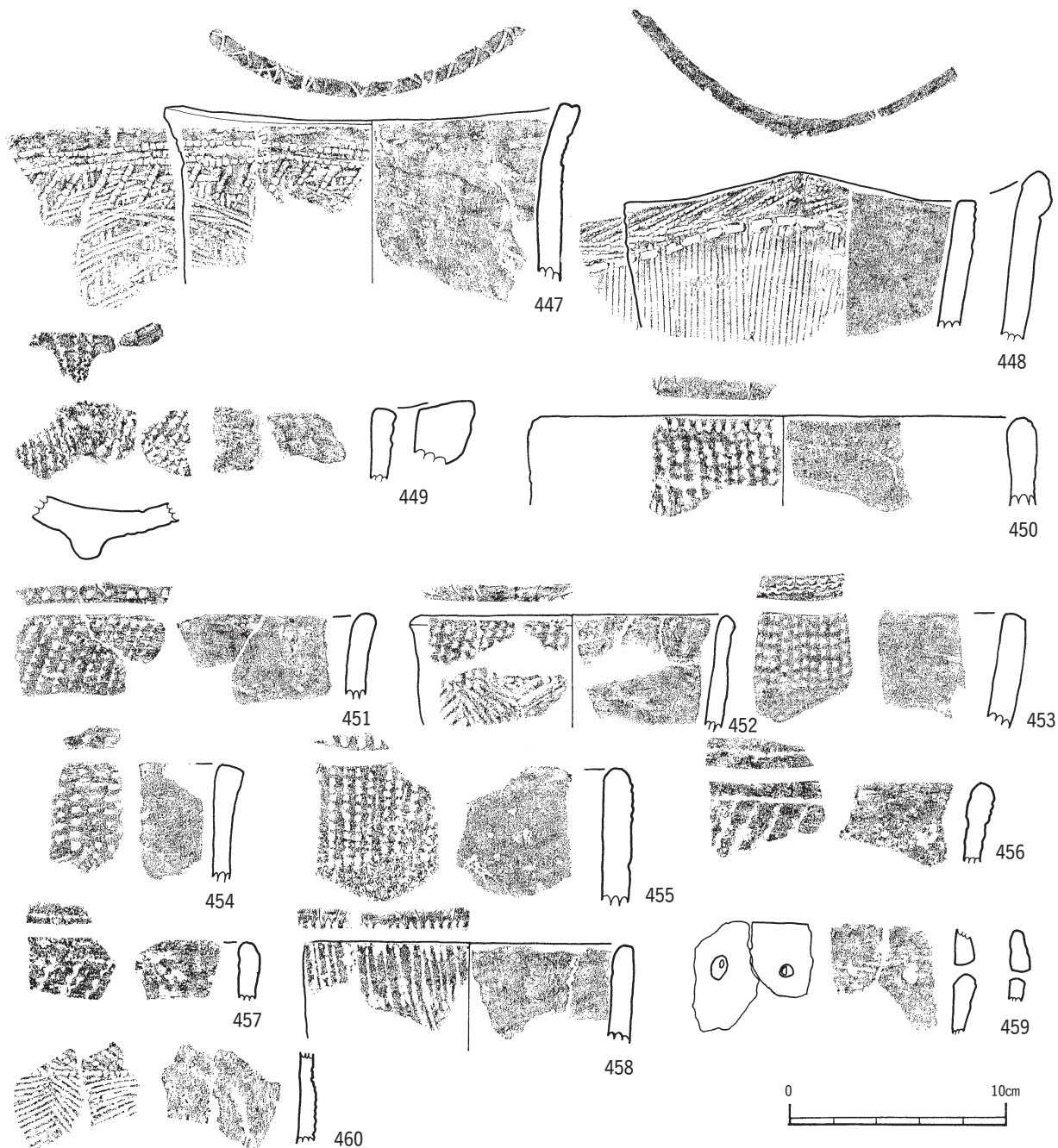
443, 445, 446は特殊な施文が施される一群である。

443は、口径12.1cmを測る。口縁部は外反し、頸部で「く」字状に湾曲、胴部はわずかに膨らんで底部に至る独特の器形を呈する。1個体のみ確認されている。口唇部は丸みを帯び、刻みなどは何も付さない。外面は丁寧なナデ調整の後、頸部付近に3本1組の工具で斜位の刻みを施す。胴部も、同様の工具で斜位及び縦位に沈線を施して綾杉状とするが、施文順は必ずしも一定ではない。頸部付近は黒く変色している。内面は、斜位のケズリを施した後、ナデで調整される。445は、口縁部から胴部にかけて横位の貝殻条痕文を施した後、綾杉条痕文を重ねる。口唇部は、平坦で外を向き、斜位の刻みを付する。446は、口唇部が丸みを帯び、やや肥厚し、外面側に肋2～3条程度の深い貝殻刺突を縦位に施す。口縁部には、肋5条程度の斜位の貝殻刺突文が施される。

⑥ 8 類

出土数はあまり確認できなかったが、7類と同じく、本地区の中心的な土器である。

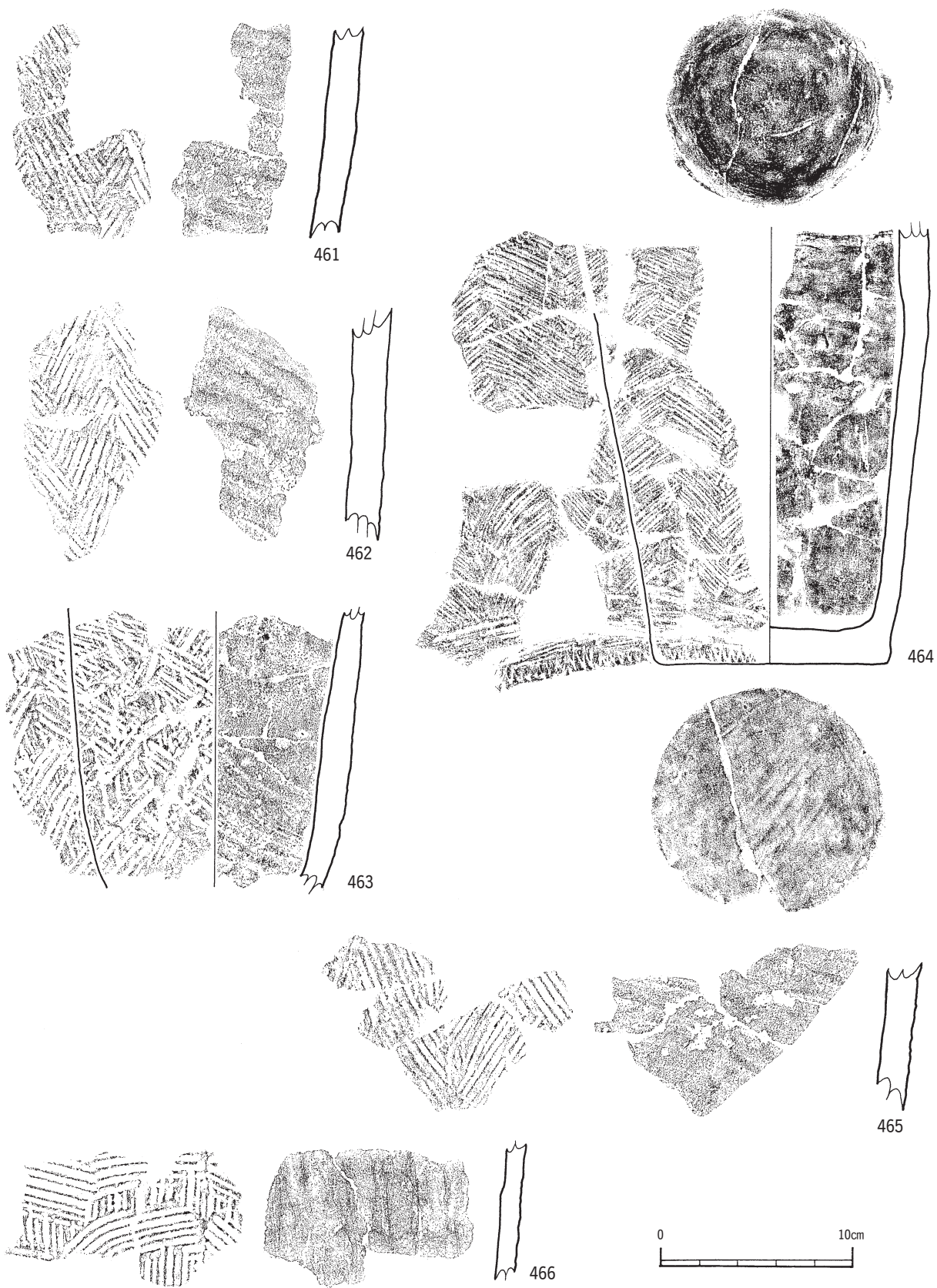
447～460は、口縁部片である。447は、やや外反する口縁部片であり、1対の波頂部を有する。口径19.1cmを測る。口唇部はやや肥厚し平坦で、斜位の沈線を鋸歯状に施す。口縁部直下に肋5条の斜位の貝殻刺突文が施される。胴部は縦位の貝殻条痕文を施した後、綾杉条痕文を重ねる。448は、粘土を指頭でつまみ、整形を施した瘤状の突起を付するため、口縁部上面観はレモン形を呈する。口径は16.3cmを測る。文様は縦位の浅い貝殻条痕文を施し、突起付近には斜位の貝殻刺突文を付するが、突起から離れるにしたがい「く」字状に変化する。口縁部直下には、工具による方形状の刺突が断続的に施される。449は、瘤状突起を付する口縁部片である。口唇部はやや肥厚し、突起部分にのみ縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をV字状に重ねる。口縁部は斜位の貝殻刺突文を羽状に施す。450は、口径23.3cmを測る。口縁部には肋5条程度の縦位の貝殻刺突文を施し、横位貝殻刺突文を1条重ねる。451, 452も同様の文様を施す。453は、口唇部は平坦で、頂部に貝殻刺突文が3条めぐらる。口縁部には貝殻刺突文を、直下に斜位の貝殻条痕文を施すが、摩耗しているため不明瞭である。454は、口唇部に長径8mmの楕円状の浅い窪みが斜位に施される。胴部は、縦位の貝殻刺突文が施され、直下に綾杉条痕文の一部が確認できる。455は、方形状の貝殻刺突文がほぼ縦位に施される。456, 457は同一個体と思われる。口唇部は肥厚し、頂部に貝殻刺突文が1条めぐらる。胴部は斜位の貝殻刺突文を間隔を開けて施す。胎土には砂粒が目立ち、焼成も粗い。458は、口縁部に縦位の貝殻刺突文を密な鋸歯状に施す。459は、焼成が粗く、大部分が剥落しているが、補修孔が確認できる。



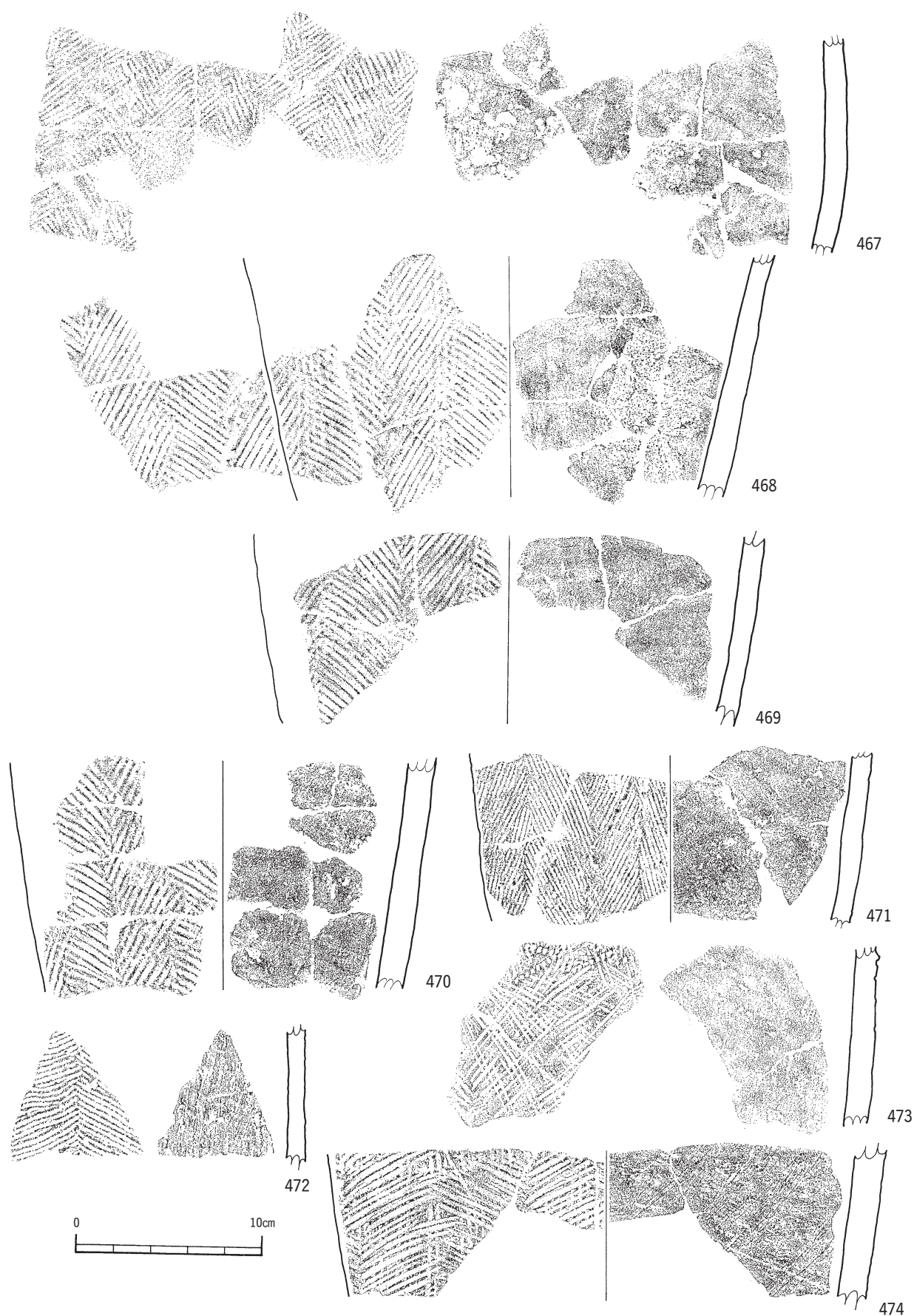
第108図 8類土器

461～486は、7類・8類の胴部片もしくは底部片であるが、正確に区別することが困難なため、まとめて掲載した。

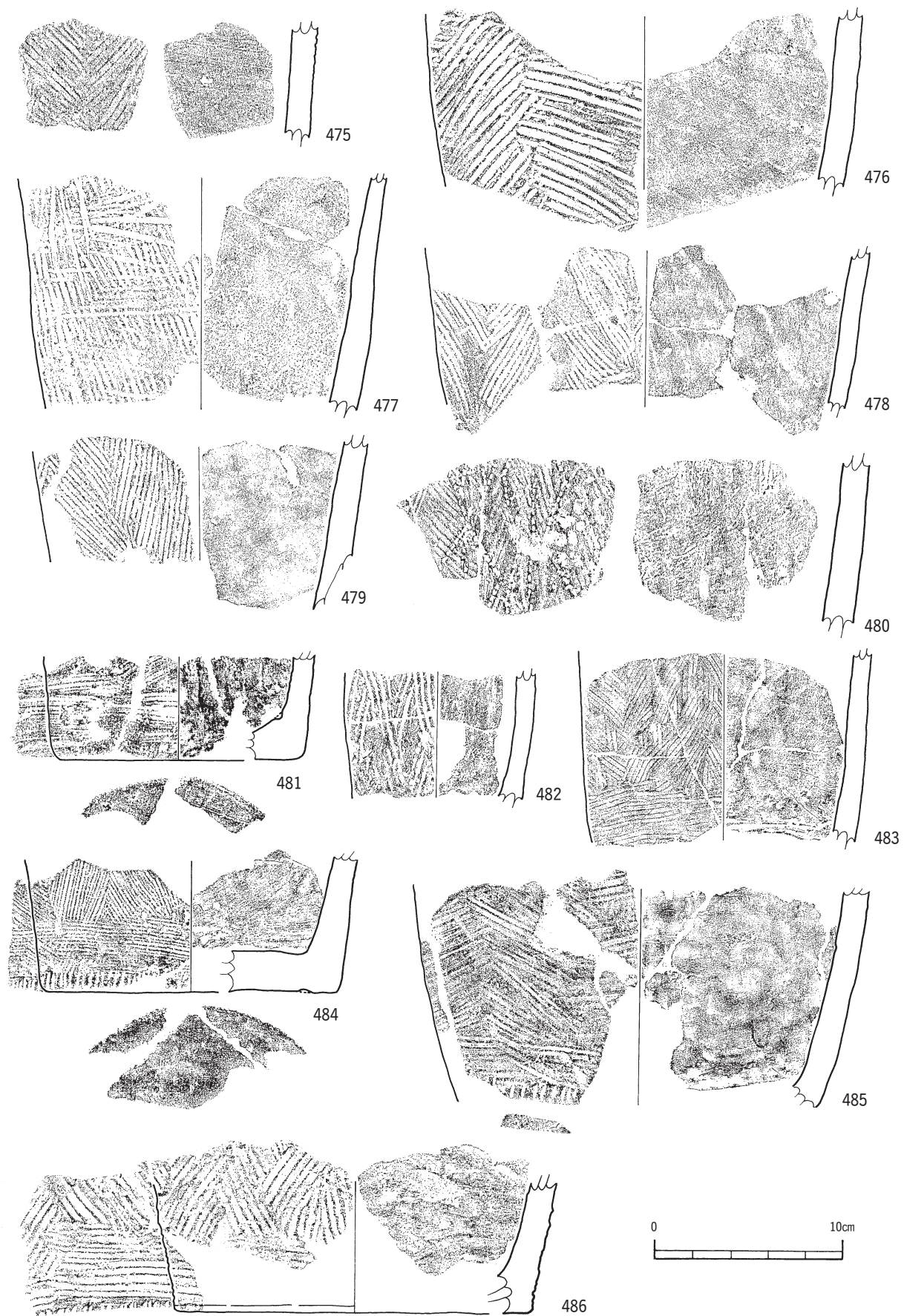
461～480は、胴部片である。461、465の胎土には、赤色粒子が含まれる。463は、肋6条の工具で縦位の貝殻条痕文を施した後、やや乱れた綾杉条痕文を施す。464は、底径12.1cmを測る胴部下片で、小形の貝殻による綾杉条痕文を施す。胴部立ち上がり部分には縦位の刻みを付する。底部の内外面は共にナデで調整される。466は、縦位の貝殻条痕文を施した後、間隔を開けて斜位の貝殻条痕文を綾杉状に施す。467～471は、いずれも綾杉条痕文を施すが、468、469は、施文前に縦位



第109図 7・8類土器(1)



第110図 7・8類土器(2)



第111図 7・8類土器(3)

の貝殻条痕文を施している。473は、肋2条程度の斜位の貝殻条痕文を綾杉状に施すがやや乱れる。上部には、凹点状の貝殻刺突文を羽状に施す。474は、角度が比較的緩やかな綾杉条痕文を施す。条痕文同士の境に縦位の沈線を2本1組で施されているのが観察できる。475は、胎土に1mm大の長石を多量に含む。476は、大型の貝殻で施文される。477は、縦位に近い綾杉条痕文を施した後、横位もしくは斜位の貝殻条痕を不規則に施すが、全体的に粗雑な印象を受ける。480は、綾杉条痕文の上に斜位の貝殻刺突文をX字状もしくは鋸歯状に施し、結果的に菱形状を呈した部分に縦位の貝殻刺突文を重ねる。焼成は粗く、外面は剥落している。

481～486は、底部片である。481は底径13.1cmを測る。底部内面は黒色化している。482は、肋4条の綾杉条痕文を施すが、胴部の立ち上がり部分は、ナデによって条痕を消している。483～486の綾杉条痕文は底部付近では横位に施される。483は、肋2条の貝殻による短沈線文が施されている。484は、底径は15.7cmを測り、小形の貝殻で施文される。485も工具は異なるが、同様の文様を施す。486は、底径19.1cmを測り、胴部の立ち上がり部分に米粒状の刻みを施す。

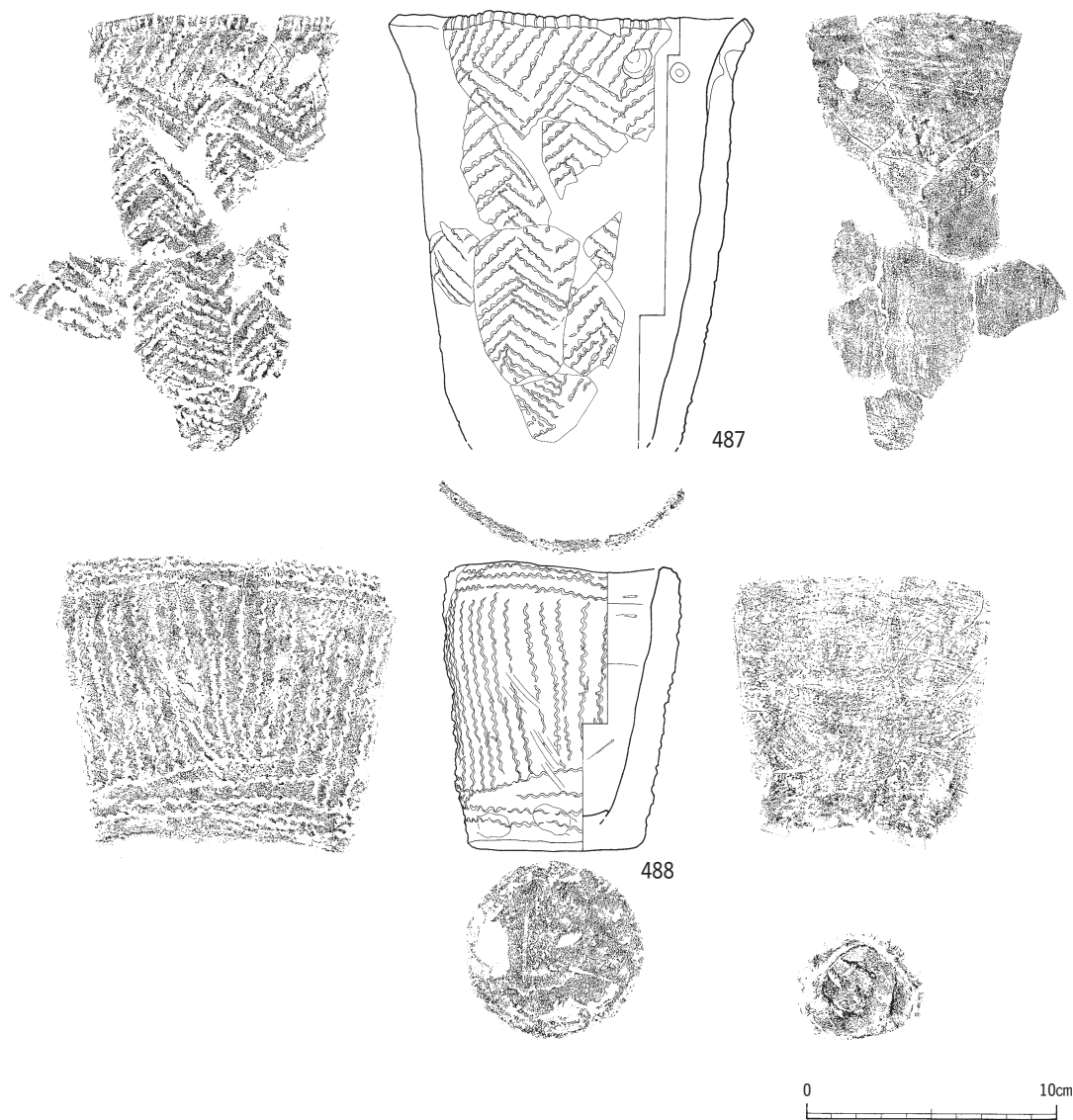
⑦ 9 類

本地区でのみ確認されている土器型式で、完形復元土器2点を含むものの出土数は少ない。

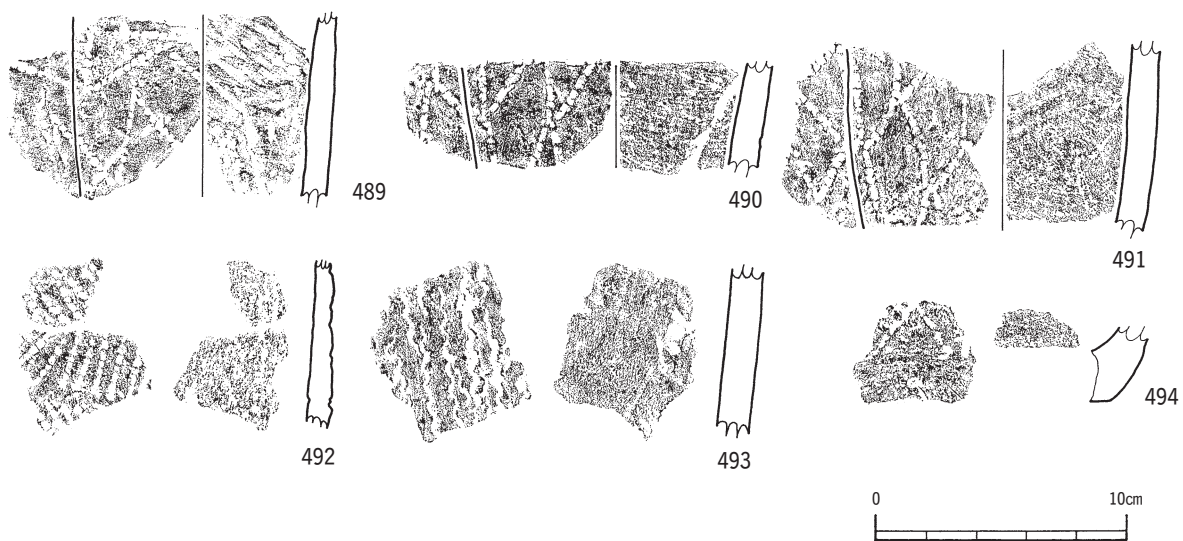
487は、器高17.2cm、口径14.0cmの完形復元土器である。口縁部が外反し、やや締めりながら底部へ至る器形を呈する。わずかに波状口縁を呈するが、口唇部は必ずしも平坦ではない。文様は、全面に貝殻刺突文が施されている。口縁部では斜位に、胴部では綾杉を意識した貝殻刺突文が施される。器面調整は、外面は丁寧なナデが施され、内面はナデが観察される。なお、未完通の補修孔があり内と外から回転穿孔しているが、その中心がズレている。

488は、器高11.7cm、口径8.7cm、底径6.6cmのほぼ完形の土器である。器壁の厚い小型の土器である。口縁部は外面を丸く仕上げるため、やや内傾して見えるが内面は直線的である。胴部には、粘土のたわみ部分が見られるが、直線的に底部へ至る。文様は、全面に貝殻刺突文を用いている。口縁部では、横位に貝殻刺突文が3条めぐり、胴部では縦位に、底部では横位に施文されている。器面調整は、内面はケズリが全面に観察される。

489は、やや外反する胴部上部片である。横位貝殻刺突文が1条めぐり、斜位と縦位の貝殻刺突文を組み合わせて綾杉状に施すと思われる。490、491は、同一個体の可能性が高い胴部片である。文様は、斜位の貝殻刺突文と縦位の貝殻刺突文を組み合わせて網目状とする。492は、胴部上部片である。文様は、横位貝殻刺突文を1条めぐらせ、直下に方形状の斜位貝殻刺突文を3段向きを変えて施す。493は、大型の貝殻を用いた縦位の貝殻刺突文を施し、一部斜位の貝殻刺突文も施す。外面には炭化物が付着している。494は、立ち上がり部分が丸みを帯びた胴部下部片である。胴部には、斜位の貝殻刺突文をV字もしくはX字状に施す。



第112図 9類土器(1)



第113図 9類土器(2)

⑧10類

本地区でのみ確認されている土器型式で、出土数は少ない。

495, 496は、やや外反する口縁部片である。495は口径27.1cmを測る。口唇部は丸みを帯び、内面にかけて横位のケズリを施した後、ナデで調整される。口縁部は横位の貝殻条痕文が波状に施される。496は肋6条の貝殻押圧文を縦位に施し、直下に横位の貝殻条痕文を波状に施す。口唇部は丸みを帯び、内面にかけてミガキで調整される。

497～499は、丁寧なナデで調整された胴部片である。497は口縁部付近の胴部片のため、上部には横位の貝殻条痕文が波状に施されているのが確認できる。498, 499は内面に煤が付着しており、495, 497, 499は、角閃石を特に大量に含む。

⑨11類

本地区でのみ確認されている土器型式で、出土数は少ない。押型文の形状によって、細分できる。ここでは、押型文が楕円文となるものを11a類、山形文となるものを11b類とする。

11a類

500～503は同一個体の可能性が高い。器形は、口縁部が外反し胴部はわずかに膨らみ平底の底部へ至るものと思われる。文様は、口唇部や口縁部内面に横位の楕円押型文を、口縁部から胴部上半分まで縦位の楕円押型文を施し、これ以下に関しては横位ないしは斜位の楕円押型文を施す。内面は、丁寧なナデが施されている。

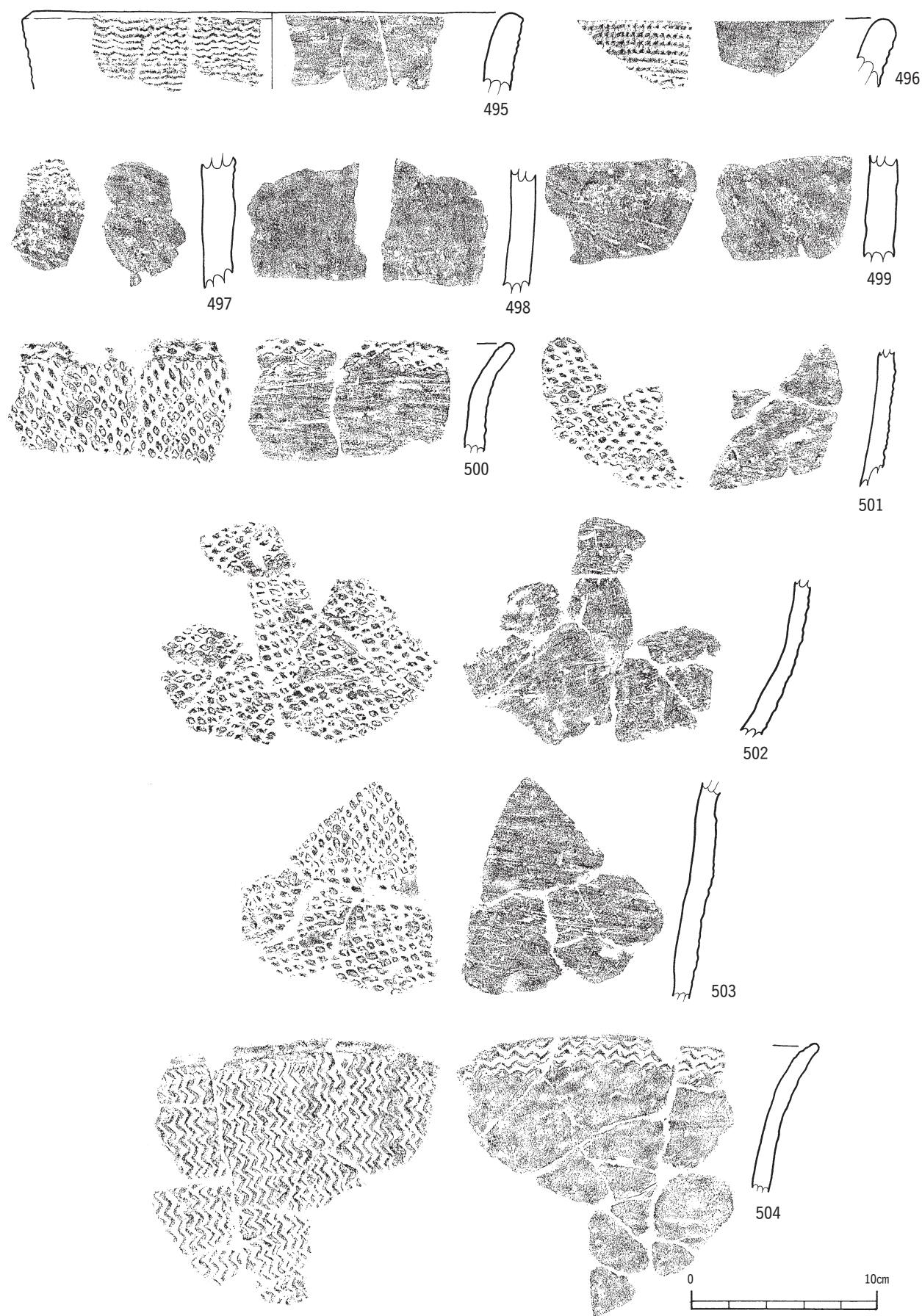
11b類

504～508は同一個体の可能性が高い。504は、口唇部が丸みを帯びている。これらは、口縁部が外反し、胴部はわずかに膨らむ器形を呈する。文様は、口縁部内面に横位の山形押型文が施され、口縁部外面は縦位に施される。胴部では、横位ないしは斜位の山形押型文が施文される。内面は、丁寧なナデである。

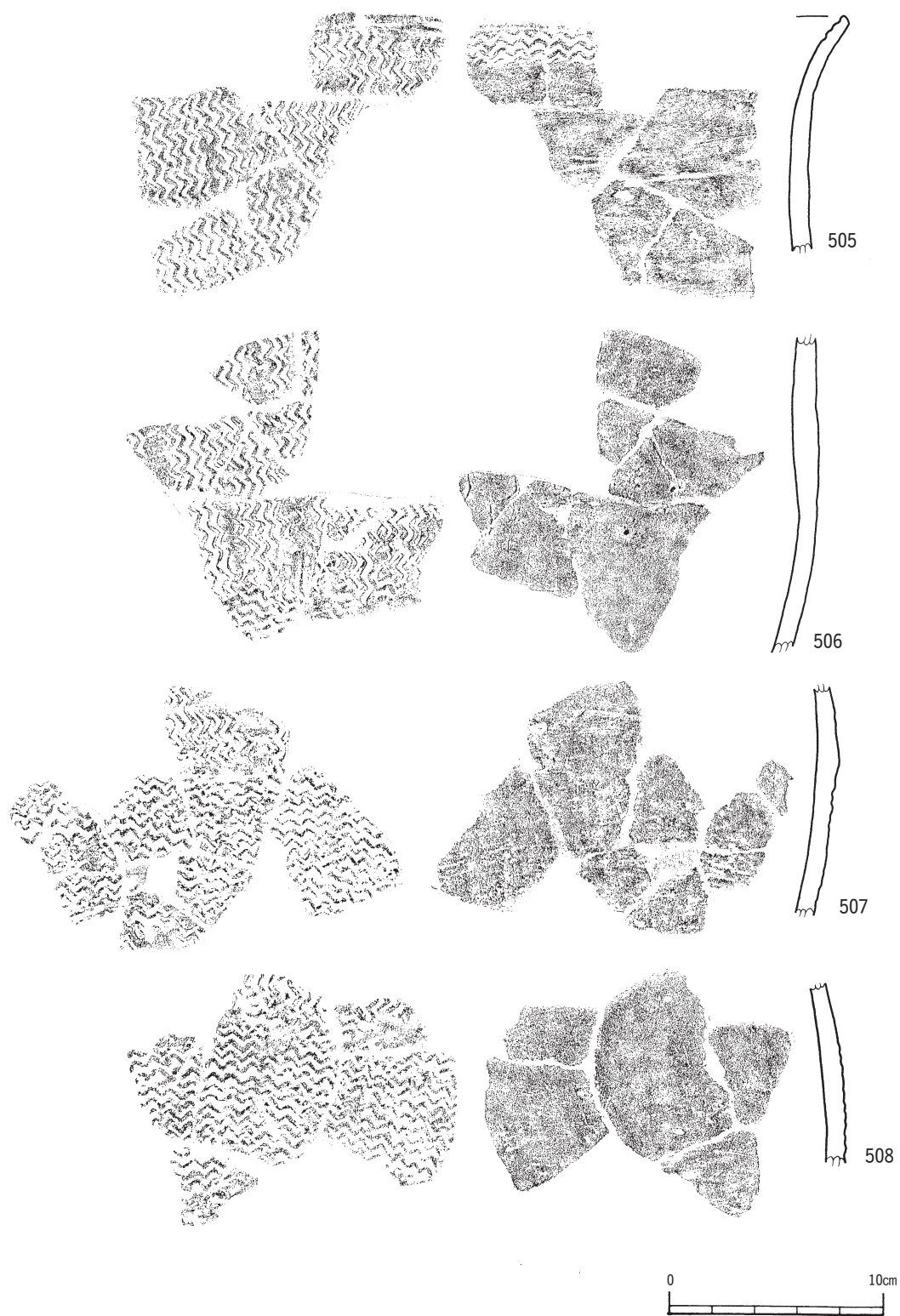
⑩12類

本地区でのみ確認されている土器型式で、数個体分の遺物が確認される。

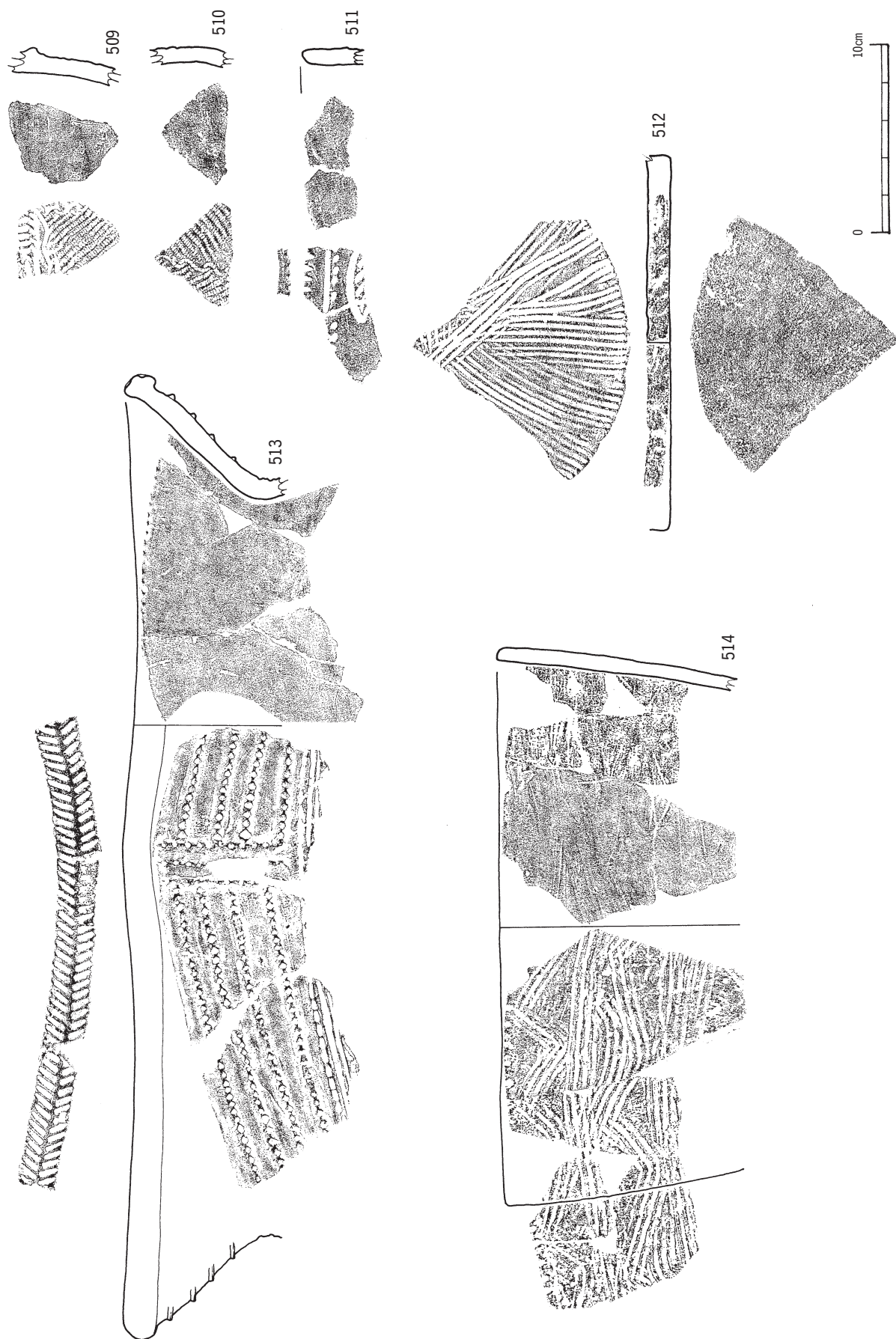
509, 510は同一個体である。胴部には撚糸文による羽状文を施し、その中央を通るように流水文を施す。口縁部には流水文を横位に施し、ハ字状の刻みを施した刻み目突帯文を貼り付ける。内面は丁寧なナデで調整される。511は、口唇部外面に刻み目をもつ口縁部片である。ナデ調整の後、口縁部には横位の沈線文を施し、直下に横位に凹点状刺突を1条施す。その下位には、楕円状の区画内に斜位の沈線文を施す。内面は丁寧なナデで調整される。513は、波頂部を2対有する波状口縁を呈する口縁部片である。口径は31.1cmを測る。口唇部には斜位の刻みをハ字状に規則的に施す。口縁部は断面三角形状を呈し、直下に刻み目突帯文を縦位に3本1組で施し、両端の突帯に接



第114图 10・11類土器(1)



第115図 11類土器(2)



第116図 12類・その他の土器

するよう、さらに横位 4 条の刻み目突帯文をそれぞれ貼り付ける。胴部には横位の貝殻条痕文を施すが、最上部のみ連続する凹点状刺突文の形状を呈する。外面は黒色化している。

⑪条痕文土器

514は、口径29.5cmを測る口縁部から胴部にかけての破片である。粗いナデ調整の後、肋 4 条程度の横位の貝殻条痕文を波状に施した後、若干重ねて直線状に施す。これを順に繰り返して施文するが、この順序は入れ替わる場合もある。内面は横位の丁寧なナデで調整される。

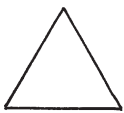
⑫不明の底部片

512は、底径19.8cmの底部片である。底部内面は、貝殻条痕文が縁辺から中心に向かって放射状に施される。底部外面は丁寧なナデで調整される。側面は摩耗しているため、刻み等の痕跡は確認できない。7 類もしくは 8 類の底部片ではないかと推測される。

石器

A地点では、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層から、石鏃125点・石匙5点・スクレイパー7点・石槍1点・石錐2点・石斧11点・凹石6点・敲石7点・磨石64点・石皿8点が出土した。

石材には、黒曜石・安山岩・ハリ質安山岩・玉髓・鉄石英・チャート・頁岩・砂岩・花崗岩等が見られた。

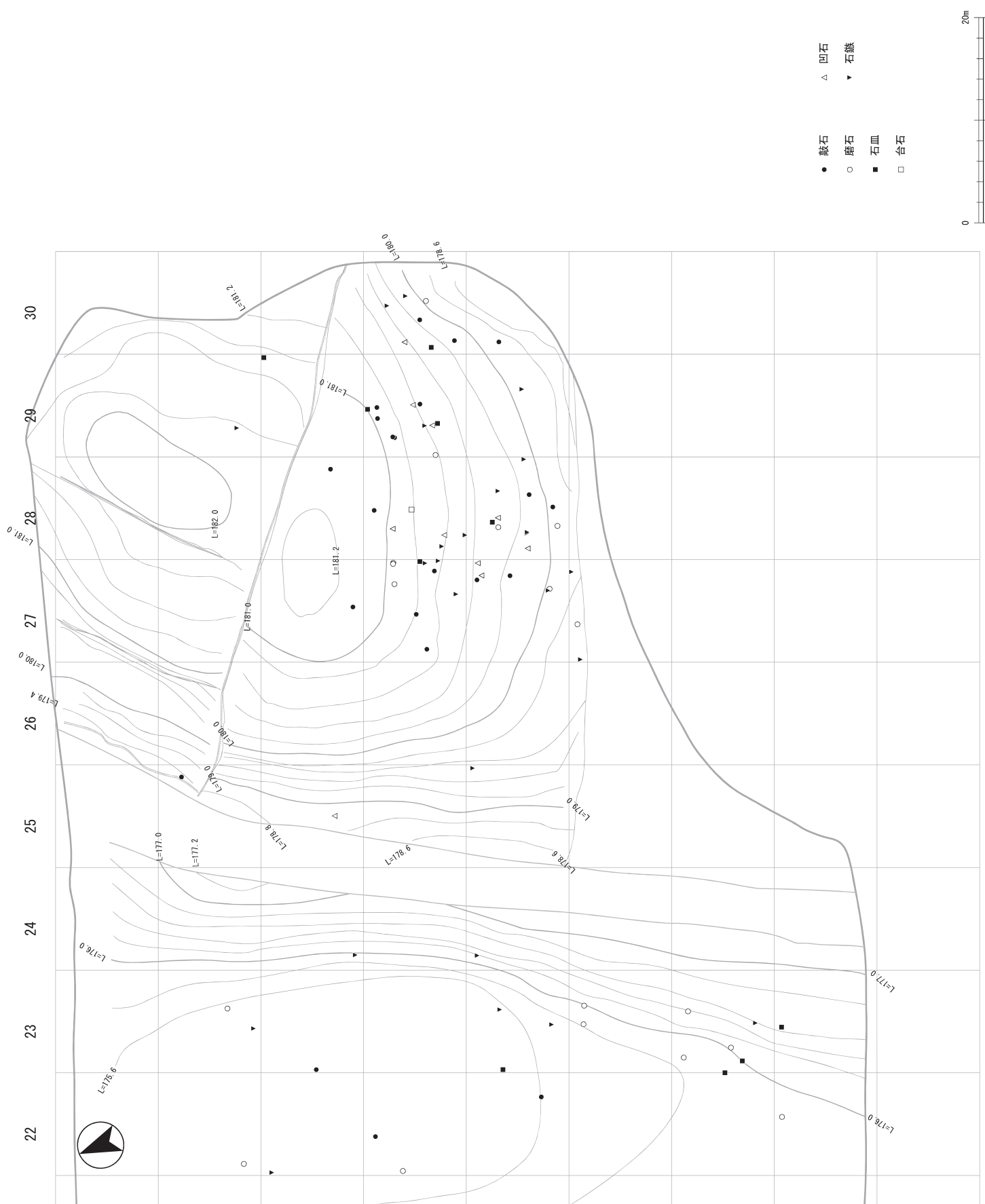
先端	A 鋭 い		B 鈍 い		C 円 い	
						
側面	A 直線的		B 内弯的		C 外弯的	
					a 最大幅下方	b 最大幅上方
						
基部	A 逆刺が鋭い		B 逆刺が円い		C	D
	a 挟りが深い	b 挟りが浅い	a 挟りが深い	b 挟りが浅い	直線である	膨らみもつ
						
						E
						片脚が違う
						

第117図 石鏃分類図

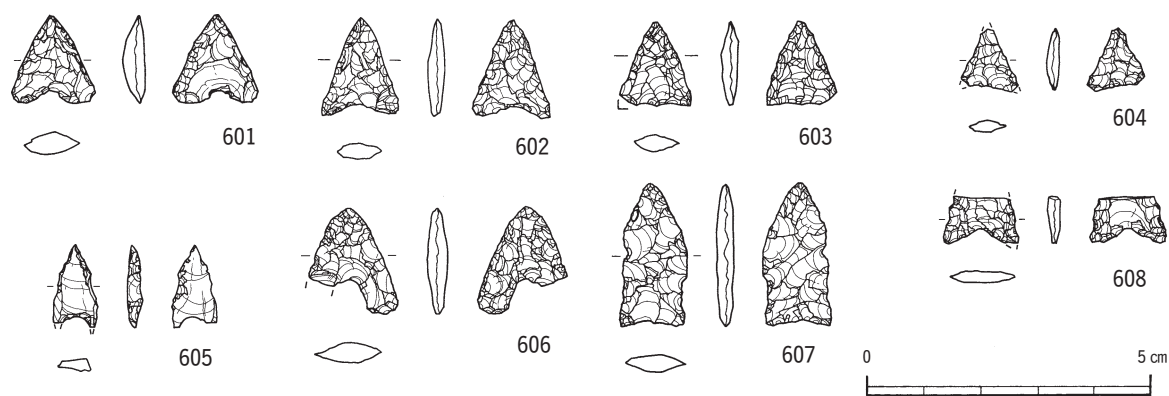
石鏃（第120，121図，601～624）

A地区の石鏃は、Ⅴ層で8点、Ⅳ層で21点が出土した。石材はハリ質安山岩、チャート、黒曜石（上牛鼻産・桑ノ木津留産・三船産・針尾産・腰岳産等）、玉髓、鉄石英と多種である。形態も多様であり、特徴的なものはみられなかった。Ⅴ・Ⅳ層とも第122図に表されるように、幅よりも長さに比重のかかるものが多かった。

601は、先端が鋭く側面は直線的で、基部の逆刺が円く、挟りが深いものである。602も601同様であるが、基部の挟りが浅い。603は基部の片脚が欠損しているが、側面が直線的で基部の逆刺は鋭く挟りが浅い。604は603同様であるが、基部の逆刺が円く挟りが浅い。305は剥片鏃で、側面部に簡単な調整を施したものである。先端部は鋭く、側面も直線的で、基部の逆刺は円く、挟りが深い。606は片脚を欠損しているもので、先端部は鋭く側面は外弯的で最大幅が下方にあり、基部の逆刺は円く、挟りが深いものである。607はチャートを石材に用いた五角形鏃である。先端部は鋭

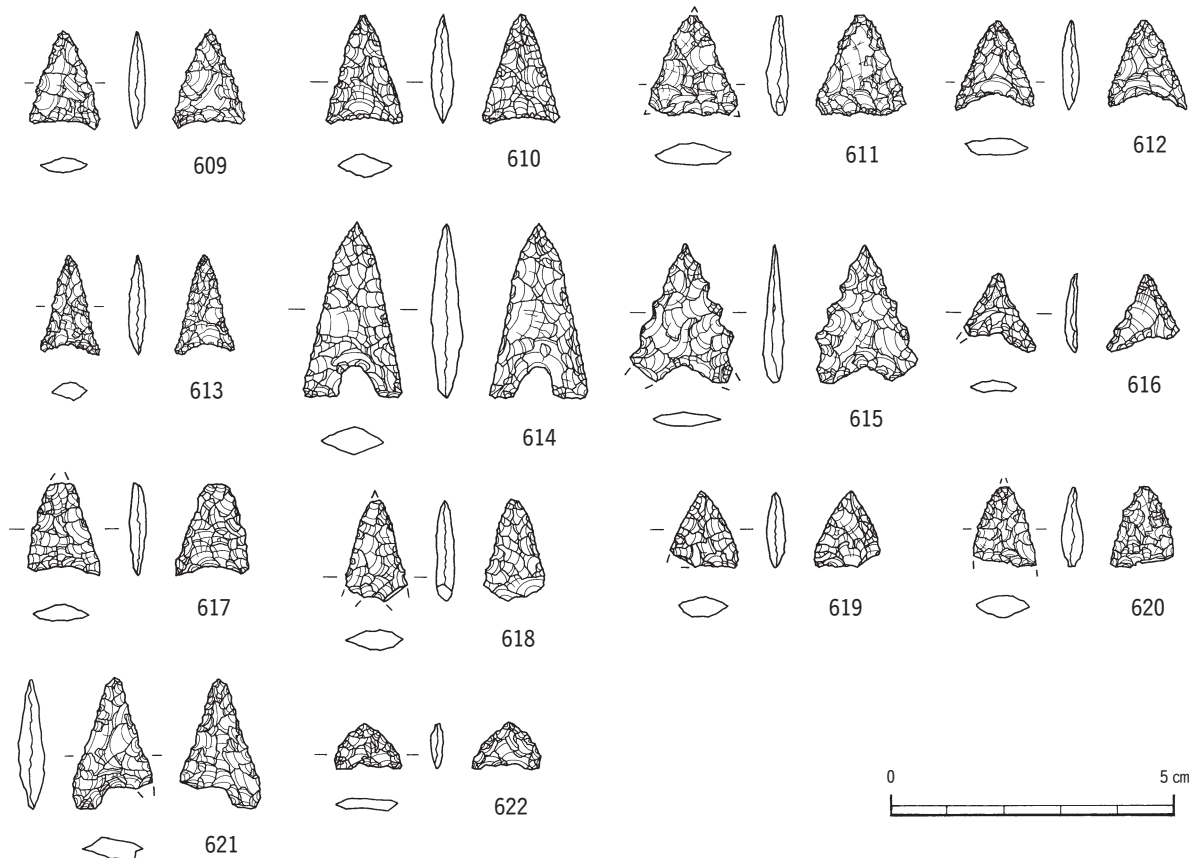


第118図 A地区器種別石器出土状況

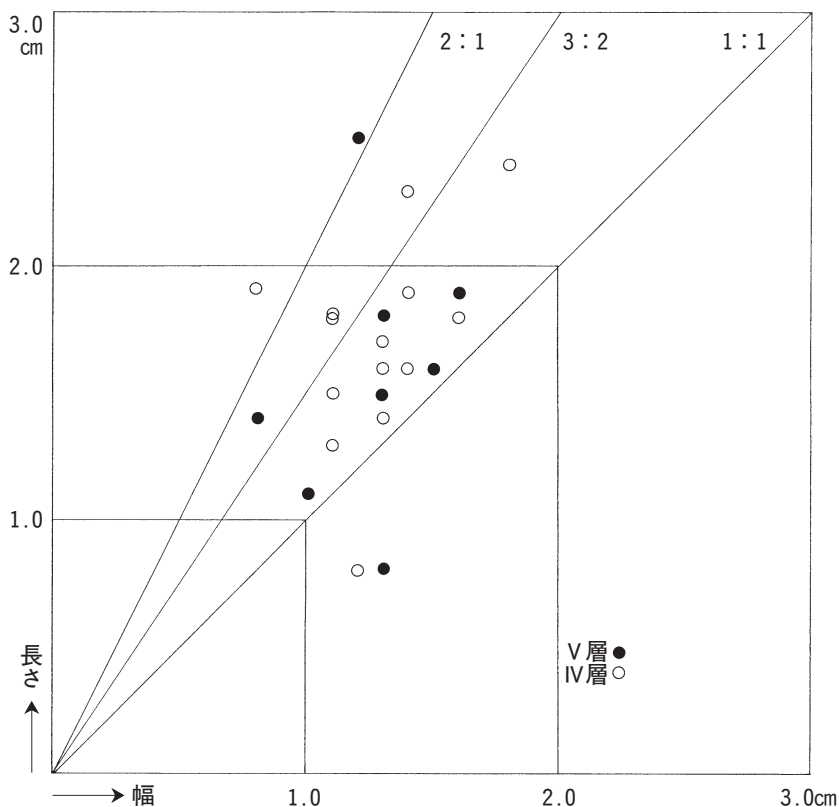


第119図 石鏃（V層）

く、側辺は上方に最大幅があり、下方は直線をもつもので、基部は逆刺が鋭く挟りが浅いものである。8は先端部を欠損しているもので、基部は逆刺が鋭く挟りが深くなっている。9・10・12は先端部が鋭く、側辺は直線的で基部は逆刺が鋭く、挟りが浅い。11は先端部及び逆刺の両端を欠損しているが、側辺は直線的で、基部は直線的である。13は先端が鈍くなっている。14は最大長3.1cmを測る大型の石鏃で、玉髓を石材に用いている。先端部は鋭く、側辺は直線的で、基部の単刺は直線的で挟りが深い。15は基部両端を欠損しているが、先端部は鋭く、側辺は直線的であり、鋸歯状を呈す。挟りはやや深い。16は片脚を欠損している小型の石鏃である。先端部は鋭く、側辺は内弯的で基部の逆刺は鋭く挟りが深いが片脚の長さが違うものである。17は先端部が欠損しているもので、側辺は直線的で、基部の逆刺は鋭く挟りが浅い。18は先端部及び基部の両端を欠損している



第120図 石鏃（IV層）

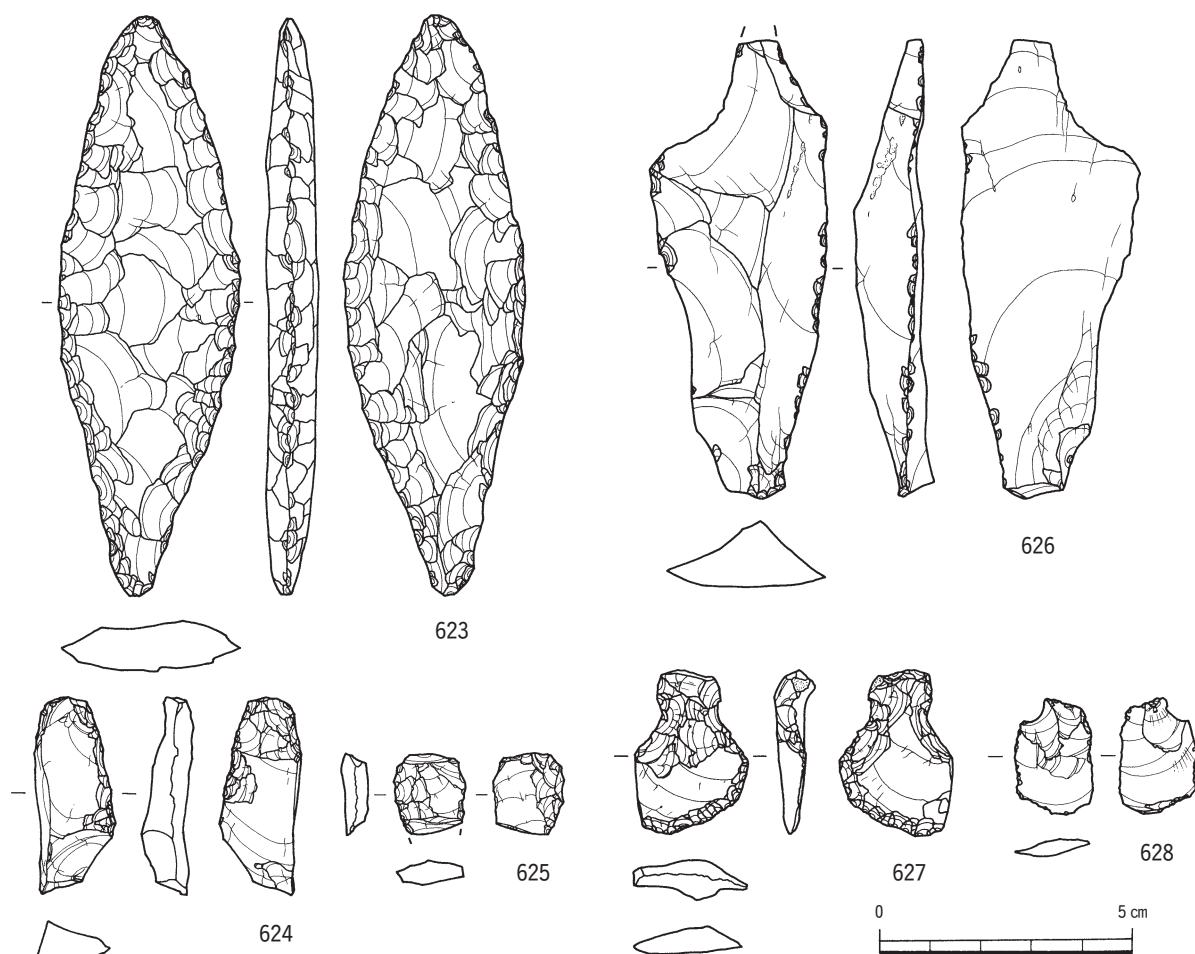


第121図 A地区V・IV層出土石鏃法量相関図（長さ×幅）

が、側辺は直線的である。619は片脚を欠損しているが、先端部は鈍く、側辺は外弯的で最大幅が下方にあり、基部は直線的である。620は先端・基部を欠損しているが直線的な側辺をもつものである。621は鉄石英を石材に用いたもので、先端部は鋭く、側辺はやや内弯気味で基部の逆刺は円く挟りが深い。622は幅広で長さ1cm以下の小型の石鏃である。先端部は鈍く、側辺は外弯的で最大幅下方にある。基部は逆刺が円く挟りが浅い。

第20表 A地区 V・IV層 石鏃一覧表

番号	地区	区	層	石材	先端	側辺	基部	標高	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
601	A	G23	V	ハリ質安山岩	A	A	Ba	176.67	13038	0.7	1.6	1.5	0.4	
602	A	E28	V	チャート	A	A	Bb	180.46	6750	0.5	1.8	1.3	0.3	
603	A	G25	V	黒曜石上牛鼻	B	A	Ab	177.13	1861	0.4	1.5	1.3	0.3	
604	A	E28	V	黒曜石桑木津	B	A	Bb	180.52	9070	0.2	1.1	1.0	0.2	小型鏃
605	A	D28	V	黒曜石上牛鼻	A	A	Ba	180.69	8500	0.2	1.4	0.8	0.3	剥片鏃
606	A	B29	V	黒曜石三船	B	Ca	Ba	181.68	19555	0.7	1.9	1.6	0.4	落ち込み、片脚欠
607	A	C24	V	チャート	B	Cb	Ab	175.96	15887	1.0	2.5	1.2	0.3	五角形鏃
608	A	C22	V	黒曜石針尾	-	-	Aa	175.53	15029	0.3	0.8	1.3	0.2	先端欠
609	A	D28	IV	黒曜石腰岳	A	A	Ab	181.02	996	0.4	1.7	1.3	0.3	
610	A	D30	IV	黒曜石腰岳	A	A	Ab	180.52	6000	0.6	1.9	1.4	0.4	
611	A	D27	IV	黒曜石桑木津	B	A	C	181.03	8385	0.8	1.8	1.6	0.4	片脚欠
612	A	E25	IV	ハリ質安山岩	A	A	Ab	179.74	8755	0.4	1.6	1.4	0.3	
613	A	D27	IV	黒曜石桑木津	B	A	Ab	80.06	8384	0.3	1.8	1.1	0.3	
614	A	F27	IV	玉髓	A	A	Ba	180.15	1953	1.8	3.1	1.8	0.6	逆刺が直線的である
615	A	E23	IV	黒曜石椎葉	A	A	Bb	176.39	10861	1.0	2.4	1.8	0.4	鋸歯、片脚欠
616	A	E28	IV	黒曜石桑木津	B	B	E	180.34	5665	0.2	1.4	1.3	0.2	片脚欠、片脚が極端に違う
617	A	D29	IV	黒曜石腰岳	-	A	Ab	180.85	5229	0.5	1.6	1.3	0.3	先端欠
618	A	E28	IV	黒曜石針尾	-	A	-	180.57	2651	0.5	1.8	1.1	0.3	脚部欠
619	A	F27	IV	黒曜石桑木津	B	Ca	C	180.90	1913	0.4	1.3	1.1	0.4	片脚欠
620	A	E27	IV	黒曜石桑木津	-	A	-	80.31	6486	0.5	1.5	1.1	0.4	脚部欠
621	A	B23	IV	鉄石英	A	Cb	Ba	176.19	17863	1.0	2.3	1.4	0.5	片脚欠
622	A	D30	IV	黒曜石桑木津	B	Ca	Bb	180.24	6010	0.2	0.8	1.2	0.2	小型、横長



第122図 石槍・石匙・スクレイパー等

第21表 石器一覧表

番号	器 種	石 材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備 考
623	石槍	ハリ質安山岩	A	A24	V	176.38	18211	45	11.5	3.5	1	
624	スクレイパー	黒曜石	A	G23	V	176.33	13042	4.8	3.9	1.6	1.1	
625	スクレイパー	頁岩	A	E26	IV	180.1	2848	1.5	1.6	1.4	0.6	
626	スクレイパー	ハリ質安山岩	A	D25	IV	179.43	5400	30	9.1	3.5	1.6	
627	石匙	黒曜石上牛鼻	A	C22	IV	175.99	9754	4.2	3.2	2.3	0.8	
628	使用痕剥片	黒曜石	A	G23	IV	176.77	10684	1	2.3	1.6	0.3	

石槍

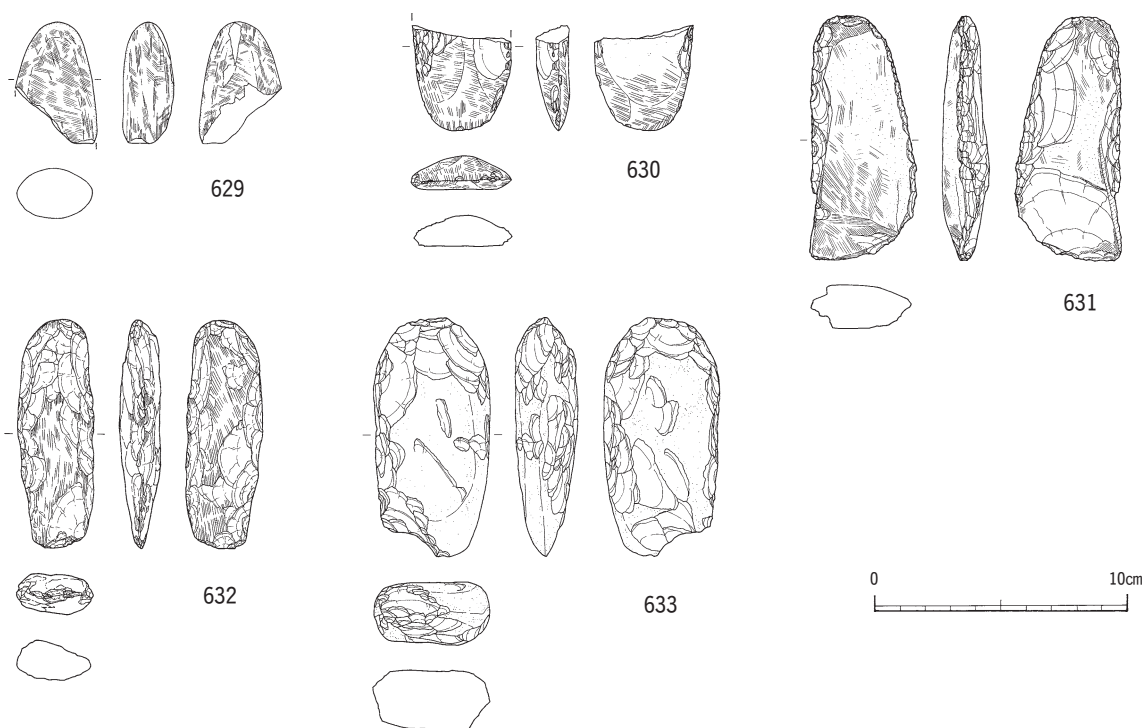
623はV層から出土したハリ質安山岩を素材に用いた石槍である。長さ11.5cm，最大幅3.5cm，厚さ1.0cmを測る。完形品である。丁寧な両面加工が施され，左右対称となっている。ほぼ中央部に最大幅があり，その部分の断面系は凸レンズ状となっている。この形態の石槍は旧石器時代終末から縄文時代早期にみられる槍先形尖頭器に類似したものである。

スクレイパー

624はV層から出土した安山岩のスクレイパーである。縦長剥片を素材に用い、片側辺に交互剥離による調整を施している。625は片側辺の表裏に交互剥離が施されたものである。626はハリ質安山岩の縦長剥片を素材に用いたもので、片側縁に加工が施されている。

石匙

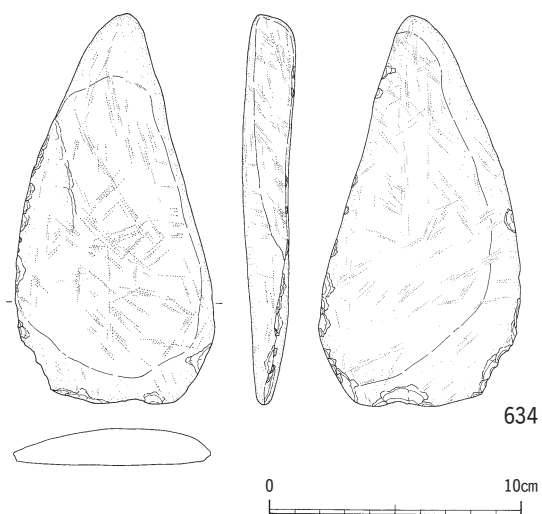
627はIV層から出土した縦型の石匙である。石材は上牛鼻産の黒曜石を素材に用いている。つまみ部は身部に対して大きく、身部は片側面が欠損し、調整を施しているのは側縁部のみである。刃部は両面調整（両刃）であり、外弯気味の刃部をもつ。



第123図 石斧 (IV層)

第22表 石斧一覧表

番号	器 種	石 材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量 g	長さcm	幅cm	厚みcm	備 考
629	磨製石斧	砂岩	A	C 23	IV	176.09	13002	25.1	4.8	3.3	2.1	基部
630	磨製石斧	頁岩	A	D 29	IV	180.95	5204	26.0	3.8	3.8	1.3	刃部
631	磨製石斧	頁岩	A	D 30	IV	180.32	4883	96.0	9.7	4.1	1.8	
632	局部磨製石斧	頁岩	A	E 28	IV	180.31	2634	54.0	9.0	3.0	1.5	
633	石斧	頁岩	A	E 30	IV	179.92	15721	150.0	9.5	4.5	2.4	
	磨製石斧	安山岩	A	C 26	IV	180.56	5356	45.0	10.4	4.5	0.9	
	石斧	砂岩	A	D 30	IV	180.56	3960	40.0	8.1	4.5	0.9	
	石斧	粘板岩	A	E 28	V	180.42	7148	30.0	8.3	6.3	0.6	
634	研磨石器	安山岩	A	E 27	IV	180.38	4694	260.0	15.4	8.0	2.0	



第124図 研磨石器

剥片

628は使用痕のある剥片である。佐賀県腰岳産の良質の黒曜石を素材に用いたもので、両側縁部に使用痕が顕著にみられる。

石斧

A地点のIV・V層から出土した石斧は8点である。そのうちの5点を図示した。629はIV層出土の磨製石斧の基部である。砂岩を石材に用いている。630～632は頁岩を石材に用いたもので、刃部は丁寧に研磨して片刃に仕上げている。633は頁岩の自然礫を利用したもので、刃部は蛤刃を呈する。

凹石・敲石・磨石

凹石・敲石・磨石は元来分類すべきであろうが，形態の類似性や痕跡の複合性など，分類が難しく同一の項で取り扱うことにした。

IV層出土の凹石

凹石

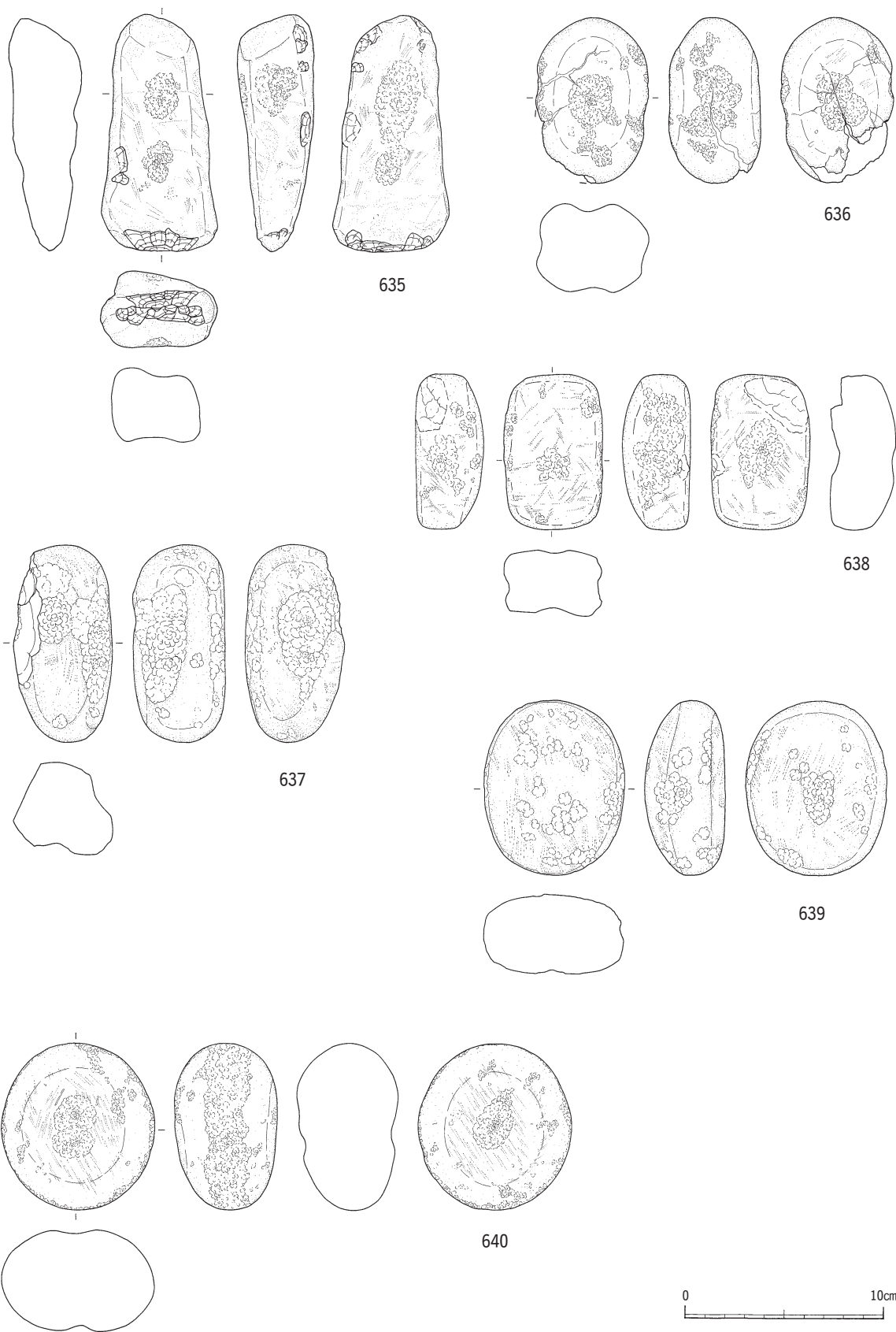
凹のあるもの全てを凹石で取り扱った。その形状により，a 凹のみ，b 磨石状に凹あり，c 敲打痕に凹あり，d 磨石・敲打痕に凹あるものの4分類を行った。

敲石

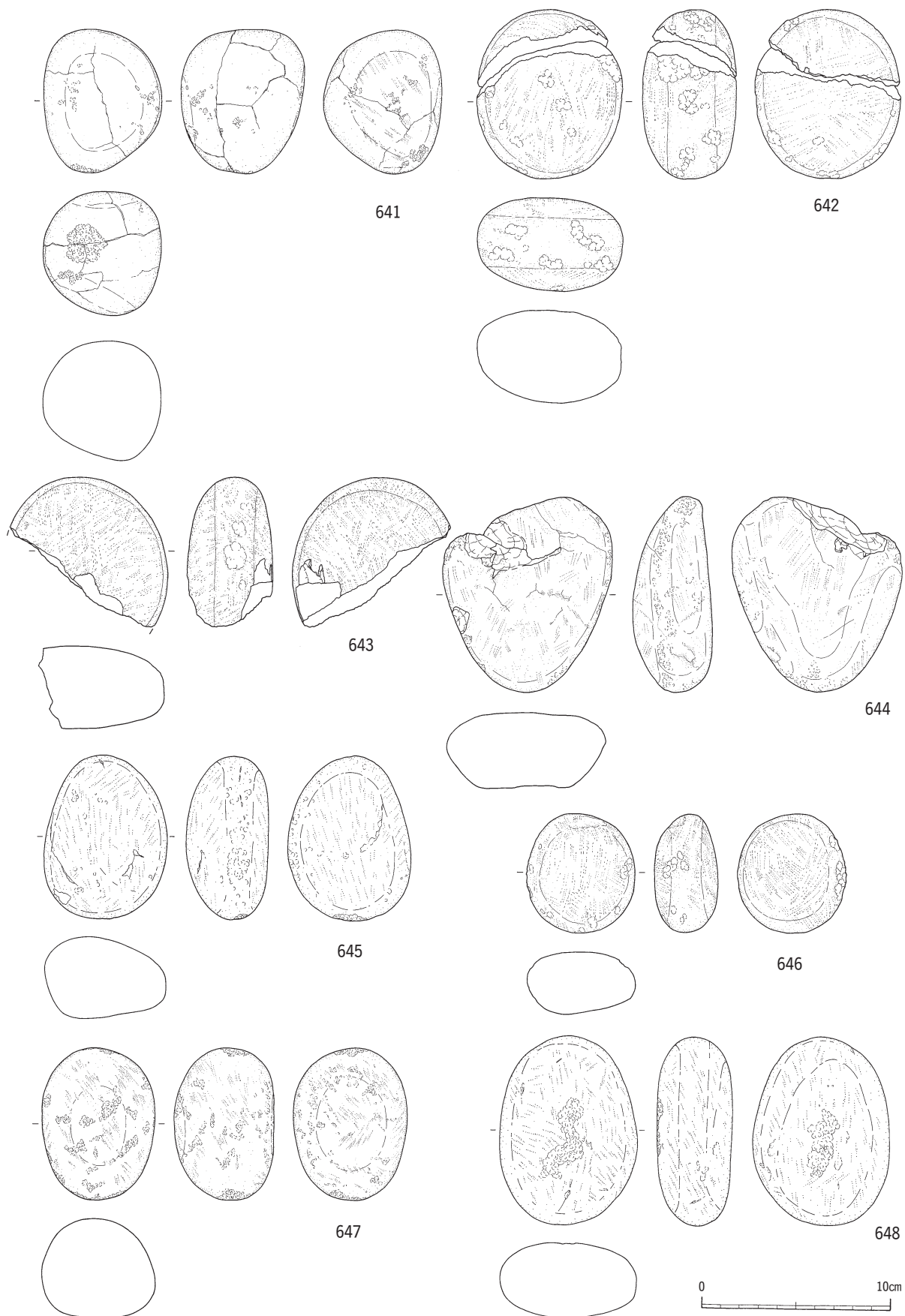
敲打痕のある石器を敲石にしたが，凹のあるものは凹石の項で取り上げた。形態により，a 棒状，b 石斧の再利用，c 球状，d 磨石に敲打痕のあるものの4分類を行った。

凹 石	凹のみ	磨面・凹あり	敲打痕・凹	磨面・敲打・凹
	 a	 b	 c	 d
敲 石	棒状	石斧の再利用	球状	磨面・敲打
	 a	 b	 c	 d
磨 石	磨面	球状		
	 a	 b		

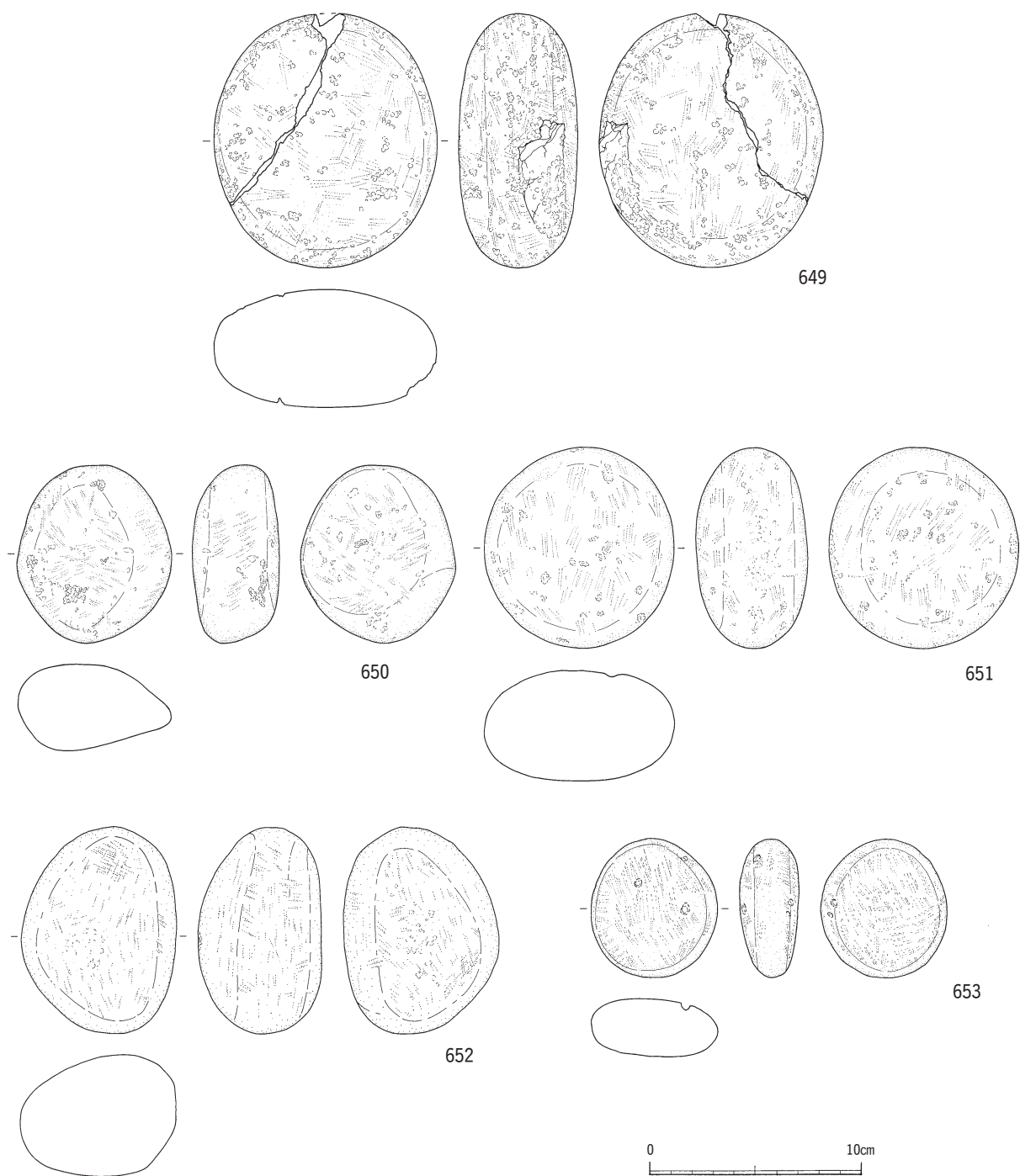
第125図 凹石・敲石・磨石分類図



第126図 凹石・敲石（V層）



第127図 敲石・磨石 (V層)



第128図 磨石（V層）

凹石・敲石・磨石（V層）

凹石

凹みのあるもの全てを凹石で取り扱った。その形状により，a凹みのみ，b磨り面と凹み有り，c 敲打痕と凹み有り，d磨り面・敲打痕に凹みのあるものの4分類を行った。

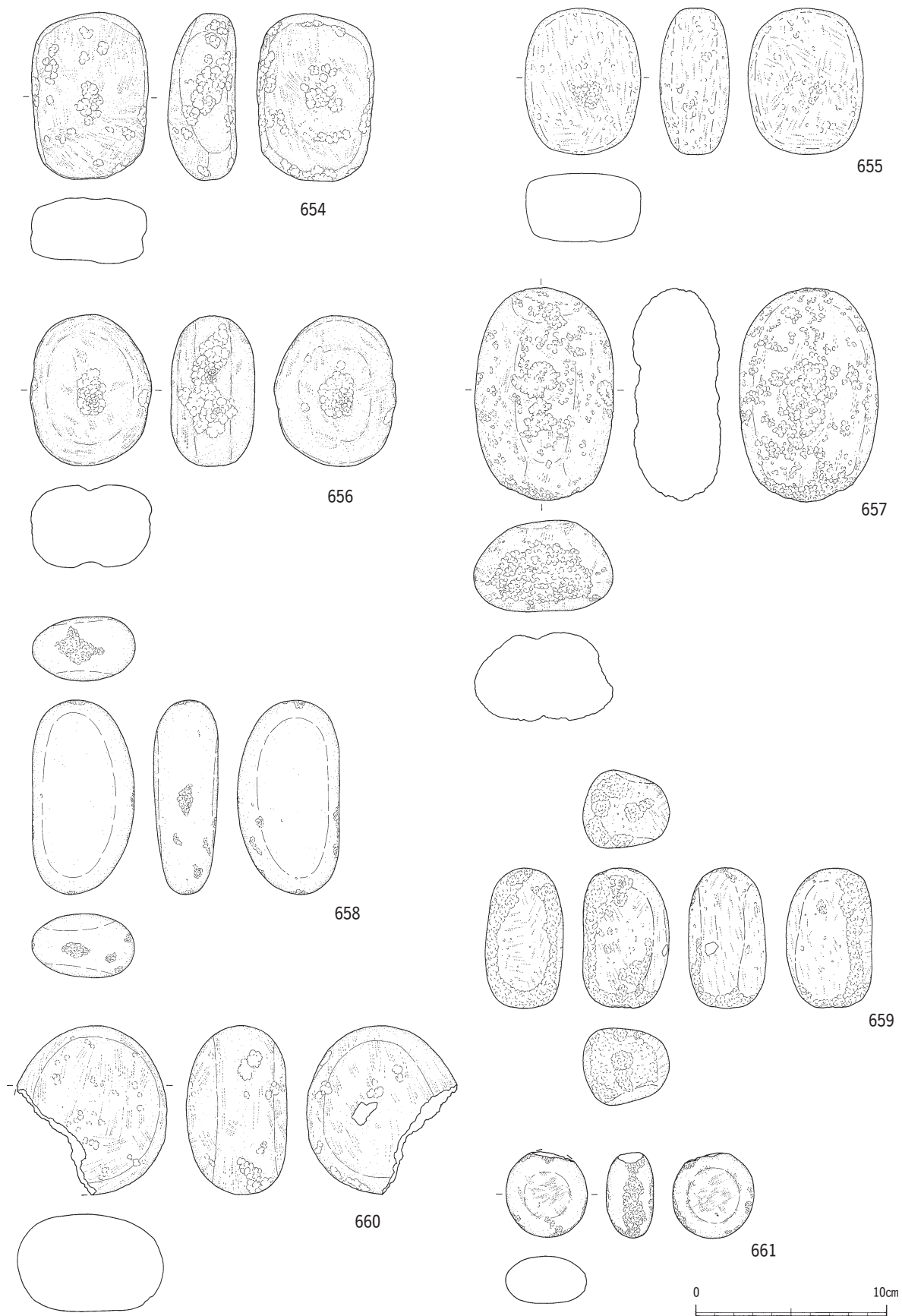
V創出殿凹石は6点出土している。b類3点，c類2点，d類が1点である。635は楕円形の川原石を素材に用い，4面に6か所の凹みがみられるものである。

第23表 凹石・敲石・磨石 一覧表

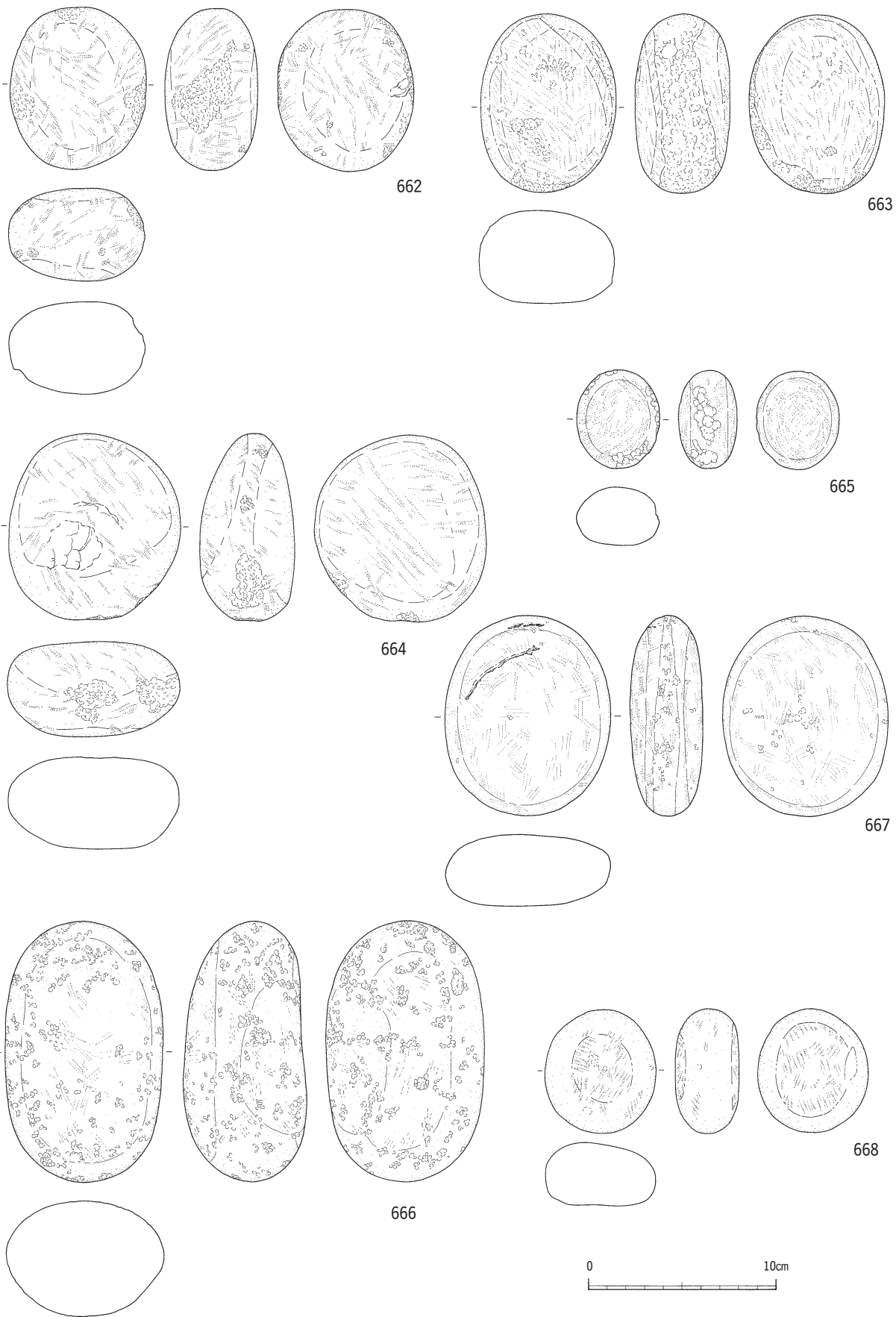
番号	器種	石 材	地区	区	層	型式	標 高	遺物番号	重量 g	長さcm	幅cm	厚みcm	石 鱗 状	備 考
635	凹 石	砂 岩	A	D29	V	Ac	180.87	8219	343.0	11.9	5.9	3.9		3 面 ⑤
636	凹 石	砂 岩	A	D29	V	Ab	180.71	6090	250.0	8.4	5.7	4.6		4 面 ⑥
637	凹 石	砂 岩	A	E28	V	Ac	180.37	6576	305.0	10.0	5.0	4.7		3 面 ⑥
638	凹 石	安 山 岩	A	E27	V	Ab	180.62	6420	195.0	7.8	5.0	3.4	○	4 面 ④
639	凹 石	花 崗 岩	A	E27	V	Ab	180.61	6438	330.0	8.8	7.2	4.1		1 面 ①
640	凹 石	砂 岩	A	D28	V	Ad	180.92	6250	450.0	8.3	7.7	5.2		2 面 ③
641	敲 石	砂 岩	A	B23	V	Bc	175.72	18200	445.0	7.6	6.3	6.4		
642	敲 石	安 山 岩	A	D27	V	Bd	181.07	7733	510.0	9.0	7.7	5.0		
643	敲 石	砂 岩	A	D29	V	Bd	180.62	9245	335.0	7.9	8.5	4.5		
644	敲 石	砂 岩	A	F23	V	Bd	176.43	12811	445.0	10.4	9.0	4.2		
645	敲 石	砂 岩	A	F23	V	Bd	176.13	12816	335.0	8.7	6.5	4.4		
646	敲 石	砂 岩	A	G23	V	Bd	176.42	13050	160.0	6.3	5.8	3.4		
647	敲 石	砂 岩	A	G23	V	Bd	176.37	13065	315.0	8.1	6.0	5.3		
648	磨 石	砂 岩	A	D22	V	Ca	175.50	15023	425.0	10.0	7.3	4.0		
649	磨 石	安 山 岩	A	D27	V	Ca	180.93	7777	1090.0	12.0	10.5	5.6		
650	磨 石	安 山 岩	A	D28	V	Ca	181.25	8099	345.5	8.4	7.3	4.1		
651	磨 石	花 崗 岩	A	D29	V	Ca	180.77	6077	645.0	9.5	9.0	5.3		
652	磨 石	安 山 岩	A	D29	V	Ca	181.02	8184	520.5	9.8	7.3	5.8		
653	磨 石	砂 岩	A	E28	V	Ca	180.32	6777	90.0	6.5	6.0	2.8		
654	凹 石	安 山 岩	A	D28	IV	Ab	181.23	5018	265.0	8.8	6.1	3.6	○	3 面 ③
655	凹 石	安 山 岩	A	D30	IV	Ab	180.72	4106	226.0	7.7	6.0	3.6	○	1 面 ①
656	凹 石	安 山 岩	A	E28	IV	Ab	180.56	5584	328.0	7.9	6.4	4.3		4 面 ⑤
657	凹 石	安 山 岩	A	C25	IV	Ad	178.94	15868	440.0	11.2	7.3	4.6		3 面 ⑤
658	敲 石	砂 岩	A	D30	IV	Ba	180.46	3319	256.0	10.1	5.3	3.4		
659	敲 石	砂 岩	A	H22	IV	Ba	175.95	19500	196.0	7.3	4.5	4.1		
660	敲 石	安 山 岩	A	B22	IV	Bd	175.71	18179	450.0	8.9	7.9	5.2		
661	敲 石	安 山 岩	A	D22	IV	Bd	175.90	9626	68.0	4.5	4.2	2.5		
662	敲 石	安 山 岩	A	D27	IV	Bd	181.11	17199	475.0	8.7	7.3	5.0		
663	敲 石	安 山 岩	A	D27	IV	Bd	181.15	17200	555.5	9.5	7.2	5.0		
664	敲 石	安 山 岩	A	E27	IV	Bd	180.49	3030	665.0	9.9	9.2	5.0		
665	敲 石	砂 岩	A	E28	IV	Bd	180.30	2440	89.0	5.2	4.4	3.1		
666	敲 石	安 山 岩	A	E28	IV	Bd	180.59	5490	820.0	13.8	8.5	6.5		
667	敲 石	花 崗 岩	A	F27	IV	Bd	179.93	2947	660.0	10.7	8.9	3.8		
668	敲 石	砂 岩	A	G23	IV	Bd	176.83	10968	185.0	6.6	5.9	3.4		
669	磨 石	安 山 岩	A	B25	IV	Ca	179.13	17222	665.5	11.4	8.8	4.6		
670	磨 石	砂 岩	A	C23	IV	Ca	175.87	12980	425.0	8.7	8.0	4.4		
671	磨 石	安 山 岩	A	C27	IV	Ca	181.19	19167	340.0	7.4	6.1	5.2		
672	磨 石	砂 岩	A	E22	IV	Ca	176.43	10750	454.0	8.2	7.8	5.4		
673	磨 石	安 山 岩	A	E27	IV	Ca	180.50	1519	277.0	6.3	5.6	4.7		
674	磨 石	砂 岩	A	E28	IV	Ca	180.14	5552	106.0	6.6	5.2	2.3		

636・637は敲打痕と凹みがあるもので、どちらも砂岩を石材に用い4面4か所に凹みがみられる。

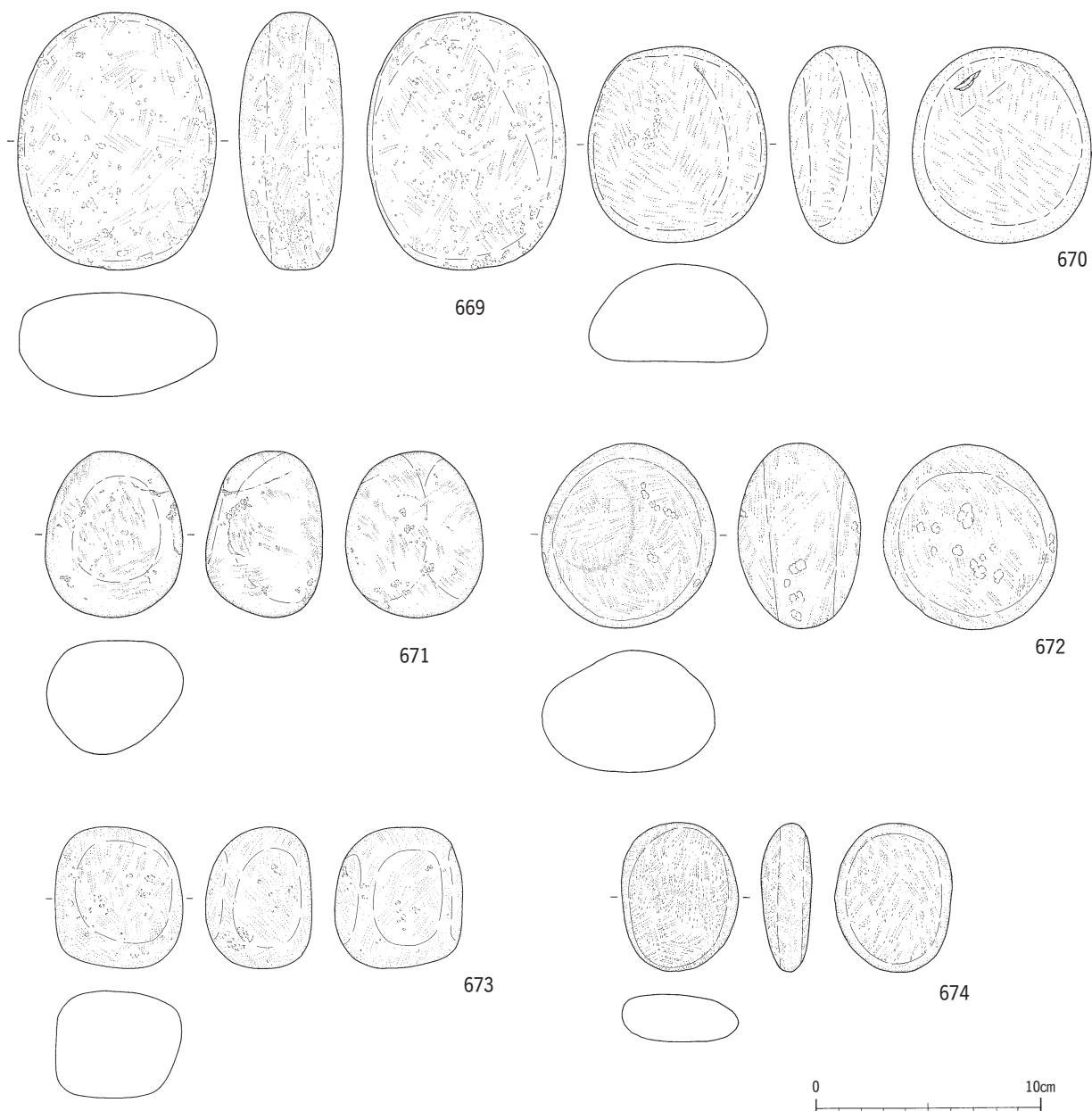
638～640は磨り面・敲打痕に凹みがあるもので、638は石鱗状を呈し、4面4か所に凹みがみられる。石材は安山岩である。639は花崗岩を石材に用い、やはり石鱗状を呈しているもので、平坦面のほぼ中央に凹みがみられる。640は縁礫の砂岩を石材に用い、側縁部は全周に敲打痕が、表裏面には磨り面がみられる。2面3か所にやや深い凹みがみられる。



第129図 凹石・敲石（IV層）



第130図 敲石 (IV層)



第131図 磨石 (IV層)

敲石

敲打痕のある石器を敲石にしたが、形態により、a 棒状、b 石斧の再利用、c 球状、d 磨り面・敲打痕のあるものの4分類を行った。

V層出土の敲石は8点出土している。c類が1点、d類が7点である。

641は球状を呈した敲石である。砂岩を石材に用い、突出した部分に敲打痕がみられる。

642～648は磨り面・敲打痕のある敲石である。石材は642が安山岩であるが、その他は砂岩を石材に用いている。敲打痕は側縁部にみられるものが多いが、648は表裏面のほぼ中央にみられるものである。

磨石

649～653は磨り面のみられる磨石である。石材は651が花崗岩、653が砂岩でその他は安山岩である。

凹石・敲石・磨石（IV層）

凹石

IV層出土の凹石は4点出土した。b類3点、d類1点である。654～656は磨り面に凹みがあるので、石材は安山岩を用いている。それぞれ、3面3か所、1面1か所、4面5か所に凹みがみられる。657も安山岩を石材に用いた凹石で、磨り面・敲打痕に凹みのあるもので、3面5か所に凹みがある。特に下端部の敲打痕は顕著である。

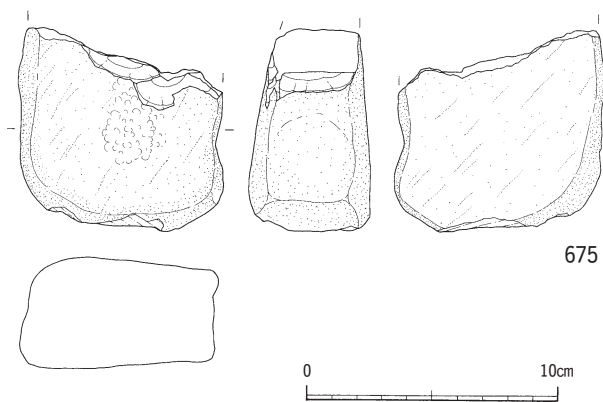
敲石

敲石は10点出土し、安山岩・花崗岩・砂岩を石材に用いている。a類2点、d類8点である。658・659は棒状を呈したもので砂岩を石材に用いている。659は側縁部及び下端部に敲打痕が著しい。

660～668は磨り面・敲打痕をもつ敲石で、敲打痕は側縁全周にあるもの、下端面にあるもの、全体的にあるものに分けられる。

磨石

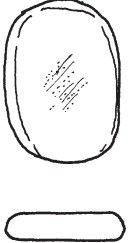
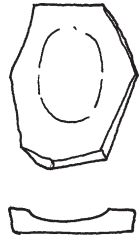
磨石は磨り面があるものだけを磨石として分類したが、やや扁平なものをa類、球状のものをb類として2分類を行った。磨石はIV層で7点出土し、a類4点、b類3点である。671～673は球状を呈するもので、671・673は安山岩、672は砂岩を石材に用いている。やや扁平で磨り面のみみられるものも砂岩・安山岩を石材に用いている。



第132図 台石

台石

675は拳大の安山岩礫を石材に用いたもので、平坦面の1か所の中央部に使用による敲打痕がみられ、台石と思われるものである。重量は490gを測る。

I	I：加工により磨り面に凹がないもの		
	a, 周縁加工のあるもの	b, 川原石（円形・楕円形）	c, 板状の角礫
			
II	II：縁を残して、中央部が断面で弓状に凹むもの		
	a, 周縁加工のあるもの	b, 川原石（円形・楕円形）	c, 板状の角礫
			
III	III、凹が深いもの		
	a, 周縁加工のあるもの	b, 川原石（円形・楕円形）	c, 板状の角礫
			

第133図 石皿分類図

石皿の形態分類

I 加工により磨り面がくぼまないもの

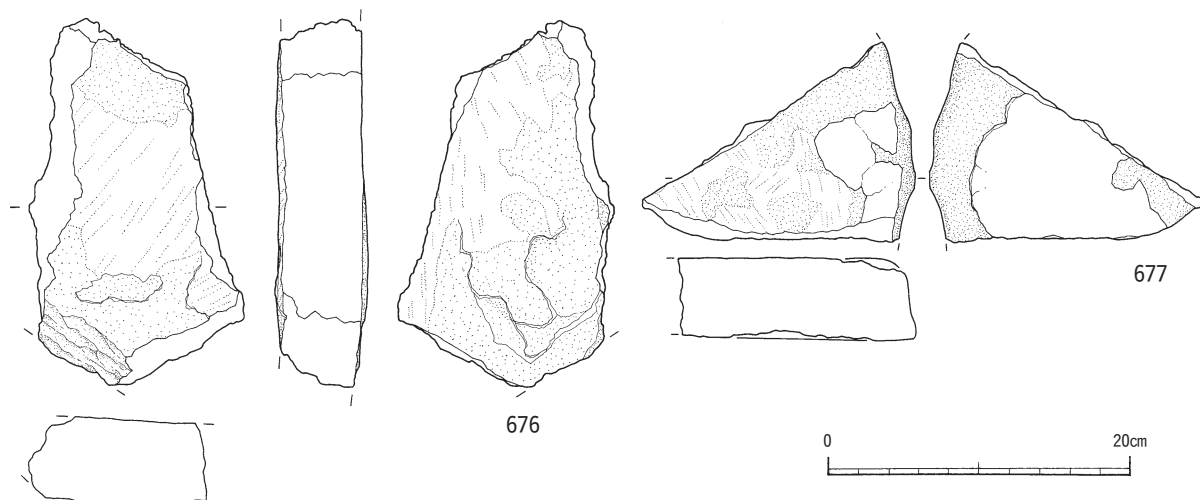
- a 周縁加工を施したもの
- b 川原などにある転石を利用したもので、円形や楕円形の平面形を呈している
- c 板状の角礫を用い、多角形の平面形を呈している

II 縁を残して、中央が断面で弓状に窪むもの

- a, b, cはIの項に準ずる

III 凹が深いもの

- a, b, cはIの項に準ずる



第134図 石皿（V層）

第24表 A地区出土石皿 一覧表

番号	器種	石材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
675	台石	安山岩	A	D28	V	181.08	6217	490	8	8.1	4.8	

番号	型式	石材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
676	I c	安山岩	A	G22	V	176.02	13088	2610	24.1	14.2	6.1	両面
677	I c	安山岩	A	D30	V	180.37	17165	1620	13.2	17.9	5.2	
	a	安山岩	A	D21	V	175.86	42102	70	5.8	5.5	2.2	
	II c	安山岩	A	G23	V	176.33	13045	5200	17.6	13.5	13.5	
		安山岩	A	E28	V	180.42	7090	8500	26.0	17.5	10.4	
	II	安山岩	A	D27	IV	176.96	17389	415	7.2	7.1	4.8	
	I	安山岩	A	H23	IV	178.83	19418	210	4.7	3.8	6.7	両面
	II c	安山岩	A	C29	IV	180.98	17777	310	7.5	4.8	7.0	
		安山岩	A	D30	IV	180.32	4857	3000	21.4	14.3	9.0	
		安山岩	A	F23	IV	176.24	10839	1330	17.1	10.8	3.2	
	II c	安山岩	A	E23	III	179.93	10924	3970	19.8	14.8	12.3	
		安山岩	A	D30	III	180.51	7323	4000	17.5	11.3	11.1	
		砂岩	A	G22	III	176.26	10513	105	7.2	5.4	2.3	
	II	安山岩	A	B30	表			530	11.0	5.7	6.5	

石皿

前原遺跡で出土した石皿は、県内の縄文時代早期のなかでは多量出土したことで知られている。南九州では全国に先駆けて、縄文文化の基本となる木の実などの植物利用がみられた。

この石皿を大きく三形式に分類し、比較検討を行ってみた。まず、使用等による凹みの問題であるが、ほぼ平坦で研磨痕がみられるもの、縁を残して中央が弓状にくぼむもの、凹みが深いものに分類され、それぞれ、a 周縁加工を施したもの、b 川原などにある自然礫を利用したもので、円形や楕円形の平面形を呈しているもの、c 板状の角礫を用い 多角形の平面形を呈しているものに分けた。

A地区では、V層から5点、IV層から5点の計10点の石皿が出土している。石材は全て安山岩である。凹みのないもの3点、凹みが弓状のもの7点である。676は安山岩の板状の角礫を石材に用いたもので、磨り面に凹みはみられないが、研磨痕が表裏2面にみられる。大型の石皿である。677も同様の大型の石皿であるが研磨痕が片面にしかみられない。

B 地 区

2 B地区の調査

B地区の確認調査は、平成3年度に行った。B地区は10～21区の範囲であり、10m×2m＝1か所、18m×2m＝1か所、20m×2m＝2か所、30m×2m＝1か所のトレンチ調査を行った。

その結果、縄文時代後・晩期の土器・石器がⅢ層から、縄文時代早期の土器・石器がⅣ・Ⅴ層から出土した。

確認調査の成果を踏まえて、平成7・8年度に調査を行った。

平成7年度は、A～D－11～18区、A～H－19～21区の調査を行った。その結果、縄文時代早期の遺構（住居跡・落とし穴・土坑等）、遺物（土器・石器）が多く出土した。

遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑30数基、落とし穴1基である。遺物は、前平式土器・志風頭式・加栗山式・吉田式・石坂式土器が主体で、円筒形・角筒形土器が出土した。石器は、石鏃・スクレイパー・凹石・敲石・磨石・石皿が出土した。また、石材については、黒曜石・チャート・頁岩・鉄石英・安山岩・砂岩がみられた。

平成8年度は、A～H－10～21区の調査を行った。

Ⅲ層の土器は縄文後・晩期のもので、黒色研磨土器・組織痕文土器が主体となっている。Ⅳ・Ⅴ層の土器は縄文時代早期のもので、志風頭式・加栗山式が主体となり、ほとんど円筒形土器であるが、角筒土器も多く出土している。

土器は、B～H－14～21区に集中している。特に志風頭式土器は、総数の40%以上を占め、本遺跡の中心的な土器型式である。胴部の施文は豊富で他の地域よりも角筒土器が多くこの地区の特徴である。また、加栗山式土器も多く出土しているが、これら以外の土器形式については極めて少量の出土であった。

石器は、石鏃・石匙・磨石・石皿・剥片が出土した。また、石材については、黒曜石・チャート・頁岩・鉄石英・安山岩・砂岩がみられた。

B地区においては約3万点の遺物が出土している。

縄文時代早期は多くの遺物と多彩な遺構が確認された。竪穴住居跡12軒、集石3基、連穴土坑6基、土坑81基、道跡2か所が検出された。この遺跡の特出すべき遺構は道跡である。相反する二つの谷に向いており、台地上でもそれぞれの住居跡に向かっていることからその意味が注目される。このように、縄文時代早期の集落形態について多くの情報が得られた。



第135图 B地区遺構配置図

(1) 竪穴住居跡

前原遺跡のB地区からは、12基の竪穴住居跡が検出された。これらは、いずれも方形を基本とする平面プランをもつもので、前述した本遺跡のA地区で検出された竪穴住居跡とほぼ同じ様相を呈している。

これら12基の竪穴住居跡は、ほぼ単独で検出された2基（1号と10号）を除き、おおむね2か所で集中して検出された。C・D16～18区付近（7基）とH16, 17区付近（3基）の2か所である。前者の4号と12号、6号と7号、8号と9号、後者の2号と5号は、近接して検出されており、同時存在は厳しい状況である。ただし、それぞれ2基が近接している状況には何らかの意味がある可能性が高く、集落構造を考える上で注目される事例である。

B地区では、2類（志風頭式）土器と3類（加栗山式）土器が多量に出土した。竪穴住居跡内からもそれらに属する土器が多く出土している。完形やそれに近い形まで復元できる資料も多い。それぞれの住居跡の時期設定についても、これらの時期が中心となるものと考えられる。様相としては、A地区よりも土器型式で数段階古い時期の集落であるといえよう。

竪穴住居跡の床面積を単純に平均すると6.29㎡になる。比較的大型の2, 3, 10, 12号とその他に分類されそうであるが、注目される遺構に1号がある。これは、竪穴の外側に柱穴状のピットが並んで検出されているもので、A地区でも同様な遺構が3基検出されていることは前述したとおりである。ただ、A地区の事例との違いが2点ある。1点は、本例の場合、竪穴部だけでも床面積が6.15㎡と広いということ。もう1点は、柱穴状ピット列が2方向（列）しかみられないということである。竪穴をもつ遺構のバリエーションとして興味深い。

第25表 B地区検出の竪穴住居跡

遺 構 名	検 出 区	平 面 形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 からの 深さ (cm)	床面積 (㎡)	炉跡	ピット	遺物 総数	挿図 番号	備 考
1号竪穴住居跡	G11	長方形	294	220	36	6.15	無	0	39	137	周囲にピット（7個）あり
2号竪穴住居跡	H16	長方形	380	290	26	(10.02)	無	4	73	138	77, 78号土坑と重複
3号竪穴住居跡	D・E18	隅丸長方形	400	315	20	(10.08)	無	25	125	139	79号土坑と重複
4号竪穴住居跡	C17	方形	270	255	28	5.45	無	13	26	141	
5号竪穴住居跡	H17	方形	250	(2.35)	25	(4.52)	無	3	34	142	一部欠
6号竪穴住居跡	C・D18	長方形	235	182	12	(3.92)	無	7	13	143	80号土坑と重複
7号竪穴住居跡	D17・18	方形	304	285	22	8.03	無	19	30	144	
8号竪穴住居跡	C・D16・17	長方形	245	180	22	3.86	無	14	21	145	
9号竪穴住居跡	D16・17	長方形	252	186	12	4.25	無	10		146	
10号竪穴住居跡	E・F16	隅丸方形	330	280	25	8.64	無	23	108	147	
11号竪穴住居跡	G・H16・17	長方形	232	152	15	(3.42)	無	7	27	148	81号土坑と重複
12号竪穴住居跡	C17	隅丸方形	305	260	30	7.14	無	0	51	149	

12

13

14

15

16

17

18



第136図 B地区検出の竪穴住居跡位置図

0 10m

① 1号竪穴住居跡

1号はG11区で検出された。床面積が6.15㎡で、B地区検出の竪穴住居跡の中では平均的な広さをもつ。また、B地区の中では最も西側で検出された住居跡で、周辺に住居跡はおろか土坑や集石遺構などの遺構はみられない。

竪穴の平面プランは長方形を呈するが、前述したとおり、竪穴の外側に柱穴状ピットが並んで検出されるという特徴をもっている。竪穴の南側に5個、東側に2個のピットが、それぞれ竪穴と平行して並んだ状態で検出されている。竪穴の北側と西側、そして内部でピットは確認されていない。これらのピットが竪穴に付随するものであるとすると、4.5×3.5mほどの空間が住居の広がりとなることができ、2号や3号などのような、比較的大型の住居跡と同様な面積をもつことになる。

同様な形態をもつA地区の3基とともに注目される遺構形態である。図化できた土器としては、3類（加栗山式）土器がある。楔形貼付文をもつ口縁部下の破片である。

② 2号竪穴住居跡

2号はH16区で5号と近接して検出された。床面積約10㎡で、本遺跡では大型の部類に入る住居跡である。竪穴の平面プランは長方形であるが、南側の二隅では、77号土坑と78号土坑が重複して検出されている。竪穴のほぼ中央にピット（P2）があるが、焼土や炭化物等は確認されていない。北側隅には、壁と平行する溝状の落ち込み（90×20cm）が見られる。

③ 3号竪穴住居跡

3号はD・E18区で検出された。床面積が10㎡を越える、B地区最大の竪穴住居跡である。北隅で79号土坑と重複するが、平面プランの基本形は隅丸長方形である。床面には大小25個のピットがみられるが、建物の構造復元までには至らないのが現状である。強いていえば、柱穴状のピットが竪穴中央部と壁際に比較的多くみられるということであろうか。

3号の一番の特色は、出土遺物（土器）が多いということである。2類（志風頭式）土器と3類（加栗山式）土器がみられるが、中心は完形品も出土している3類（加栗山式）土器である。

④ 4号竪穴住居跡

4号はC17区で12号と近接して検出された。床面積5.45㎡の正方形竪穴である。B地区で最も北に位置する住居跡である。床面では13個のピットが検出されている。最も深度のあるP11とP13の2個が支柱となる可能性もあるが、建物構造については不明である。

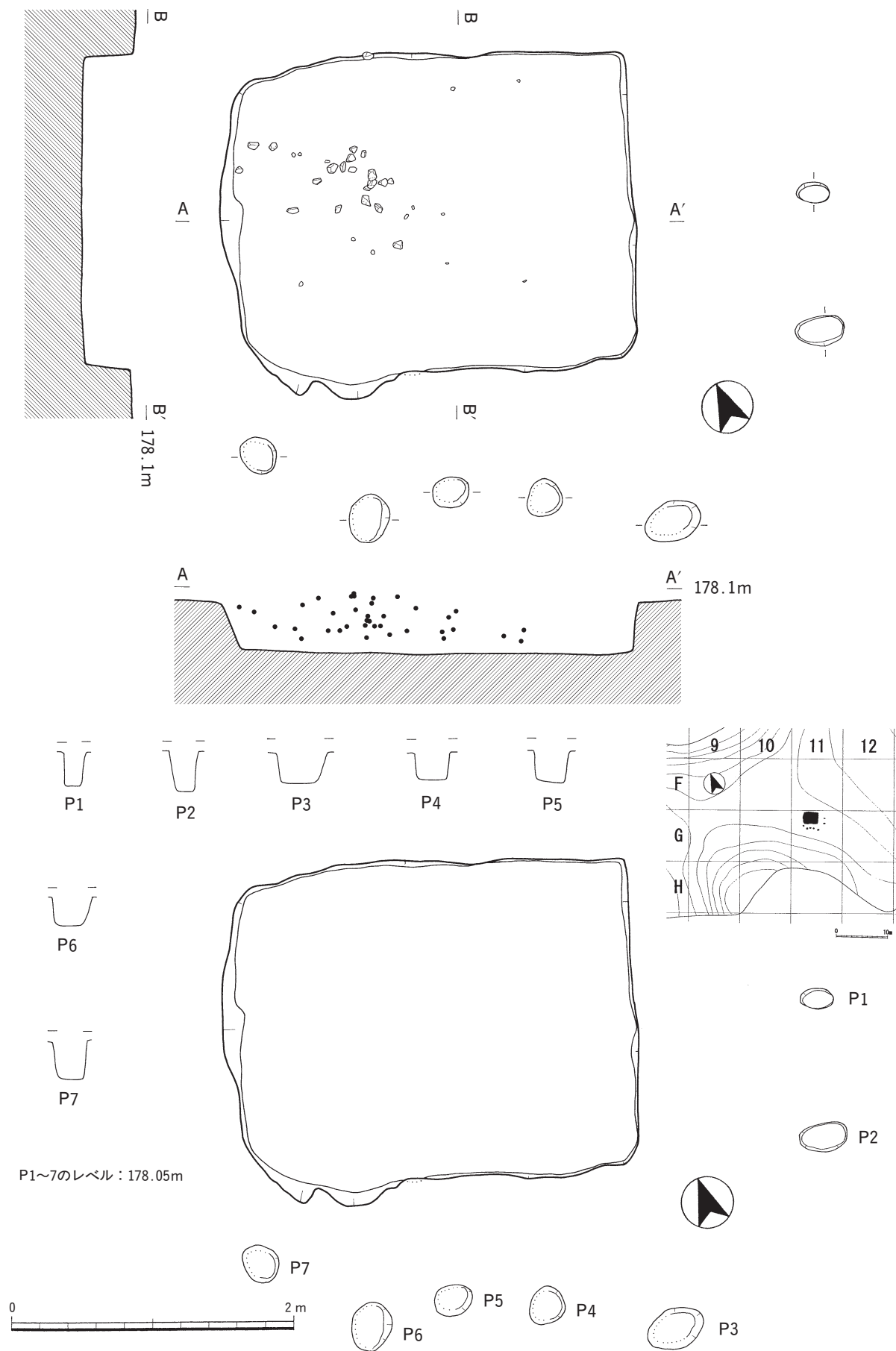
出土遺物には2類（志風頭式）と3類（加栗山式）土器がある。2類では角筒土器が目立つ。

⑤ 5号竪穴住居跡

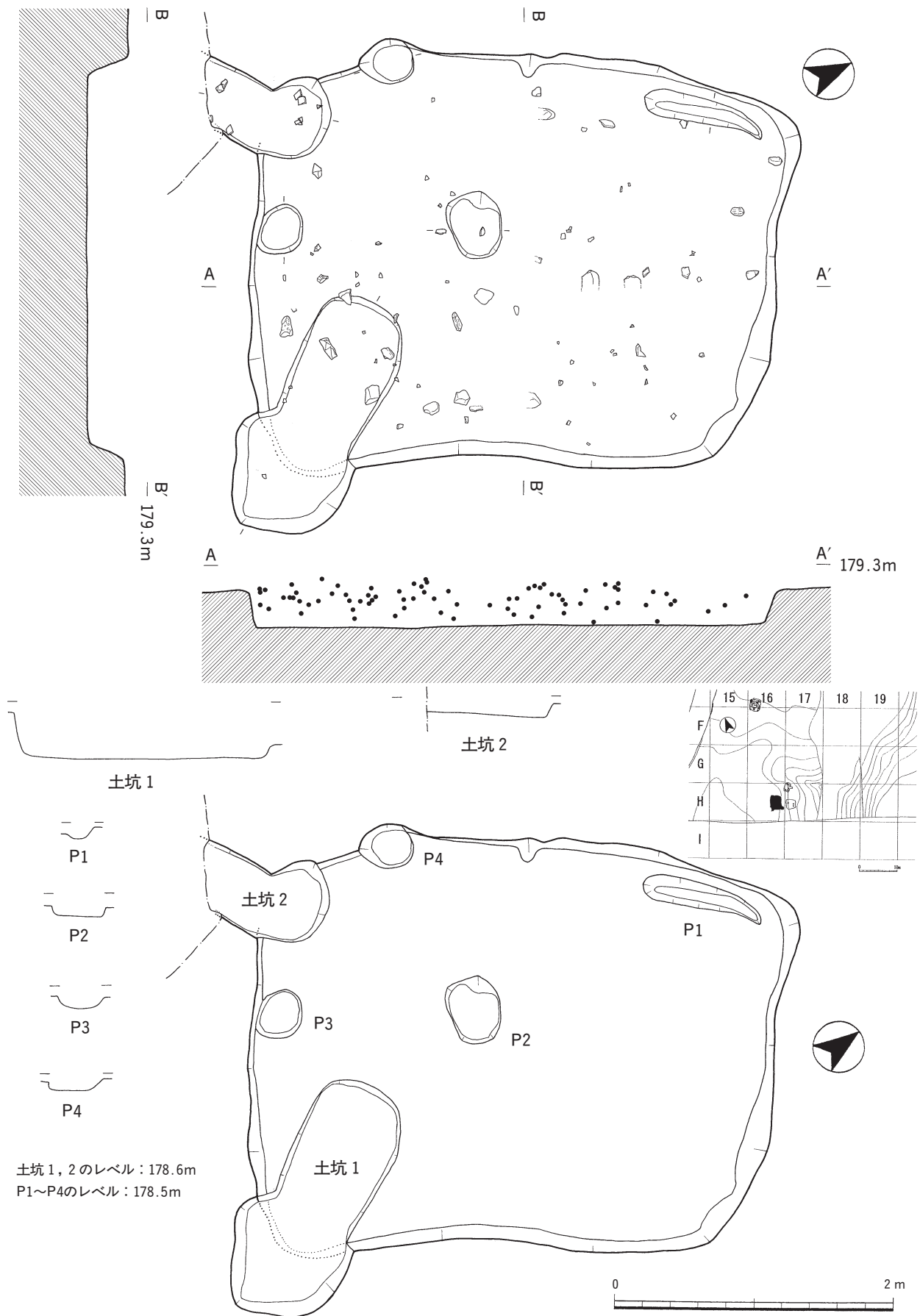
5号はH17区で2号と近接して検出された。平面プランは方形で、床面積が約4.5㎡とB地区では小型の部類に入る。B地区で最も南側に位置する住居跡である。北隅と西隅が樹痕で崩壊している。床面で3個のピットが検出されているが、いずれも浅く、建物の構造復元までに至る資料とはなっていない。出土遺物には2類（志風頭式）土器の角筒土器大片がある。

⑥ 6号竪穴住居跡

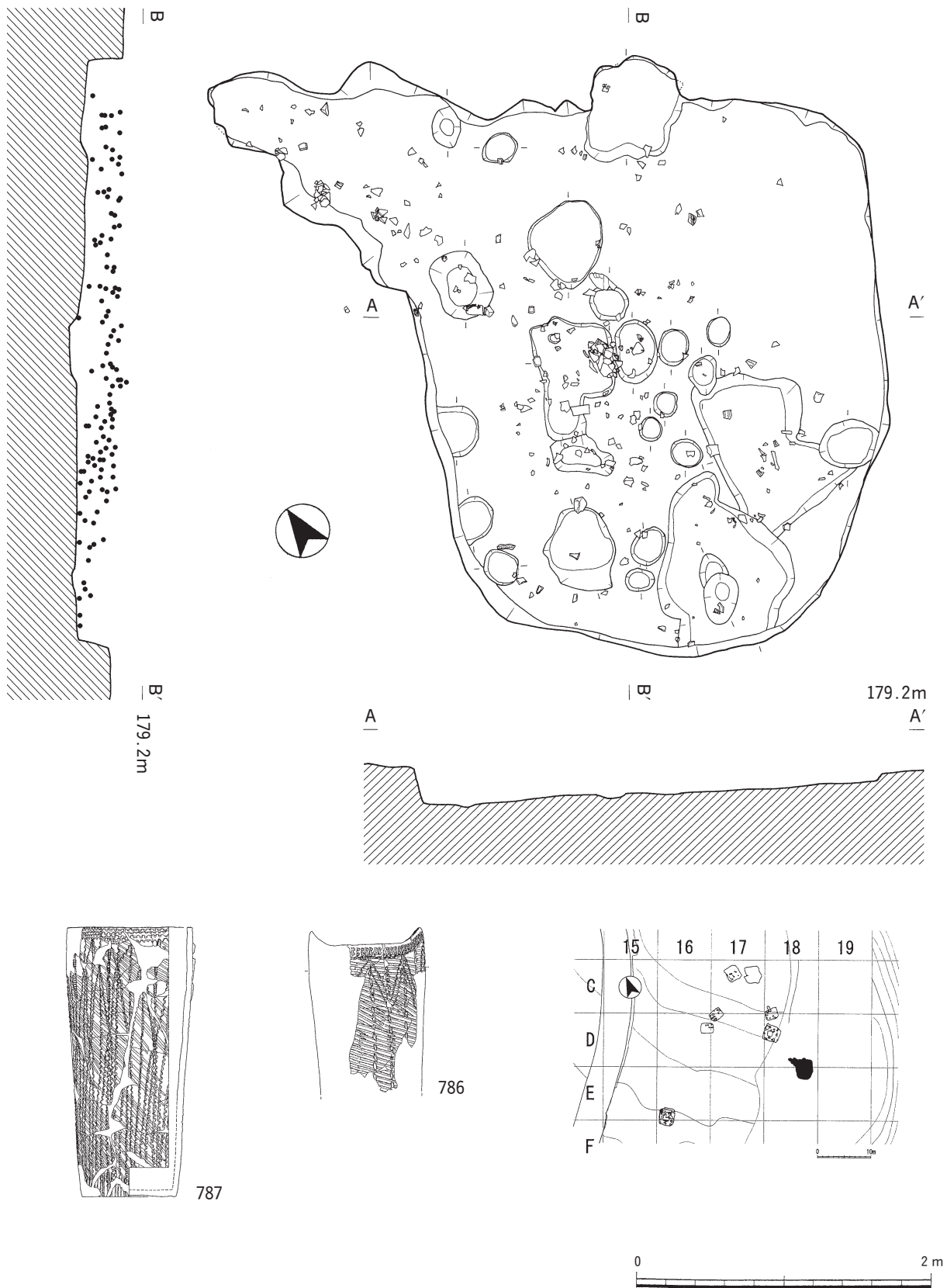
6号はC・D18区で7号と近接して検出された。平面プランは長方形で、床面積約4㎡とB地区では小型の部類に入る住居跡である。北側の一辺で、80号土坑と重複している。前後関係は不明であるが、住居跡の竪穴を利用した連穴土坑である可能性もある。これは2号竪穴住居跡の場合も同



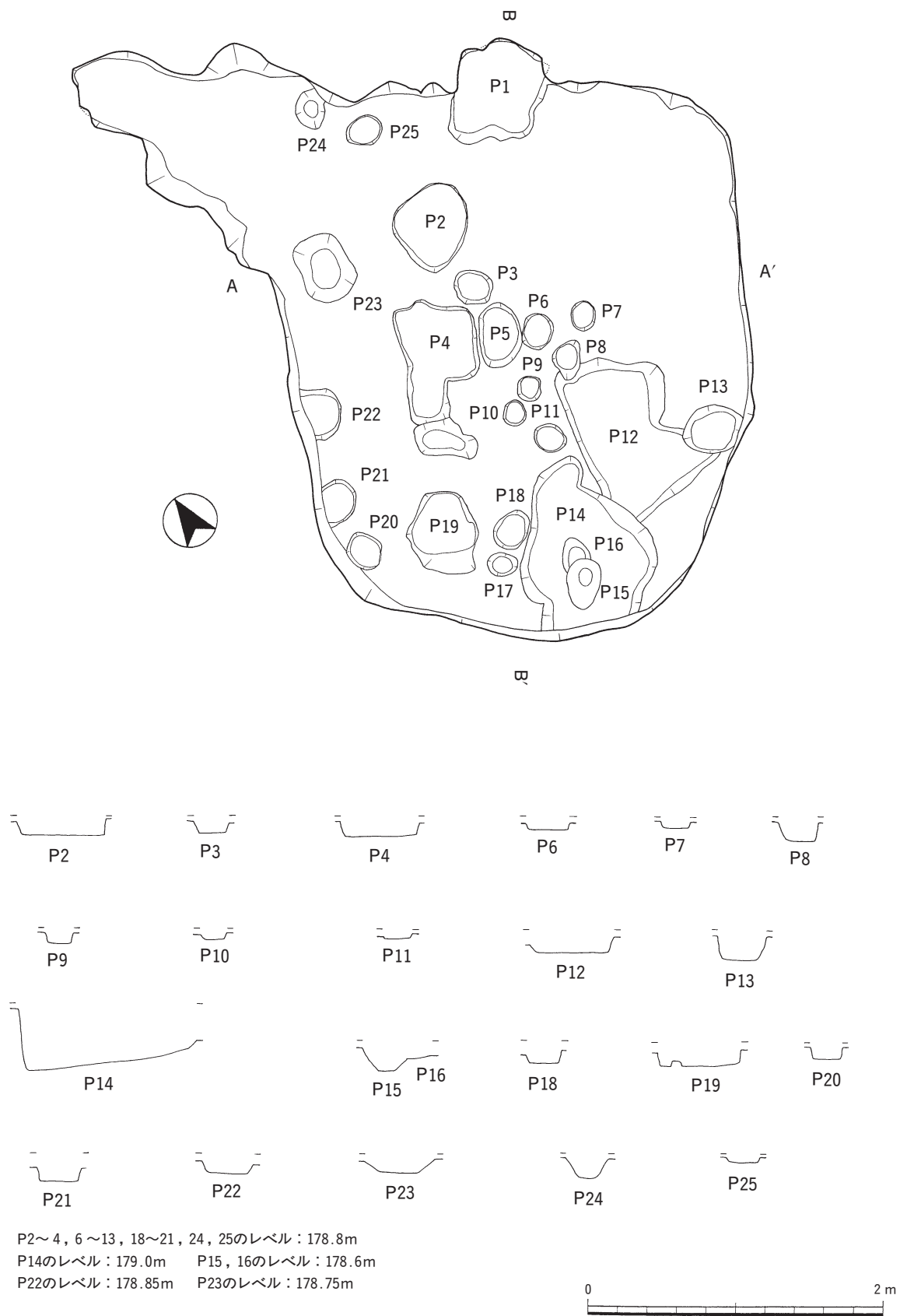
第137図 1号住居跡



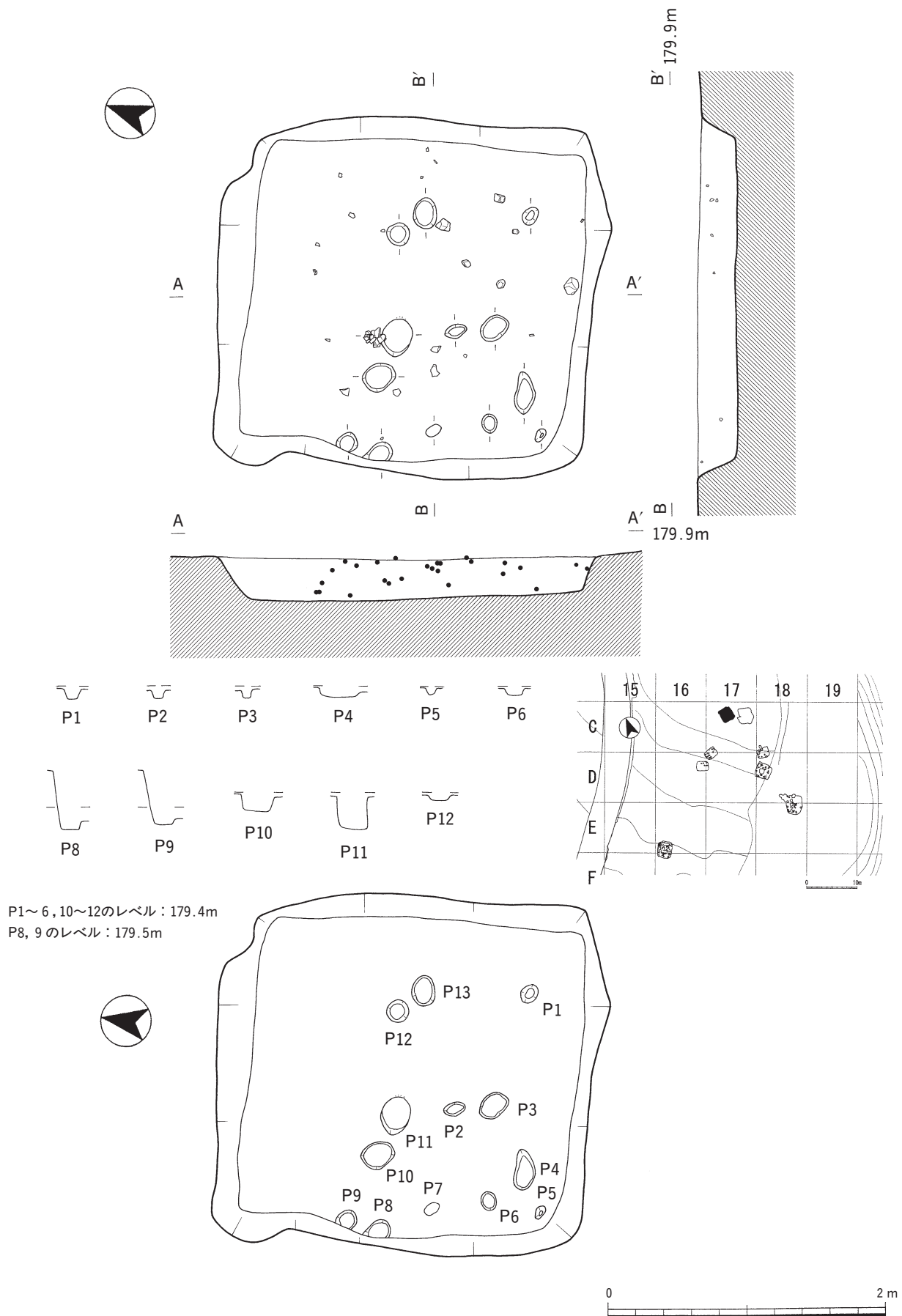
第138図 2号住居跡



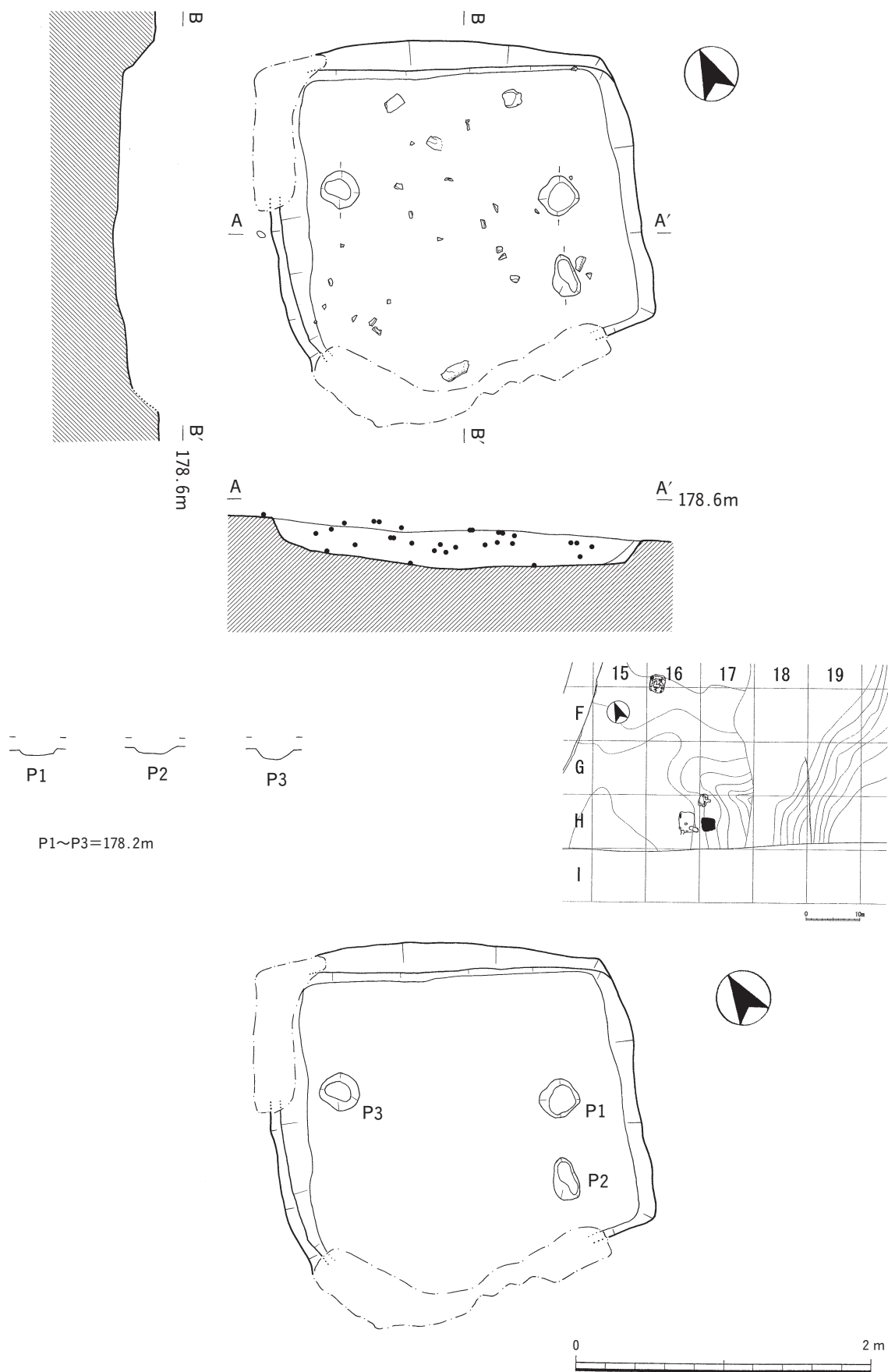
第139図 3号住居跡(1)



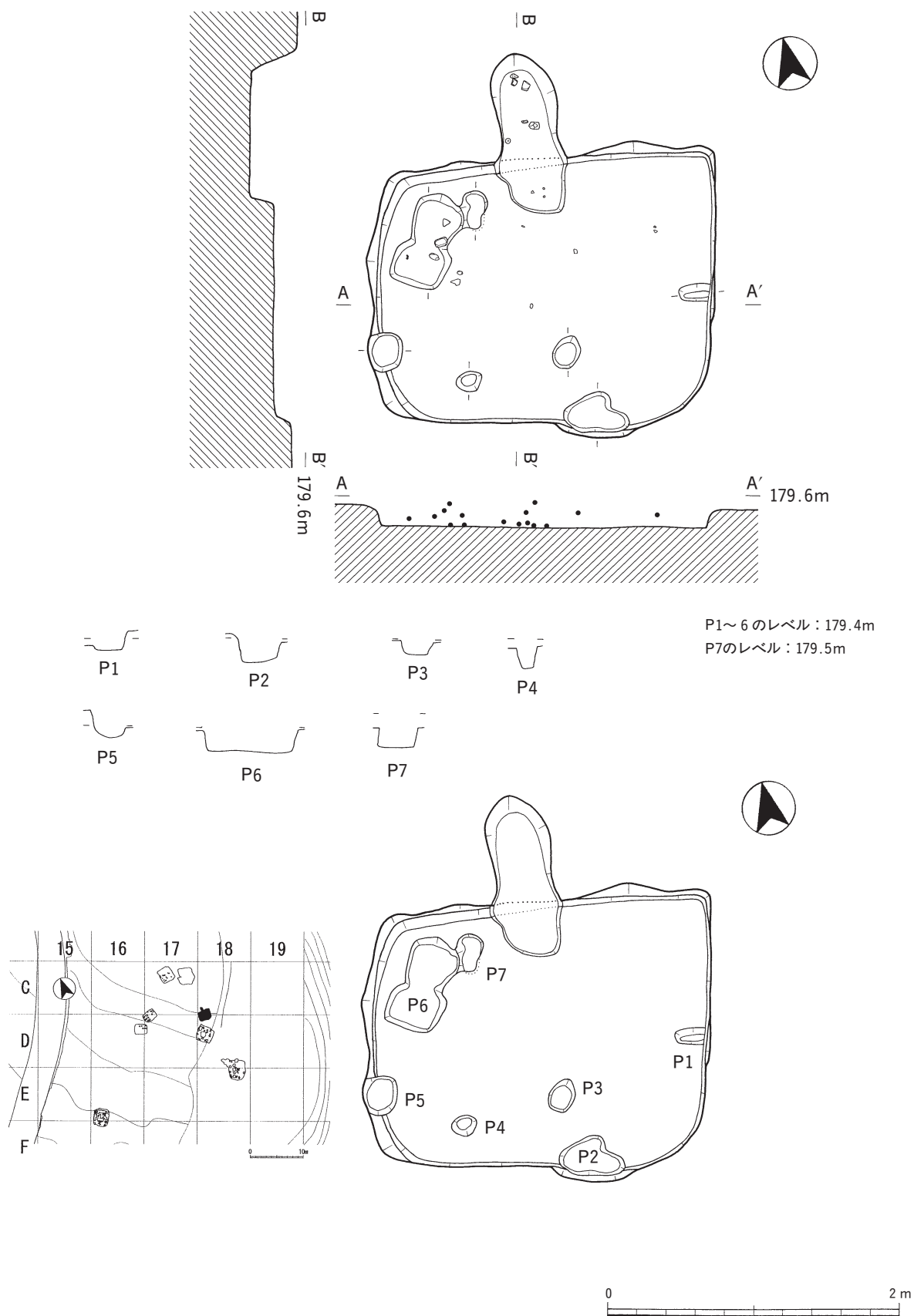
第140図 3号住居跡(2)



第141図 4号住居跡



第142図 5号住居跡



第143図 6号住居跡

様である。床面で大小7個のピットが検出されている。やはり、建物の構造復元までの資料としての決め手に欠ける。

⑦ 7号竪穴住居跡

7号はD17・18区で6号と近接して検出された。平面プランは方形で、床面積約8㎡とB地区では大型の部類に入る住居跡である。床面では大小19個のピットが検出されている。注目されるのは、ほぼ竪穴の中央にある大型のピット（P14）である。一辺が1m前後を測る隅丸方形のピットである。内部から焼土や炭化物は検出されていないが、炉跡的な機能も考えられる事例である。柱穴状のピットは15個あるが、建物の構造復元までは至っていない。

⑧ 8号竪穴住居跡

8号はC・D16・17区で9号と近接して検出された。平面プランは長方形で、床面積3.86㎡とB地区では小型の部類に入る住居跡である。床面からは14個の柱穴状ピットが検出されている。ピットは竪穴の西側に集中している感もあるが、ほぼ中央にあるP3とP7の2個が支柱となる可能性もあろう。出土遺物には2類（志風頭式）土器のほぼ完形に近い好資料がある。角筒土器であるが、口縁部付近は長方形、底部付近は正方形を呈するもので、角筒土器の世界を知る上で貴重な情報となった。

⑨ 9号竪穴住居跡

9号はD16・17区で8号と近接して検出された。平面プランは長方形で、床面積4.25㎡と形態・規模共に近接する8号と類似する住居跡である。床面で10個の柱穴状ピットが検出されている。ほぼ中央に2個の支柱状ピットがあること、竪穴の片側（ここでは東側）にピットが集中する点なども8号と類似した特徴である。出土土器には2類（志風頭式）土器がある。

⑩ 10号竪穴住居跡

10号はE・F16区で検出された。平面プランは隅丸方形で、床面積8.64㎡とB地区では大型の部類に入る住居跡である。床面からは大小23個のピットが検出されている。P1、P6、P12、P18、P19などは規模も大きく、土坑との重複である可能性もある。建物の構造復元までには至っていない。

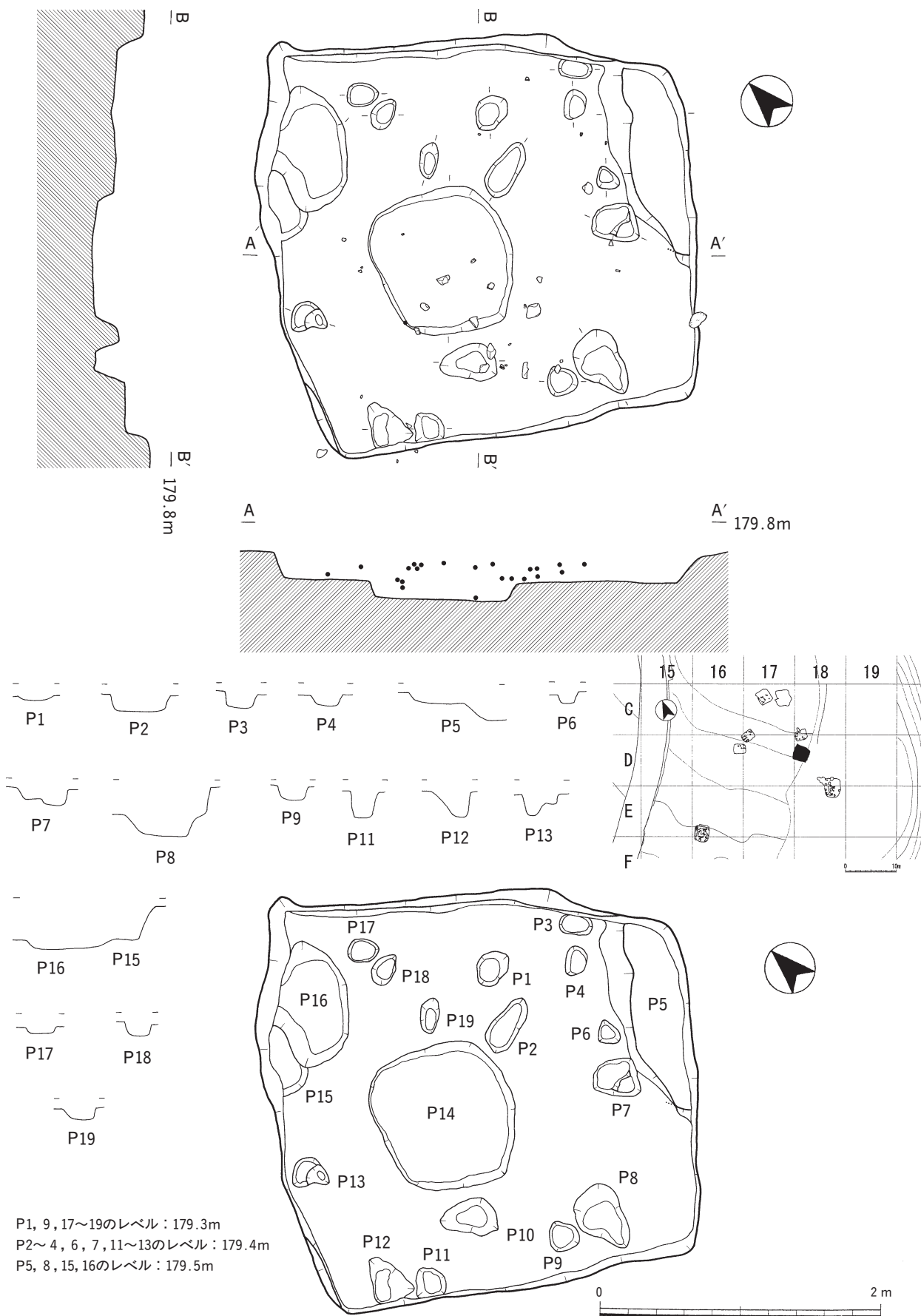
10号の最大の特徴は、出土遺物が豊富ということである。ほとんどか2類（志風頭式）土器で、完形（角筒）に復元された58は、前原遺跡出土土器の中で、最も美しい土器の1つといえよう。

⑪ 11号竪穴住居跡

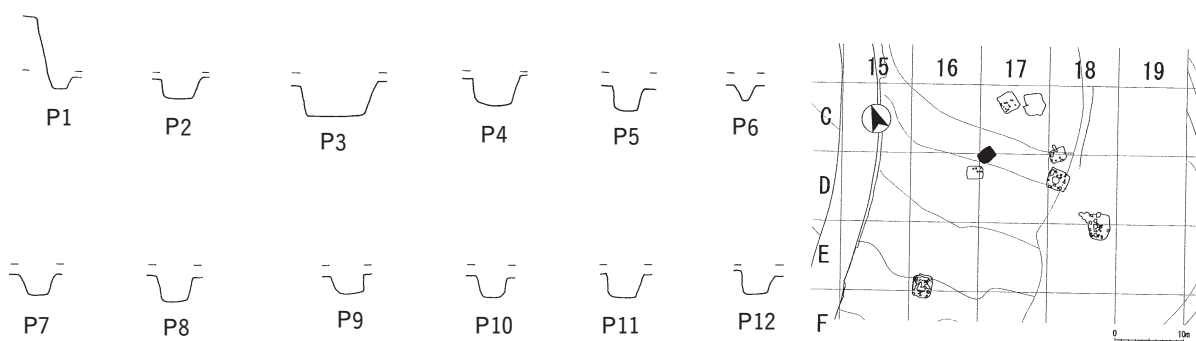
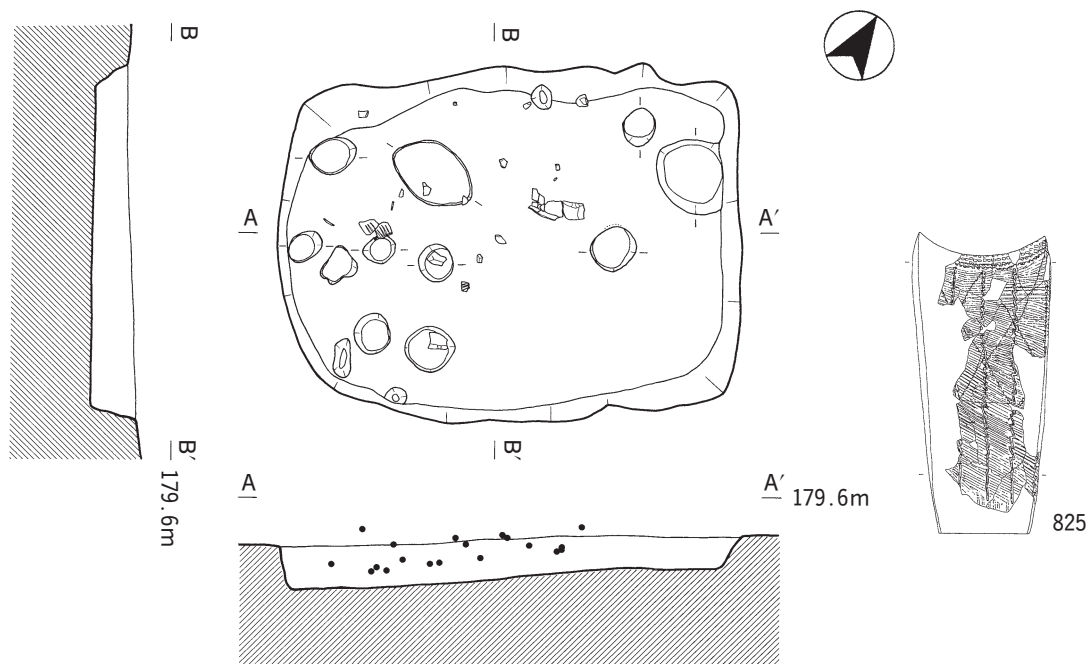
11号はG・H16・17区で検出された。南側の一辺で81号土坑と重複する。推定床面積が3.5㎡に満たない小型の住居跡である。基本的には長方形の平面プランをもつ。床面からは大小7個のピットが検出されている。建物の構造復元までには至っていない。竪穴が小型であること、出土遺物に略完形の土器（2類の角筒土器）があることなどから、祭祀的な機能をもった遺構である可能性もあるが、ここでは竪穴住居跡として取り扱った。

⑫ 12号竪穴住居跡

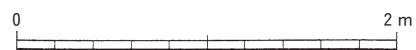
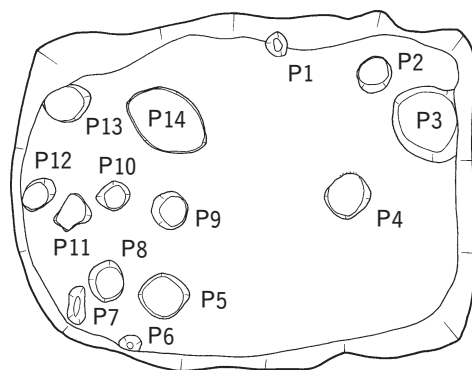
12号はC17区で4号と近接して検出された。床面積が7.14㎡でB地区では大型の部類に入る住居跡である。略隅丸方形の平面プランをもつが、竪穴の内外にピットが無く、異様な感じも受ける。出土土器は3類（加栗山式）土器であった。



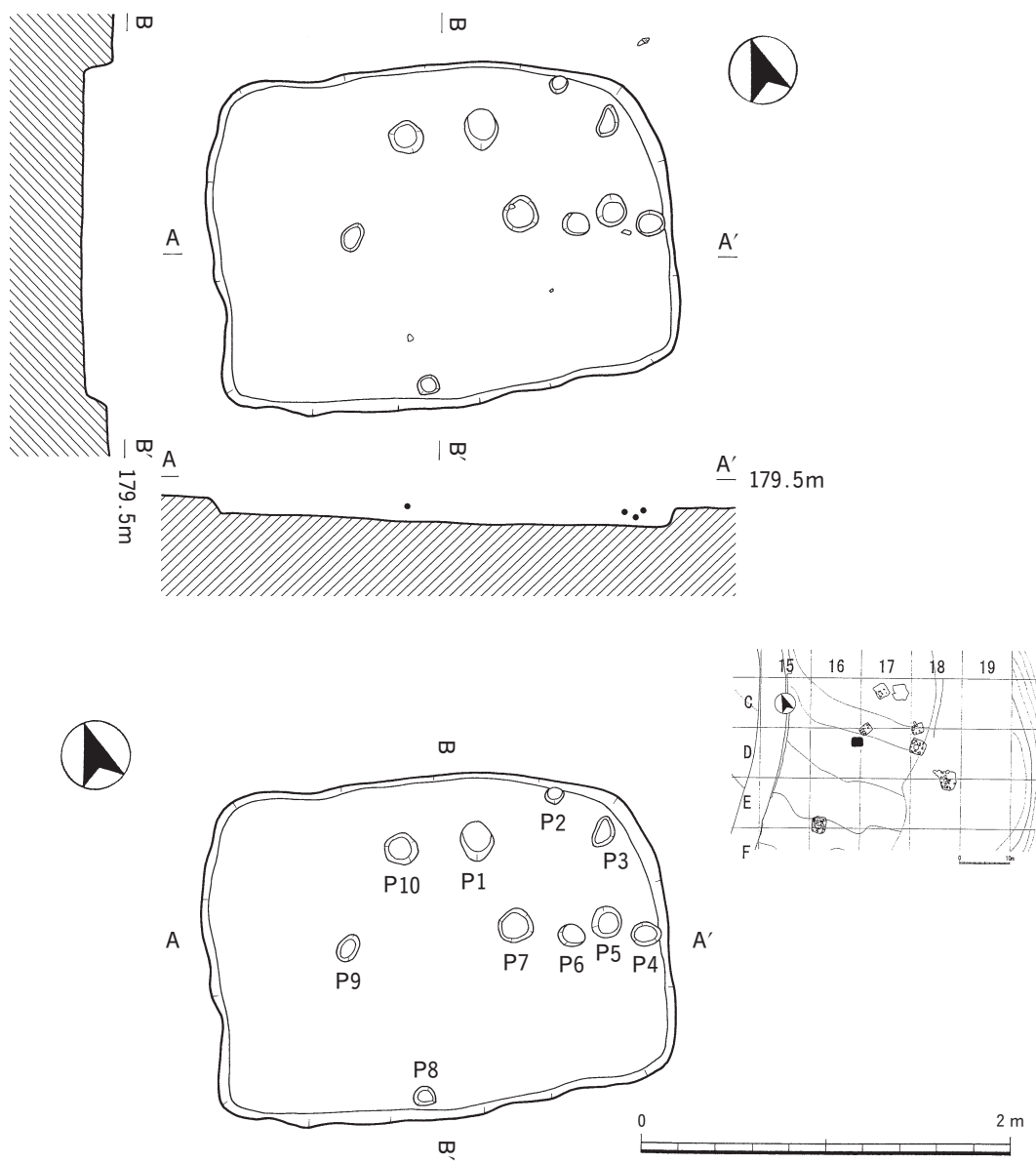
第144図 7号住居跡



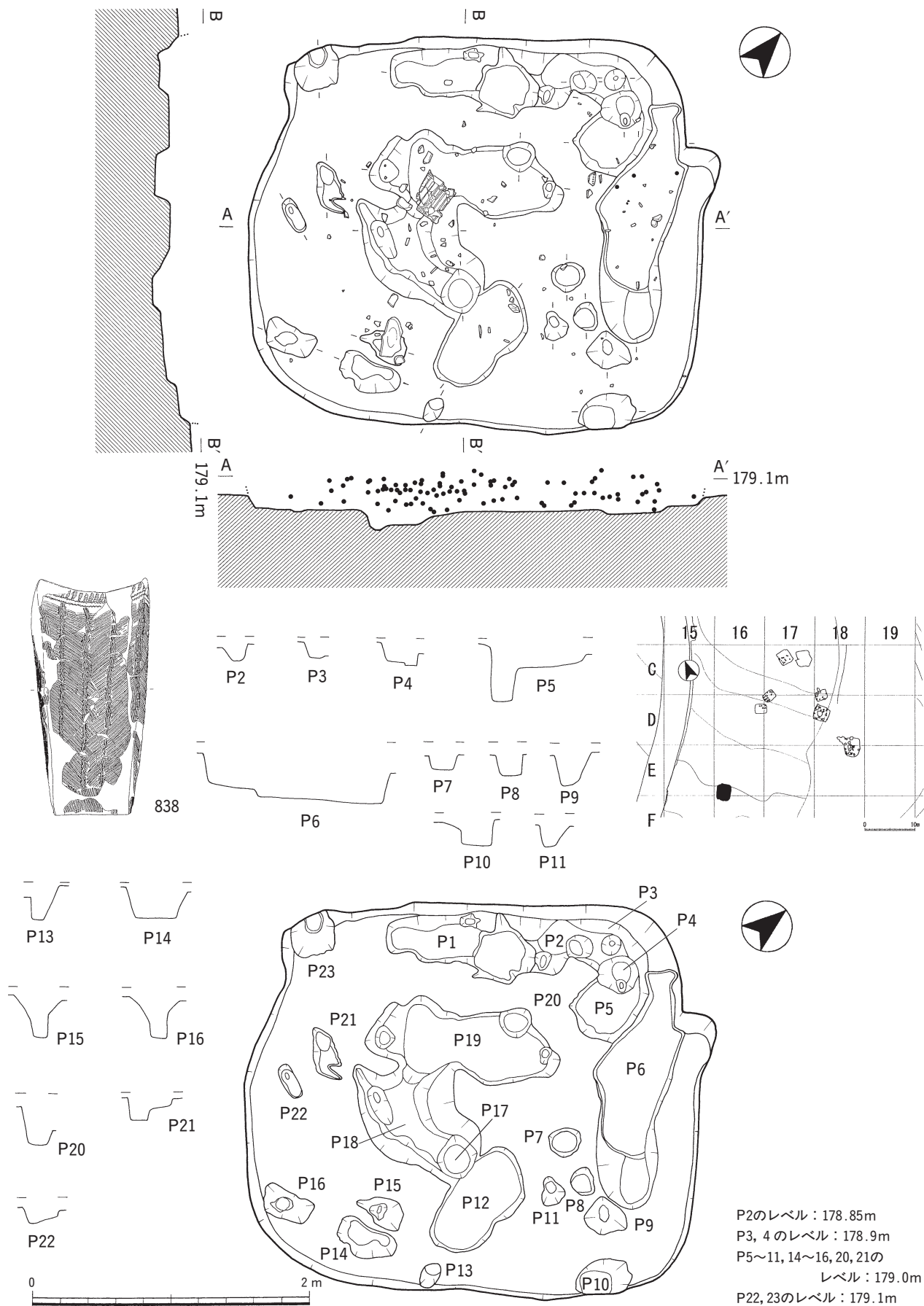
P1, 2, 4 ~14のレベル : 179.2m
P13のレベル : 179.25m



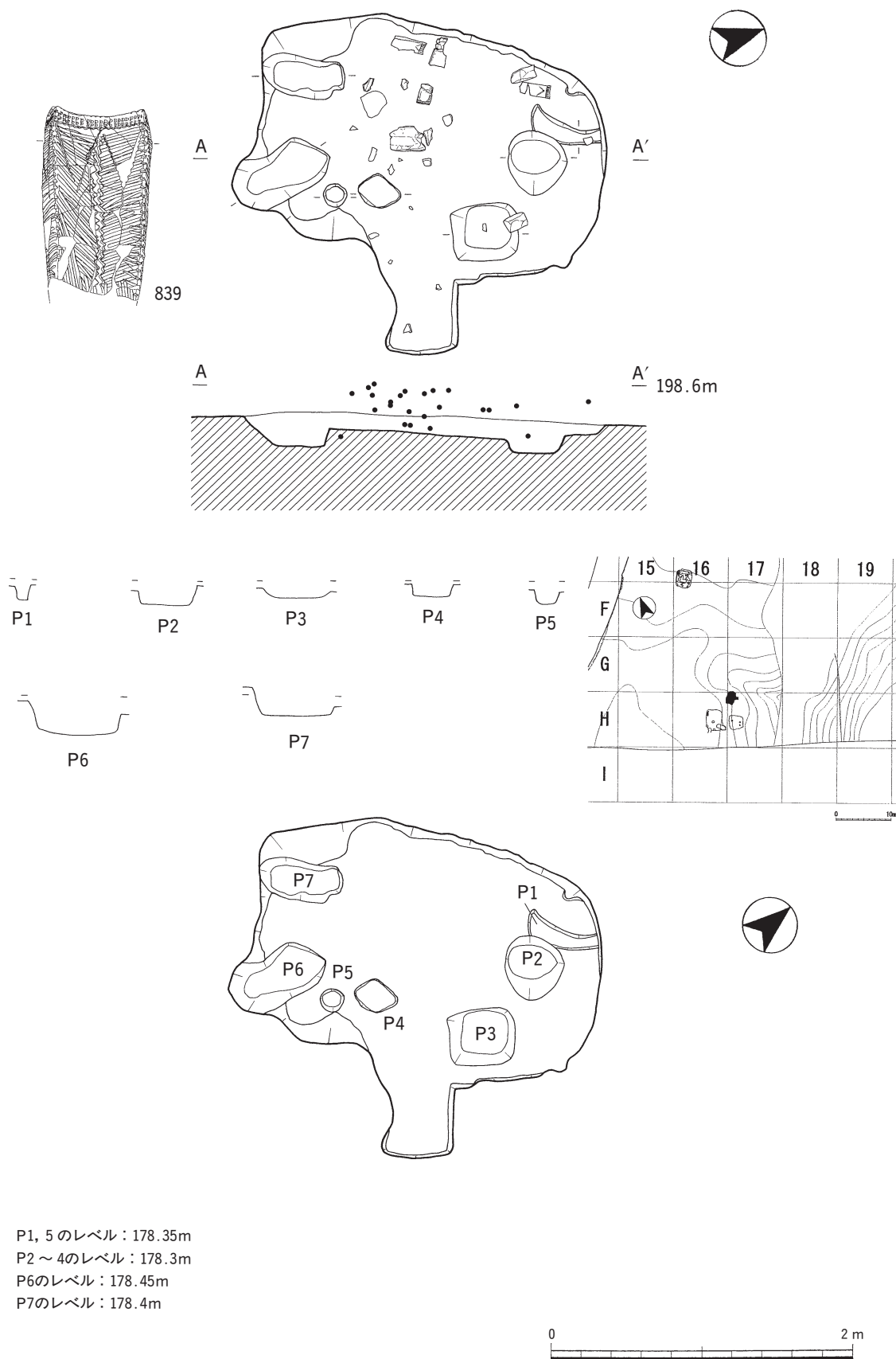
第145図 8号住居跡



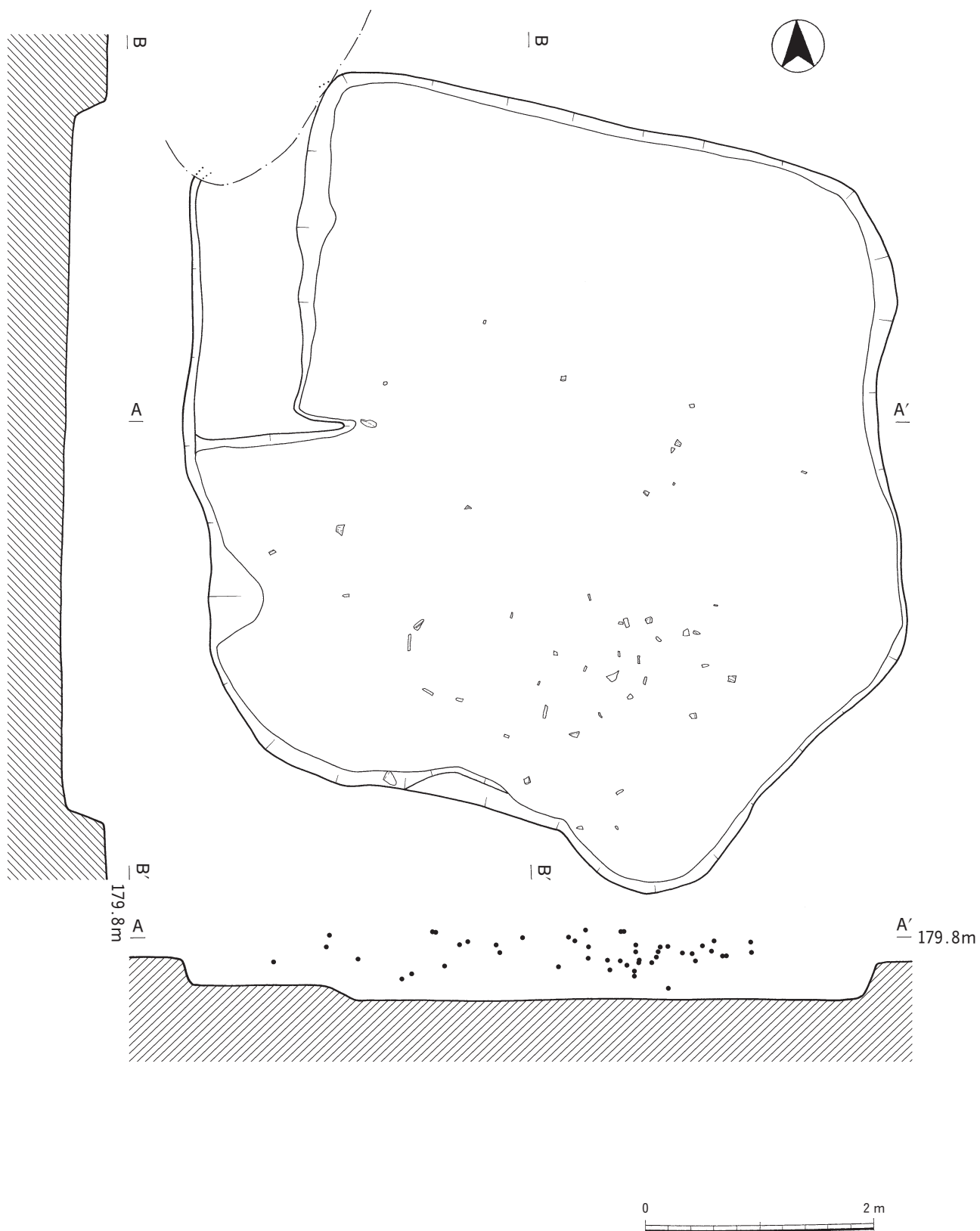
第146図 9号住居跡



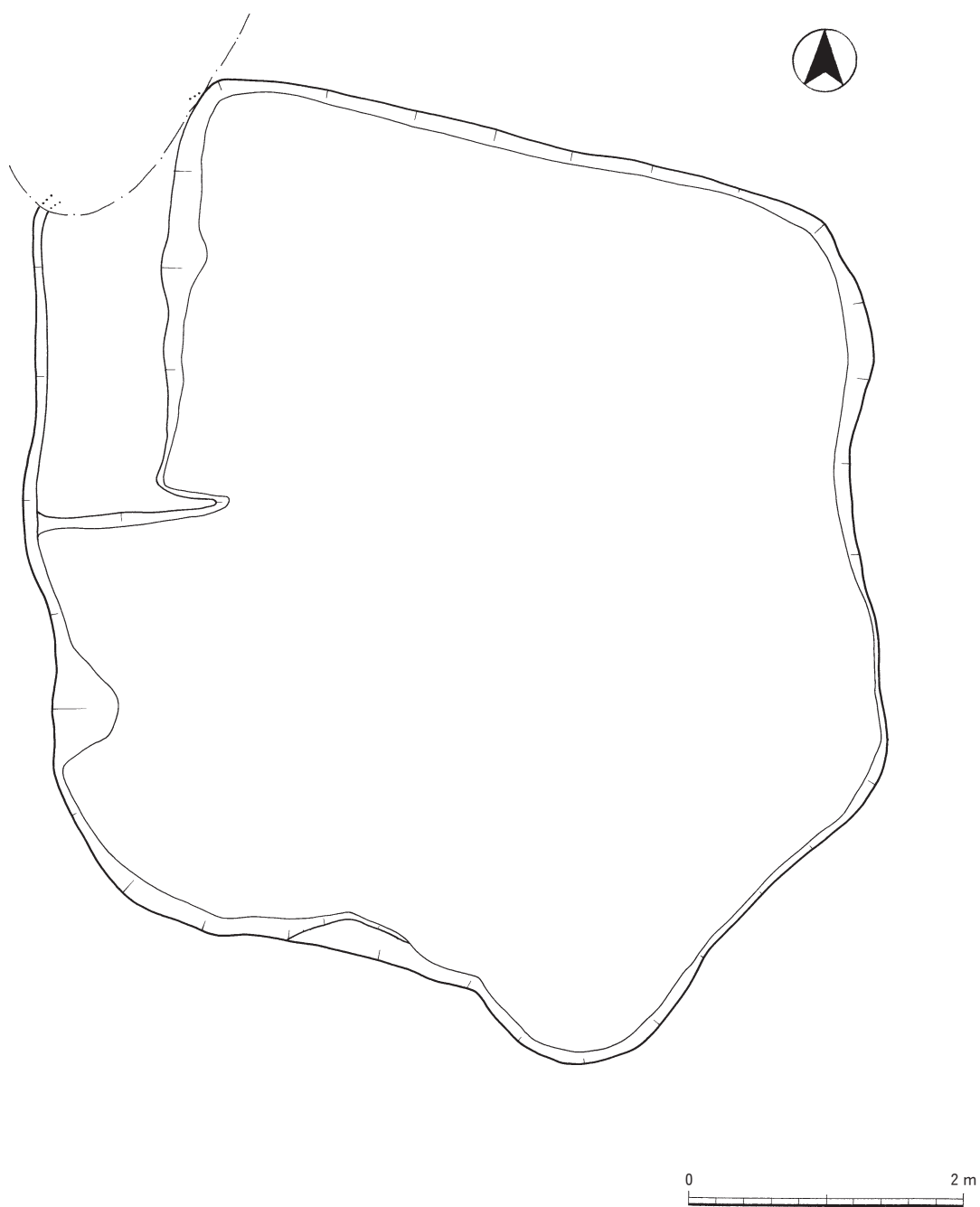
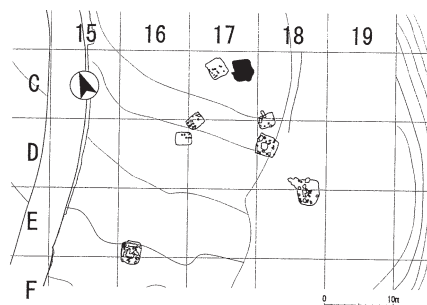
第147図 10号住居跡



第148図 11号住居跡

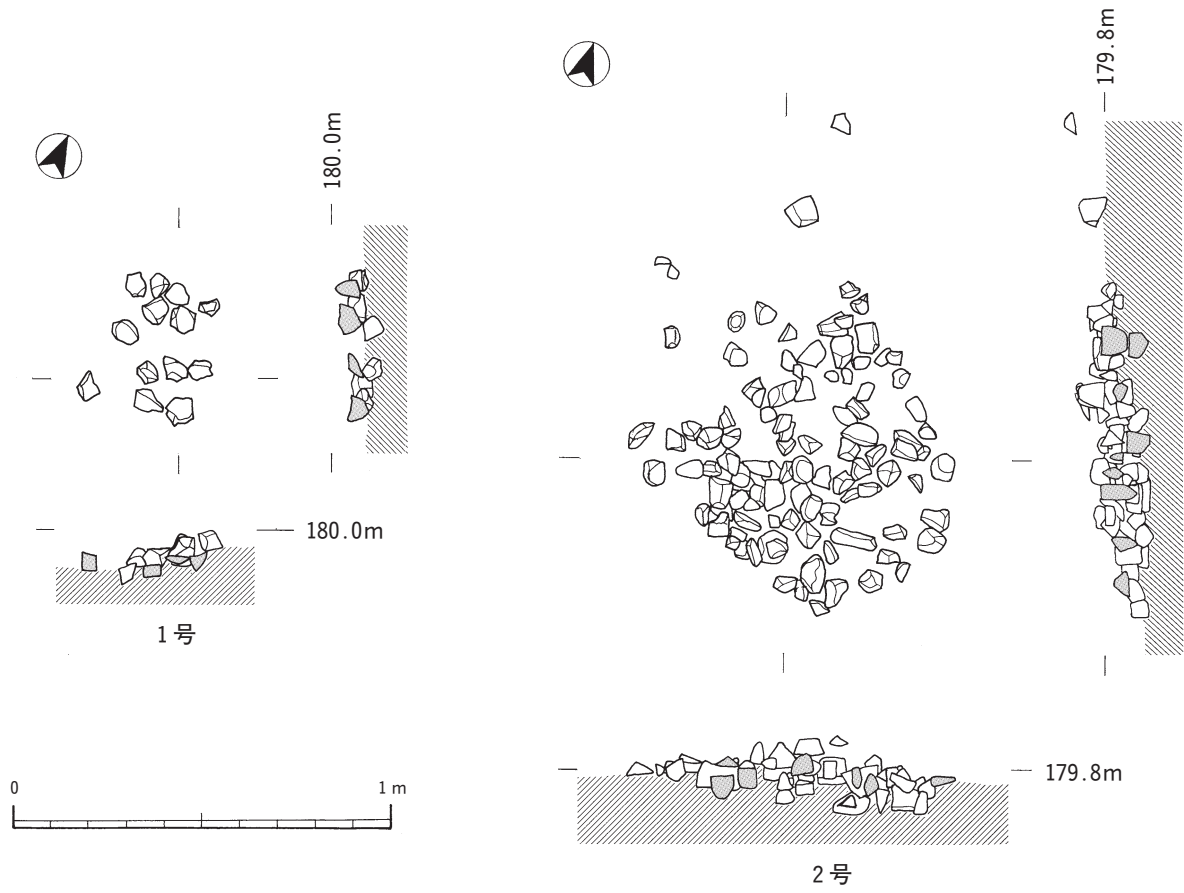


第149図 12号住居跡(1)

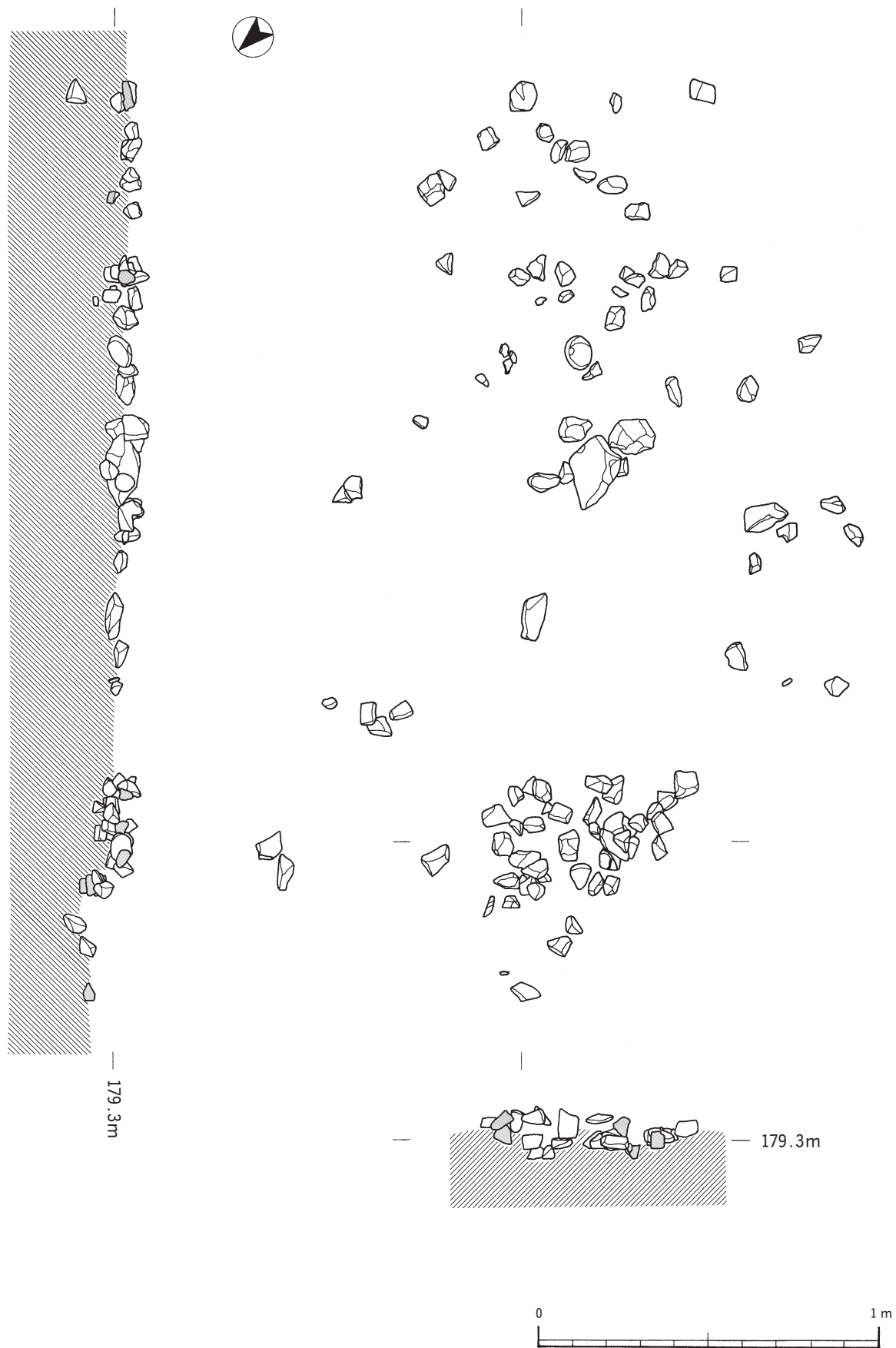


第150図 12号住居跡(2)

(2) 集石



第151図 集石 1・2号



第152図 集石3号

(3) 連穴土坑

前原遺跡のB地区からは、6基の連穴土坑が検出された。いずれもIV層（薩摩火山灰層）上面で検出されたもので、A地区と同様に比較的分散した状態でまとまりはない。ただ、いずれの連穴土坑も、小穴のほうが高線の低い位置にあるという点は、A地区とは反対で興味深い傾向である。

① 1号連穴土坑

1号はC16区で検出された。連穴土坑本体の長さは180cmを測る。B地区検出の連穴土坑の中では小型の部類にはいるが、検出面からの深さが45cmと深く、比較的安定した状態で検出されたものと考えられる。

② 2号連穴土坑

2号はG・H15区から検出された。連穴土坑本体の長さは218cmを測る。B地区検出の連穴土坑の中では大型の部類に入る。土坑の断面形を見ると全体的に袋状を呈していることが特徴的である。

埋土は1号と同様に黄色パミスを含む黒褐色土が主体となるが、底面近くに淡茶褐色の粘質土が厚さ数cmにわたってみられる。

③ 3号連穴土坑

3号はF16区から検出された。連穴土坑本体の長さは208cmで、B地区検出の連穴土坑の中では大型の部類に入る。土坑の断面形をみると、ブリッジの片側が大きく抉られていることがわかる。底面とブリッジ天井部分の高さが4cmと低いことも特徴的である。

④ 4号連穴土坑

4号はG16区で検出された。連穴土坑本体の長さが238cmと、B地区の中では最も大きな遺構である。ブリッジ部分の長さが約40cmと離れていること、大穴の長軸に対し小穴が若干ずれていること、土坑の断面形が袋状を呈することなどの特徴がみられる。

⑤ 5号連穴土坑

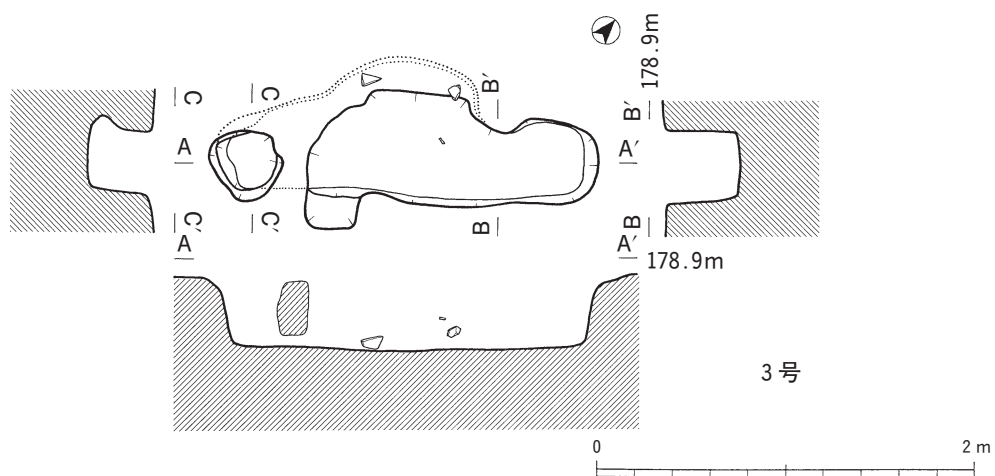
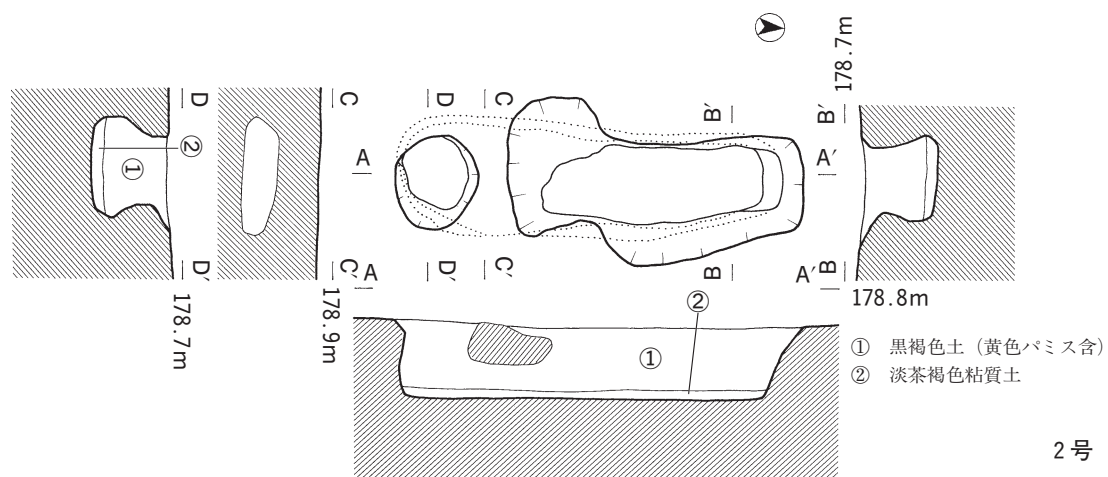
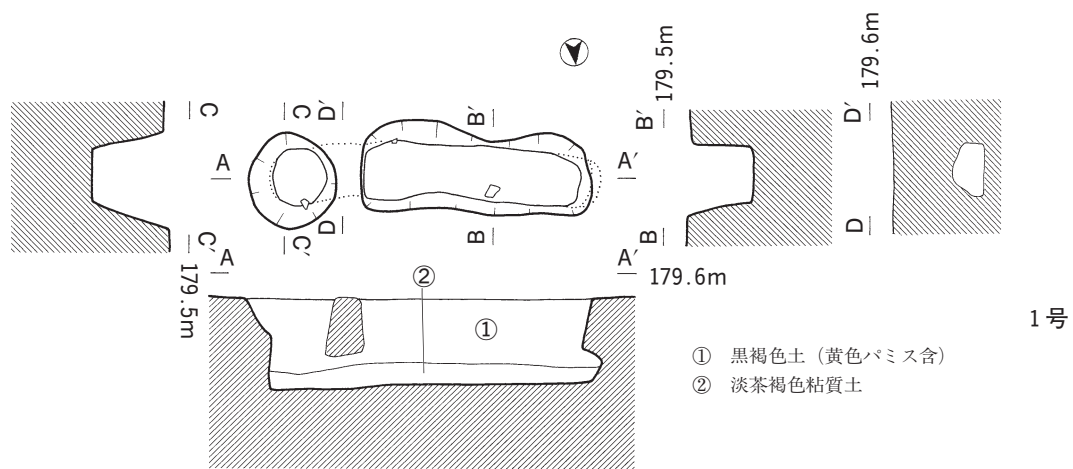
5号はG17区で検出された。連穴土坑本体の長さは182cmで、B地区の中では小型の部類に入る。ブリッジ部分の残存状況が若干悪いものの、1号と共に比較的安定した状態で検出されたものと考えられる。

⑥ 6号連穴土坑

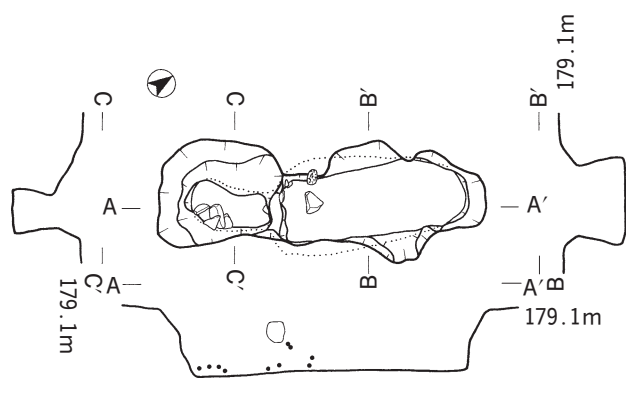
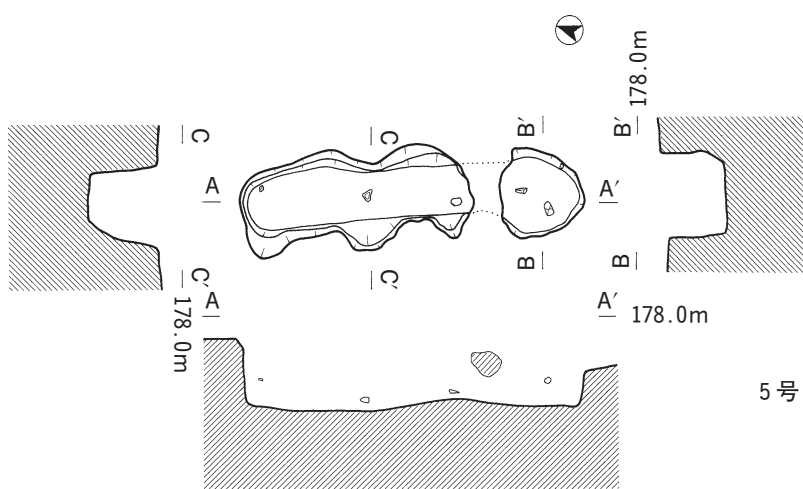
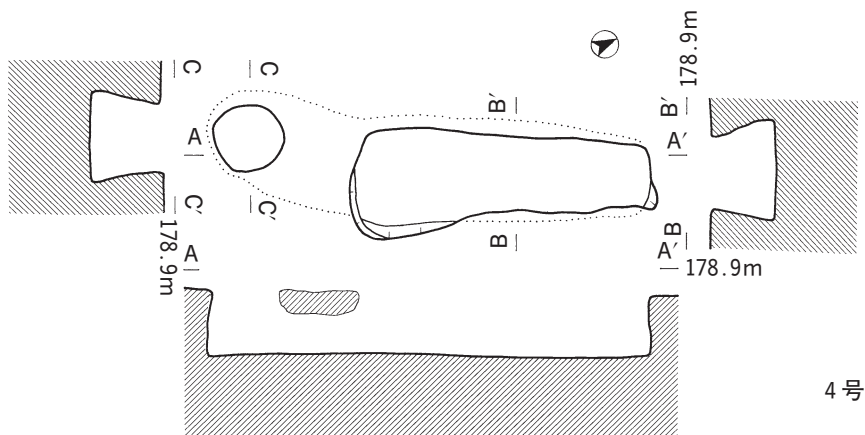
6号はE・F17区で検出された。連穴土坑本体の長さは172cmで、B地区の中で最も小さい遺構である。床面付近に焼石が数点見られることや、土坑の断面形が袋状を呈することなどの特徴がある。

第26表 B地区検出の連穴土坑

遺構名	検出区	検出面	A×B	H	C×D	h	備 考	旧番号	挿図
1号連穴土坑	C16	VI層上面	122×38	45	50×47	17		連2	154
2号連穴土坑	G・H15	VI層上面	156×58	39	48×44	18		連1	154
3号連穴土坑	F16	VI層上面	154×39	39	39×37	4		連3	154
4号連穴土坑	G16	VI層上面	153×38	36	37×35	20		連4	155
5号連穴土坑	G17	VI層上面	123×45	39	45×44	13		連5	155
6号連穴土坑	E・F17	VI層上面	108×56	54	62×57	14	床面付近に焼石数点	土44	155



第153図 連穴土坑(1)



第154図 連穴土坑(2)

(4) 土 坑

前原遺跡のB地区では、81基の土坑が検出された。これらの土坑は、竪穴住居跡の多くが検出されたB～H14～18区を中心に、E・F12区付近、B・C19区付近のおおむね3か所に集中して検出された。しかし、この集中域は、縄文時代早期前半期のものというよりも、後世（現代）の削平、具体的には町道建設や茶畑造成などの開発による結果である可能性が高い。遺構が少ない部分は、遺物も少ない。これは遺物包含層が削平されているためである。出土遺物や検出遺構が多い遺跡であるイメージが強いが、これでもかなりの情報が消失している可能性が高いということになる。このことは、その遺跡の原型復元において、重要な視点になろう。

81基の土坑は、形態からいくつかのタイプに分けられそうであるが、A地区と同様にタイプ別の分類はしていない。81基のもつ特徴を、いくつかのグループに整理しながら、概要を簡潔に紹介していきたい。

① 1～28号土坑，30号土坑，31号土坑

これらの土坑は、(隅丸)長方形の平面プランをベースとするものである。短軸÷長軸の数値が0.5以下、おおむね0.2～0.4に収まり、一見細長い感じのする平面形をもつ土坑である。特に1～4号、6号、7号、10号、16号、22号、27号は、0.2代の数値が示すとおり、かなり細長い感じを受ける土坑である。

1～8号、13号、22号、27号などは、連穴土坑のブリッジが崩落したものである可能性も考えられる土坑である。

このような土坑は、A地区でも多くみられた。特に1号は、ブリッジの名残ではないかと考えられる幅の狭い部分があることや、袋状を呈する土坑の断面形などから、連穴土坑であった可能性が高い。

13号と14号、17号と18号、19号と20号は重複している。また、4号、10号、16号も2基の土坑が重複している可能性がある。

12号、14号、21号、23号、25号、30号、31号などは、長軸が150cm未満と規模が小さい。連穴土坑的な機能も否定はできないが、別の要素を考えた方が良さそうである。特に31号は数値が0.19と最も低だけあって、溝状の形態をもつ土坑である。

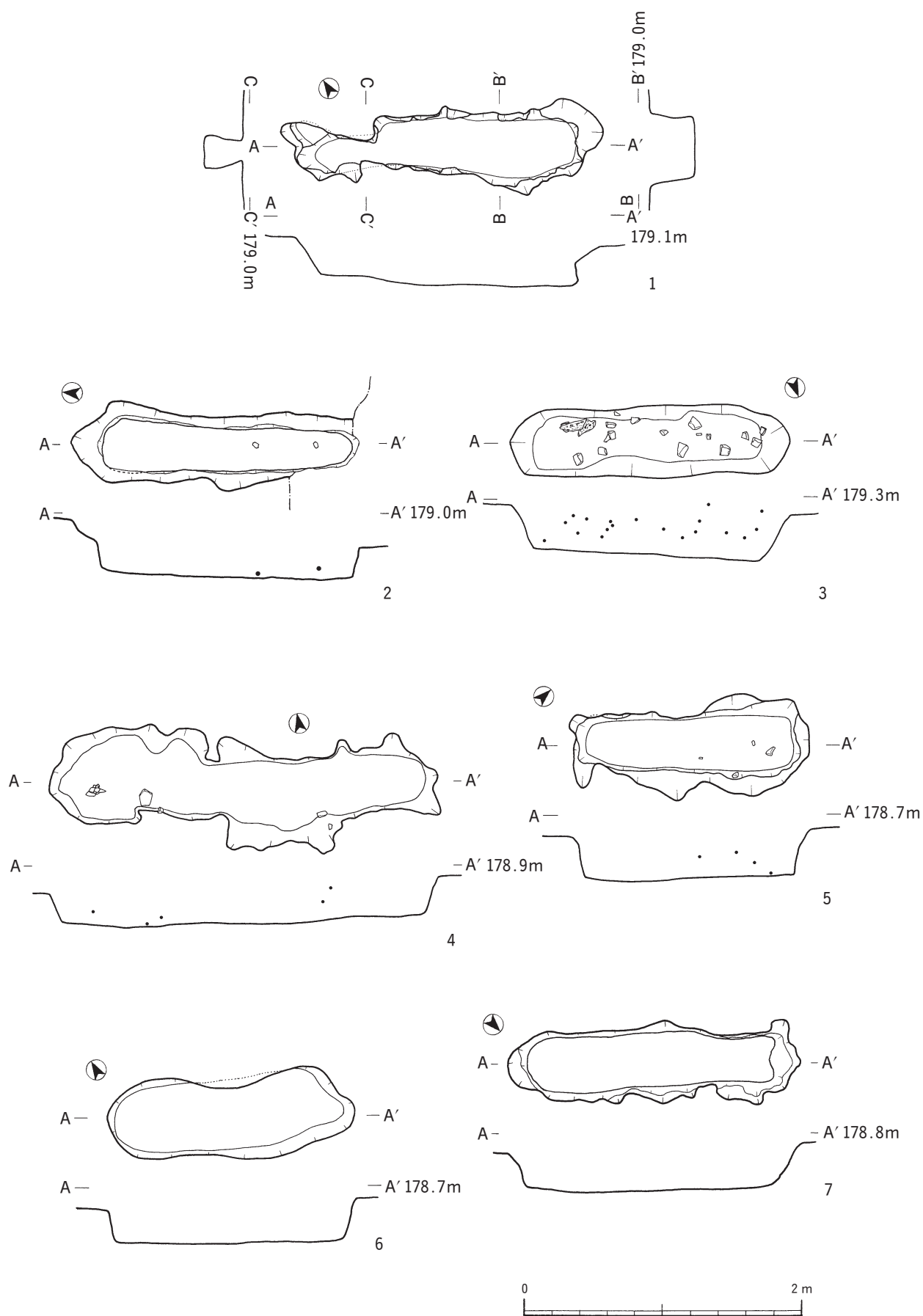
出土土器としては、2類(志風頭式)土器が3号、4号、7号、16号、25号から、そして3類(加栗山式)土器が7号、13号、22号、27号から出土している。特に25号からは角筒やレモン形の好資料が出土している。

② 29号土坑，32～56号土坑，59～61号土坑，64～66号土坑

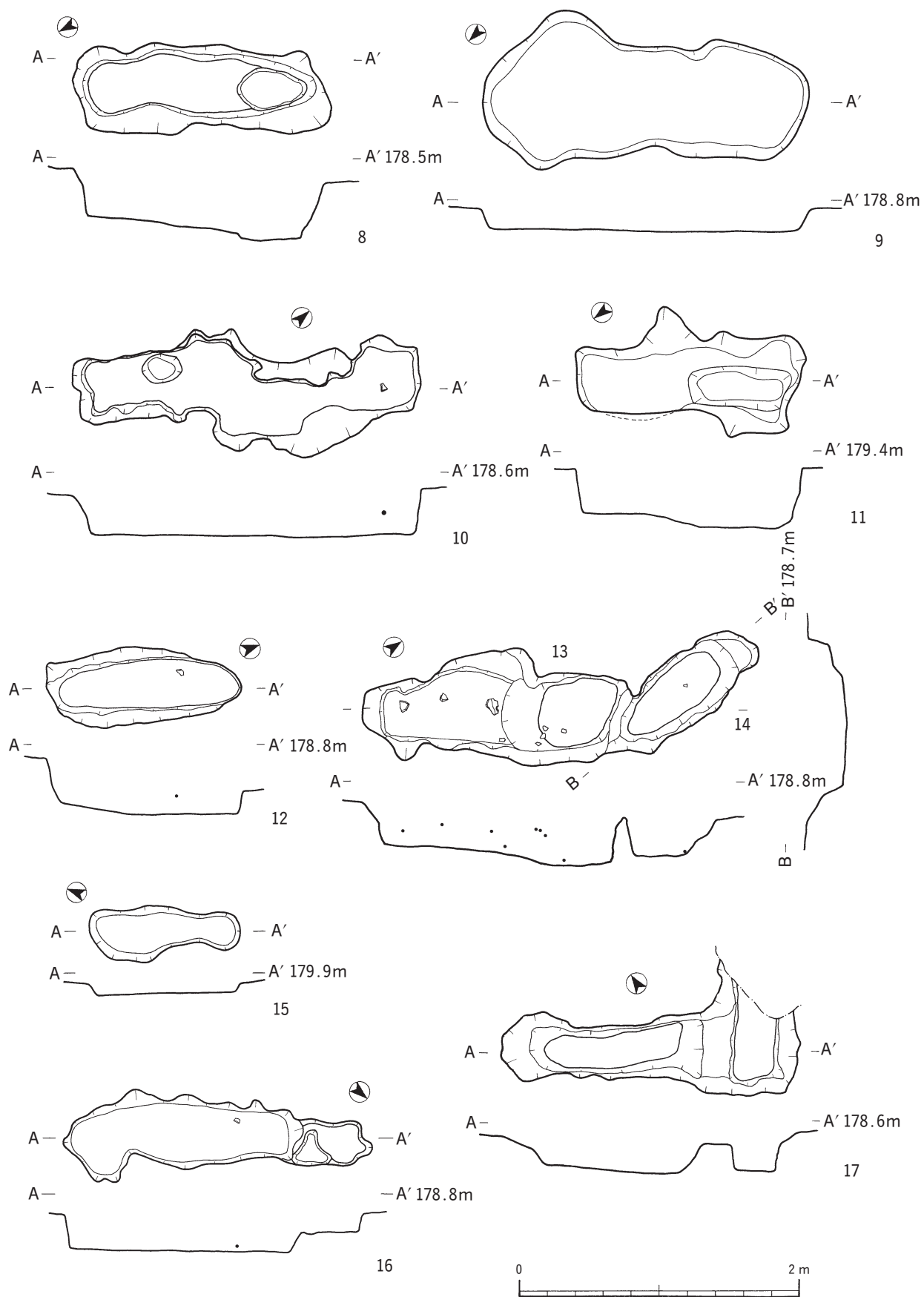
これらの土坑は、平面プランが(楕)円形あるいは隅丸(長)方形、小判形を呈するもので、検出された土坑の中では、比較的小型のものである。底面はおおむねフラットであるが、35号、37号、38号のように、段差をもつものもある。

32～35号は4基が重複し、土坑群を形成している。37号、42号、45号土坑は2基が重複している可能性もある。

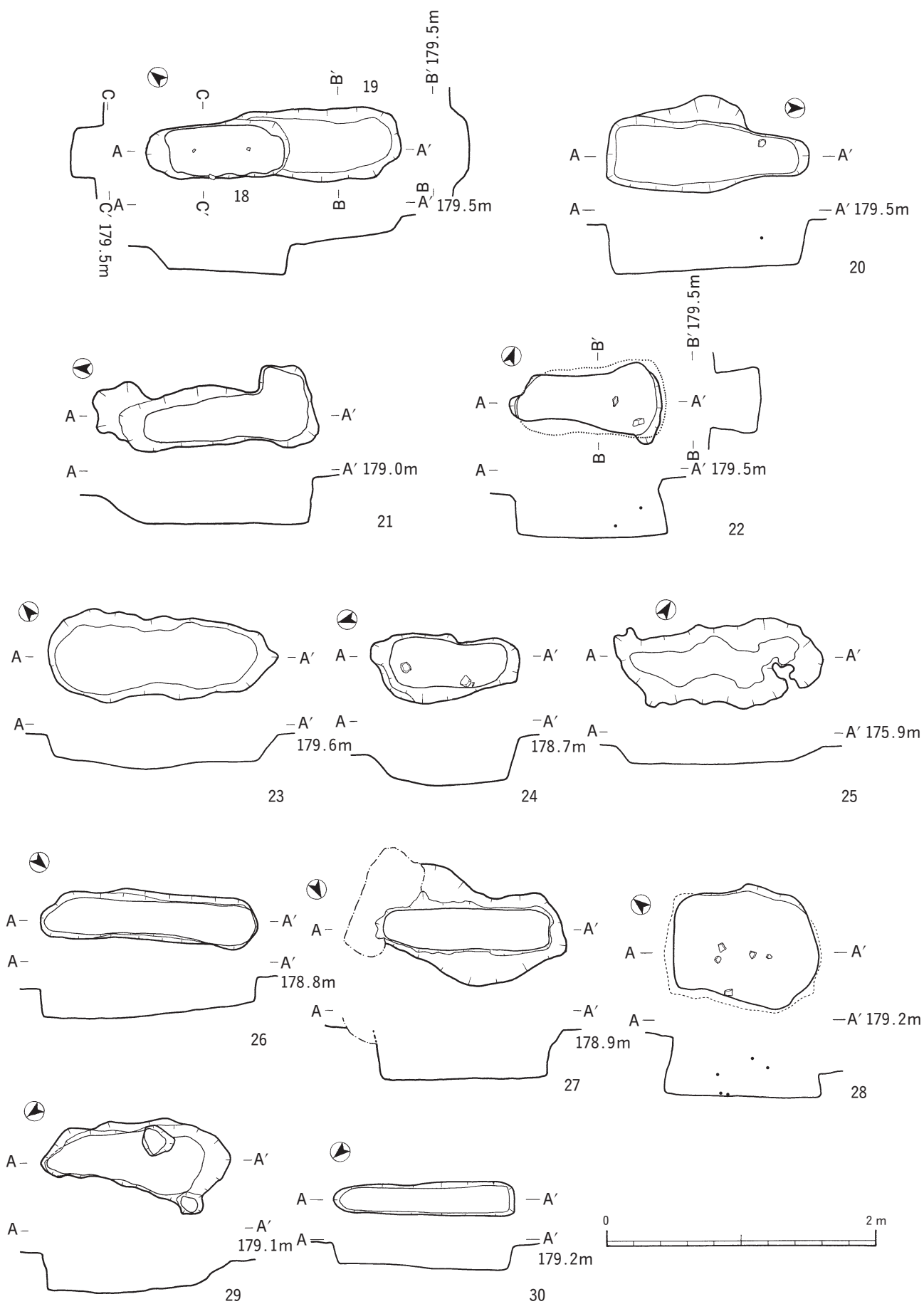
29号、36号、40号、41号、43号、44号、46～50号、54号、56号などは、土坑の壁面がほぼ垂直に立ち上がり、検出面からの深さも30～40cmを測ることから、同様な機能をもつグループである可能



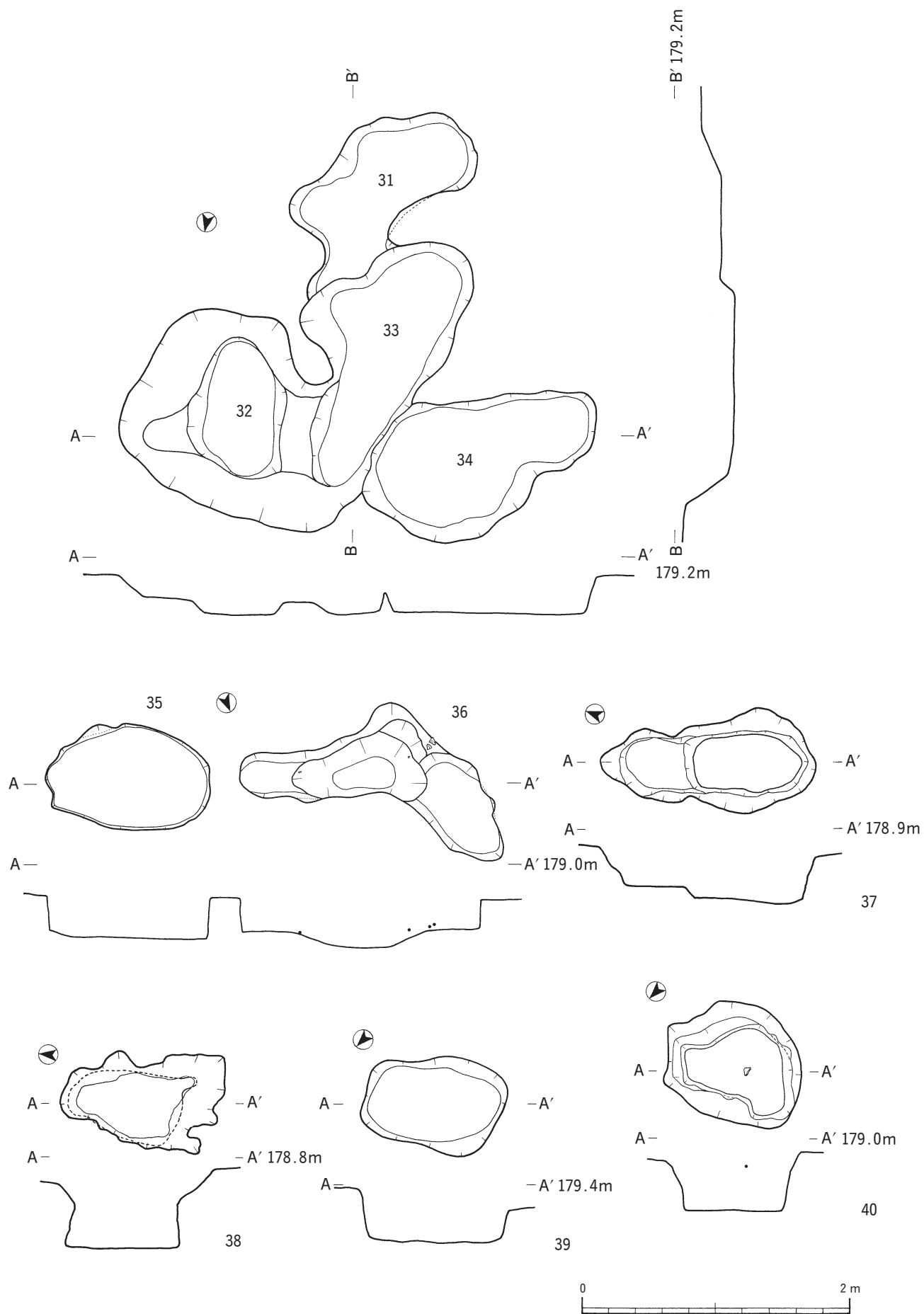
第155図 土坑(1)



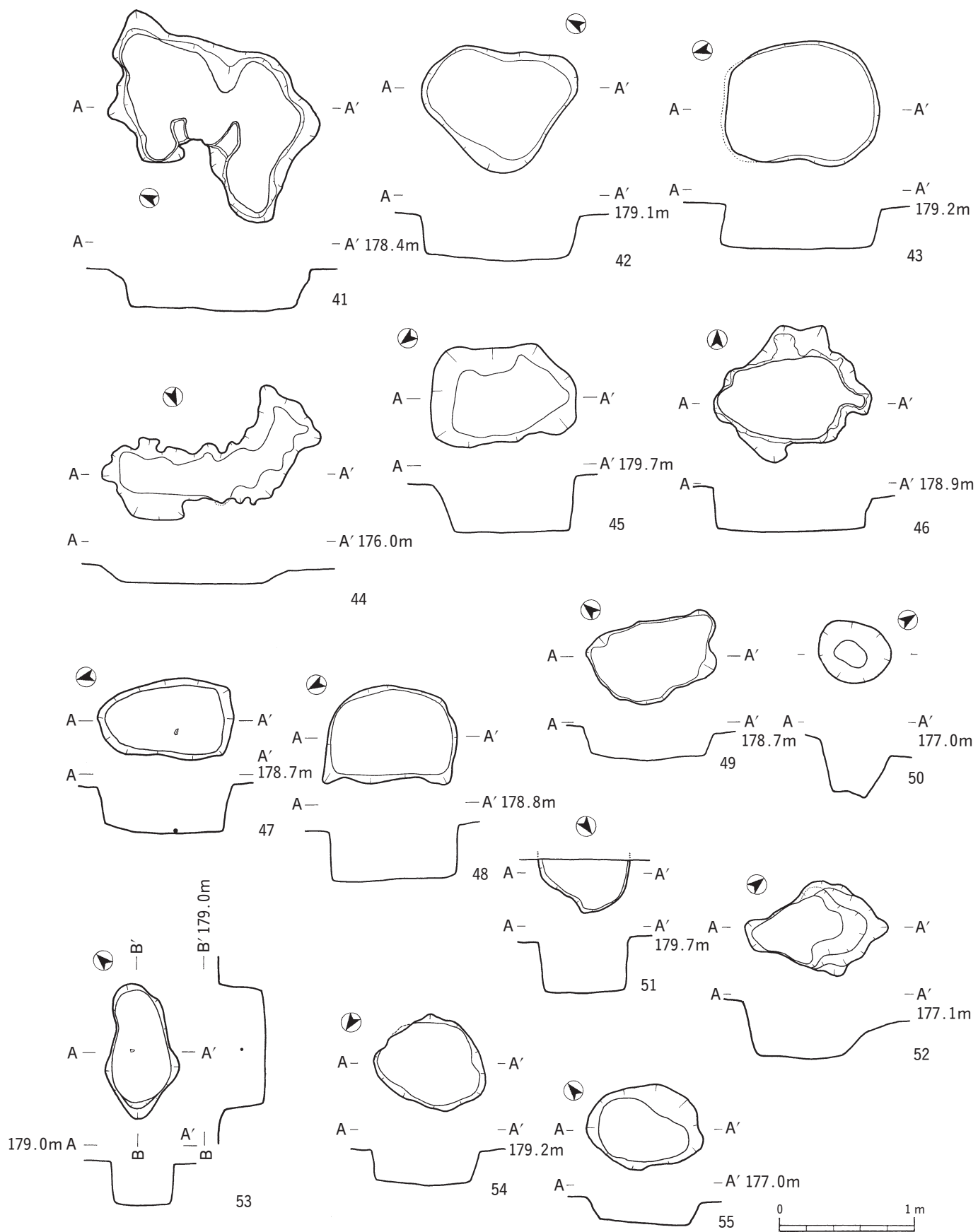
第156図 土坑(2)



第157図 土坑(3)



第158図 土坑(4)



第159図 土坑(5)

性を考えても良さそうである。

出土土器としては、2類（志風頭式）土器が37号、38号、39号、59号、64号から、そして3類（加栗山式）土器が41号、48号、49号から出土している。

③57号土坑、58号土坑、62号土坑、63号土坑、69～76号土坑

これらの土坑は、底面の中央あるいは壁際に小ピットをもつものである。62号、71号、72号、76号のように深いピットをもつものもある。A地区やC地区でもみられるタイプの土坑である。特にC地区で多く見られるもので、B地区から検出されたものも、多くはC地区に近いE・F11～13区付近に集中している。C地区で多く見られるのが、71号、72号のように、底面の小ピットだけでなく、土坑本体もかなりの深度をもつタイプのものである。

57号と58号は重複して検出されたが、さらに複数の土坑が絡んでいる可能性もある。いずれも底面に浅いピットがある。

61号と62号も土坑2基の重複である。ただし、底面ピットの有無で形態は大きく異なっている。63号は土坑2基の重複である可能性がある。69号も複数遺構の重複かも知れない。

出土土器としては、2類（志風頭式）土器が63号から、そして3類（加栗山式）土器が71号から出土しているが、いずれも小片である。

④67号土坑、68号土坑

これらの土坑は、底面と比較して開口部分が大きい土坑である。底面はいずれも長さに対して幅が狭い。幅の狭い底面部分を含む断面形をみると、いずれもすり鉢状を呈していることがわかる。2基は規模もほぼ似たようなものである。類似する土坑はA地区、C地区のいずれからも検出されていない。

⑤77～81号土坑

これらの土坑は、竪穴住居跡と重複して検出されたものである。

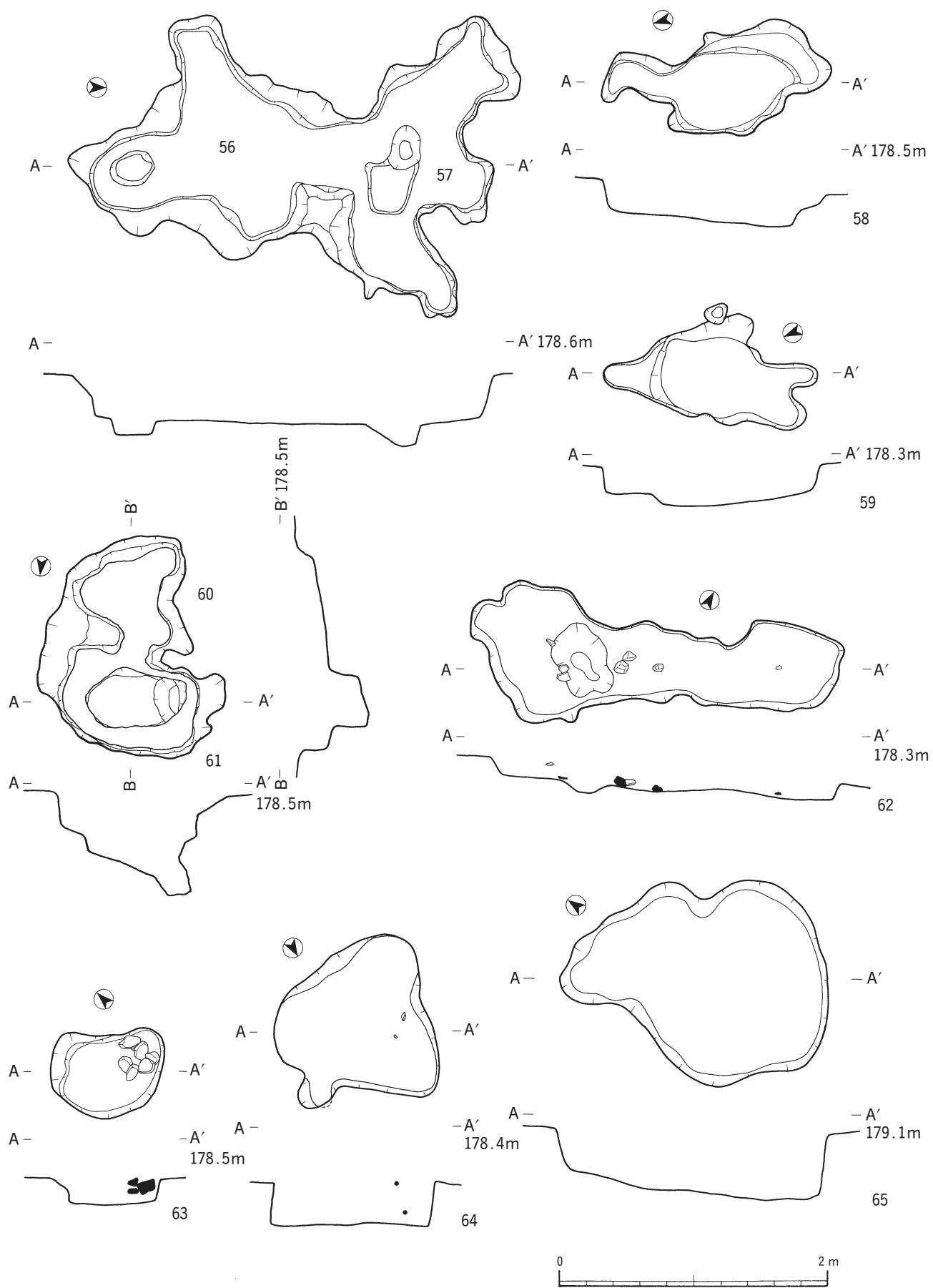
77号と78号は2号竪穴住居跡と重複して検出された。長軸÷短軸の数値がいずれも0.5以下で、①の土坑と同様なタイプということが出来る。2基はそれぞれ竪穴の南隅と西隅で検出された。これらの前後関係については不明である。

このような形で、竪穴住居跡と土坑、特に連穴土坑が重複して検出される例は多い。加栗山遺跡や上野原遺跡でも多くみられる状況である。多くは、廃棄された竪穴部の壁を利用してトンネルを掘り、いわゆる連穴土坑の形状を完成させたものという解釈がなされているものである。ということは、土坑の方が時間的に遅れるということになる。

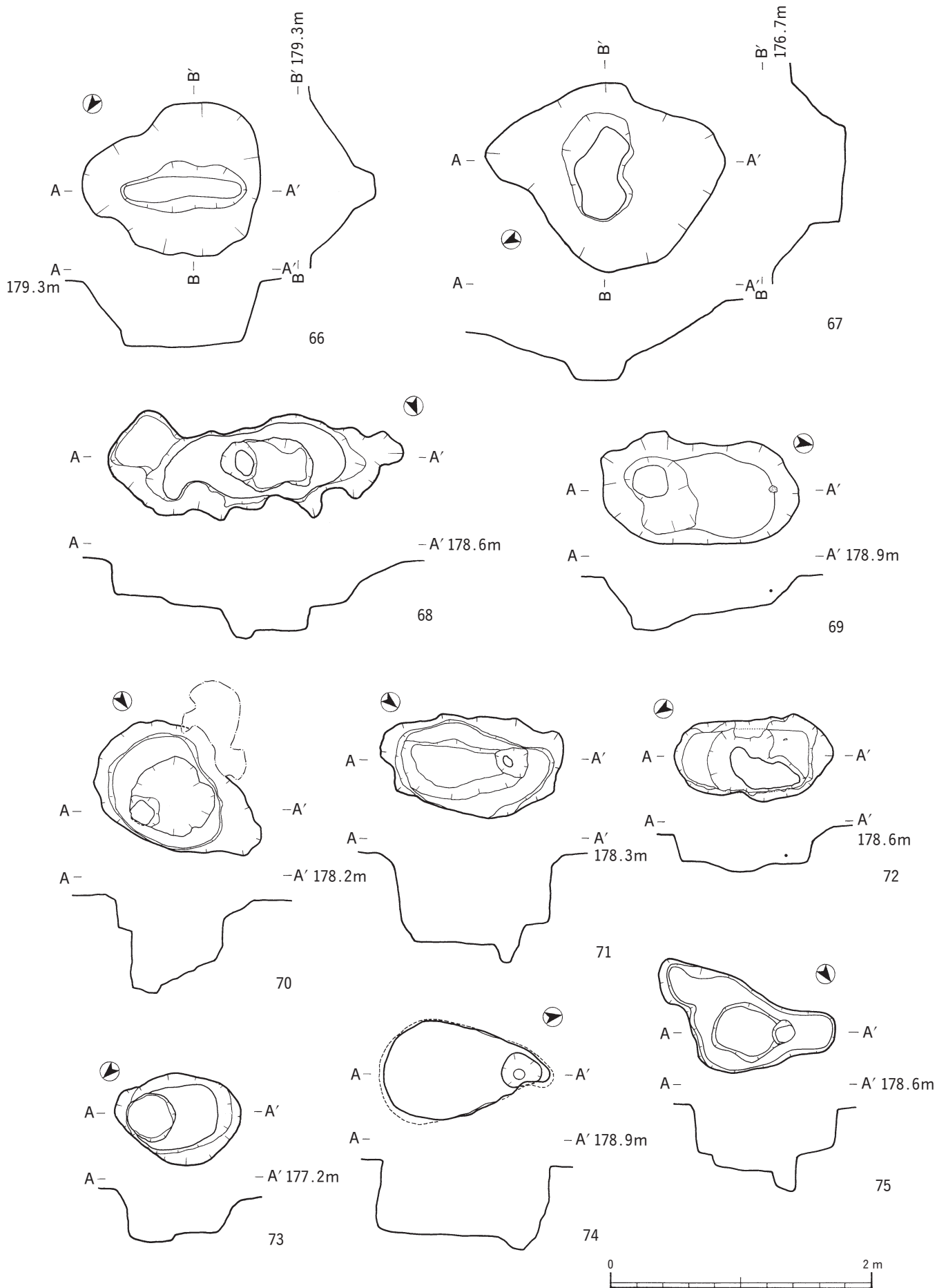
79号は3号竪穴住居跡と重複して検出されたものである。やはり、竪穴のコーナー部分（ここでは北隅）に構築されている。

以上の3基に対して、80号と81号は、方形を構成する一辺の中央部で重複している例である。80号は6号竪穴住居跡の北側の一辺中央部、81号は11号住居跡の南側の一辺中央部で検出されている。

これらは、埋土によって重複状況を探ることが困難な状態であるため、土坑の重複ではなく、竪穴の一部に突出部をもつタイプの遺構である可能性も否定できないのも事実である。竪穴の隅で検出される土坑の例も含め、様々な状況を想定することも必要であろう。



第160図 土坑(6)



第161図 土坑(7)

第27表 B地区検出の土坑（1）

遺 構 名	検出区	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物番号	備 考	旧番号	挿図 番号
1号土坑	F17	VI層上面	232	48	34		連穴土坑？	43	156
2号土坑	E15	VI層上面	(207)	52	33	729	一部欠	23	156
3号土坑	D16	VI層上面	202	52	30	713, 714		32	156
4号土坑	H14	VI層上面	280	78	30			16	156
5号土坑	G17	VI層上面	170	71	33			75	156
6号土坑	G・H16	VI層上面	177	52	26			76	156
7号土坑	H16	VI層上面	212	60	30	744		41	156
8号土坑	E12	VI層上面	185	64	34		床面に浅いピットあり	9	157
9号土坑	E18	VI層上面	242	110	14			77	157
10号土坑	E17	VI層上面	247	68	32		床面に浅いピットあり	45	157
11号土坑	D15, 16	VI層上面	160	74	38		床面に浅いピットあり	30	157
12号土坑	G14	VI層上面	139	55	27			13	157
13号土坑	G14	VI層上面	185	78	36	707～711	14号と重複	11	157
14号土坑	G14	VI層上面	116	46	26		13号と重複	11	157
15号土坑	B16	VI層上面	228	80	18			73	157
16号土坑	G・H16	VI層上面	240	63	25	735		39	157
17号土坑	E17	VI層上面	(142)	44	24		18号と重複	47	157
18号土坑	E17	VI層上面	(95)	64	28		17号と重複, 一部欠	47	157
19号土坑	C15	VI層上面	(106)	40	18		20号と重複	24	158
20号土坑	C15	VI層上面	(124)	54	18		19号と重複	24	158
21号土坑	C・D16	VI層上面	148	72	35			29	158
22号土坑	H15	VI層上面	163	44	28	715～717		17	158
23号土坑	C15	VI層上面	112	54	40			72	158
24号土坑	C16, 17	VI層上面	172	67	22			28	158
25号土坑	G16	VI層上面	110	52	29	736～743		40	158
26号土坑	H20	VI層上面	155	60	10			58	158
27号土坑	G15	VI層上面	162	36	24	718, 719		18	158
28号土坑	G15	VI層上面	(143)	67	36	722, 723	一部欠	20	158
29号土坑	E17	VI層上面	109	85	42			46	158
30号土坑	E・F15	VI層上面	140	57	28		床面にピットあり	22	158
31号土坑	D15, 16	VI層上面	134	25	17			31	158
32号土坑	E18	VI層上面	185	108	27		32～35号は重複	78	159
33号土坑	E18	VI層上面	240	108	33		32～35号は重複	78	159

第28表 B地区検出の土坑（2）

遺 構 名	検出区	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物番号	備 考	旧番号	挿図 番号
34号土坑	E18	VI層上面	140	82	12		32～35号は重複	78	159
35号土坑	E18	VI層上面	183	148	32		32～35号は重複	78	159
36号土坑	F16	VI層上面	122	79	30			35	159
37号土坑	F16	VI層上面	190	70	25	730～732	2 基重複？	34	159
38号土坑	G15, 16	VI層上面	160	77	32	720, 721		19	159
39号土坑	G14	VI層上面	127	64	54	712		12	159
40号土坑	E17	VI層上面	110	68	38			82	159
41号土坑	F15	VI層上面	112	90	42	724～727		21	159
42号土坑	F12	VI層上面	186	124	32		2 基重複？	5	160
43号土坑	E18	VI層上面	115	88	32			79	160
44号土坑	E17	VI層上面	117	85	28			81	160
45号土坑	H20	VI層上面	165	56	12			57	160
46号土坑	B15	VI層上面	108	70	40			26	160
47号土坑	F17	VI層上面	118	102	28			42	160
48号土坑	G16	VI層上面	102	61	37	734		38	160
49号土坑	G16	VI層上面	97	73	39	733		36	160
50号土坑	F17	VI層上面	98	62	20			83	160
51号土坑	C19	VI層上面	54	44	33			53	160
52号土坑	B15	VI層上面	68	40	40		一部欠	25	160
53号土坑	C19	VI層上面	118	64	34			54	160
54号土坑	F15, 16	VI層上面	102	54	33			33	160
55号土坑	E18	VI層上面	85	67	24			74	160
56号土坑	C19	VI層上面	88	65	17			56	160
57号土坑	E・F12	VI層上面	(200)	122	35		58号と重複，床面にピットあり	6	161
58号土坑	F12	VI層上面	204	116	35		57号と重複，床面にピットあり	6	161
59号土坑	G・H17	VI層上面	169	77	24	728		60	161
60号土坑	E11, 12	VI層上面	158	82	32			3	161
61号土坑	E12	VI層上面	88	82	24		62号と重複	8	161
62号土坑	E12	VI層上面	140	72	57		61号と重複，床面に深いピットあり	8	161
63号土坑	F18	VI層上面	276	102	14	749	床面に浅いピットあり	48	161
64号土坑	G17	VI層上面	88	62	20	751, 752		61	161
65号土坑	E11	VI層上面	127	115	34	705		4	161
66号土坑	E18	VI層上面	195	150	48			80	161

第29表 B地区検出の土坑（3）

遺構名	検出区	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物番号	備 考	旧番号	挿図 番号
67号土坑	D15	VI層上面	137	118	48			71	162
68号土坑	B19	VI層上面	184	137	44	750		59	162
69号土坑	E12	VI層上面	226	65	38		床面にピットあり	7	162
70号土坑	G・H14	VI層上面	150	76	38		床面に浅いピットあり	14	162
71号土坑	E10	VI層上面	140	90	78		床面に深いピットあり	1	162
72号土坑	F10	VI層上面	140	77	70		床面に深いピットあり	2	162
73号土坑	G16	VI層上面	121	63	30			37	162
74号土坑	C19, 20	VI層上面	96	70	32		床面に浅いピットあり	55	162
75号土坑	D・E13	VI層上面	127	75	56		床面にピットあり	10	162
76号土坑	F11	VI層上面	143	68	48	706	床面にピットあり	70	162
77号土坑	H16	VI層上面	185	88	37		2号住居跡と重複	—	138
78号土坑	H16	VI層上面	100	46	33		2号住居跡と重複、一部欠	—	138
79号土坑	D18	VI層上面	(180)	132	26		3号住居跡と重複、一部欠	—	139
80号土坑	C18	VI層上面	(114)	50	30		6号住居跡と重複、一部欠	—	143
81号土坑	H17	VI層上面	(48)	40	15		11号住居跡と重複、一部欠	—	148

（5）道 跡

B地区では、縄文時代早期前半期の道跡ではないかと考えられる溝状遺構ないし硬化面が2か所検出されている。

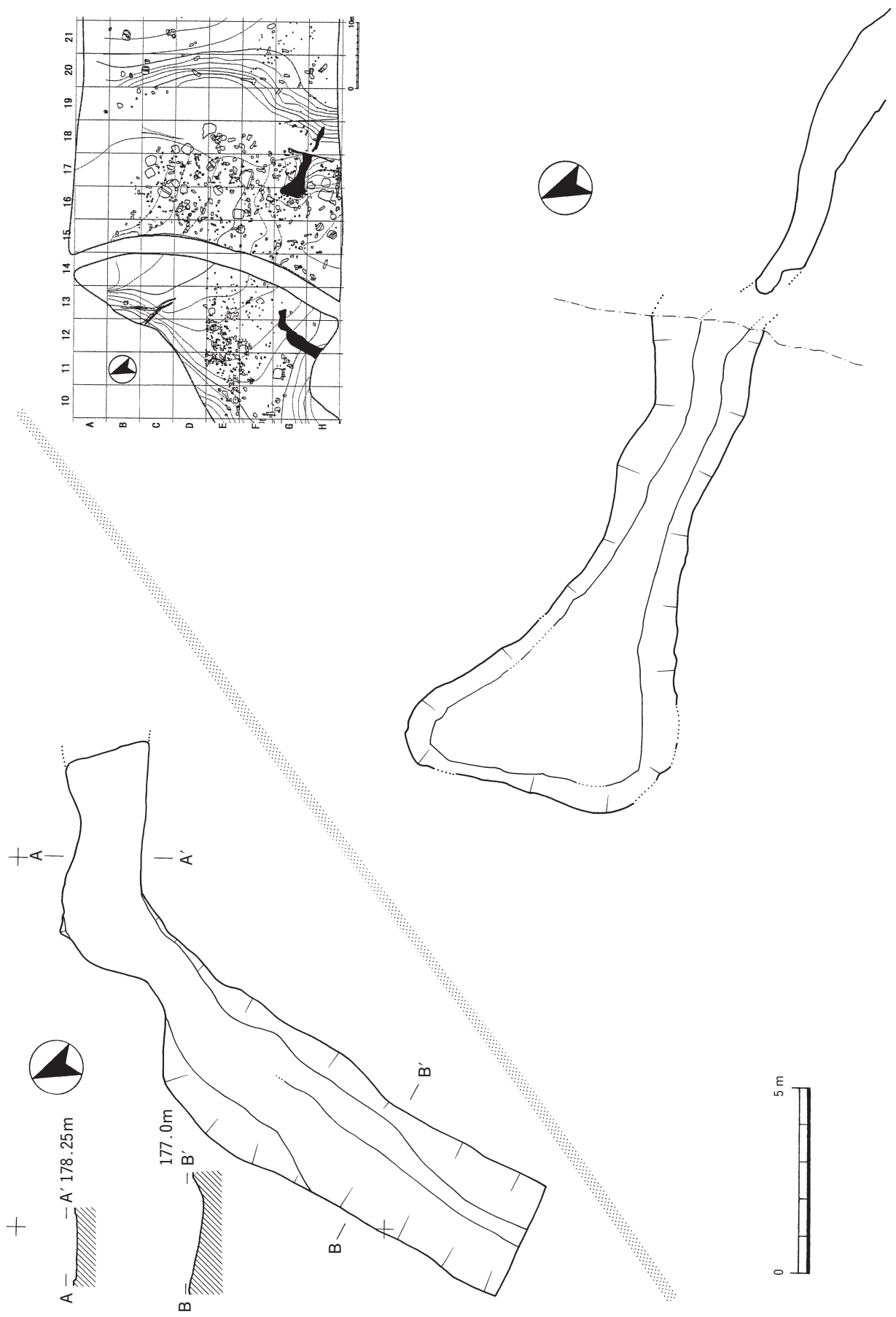
1つはG・H11～13区で検出されたもので、B地区とC地区の間にある南側の谷筋部分に位置している。約17mに渡って検出されたもので、台地上位で硬化面が屈曲し、あたかもB地区の集落への出入り口的な様相を呈している。

ここで硬化面と呼んでいる部分は、VI層の薩摩火山灰層中で最も硬い部分とダブっており、実際のところ、使用による硬化なのかどうかについての判断は微妙である。ただし、当時この面が露出していた可能性は高く、人工的なルート変更とも考えられる不自然な屈曲線形などから、道跡である可能性は高い。

もう1つは、G・H16～18区で検出されたもので、B地区とA地区の間にある谷部へと続く位置にある。20m強に渡って確認されている。

いずれも谷筋を利用したものと考えられ、溝状遺構的な形状を呈している。おそらく、頻繁な利用が土砂の堆積を妨げた（雨天時には雨水の流路となった）ため、溝状の筋をいっそう際立たせた結果ではないかと考えられる。

大規模な集落調査の際には、特に道跡の存在も意識すべきであるということを痛感させられた情報であった。



第162図 道跡

遺構内遺物

B地区の遺構内遺物については、集石に関連する遺物4点、土坑に関連する遺物76点、住居跡に関連する遺物67点、計147点を図化し、掲載する。

集石出土遺物

3号集石から出土した土器片4点を図化した。701～704は、いずれも3類に分類される角筒の口縁部から胴部にかけての破片である。701は、口縁部直下に楔形貼付文を3段貼り付ける。

土坑内出土遺物

土坑内の出土遺物については、土器片48点を図化した。

65号土坑

65号土坑からは、1点を図化する。705は、3類角筒の胴部片である。貝殻刺突文を密に施す。

75号土坑

75号土坑からは、1点を図化する。706は、3類角筒の底部片である。縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をV字状に重ねる。底部外面はナデで調整される。

13号土坑

13号土坑からは、5点を図化する。707は、土器型式不明の円筒の底部片である。708、709は、3類角筒の胴部片である。711は、3類円筒の口縁部片である。縦位の貝殻条痕文を施し、肋8条の縦位の貝殻刺突文をやや断続的に重ねる。口縁部近くには補修孔が観察できる。710は、2類角筒の胴部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、断続的な貝殻刺突を押し引いて施す。

39号土坑

39号土坑から出土した遺物は、712の2類角筒の胴部片1点を図化する。

4号土坑

4号土坑からは、2点を図化する。713は、2類レモン形の胴部下部片である。714は、2類角筒の胴部下部片である。胴部には、縦位の流水文を面に対して3条施すものと思われる。

22号土坑

22号土坑からは、3点を図化する。いずれも3類円筒の胴部片である。715、716は、縦位の二重貝殻刺突文の間に斜位の貝殻刺突文をX字状に施すものと思われる。

27号土坑

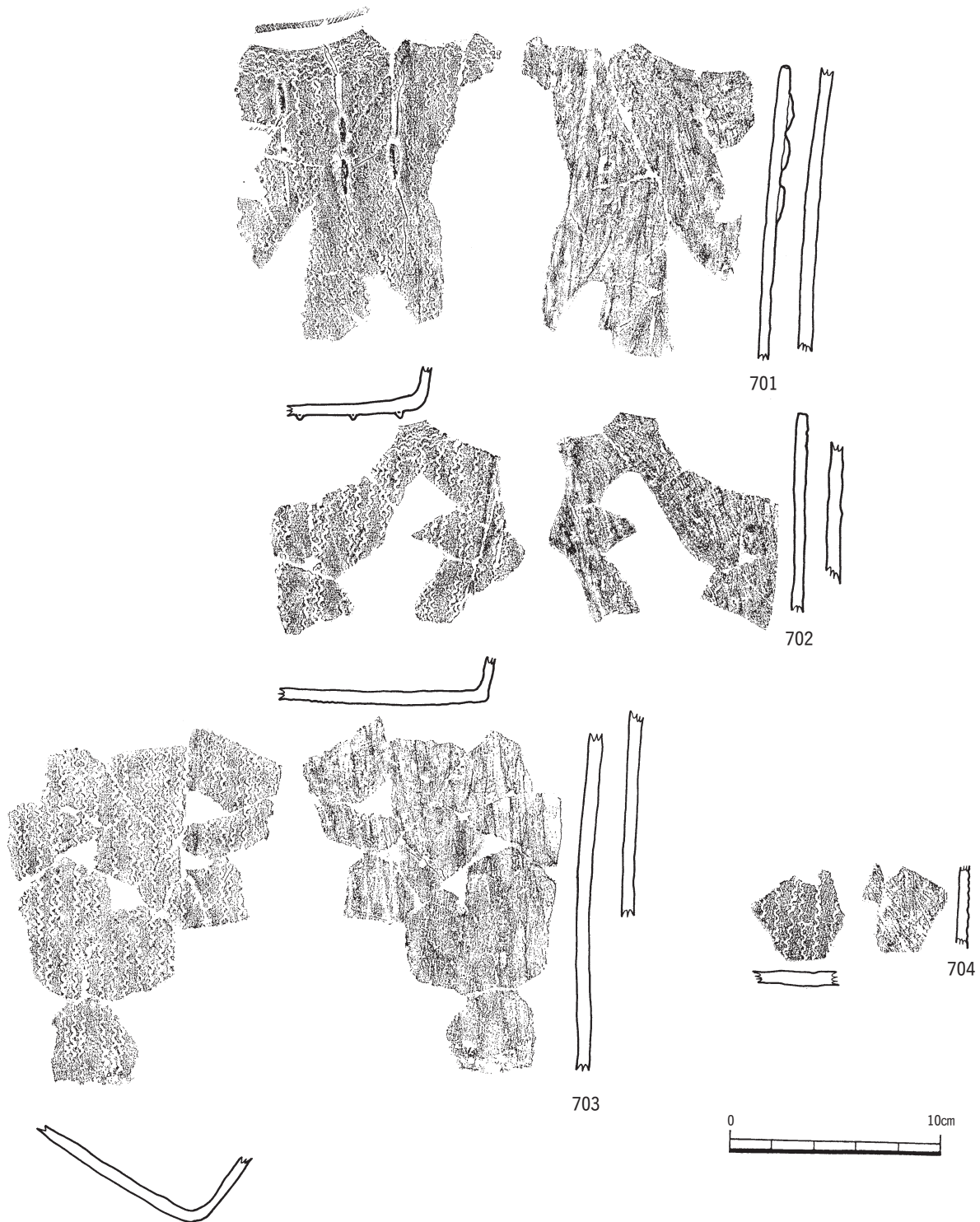
27号土坑からは、2点を図化する。718は、2類角筒の胴部片である。縦位2本の直線状流水文を施し、斜位2本の直線状流水文を重ねる。719は、3類角筒の口縁部片である。

38号土坑

38号土坑からは、2点を図化する。720は、2類角筒の底部片である。721は、2類角筒の口縁から胴部の破片である。胴部は、縦位1本の流水文を施し、斜位の貝殻刺突文をV字状に重ねる。

28号土坑

28号土坑からは、2点を図化する。722は、3類の可能性が高い円筒の口縁部片である。723は、2類角筒の胴部片である。斜位の貝殻条痕文に斜位の貝殻刺突文をV字状に施し、間に断続的なハ



第165図 遺構遺物(1)

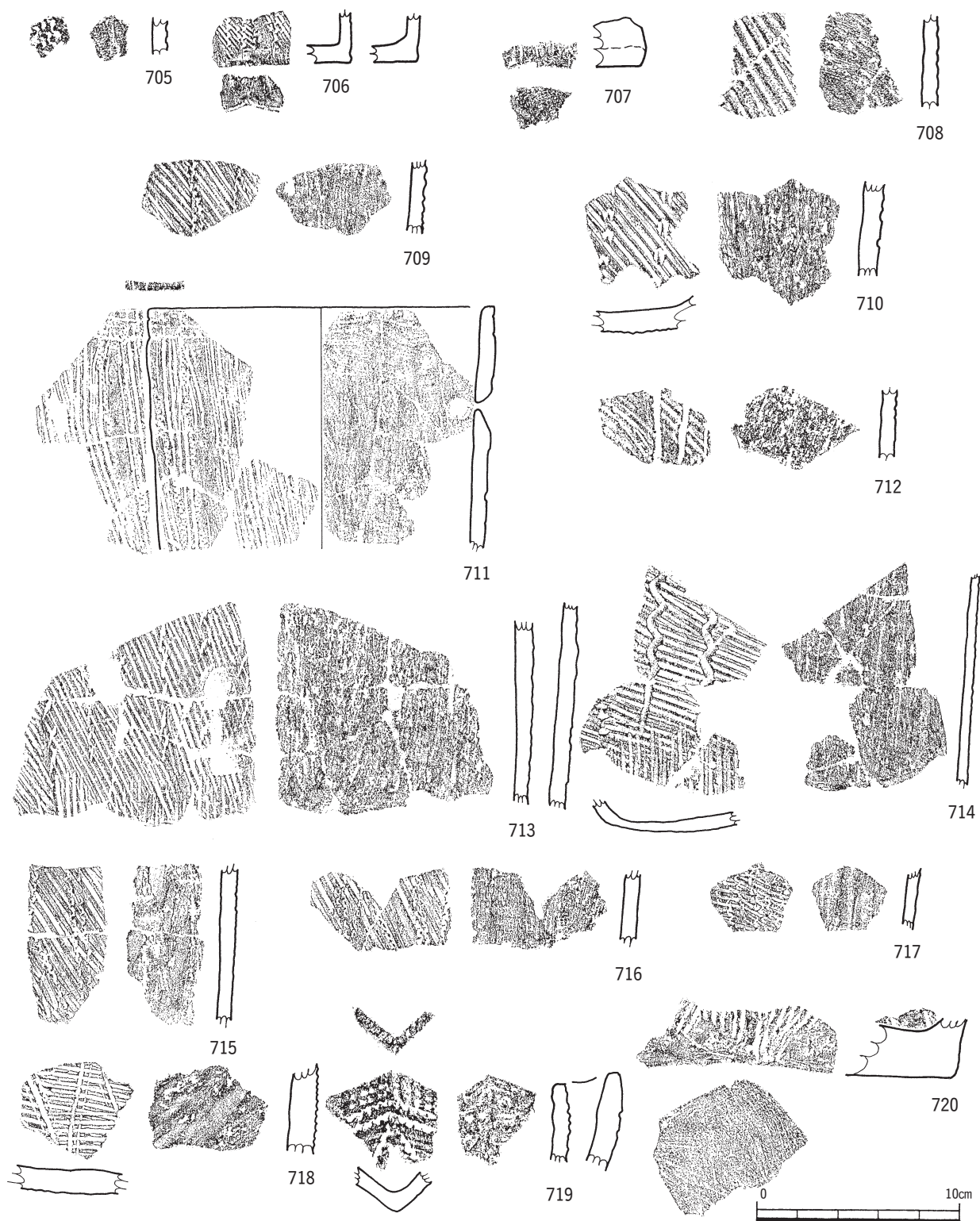
字状の貝殻刺突を上から下に施す。

41号土坑

41号土坑からは、4点を図化する。724～726は、3類角筒の口縁部もしくは胴部片である。725の焼成は粗い。727は、2類角筒の胴部片である。

59号土坑

59号土坑からは、728の2類角筒の胴部片1点を図化する。



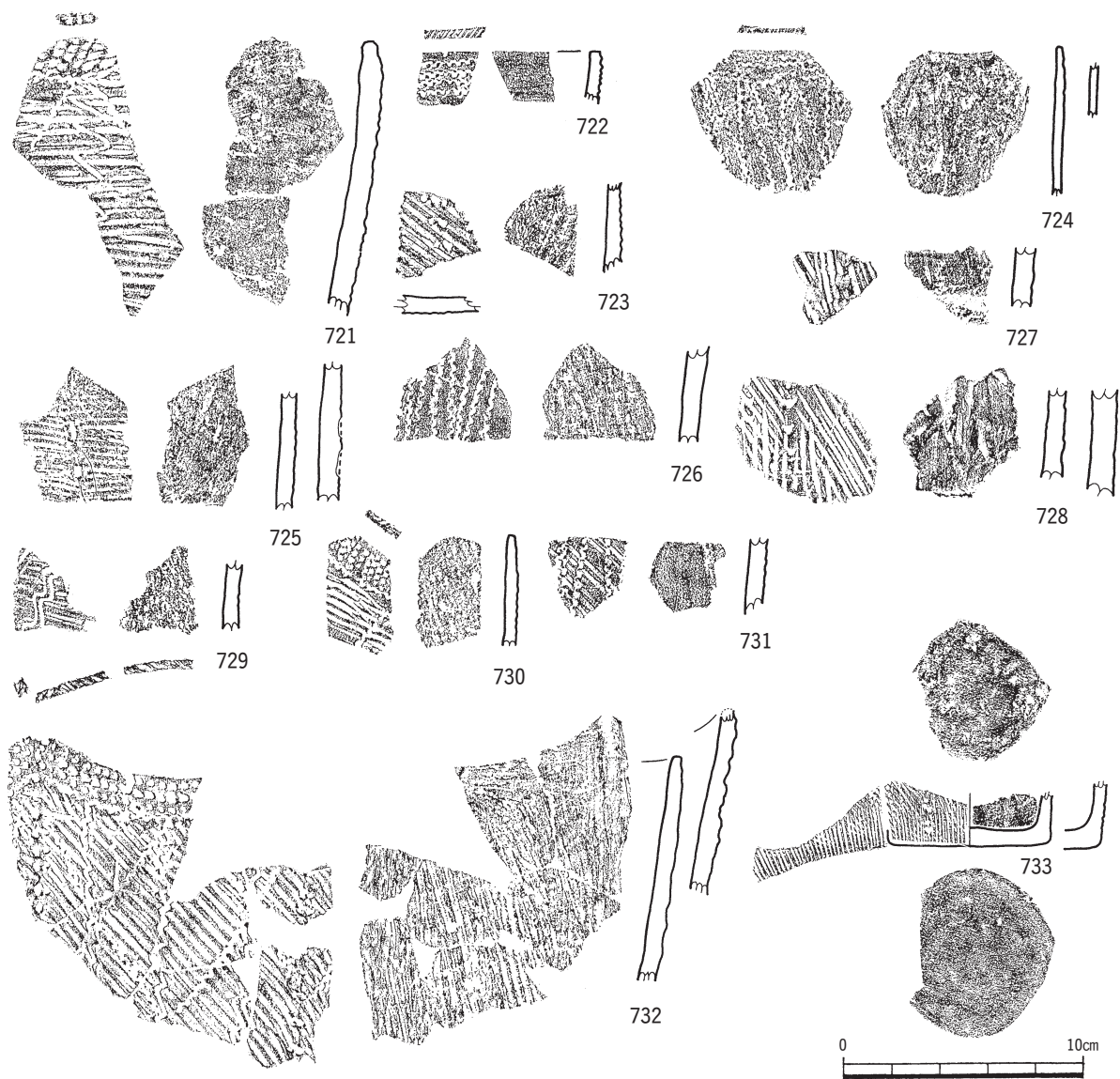
第166図 遺構遺物(2)

3号土坑

3号土坑からは、729の2類角筒の胴部片1点を図化する。

37号土坑

37号土坑からは、3点を図化する。730は、3類角筒の口縁部片、731は、同じく胴部片である。



第167図 遺構遺物(3)

732は、2類の角筒の口縁部から胴部の破片である。

49号土坑

49号土坑からは、733の3類のレモン形の底部片1点を図化する。

48号土坑

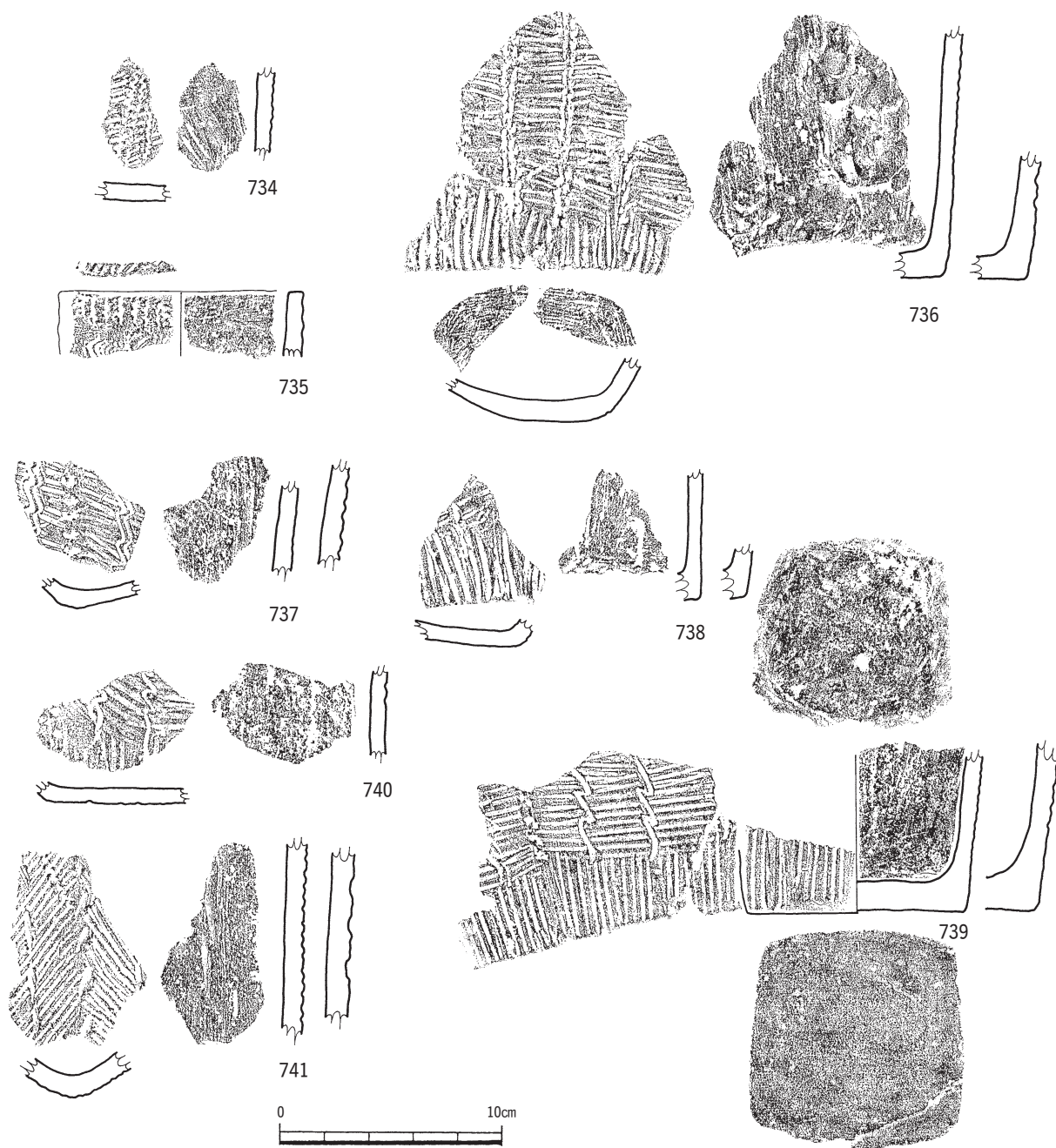
48号土坑からは、1点を図化する。734は、3類の角筒の胴部上部片である。斜位の貝殻条痕文を施す。上部に横位の貝殻刺突文の一部が確認できる。

16号土坑

16号土坑からは、735の2類円筒の口縁部片1点を図化する。胴部に縦位2本の流水文を施す。

25号土坑

25号土坑からは、8点を図化する。736は、3類レモン形の胴～底部片である。胴部は、縦位の二重貝殻刺突文を規則的に施す。737～743は、いずれも2類角筒の胴部もしくは底部片である。737～740, 743は、胴部に流水文を施すが、740では底部に近づくにつれ直線状を呈する。741は、断続的な斜位の貝殻刺突を少し押し引いて施す。742は、断続的な短沈線文を上から下に施し、さ



第168図 遺構遺物(4)

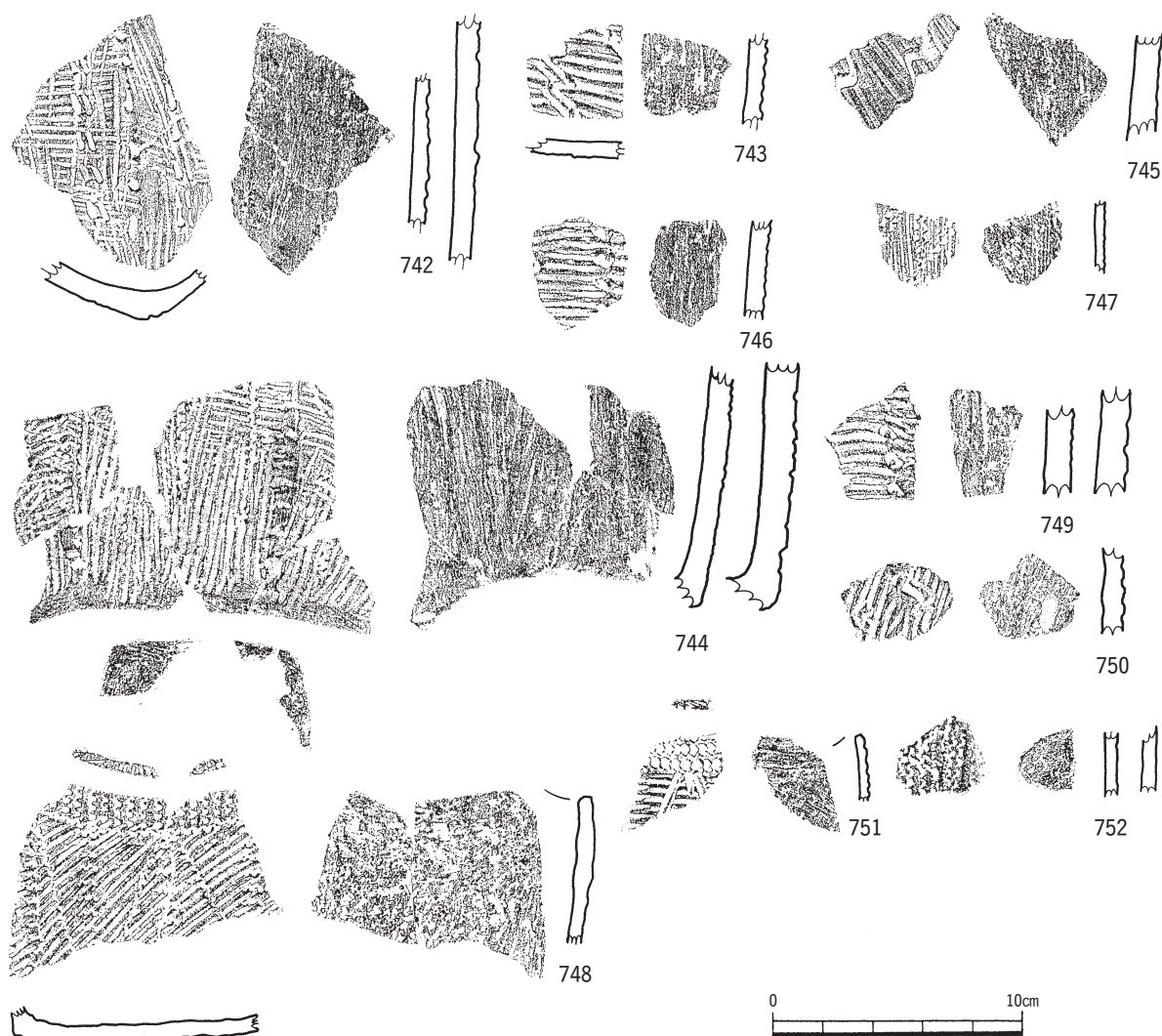
らにその間には浅い縦位の沈線を断続的に施す。全体的に施文は粗い印象を受ける。

7号土坑

7号土坑からは、3点を図化する。744は、3類角筒の胴部から底部の破片である。745、746は、2類角筒の胴部片である。胴部には、縦位の流水文が施される。

旧44号土坑

旧44号土坑からは、2点を図化する。747は、3類角筒の胴部片である。748は、2類角筒の口縁部片である。斜位の貝殻刺突文をV字状あるいはX字状に並べて2組配し、その交点を通るように断続的な貝殻刺突を面に対して3列施す。胎土に、1mm大の白色砂粒と金色の雲母片を多量に含む。



第169図 遺構遺物(5)

63号土坑

63号土坑からは、749の2類角筒の胴部片1点を図化する。

68号土坑

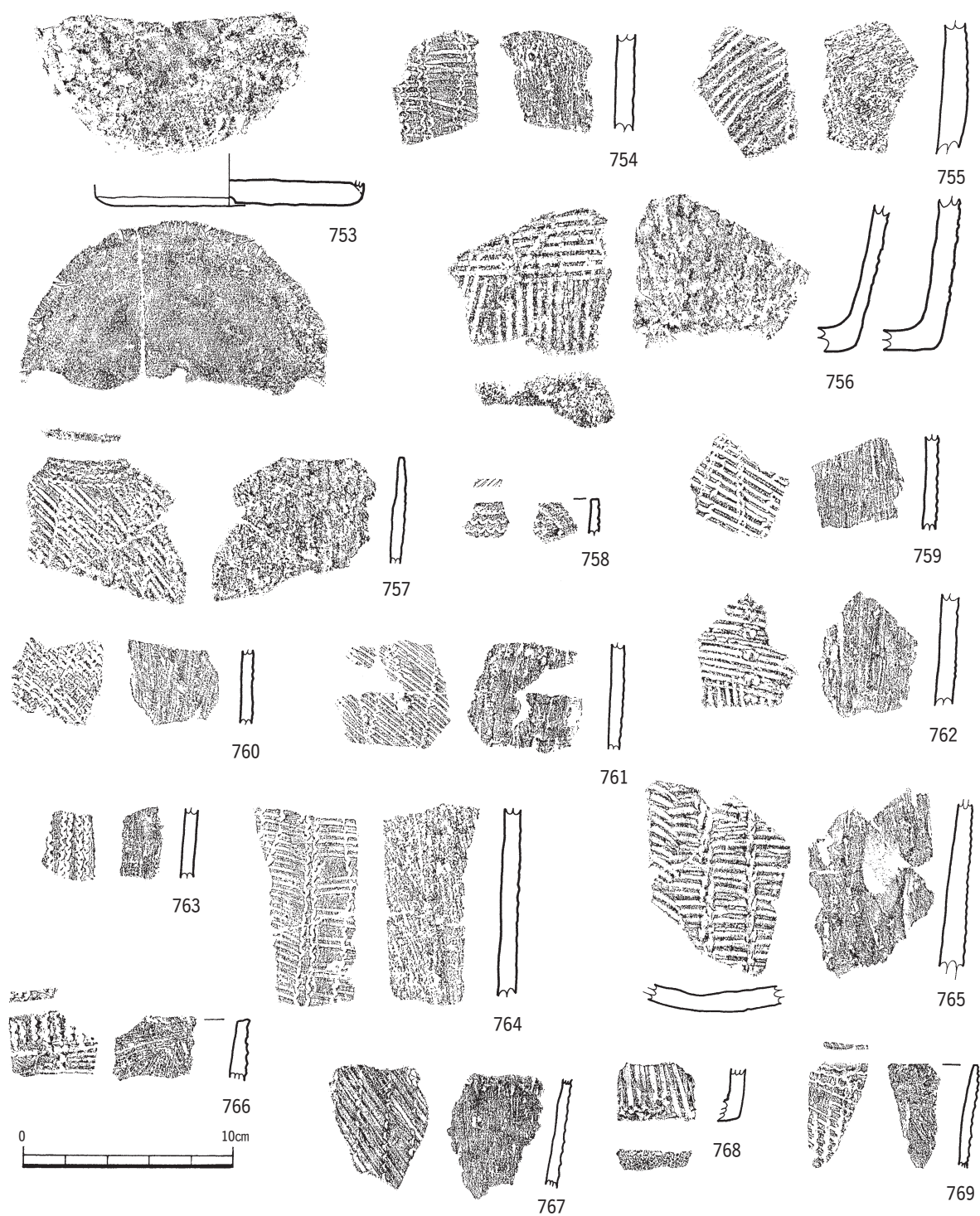
68号土坑からは、750の2類角筒の胴部片1点を図化する。

64号土坑

64号土坑からは、2点を図化する。751は、2類角筒の口縁部片である。断続的な斜位の貝殻刺突を上から下に施し、直線状の流水文をV字状に施す。752は、3類角筒の口縁部片である。縦位の貝殻刺突文を密に施し、楔形貼付文を2段貼り付ける。貼付文の左右には、刺突が付される。

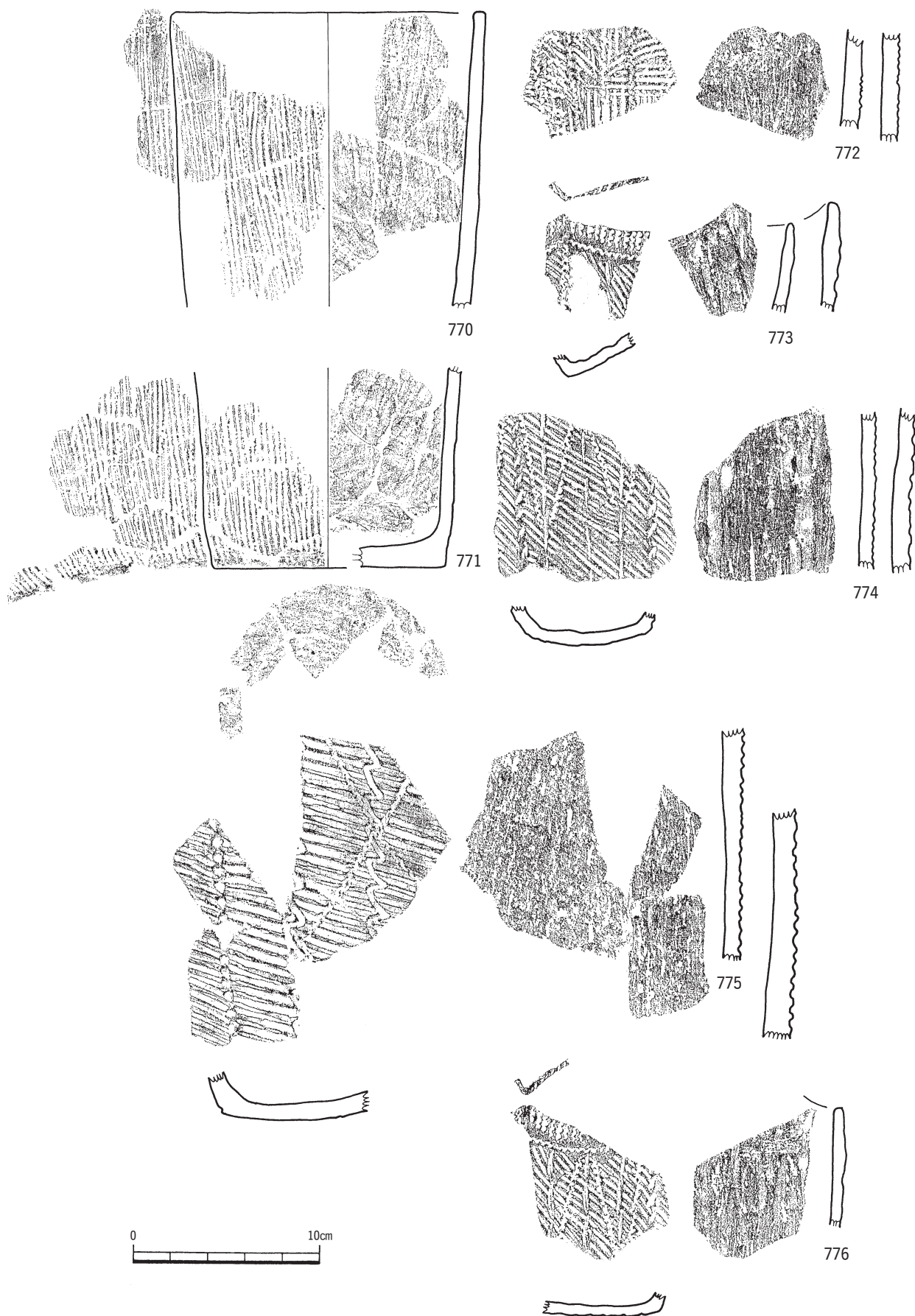
土坑周辺の遺物

次の28点は、土坑近辺から出土した遺物である。土坑内遺物の可能性もあるので、掲載する。753は、土器型式不明の円筒の底部片である。底部の立ち上がり部分は摩耗している。754は、3類角筒の胴部片である。胴部は、縦位の二重貝殻刺突文を施すが、一部に施文具の異なる二重貝殻刺突文が確認できる。756は、3類円筒の胴部片である。757は、3類角筒の底部片である。胴部に炭



第170図 遺構遺物(6)

化物が付着している。758は、焼成の粗い3類角筒の口縁部片である。759は、土器型式不明の角筒の口縁部片である。760は、3類角筒の胴部片である。斜位の貝殻条痕文を施し、斜位の二重貝殻刺突文をV字状に重ね、間に断続的な縦位の貝殻刺突を上から下に施す。761、762、764は、3類角筒の胴部片である。763は、2類角筒の胴部から底部の破片である。765は、3類角筒の胴部片である。二重貝殻刺突文を施し、隣に斜位の貝殻刺突文を鋸歯状に配する。766は、2類角筒の胴部片である。767は、3類円筒の胴部片である。768は、3類と思われる円筒の底部片である。最下部



第171図 遺構遺物(7)



第172図 遺構遺物(8)

付近に、斜位の貝殻刺突文を浅いV字状に施すが、意匠は不明である。769は、3類円筒の口縁部片である。770、771は、円筒の口縁部から底部まで観察できる個体である。胴部は、肋8条の縦位の貝殻刺突文をやや断続的上から下に施すが、底部近くでは乱れて施文される。772は、3類の小形の角筒の胴部片である。ある一定の部分からは縦位の貝殻条痕文しか確認できないため、底部に近い部位と考えられる。773は、2類角筒の口縁部片である。774、776は、角筒胴部片である。断続的な貝殻による短沈線文を、面に対して3列施し、斜位の貝殻刺突文をV字状に重ねる。775は、2類角筒の胴部片である。777は、2類角筒の口縁部から胴部の破片である。胴部は、縦位の流水文を面に対して3列施した後、斜位の二重貝殻刺突文を大きくV字状に配し、さらに中央部に逆V字状に重ね、菱形状の施文を呈する。778は、2類角筒の胴部片である。胎土に1mm大の白色砂粒と金色の雲母片を多量に含む。779、780は、2類角筒の胴部片である。斜位の貝殻刺突文をX字状に並べて2組配し、その交点を通るように、貝殻刺突を面に対して3列施すものと思われる。

住居跡出土遺物

67点を図化したが、いずれも2, 3類に分類されるため、ほぼ同時期のものであると考えられる。

1号住居跡

1号住居跡の出土遺物は、781の1点を掲載する。

781は、3類に分類される、円筒形の口縁部片である。口縁部には、粘土紐貼付文を2段貼り付けるが、2段目は斜位に施される。貼付文の側面には刺突が施される。胴部は、貝殻の背面を横位に押圧して施文する。内面はミガキで調整される。

2号住居跡

2号住居跡の出土遺物は、782～785の4点を掲載する。いずれも角筒形を呈する。

782は、3類に分類される、円筒形の胴部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を施す。内面は、縦位のケズリを施した後、ナデで調整される。

783～785は、2類に分類される。

783は、円筒形を呈すると思われる土器の胴部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の流水文を施す。内面はケズリが施される。

784, 785は、角筒形の胴部片である。784は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突を施す。785は、斜位の貝殻条痕文を施し、角部には貝殻刺突が施される。

3号住居跡

3号住居跡の出土遺物は、786～815の30点を掲載する。

786, 794～799, 808～810, 813は2類に分類される。

786, 794～799は、円筒形を呈する一群であるが、上角下円タイプの可能性もある。

786は、口径は長径11.8cm, 短径10.0cmの2類の半完形復元土器である。器形は、口縁部上面観がいわゆるレモン形を呈するものである。口縁部はわずかに内傾し、胴部は直線的に底部へ移行するものと思われる。角部に関しては、胴部以下まで角が続くがはっきりとしない。文様は、口唇部に刻みを施す。口縁部は、肋2条の縦位貝殻押圧文がめぐり、その下に横位貝殻刺突文が1条めぐり、胴部では、斜位の貝殻条痕文が施された後に貝殻刺突文が重ねられる。この貝殻刺突文には2種類が見られる。1つは、胴部下半まで縦位に施されるもので、これは、貝殻腹縁の角部を下方方向に圧力をかけて刺突していると思われる。もう1つは、貝殻腹縁による刺突で胴部上半にのみ2本1組で斜位に施されている貝殻刺突文である。器面調整は、外面が施文前に丁寧なナデが施され、内面は胴部では縦位のケズリが、口縁部では横位のケズリがそれぞれ観察される。角部周辺では、角部へ向かうようにケズリ痕が観察できる。なお、角部に関しては内面から口唇部にかけて黒色化が認められる。

794は、口縁部片である。口縁部に横位の貝殻刺突文が4条めぐり、胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の流水文を重ねる。口唇部は平坦で、斜位の刻みを付する。

795～799は胴部片である。795, 797は、斜位の貝殻条痕文の上に、斜位に貝殻刺突が施され、少

し押し引くことによって稲穂状の施文とする。796は、斜位の貝殻条痕文を施した後、胴部の立ち上がり部分に縦位の貝殻条痕文を施す。胴部は、断続的な短沈線文を上から下に施す。798は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位2本の流水文をやや密に施し、貝殻刺突を重ねる。799は、斜位の貝殻条痕文の上に、二本の断続的な短沈線文を上から下に施す。

808～810、813は角筒形を呈する一群である。

808～810は、口縁部片である。808は、口縁部に肋2条の貝殻押圧文が縦位に施され、直下に横位の貝殻刺突文が2条めぐる。胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の流水文を重ねる。口唇部は平坦で、浅い刻みを付する。809は、口縁部に肋2条の貝殻刺突を縦位に施し、直下に横位の貝殻刺突文が2条めぐる。胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位4本の直線状流水文を重ね、貝殻刺突を縦位に施す。口唇部は平坦で、浅い刻みを付する。810は、口縁部に横位の貝殻刺突文が3条めぐる。胴部は、縦位の貝殻条痕文の上に、縦位2本の流水文を重ね、斜位の貝殻刺突文をV字状に施す。口唇部は平坦で、斜位の刻みを付する。角部には貝殻刺突が施される。

813は、胴部下部片である。斜位の貝殻条痕文を施した後、胴部の立ち上がり部分に縦位の貝殻条痕文を施す。胴部及び角部には、断続的な貝殻刺突を上から下に施す。内面はケズリで調整される。

797～793、800～807、811、812、814、815は、3類に分類される。

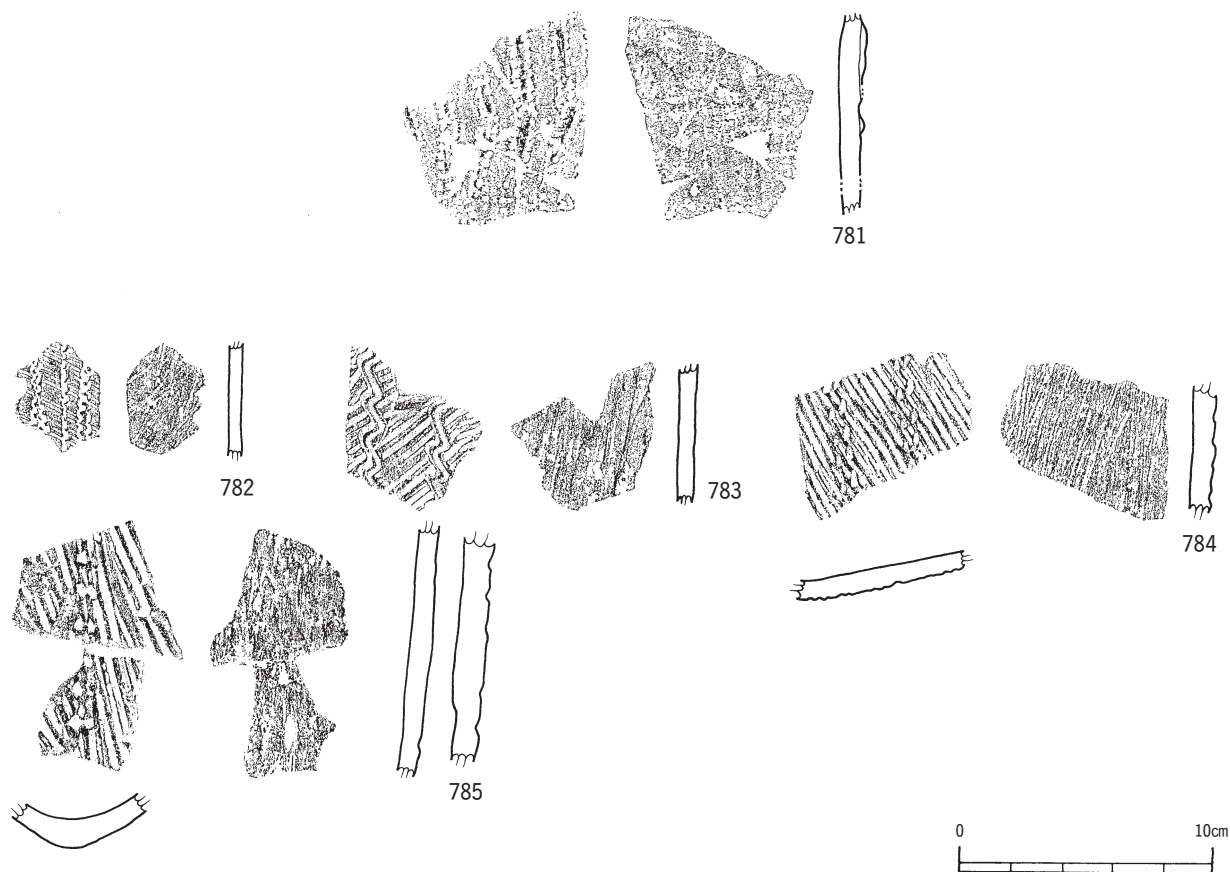
787～793、800～807は円筒形を呈する一群である。

787は、器高27.5cm、口径12.8cm、底径9.6cmの3類の完形復元土器である。口縁部から底部に至るまで直線的な器形を呈する。口縁部に横位貝殻刺突文を4条めぐらせ、胴部は斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねる。この重ねられる貝殻刺突文は縦位のものを基準に、その間を上方につまんだ「く」字状貝殻刺突文が施文され、結果的に菱形状を呈する。この縦位貝殻刺突文の上には粘土紐貼付文が3段施されている部分がある。これに関しては、器面上に7箇所確認される。器面調整は、ナデを基本とする。

788～793は、口縁部～胴部上部にかけての破片である。口縁部には横位の貝殻刺突文が4条程度めぐるものが多い。

788は、ナデ調整の後、縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をX字状に重ねるため、結果的に密になる。口縁部直下には、楔形貼付文が3段貼り付けられるが、貼付文はやや丸みを帯び、左右に刺突が施される。口唇部は平坦で縦位の刻みが付される。内面は縦位のケズリを施すが、一部に貝殻条痕文が確認できる。789、791も同様の文様が施されるが、外面には縦位の貝殻条痕文を施した後、丁寧なナデで調整される。790は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を施す。口縁部直下には、楔形貼付文を2段程度貼り付けるが、貼付文は小形で丸みを帯び、側面には刺突を施す。口唇部は平坦で斜位の刻みを付する。793は、斜位の貝殻条痕文を施した後、ナデで調整され、縦位の二重貝殻刺突文を施す。口縁部直下には、粘土紐貼付文を3段程度貼り付ける。貼付文は細く、側面に沈線を付する。

800～804は、胴部片である。800、802、804は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をX字もしくはV字状に重ねる。801、803は、斜位の貝殻条痕文をナデで調整した後、縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をX字状に重ねる。



第173図 遺構遺物(9)

805～807は底部片である。いずれも斜位の貝殻条痕文を施した後、丁寧なナデで調整され、条痕を消している。805は、胴部の立ち上がり部分に縦位の刻みが付され、胴部には凹点状の刺突が縦位に施される。806は、胴部の立ち上がり部分に縦位の沈線を規則的に施す。また、底部内面はナデで調整、外面はミガキで調整される。807も同様である。

811, 812, 814, 815は角筒形を呈する一群である。

811は、口縁部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を密に施す。口縁部直下には粘土紐貼付文を2段程度貼り付ける。

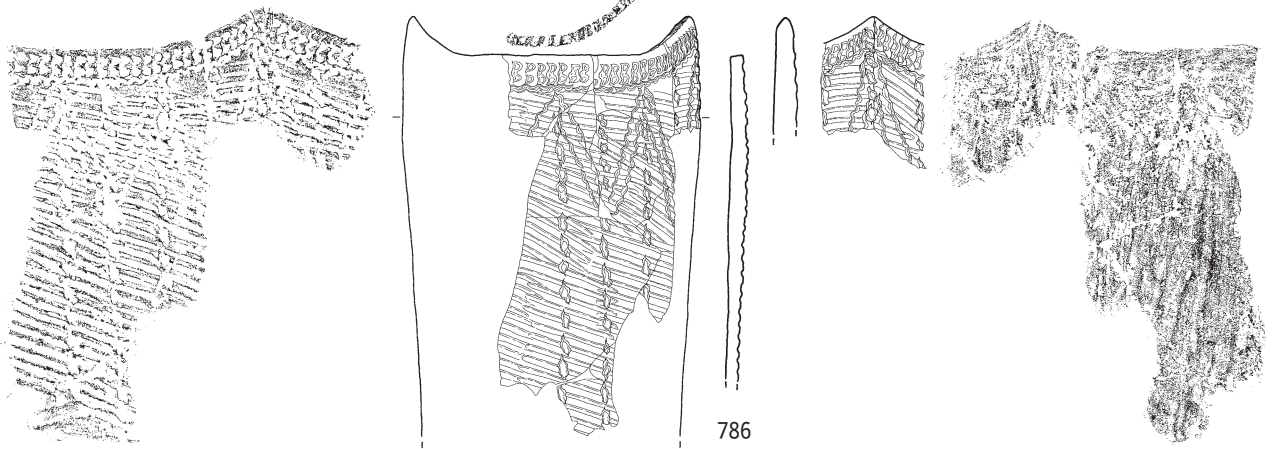
812, 815は、胴部片である。813は、斜位の貝殻条痕文を施した後、丁寧なナデで調整する。胴部は、縦位の貝殻刺突文を施す。815は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を押圧気味に施し、斜位の貝殻刺突文をV字状に重ねる。角部には貝殻刺突が施される。内面は、ケズリを施した後、ナデで調整される。

814は底部片である。斜位の貝殻条痕文を施した後、胴部の立ち上がり部分に縦位の貝殻条痕文を施す。胴部は斜位の貝殻刺突文をX字状に施し、縦位の貝殻刺突文を重ねる。角部は、貝殻刺突が施される。外面は全体的に摩耗している。

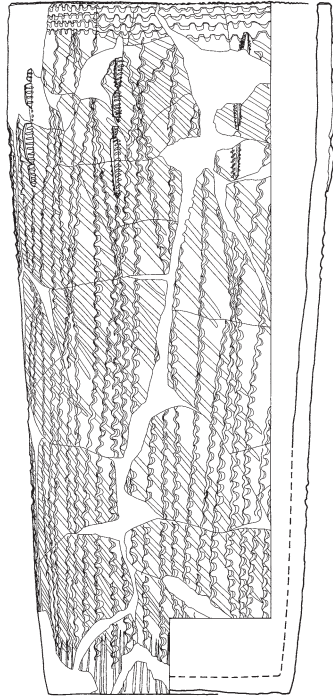
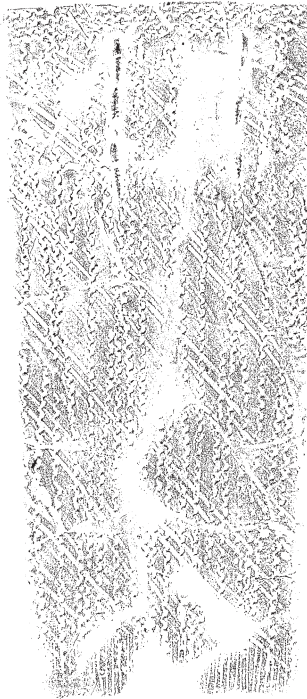
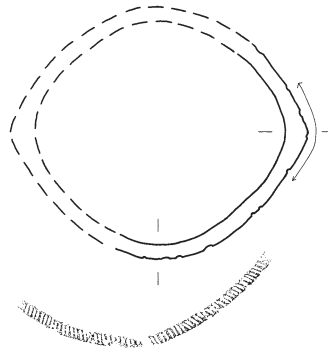
4 号住居跡

4 号住居跡の出土遺物は、816～821の6点を掲載する。

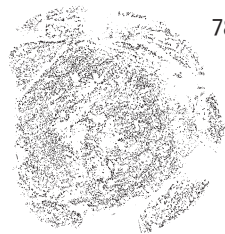
816～818は、3類に分類される。いずれも円筒形を呈する一群である。



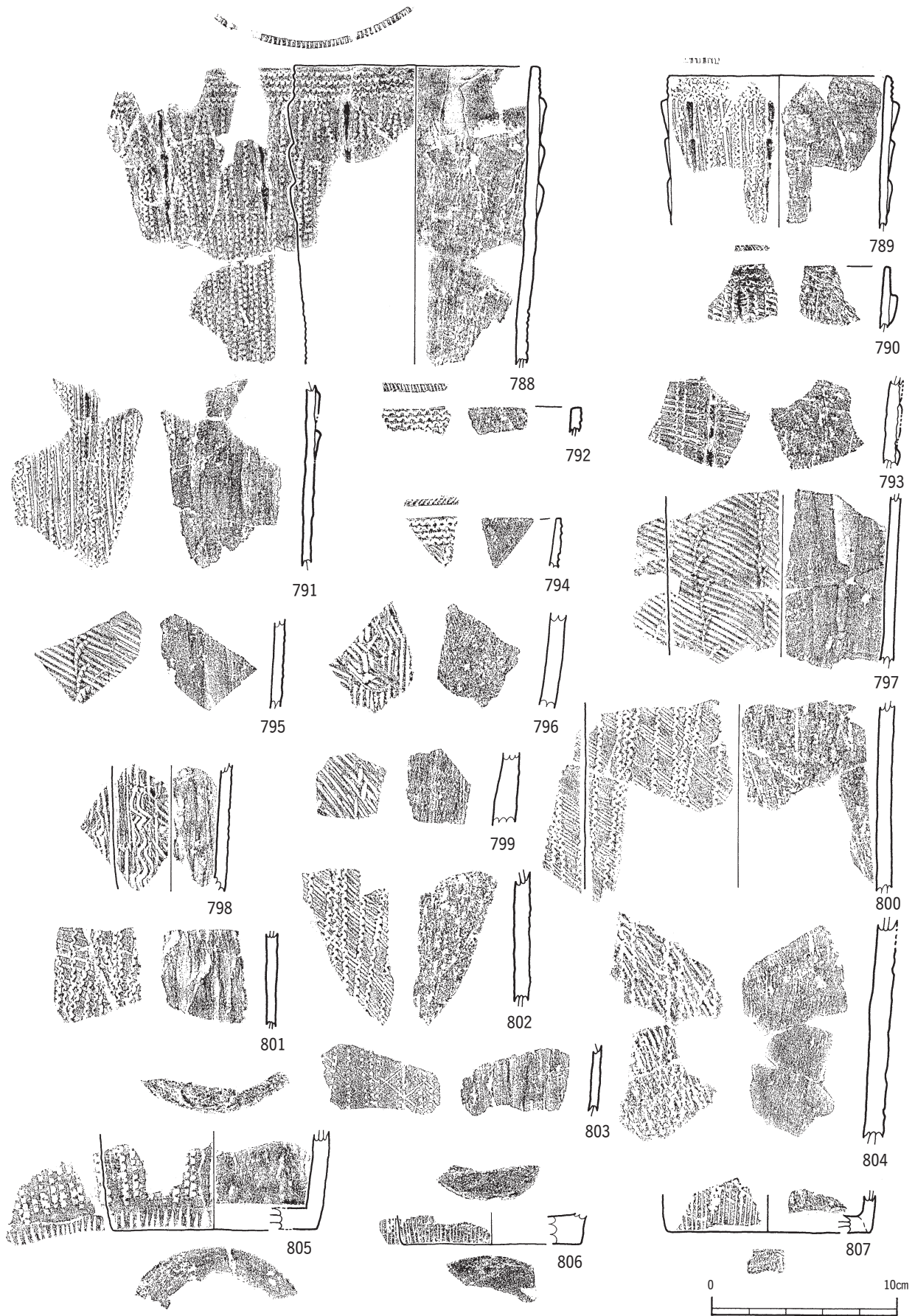
786



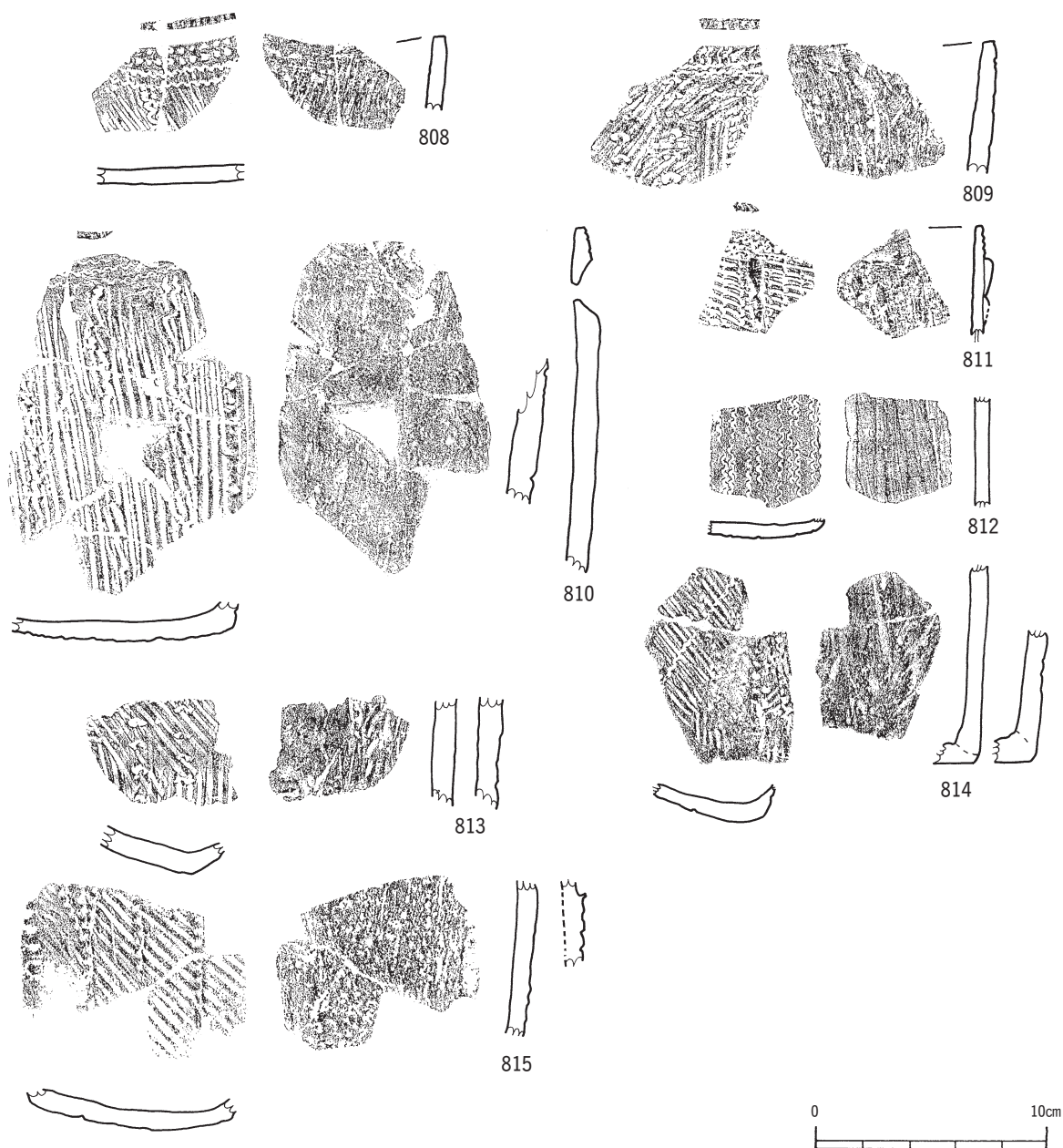
787



第174図 遺構遺物(10)



第175図 遺構遺物(11)



第176図 遺構遺物(12)

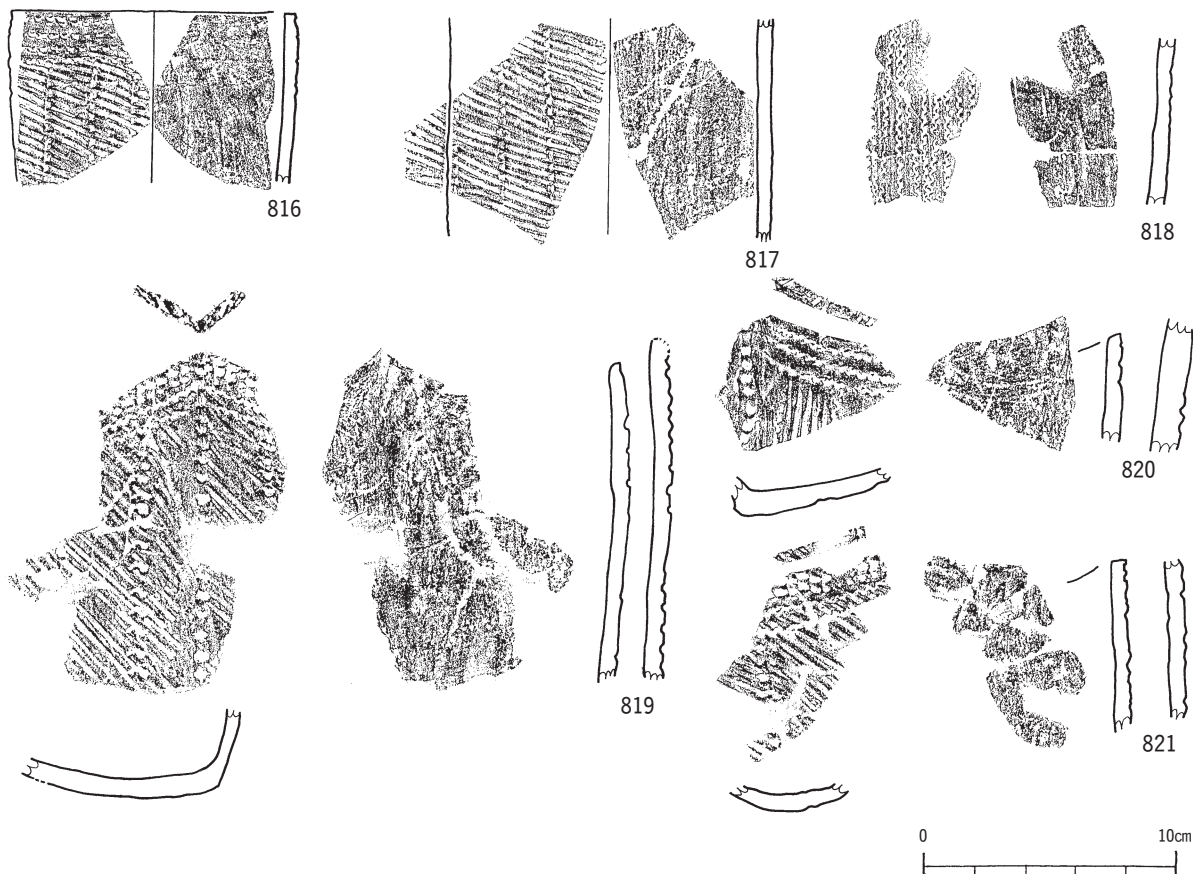
816は、口縁部片である。口縁部には、横位の貝殻刺突文が4条めぐる。胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を押圧気味に施す。口唇部は平坦で斜位の刻みを付する。

817, 818は、胴部片である。817は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を施す。818は、ナデ調整の後、縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をV字あるいはX字状に重ねる。

819～821は、2類に分類される。

819, 820は、角筒形の口縁部片である。

819は、口縁部に肋3条程度の縦位貝殻押圧文が施され、直下に横位の貝殻刺突文2条めぐる。胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に、貝殻刺突を施す。820は、口縁部に横位貝殻刺突文が3条めぐる。胴部は、縦位の貝殻条痕文を施し、縦位の貝殻刺突を重ねる。角部は、貝殻の蝶番部分の刺突が施される。口唇部は平坦で、浅い刻みを付する。



第177図 遺構遺物(13)

821は、レモン形を呈する土器の口縁部片である。口縁部には肋2～3条の貝殻押圧文を縦位に施し、直下に横位の貝殻刺突文が2条めぐり、胴部は、斜位の貝殻条痕文を施した後、最も張り出している部分に貝殻刺突を施す。内面は、ケズリを施した後、ナデで調整される。

5号住居跡

5号住居跡の出土遺物は、822の1点を掲載する。

822は、2類に分類される、角筒形の胴部片である。斜位の貝殻条痕文を施し、胴部及び角部には、断続的な斜位の貝殻刺突を押し引いて施す。これを面に対して4～5列施す。破片上部には、施文に重ねるように補修孔が穿ってある。内面は、縦位のケズリを施した後、ナデで調整される。

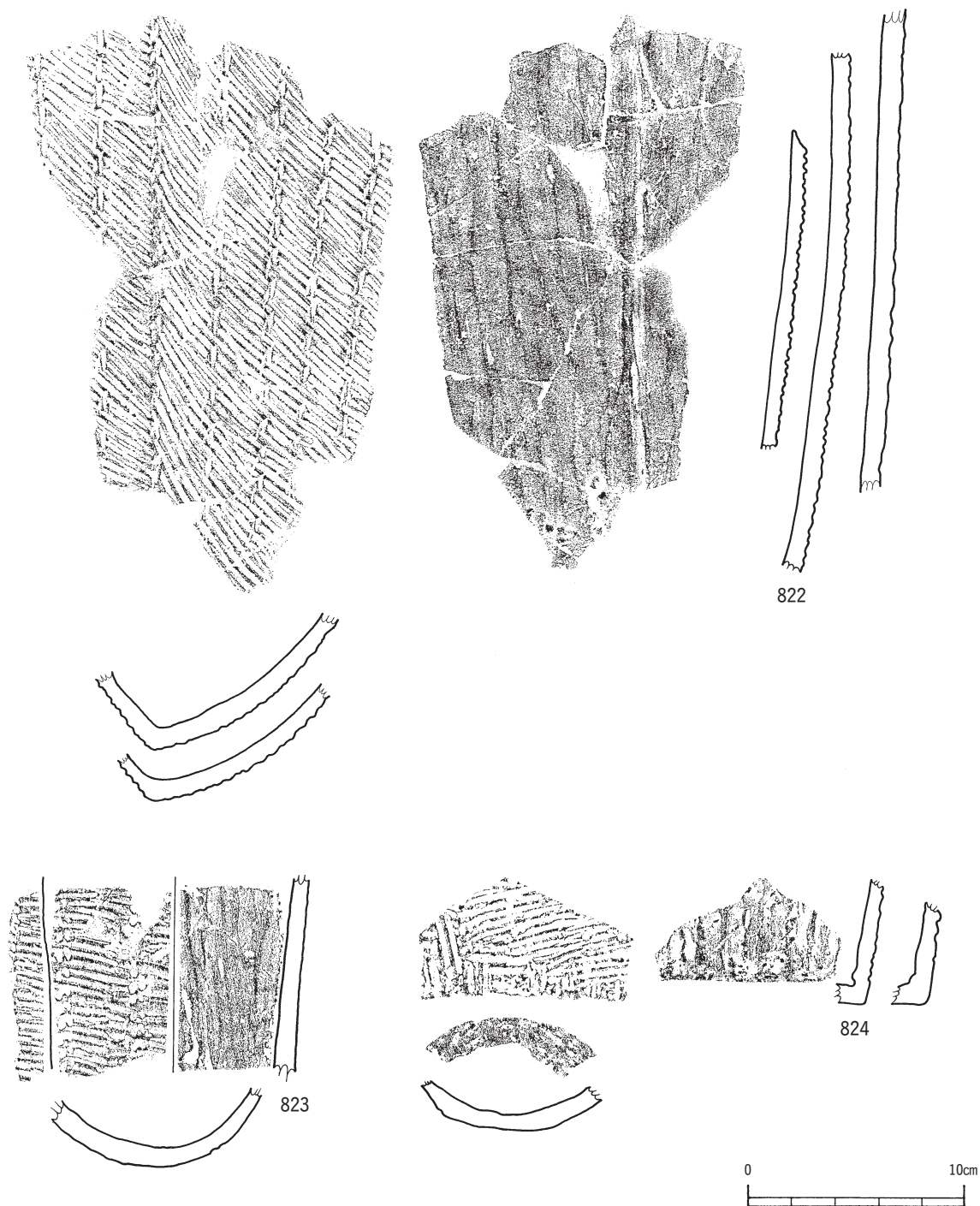
8号住居跡

8号住居跡の出土遺物は、823～825の3点を掲載する。いずれも2類に分類される。

823は、円筒形を呈すると思われる土器の胴部片である。823は、器壁の厚みに差があり、上面観が真円とは言えないため、レモン形を呈する可能性もある。横位の貝殻条痕文の上に、断続的な短沈線文を上から下に施す。

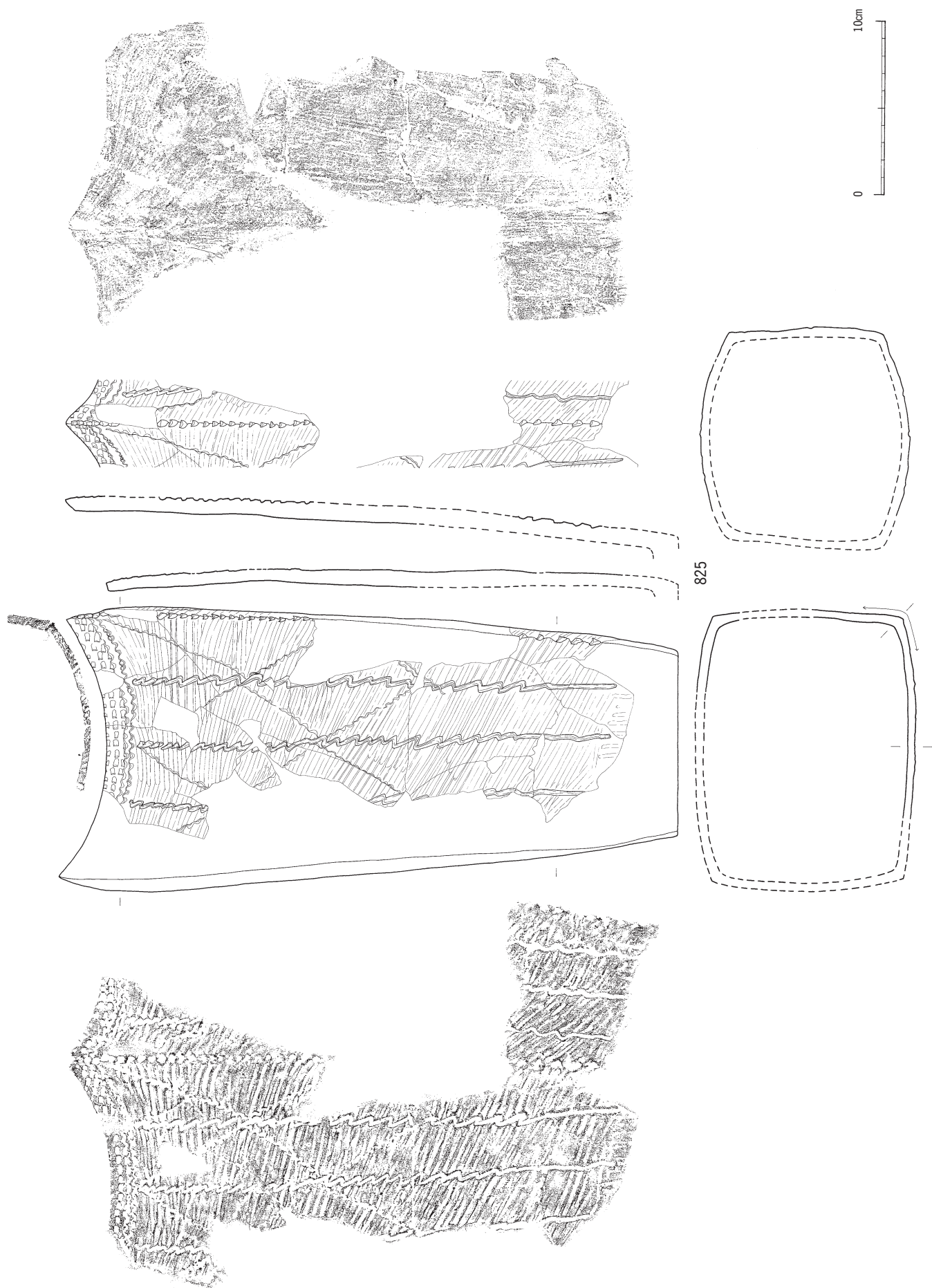
824は、レモン形を呈する土器の底部片である。斜位の貝殻条痕文を施した後、底部の立ち上がり部分には縦位の貝殻条痕文を施す。胴部及び角部は、縦位の連点状の貝殻刺突が施される。

825は、器高35.5cm、口径は長径14.7cm、底径10.0cmの完形復元土器である。器形は4つの面を



第178図 遺構遺物(14)

有する角筒形である。口縁部はわずかに内傾し、胴部は直線的である。残存率は決して高くはないが、胴部中央の施文から各4面の幅を見ると、口縁部幅14.8cmの面：11cmの面という、口縁部上面観が長方形を呈する器形が想定できる。最も良好に残っている、胴部下半に関しても、その差はわずかながら確認される。文様は、口縁部に肋3条程度の縦位貝殻押圧文がめぐり、その下にこの施文を切って横位の貝殻刺突文が2条めぐる。胴部は、斜位の貝殻条痕文の後に流水文を縦位に3列施す。この流水文は底部付近では直線的に垂下する。この流水文間に、貝殻刺突文がX字状に胴部



第179図 遺構遺物(15)

中位まで施される。底部立ち上がりには、貝殻条痕文が縦位に施される。器面調整は、内面にケズリ痕が見られ、胎土粒子の動きがはっきりと観察できる。

9号住居跡

9号住居跡の出土遺物は、840の1点を掲載する。

840は、2類に分類される、角筒形の胴部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、斜位の貝殻刺突文と断続的な貝殻刺突を施し、縦位の流水文を重ねる。内部は、縦位のケズリを施す。

10号住居跡

10号住居跡の出土遺物は、826～838の13点を掲載する。

826～829, 831, 832, 835, 836, 838は、2類に分類される。

826～828は、円筒形を呈すると思われる一群である。

826は、口縁～胴部片である。口縁部には、肋3条の貝殻押圧文を縦位に施す。胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文と縦位の二重貝殻刺突文とを交互に施す。口縁部直下には、ぼってりとした粘土紐貼付文を2段貼り付ける。貼付文は、粗いナデで貼り付けられ、側面に貝殻条痕文が施される。口唇部は平坦で、斜位の刻みを付する。

827は、胴部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、断続的な斜位の貝殻刺突を上から下に押し引きながら施す。内面は、縦位のケズリを施した後、ナデで調整される。

828は、底部片である。胴部の立ち上がり部分は、縦位の貝殻条痕文を施した後、ナデで調整する。底部の内外面は共にナデで調整される。

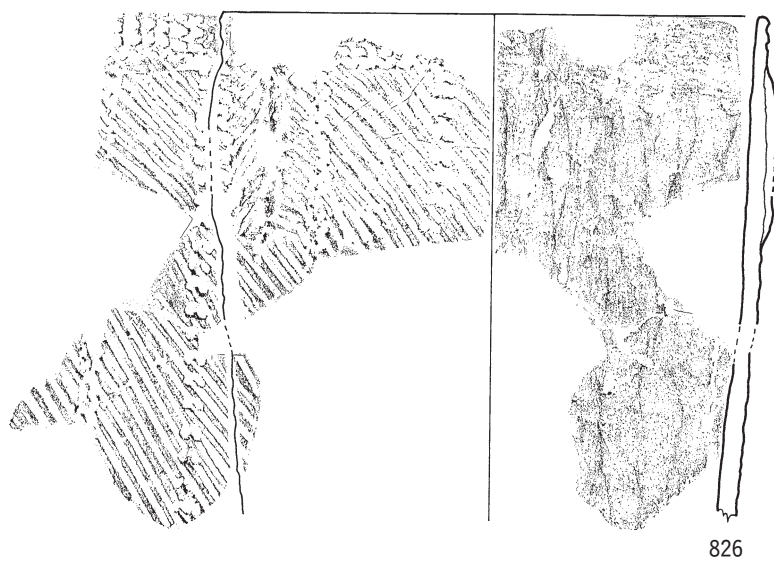
829, 832は、同一個体の可能性が高い、レモン形を呈する土器の口縁～胴部片である。口縁部には、横位の凹点状の刺突が3条めぐり、胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に、断続的な短い刺突線文を上から下に施す。一部斜位に施す箇所も見られるが、規則性は不明である。口唇部は平坦で、斜位の刻みを付する。内面は、縦位のへう状工具によるケズリを施す。

831, 835, 836, 838は角筒形を呈する一群である。

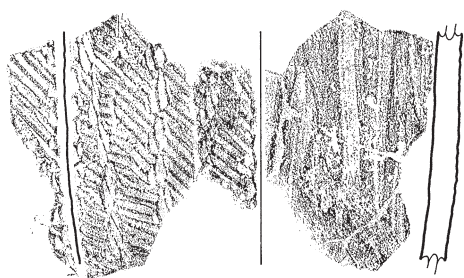
838は、器高34.1cm、口径は長径16.9cm、短径15.8cm、底径10.7cmの完形復元土器である。器形は、口縁部～底部へ至るまで4つの面を持つ角筒形である。口縁部はわずかに内傾し、胴部でやや膨らむが直線的な形状を呈する。角部は口縁部から底部に至るまで形成されている。文様は、口唇部に刻みを施す。口縁部は、肋4条程度の縦位貝殻押圧文がめぐり、その下位には横位貝殻刺突文が2条めぐり、この両者は、切り合いから横位の貝殻刺突文が新しいと見られる。胴部は、斜位の貝殻条痕文を角部から面の中央部に向けて綾杉状に施し、その上から1面当たり縦位に3条の流水文を2本1組で施す。底部の立ち上がり部分には、縦位の貝殻条痕文を施す。角部には、縦位の貝殻条痕文を施した後、肋2条の貝殻刺突文が角部に沿って施されている。器面調整は、内面において縦位のケズリが施されるが、口縁部の一部で横位のケズリが観察できる。

831は、胴部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、貝殻刺突を上から下に施す。角部にも同様の文様を施す。内面はケズリで調整される。

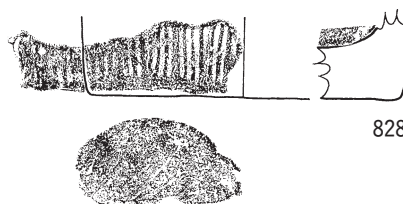
835, 836は、底部片である。どちらも胴部の立ち上がり部分に縦位の貝殻条痕文を施す。835は、



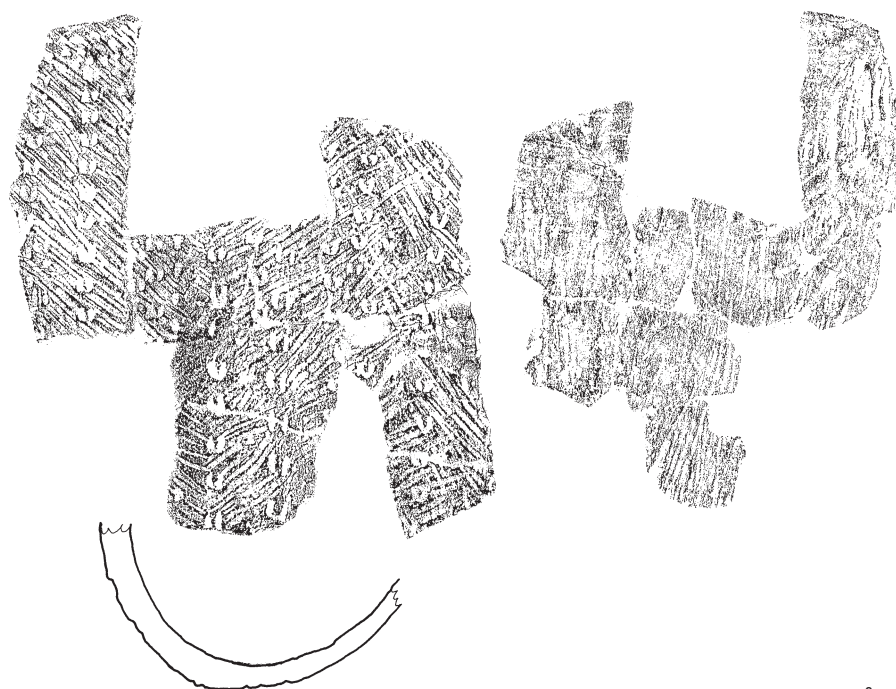
826



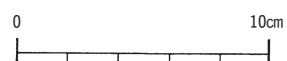
827



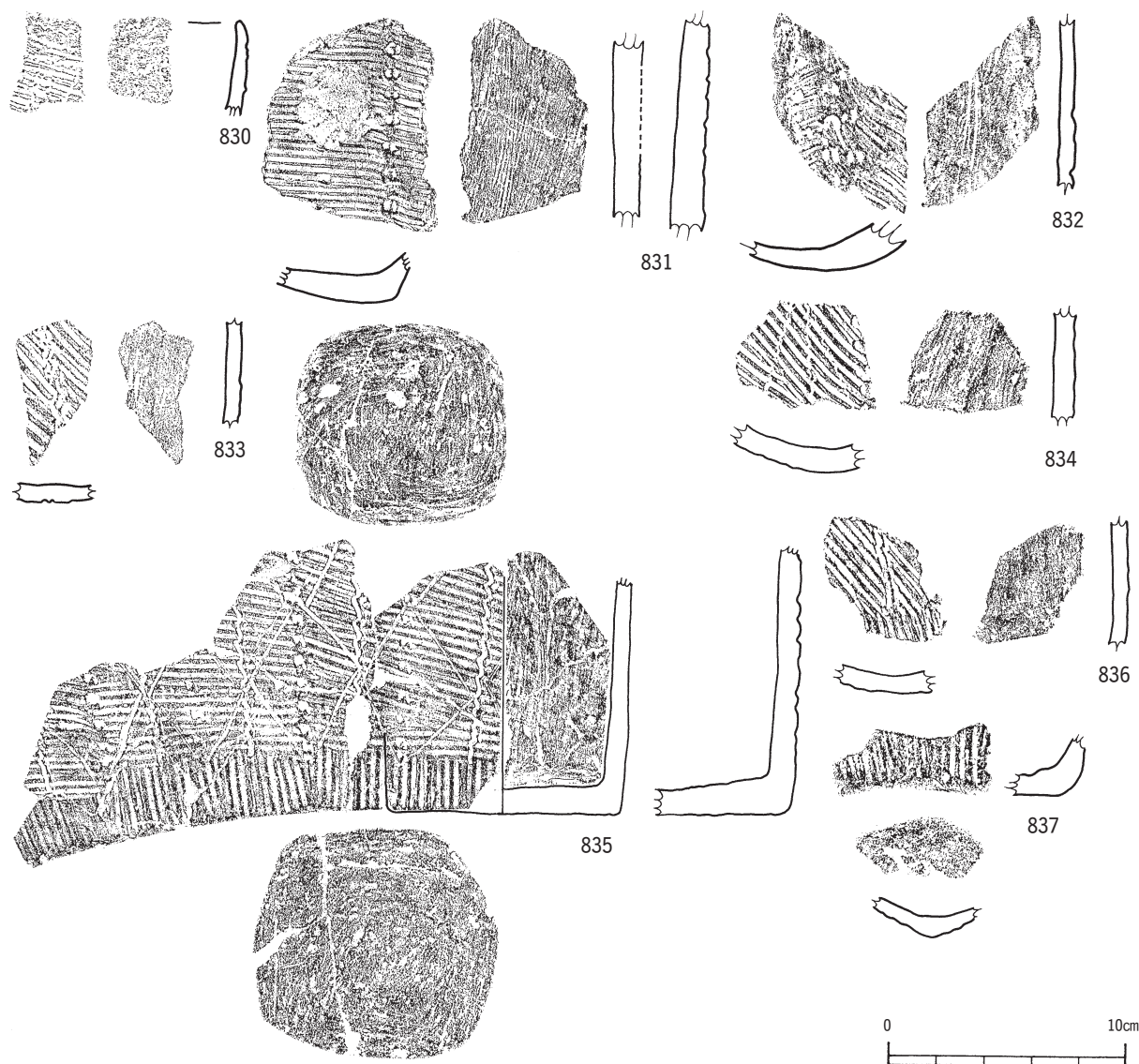
828



829



第180図 遺構遺物(16)



第181図 遺構遺物(17)

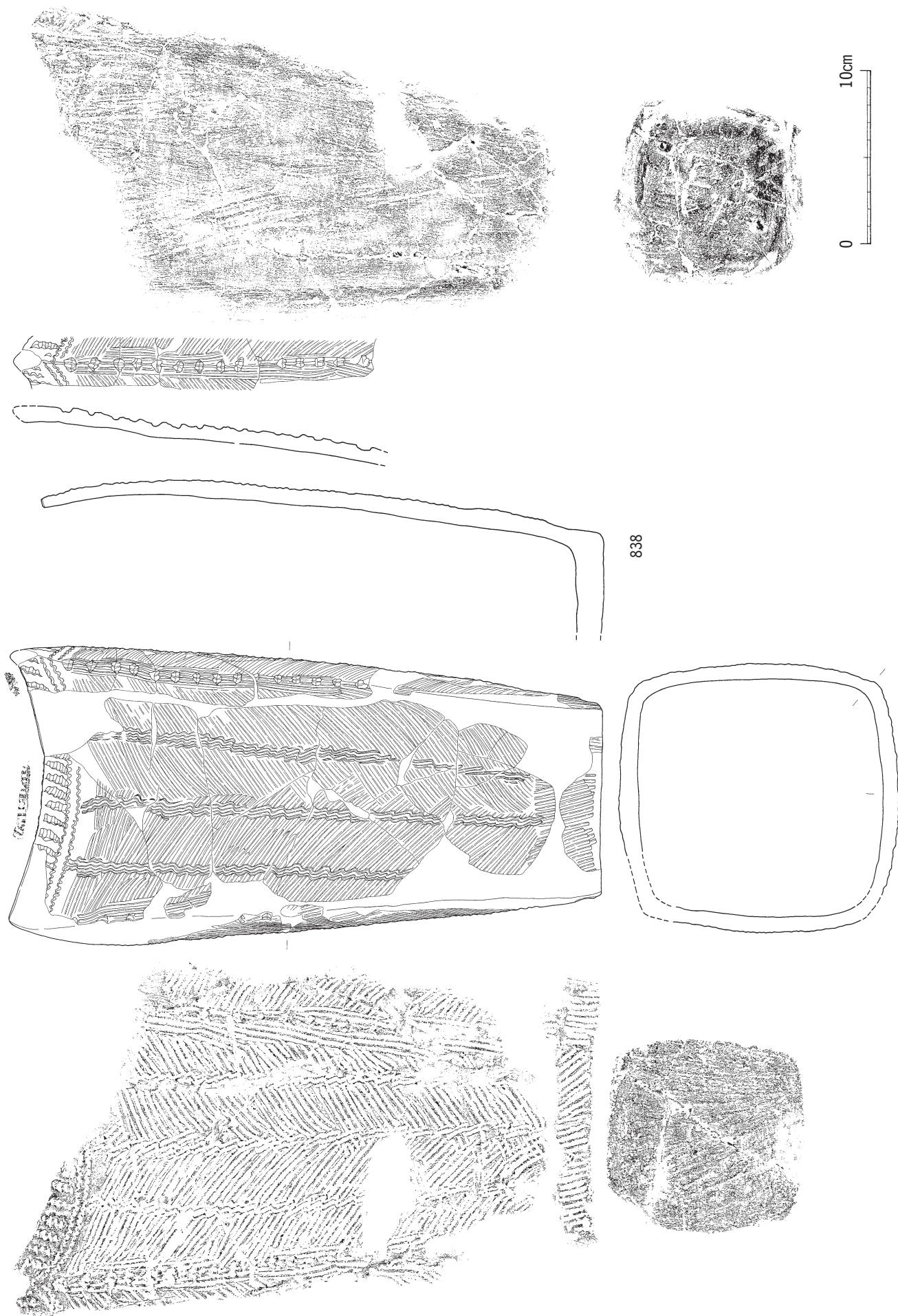
横位の貝殻条痕文を施した後、面の中央部には断続的な短い刺突線文を上から下に施し、その両脇に間隔を開けて流水文を配する。さらに、斜位の直線状沈線をX字状に重ねるが、施文順は場所によって異なる。角部は、凹点状の貝柄刺突を施す。836は、胴部には縦位2本の流水文を施す。

830, 833, 834, 837は、3類に分類される。いずれも角筒形を呈する。

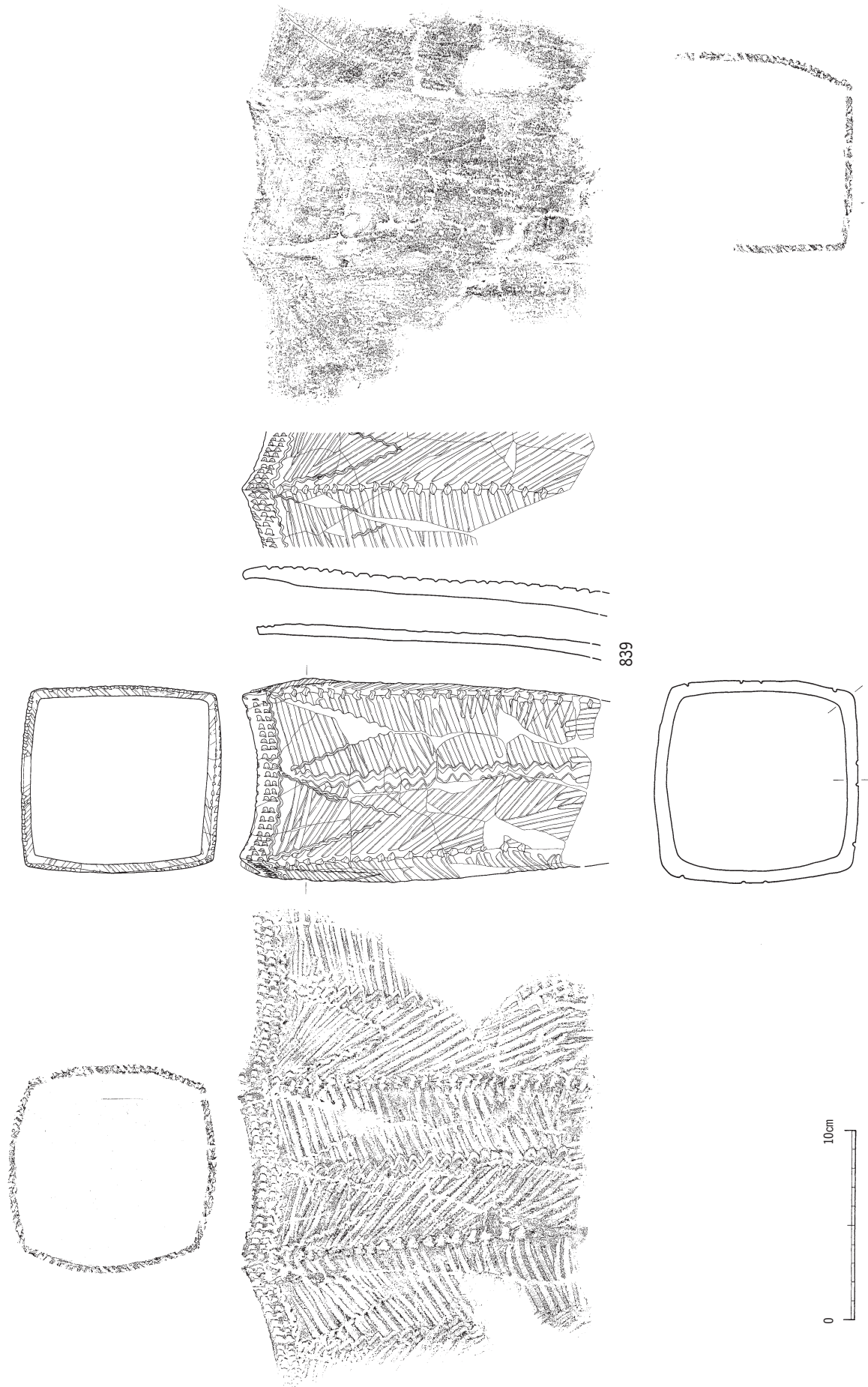
830は、口縁部片である。口縁部には、横位の貝殻刺突文が3条めぐる。胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をX字もしくはV字状に施すと思われる。口唇部は上部になるにつれ薄くなるが、先端部は丸みを帯びる。内面は横位のケズリを施す。

833, 834は、胴部片である。斜位の貝殻条痕文にやや斜位の二重貝殻刺突文を施す。834は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をV字もしくはX字状に重ねる。

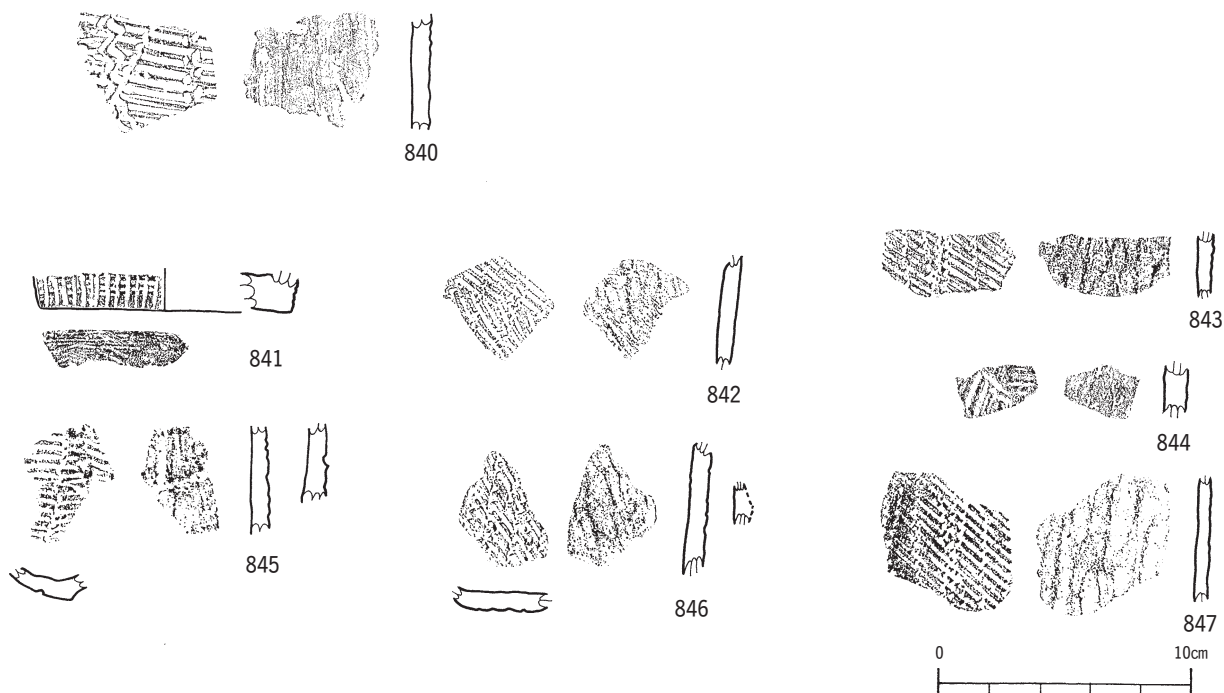
837は、底部片である。胴部の立ち上がり部分に、縦位の貝殻条痕文を施す。



第182図 遺構遺物(18)



第183図 遺構遺物(19)



第184図 遺構遺物(20)

11号住居跡

11号住居跡からは、2類に分類される839の1点を掲載する。

839は、器高19.0cm、口径は長径12.5cm、短径8.5cmの2類の半完形復元土器である。器形は、4つの面を有する角筒形である。口縁部はわずかに内傾し、胴部は直線的に底部へ至るものと思われる。角部は、口縁部から底部へ至るまで形成される。文様は、口唇部に刻みを施す。口縁部は肋2～3条の縦位貝殻押圧文がめぐり、その下には横位貝殻刺突文が1条めぐり。胴部は、斜位の貝殻条痕文を角部から面の中央部に向けて綾杉状に施し、中央に縦位1条の流水文を施す。角部には、肋2条の貝殻刺突文が角部に沿って施文されている。さらに、胴部上半では斜位の貝殻刺突文が中央の流水文を中心に、左右1つずつV字状に施文されている。器面調整は、内面にケズリを施す。

12号住居跡

12号住居跡の出土遺物は、841～847の7点を掲載する。

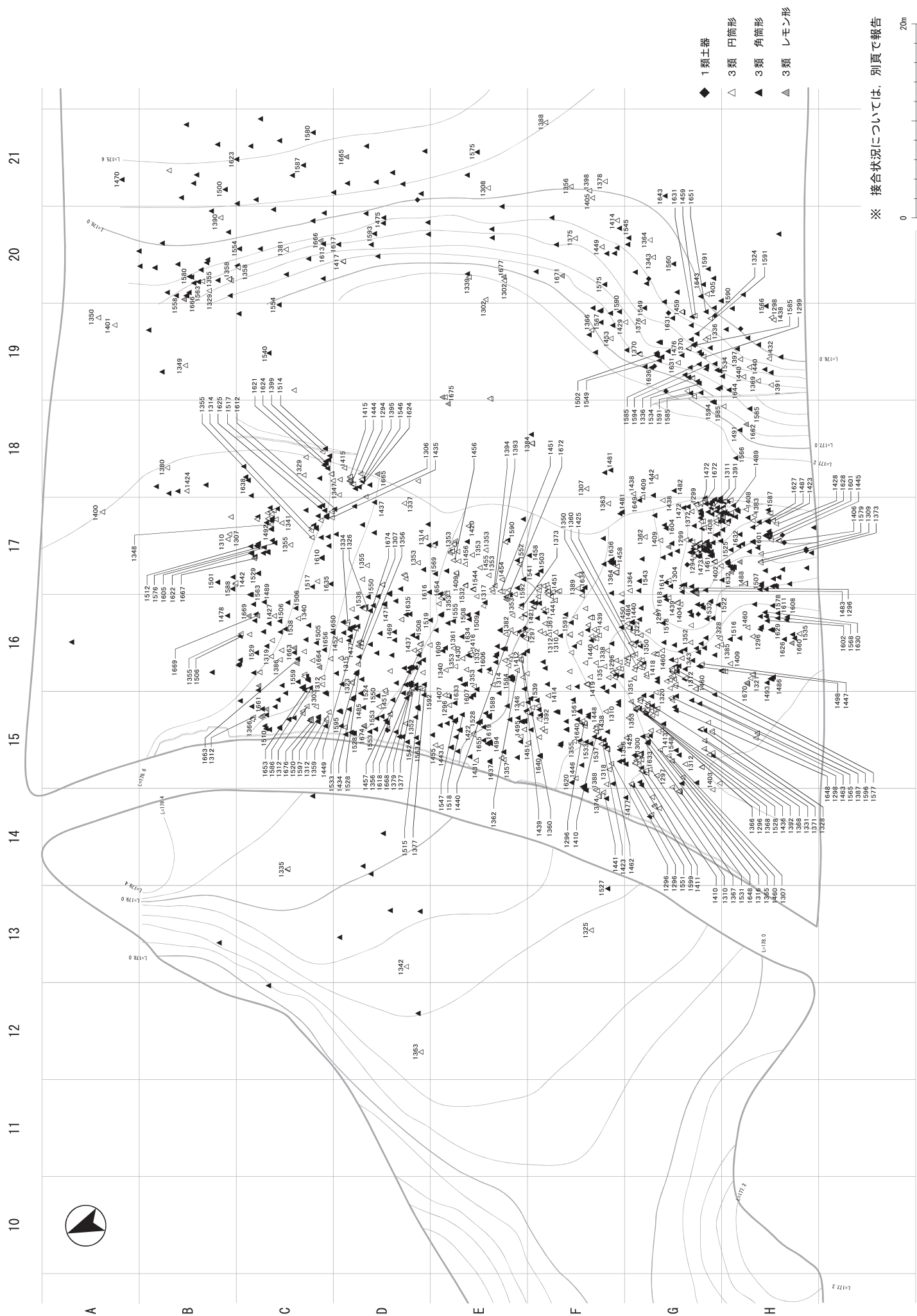
841～843、845～847は、3類に分類される。

841は、円筒形の底部片である。斜位の貝殻条痕文を施した後、胴部の立ち上がり部分に縦位の刻みを付する。底部内面はケズリを施し、外面はミガキで調整する。

842、843、845～847は、角筒形を呈する一群の胴部片である。

842、843、846、847は、斜位の貝殻条痕文の上に、縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をX字状に重ねる。なお、846の外面には炭化物が付着している。845は、横位の貝殻条痕文の上に、斜位の貝殻刺突文を重ね、角部には断続的な刺突を上から下に施す。

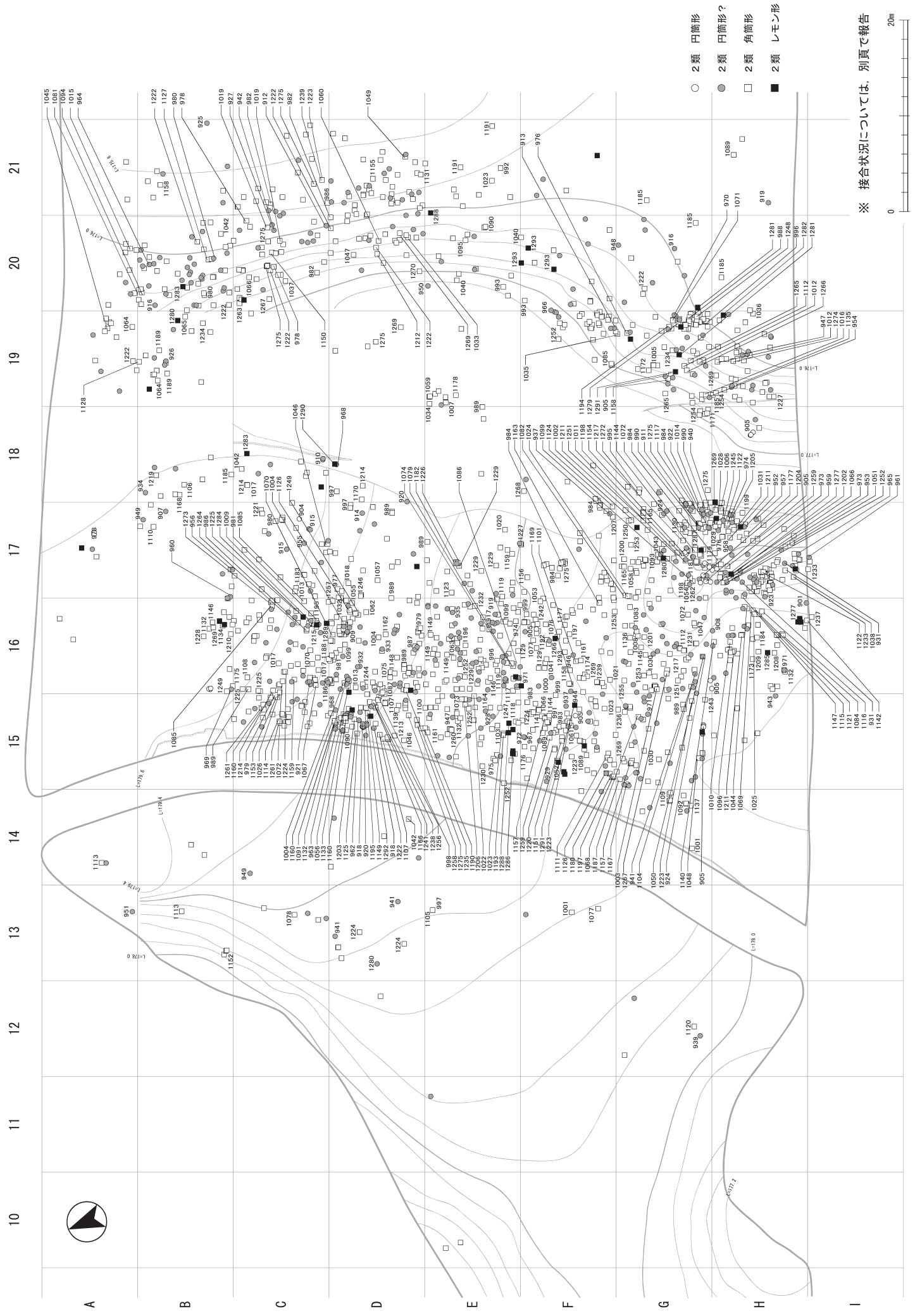
844は、2類に分類される、角筒の胴部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、縦位2本の流水文を施す。内面は、ケズリを施した後、ナデで調整される。



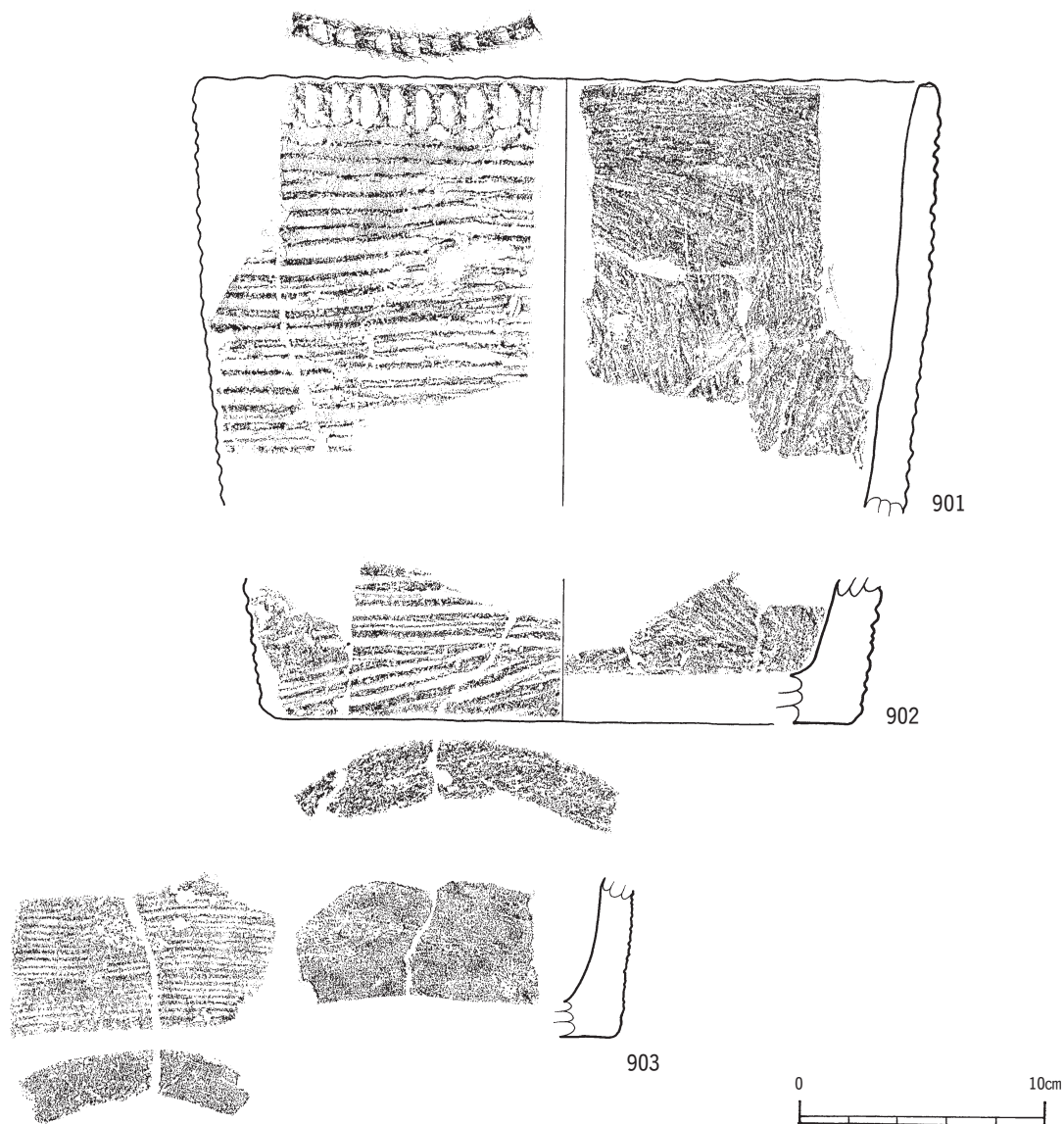
※接合状況については、別頁で報告



第185図 1～3類土器出土状況(1)



第186図 1～3類土器出土状況(2)



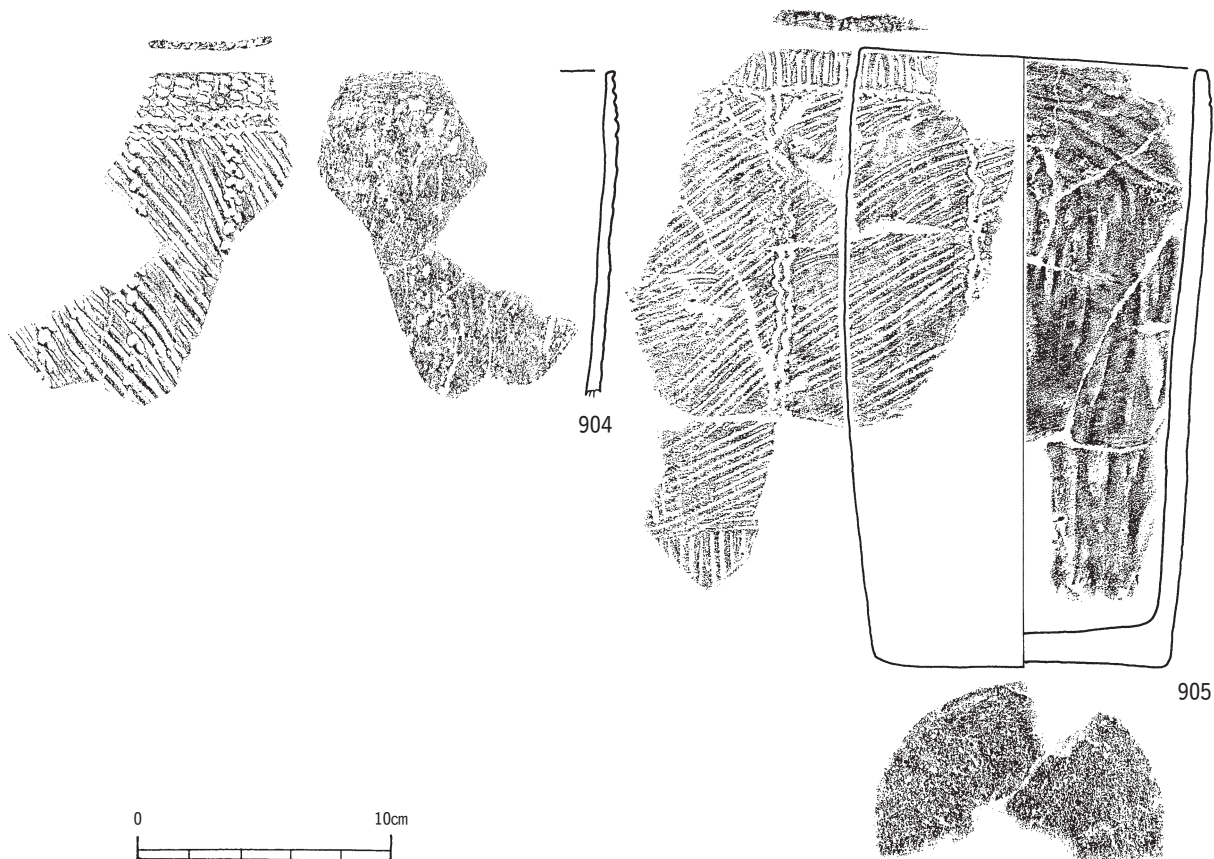
第187図 1類土器

2 土器

① 1類

1類土器は、3点を掲載する。

901, 902は、同一個体の可能性が高い。口径は30.0cm, 底径は23.0cmを測る。大型の貝による横位の貝殻条痕文を施した後, 口縁部に工具による縦位の押圧文を施す。内面は, 縦位のケズリを施すが, 口縁部及び底部付近では横位に変わる。903は, 底部片である。横位の貝殻条痕文を施すが, 外面は摩耗しており, 炭化物が付着している。



第188図 2類土器(1)

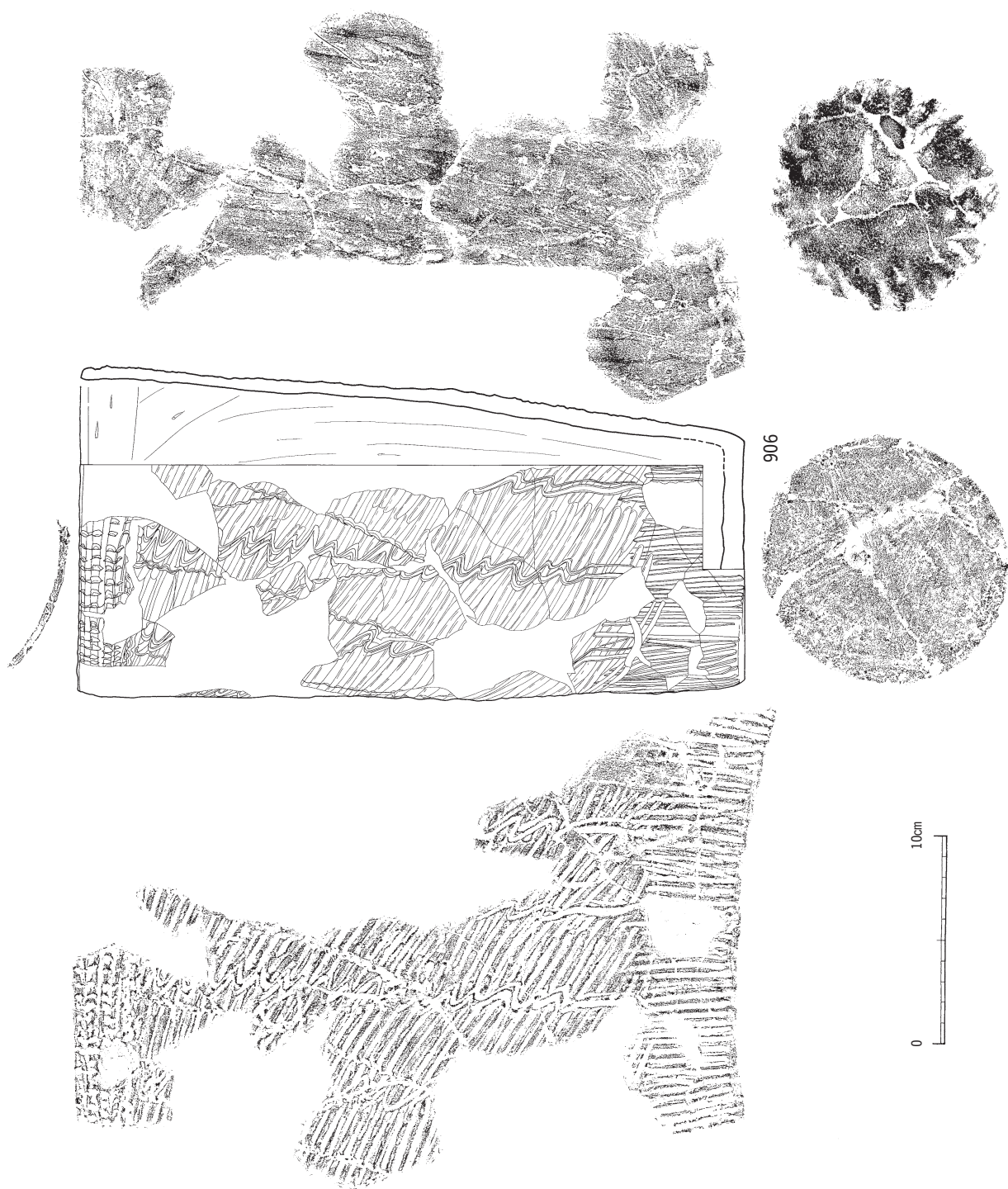
② 2類

本地区の中心となる土器である。器形は、円筒形、角筒形、口縁部上面観がレモン形を呈するもの、上角下円のものの4タイプが存在すると思われる。しかし、円筒形と上角下円タイプについては、厳密に分類することが困難なため、口縁部が残存し、明らかに円筒形を呈すると確認できたものののみ円筒形として分類している。

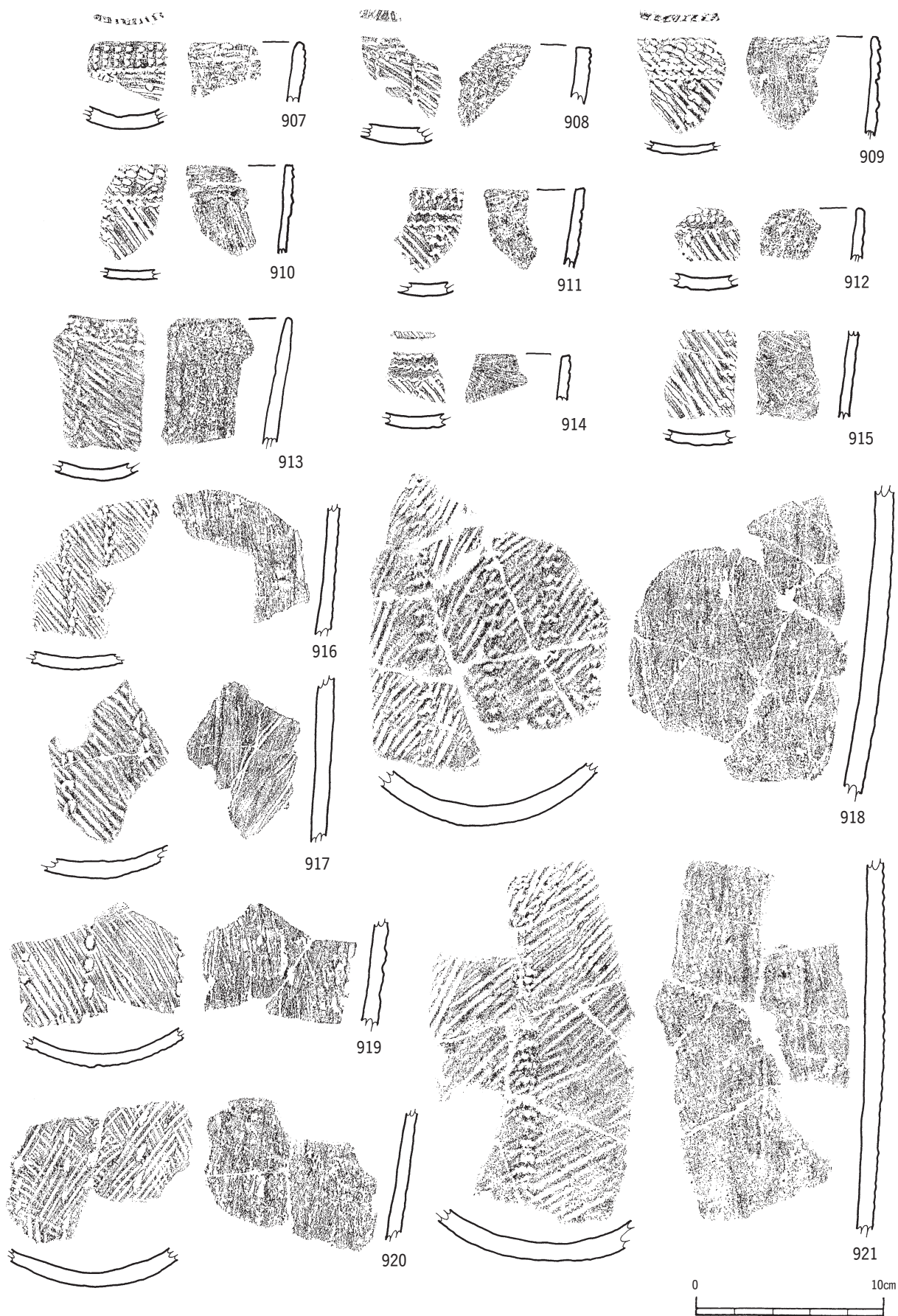
904～906は、器形が円筒形を呈すると確認できたものである。完形土器1点を含む。

904は、口縁部に肋4条の貝殻押型文を縦位に施し、直下に横位の貝殻刺突文が2条めぐる。胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に断続的な貝殻刺突を施す。905は、口縁部及び胴部の立ち上がり部分に縦位の貝殻条痕文を施し、胴部には斜位の貝殻条痕文の上に縦位2本の流水文が施される。

906は、器高32.0cm、口径15.0cm、底径12.4cmの完形復元土器である。器形は、口縁部から底部へ直線的な胴部を有する円筒形である。文様は、口縁部に肋2条を単位とした縦位貝殻押圧文を2段施し、その下位には貝殻刺突文が横位に1条めぐる。胴部は、貝殻条痕文を斜位に施し、その上から貝殻文を重ねる2重施文の手法を採る。重ねる貝殻文は、流水文と刺突文で、流水文は底部まで施文されているが、刺突文は流水文間でかつ胴部上半に限られている。胴部の立ち上がり部分には、縦位に貝殻条痕文が施文されている。器面調整は、外面は全面施文のためはっきりとせず、内面は胴部では下から上へのケズリ、口縁部では横方向のケズリ痕が見られる。



第189図 2類土器(2)



第190図 2類土器(3)



第191図 2類土器(4)

907～956は、器形が円筒形の様相を呈するものの、上角下円の可能性も残るものである。胴部の文様によって、さらに細分が可能である。なお、参考のため、横断面も合わせて掲載する。

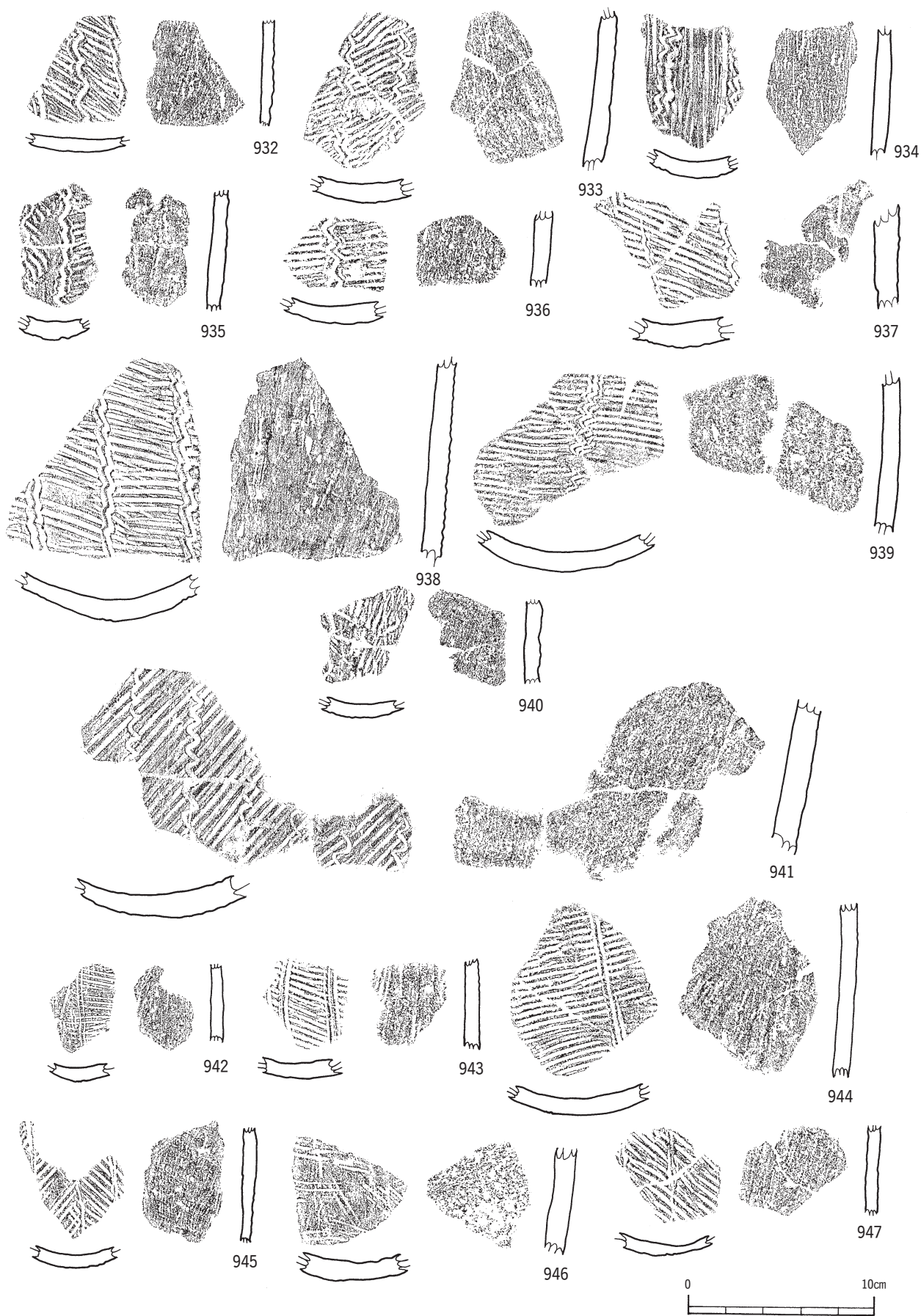
907～921は、斜位の貝殻条痕文の上に、断続的な刺突を上から下に施す一群である。

907～915は、口縁部片である。口縁部には、肋3～4条の貝殻押圧文が縦位に施され、直下に横位の貝殻刺突文が2条程度めぐる。914については、横位の貝殻刺突文が3条めぐる。また、908は、横位の貝殻刺突文の下に、凹点状の貝殻刺突を横位に連続して施す。胴部の文様は、貝殻刺突を施すものが主だが、7は、凹点状の刺突、912は、縦位の短沈線文が施される。

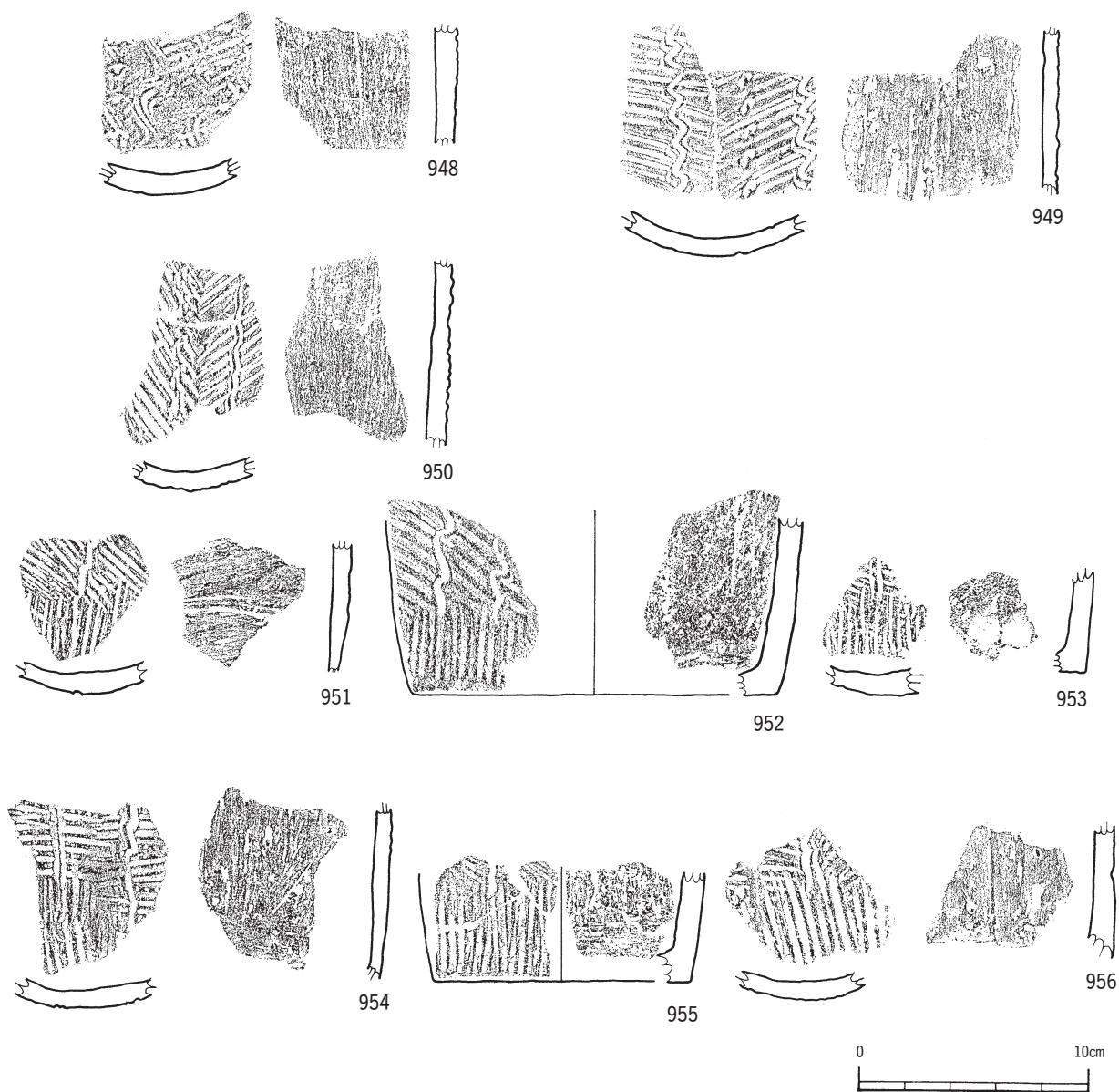
916～921は、胴部片である。貝殻刺突が主だが、919は、凹点状の刺突を施す。また、920は、右上がりと左上がりの貝殻条痕文を重ねて施した後、貝殻刺突を施している。

922～941は、斜位の貝殻条痕文の上に、1～3本を1組とする流水文を施す一群である。

922～924は、口縁部片である。922、923は、口縁部に縦位の貝殻押圧文を施すが、924は、貝殻



第192図 2類土器(5)



第193図 2類土器(6)

刺突文が横位に3条めぐる。なお、922, 923の貝殻条痕文は、右上がりと左上がりのものとを重ねて施している。

925～941は、胴部片である。929, 931の貝殻条痕文は向きを違って重ねて施し、934では、縦位に施す。

942～947は、流水文を直線状に施す胴部片である。流水文は、底部に近づくにつれ直線状に変化するものもあるが、943は、初めから直線を意識して施しているように見える。

948～950は、斜位の貝殻条痕文の上に、断続的な貝殻刺突及び流水文を施す一群である。いずれも貝殻刺突と流水文を交互に施す。なお、948は、向きの異なる貝殻条痕文を重ねて施す。

951～956は、底部片である。いずれも胴部の立ち上がり部分に縦位の貝殻条痕文を施した後、胴部に流水文を施している。なお、胴部の文様が刺突の底部片は確認できなかった。

960, 961は、斜位の貝殻条痕文の上に、X字状の貝殻刺突文と貝殻刺突とを組み合わせる群である。960では肋2条の横位の貝殻刺突を、961では斜位の貝殻刺突を断続的に上から下に施す。

957～959, 962～972は、斜位の貝殻条痕文の上に、流水文とV字もしくはX字状の貝殻刺突文とを重ねて施す群である。957～959, 962, 963は口縁部片である。いずれも口縁部には縦位の貝殻押圧文が施される。なお、959は斜位の貝殻刺突文をV字状に施した後、その頂点より流水文を施している。

964～972は、胴部片である。971ではV字状の斜位の貝殻刺突文を、上下から交互に施している。

973～1275は、器形が角筒形を呈するもので、2類の大部分を占める。胴部の文様によって、さらに細分できる。

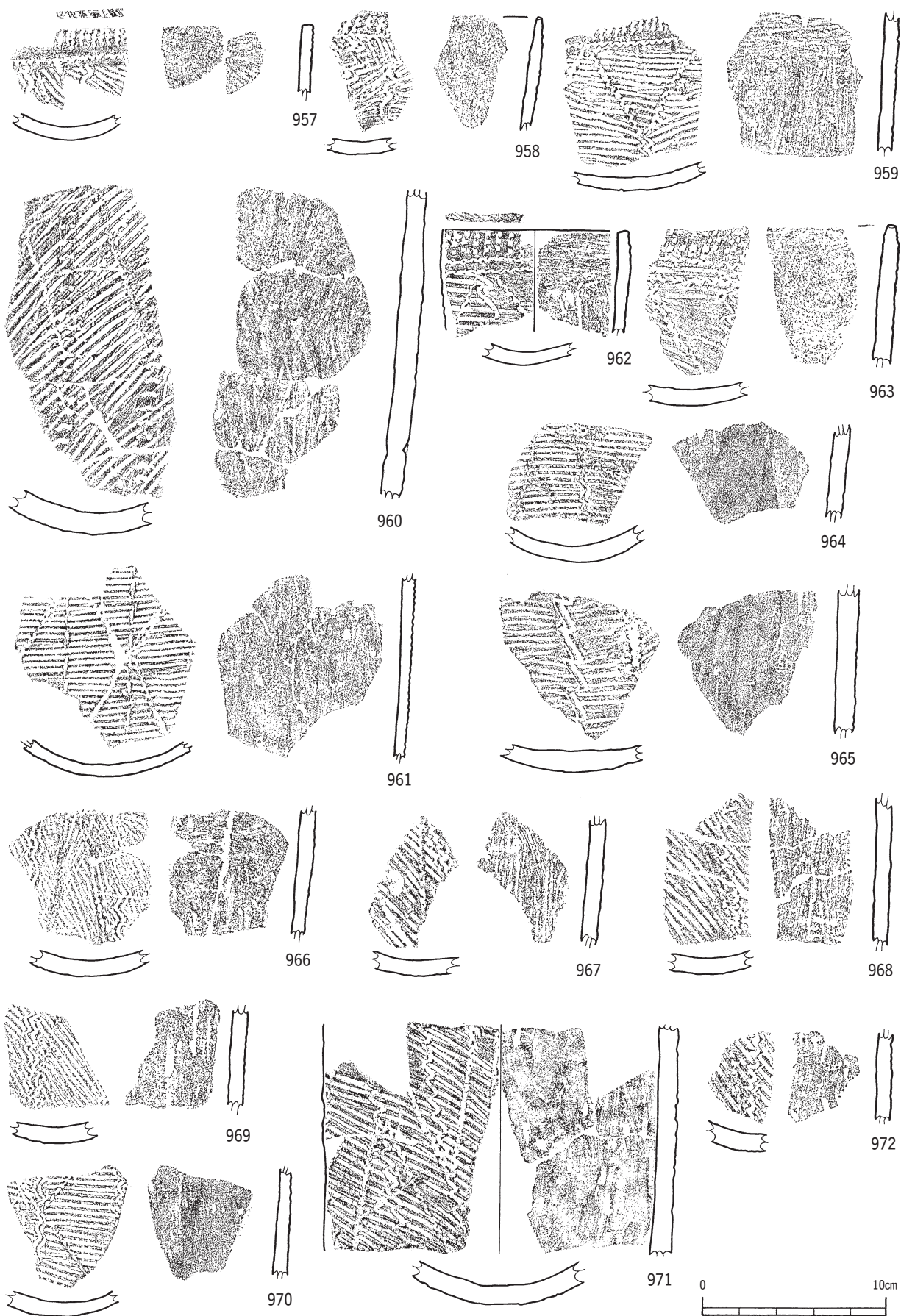
973～1087は、斜位の貝殻条痕文の上に、断続的な刺突を施す群である。

973は、器高25.5cm、口径12.1cm、底径8.1cmの完形復元土器である。器形は4つの面を有する角筒形で、4面が良好な状態で残存している。文様は、口縁部に肋3条の縦位貝殻押圧文をめぐらせ、その下には横位貝殻刺突文が1条めぐる。胴部は、横位ないしやや斜位の貝殻条痕文の上に波線状の施文が5列と4列とが面で対をなす。角部には、やや斜位に刺突文が入る。胴部立ち上がりには縦位の貝殻条痕文が施される。内面調整はケズリで、幅1.3cmのケズリ痕も確認できる。

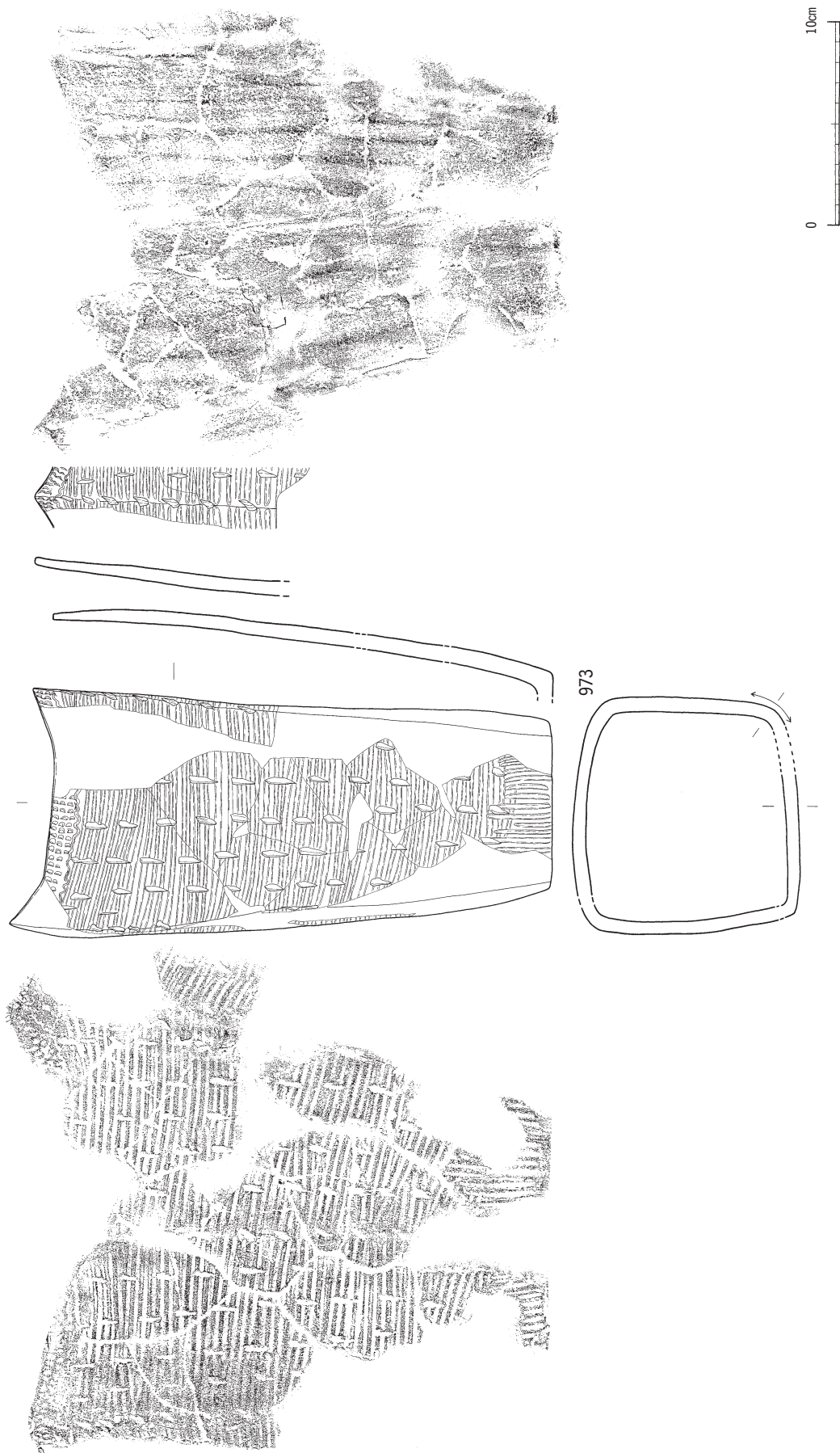
974～993は、口縁部に肋3～4条の縦位貝殻押圧文が施される口縁部片である。文様は、断続的な貝殻刺突を施すものが多いが、その刺突の手法は、974～988のように横位もしくは斜位に刺突するもの、989～991のように2本対の短刺突線文を施すもの、あるいは992, 993のように凹点状の刺突を施すものなど様々である。また、刺突は通常面に対して3列程度施されるが、986や992のように1列あるいは3列以上施すものなどもある。なお、976には補修孔が確認できる。

994, 995は、胴部の刺突を貝殻の蝶番部分で施している。

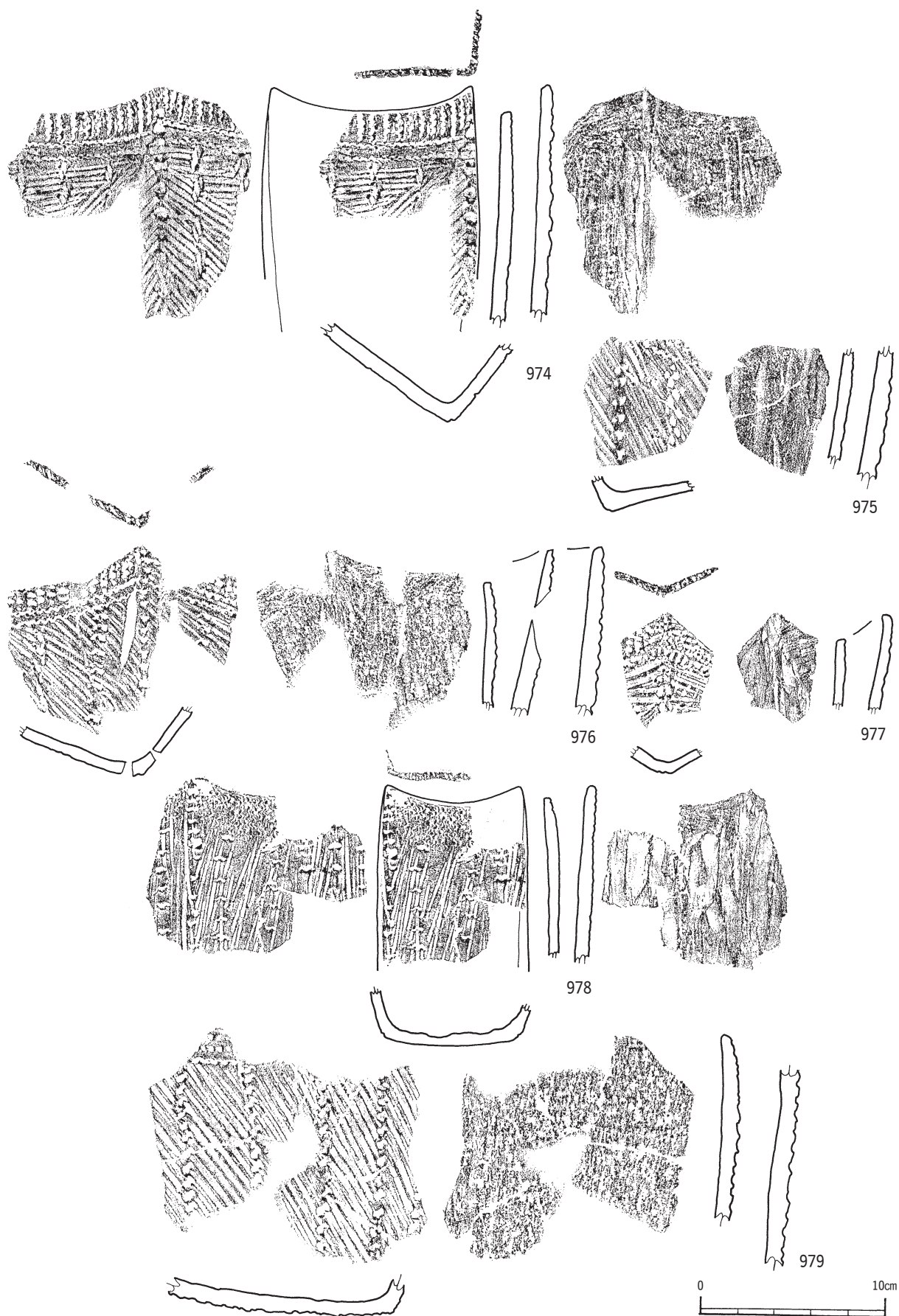
996～1063は、胴部片であるが、胴部の刺突の手法は、口縁部片同様バリエーション豊かである。996～1038は横位もしくは斜位や縦位の貝殻刺突を、1039～1046は2本対もしくは3本の1組の短刺突線文を、1049～1056は、凹点状もしくは破線状の刺突をそれぞれ施す。また、1057～1059は、短沈線文を三叉状に施し、1060ではハ字状のものを上から下に施す。なお、1061～1063については刺突の列が斜位に施されている。



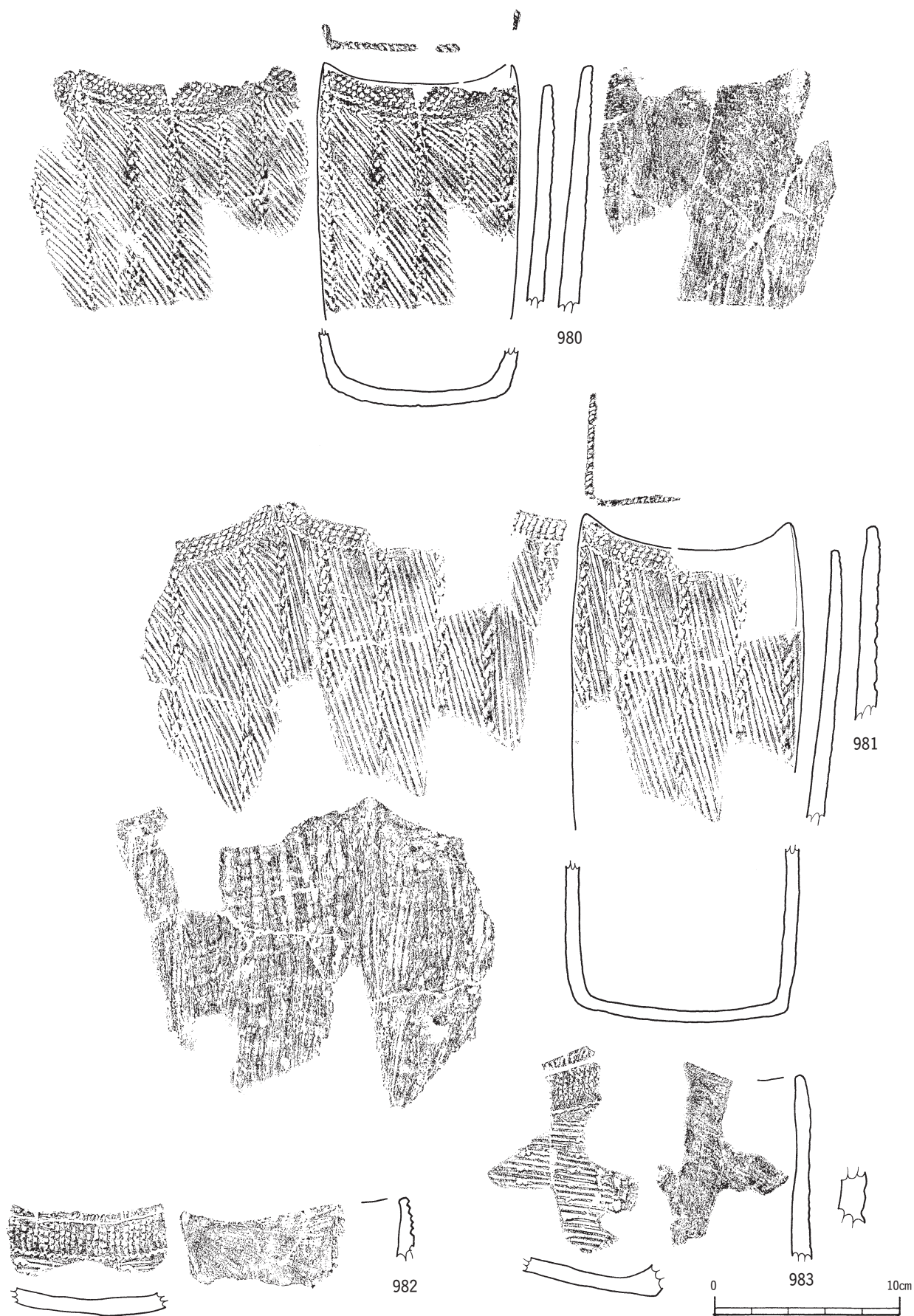
第194図 2類土器(7)



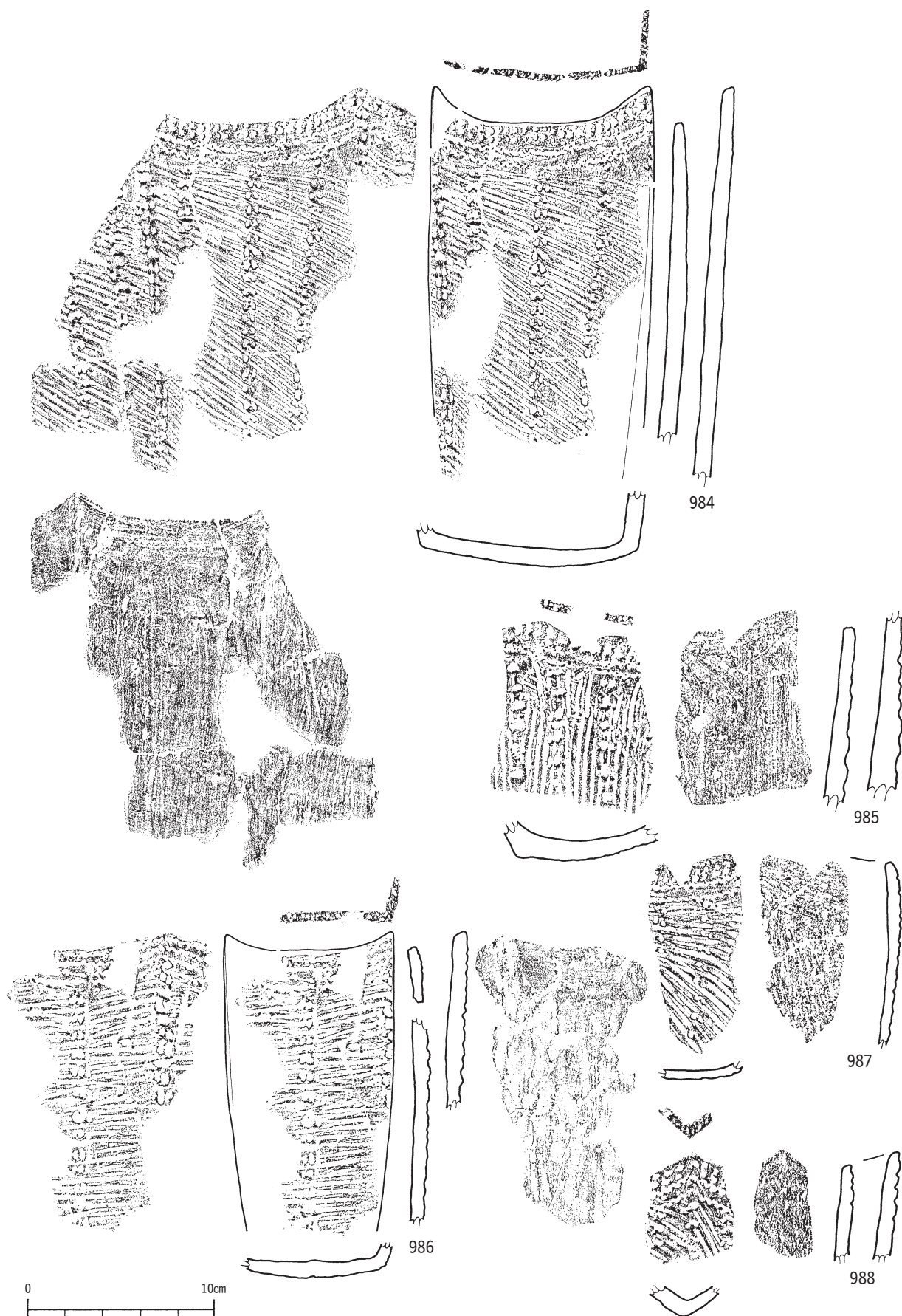
第195図 2類土器(8)



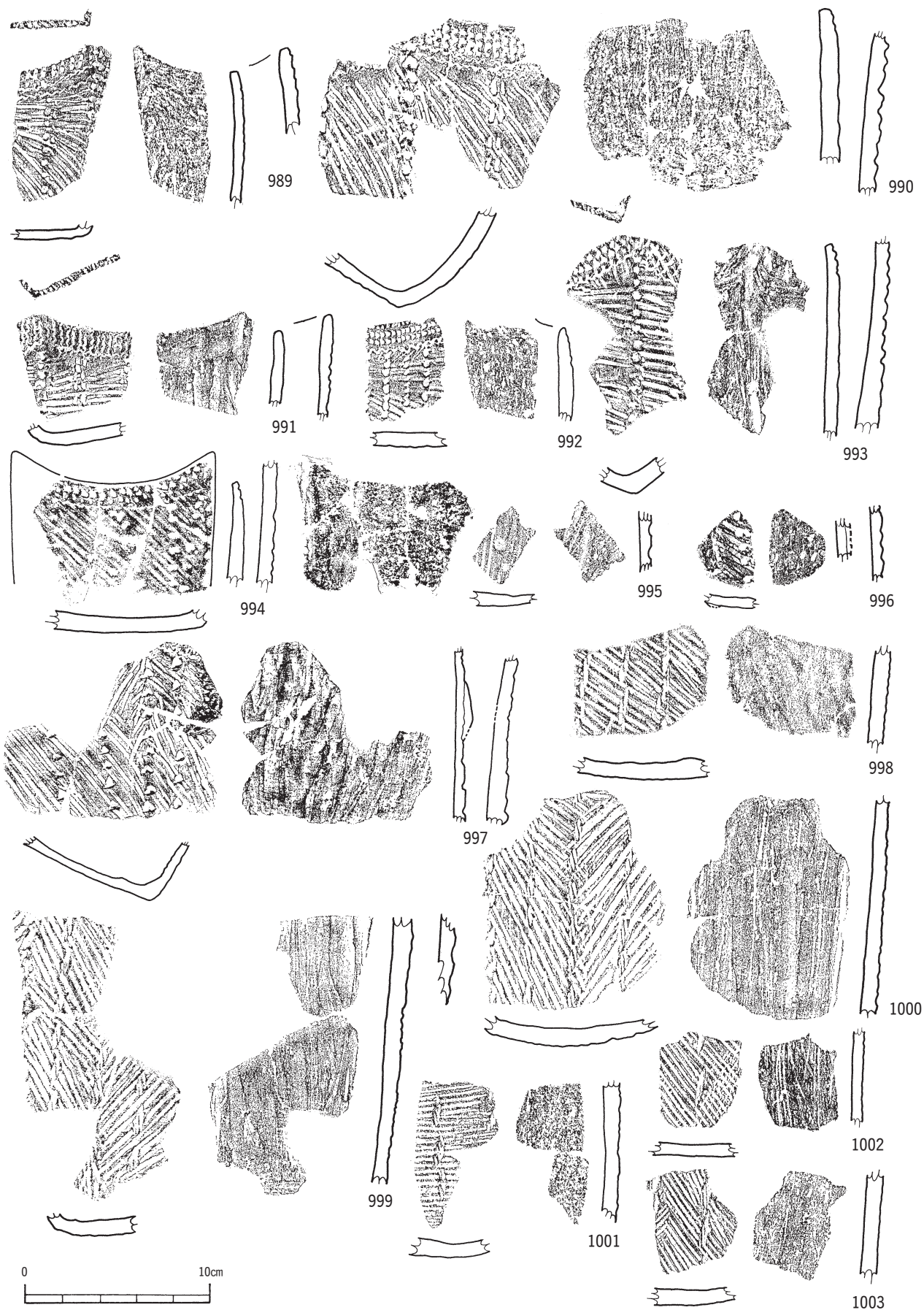
第196図 2類土器(9)



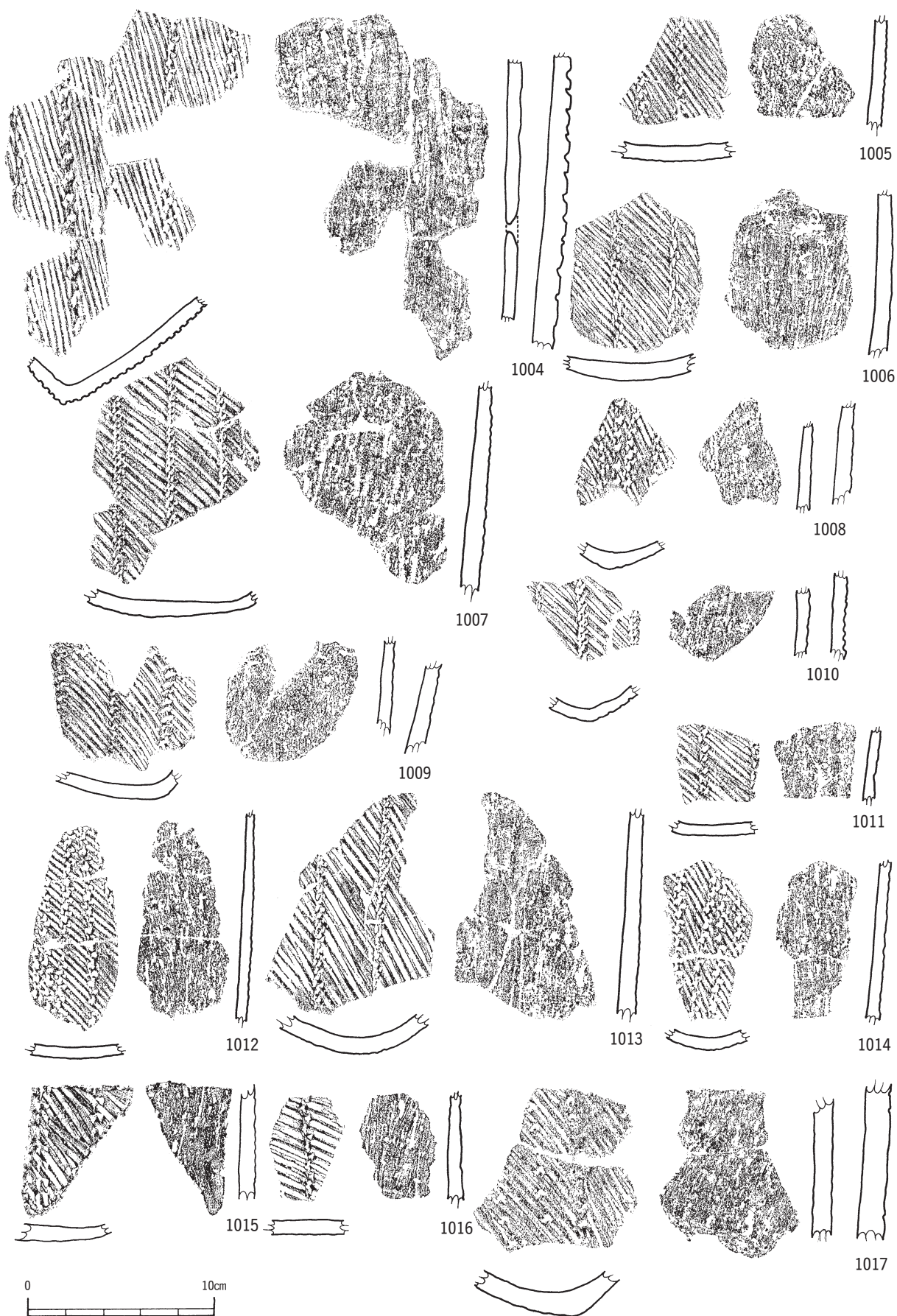
第197図 2類土器(10)



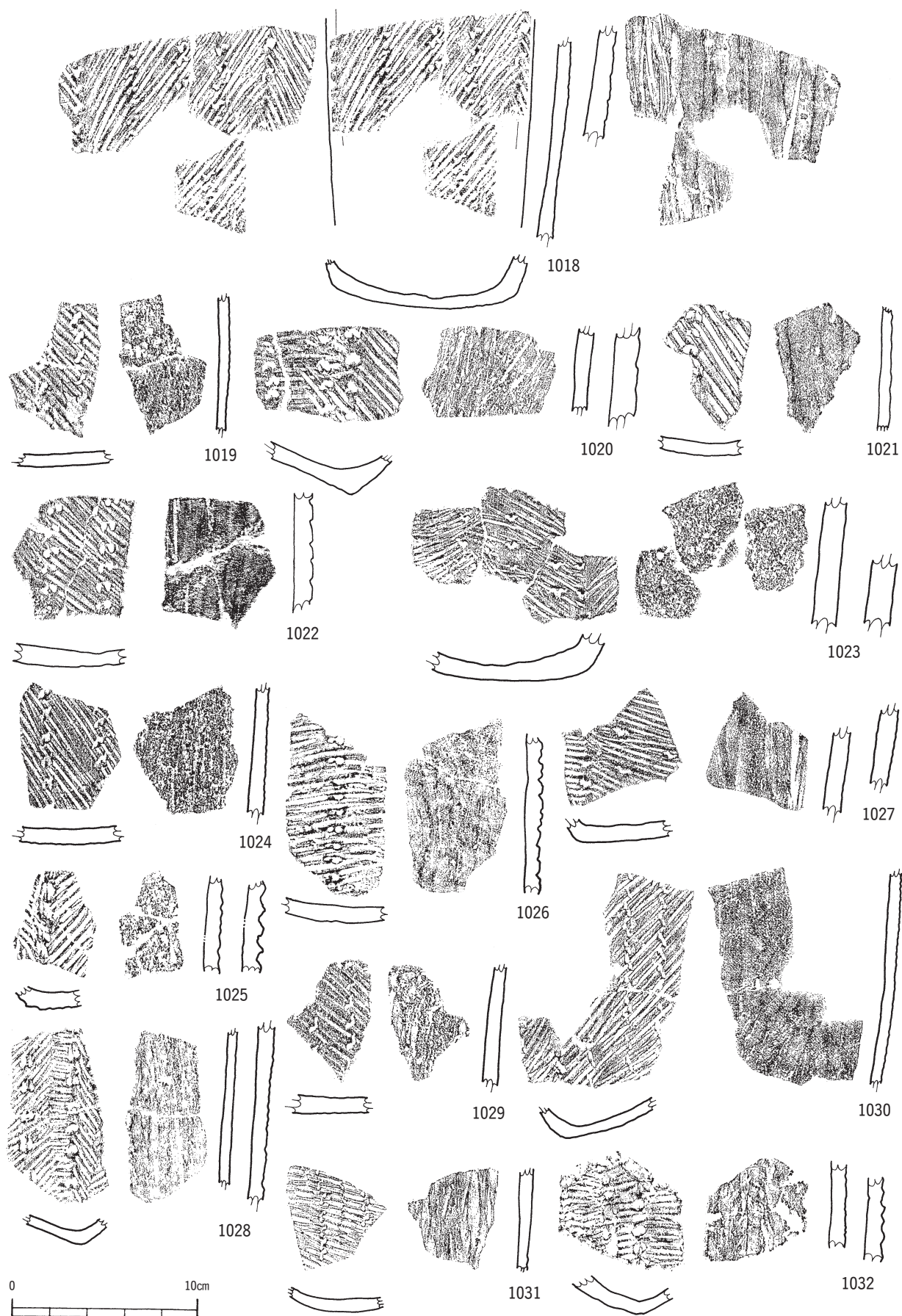
第198図 2類土器(11)



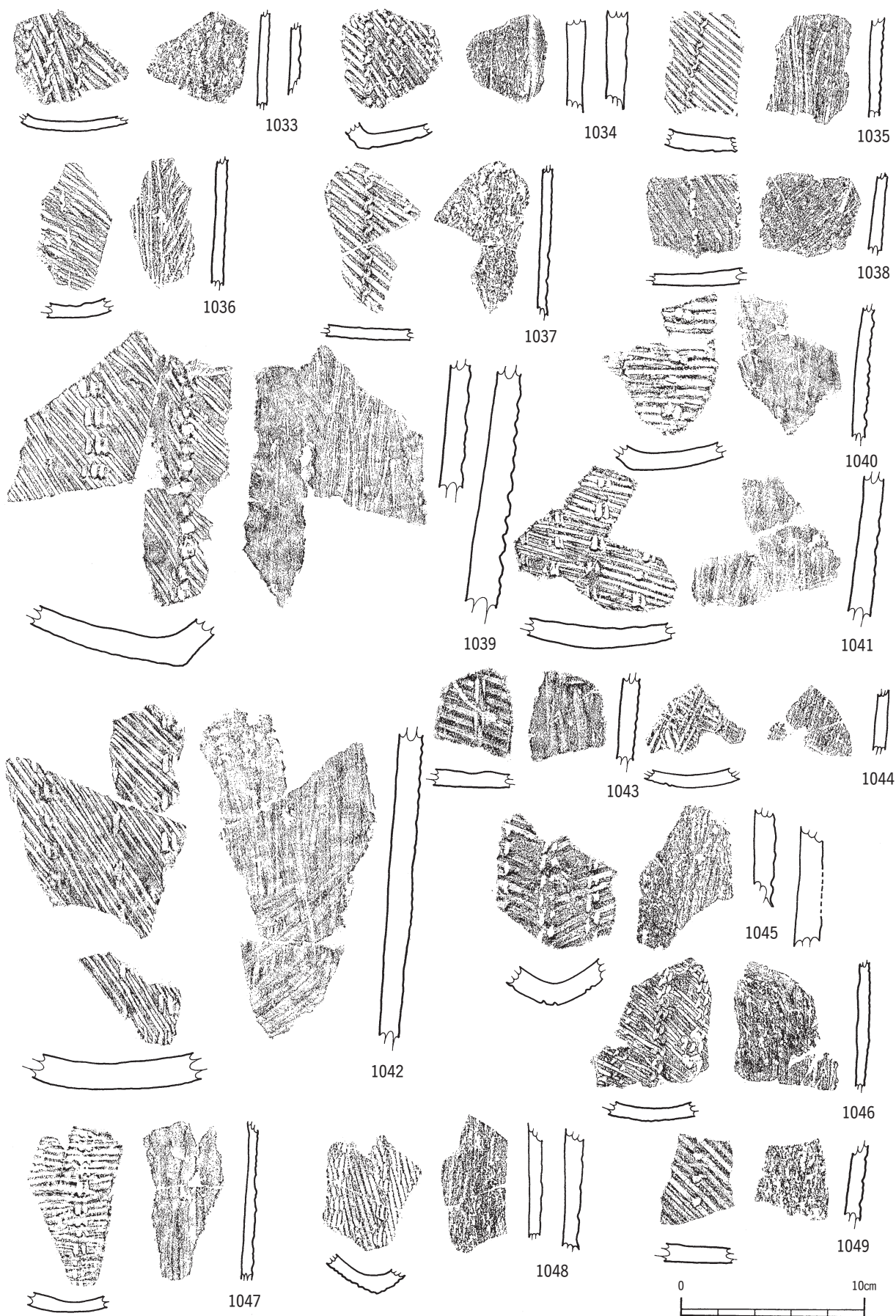
第199図 2類土器(12)



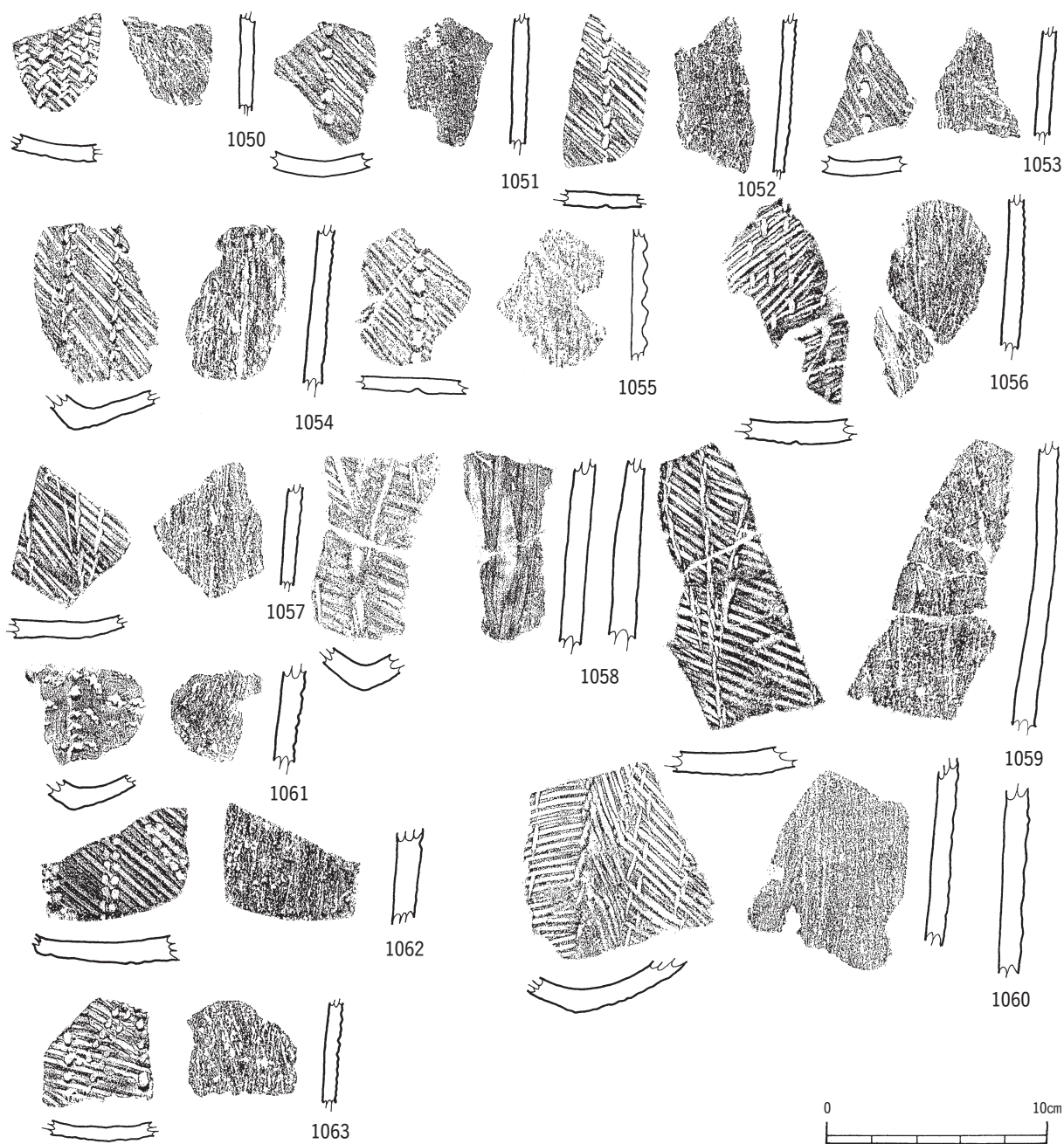
第200図 2類土器(13)



第201図 2類土器(14)

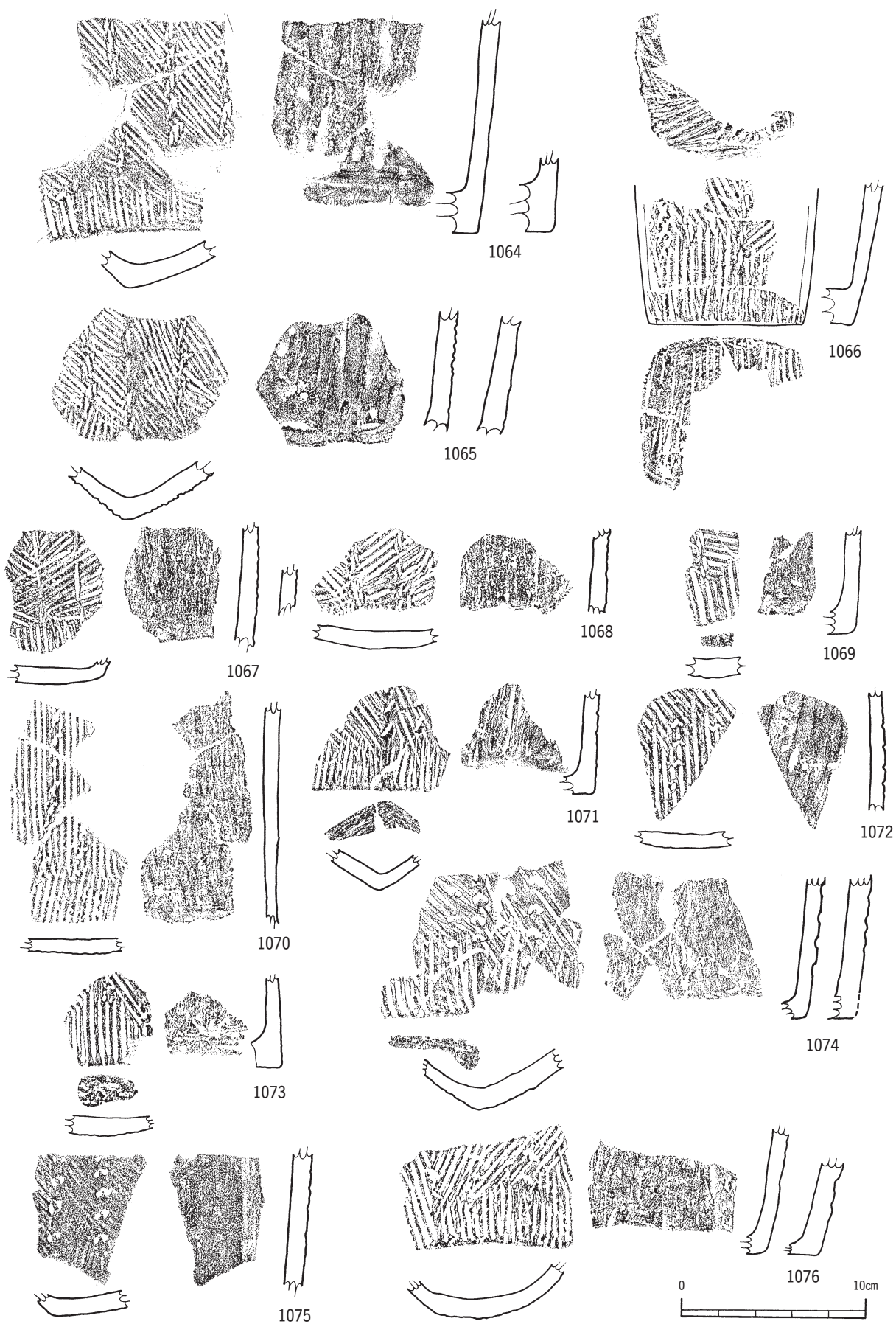


第202図 2類土器(15)

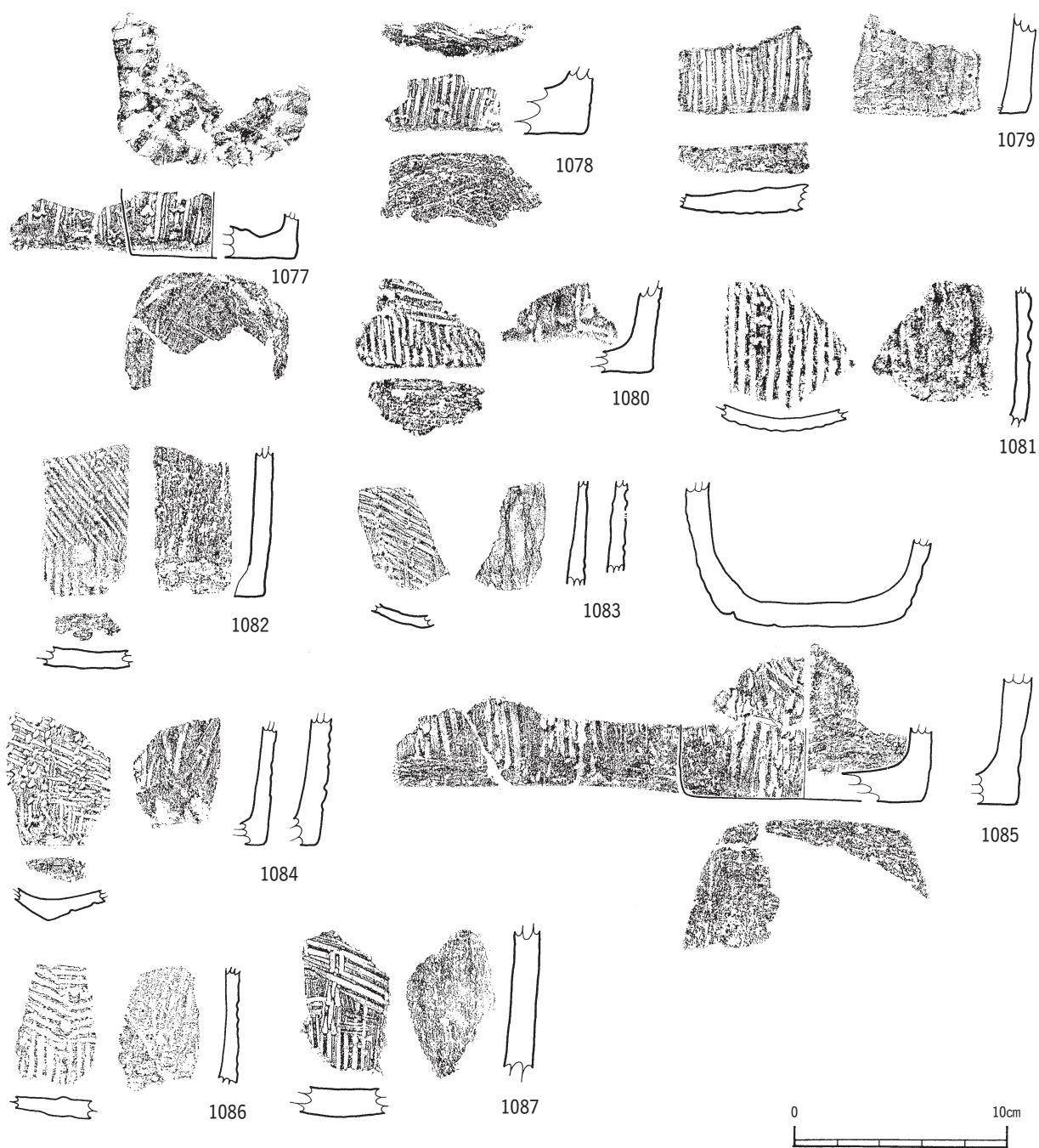


第203図 2類土器(16)

1064～1087は、胴部下位もしくは底部片である。いずれも、胴部の立ち上がり部分には縦位の貝殻条痕文が施される。底部外面は丁寧なナデやミガキで調整されている。なお、1066の底部外面には貝殻条痕文が施されている。



第204図 2類土器(17)



第205図 2類土器(18)

1088～1159は、斜位の貝殻条痕文の上に、1～3本を1組とする流水文を施す一群である。流水文は面に対して3列施され、角部には貝殻刺突を付するものが大部分である。また、口縁部の施文によって、1088～1098のように縦位の貝殻押圧文を施すタイプ、1099～1103のように横位の貝殻刺突文がめぐるタイプがある。

1088は、器高34.1cm、口径は長径16.9cm、短径15.8cm、底径10.7cmの完形復元土器である。器形は、口縁部～底部へ至るまで4つの面を持つ角筒形である。口縁部はわずかに内傾し、胴部でやや膨らむが直線的な形状を呈する。角部は口縁部から底部に至るまで形成されている。文様は、口唇部に刻みを施す。口縁部は、肋4条程度の縦位貝殻押圧文がめぐり、その下位には横位貝殻刺突文が2条めぐる。この両者は、切り合いから横位の貝殻刺突文が新しいと見られる。胴部は、斜位の貝殻条痕文を角部から面の中央部に向けて綾杉状に施し、その上から1面当たり縦位に3条の流水文を2本1組で施す。底部の立ち上がり部分には、縦位の貝殻条痕文を施す。角部には、縦位の貝殻条痕文を施した後、肋2条の貝殻刺突文が角部に沿って施されている。器面調整は、内面において縦位のケズリが施されるが、口縁部の一部で横位のケズリが観察できる。

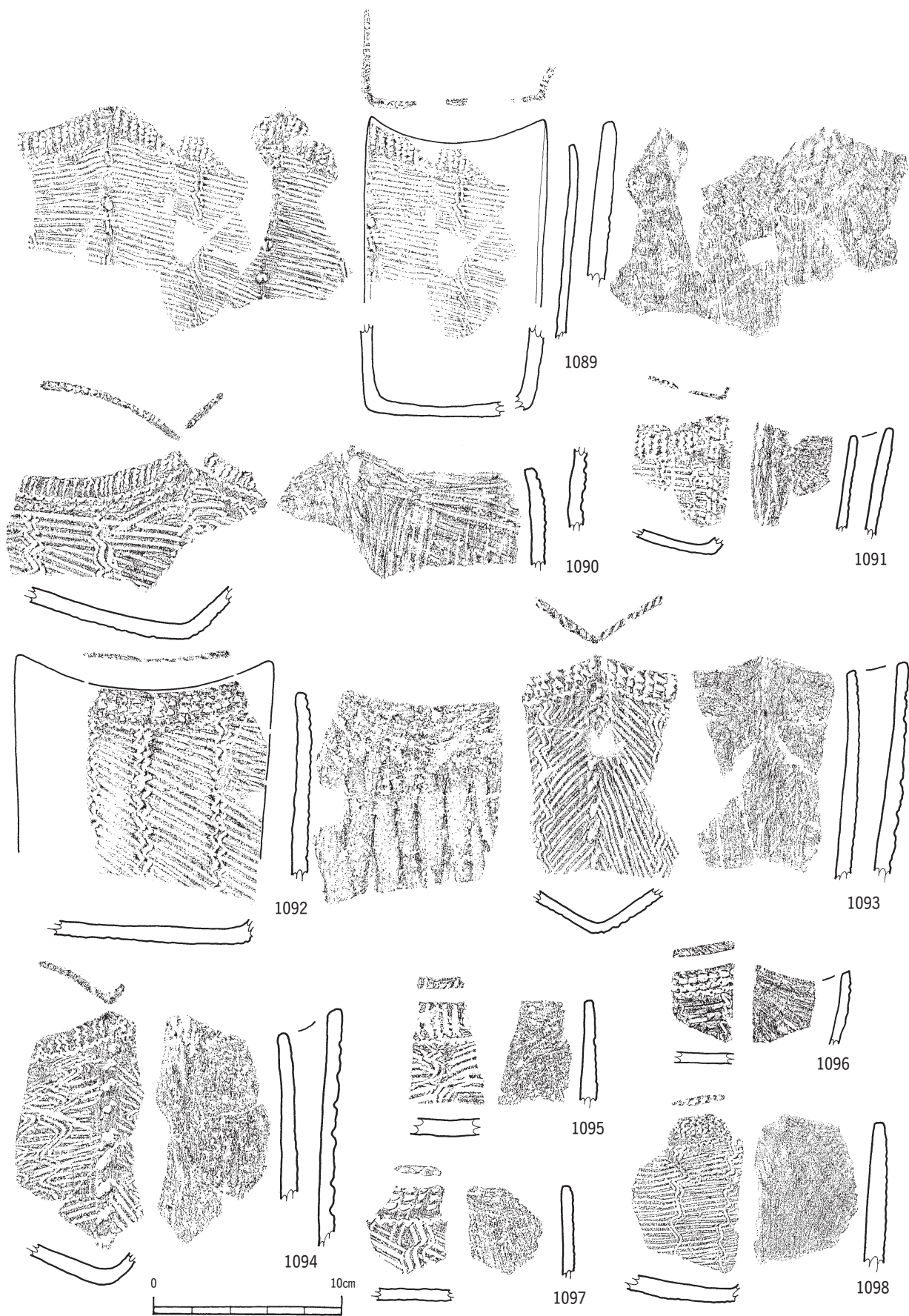
1100は、横位の貝殻刺突文の直下に、肋4条の縦位の貝殻刺突文がめぐると思われる。1101は、貝殻条痕文が向きを違って施される。

1104～1131は、胴部片である。1112、1128は、貝殻条痕文を向きを違って施す。1129は、縦位6本の流水文を施すが、流水文の向きが乱れるため、やや粗雑な印象を受ける。

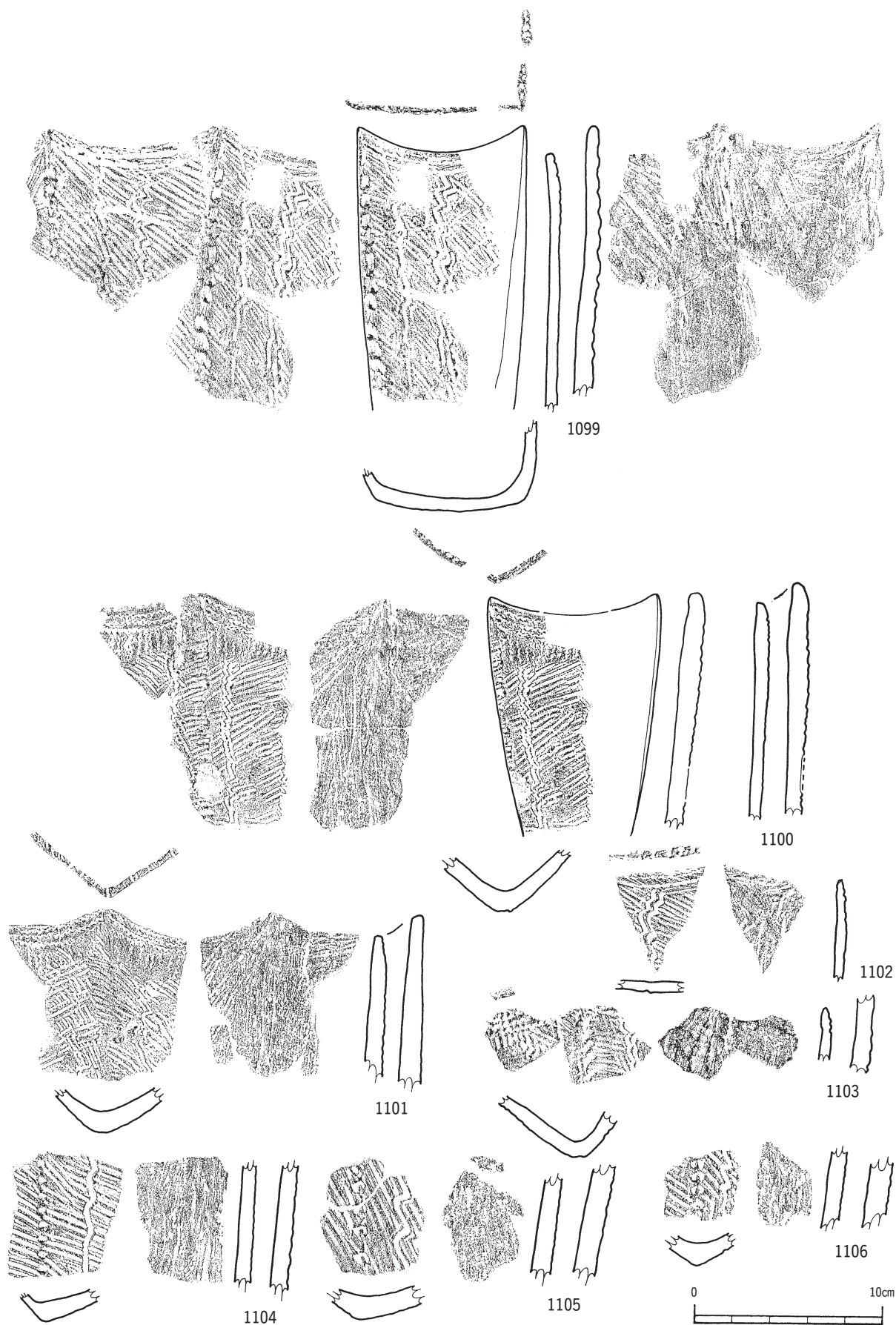
1132～1134は、胴部に流水文を直線状に施す一群である。1132は、胴部では横位の、角部付近では斜位の貝殻条痕文を施す。胴部の流水文は密に施される。1133は、縦位を基本とする貝殻条痕文をやや粗雑に施し、縦位2本の流水文を面に対して2条施す。外面には製作途中の補修孔が確認できる。どちらも口縁部には横位の貝殻刺突文がめぐる。

1135～1138は、流水文と直線状流水文を組み合わせる一群である。1135、1136は、流水文と斜位の直線状流水文とを重ねて施す。1137は、流水文の上に直線状流水文が乱れて施される。1138は、角部の貝殻刺突を挟む形で直線状流水文を施す。

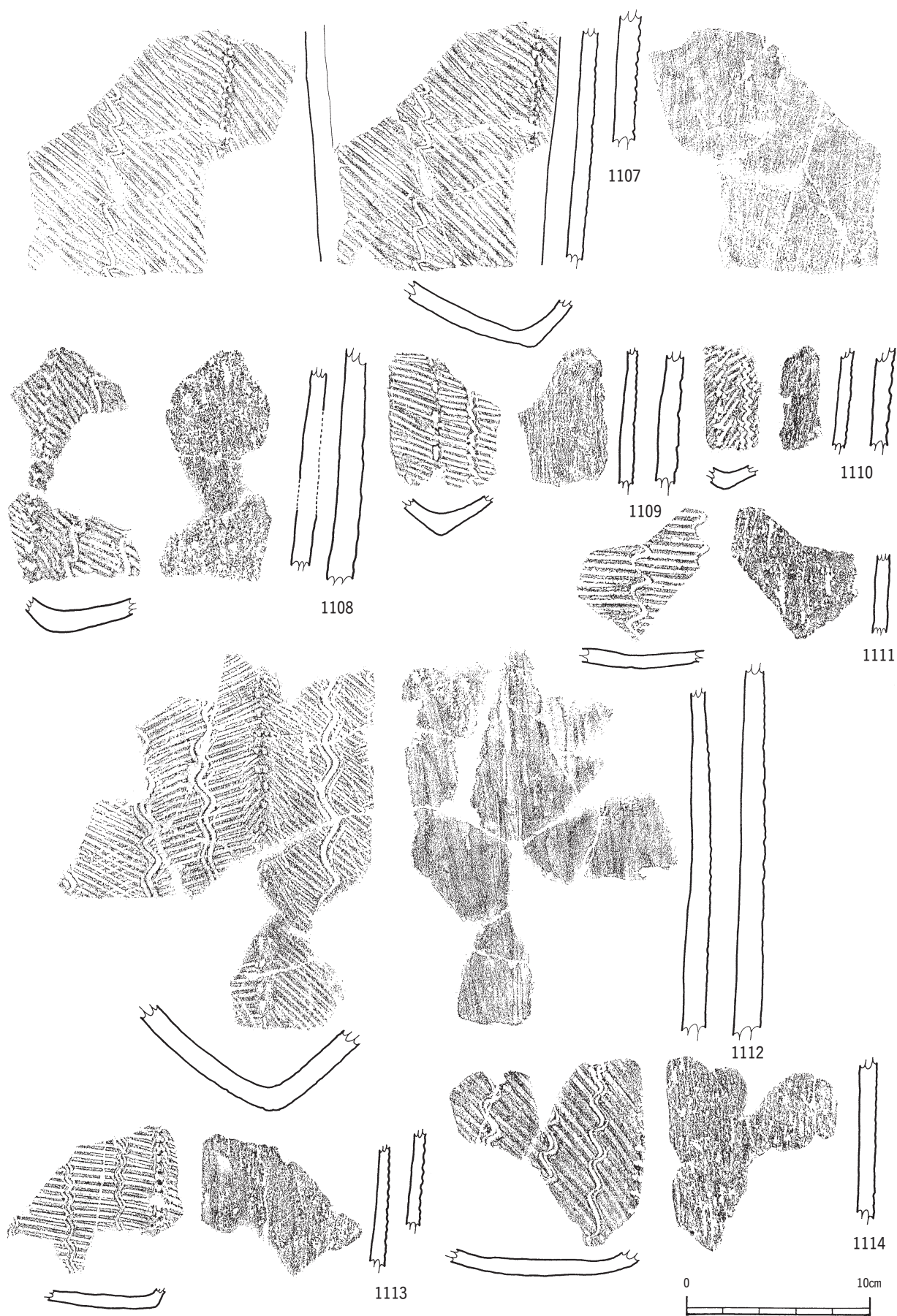
1139～1159は、胴部下位もしくは底部片である。いずれも胴部の立ち上がり部分には、縦位の貝殻条痕文が施される。1149は、底径11.0cmを測り、胴部の流水文は面に対して3列施されている。底部外面はミガキで調整される。1151、1159は、施文の流水文が、底部に近づくにつれ直線状を呈するのに対し、1155は、上部から直線状流水文を施していると思われる。



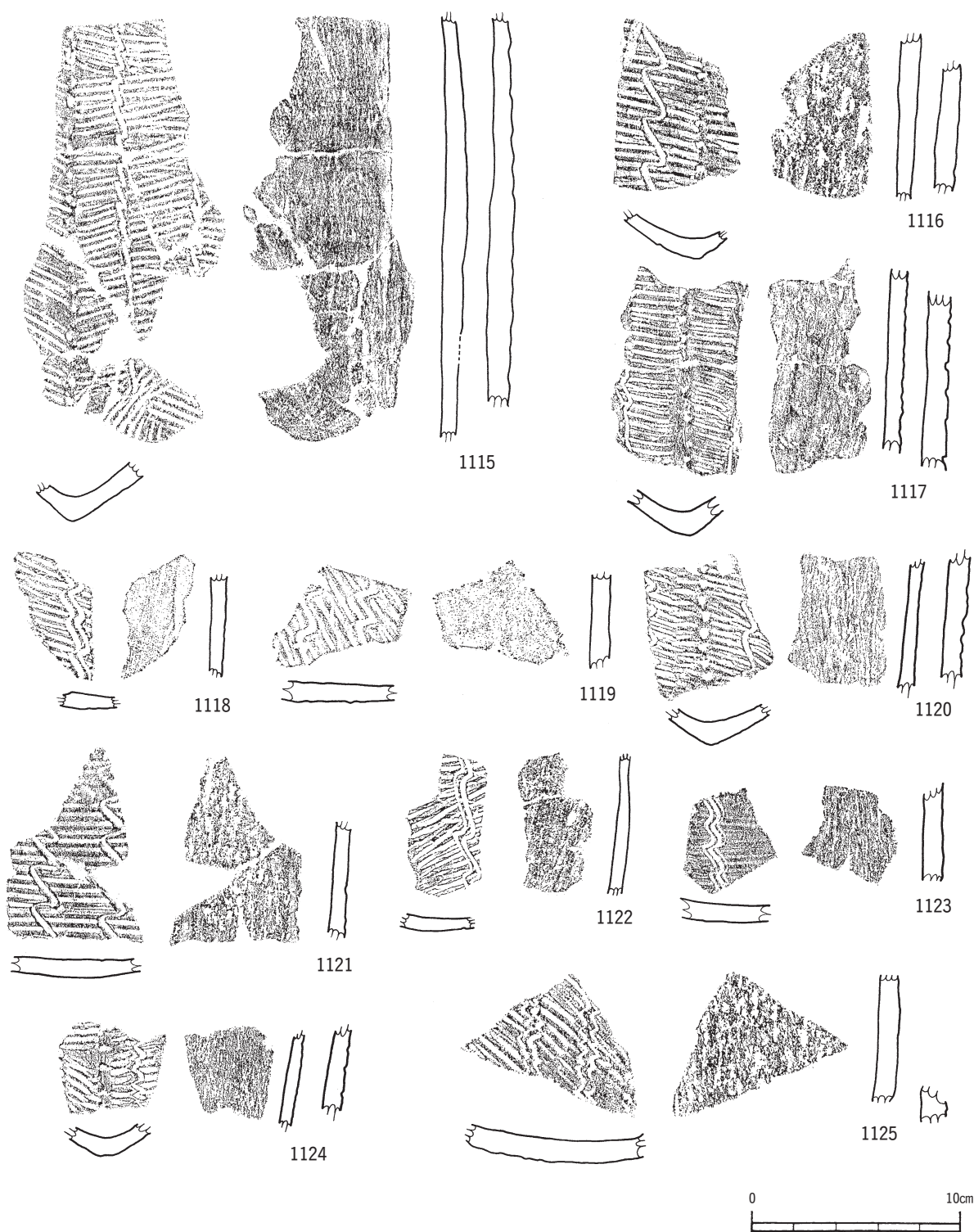
第206図 2類土器(19)



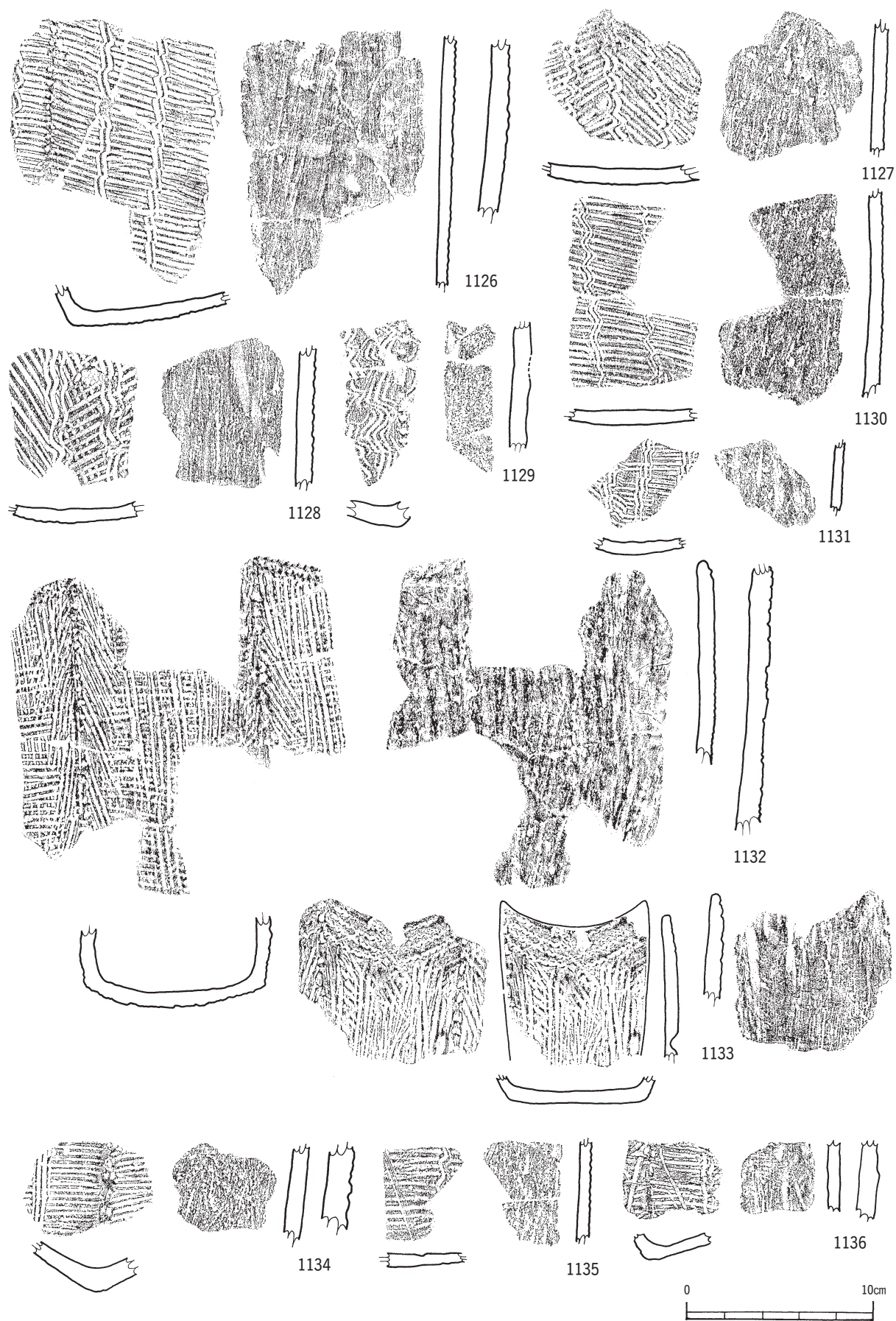
第207図 2類土器(20)



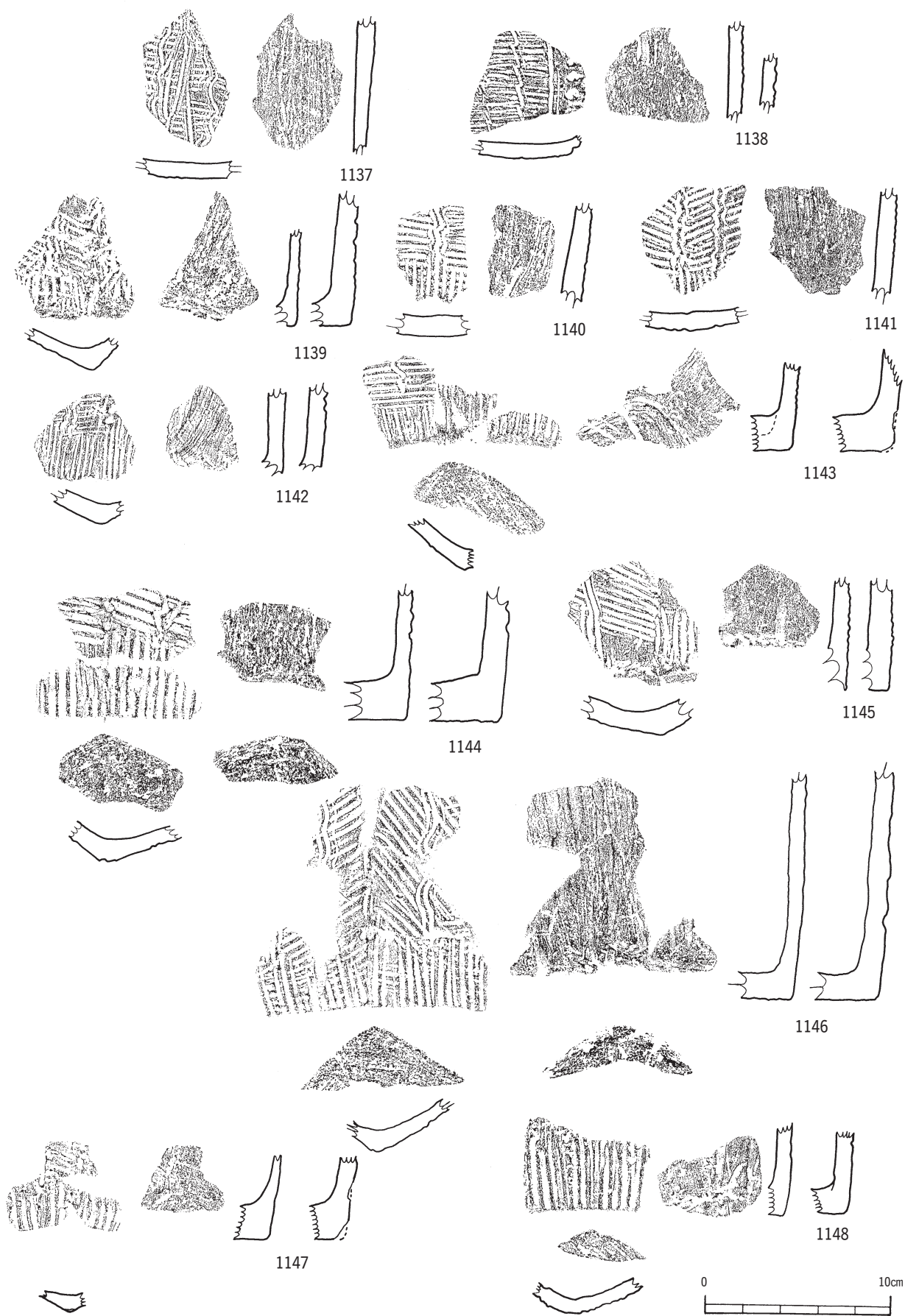
第208図 2類土器(2)



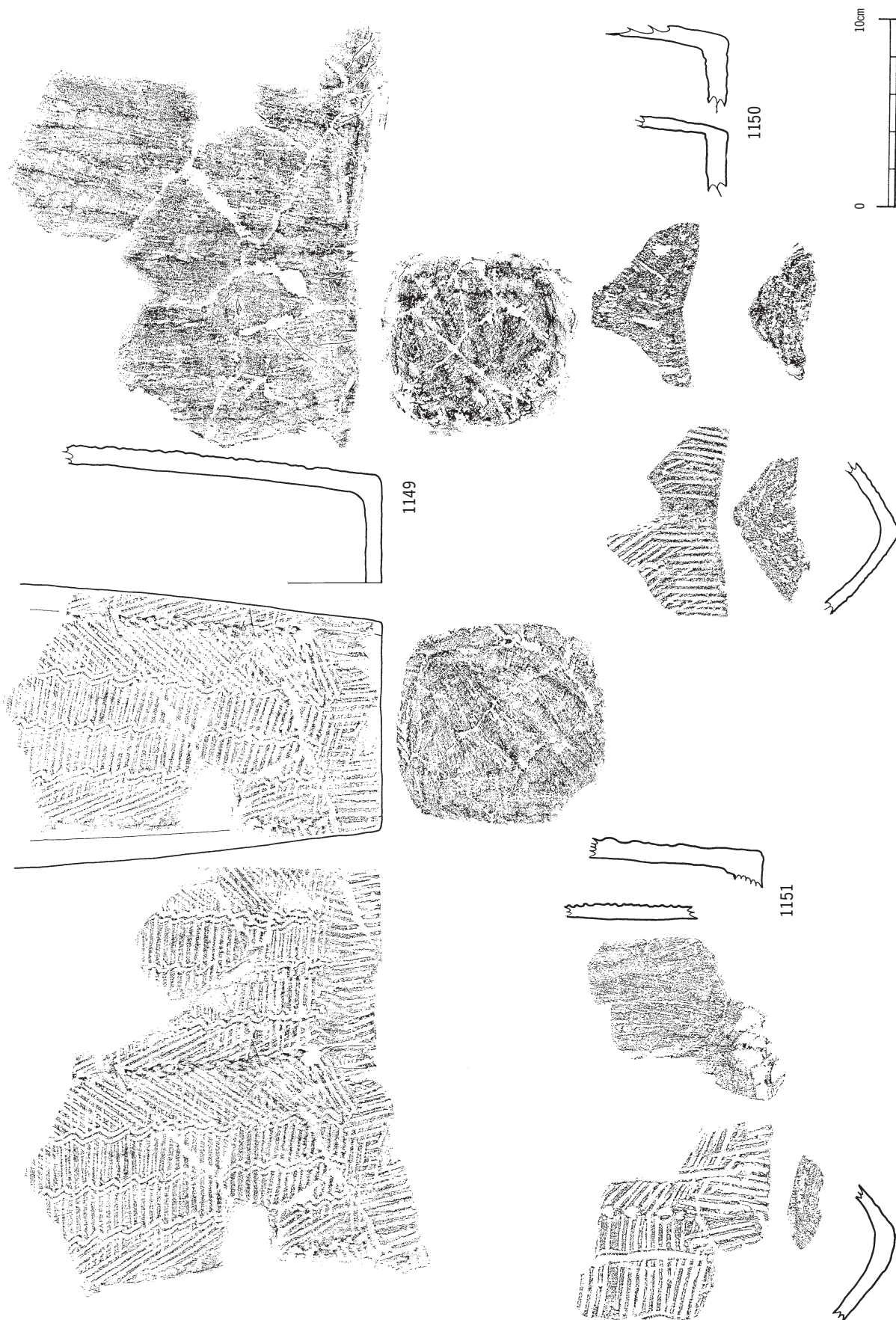
第209図 2類土器(22)



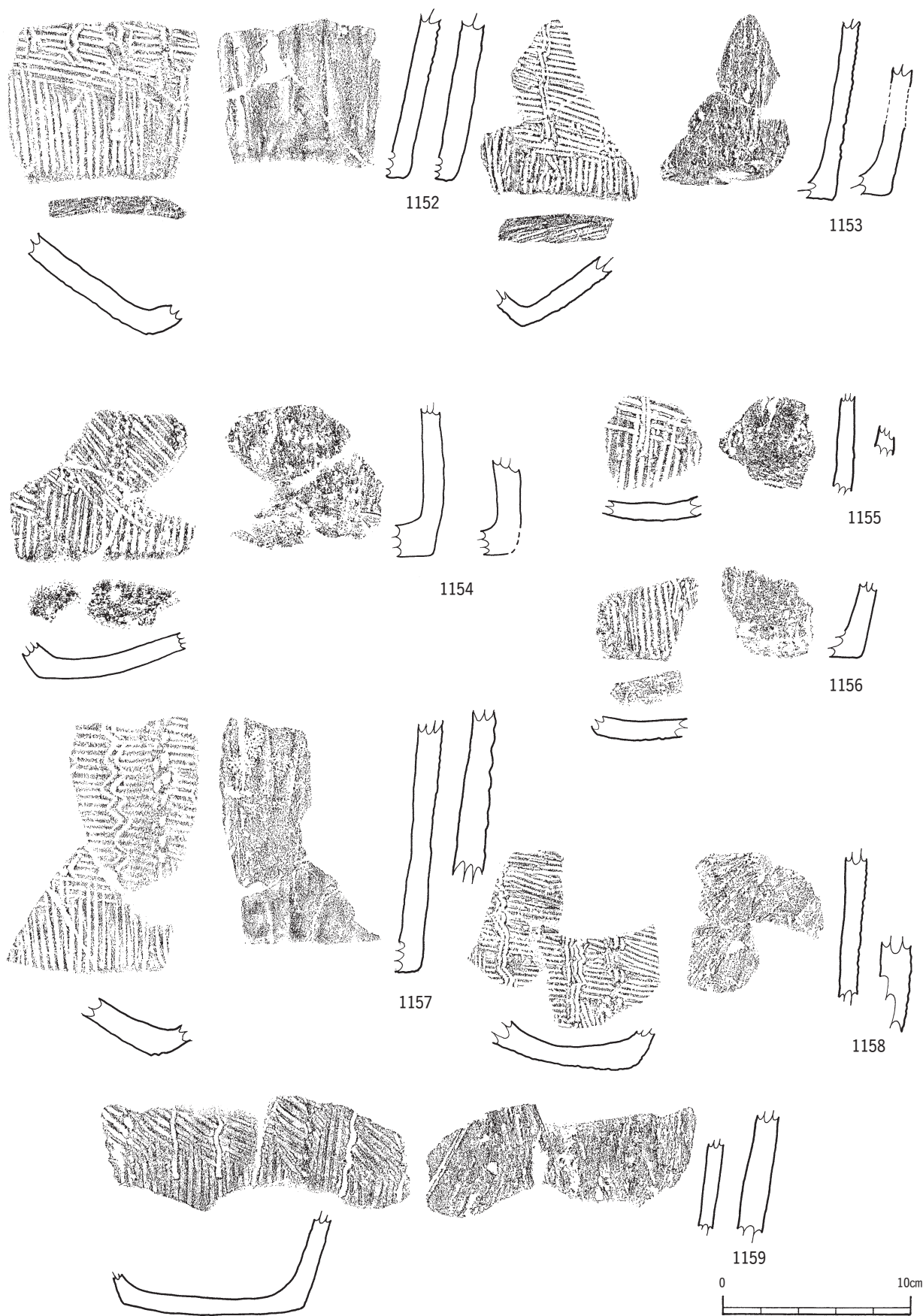
第210図 2類土器(23)



第211図 2類土器(24)



第212図 2類土器(25)

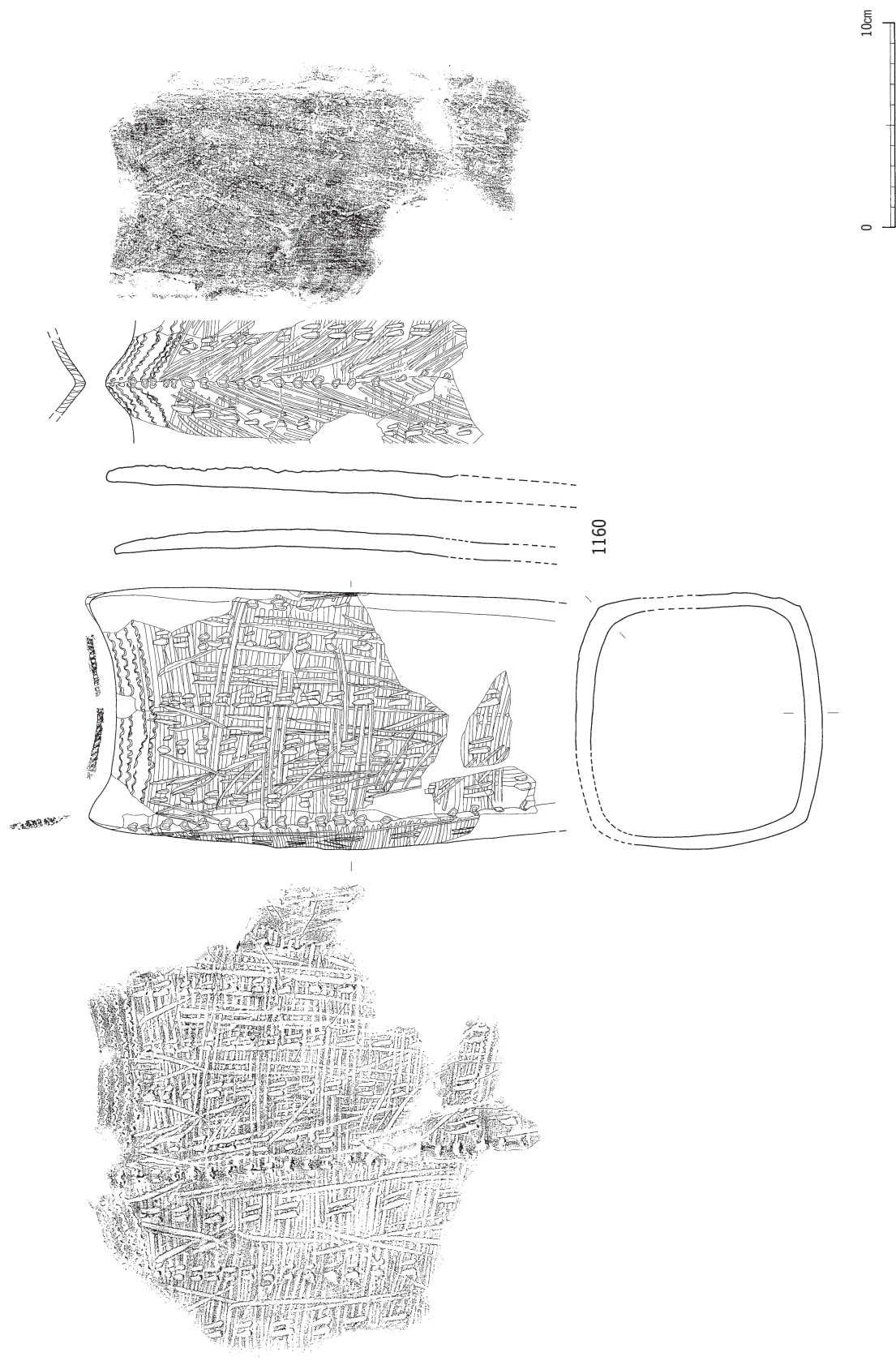


第213図 2類土器(26)

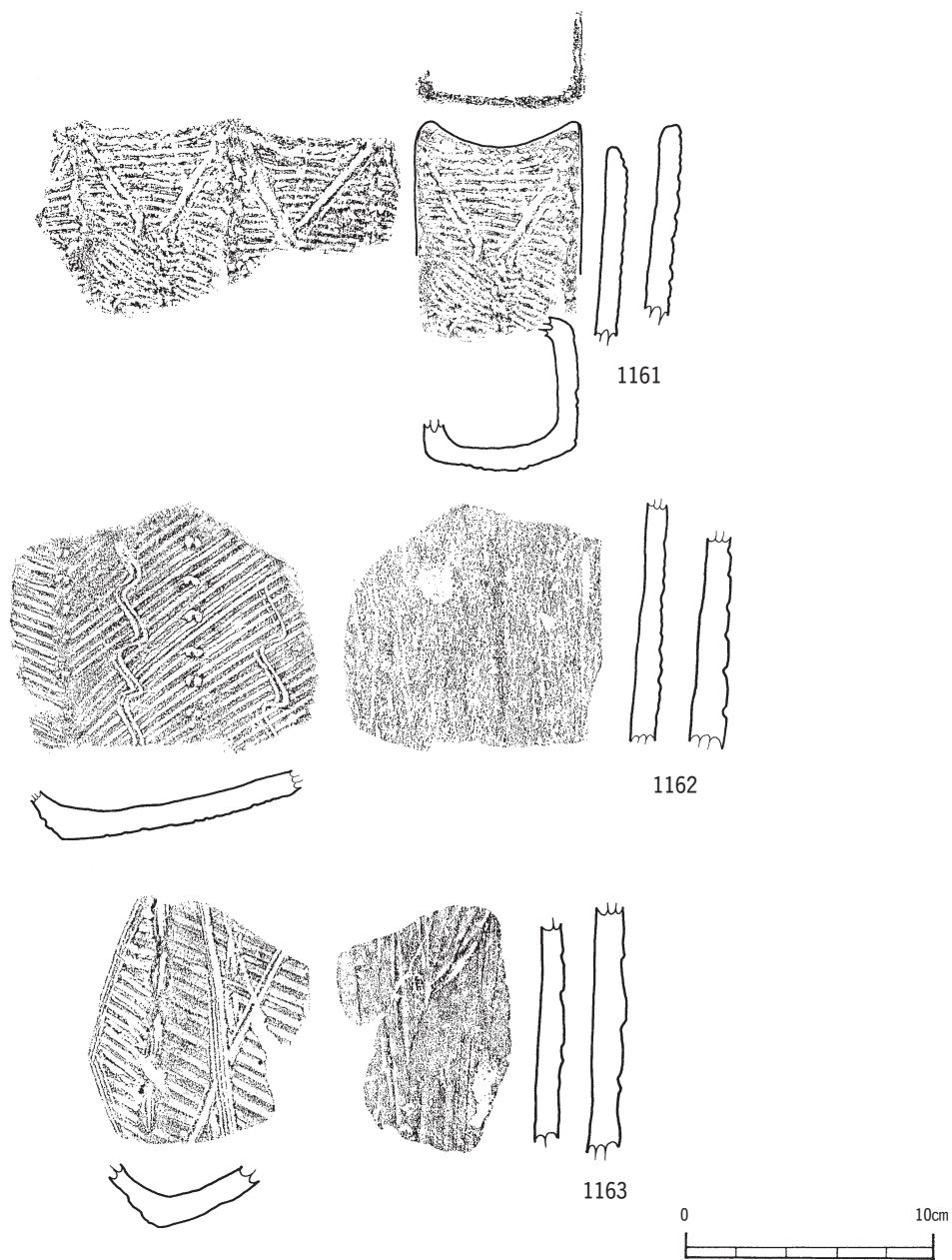
1160～1163は、横位もしくは斜位の貝殻条痕文の上に、刺突と流水文あるいは直線状流水文を組み合わせて施文する一群である。

1160は、口径10.5cmの半完形の復元土器である。器形は、4つの面を有する角筒形である。口縁部はわずかに内傾し、胴部でやや膨らむが直線的な形状を呈する。文様は、対面を意識しているようである。基本的には、口縁部に横位貝殻刺突文を4条めぐらせ、胴部は貝殻条痕文の上に連点ないし「ハ」字状の施文やY字状の沈線文などを重ね、角部には「ハ」字状の刺突文が施される。実測面をa面として時計回りにb c d面と呼び説明を加えたい。a面では、横位貝殻条痕文の後に「ハ」字状の貝殻刺突文を4列施し、その間にY字状を施す。しかし、その規則はルーズである。b面では、「ハ」字状の貝殻刺突文は3列となりYもしくはX字状の沈線文がその間に施文される。この面に関しては、他の面と比べて、施文後に何らかの理由で付着したと考えられる指紋が残されている。c面では、「ハ」字状の貝殻刺突文は4列で、沈線文は見られない。地文である貝殻条痕文が部分的に綾杉状に近い状態で施文されている。d面では、「ハ」字状の貝殻刺突文は3列で、地文に関しては斜位で不規則な印象がある。なお、各面共に残存器高下1／3のところで色調の変化が認められる。被熱を受けていた範囲であると思われる。内面調整は、ケズリを基本として胴部では下から上へ、口縁部では横位にその痕跡が認められる。

1161は、小型の復元土器である。口唇部の波頂部分がやや肉厚になっている。文様は口縁部に横位貝殻刺突文が2条施され、胴部は貝殻条痕文後に2本1組の条痕文と刺突文とを重ねている。内面調整は、ケズリ後ナデが施される。1162は、流水文と貝殻刺突とを交互に施している。1163は、短い断続的な貝殻刺突線文に、斜位2本の沈線と斜位4本の沈線とをX字状に重ねる。



第214図 2類土器(27)



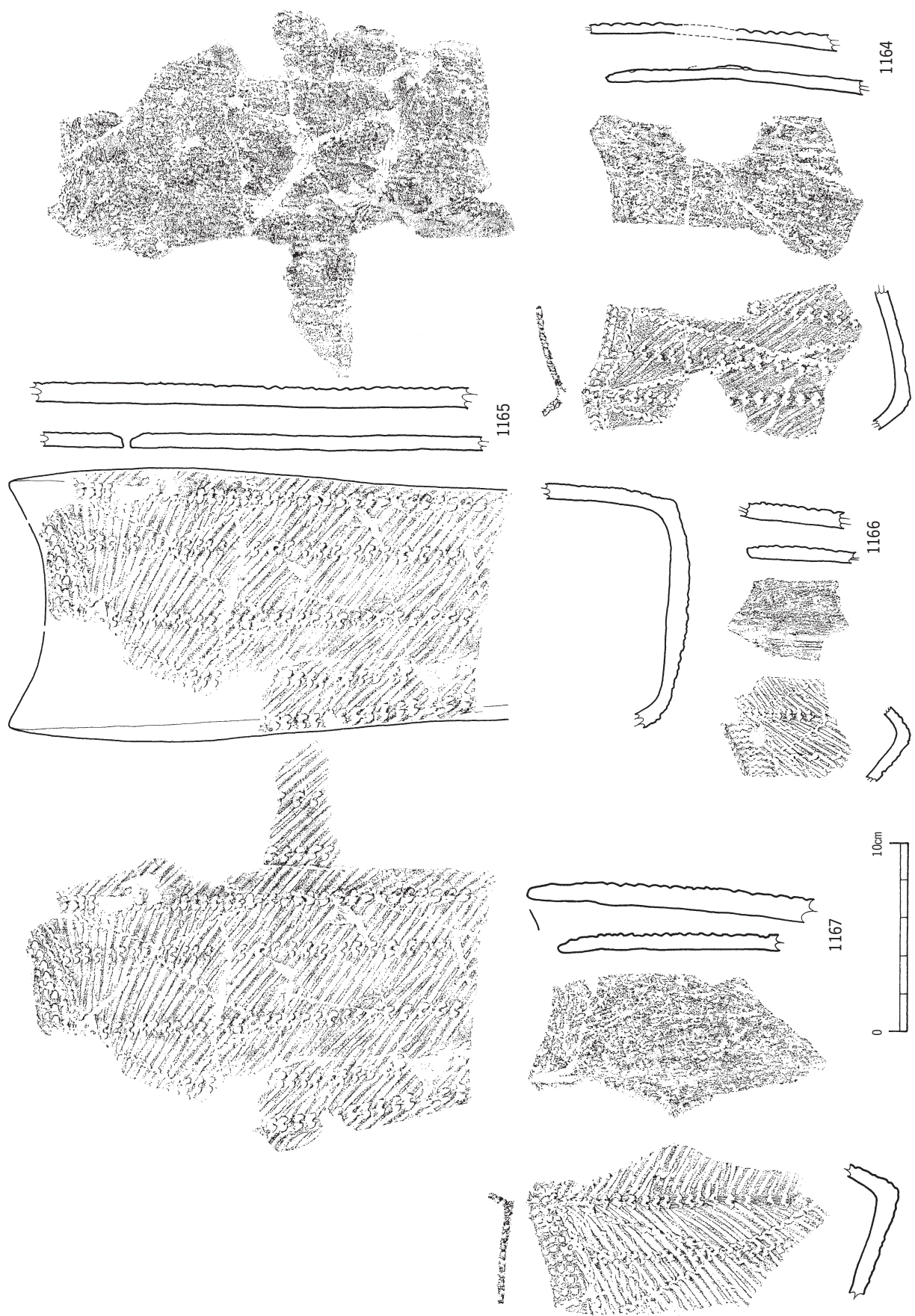
第215図 2類土器(28)

1164～1221は、口縁部に縦位の貝殻押圧文を施し、斜位の貝殻条痕文の上に、V字もしくはX字状の斜位の貝殻刺突文と断続的な貝殻刺突とを組み合わせで施文する一群である。

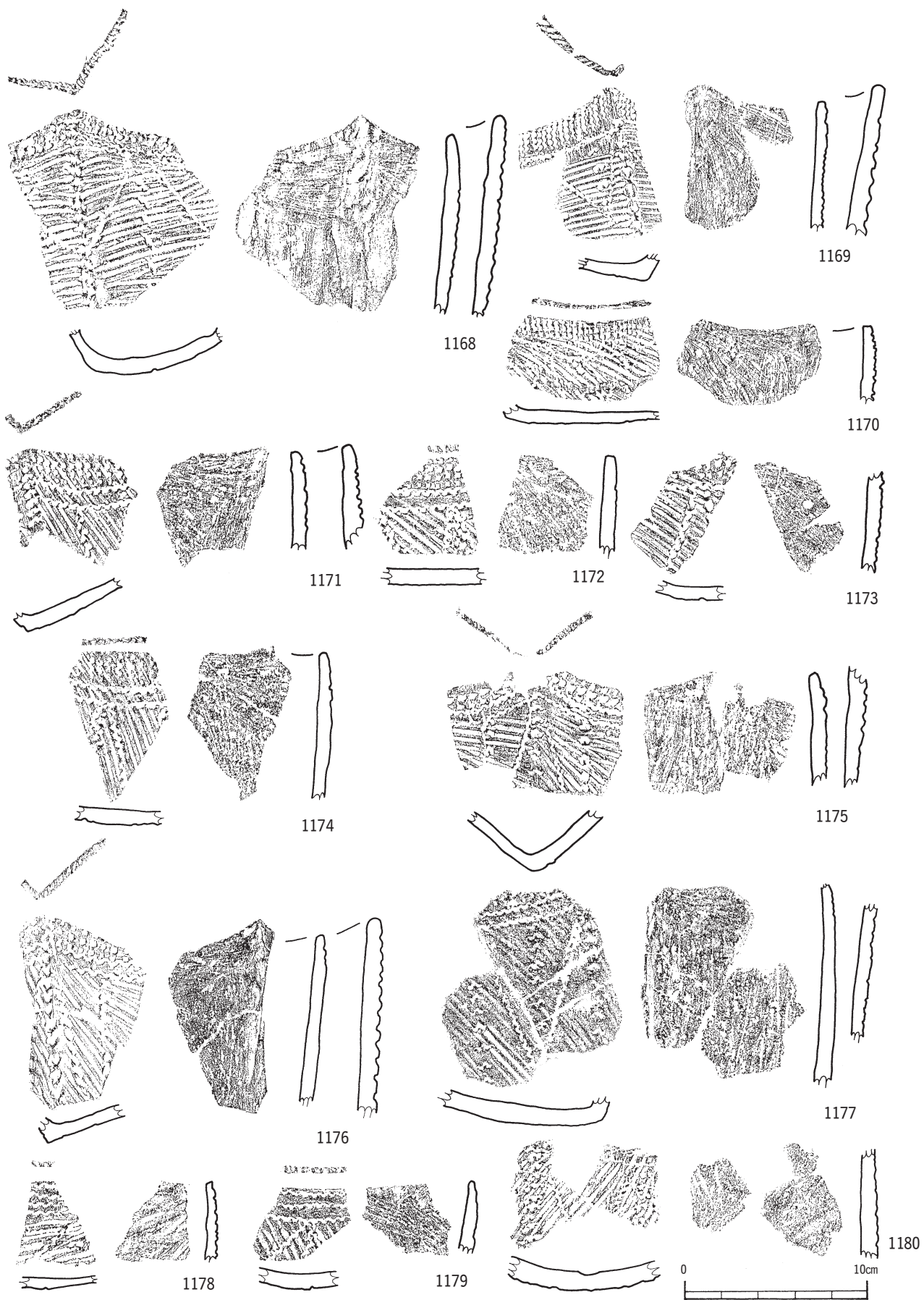
1164～1192は、口縁部片である。1164～1167は、斜位の貝殻刺突文がX字状に施すもので、1164は斜位の貝殻刺突文をX字状に2組並べて施し、その交点を通るように断続的な貝殻刺突を面に対して3列施す。また、面中央の貝殻刺突の上にのみ、長さ4.8cm程度の大型の楔形貼付文をナデで貼り付ける。1168は、斜位の貝殻刺突文がV字状に施される。1171～1181は、斜位の貝殻刺突文をV字もしくはX字状に施すものの、どちらかはっきりしない。なお、1178～1181の口縁部には、横位の貝殻刺突文が施されている。

1182～1185は、刺突の形態が特殊なタイプである。1184はやや長い縦位の貝殻刺突と斜位の貝殻刺突文とを三叉状に組み合わせている。1183、1184は、斜位の貝殻刺突文をV字状に施し、その頂点から貝殻刺突もしくは短刺突線文を施し、結果的にY字状の施文とする。1185は、面中央部に楔を模した張り出し部がある。外面はナデ調整の後、ランダムな貝殻条痕文が施される。口縁部には、肋2～3状の貝殻押圧文が縦位に施され、直下に横位の貝殻刺突文が1条めぐる。胴部は、V字状あるいはノ字状の斜位の貝殻刺突文が施され、楔様張り出し部の下には貝殻刺突が縦位に施される。内面はケズリが施される。このような器形を呈するものは、1点のみである。

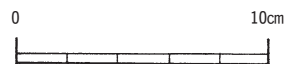
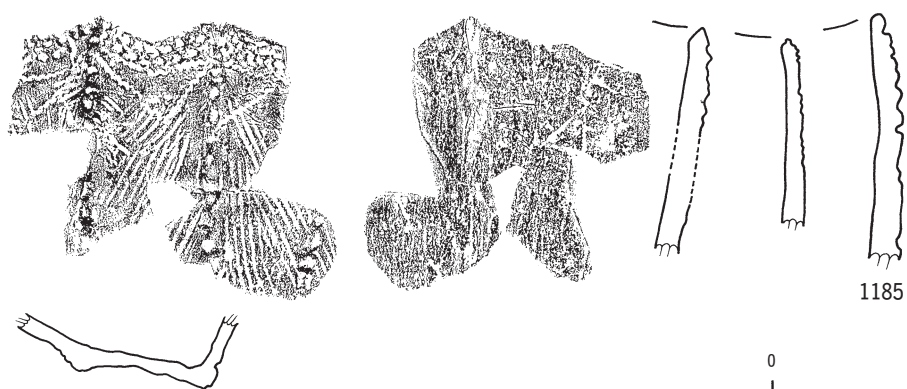
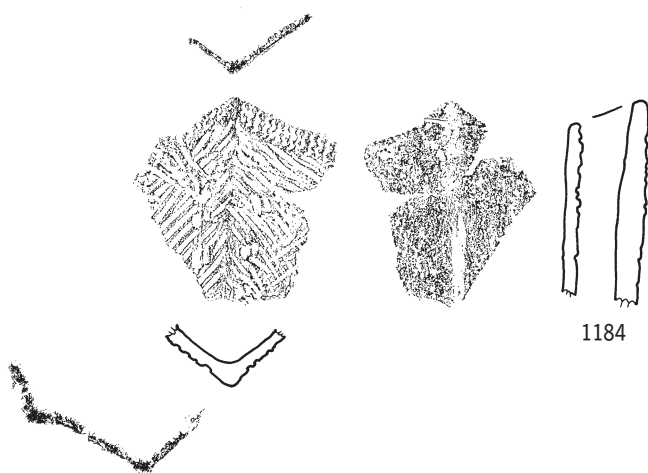
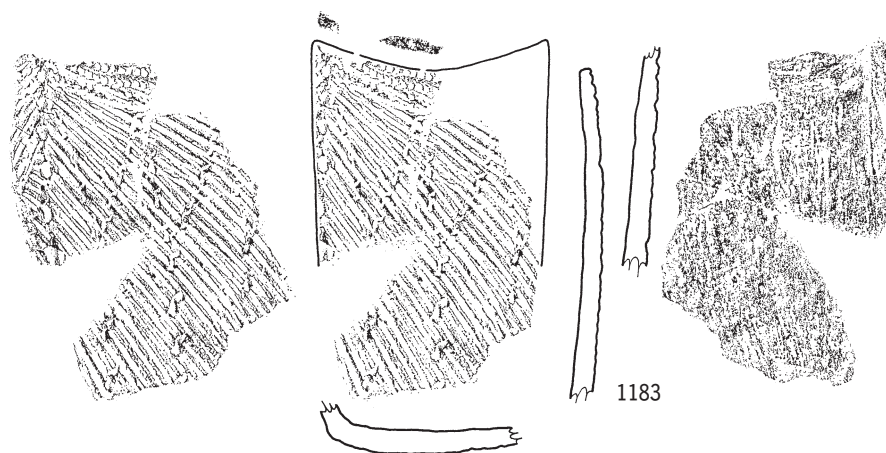
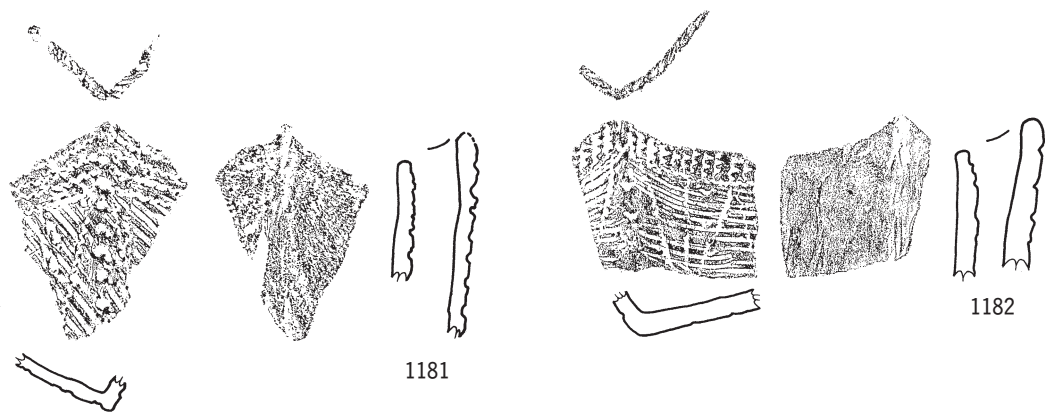
1186～1192は、斜位の貝殻刺突文を二重に施すが、斜位の貝殻刺突文は他と同様V字あるいはX字状に施される。1189は、胴部に斜位の貝殻刺突を上から下に密に施し、斜位の二重貝殻刺突文をV字状に重ねるが、この刺突文は間隔を開けて下部に再度施される。



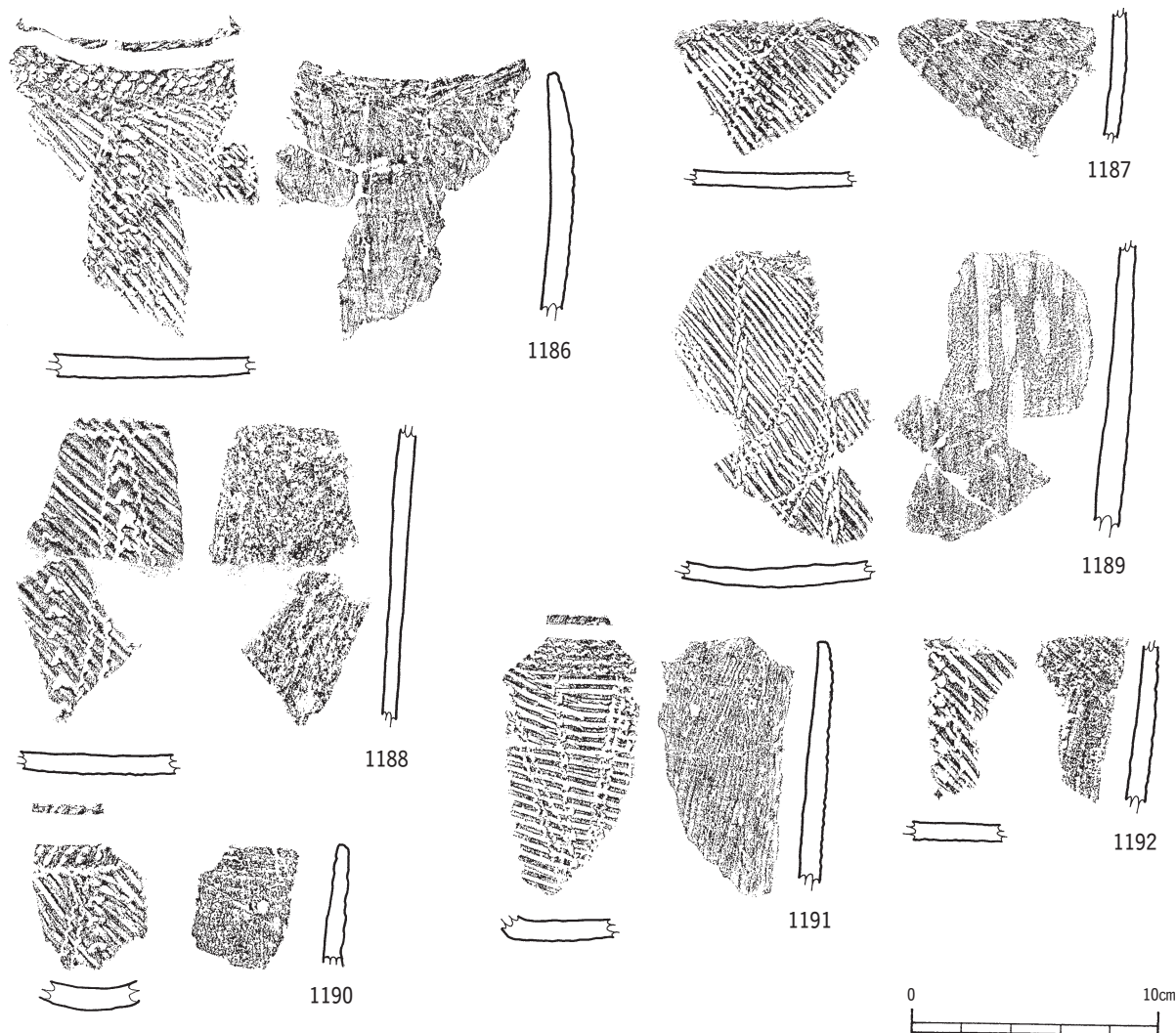
第216図 2類土器(29)



第217図 2類土器(30)



第218図 2類土器(31)

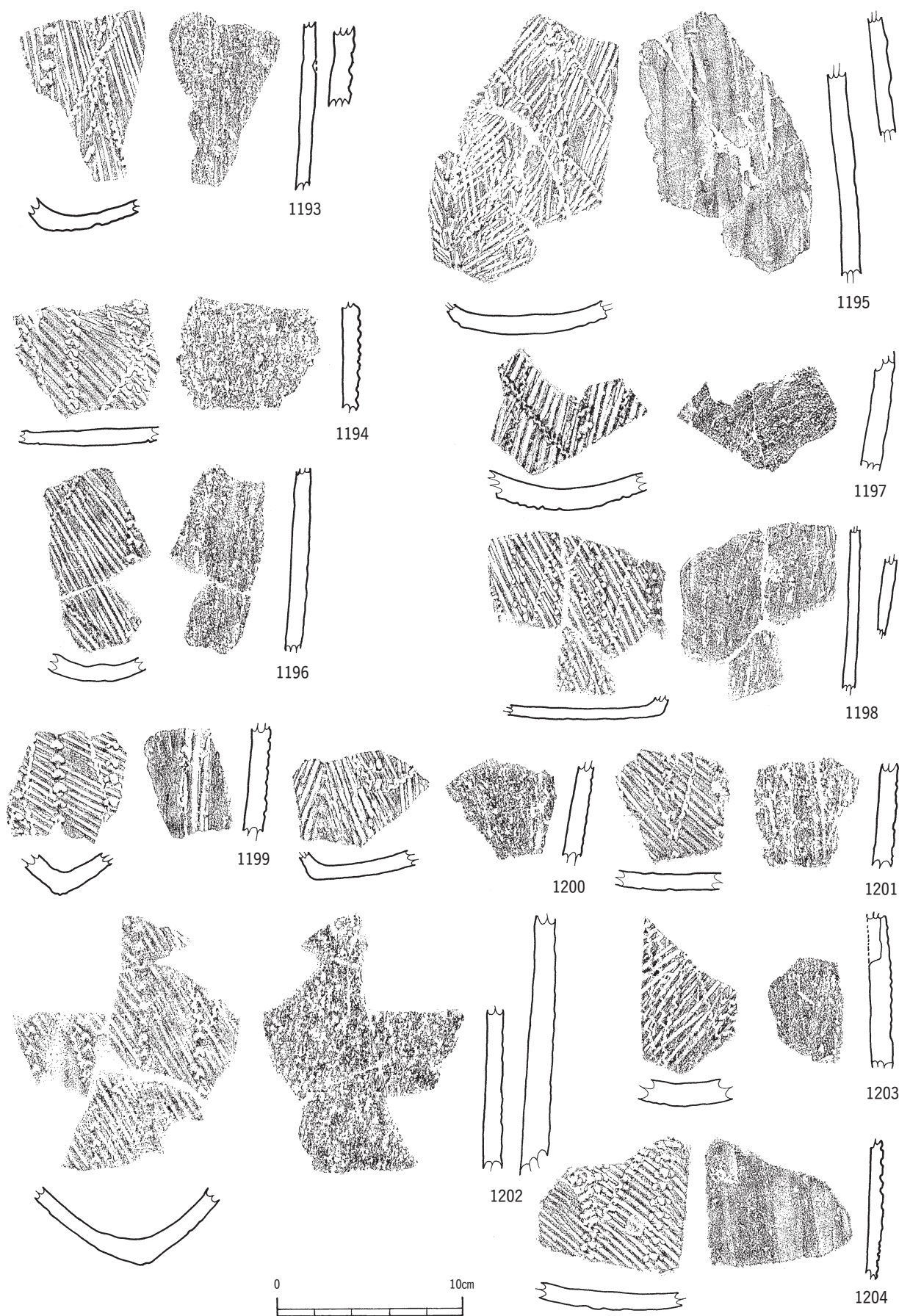


第219図 2類土器(32)

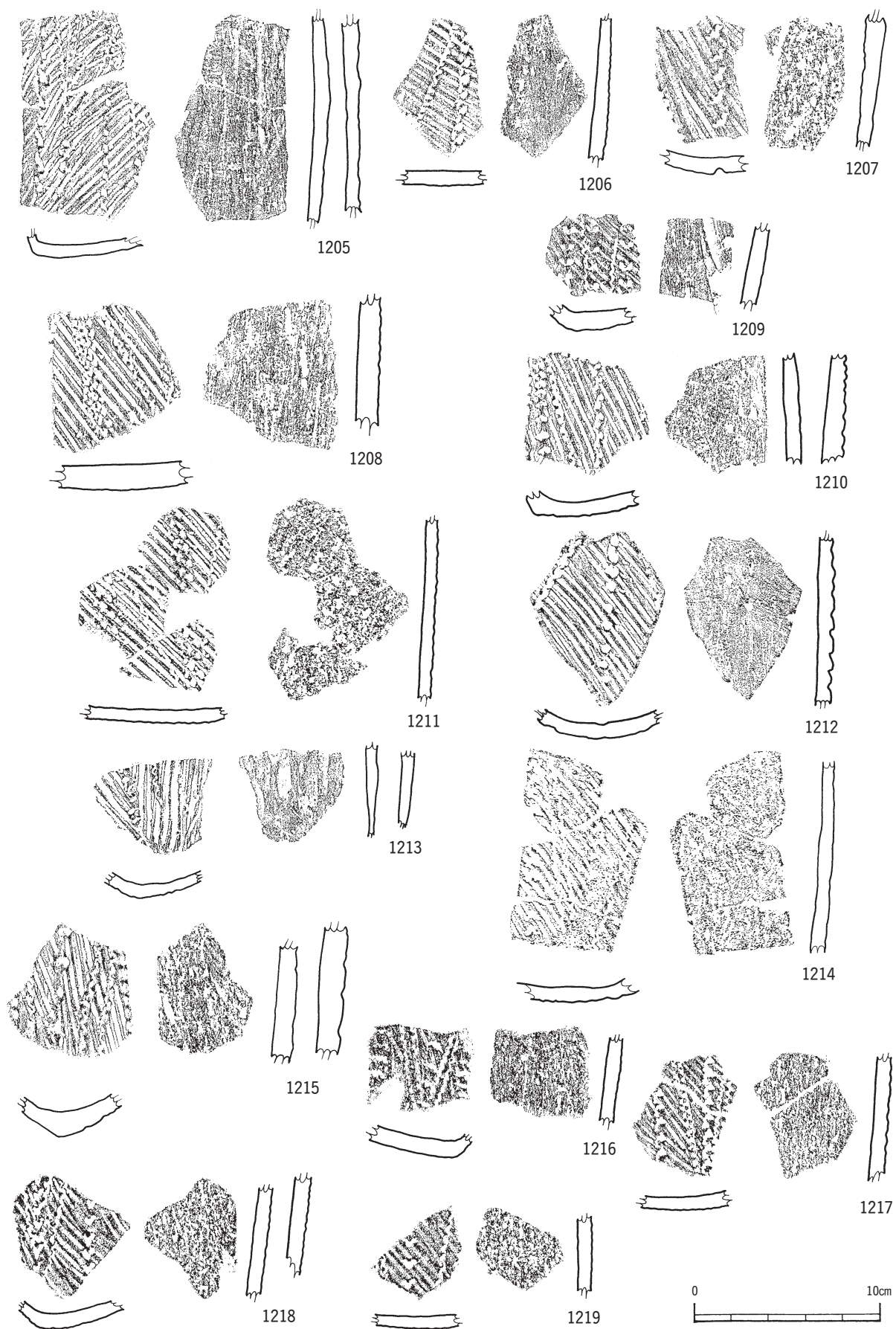
1193～1219は、胴部片である。1193～1199は、斜位の貝殻刺突文をX字状に施すが、1199のみ鋸歯状に施される。1200～1206は、斜位の貝殻刺突文をV字状に施す。なお、1204は、押圧気味の斜位の貝殻刺突文が施されるが、二重貝殻刺突文が施される箇所もある。1205～1212は、斜位の貝殻刺突文をV字もしくはX字状に施すものの、どちらかはっきりしない。

1213～1219は、斜位の二重貝殻刺突文をV字あるいはX字状に施す。1213については、器壁がかなり薄く貝殻条痕文が縦位に施される箇所もあるため、底部に近い破片の可能性もある。

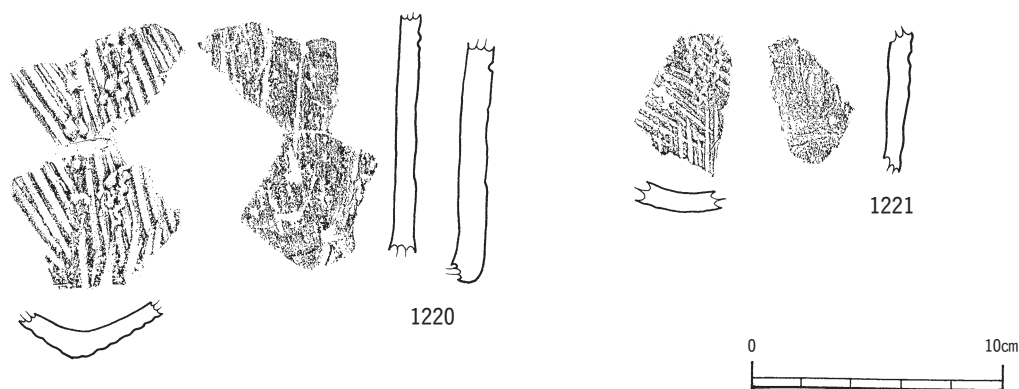
1220は、底部片である。1220は、貝殻刺突に沿って斜位の貝殻刺突文が、1221は、二重の貝殻刺突文が施されている。胴部の立ち上がり部分には、それぞれ縦位の貝殻条痕文、沈線を施す。



第220図 2類土器(33)



第221図 2類土器(34)

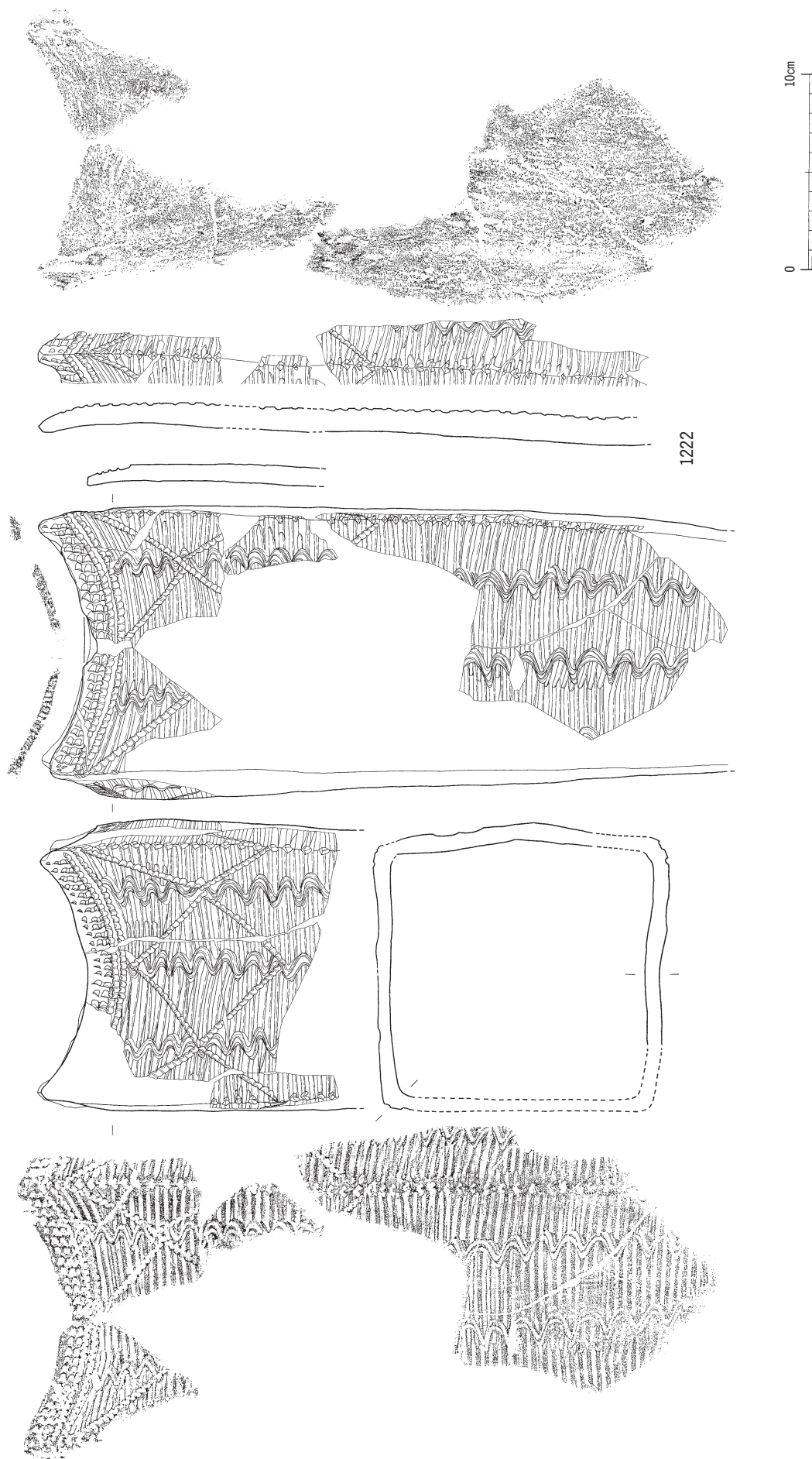


第222図 2類土器(35)

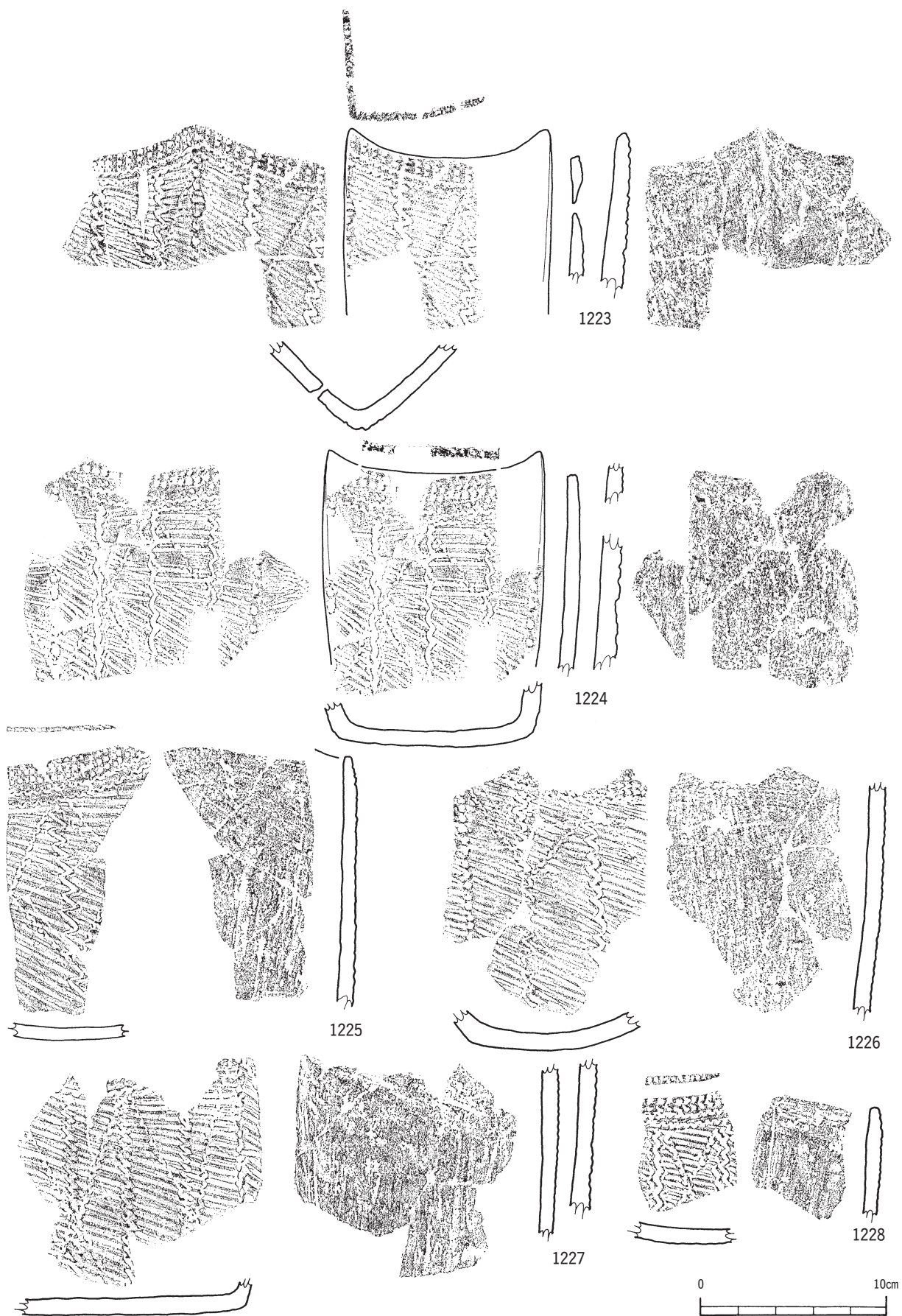
1222～1274は、斜位の貝殻条痕文の上に、流水文とV字状もしくはX字状の斜位の貝殻刺突文とを重ねて施す一群である。

1222は、口径13.7cmの半完形復元土器である。器形は、口縁部から底部へ至るまで4つの面を持つ角筒形である。口縁部はわずかに内傾し、胴部は直線的に底部へ至る。角部は口縁部から底部に至るまで形成されている。文様は、口唇部に刻みを施す。口縁部は肋3条程度の縦位貝殻押圧文がめぐり、その下位には横位貝殻刺突文が2条めぐる。この両者は、施文の切り合いから縦位の貝殻刺突文が古く、横位の貝殻刺突文が新しいと見られる。胴部は、貝殻条痕文が横位ないし斜位に施される。その場合、面を1度の条痕で施文するのではなく、横方向に3回程度条痕文を施しているようである。この施文の後に、1面あたり縦位に3条の貝殻流水文が施され、角部には肋2条の貝殻刺突文が角部に添って施文されている。さらに、胴部上半では斜位の貝殻刺突文が中央の流水文を中心に左右1つずつX字状に施文されている。器面調整は、内面において胴部では縦位のケズリが、口縁部では横位のケズリがそれぞれ観察される。

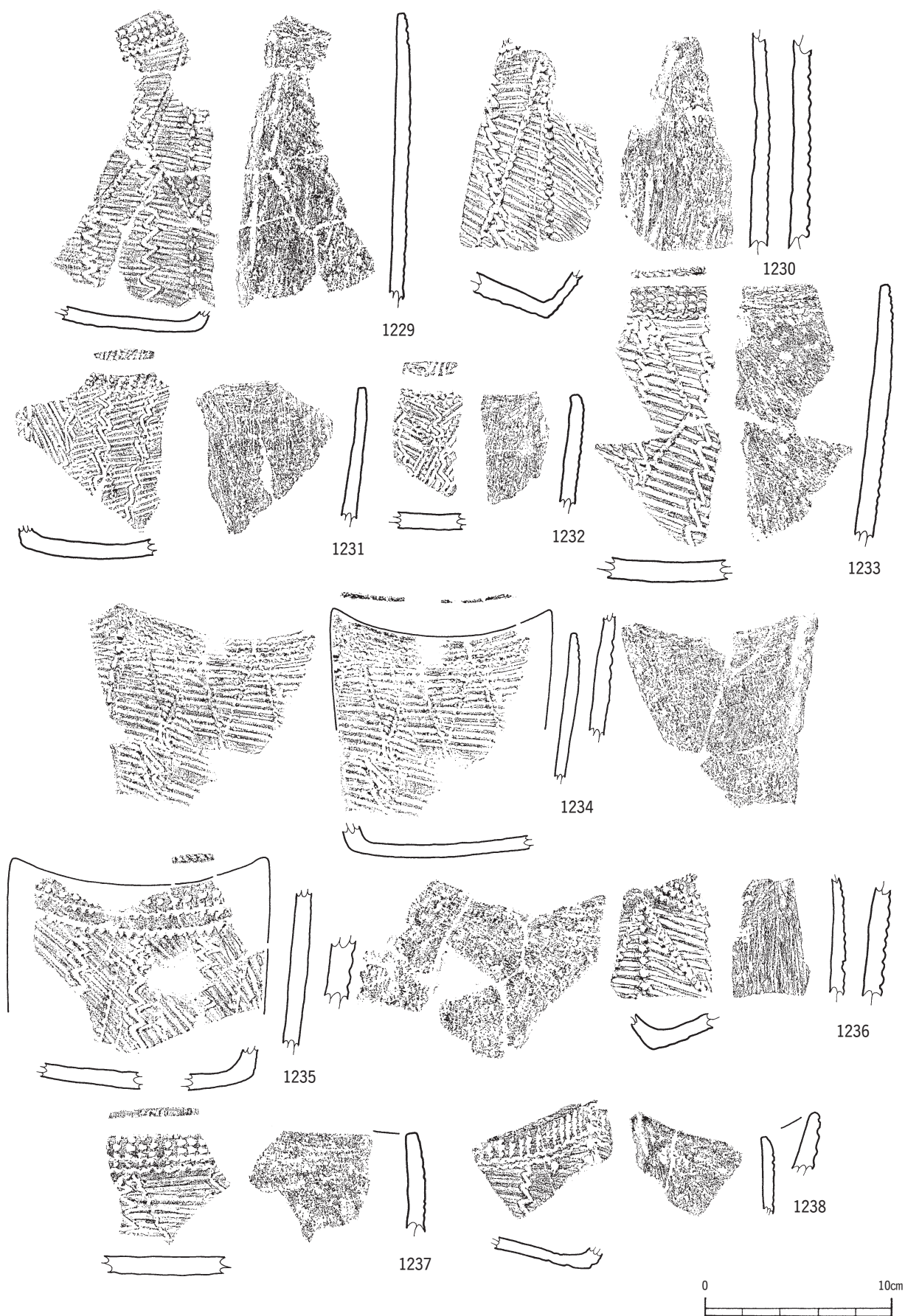
1223～1253は、口縁部片である。1222～1225、1227～1233は、口縁部に縦位の貝殻押圧文を施し、胴部にX字状の斜位の貝殻刺突文を面に対して2組施す。1223の口縁部付近には補修孔が確認できる。1226、1234は、斜位の貝殻刺突文をV字状に施す。なお、1234は、口縁部に横位の貝殻刺突文が4条めぐり、胴部には面に対して3組の斜位の貝殻刺突文がV字状に施される。それぞれのV字の先端からは、縦位2本程度の流水文が底部に向かって施されている。1235～1251は、斜位の貝殻刺突文をV字もしくはX字状に施すものの、どちらかはっきりしない。いずれも口縁部には縦位の貝殻押圧文が施される。



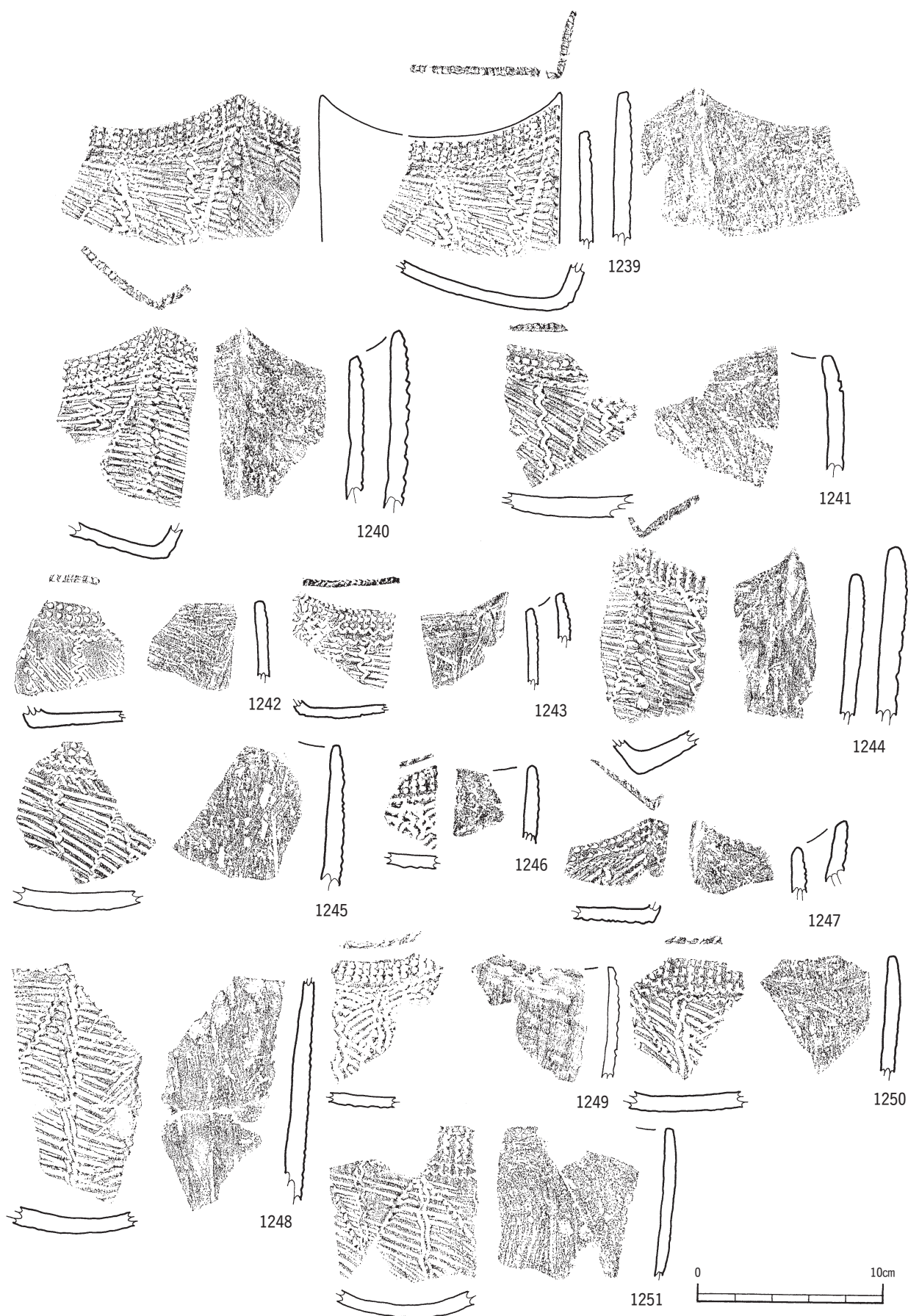
第223図 2類土器(36)



第224図 2類土器(37)



第225図 2類土器(38)

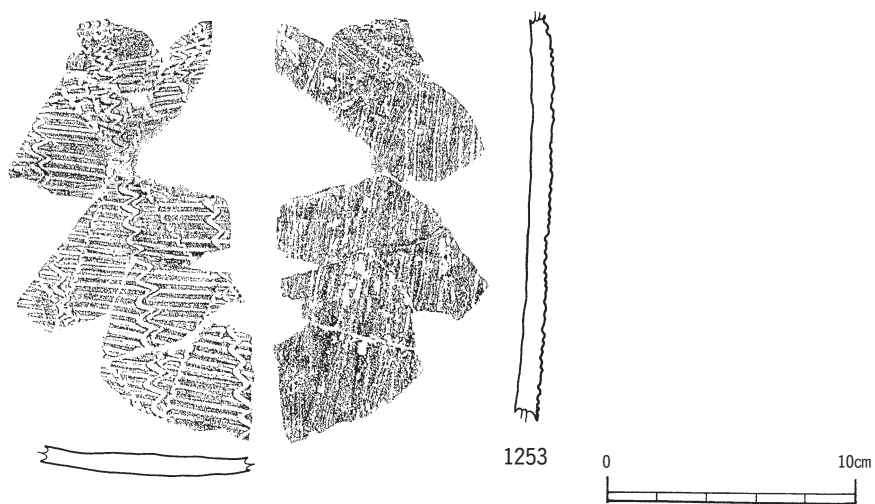
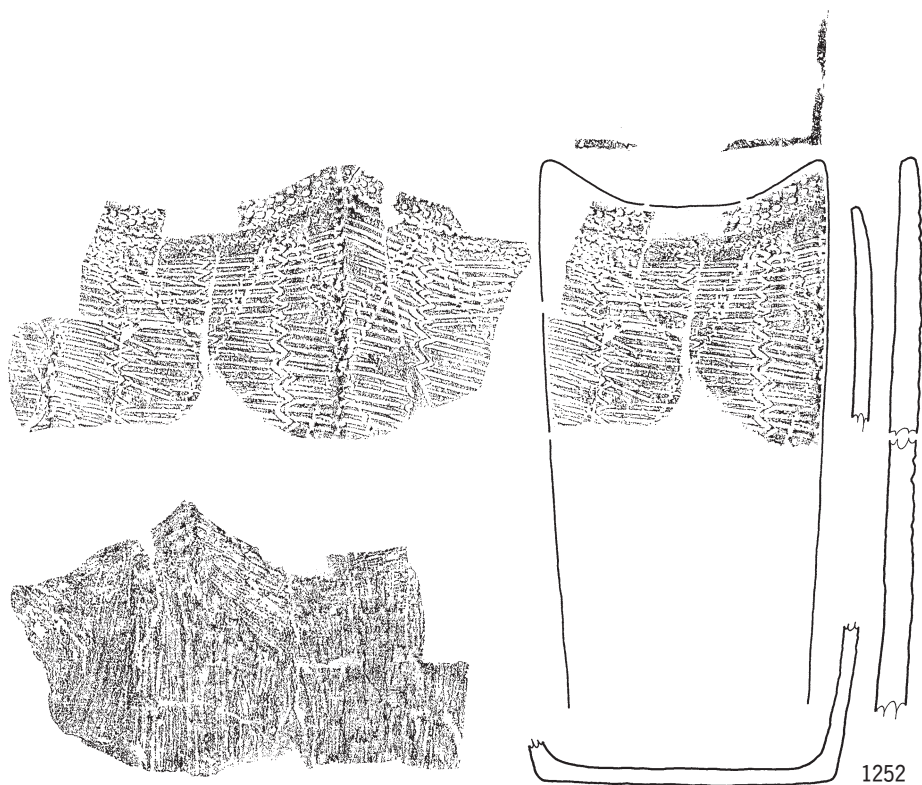


第226図 2類土器(39)

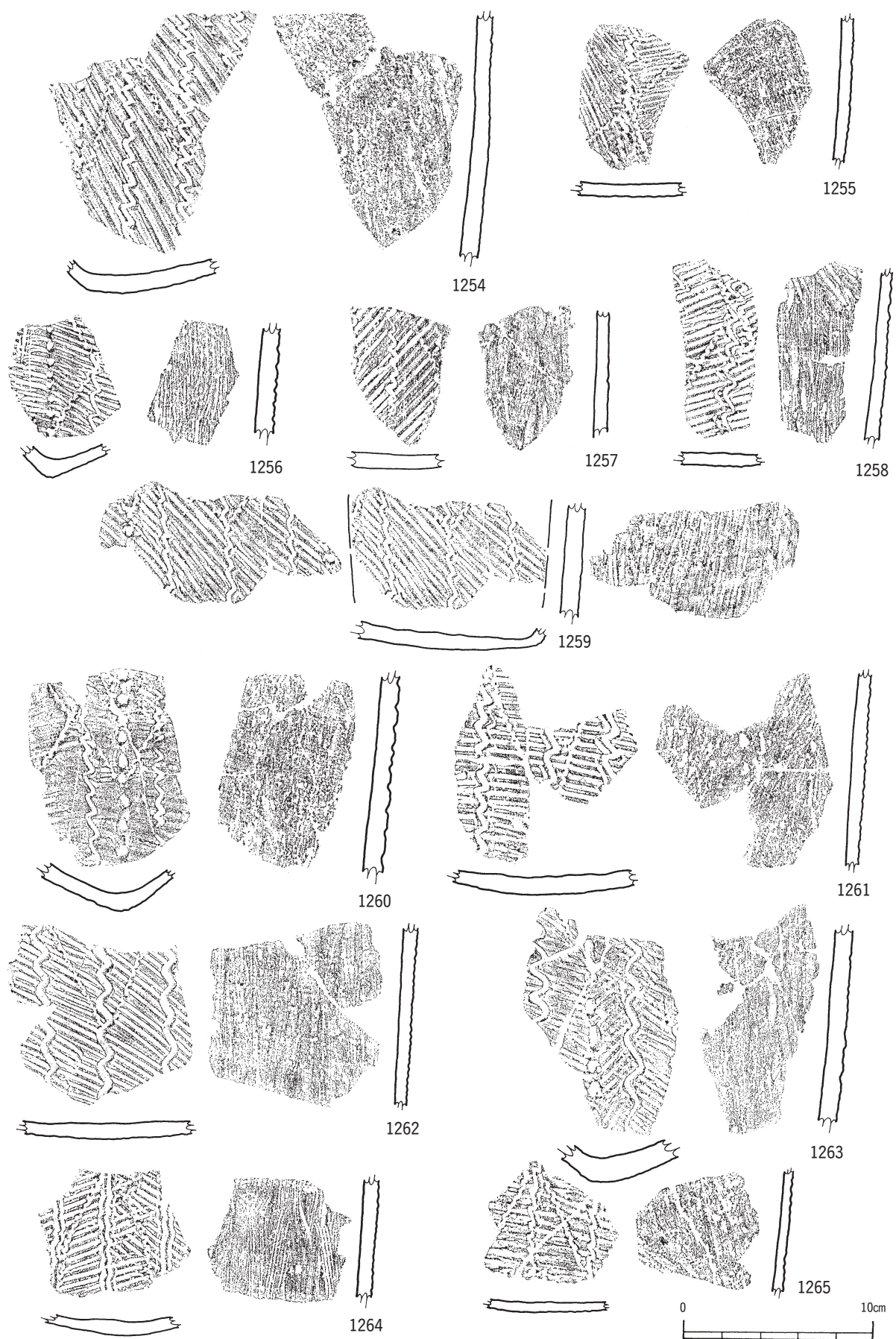
1252～1253は、縦位の貝殻刺突文を面に対して3列施し、斜位の貝殻刺突文をX字状に重ねるが、最上部のみ二重貝殻刺突文になるタイプである。

1254～1274は、胴部片である。1254～1260は、斜位の貝殻条痕文がX字状に、1261～1262は、V字状に施される。また、1263～1267は、斜位の貝殻刺突文をV字もしくはX字状に施すと見られる。1268は、縦位2本の直線状流水文を施し、斜位の貝殻刺突文をV字状に重ねる。

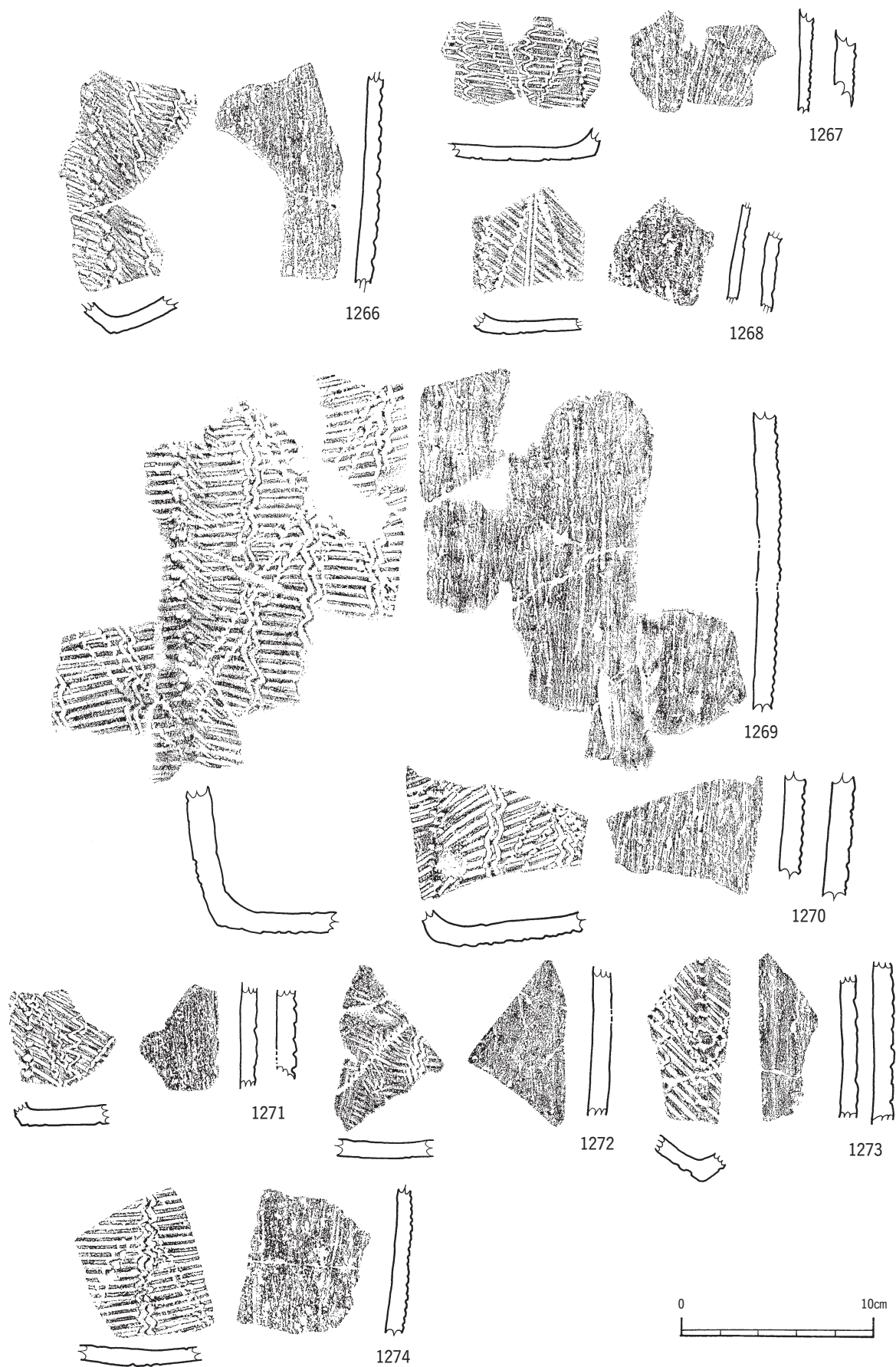
1271～1274は、斜位の貝殻刺突文が、二重に施される一群である。1271は、斜位の貝殻刺突文と刺突及び流水文を組み合わせるものである。口径は11.8cmを測る半完形の復元土器である。器形は、口縁部から底部に至るまで4つの面を持つ角筒形である。口縁部はわずかに内傾し、胴部は直線的に底部へ至る。角部は口縁部から底部に至るまで形成されている。文様は、口唇部にキザミを施す。口縁部は肋2～3条の縦位貝殻押圧文がめぐり、その下には横位貝殻刺突文が2条めぐり。胴部は、斜位の貝殻条痕文が施された後に施文が重ねられている。各面の中央には、深い連点文状のものが縦位に施される。この施文及び施文具に関しては、深い刺突文の左側に対になるように浅い連点文状のものが並行している。これらの一部は、ハイガイやサルボウなどの貝殻を用いた刺突文に酷似しており、このことから、複数の肋がある状態の貝殻の一部分を用いた貝殻刺突文として理解したい。この左右には、同一施文具による流水文が施文され、胴部上半ではこの流水文を交点として貝殻刺突文がX字状に施される。底部からの立ち上がりに関しては、縦位の条痕文が施される。器面調整は、外面は丁寧なナデ、内面はケズリが施され、内面のケズリは胴部では下から上への縦位に、口縁部では横位及び角部周辺では角部へ向かうように施文されている。なお、胴部外面の中から下位にかけて炭化物の付着が認められる。



第227図 2類土器(40)



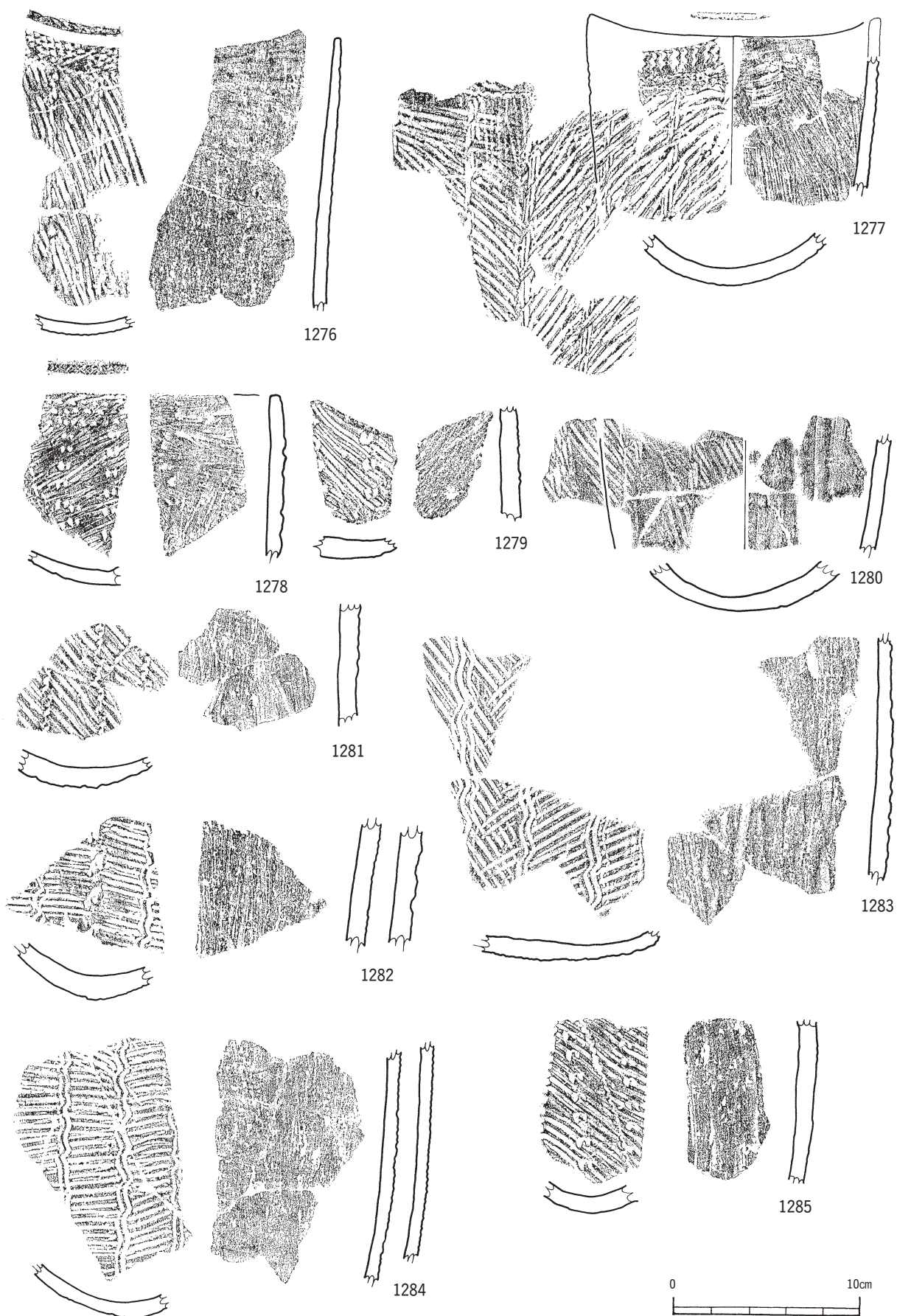
第228図 2類土器(41)



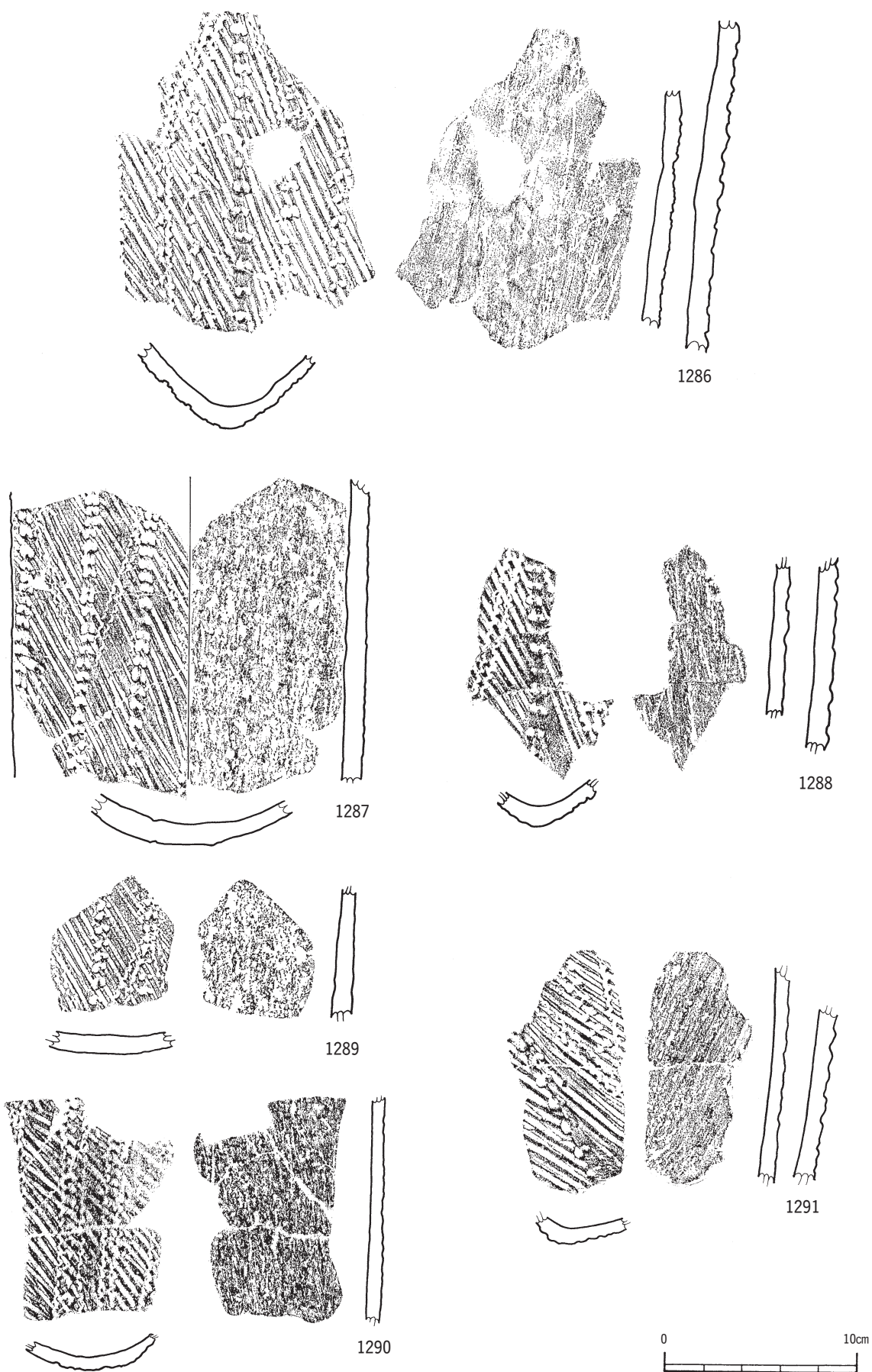
第229図 2類土器(42)



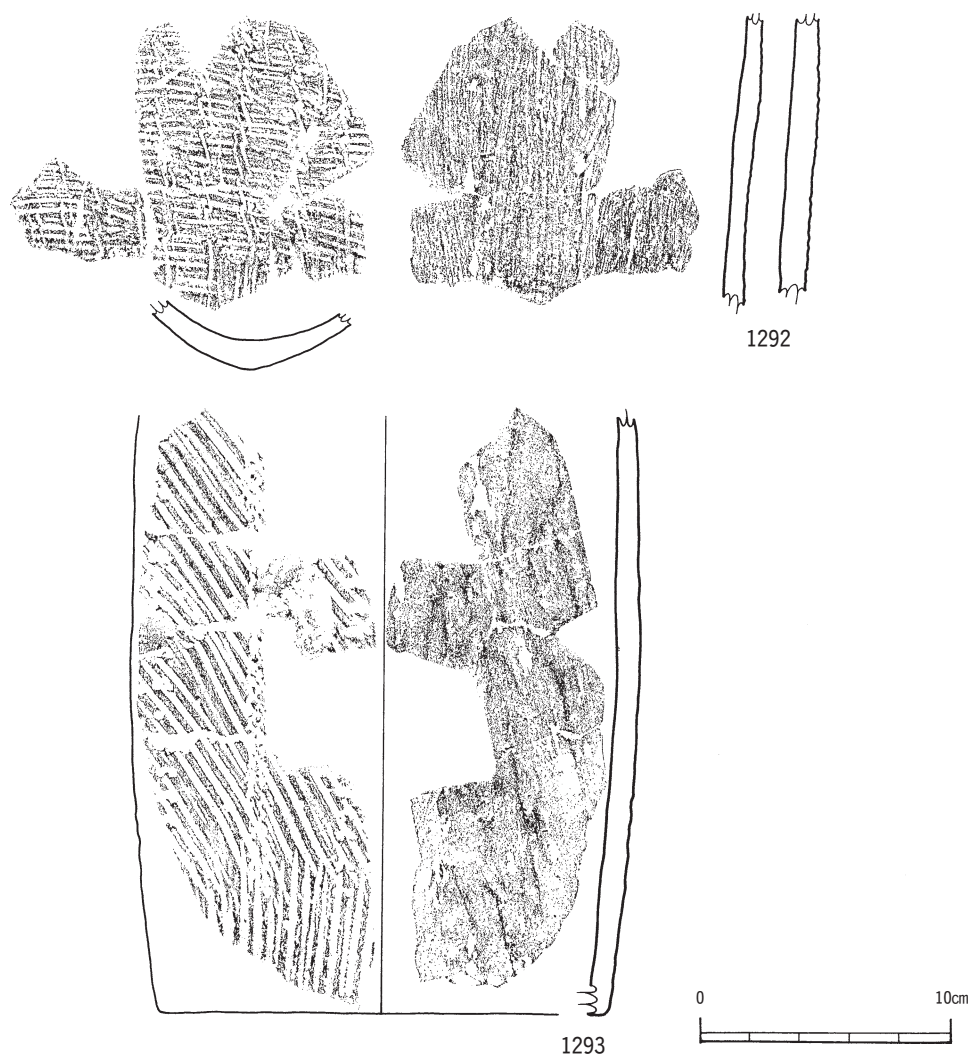
第230図 2類土器(43)



第231図 2類土器(44)



第232図 2類土器(45)



第233図 2類土器(46)

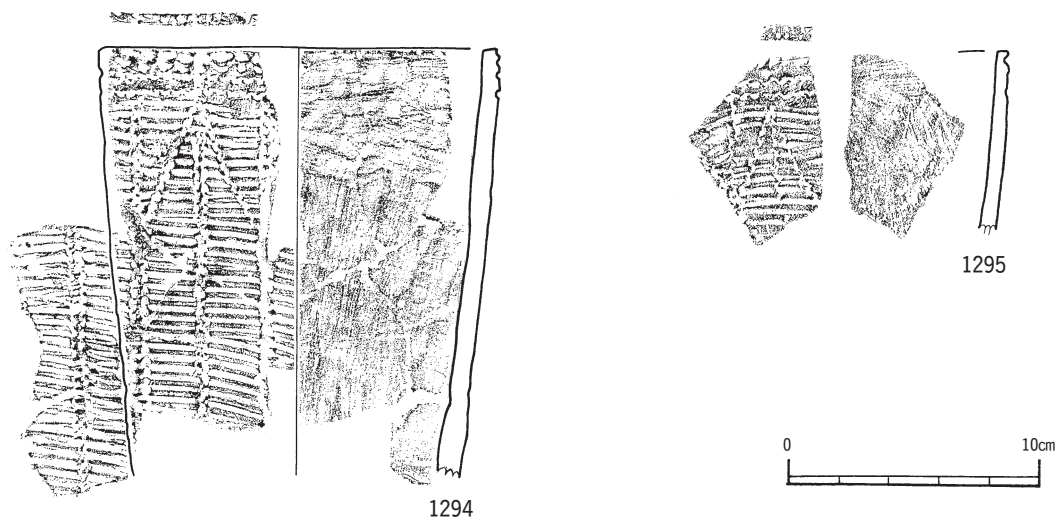
1276～1293は、器形がレモン形を呈する一群である。

1276～1278は、口縁部片である。いずれも口縁部には縦位の貝殻押圧文が施される。胴部には1276、1277が斜位の貝殻刺突文、1278が2点1組の刺突が施される。

1279～1291は、胴部片である。1279は刺突、1280は貝殻刺突、1282、1283は流水文を施す。また、1284、1285は、それぞれ流水文、貝殻刺突に斜位の貝殻刺突文を組み合わせる。なお、1284には、炭化物が付着している。

1286～1291は、断続的な刺突と斜位の二重貝殻刺突文とを組み合わせる一群である。1290は、二重貝殻刺突文で、貝殻刺突を挟む施文も確認できる。なお、1286、1290には、炭化物が付着している。

1292、1293は、底部片である。胴部の立ち上がり部分には縦位の貝殻条痕文を施す。1292は、流水文を密に施す。1293は、貝殻刺突と縦位の二重貝殻刺突文とを交互に施す。



第234図 3類土器(1)

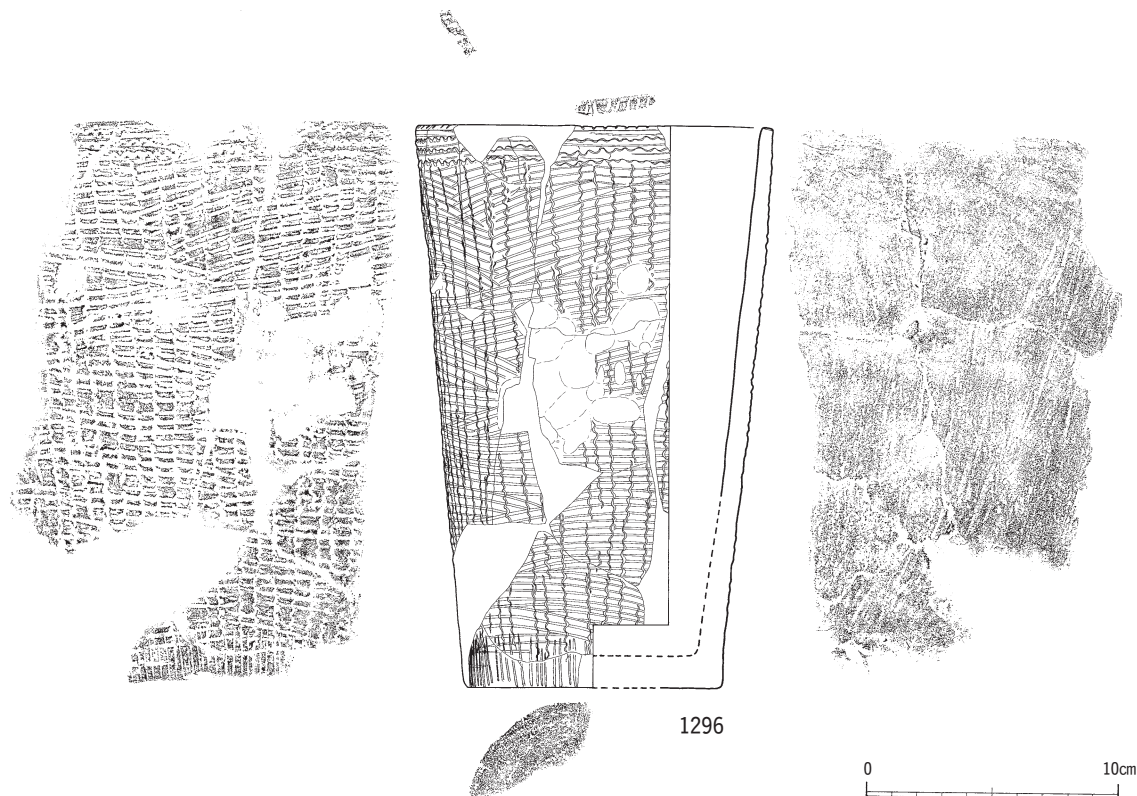
③ 3類

2類土器に次いで多く出土している。円筒形，角筒形，レモン形の3種類とも確認できた。

1294～1460は，円筒形を呈する一群である。

1294，1295は，口縁部に縦位の貝殻押圧文が残り，胴部に2類の沈線を踏襲していると思われる縦位2本1組の貝殻刺突文と，斜位の貝殻刺突文を組み合わせる一群である。縦位2本1組の貝殻刺突文は，霧島市上野原遺跡で多数出土しているため，ここでは，特に上野原タイプと呼称する。

1294は，口縁から胴部にかけての破片である。横位の貝殻条痕文を施した後，口縁部には肋2条の貝殻押圧文が縦位に施され，直下に横位の貝殻刺突文が2条めぐる。その下には，縦位の二重貝殻刺突文を施し，斜位の貝殻刺突文をV字状に重ねる。口唇部は平坦で，貝殻刺突が施される。内面は，縦位のケズリを施した後，ナデで調整されるが，口縁部では横位に変わる。1295は，口縁片である。1294と同じく，横位の貝殻条痕文を施す。口縁部には，凹点状の刺突文が1条めぐる，さらにその下には横位の貝殻刺突文が2条めぐる。胴部には，縦位の貝殻刺突文を施し，斜位の貝殻刺突文をV字状に施すが，刺突文はやや断続的に施される。口唇部は丸みを帯びる。

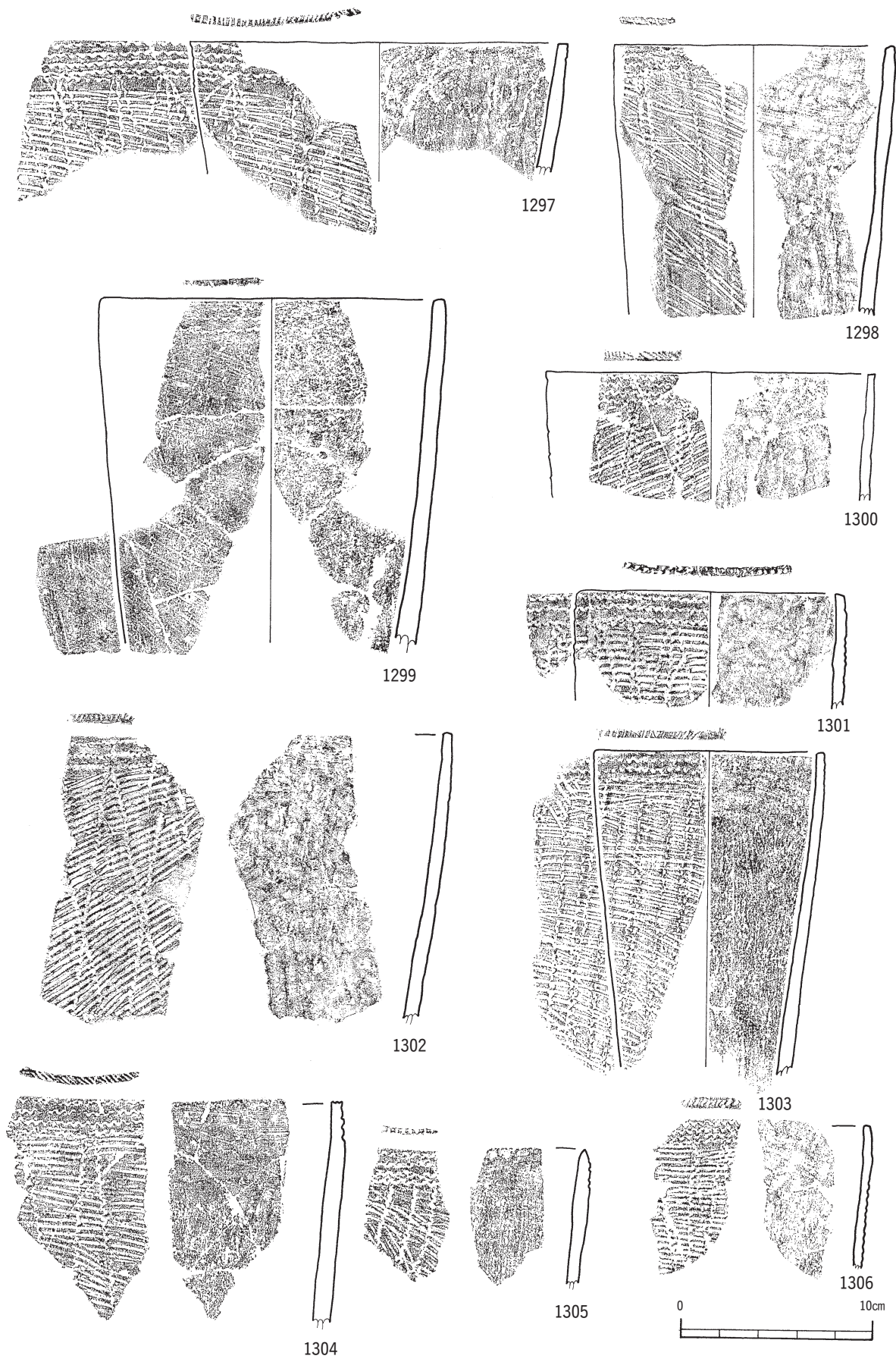


第235図 3類土器(2)

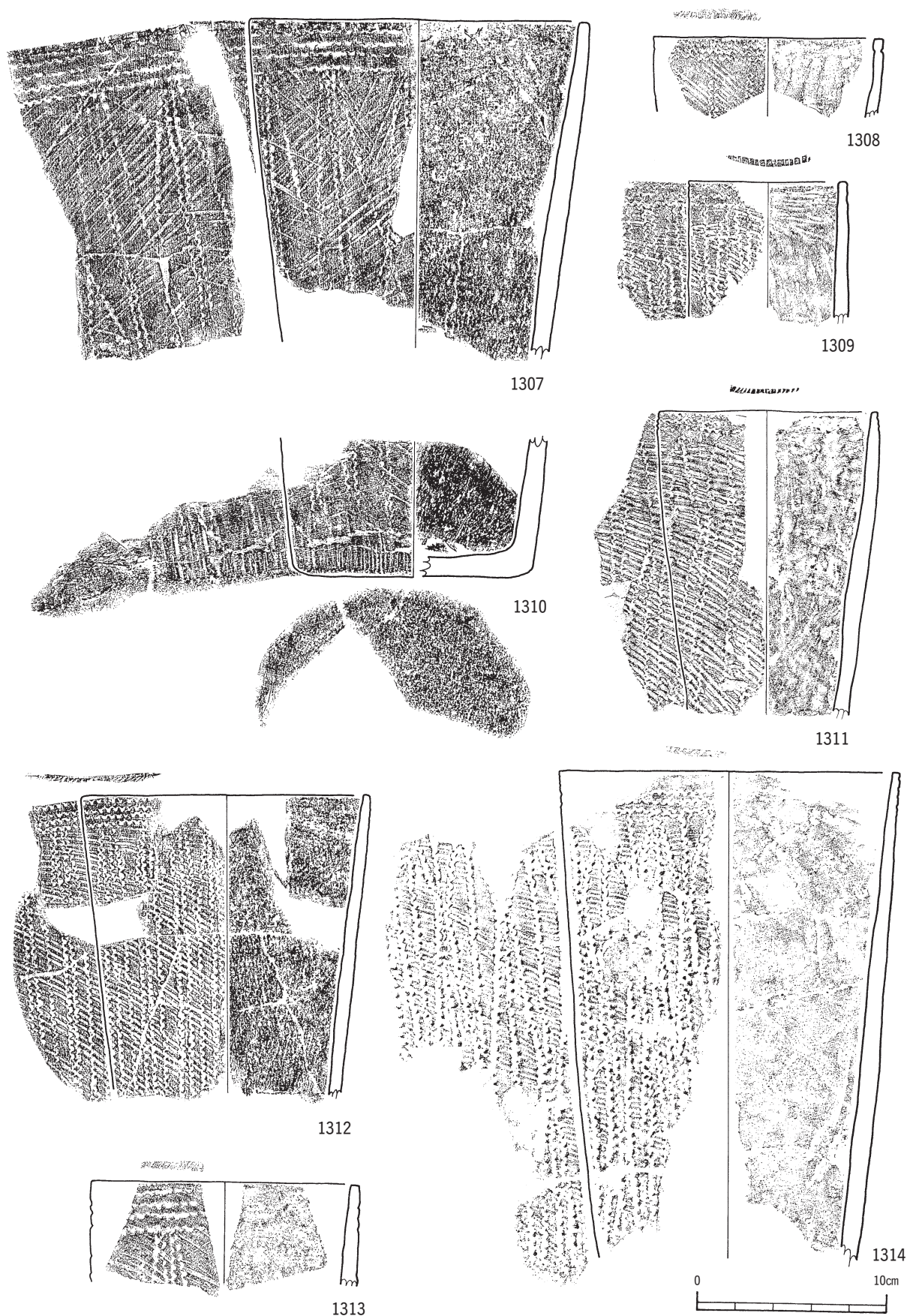
1296～1322は、口縁部に横位3～4条の貝殻刺突文を施し、貼付文を付さない一群である。

1296は、器高22.7cm、口径14.2cm、底径10.0cmの完形復元土器で、口縁部から底部へ至るまで直線的な器形を呈する円筒形である。文様は、全面に貝殻条痕文を斜位に施した後に口縁部には横位貝殻刺突文を3条めぐらせる。胴部は、縦位の貝殻刺突文を施す。底部及び口唇部には刻みが施されている。器面調整は、内面胴部では縦位のケズリ、口縁部では横位のケズリ痕が観察される。

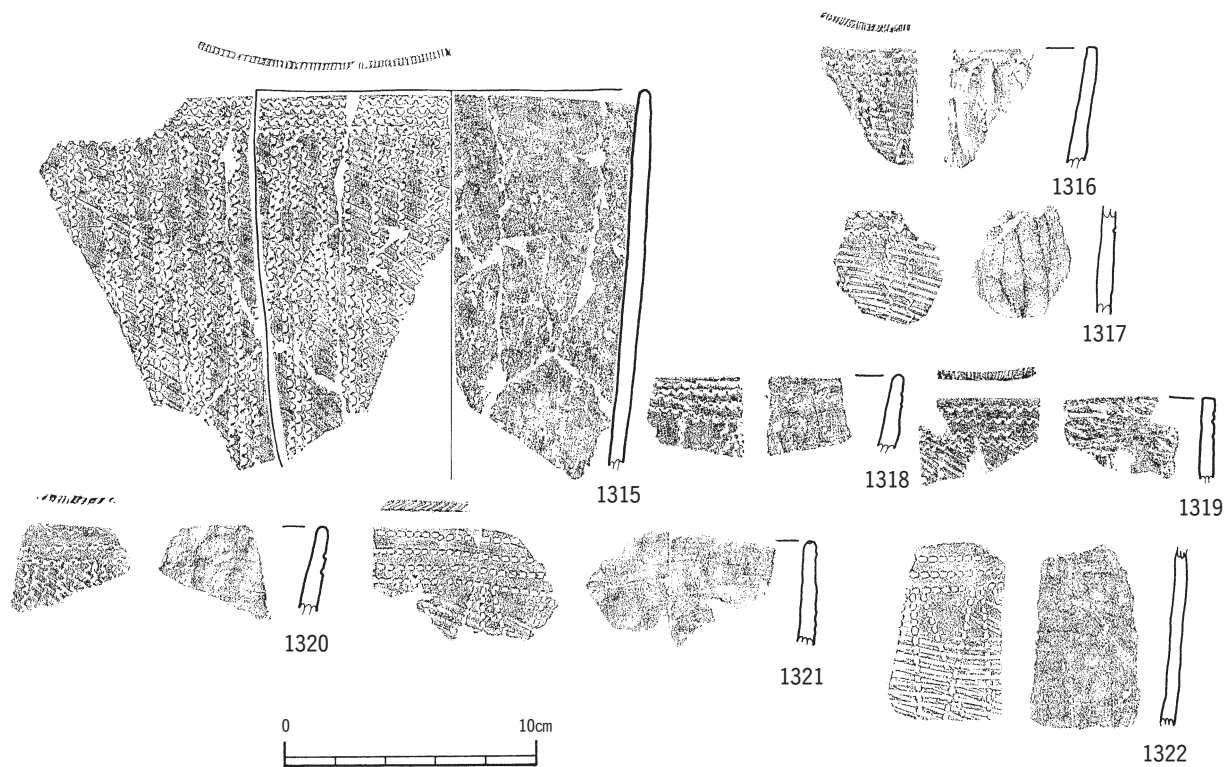
1297～1322は、口縁部片である。1296～1313, 1321, 1322は刺突の間隔が広いのに対し、1314～1320はやや狭くなる。施文は、1303, 1305のように縦位の貝殻刺突文を等間隔に施すタイプ、1297, 1299～1301, 1306, 1309, 1314, 1315, 1321, 1322のように等間隔の縦位貝殻刺突文にX字もしくはV字状の斜位貝殻刺突文を重ねるタイプ、1308, 1317のように縦位の貝殻刺突文を2本一組で施すタイプ、そこに斜位の貝殻刺突文を重ねる1307, 1310, 1312, 1313, 1316のようなタイプ、1302, 1304のように斜位の貝殻刺突文のみで構成するタイプなど種類は豊富である。なお、1298は、場所によって縦位の貝殻刺突文が二重に施される。1307, 1310は同一個体である。1311は、斜位の貝殻刺突文を「く」の字状に施すが、不規則な施文のため雑な印象を受ける。炭化物が付着している。1321, 1322は、刺突文は櫛状工具によって施される。



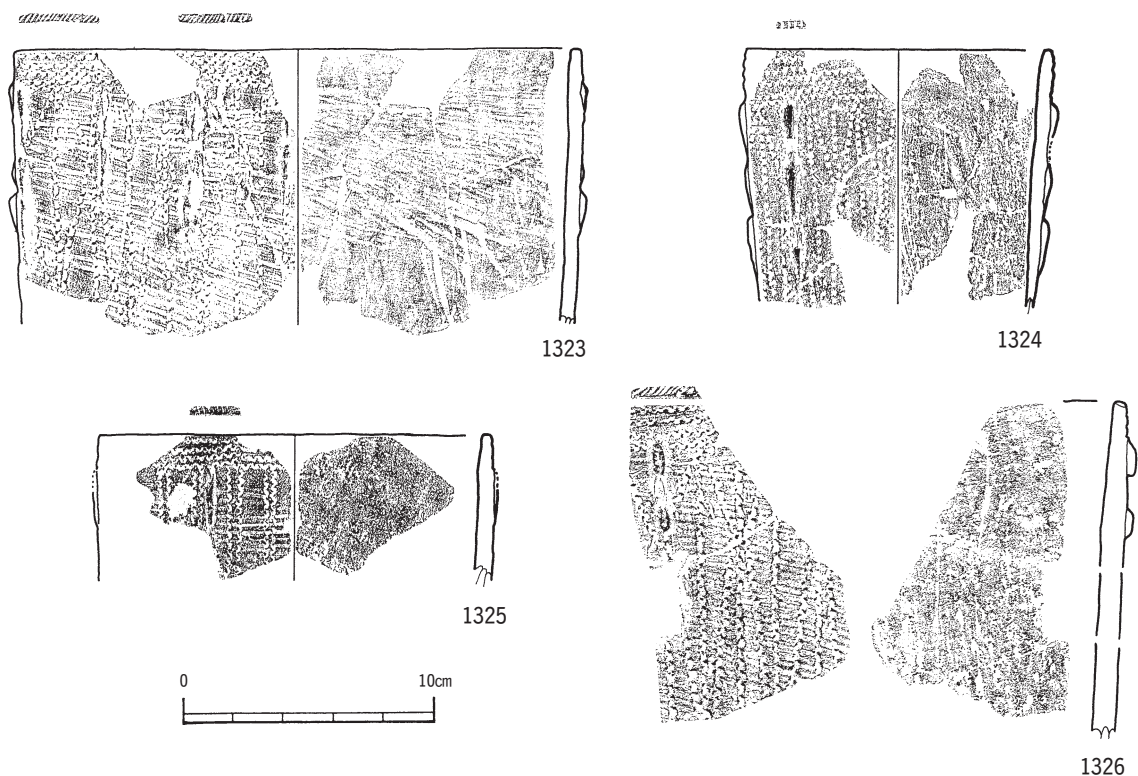
第236図 3類土器(3)



第237図 3類土器(4)



第238図 3類土器(5)

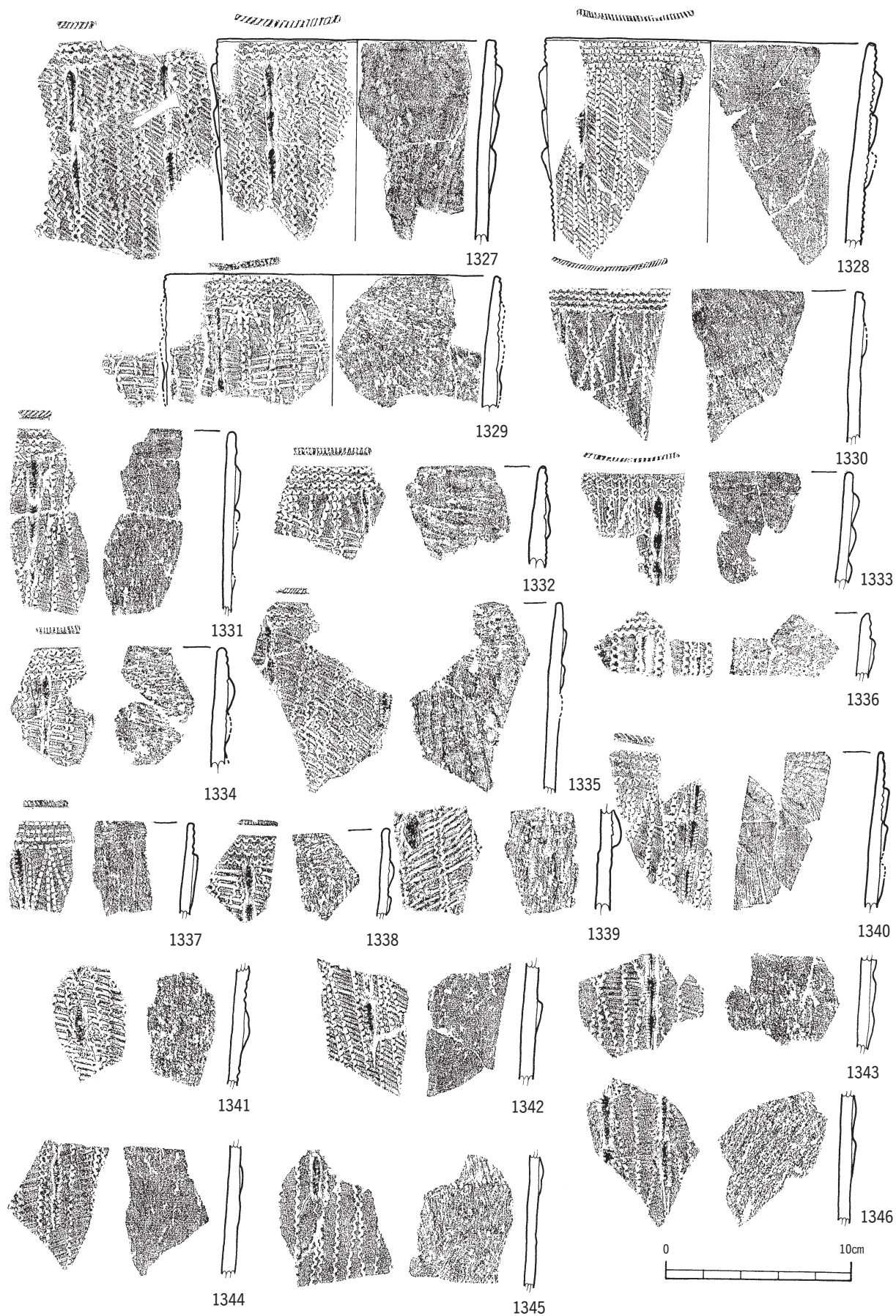


第239図 3類土器(6)

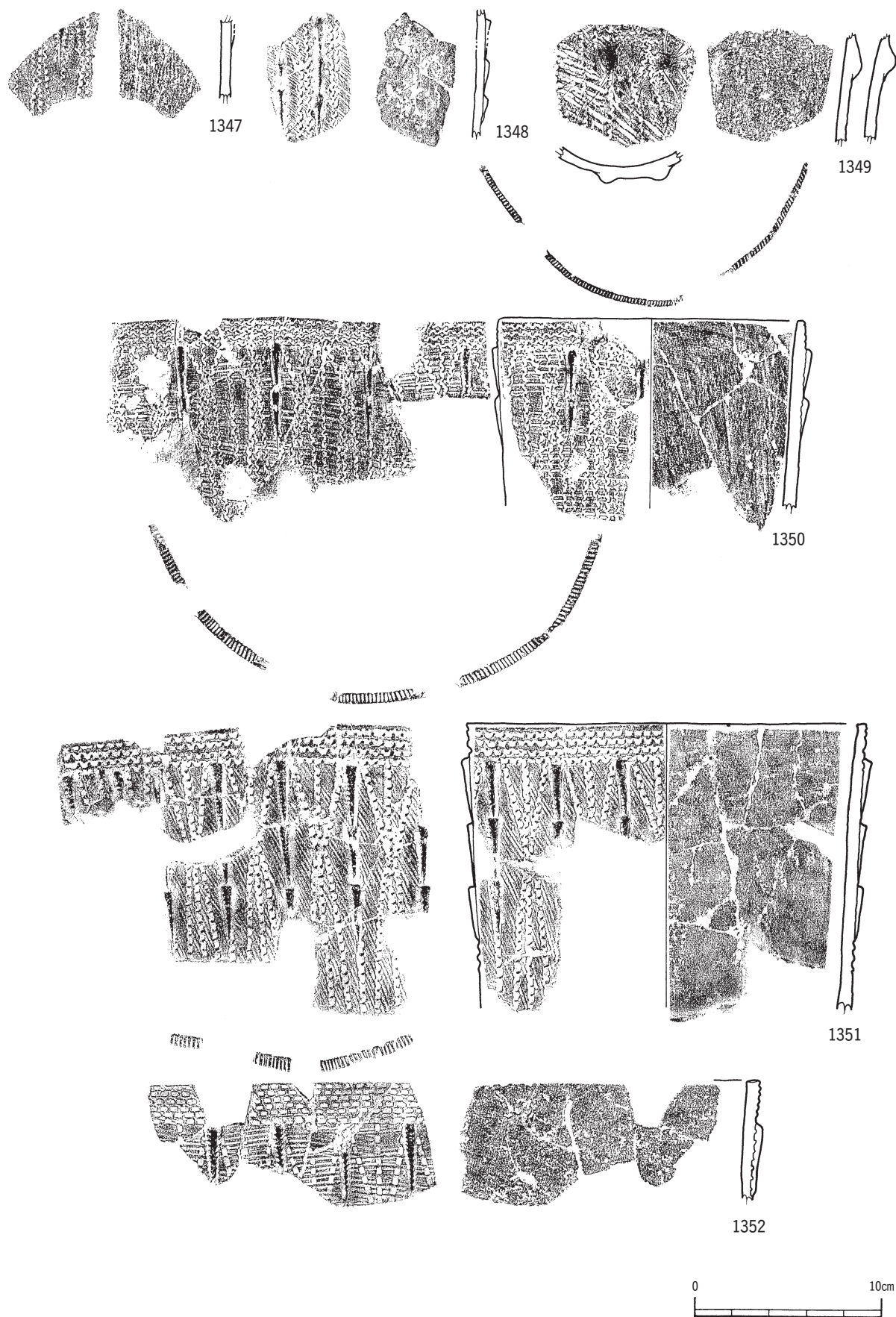
1323～1349は、口縁部に横位2～4条の貝殻刺突文を施し、粘土紐貼付文を2段～3段貼り付ける一群である。

1323, 1324, 1326～1328, 1330, 1331, 1333, 1338, 1341～1348は、等間隔の縦位の貝殻刺突文にX字もしくはV字状の斜位貝殻刺突文を重ねる。1325, 1339は、縦位の貝殻刺突文を2本一組で施す。1329, 1332, 1334, 1340は、縦位の貝殻刺突文の一部が二重に施されている。1349は、胴部に縦位貝殻刺突文を施すが、一部斜位の貝殻刺突文と組み合わせてY字状に施される箇所もある。また、口縁部直下には太い粘土紐貼付文を貼り付ける。内面は、縦位のへら状工具によるケズリを施した後、ミガキで調整される。なお、大部分の粘土紐貼付文は、側面に刻みが付されナデで貼り付けられるが、1340のように刺突が施されるもの、1343のように魚の鰭状を呈するものなども見られる。

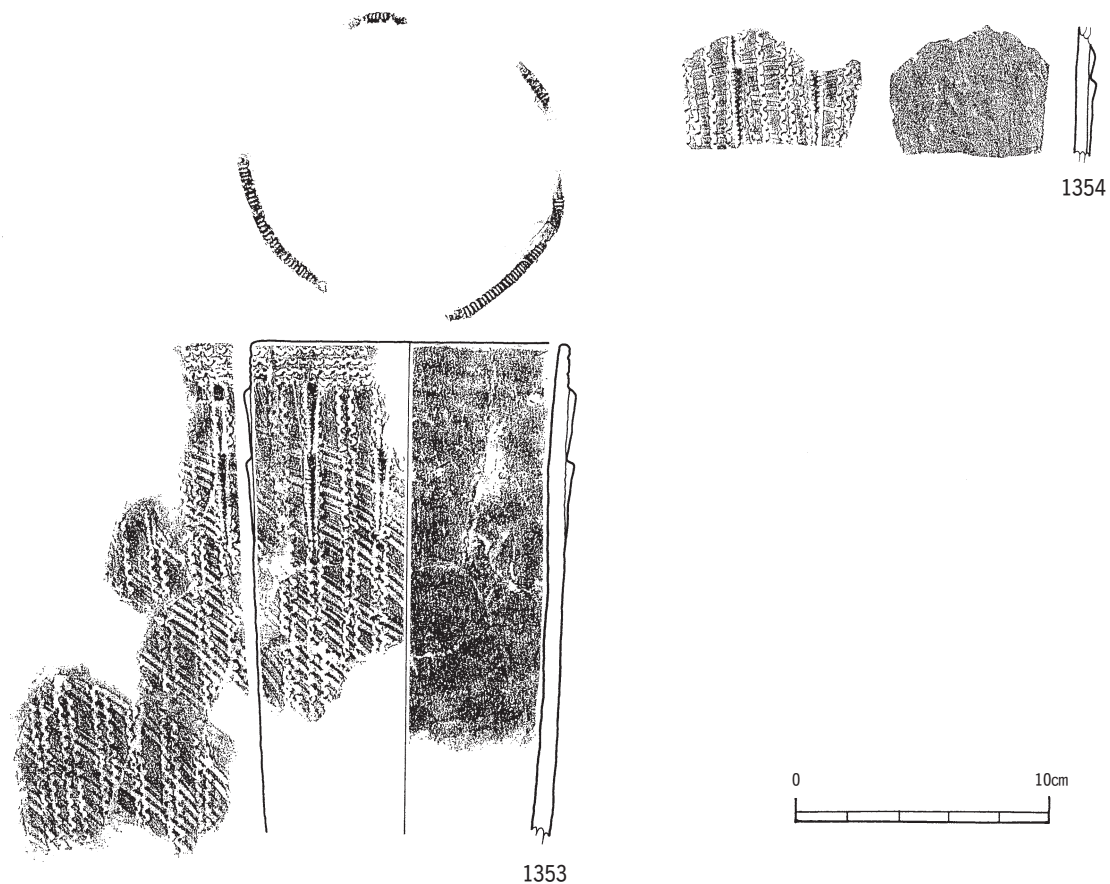
1350～1354は、貼付文が楔形を呈する一群である。いずれの貼付文も側面には刻みが施される。また、胴部の文様は、1350～1352が縦位の刺突文にX字状の斜位の刺突文を重ねるのに対し、1353は二重の貝殻刺突文、1354は縦位の貝殻刺突文二重のものとを交互に施している。なお、1352の施文は、櫛状工具によるものと思われる。



第240図 3類土器(7)



第241図 3類土器(8)



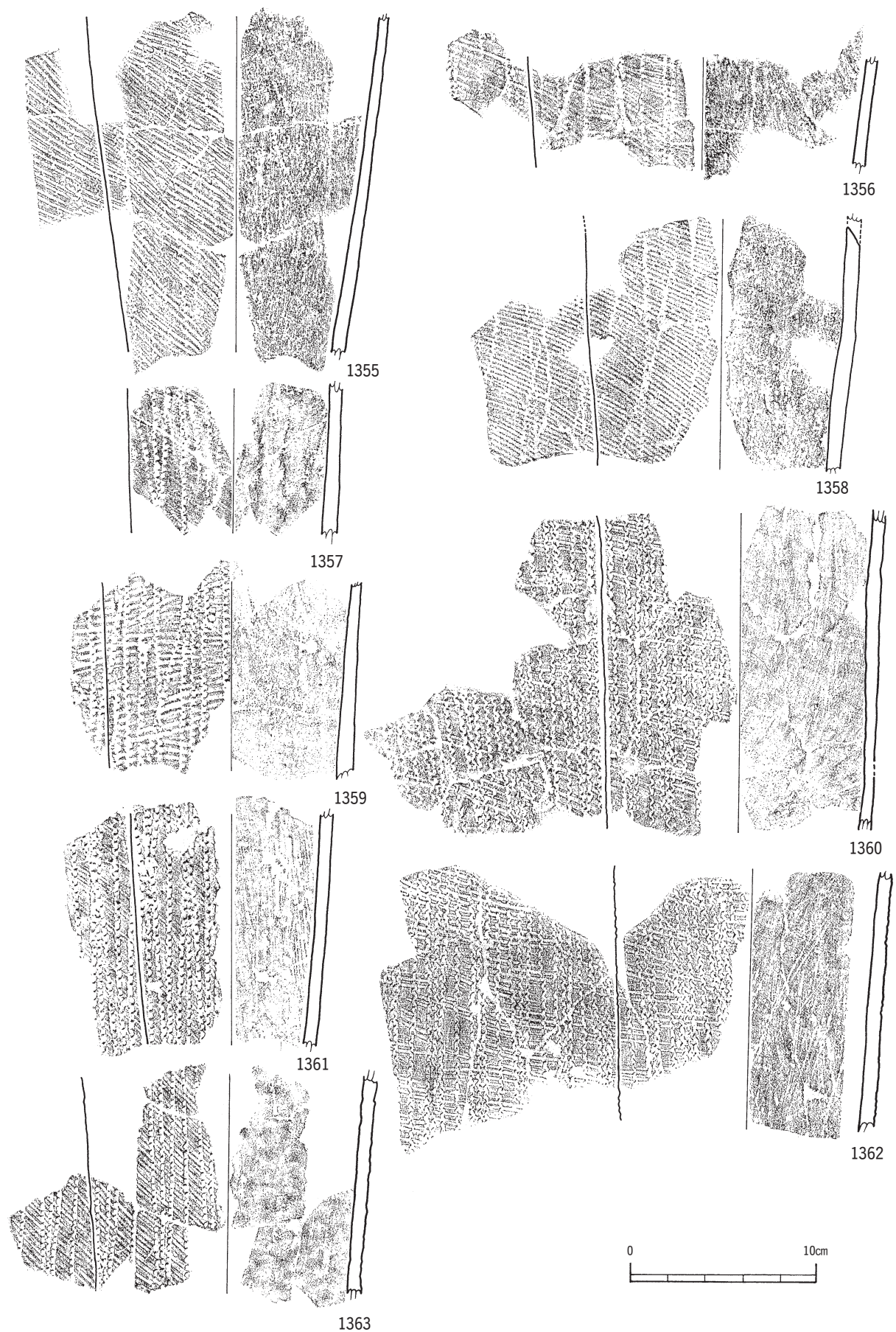
第242図 3類土器(9)

1355～1437は胴部片である。

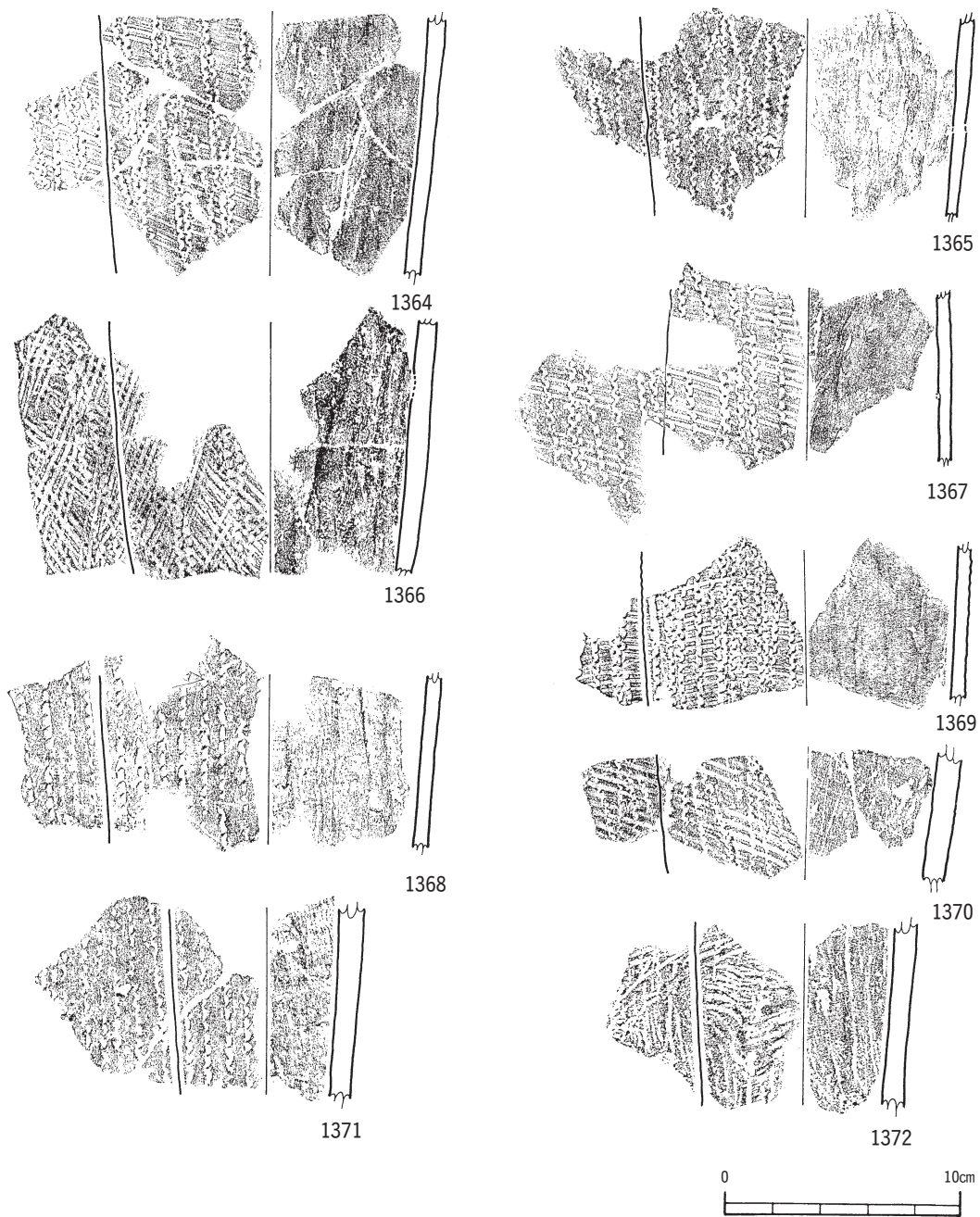
1359～1372は縦位貝殻刺突文の間隔がやや密になるもの、1355～1358、1373～1437は、間隔が広いものと仮に細分しているが、底部に近づくにつれて刺突の間隔は狭くなるので、厳密に区別することは困難である。また、文様については、口縁部同様いくつかのパターンに類別できる。1355等のように縦位の貝殻刺突文にX字状の斜位の貝殻刺突文を重ねるもの、1368等のように縦位の貝殻刺突文を等間隔に施すもの、1356等のように小形の貝殻で縦位の貝殻刺突文と二重のものとを交互に施すもの、1376等のように縦位の二重貝殻刺突文を施すもの、1357等のように斜位の貝殻刺突文をX字状に施すもの、1364等のように縦位の二重貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文を重ねるもの等である。

また、これら以外の特徴として、1366、1381、1382、1437は、向きの異なる貝殻条痕文を重ねて施す。1365、1368、1371、1392、1409は、斜位の貝殻条痕文が丁寧なナデによって消されている。なお、1436は、器壁の厚さが異なる箇所があり、レモン形を呈する可能性もある。黒色化しているが、全体的に雑な印象を受ける。

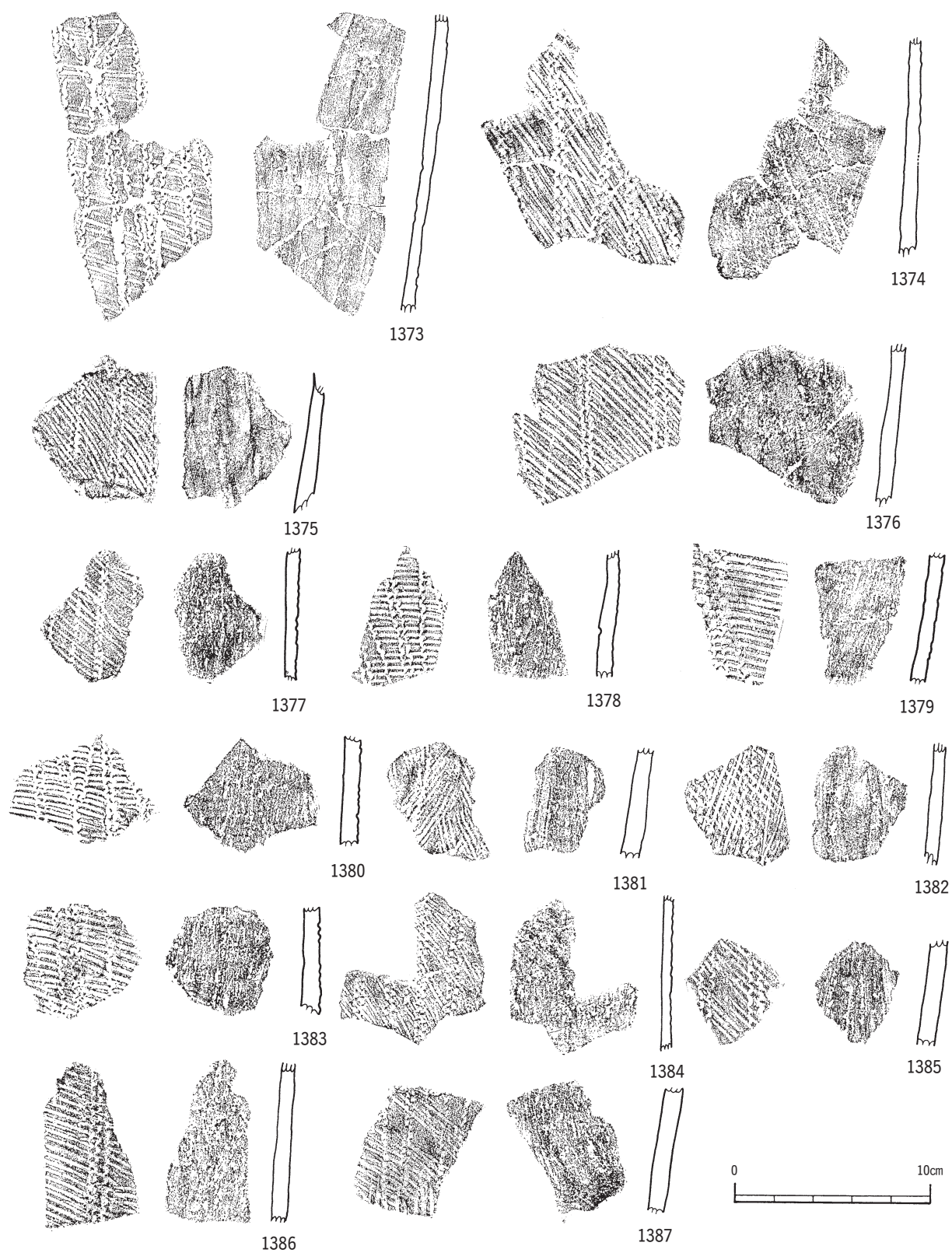
1438～1460は、いずれも胴部の立ち上がり部分に縦位の貝殻条痕文、もしくは刻み等を施す底部片である。なお、胴部の文様は立ち上がり部分の条痕周辺までしか施されないものが多いが、1458、1460については、縦位の方形状の貝殻刺突文を最下端まで施し、同じく下端まで斜位の貝殻刺突文をX字状に重ねる。底部の内面は丁寧なナデ、外面はミガキで調整される。



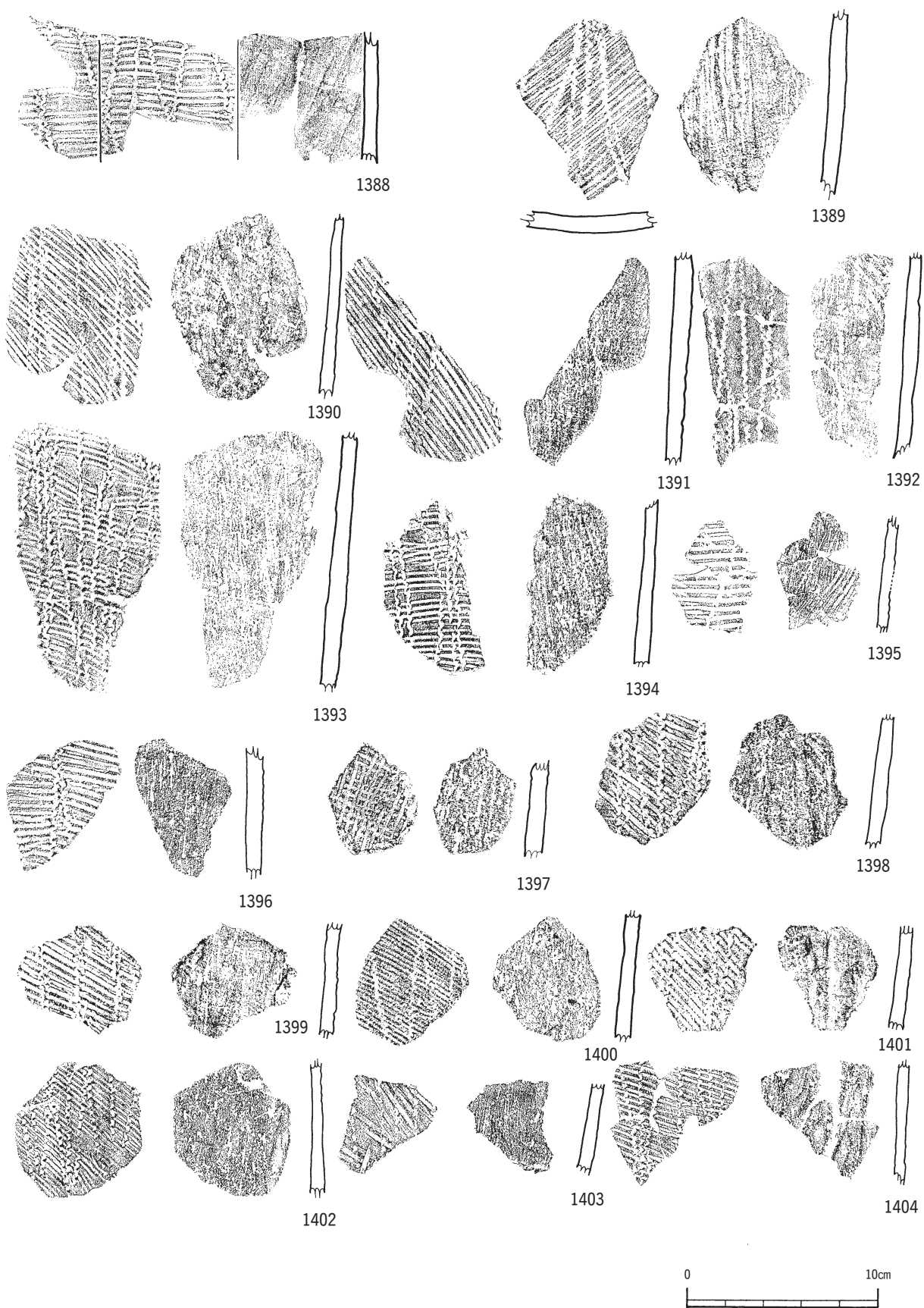
第243図 3類土器(10)



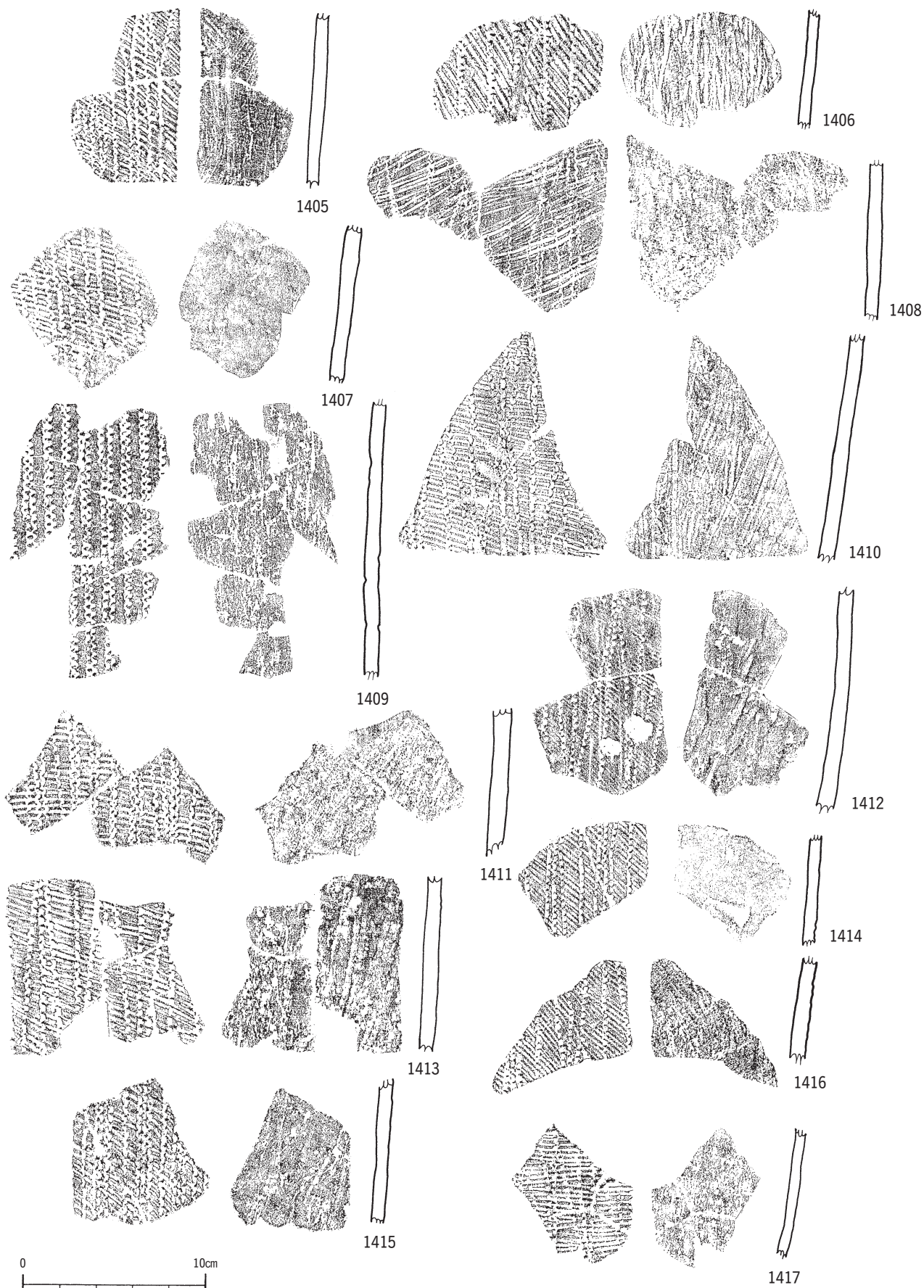
第244図 3類土器(11)



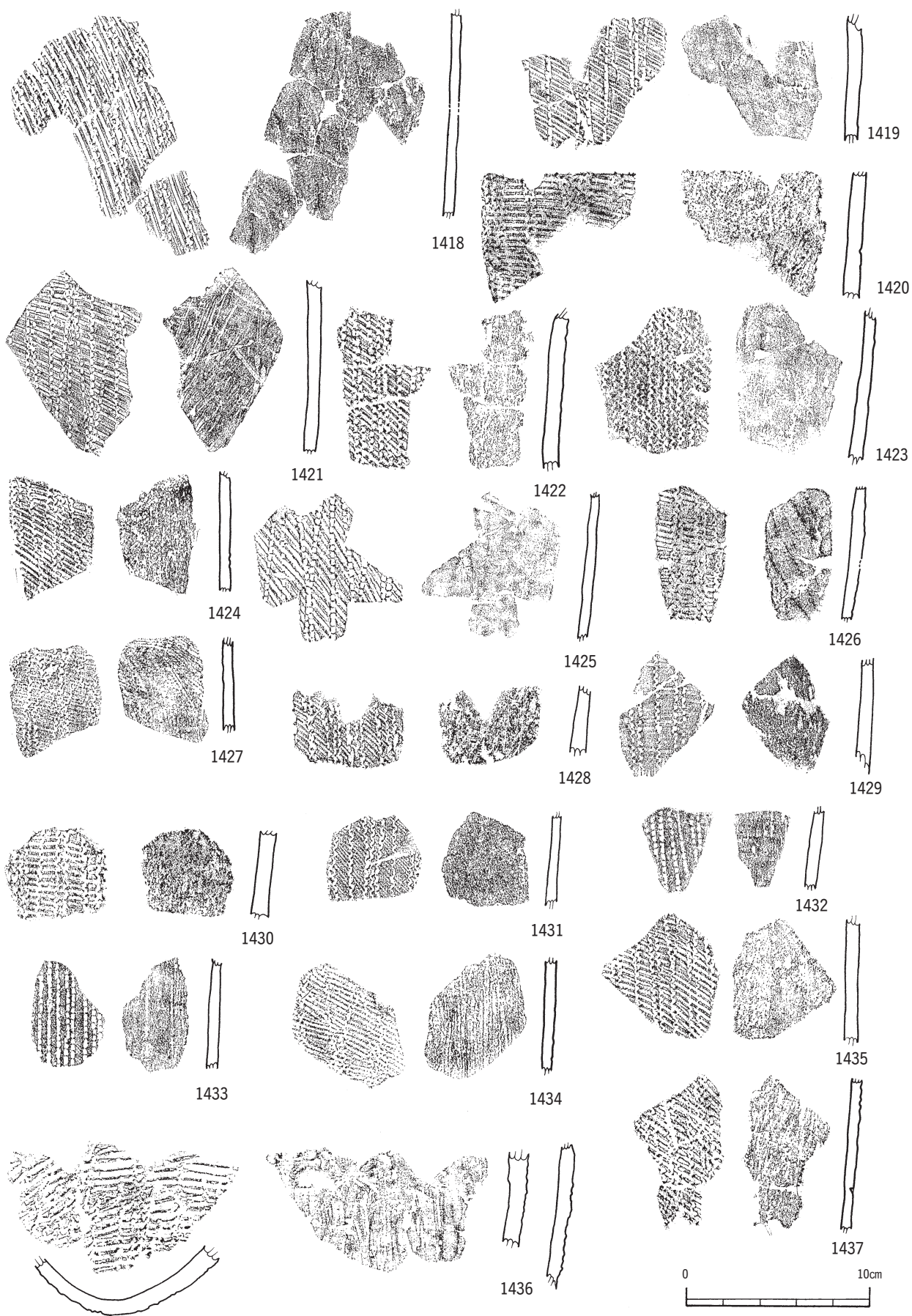
第245図 3類土器(12)



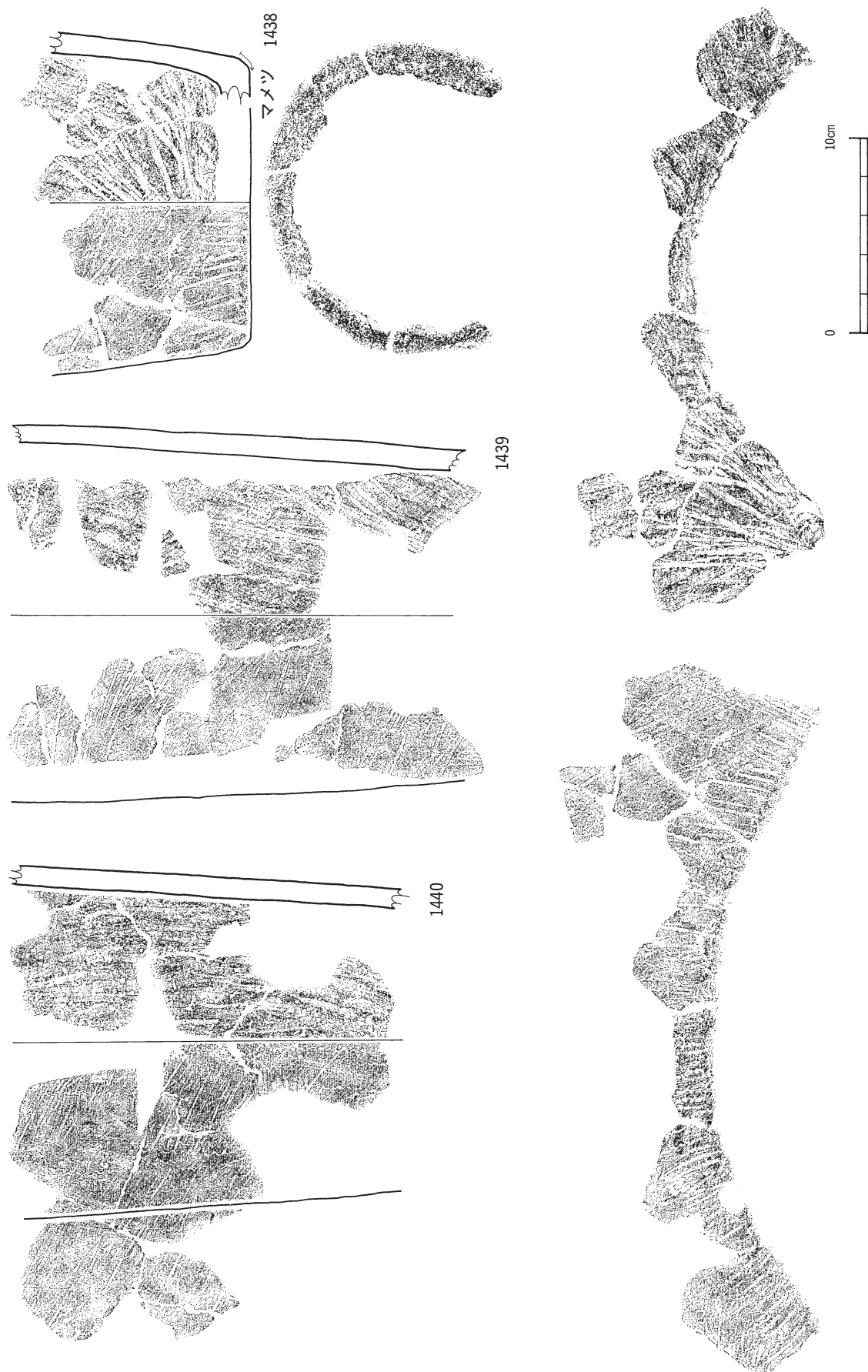
第246図 3類土器(13)



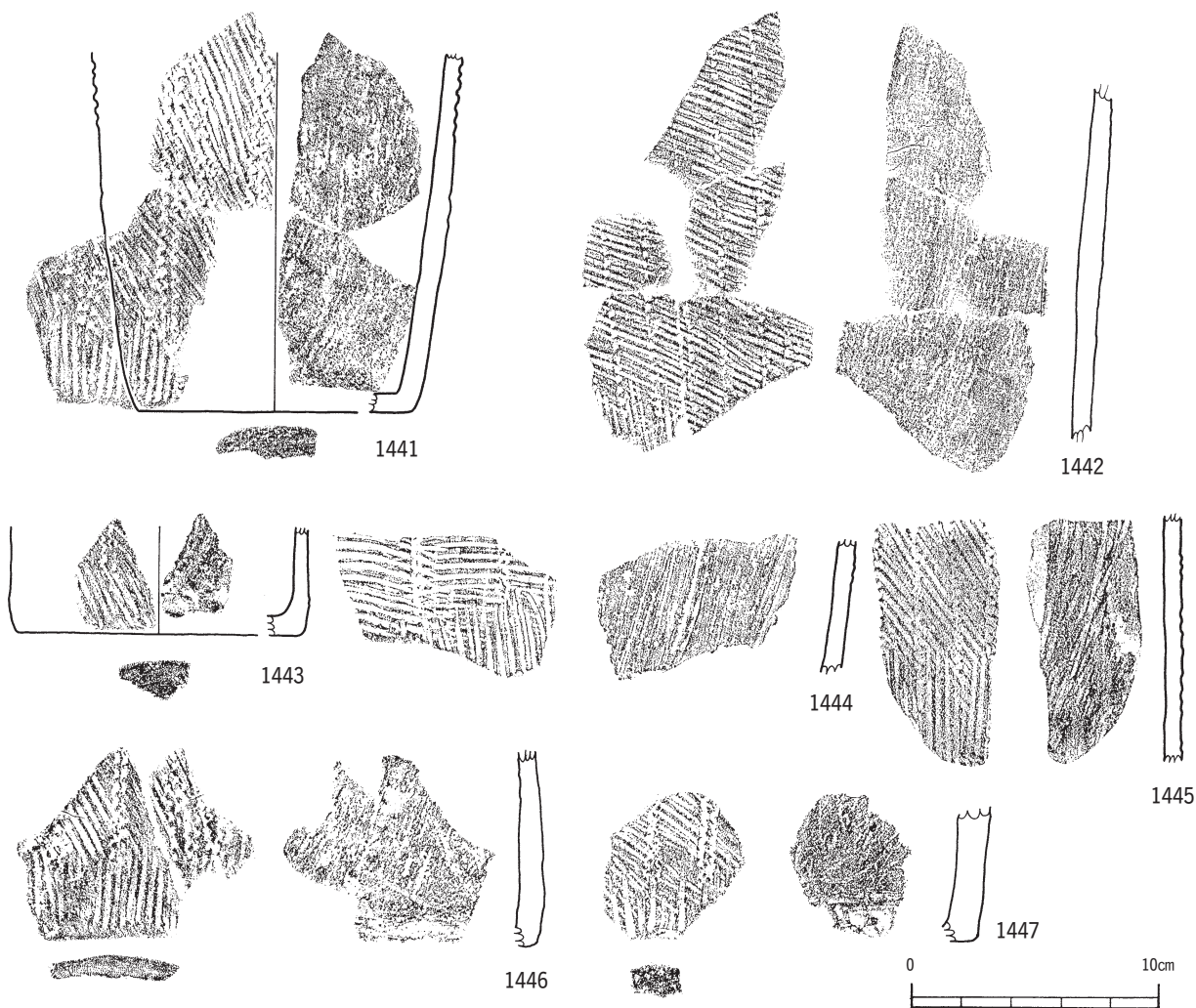
第247図 3類土器(14)



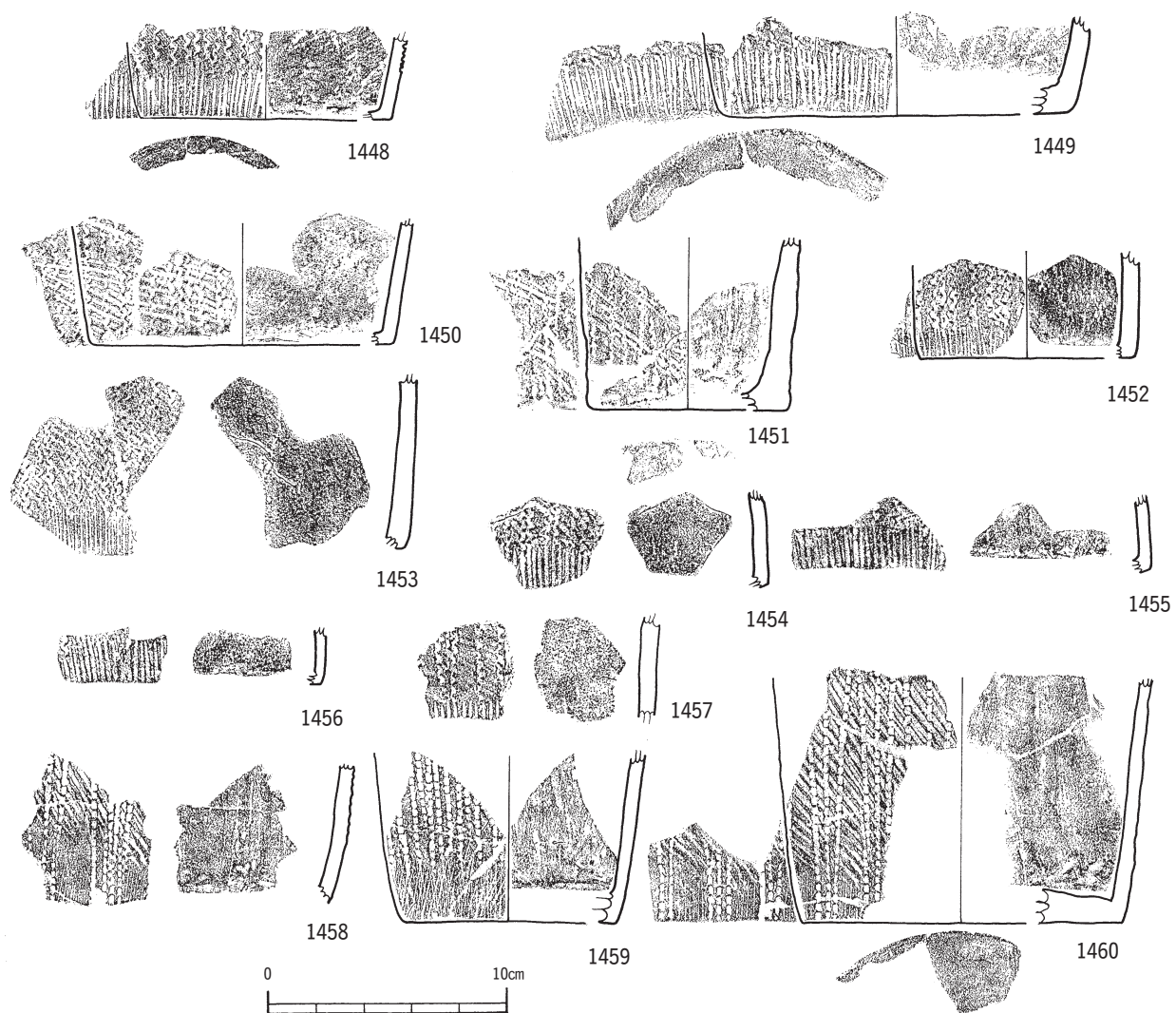
第248図 3類土器(15)



第249図 3類土器(16)



第250図 3類土器(17)



第251図 3類土器(18)

1461～1658は、器形が角筒形を呈する一群である。

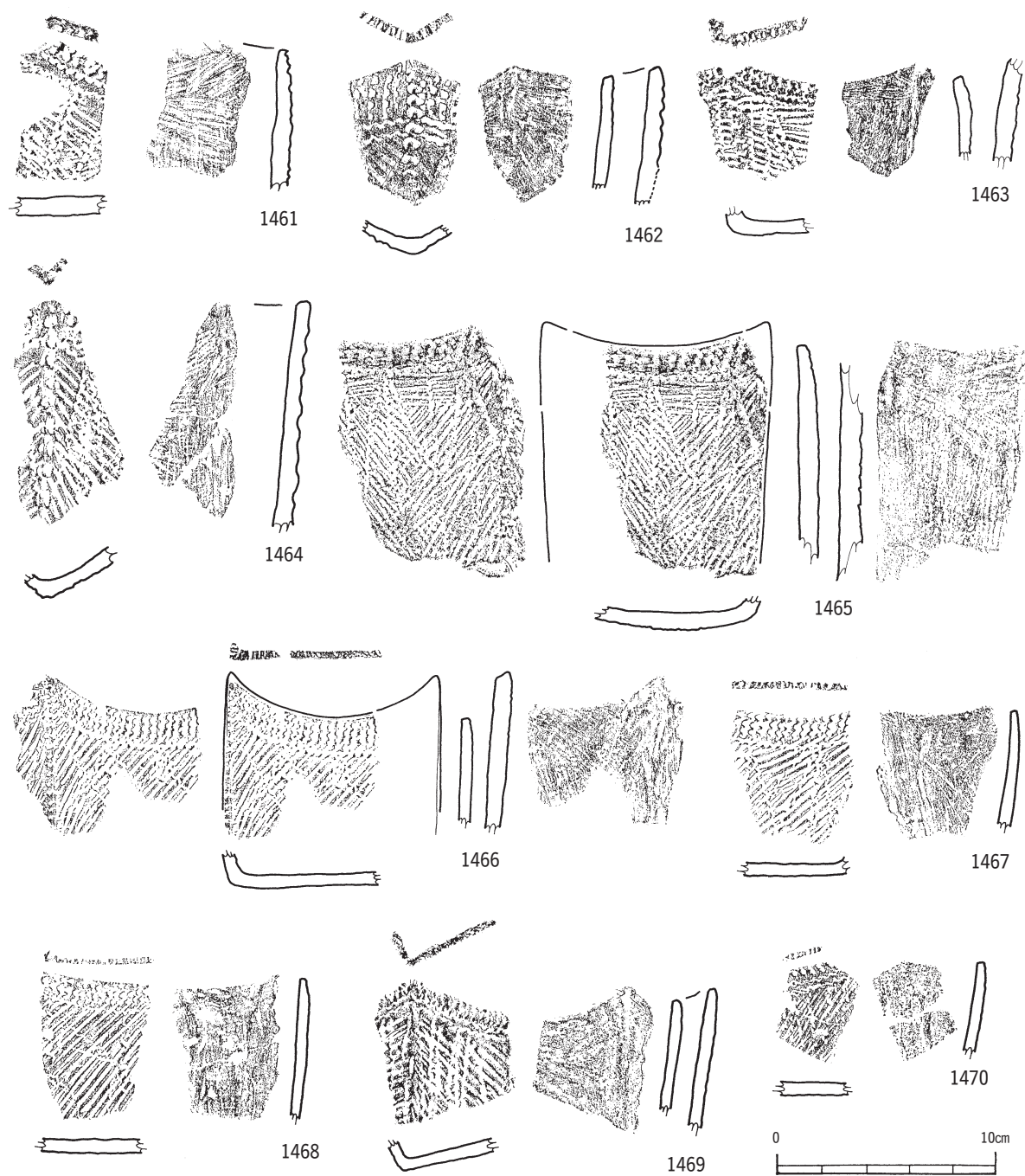
1461～1480は、上野原タイプと見られる一群のいずれも口縁部片である。口縁部には肋 3～4 条の貝殻刺突を縦位に施し、直下に横位の貝殻刺突文が 2 条程度めぐるのが多い。また、胴部には斜位の貝殻条痕文を施すが、1465などのように、中心部付近まで右上がりの斜位の貝殻条痕文を施した後、左上がりのものを重ねるものもある。

1461は、やや斜位の二重貝殻刺突文に斜位の貝殻刺突文を X 字状に重ねる。1463, 1474は、縦位の二重貝殻刺突文に斜位の二重刺突文を重ねている。1464, 1465は、縦位の貝殻刺突文に斜位の貝殻刺突文を綾杉状に重ねている。縦位の貝殻刺突文は、面に対して 3 列施される。1466～1468は、縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文を X 字状に重ねる。角部は、断続的な貝殻刺突を上から下に施す。1469は、縦位の貝殻刺突文、あるいは部分的に二重貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文を重ねる。口唇部は平坦で、刻みを付する。1471は、逆 V 字状の斜位の貝殻刺突文を面に対して 3 組並べて施し、交点を通るように縦位の貝殻刺突文を 5 列施すと思われる。一部の斜位の貝殻刺突文のみ、二重貝殻刺突文となる。1473は、縦位の二重貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文を V 字状に重ねる。角部には、断続的な短沈線文を上から下に施す。1477は、縦位の二重貝殻刺突文を面に対して 3 列程度施すと見られる。口唇部は丸みを帯び、刻みを付する。1478も同様だが、角部に断続的なハ字状の貝殻刺突文を上から下に施す。1479は、縦位の二重貝殻刺突文を施し、斜位の二重貝殻刺突文を V 字あるいは X 字状に重ねる。1480は、縦位の貝殻刺突文が一部二重に施され、斜位の貝殻刺突文を重ねる。

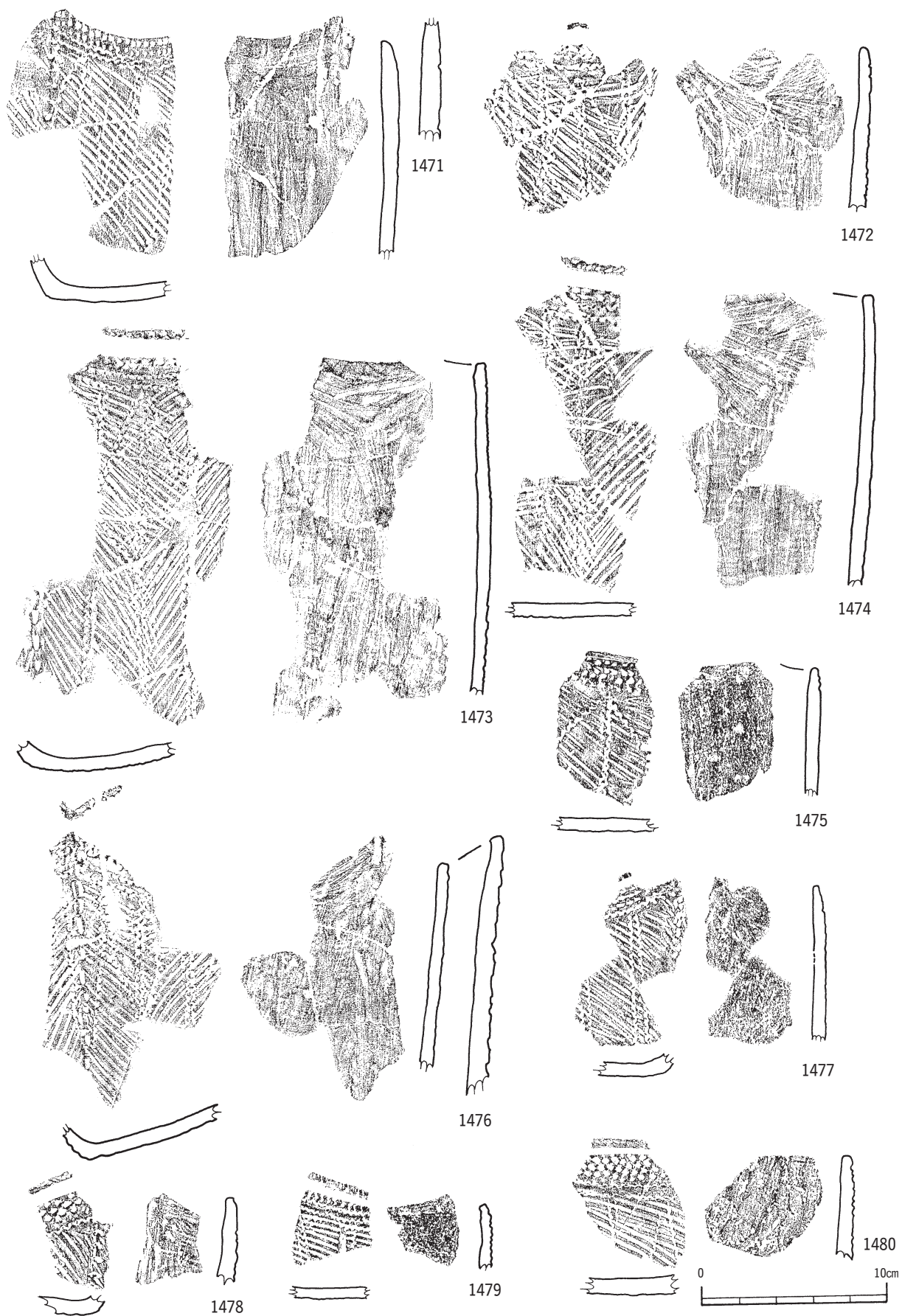
1481～1509は、口縁部直下に貼付文を付さない口縁部の一群体である。

1481は、斜位の貝殻条痕文を施すが、向きは乱れる。口縁部には、横位の貝殻刺突文が 4 条めぐり、直下に肋 4 条の斜位の貝殻刺突文を 1 段密に施す。胴部は、縦位の貝殻刺突文を面に対して 3 列施し、中心の刺突文から左右の刺突文に向け斜位の貝殻刺突文を逆 V 字状に重ねる。しかし、隣の面では、斜位の貝殻刺突文を X 字状に施すことから、面によって施文は異なると思われる。

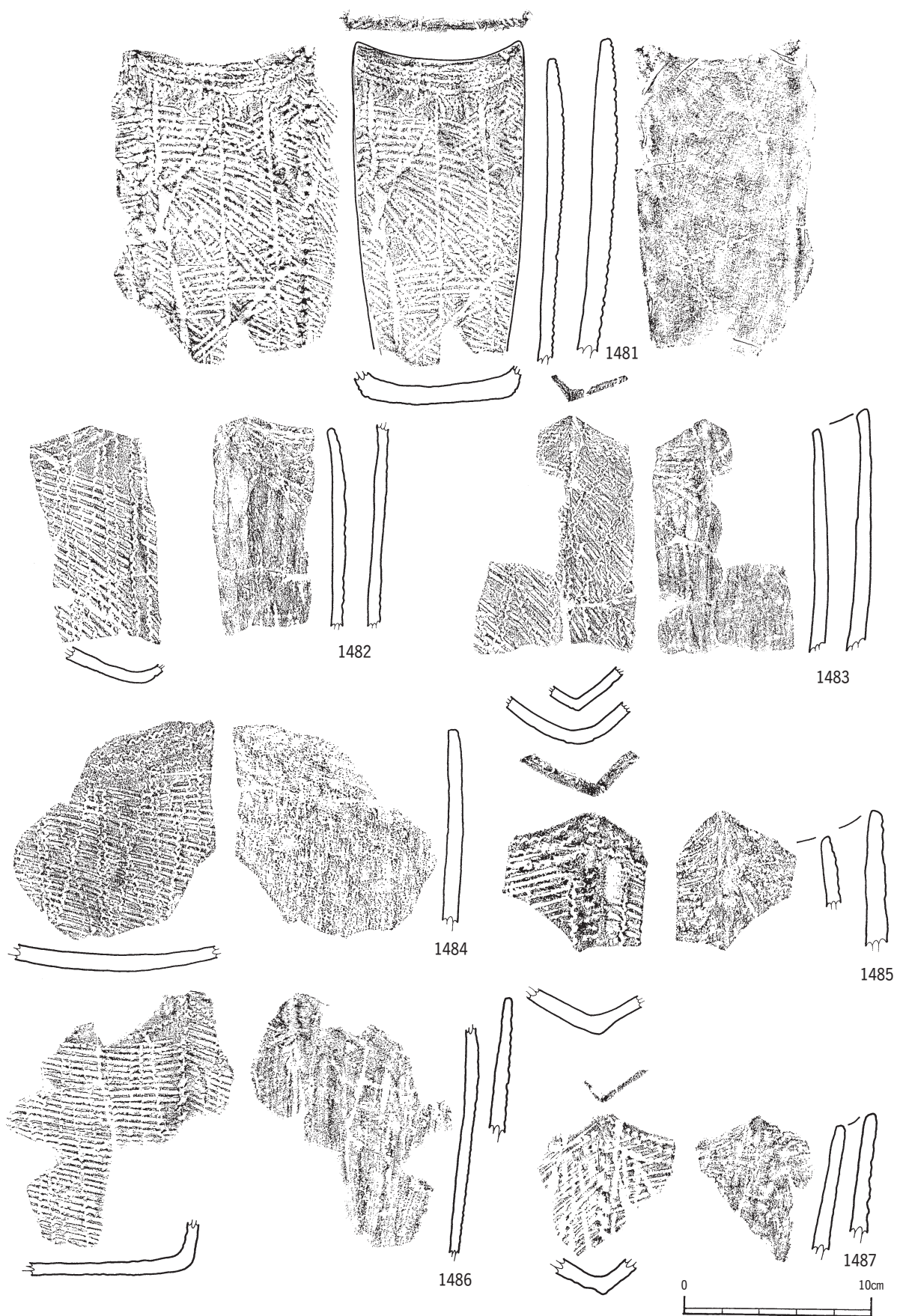
1482, 1484は、二重貝殻刺突文に斜位の貝殻刺突文を X 字状に施す。1483は、斜位の二重貝殻刺突文を X 字状に施す。1485は、大型の貝殻を用いて、やや間隔の開いた縦位の二重貝殻刺突文を施す。1486～1496, 1499～1505, 1507～1509は、縦位の貝殻刺突文に斜位の貝殻刺突文を X 字もしくは V 字状に重ねる。1497は、縦位の貝殻刺突文を 1～3 本組にして施し、斜位の貝殻刺突文を V 字状に重ねる。1498は、縦位の二重貝殻刺突文を面に対して 3 列施すと思われる。1506は、縦位の貝殻刺突文を密に施し、1508は、斜位の貝殻刺突文を鋭い V 字状に施す。また、1505, 1507, 1508は、貝殻条痕文が丁寧なナデで消されており、1509は、縦位の貝殻条痕文が施されている。なお、1507には、補修孔が確認できる。



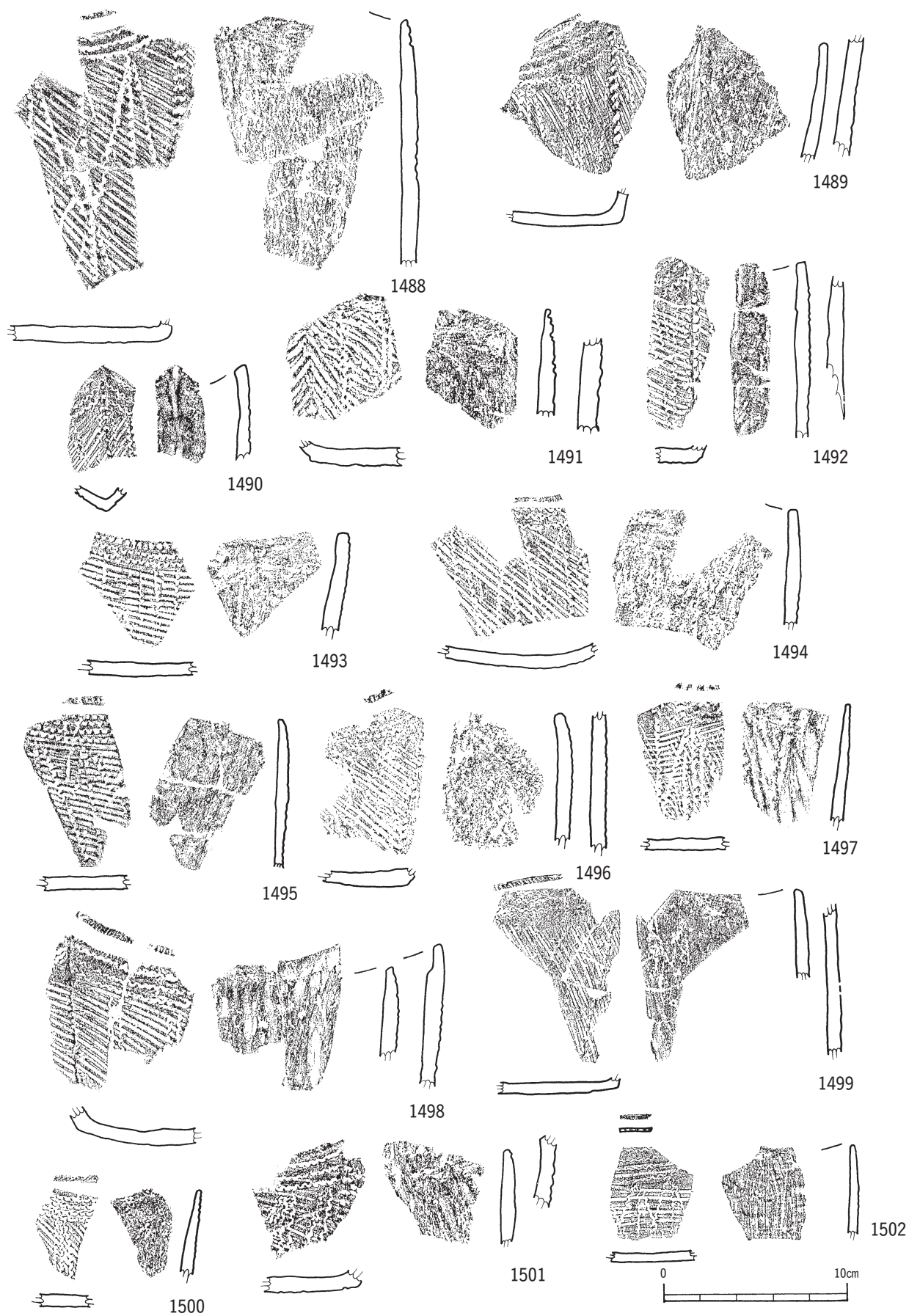
第252図 3類土器(19)



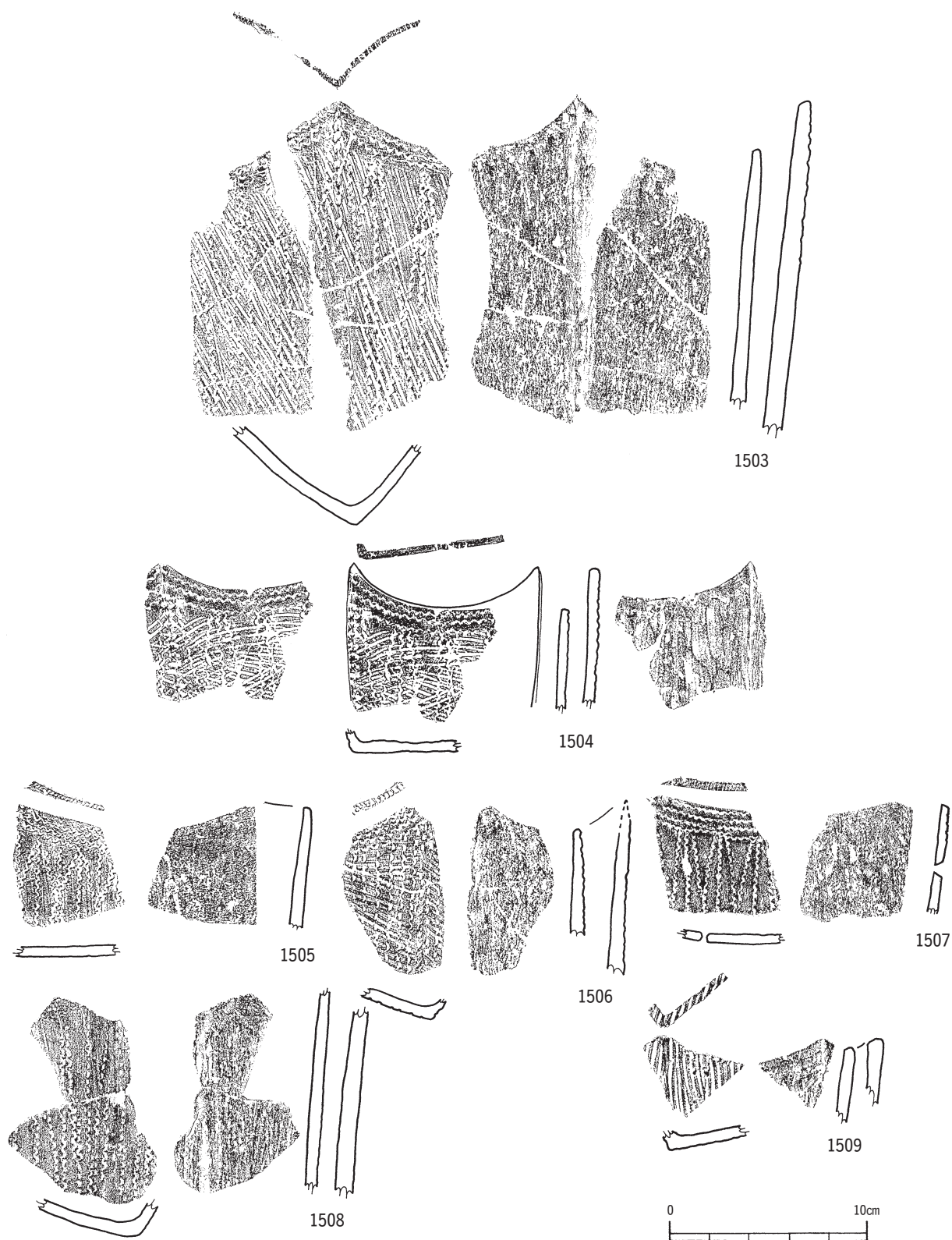
第253図 3類土器(20)



第254図 3類土器(2)



第255図 3類土器(22)



第256図 3類土器(23)

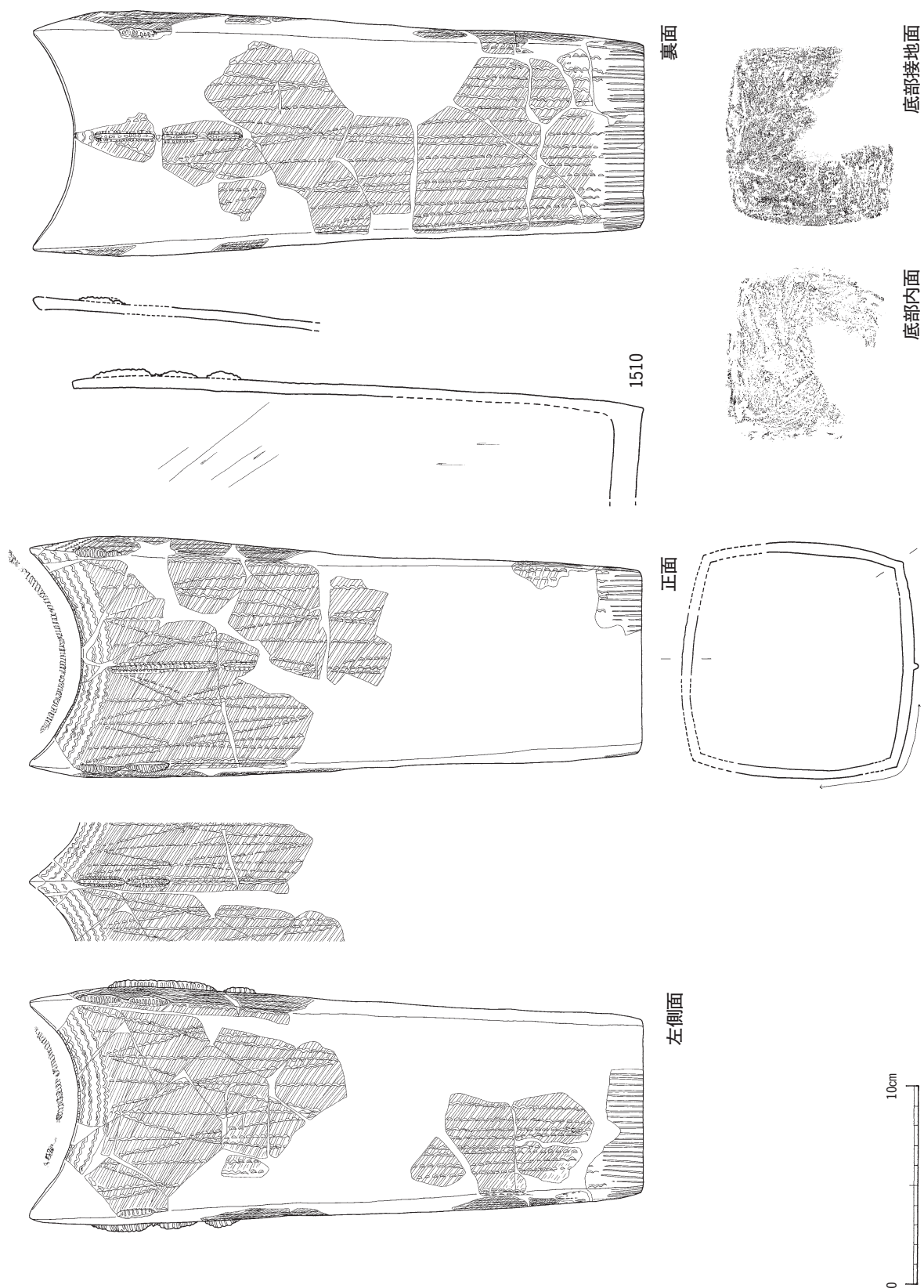
1510～1550は、口縁部直下に2～3段の粘土紐貼付文を付する一群である。

1510は、器高31.1cm、口径は長径11.7cm、短径11.4cm、底径9.2cmの完形復元土器である。4つの面が良好に残存している角筒形である。文様は、角部の波状に添って横位貝殻刺突文が4条めぐり、胴部は、斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねる、いわゆる2重施文の手法を採る。4つの角部には、粘土紐貼付文が2段貼付されている。この貼付文は、面中央部分にも貼付されているが、4面全てにはなく、対になる2面にのみ貼付されている。器面調整は、内面は胴部で縦位のケズリ、口縁部では口縁の形状に添って斜方向にケズリ痕が見られる。また、底部接地面にもケズリ痕が明瞭に残っている。

1511～1552は、口縁部片である。縦位の貝殻刺突文を施し、X字もしくはV字状の斜位の貝殻刺突文を重ねる文様が基本となる。1511は、縦位の貝殻刺突文を等間隔に施し、その上に貼付文を面に対して3列ナデで貼り付ける。面によっては確認できないが、貼付の痕跡が確認できることから、剥落したためだと考えられる。1512は、斜位の貝殻刺突文をX字状に組み合わせたものを面に対して4組施し、これに合わせる形で貼付文を4箇所貼り付ける。1514は、斜位の貝殻刺突文を細かい網目状に施している。1517は、縦位の貝殻刺突文を施し、二重貝殻刺突文をV字状に重ねる。貝殻刺突文の間に左側面はナデ調整、右側面は刺突が施される貼付文を貼り付ける。1519は、幅1.5cm、残存部長5.7cmの大型の貼付文を確認できるが、ランダムな条痕文の上に貼付されており、貼付文中央部にかけて斜位の貝殻刺突文が確認できる。1524は、縦位の貝殻刺突文が二重に施される。1549は、縦位と斜位の貝殻刺突文を組み合わせてY字状に施す。

1553～1630は、胴部片である。縦位の貝殻刺突文を施し、X字もしくはV字状の斜位の貝殻刺突文を重ねる文様、もしくは縦位の貝殻刺突文を等間隔に施す文様が基本となる。1556は、貝殻条痕文を縦位に施す。1557は、肋4～5条の縦位の貝殻刺突文をやや断続的に施す。黒色化している。1560は、斜位の貝殻刺突文を網目状に施す。外面の一部に穿孔の痕が残る。1568～1572、1575、1577、1593、1595は、縦位の貝殻刺突文が二重に、1594は、三重に施されている。1582は、斜位の貝殻刺突文をX字状に施す。1585～1589、1599、1600は、斜位の貝殻刺突文まで含めて全て二重に施されている。縦位の貝殻刺突文は面に対して5列程度施される。1590～1592は、縦位の貝殻刺突文を密に施すが、刺突は二重貝殻刺突文の可能性もある。施されている1597は、縦位の二重貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文を鋸歯状に施すと思われる。1610は、縦位の貝殻刺突文を密に施す。1621には、補修孔が確認できる。

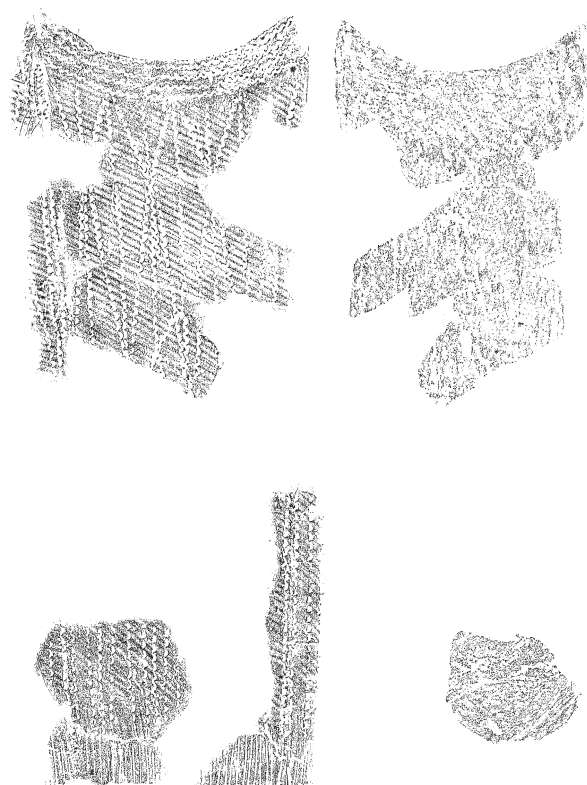
1631～1658は、底部片である。いずれも胴部の立ち上がり部分には縦位の貝殻条痕文が施される。底部外面は丁寧なナデ、もしくはミガキで調整される。1634は、底部内面は凹凸が激しい。1653は、縦位の貝殻刺突文がやや断続的に施される。



第257図 3類土器(24)



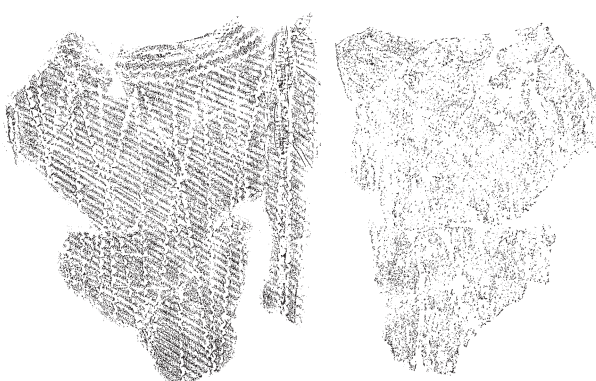
1510裏面



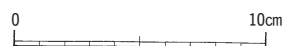
1510右側面



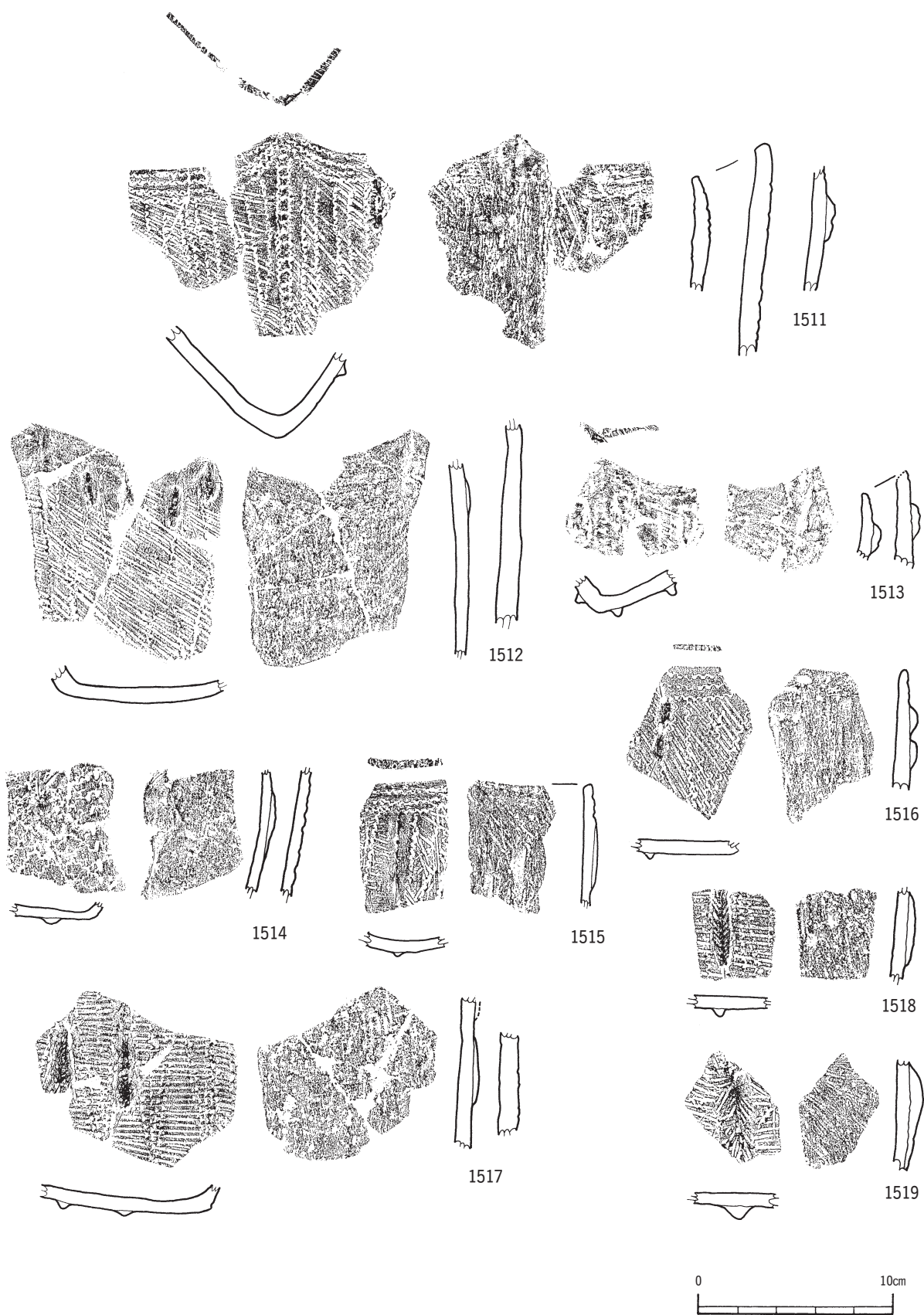
1510正面



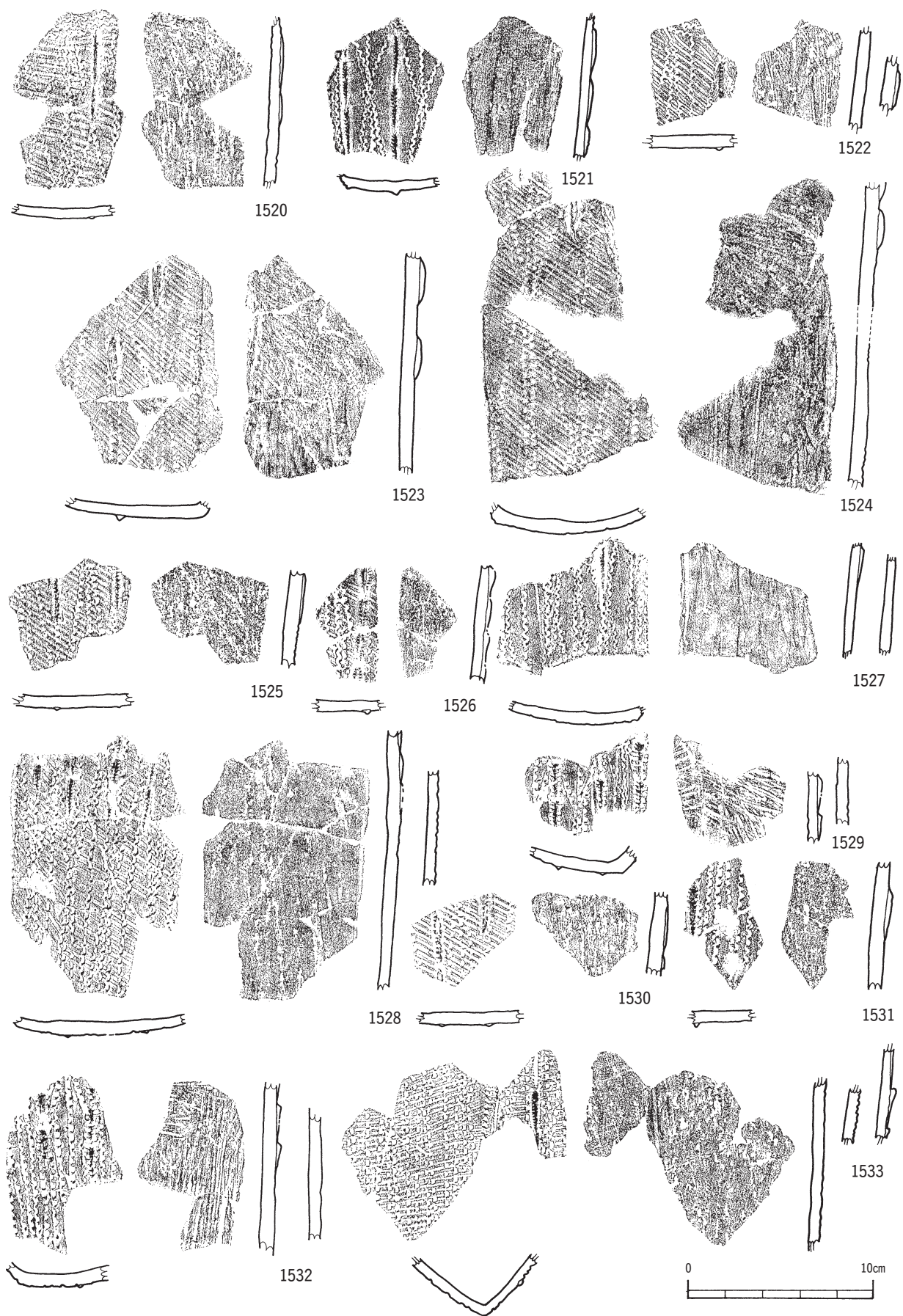
1510左側面



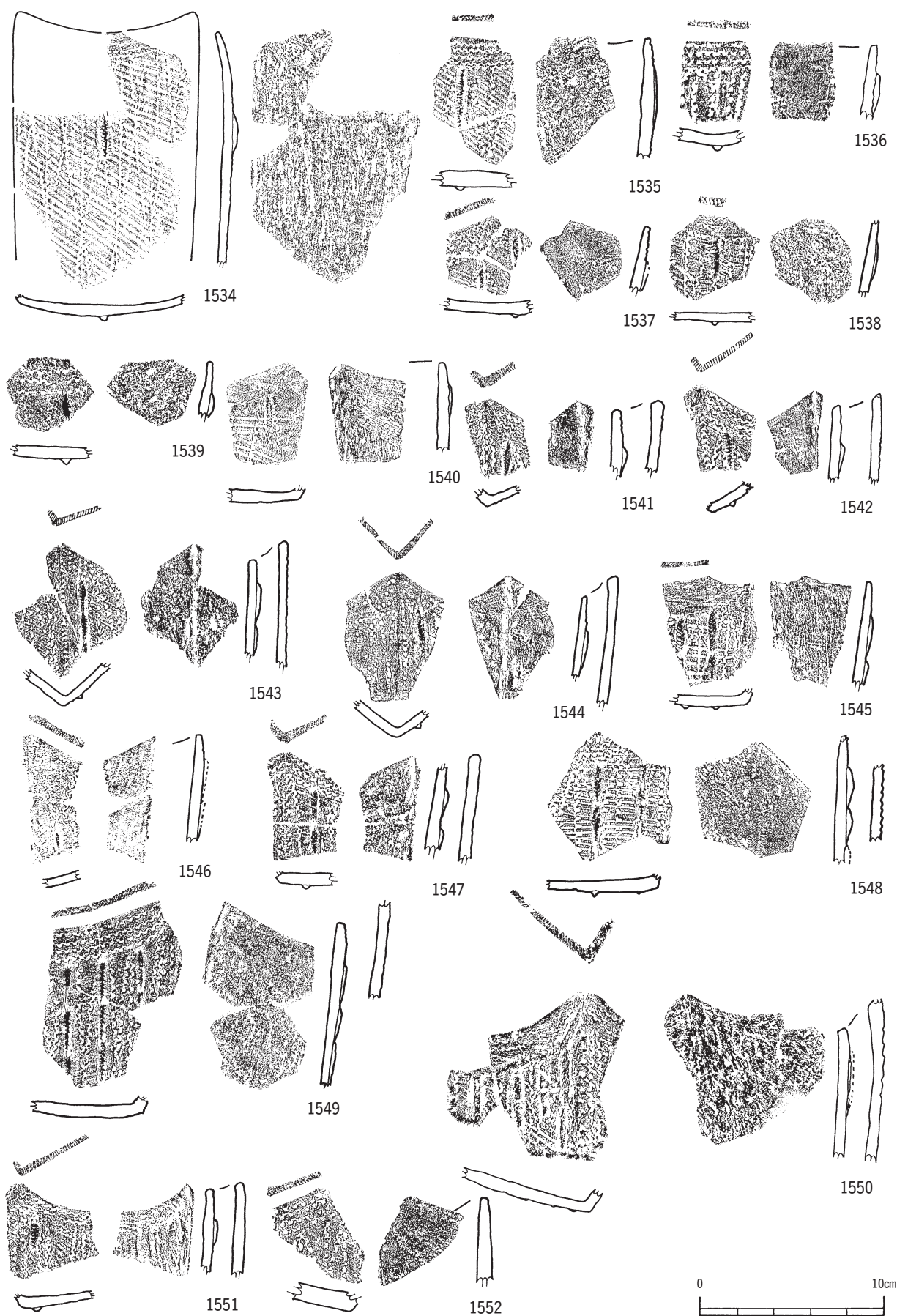
第258図 3類土器(25)



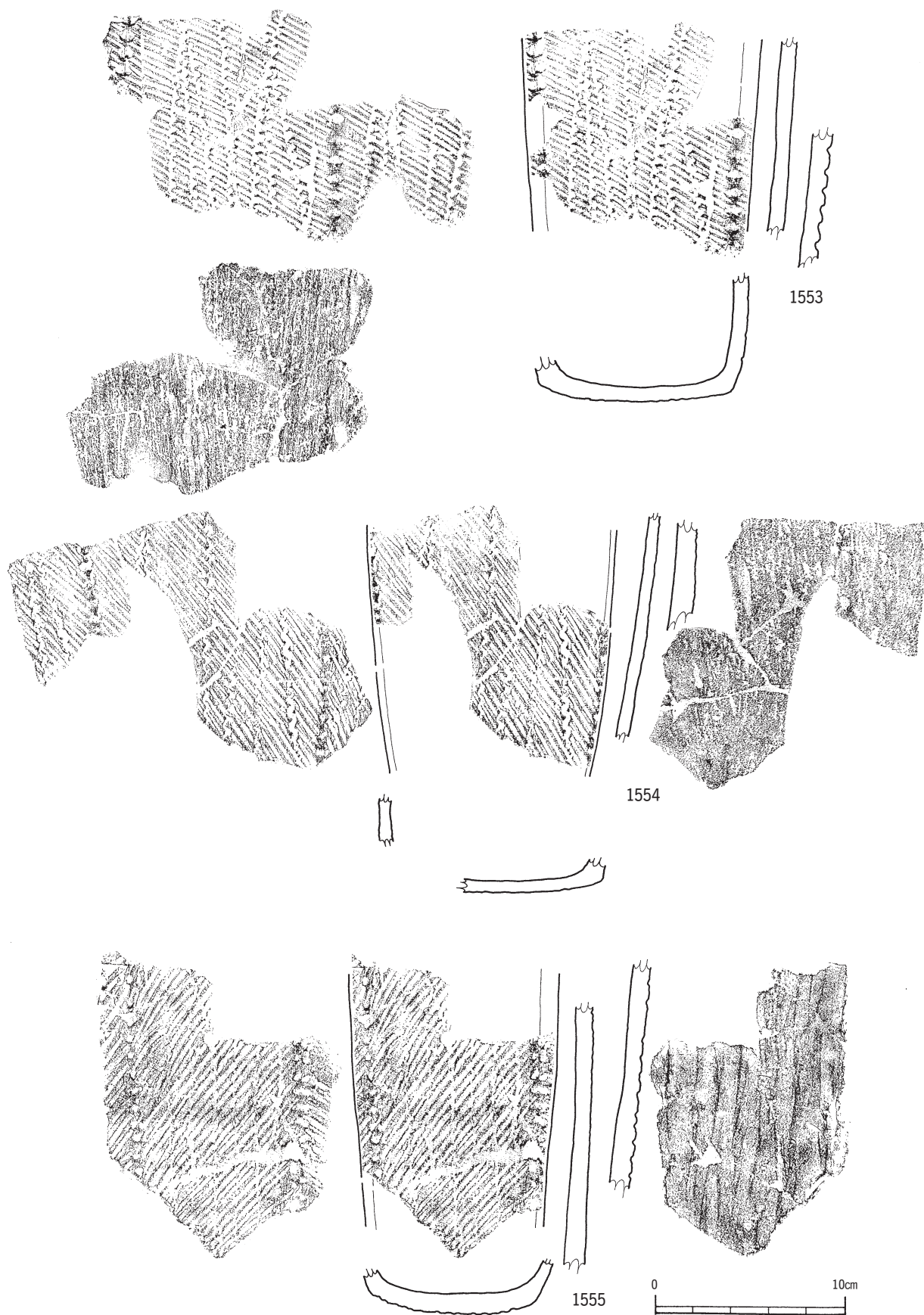
第259図 3類土器(26)



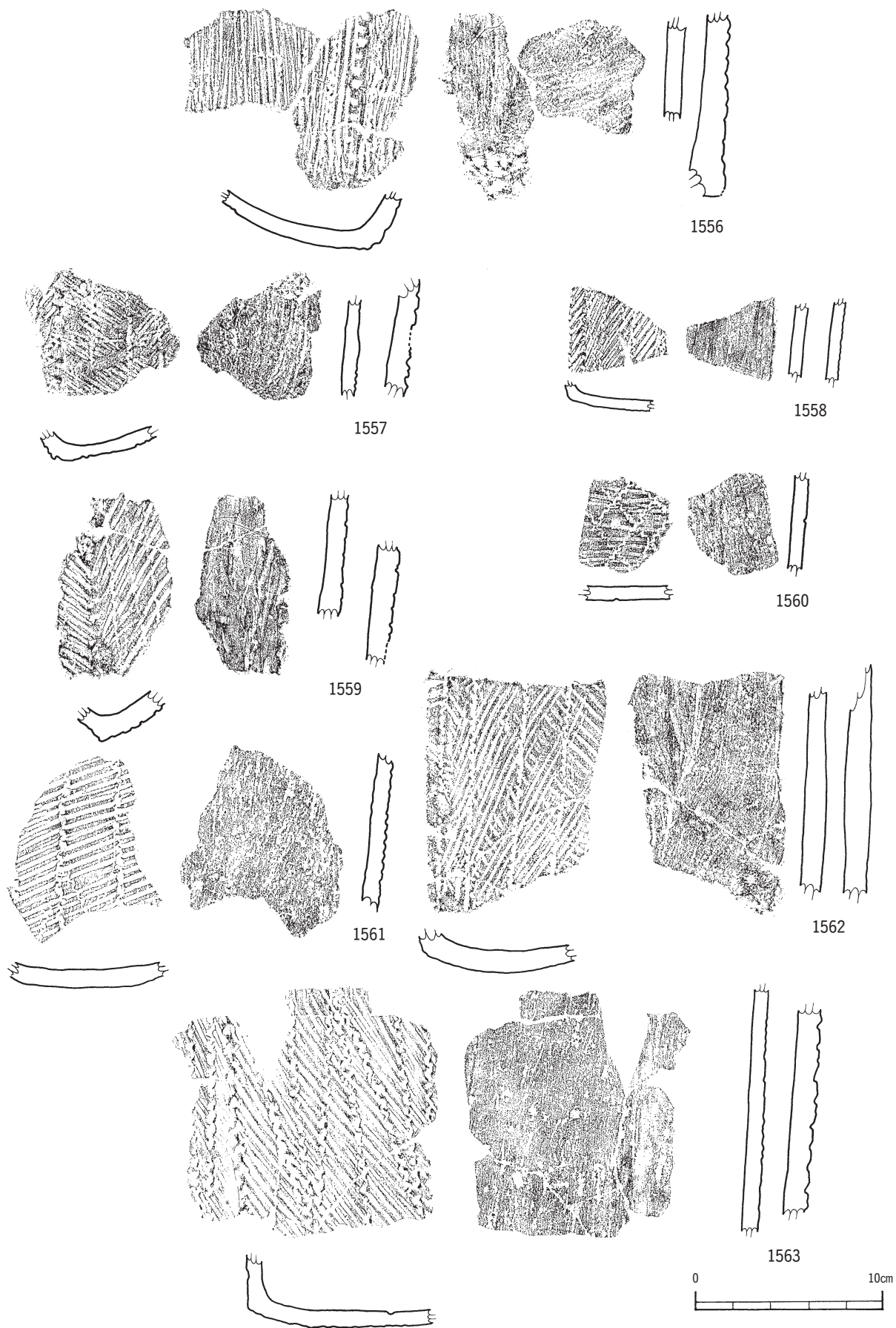
第260図 3類土器(27)



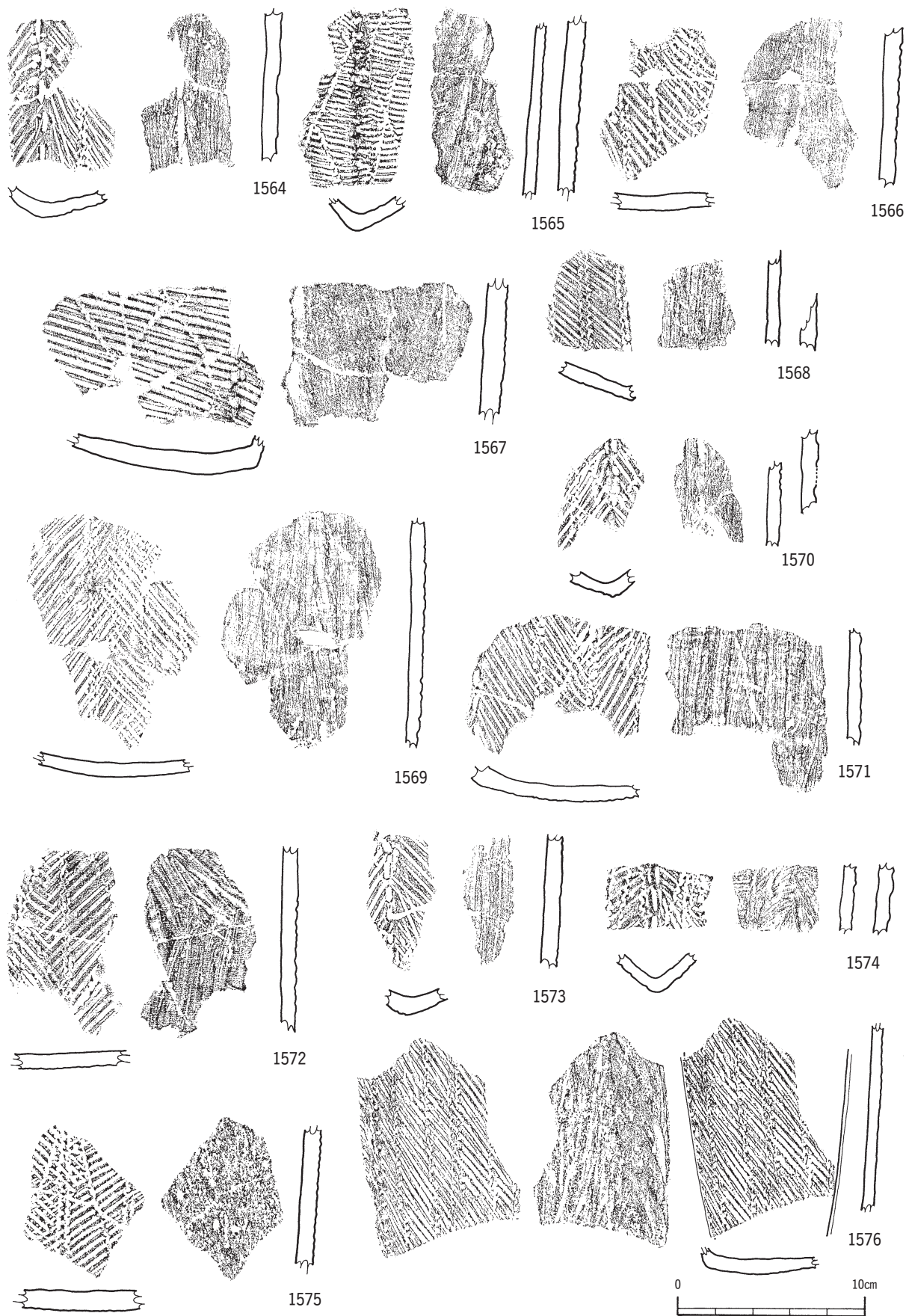
第261図 3類土器(28)



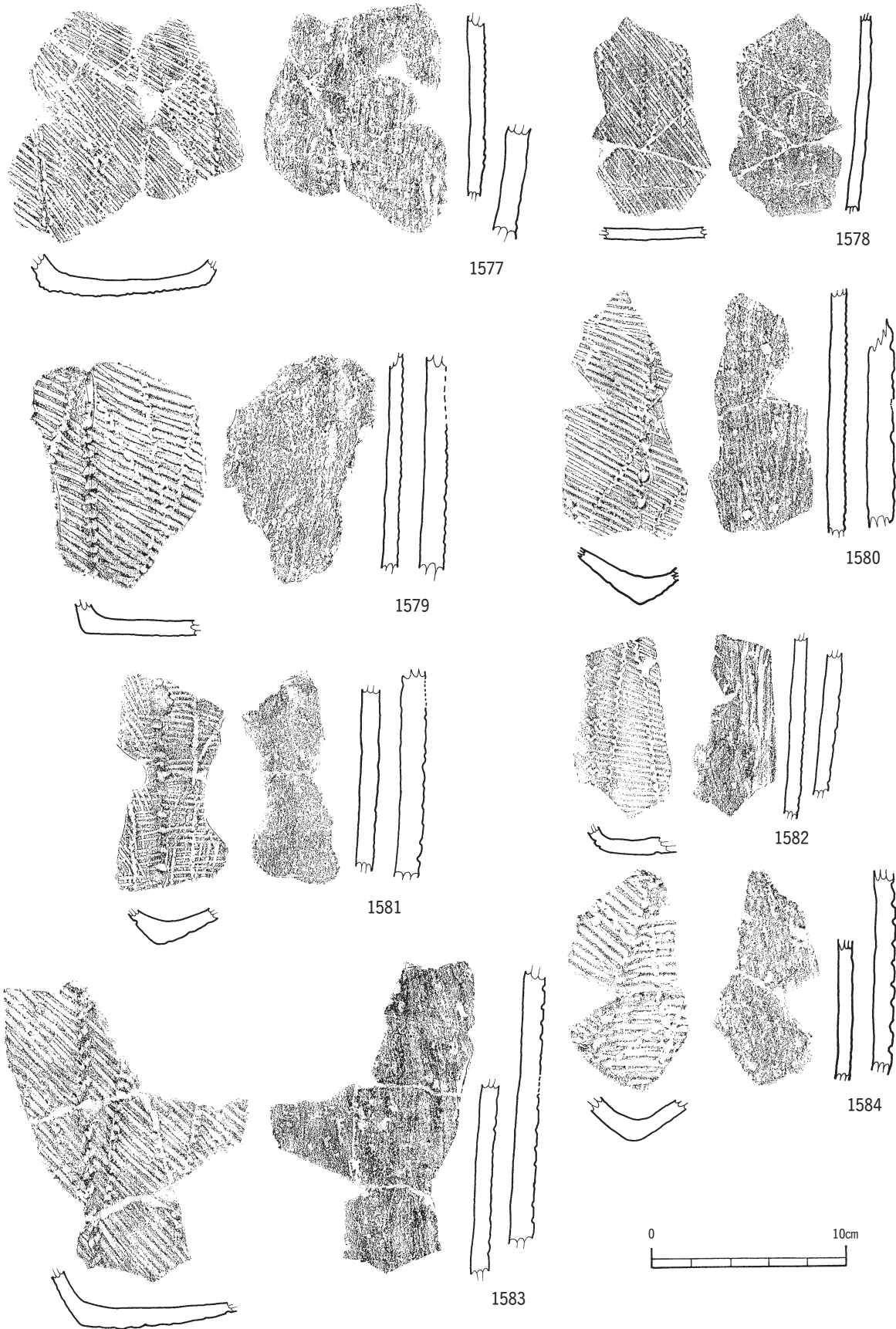
第262図 3類土器(29)



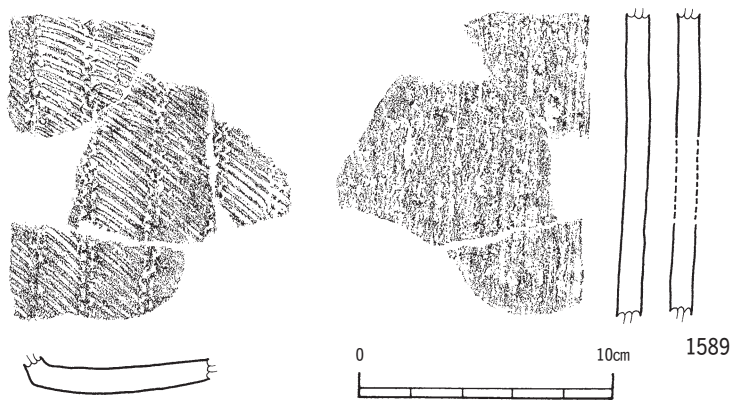
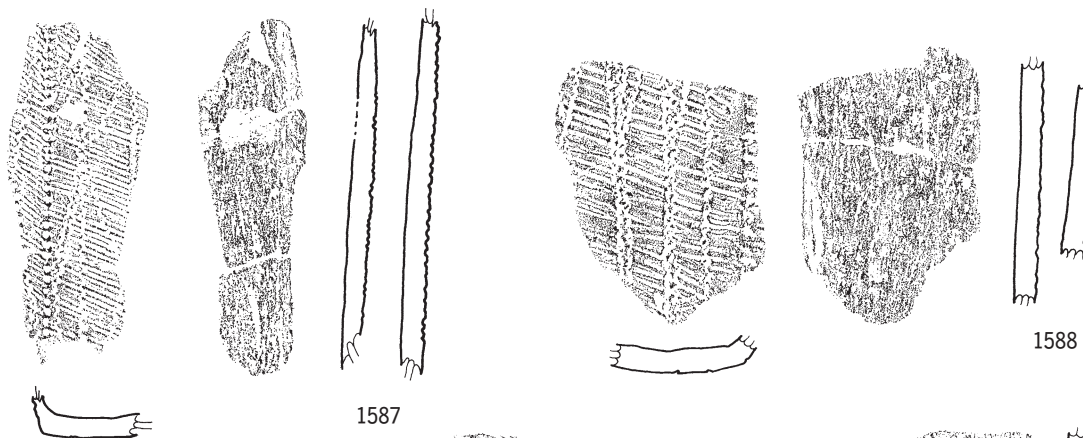
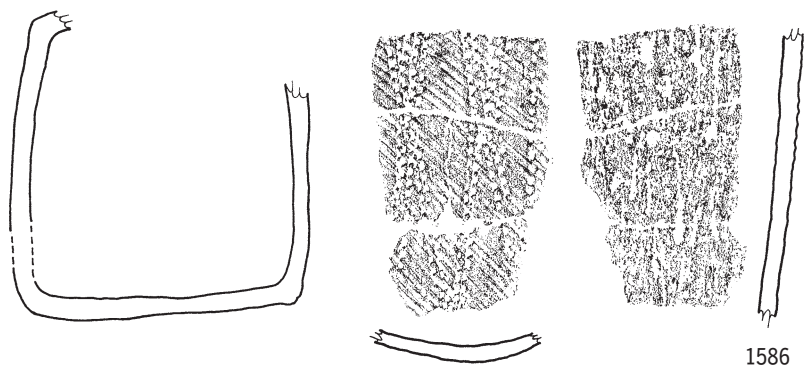
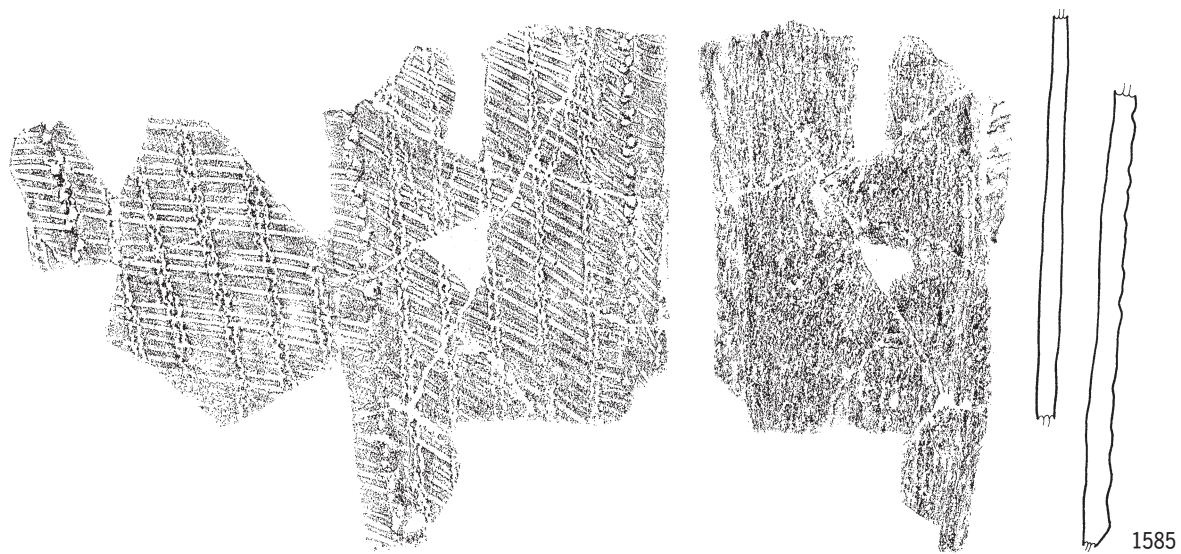
第263図 3類土器(30)



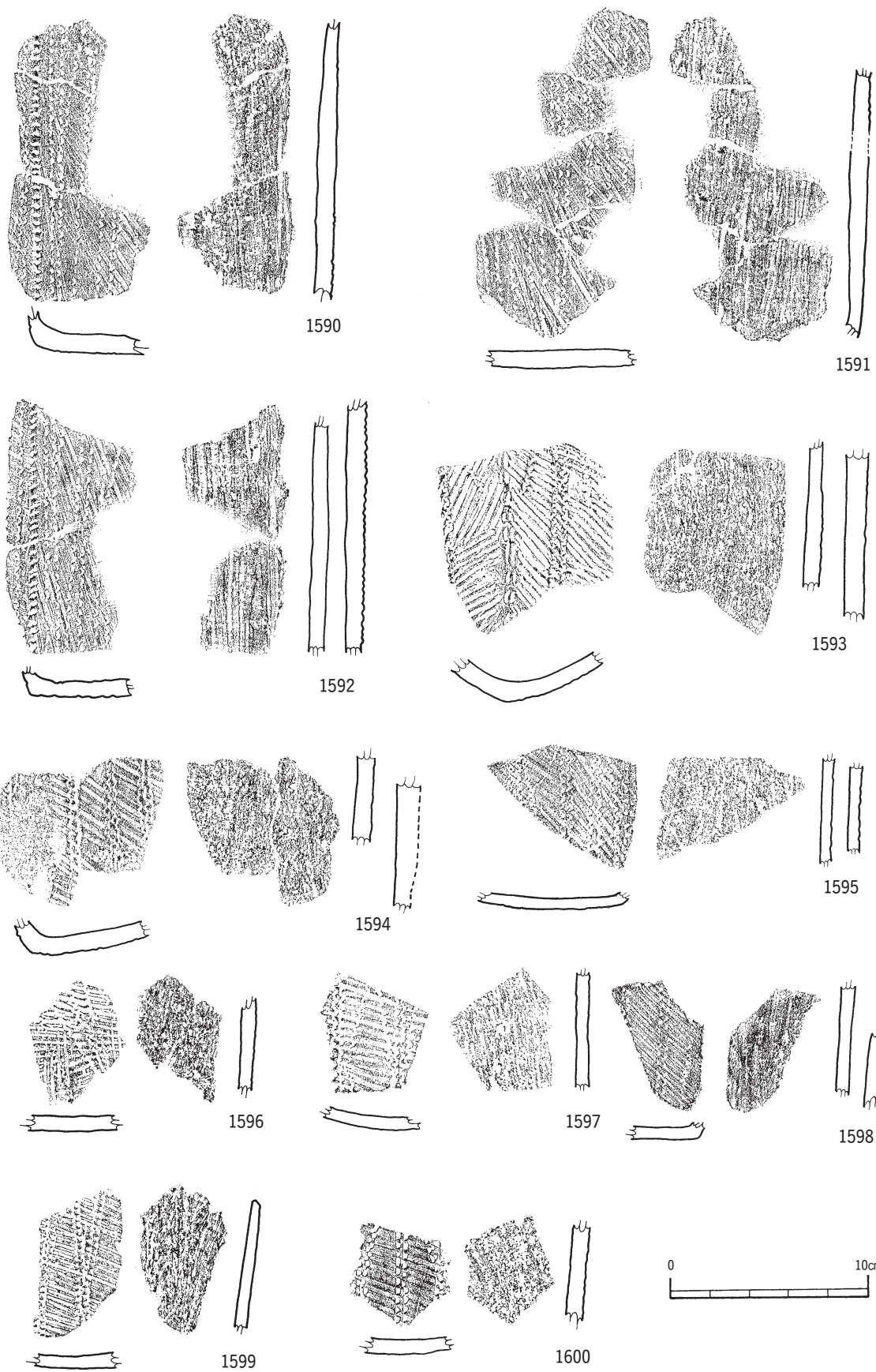
第264図 3類土器(31)



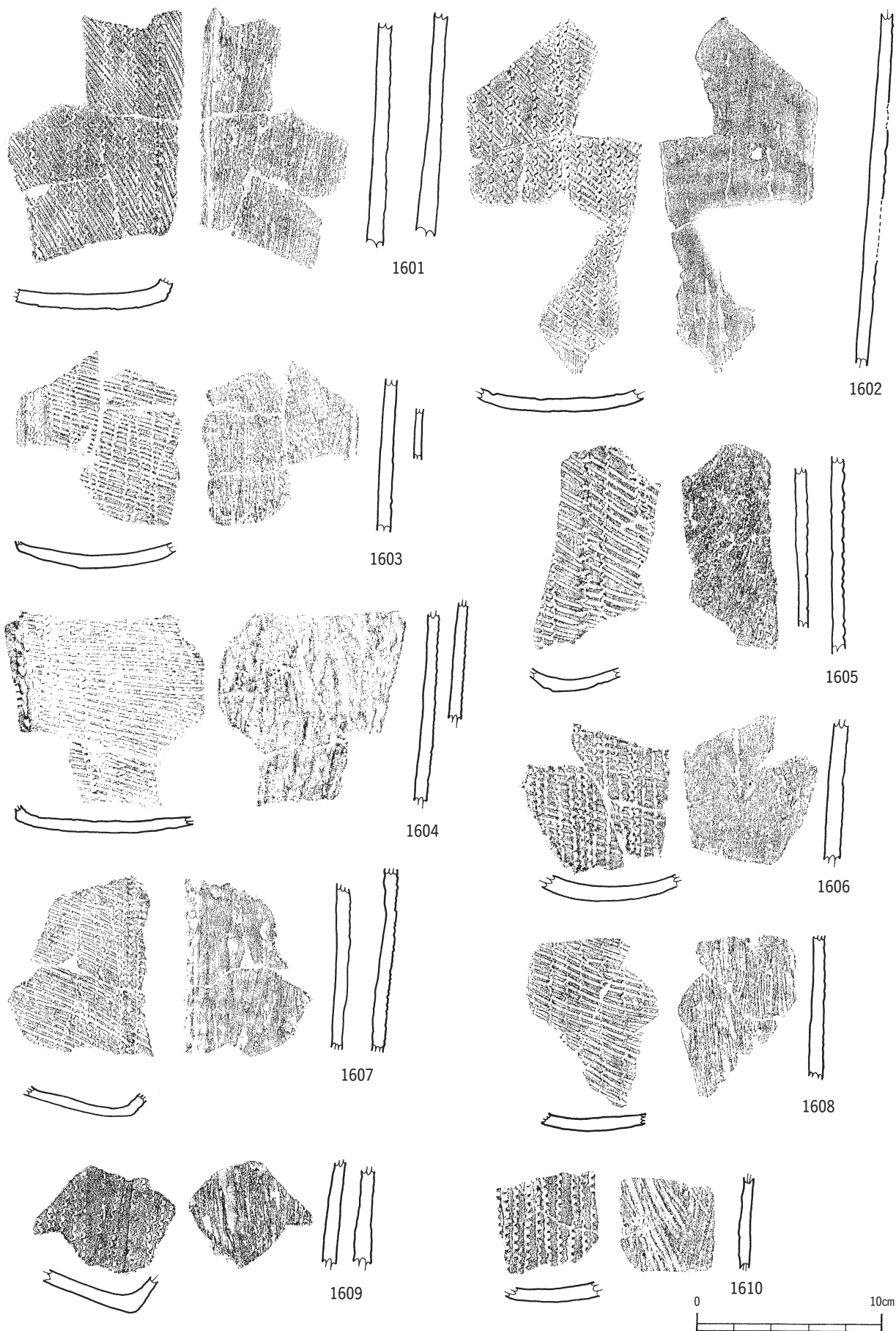
第265図 3類土器(32)



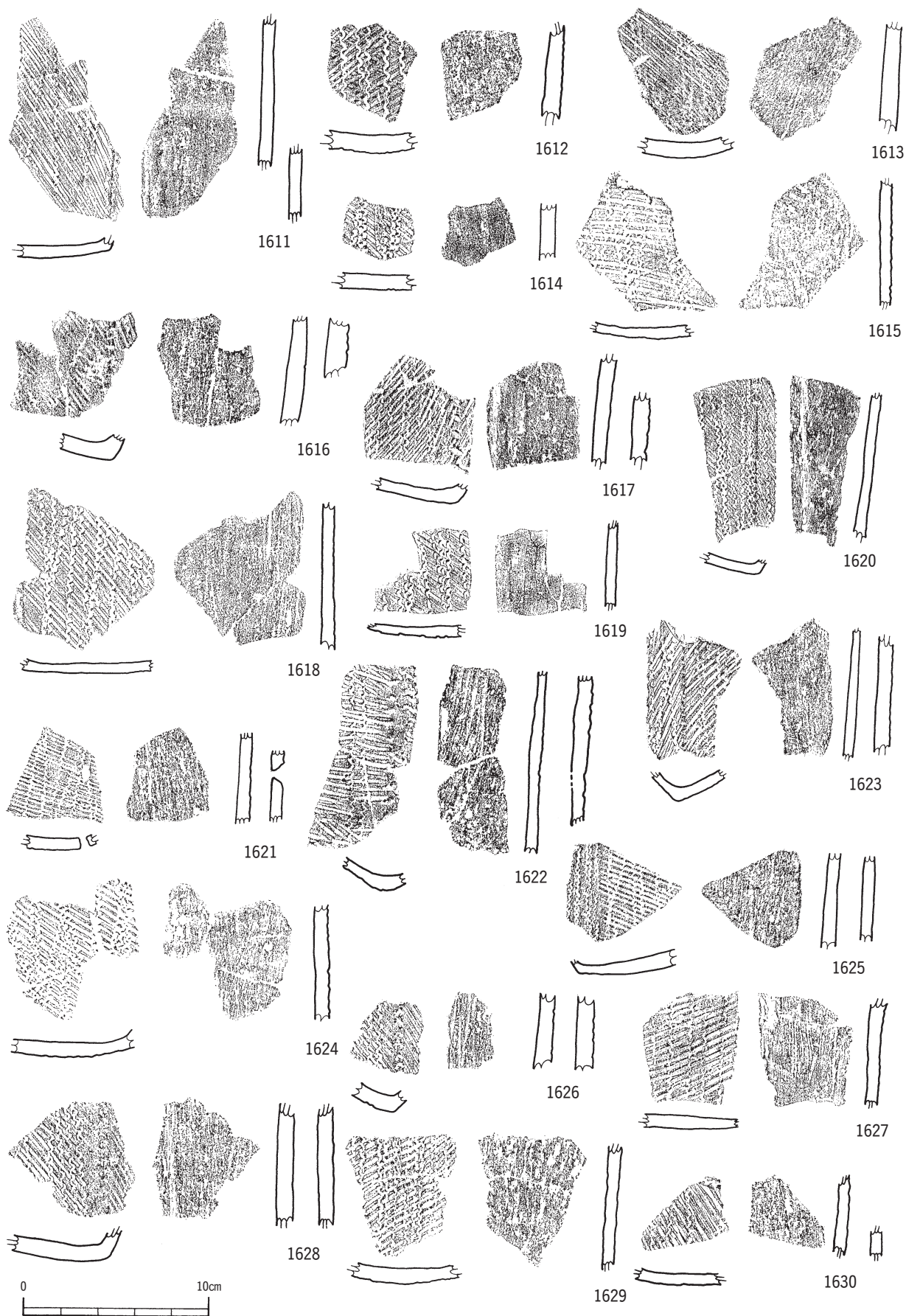
第266図 3類土器(33)



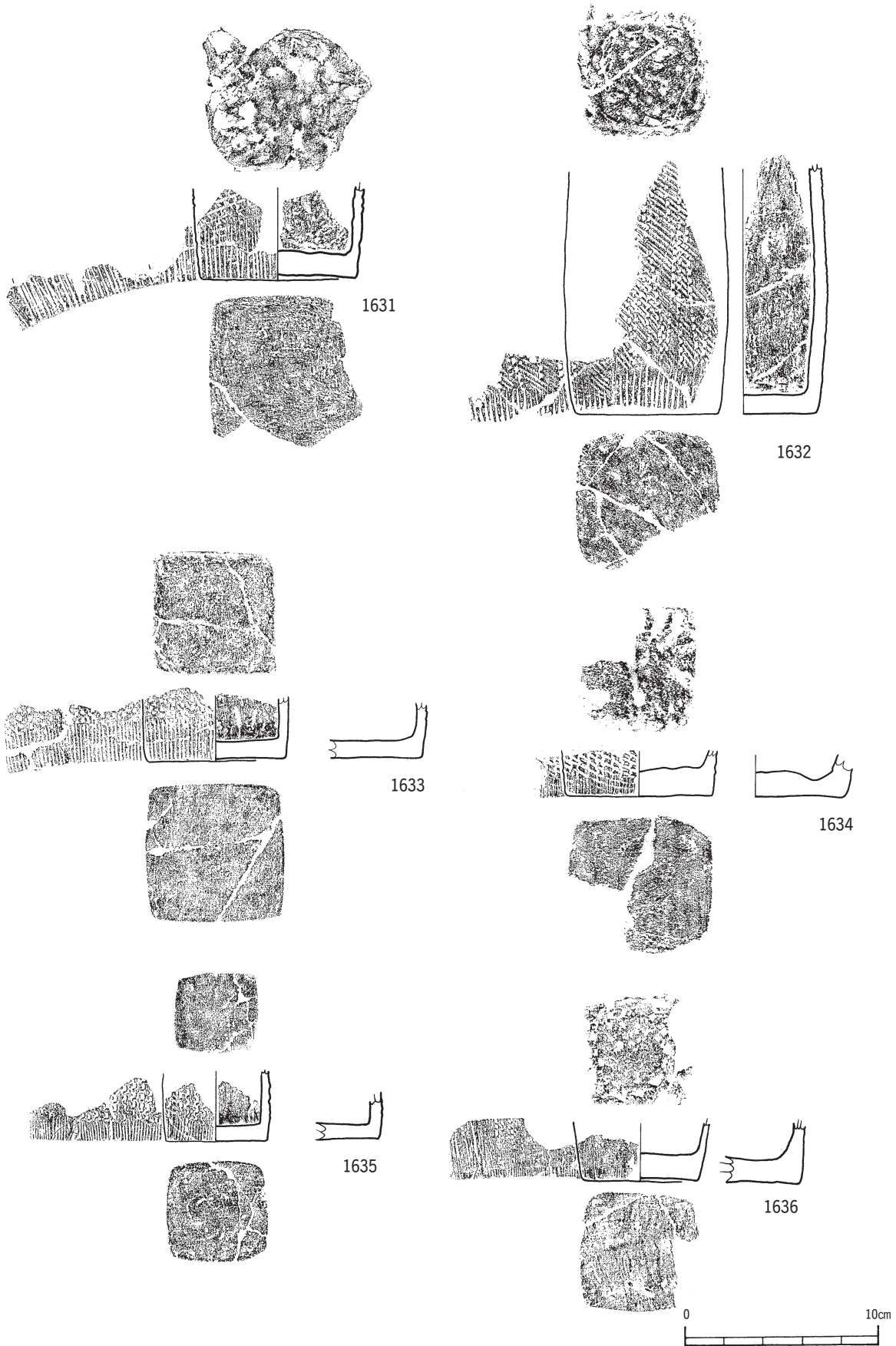
第267図 3類土器(34)



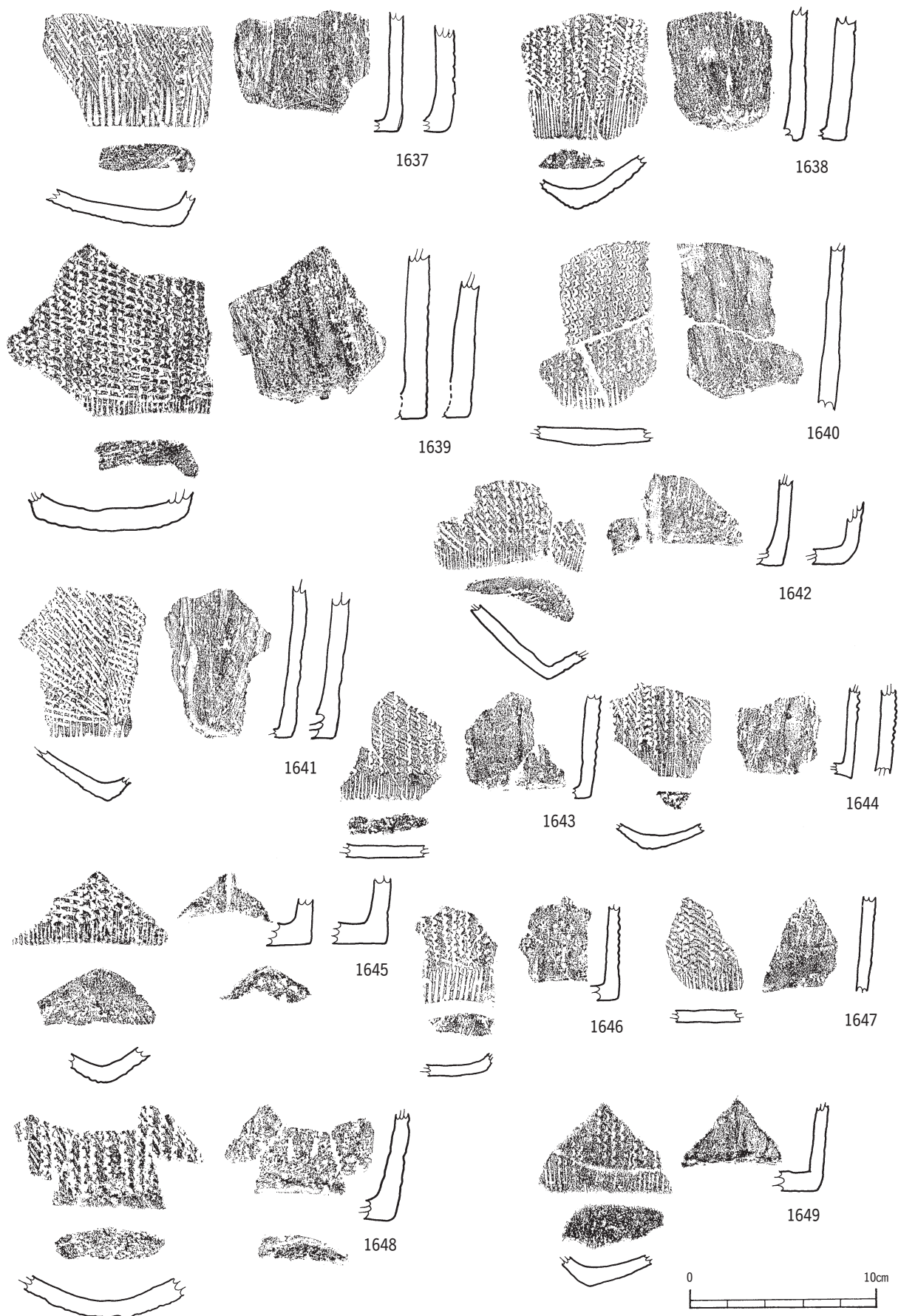
第268図 3類土器(35)



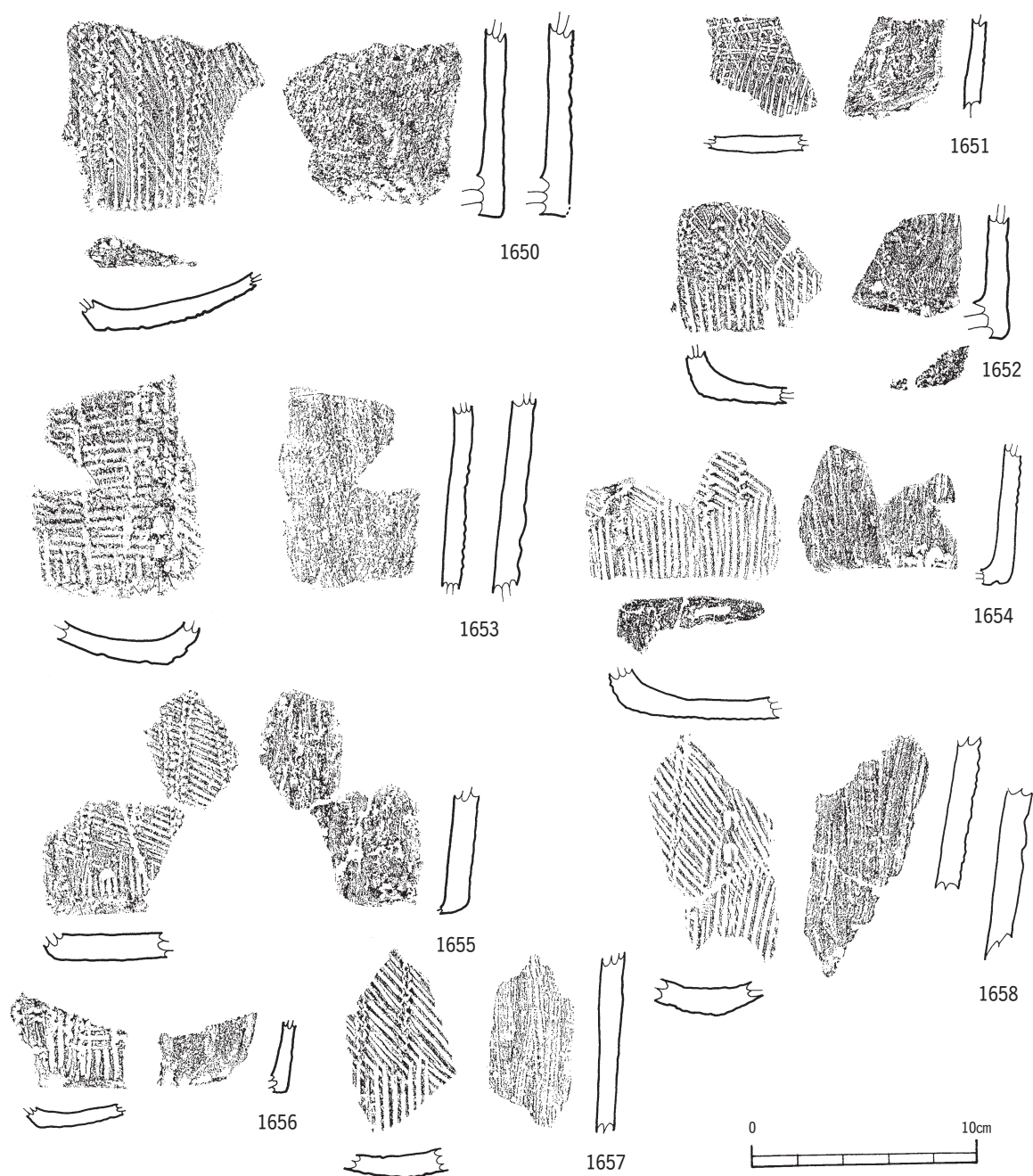
第269図 3類土器(36)



第270図 3類土器(37)



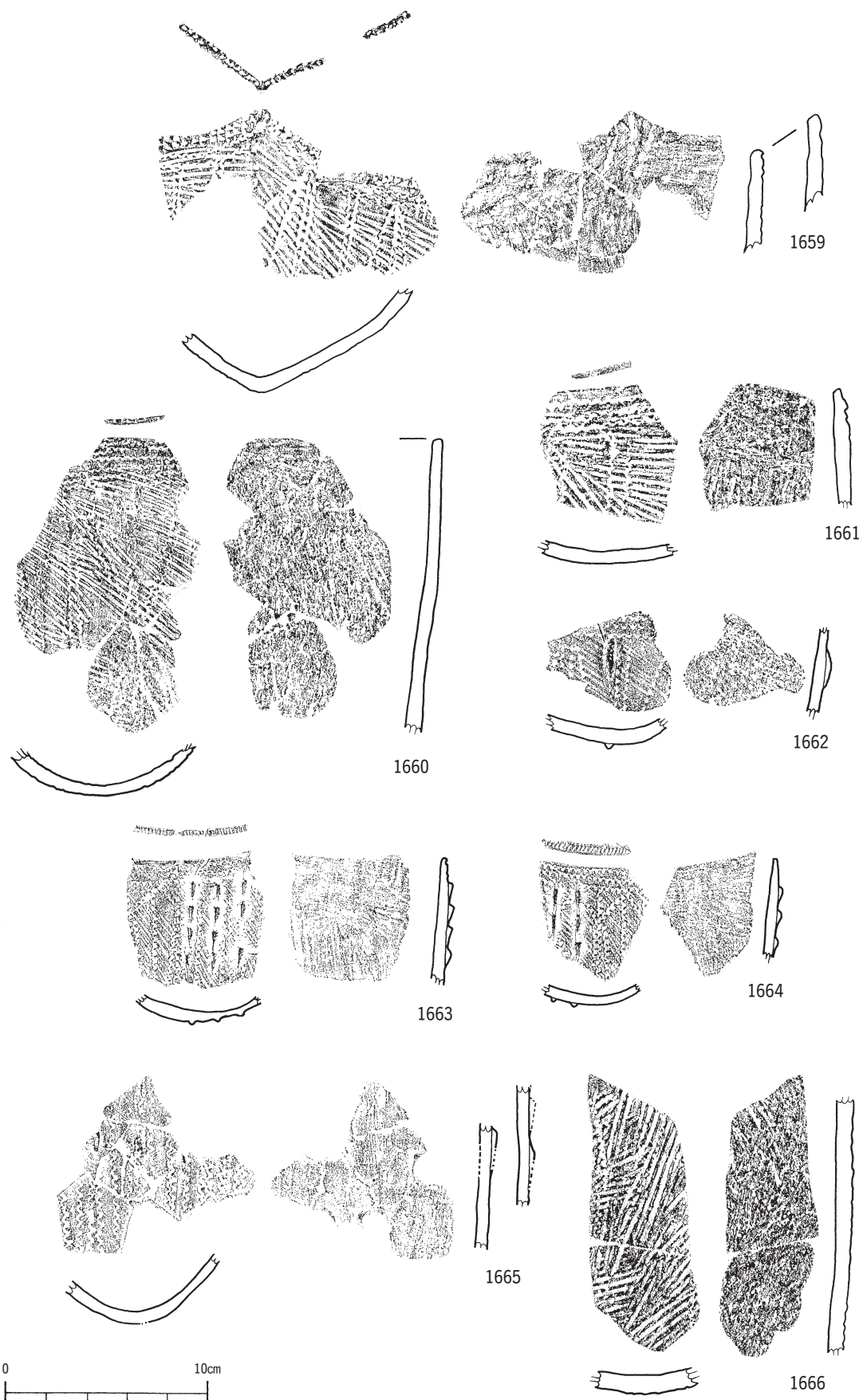
第271図 3類土器(38)



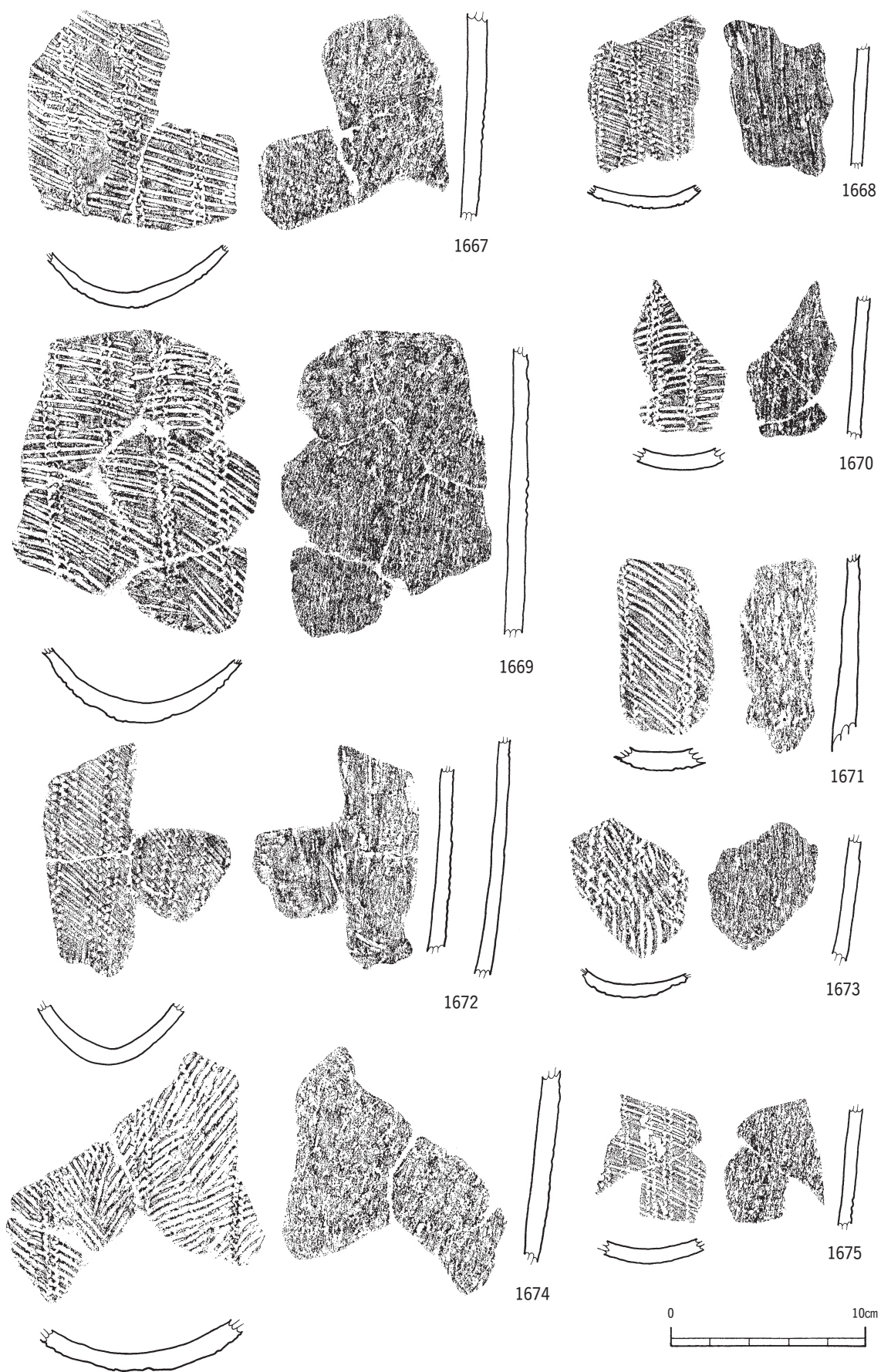
第272図 3類土器(39)

1659～1679は、器形がレモン形を呈する一群である。

1659は、上野原タイプである。面の中央部で外に大きく膨らむ。文様は縦位の二重貝殻刺突文を面に対し5条施し、斜位の貝殻刺突文をV字状に重ねる。一部には縦位の沈線も施される。1660～1662, 1667～1676, 1678, 1679は、縦位の貝殻刺突文を二重に施すが、1660は、斜位の貝殻刺突文も二重に施す。また1662は、小形の粘土紐貼付文をナデで貼り付ける。1663, 1664は、同一個体の可能性が高い。縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文をX字状に重ねるが、上部と下部の角度には差がある。波頂部付近の口縁部直下には、小形の粘土紐貼付文を4段貼り付ける。1666, 1674は、斜位の貝殻条痕文の向きが大きく乱れる。また、1677は、向きの異なる貝殻条痕文を重ねて施している。



第273図 3類土器(40)



第274図 3類土器(41)



第275図 3類土器(42)

③ 5 類

本地区で 5 類と確認できた 2 点を図化した。

1681 は、口縁部片である。口唇部は平坦で、工具を内から外、外から内に連続して動かし、鋸歯状の施文を付する。口縁部には横位の貝殻刺突文が 2 条めぐり、直下に肋 9 条の縦位の貝殻刺突文を施して楔様とする。胴部は貝殻押引文を施す。内面はミガキで調整される。煤が付着している。1682 も口縁部片である。口唇部は平坦で、へう状工具による刻みを付する。口縁部には横位の貝殻刺突文が 4 条めぐり、胴部は、貝殻押引文を施すが、一部剥落している。内面はミガキで調整される。胎土は、1 mm 大の白色砂粒と金色及び雲母片を多量に含む。

④ 8 類

8 類は、完形復元土器 1 点を図化した。

1680 は、口縁部上端でわずかに外反し、胴部がやや膨らむ器形を呈する完形土器である。口縁部には 1 対の瘤状突起が付く。文様は、平坦な口唇部に 2 条の貝殻刺突文をめぐらせる。口縁部は、斜位の貝殻刺突文を組み合わせ羽状に施す。その下には横位の貝殻刺突文が 1 条めぐり、口縁部と胴部との境をなしている。胴部は、縦位の貝殻条痕文の上に丁寧な貝殻綾杉条痕文を重ねる。このことで、縦位の貝殻条痕文はわずかに観察できる程度である。底部付近では、横位の貝殻条痕文が器壁を削り取るようにして施文されており、その部分の器壁が他と比べてやや薄くなっている。器面調整はナデを基本とする。外面に関しては、口縁部から胴部上半にかけて煤が付着し、それ以下は赤茶褐色を呈するなど色調の境が明瞭である。内面に関しては、全体的に黒色化が見られるが、破片単位で色調が異なる部分もあり、一概には言えない。

⑤ 7・8 類

7 類もしくは 8 類と思われる胴部及び底部片である。3 点を図化した。

1683 は、縦位に近い綾杉状の貝殻羽状文が施される。内面はケズリが施される。1684 は、胴部片である。ナデ調整の後、綾杉状の貝殻羽状文が施される。内面は丁寧なミガキで調整される。1685 は、底部片である。ナデ調整の後、横位の貝殻条痕文が施される。底部の立ち上がり部分には、浅い凹点状の刺突が施される。内面は、へう状工具によるナデで調整される。

⑥ 13 類

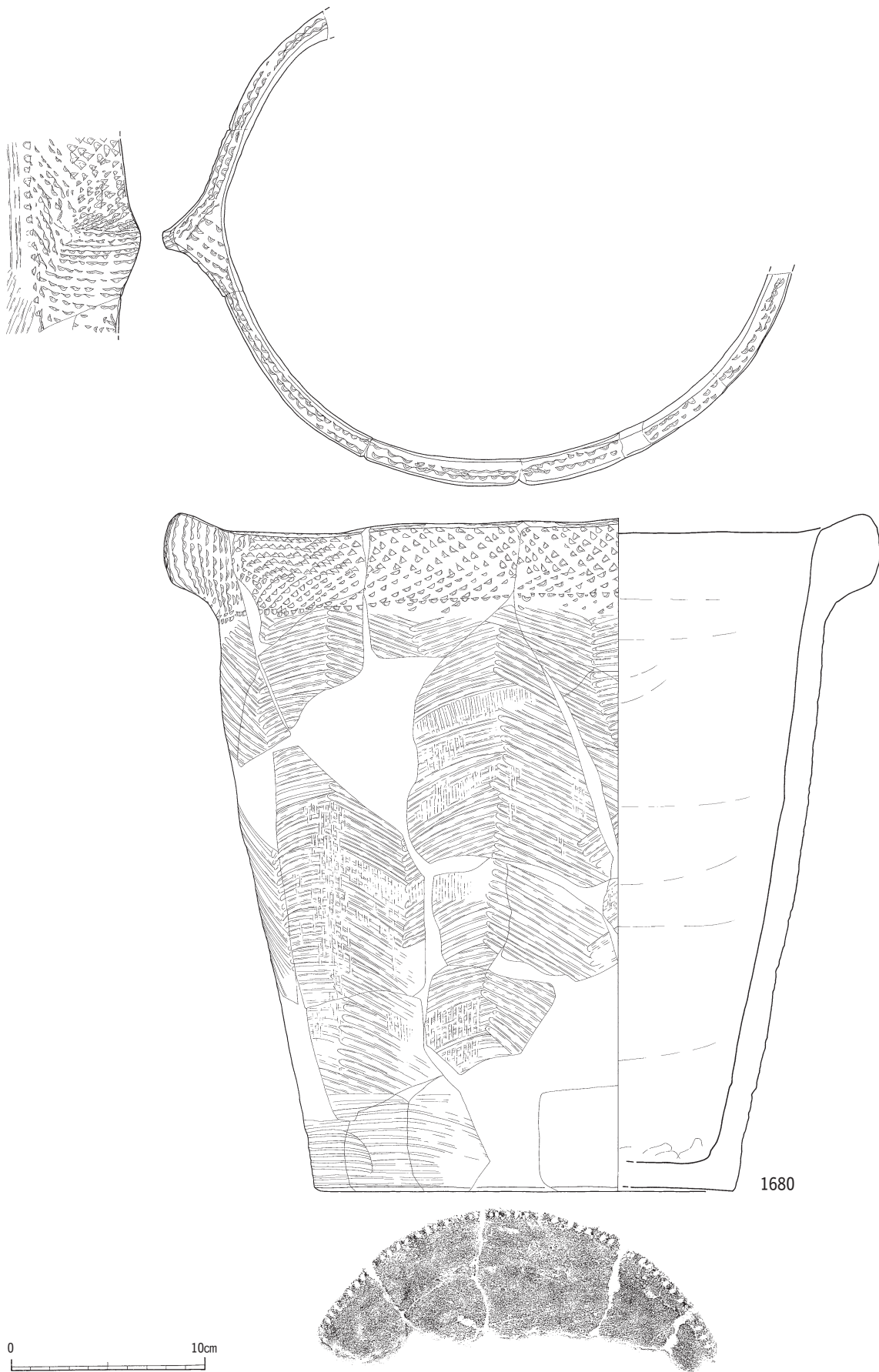
13 類と確認できたものは 2 点である。

1687、1688 は、胴部片である。丁寧なナデ調整の後、沈線で囲まれた区画内にへう描きの条線を施していることから、塞ノ神式土器の Bc 式の可能性が高い。

⑦ 15 類

15 類と確認できたものは 1 点のみである。

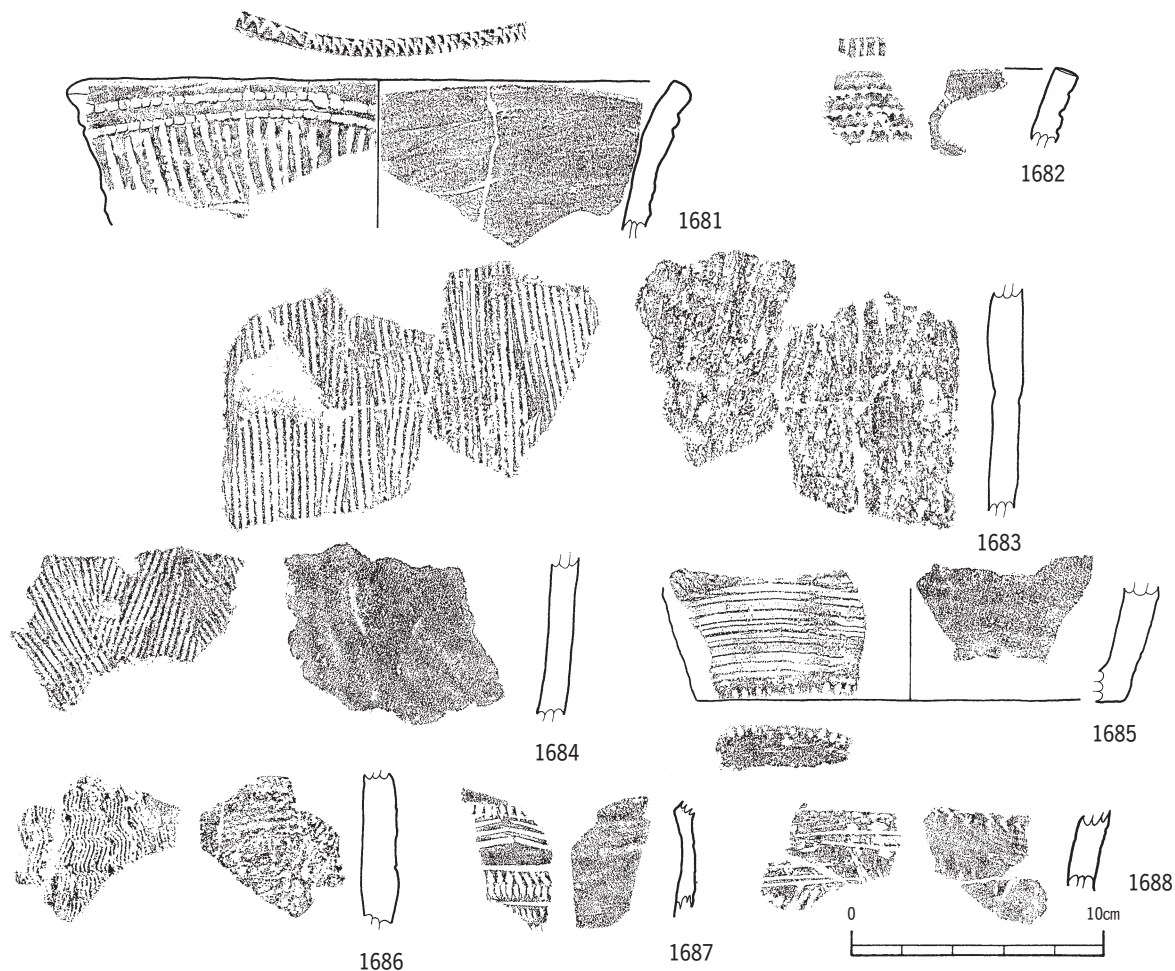
1686 は、胴部片である。平行する波状沈線を縦位に施す。器壁はぼつてりと厚い。このことから桑ノ丸式土器の可能性が高い。



第276図 8類土器(1)



第277図 8類土器(2)



第278図 その他の土器

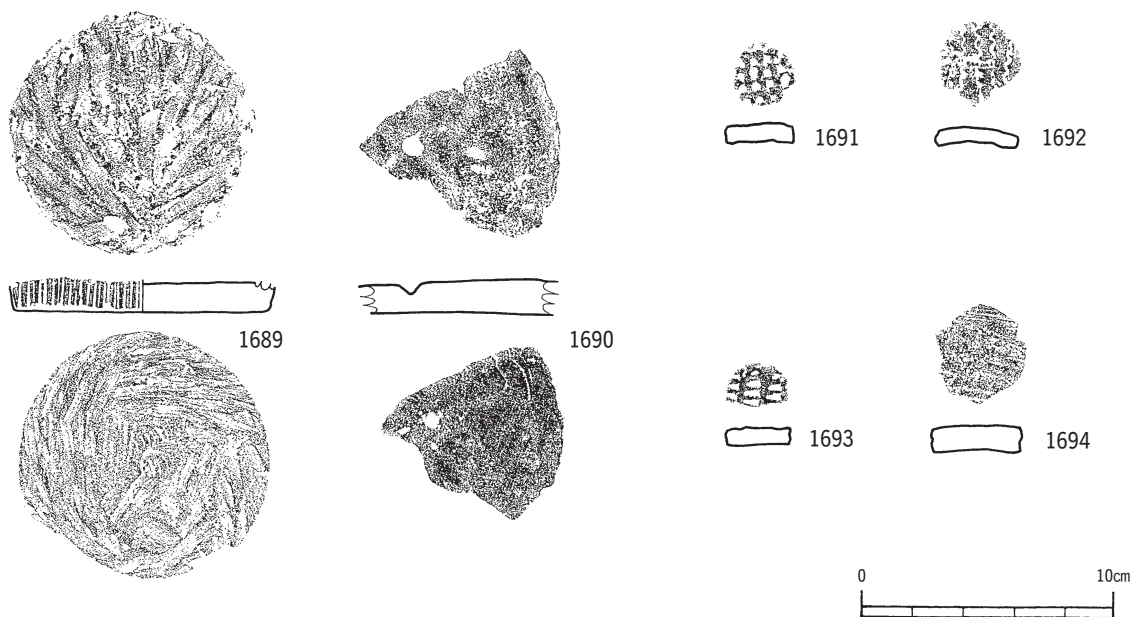
⑧その他の土器片

1689～1694は、特殊な土器片である。B地区以外で出土したものも含まれるが、ここでまとめて報告したい。

1689は、底盤が残存している。胴部の立ち上がりは底盤外周に粘土を貼り付けて行っている。内外面の調整はケズリであるが、底部接地面の中央には爪形文が2列施されている。なお、内面の黒色化は内面外周付近幅1cmでめぐる。

1690は、底盤が残存している。内外面はナデで調整されるが、底部内面には1cm大の抉りが確認できる。胎土に長石及び金色の雲母片を多量に含む。

1691～1694は、土器片を円盤状に加工したものである。表面の加工はそれほど丁寧ではない。外面の文様から3類もしくは4類に該当すると思われる。用途は不明である。



第279図 土製品

石器

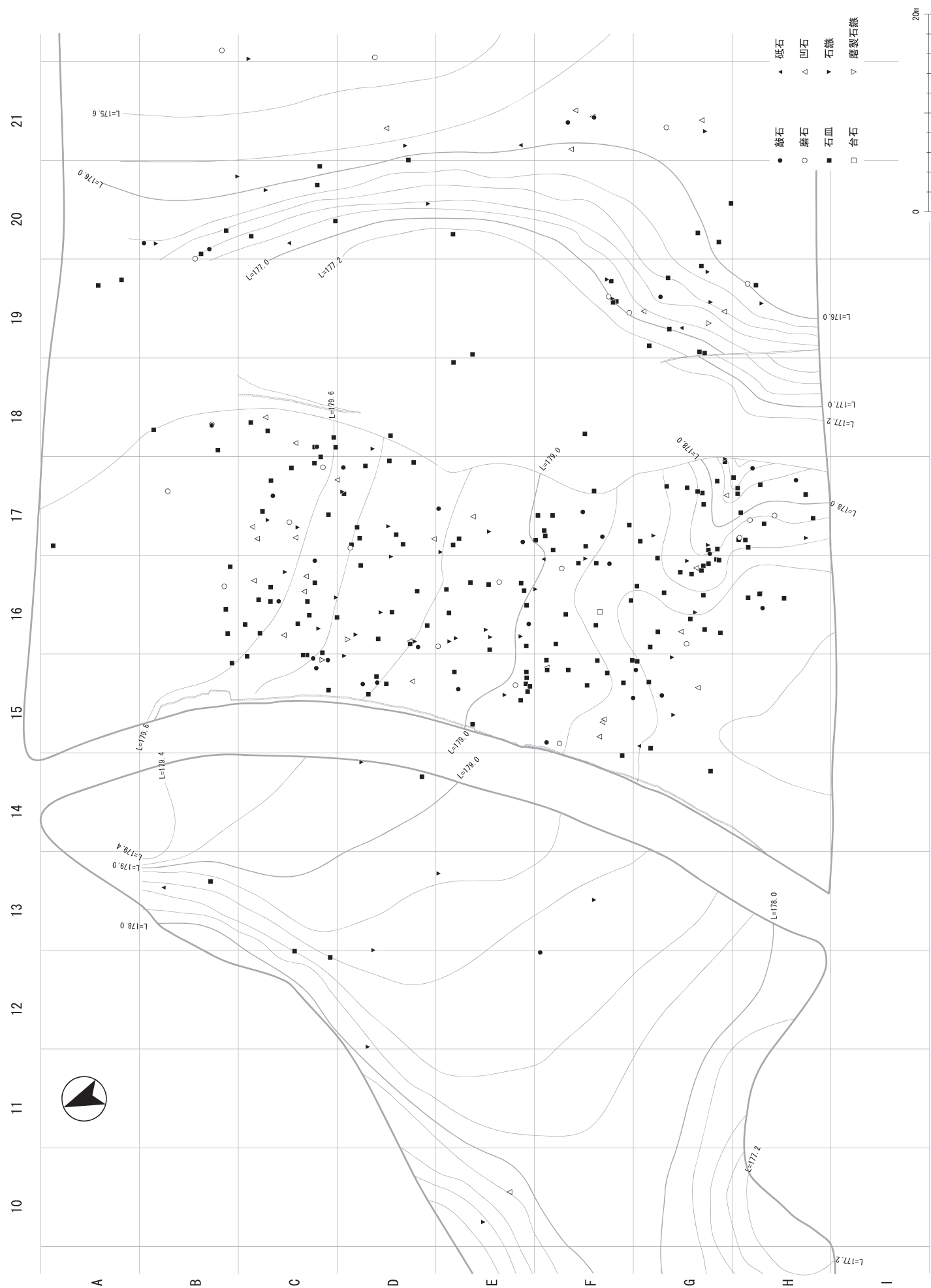
B地点では、V層、IV層から、石鏃48点・磨製石鏃1点・三日月形石器2点、石匙1点、スクレイパー1点・石槍3点・石錐2点、研磨石器5点・楔形石器1点、礫器1点、砥石4点、石斧29点・凹石26点・敲石18点・磨石17点・台石2点・石皿133点が出土した。

石材には、黒曜石・安山岩・ハリ質安山岩・玉髓・鉄石英・チャート・頁岩・砂岩・花崗岩等がみられた。

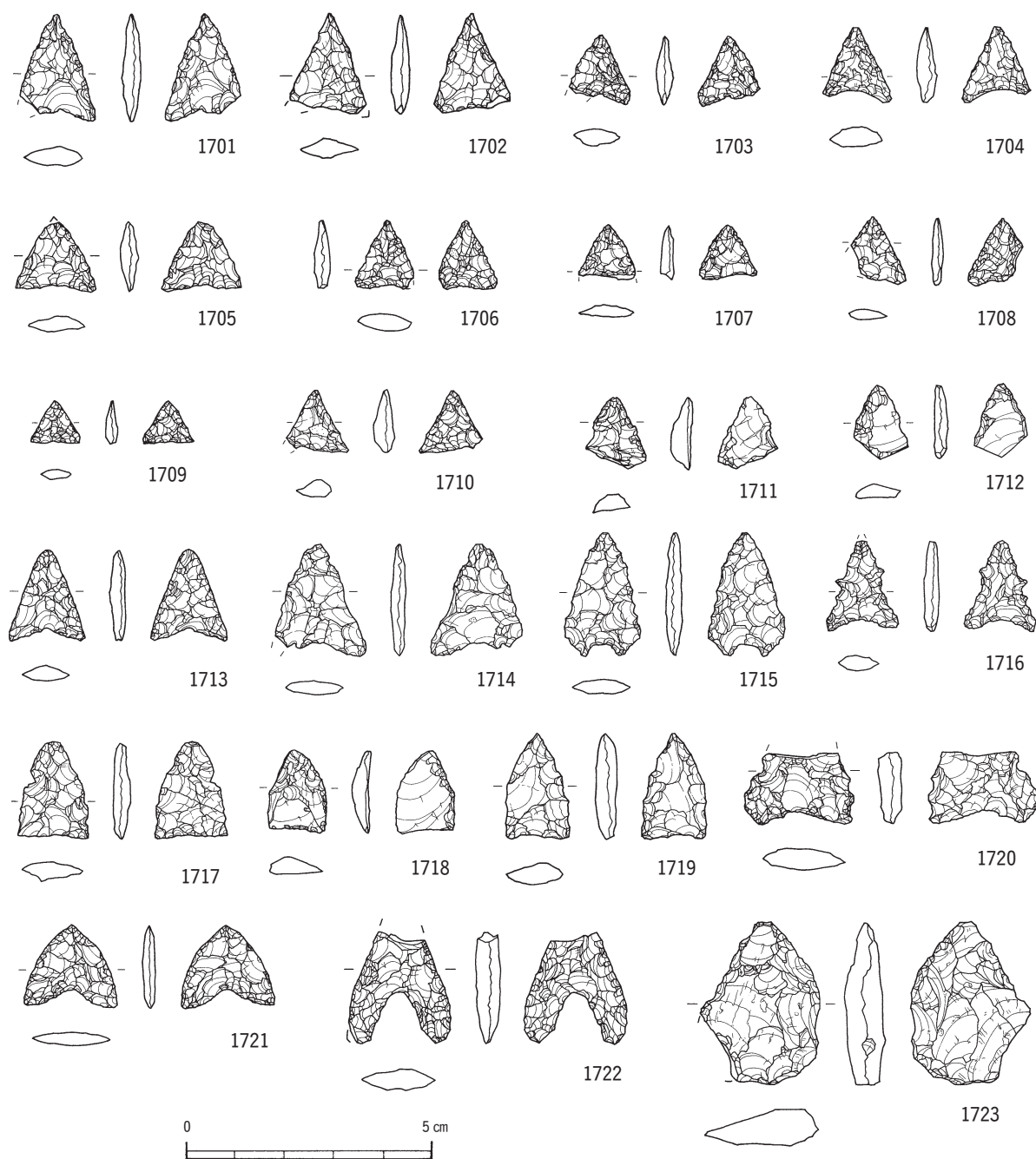
石鏃

B地区の石鏃はV層23点、IV層で20点出土した。石材はハリ質安山岩、頁岩、チャート、瑪瑙、黒曜石（上牛鼻・三船・腰岳・針尾・桑ノ木津留）と多種である。形態も多様であり極小型の石鏃等特徴のあるものもみられた。長さとの比率は50%～75%に集中してみられた。

1701～1703は共に片脚を欠損しているが、先端部が鋭く、側辺も直線的で基部の逆刺は鋭く抉りも深い。1704～1707は小型鏃で、先端部が鈍く側辺は直線的である。1704も基部は逆刺が円くやや深い。1705～1707は基部の逆刺が鋭く抉りが浅いものである。1708・1709・1710は同様のものであるが、先端部は鋭く側辺は直線的で、基部がほぼ直線的なものである。1711・1712は基部を欠損しているが、剥片鏃で、先端部は鈍く側辺は直線的である。1713はチャートを石材に用いたもので、先端部が円く、側辺は直線的で基部は逆刺が鋭く抉りが浅い。1714は先端部が鈍いが側辺・基部は1713同様である。1715は縦長の二等辺三角形で、断面は直線的で薄く、基部にわずかに抉りのはいったもので、最大幅が基部の下端から4分の1付近にある。帖地型石鏃と呼ばれているものである。先端部は鈍く、側辺部はやや外弯的である。基部の逆刺は鋭く抉りはやや深い。1716は先端部を欠損しているが、側辺はやや内弯気味で、両側部に突起部がみられる。基部は逆刺が円く抉りは深い。1717～1719は五角形鏃である。1717は先端部が円く側辺は外弯的で最大幅が下方にある。基部は逆刺が鋭く抉りが浅い。1718・1719は先端部が鈍く側辺は外弯的で最大幅が上方にある。基部は逆刺が鋭く抉りが浅い。1718は剥片鏃である。1720は先端部を欠損しているが、側辺部は鋸歯状を呈し、基部は脚が極端に違うものである。1721はたんぱく石を石材に用い、幅広の石鏃で先端部は鋭く側辺は外弯的で最大幅が下方にあり、基部は逆刺が鋭く抉りが深いものである。1722は先端部が欠損しているが、側辺は外弯的で最大幅が下方にある。基部は逆刺が円く抉りは深い。1723は製作途中の石鏃と思われる。側辺は外弯的であるが左右対称をなしてない。基部は直線的でやや膨らみをもつものである。1724～1743はIV層から出土したものである。1724～1726は石材は違うが剥片鏃で、先端部は鋭く側辺は直線的である。基部はそれぞれ逆刺が鋭く抉りが浅いもの、逆刺が円く抉りが浅いもの、片脚が違うものである。1727は先端部が鈍く側辺は直線的で基部は逆刺が鋭く抉りが深い。1728は先端部が円く、側辺は直線的で基部は逆刺が円く抉りが浅いものである。1729～1731は平面形が正三角形を呈すもので、先端部は鋭く、側辺は1729・1730は直線的で1731は内弯気味である。基部はいずれも逆刺が鋭く抉りは1729がやや深い、1730・1731は浅い。1732～1736は小型の石鏃でほぼ正三角形を呈すものである。1732は先端部は鋭く側辺・基部は直線的である。1733は先端部が鈍く、側辺は直線的で基部はやや膨らみをもつものである。1734はチャートを石材に用いた剥片鏃、先端部は鈍く側辺はやや内弯気味で、基部は直線である。1735・1736は先端部が鋭く側辺は直線的で、基部は逆刺が鋭く抉りが浅いものである。

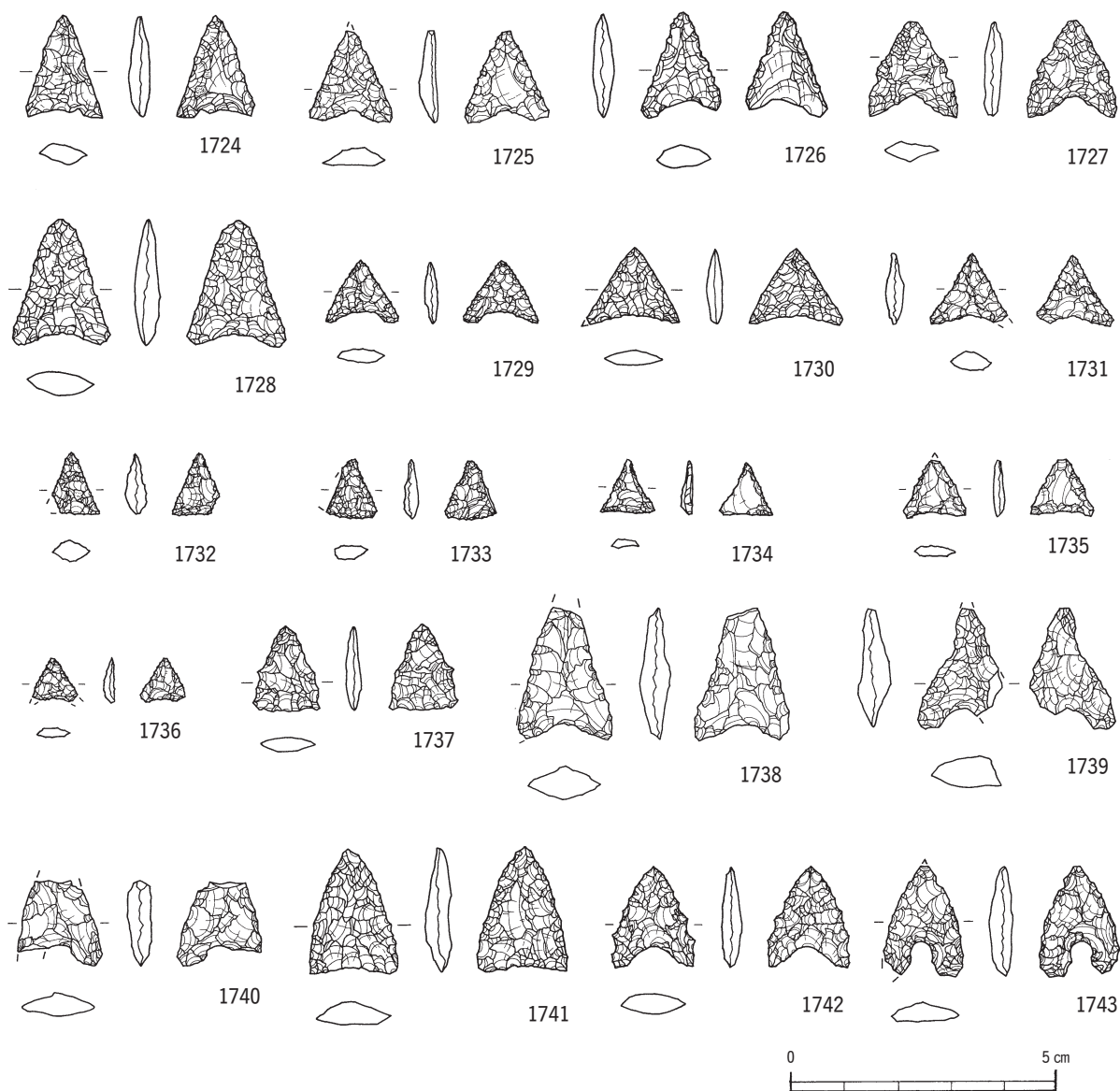


第280図 B地区器種別石器出土状況



第281図 石鏃（V層）

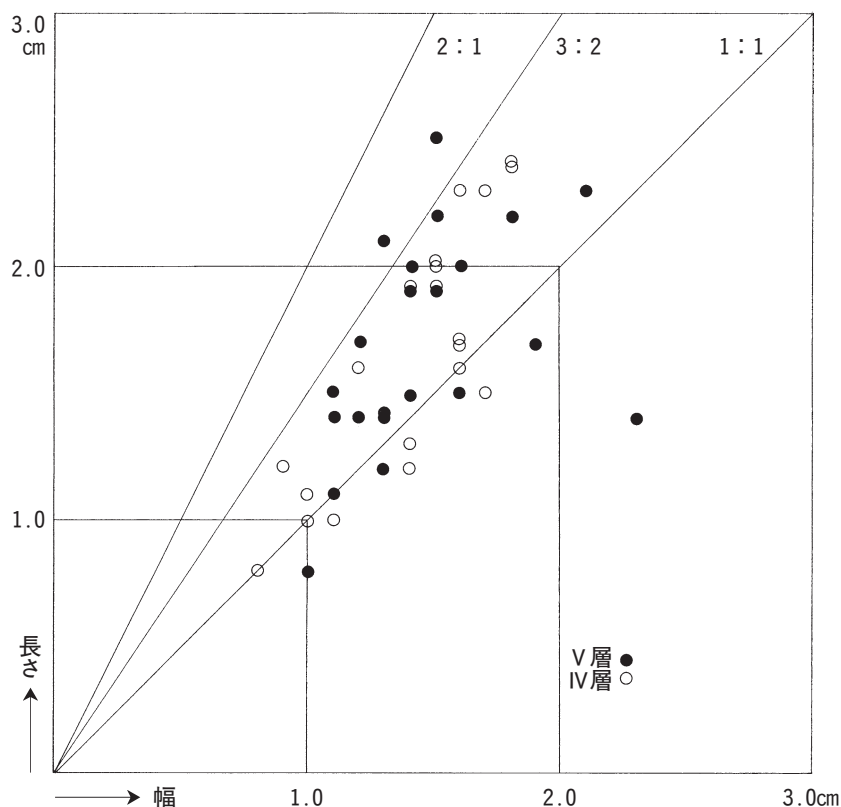
1737は佐賀県腰岳産の良質の黒曜石を用いた五角形鏃，先端部は鈍く側辺は中央部に突起部をもち五角形を呈している。基部はやや膨らみをもつものである。1738は先端部を欠損しているが，側辺が直線的で基部は逆刺が鋭く抉りが深いものである。1739・1740も先端部及び基部も片脚欠損しているが，逆刺は円く抉りが深いものである。1739の側辺は内弯気味であるが，1740は直線的である。1741は先端部が鈍く側辺は外弯的で最大幅が下方にあるものである。基部は逆刺が鋭く抉りが浅い。1742は鋸歯鏃で先端部は鋭く側辺は外弯的で最大幅が下方にあり鋸歯状を呈す。基部は逆刺が鋭く抉りが深いものである。1743は先端部が鋭く側辺は外弯的で最大幅を下方にもつものであ



第282図 石鏃 (IV層)

第30表 B地区 V・IV層 石鏃一覧表

番号	地区	区	層	石 材	先端	側辺	基部	標高	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備 考
1701	B	G17	V	ハリ質安山岩	A	A	Ab	178.81	57998	0.9	2.2	1.5	0.4	片脚欠損
1702	B	E13	V	ハリ質安山岩	A	A	Ab	179.34	61543	0.8	2.0	1.6	0.4	片脚欠損
1703	B	F13	V	黒曜石上牛鼻	A	A	-	178.75	30082	0.4	1.4	1.3	0.3	片脚欠損
1704	B	D16	V	黒曜石三船	B	A	E	179.61	33066	0.6	1.5	1.4	0.4	
1705	B	C17	V	黒曜石上牛鼻	-	A	Ab	179.75	43362	0.6	1.5	1.6	0.3	先端欠
1706	B	G17	V	黒曜石桑木津	B	A	Ab	178.60	58071	0.4	1.4	1.2	0.3	片脚欠損
1707	B	G19	V	黒曜石桑木津	B	A	-	175.81	24441	0.3	1.1	1.1	0.3	先端部
1708	B	C16	V	黒曜石腰岳	A	A	Bb	179.79	54551	0.3	1.4	1.1	0.2	片脚欠
1709	B	E15	V	黒曜石三船	A	A	C	179.13	53314	0.2	0.8	1.0	0.2	小型鏃
1710	B	C16	V	黒曜石三船	B	B	C	179.62	43115	0.5	1.2	1.3	0.4	片脚欠
1711	B	D18	V	黒曜石三船	B	A	-	179.65	43754	0.5	1.4	1.3	0.4	剥片鏃, 先端・片脚欠
1712	B	F16	V	黒曜石上牛鼻	B	A	-	179.12	56835	0.4	1.5	1.1	0.3	剥片鏃, 両脚欠損
1713	B	F19	V	チャート	C	A	Ab	168.50	36860	0.7	1.9	1.5	0.3	
1714	B	D16	V	ハリ質安山岩	B	A	Ab	179.76	29265	0.9	2.2	1.8	0.3	片脚欠
1715	B	G15	V	流紋岩	B	A	Aa	179.04	20605	1.1	2.5	1.5	0.3	脚に特徴あり
1716	B	B20	V	黒曜石上牛鼻	-	B	Bb	176.31	41700	0.6	1.9	1.4	0.3	鋸歯
1717	B	D14	V	瑪瑙	C	Ca	Ab	176.57	39430	0.9	2.0	1.4	0.4	
1718	B	E16	V	黒曜石上牛鼻	B	Cb	Ab	179.31	56300	0.6	1.7	1.2	0.3	剥片鏃, 五角形鏃
1719	B	H17	V	頁岩	B	Cb	Ab	178.73	60513	1.4	2.1	1.3	0.4	五角形鏃
1720	B	C17	V	黒曜石上牛鼻	-	-	Ab	179.85	30445	1.6	1.4	2.3	0.5	先端欠
1721	B	D13	V	タンパク石	A	Ca	Aa	178.83	29734	0.7	1.7	1.9	0.2	横長
1722	B	G17	V	黒曜石上牛鼻	-	Ca	Ba	178.01	61295	1.8	2.3	2.1	0.5	先端欠損
1723	B	B20	V	黒曜石三船	C	Ca	D	175.76	42231	5.3	3.3	2.4	0.8	製作途中
1724	B	G19	IV	紫色黒曜石	A	A	Ab	176.11	33667	0.6	1.9	1.4	0.4	
1725	B	D15	IV	黒曜石針尾	A	A	Bb	179.78	52777	0.6	1.7	1.6	0.4	
1726	B	C16	IV	頁岩	A	A	E	179.94	30625	0.7	2.0	1.5	0.4	
1727	B	D12	IV	黒曜石上牛鼻	B	A	Aa	178.33	26726	0.8	1.7	1.6	0.3	側辺に挟り有り
1728	B	E10	IV	黒曜石上牛鼻	C	A	Bb	177.69	34814	1.5	2.4	1.8	0.5	側辺欠
1729	B	E16	IV	黒曜石桑木津	A	A	Aa	179.47	45969	0.2	1.2	1.4	0.2	
1730	B	D16	IV	黒曜石三船	A	A	Ab	179.64	33873	0.5	1.5	1.7	0.3	
1731	B	G16	IV	黒曜石上牛鼻	A	A	Ab	179.18	46887	0.4	1.3	1.4	0.4	片脚欠
1732	B	E17	IV	黒曜石上牛鼻	A	A	C	179.35	50791	0.3	1.2	0.9	0.4	片脚欠, 小型鏃
1733	B	F19	IV	黒曜石桑木津	B	A	D	177.00	36620	0.2	1.1	1.0	0.3	小型, 片側辺部欠損
1734	B	D17	IV	チャート	B	B	C	179.73	32830	0.2	1.0	1.0	0.2	小型, 剥片鏃
1735	B	E17	IV	黒曜石上牛鼻	A	A	Ab	179.61	53140	0.2	1.0	1.1	0.2	小型鏃
1736	B	G16	IV	黒曜石上牛鼻	A	A	-	178.82	49510	0.1	0.8	0.8	0.2	小型鏃
1737	B	D20	IV	黒曜石腰岳	A	A	D	176.94	43711	0.4	1.6	1.2	0.3	五角形鏃
1738	B	H19	IV	ハリ質安山岩	-	A	Ab	176.13	26837	1.5	2.4	1.8	0.6	先端欠
1739	B	E16	IV	黒曜石三船	-	B	Ba	179.57	45960	1.3	2.3	1.6	0.7	片脚欠
1740	B	C20	IV	ハリ質安山岩	-	Ca	Ba	176.14	40118	0.1	1.6	1.6	0.4	先端・片脚欠
1741	B	D17	IV	黒曜石上牛鼻	B	Ca	Ab	179.72	32827	1.5	2.3	1.7	0.5	
1742	B	E16	IV	黒曜石上牛鼻	A	Ca	Aa	179.44	46084	0.8	1.9	1.5	0.4	鋸歯
1743	B	D17	IV	黒曜石上牛鼻	B	Ca	Ba	179.88	32038	1.0	2.0	1.5	0.4	

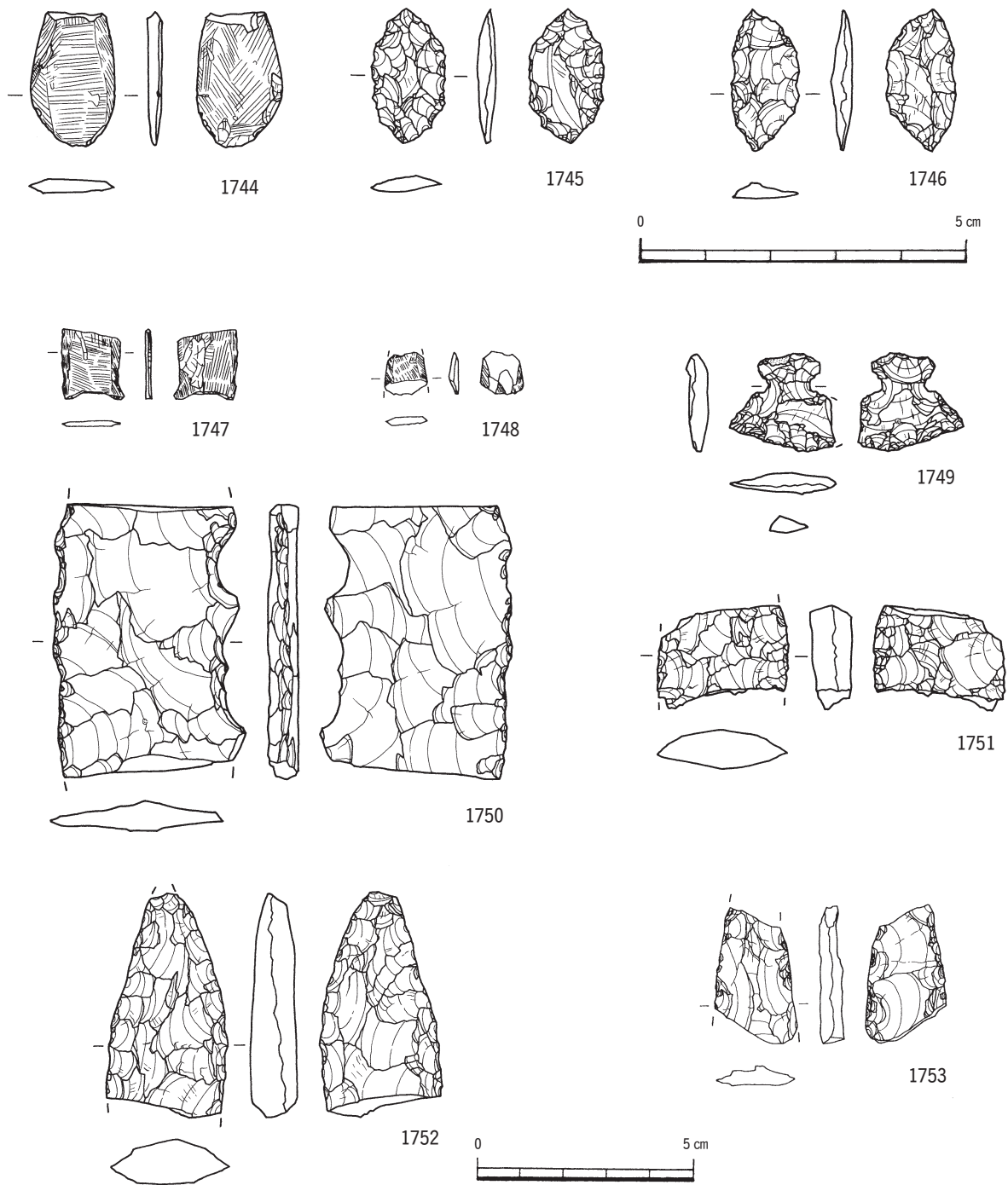


第283図 B地区V・IV層出土石鏃法量相関図

る。基部は逆刺が円く抉りはかなり深い。

磨製石鏃（第284図，1744，1747，1748）

B地点では，V層から1点，IV層2点，III層7点の計10点の磨製石鏃が出土した。いずれも石材は頁岩を素材に用いている。1744は赤色頁岩を素材に用い，扁平無茎のもので先端部が欠損しているが，側辺は直線的で基部は膨らみをもつものである。側辺付近に鏑がみられ研磨痕も明瞭である。1747・1748はIV層出土の磨製石鏃である。1747も先端部が欠損しているが，側辺は外弯的であり最大幅が上方にある。基部は逆刺が円く抉りが浅い。鏑は明瞭でない。1748は暗黄褐色の頁岩を素材に用いたもので，側辺部のみであるが，側辺は直線的で鏑・研磨痕とも明瞭である。



第284図 磨製石鏃ほか

三日月形石器（第284図，1745・1746）

1745・1746はV層から出土した三日月形を呈した石器である。黒曜石・ハリ質安山岩を石材に用いている。薄手の剥片に調整剥離を施した石器である。

石匙（第284図，1749）

1749はIV層から出土した横型の石匙である。石材は佐賀県腰岳原産の黒曜石を素材に用いている。腰岳原産の黒曜石では粗悪なもので、気泡等がみられる。つまみ部の上方に自然面を残す。つまみ部は身部に対して大きく、身部は片側面が欠損し、加工調整は側縁部のみである。刃部の調整は両面調整（両刃）であり、外弯気味の刃部をもつ。

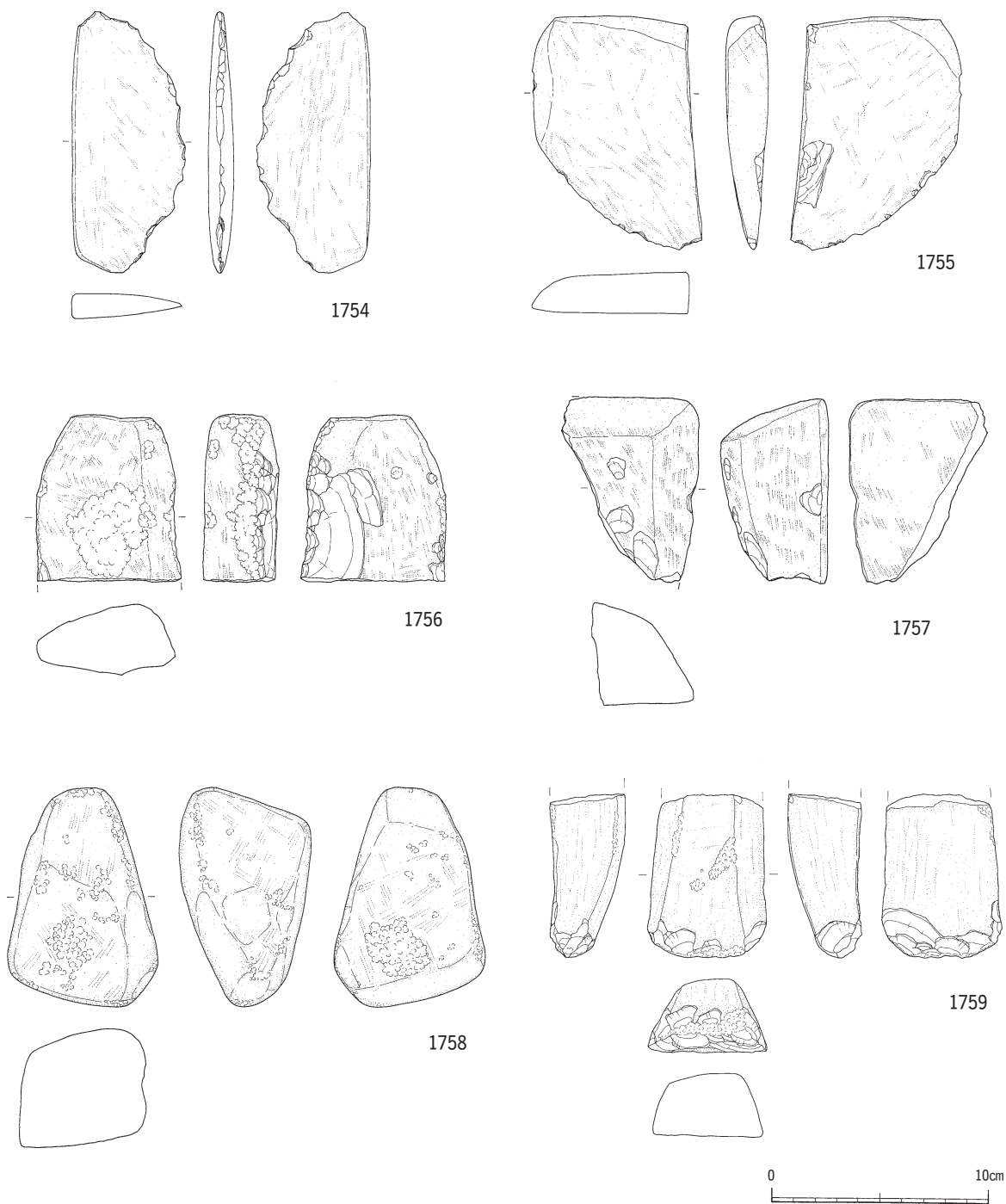
スクレイパー（第284図，1750）

1750は安山岩を素材に用いた抉り部のあるスクレイパーである。両端が欠損している為、全体を把握することが出来ないが、石槍の可能性もある。しかし、幅に対し厚みが薄いことや抉り部を意識して施していることからスクレイパーに分類した。片側面には1 cm幅の抉りがみられ、片側面は交互剥離を施し、整形を行っている。

石槍（第284図，1751・1752・1753）

石槍はIV層から3点出土している。全て欠損品である。

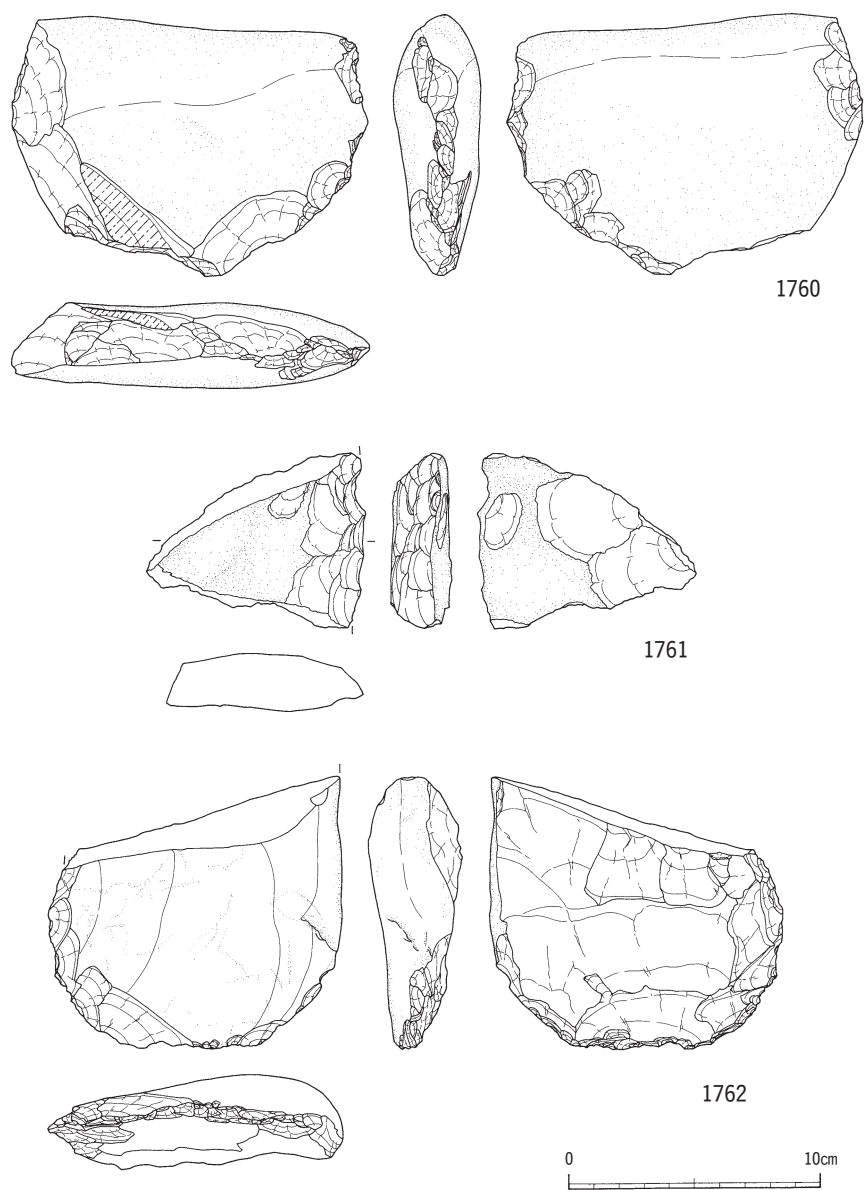
1751は安山岩を石材に用いたもので、両面加工が施されている。断面は凸レンズ状になっている。1752は安山岩を石材に用い、やはり欠損しているが先端部である。先端部はやや湾曲している。両面からの交互剥離により丁寧な調整を施している。断面形は凸レンズ状である。1753は頁岩を石材に用いたもので、やはり両面加工である。



第285図 研磨石器

研磨石器

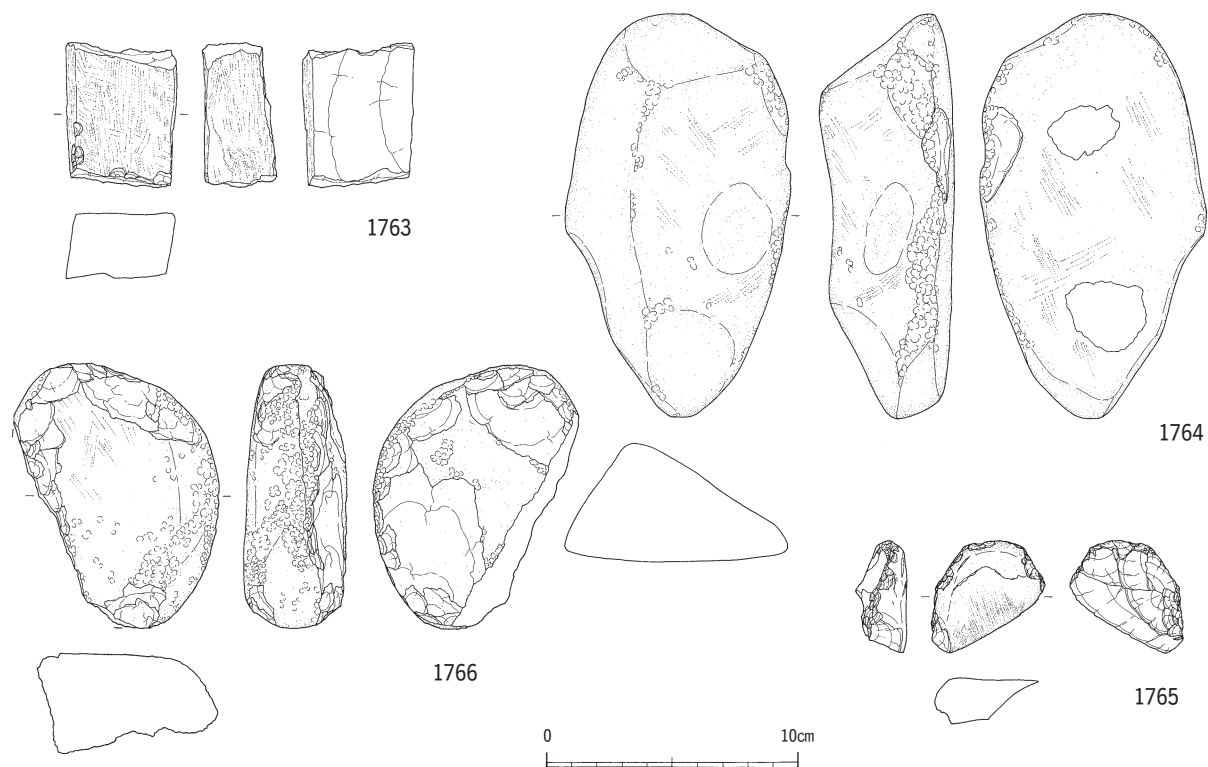
1754～1759は研磨痕のある石器である。全て安山岩を石材に用いている。1754・1755は薄手の剥片で極めて強い光沢痕がみられる。側縁部には使用によると思われる痕跡がみられる。1756・1758は敲打痕のみられるものである。研磨痕も顕著にみられ、敲石とは使用方法に相違が考えられたことから研磨石器に分類した。1757は欠損しているが研磨痕がみられる石器である。1759は欠損していて全体の形態はつかめないが、下方の剥離痕・敲打痕から大型の楔形石器の可能性もある石器である。



第286図 礫器

礫器

1760～1762は礫器である。1760・1761は安山岩の川原石を石材に用い、側面に荒いタッチの調整痕を施している。1761は欠損しているが片面からの調整痕が施されている。1762は頁岩を石材に用いたもので、剝片を利用している。



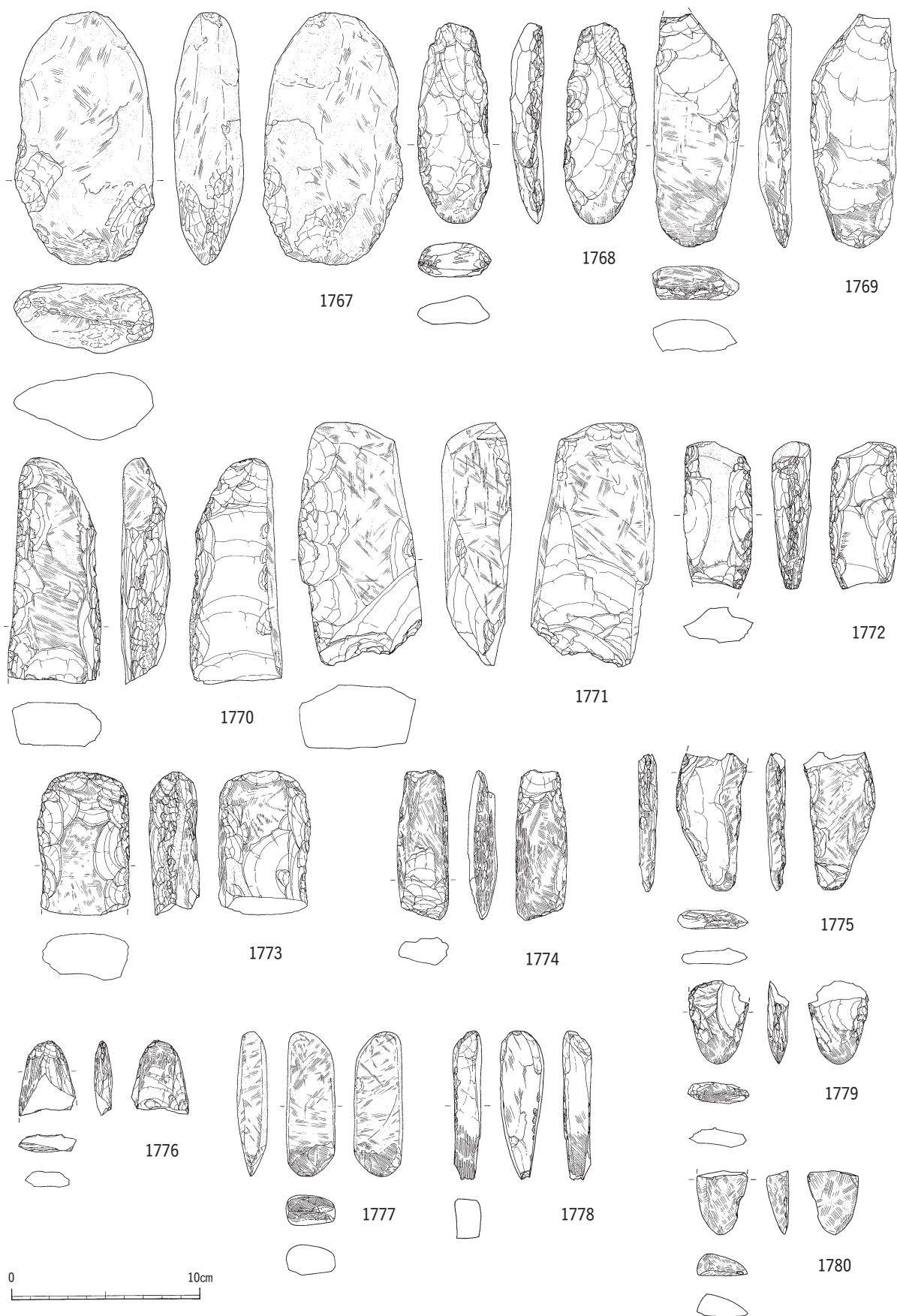
第287図 砥石

第31表 B地区V・IV層石器一覧表

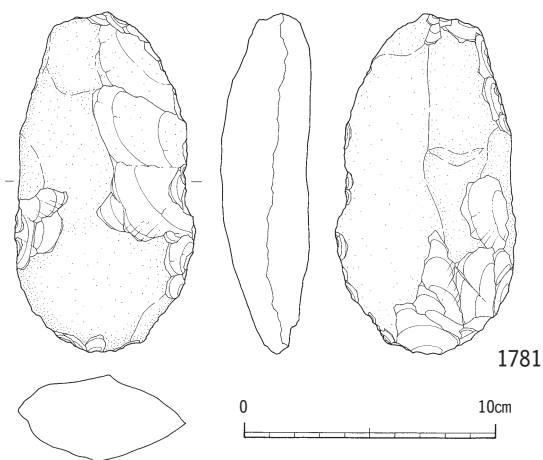
番号	器 種	石 材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量 g	長さcm	幅cm	厚みcm	備 考
1754	研磨石器	安山岩	B	H17	V	178.17	58257	88.0	12.0	5.2	1.2	
1755	研磨石器	安山岩	B	C16	V	179.99	29430	222.0	10.8	7.8	2.0	
1756	研磨石器	安山岩	B	F16	V	179.22	59561	268.0	7.7	6.7	3.5	
1757	研磨石器	安山岩	B	D13	V	178.84	29711	281.0	8.5	6.3	5.0	
1758	研磨石器	安山岩	B	F15	IV	179.15	52428	550.0	10.0	7.0	6.1	凹部あり
1759	大型楔形石器	安山岩	B	H17	IV	178.76	49335		7.5	5.5	3.4	
1760	礫器	安山岩	B	C16	V	179.89	43846	625.0	10.3	14.2	3.5	
1761	礫器	安山岩	B	D17	IV	179.54	35828	160.0	6.9	9.0	2.4	
1762	礫器	頁岩	B	E20	IV	176.53	26945	490.0	10.7	11.7	3.7	
1763	砥石	砂岩	B	C20	V	176.95	37241	68.0	5.8	4.4	3.0	
1764	砥石	安山岩	B	G19	V	176.81	28532	875.0	16.0	9.0	5.4	
1765	砥石	頁岩	B	F16	V	179.11	59764	35.0	4.4	4.5	2.0	
1766	砥石	安山岩	B	G15	IV	178.90	55972	400.0	10.5	8.1	4.0	

砥石

1763～1766は砥石である。石材は砂岩・安山岩・頁岩である。1763は角柱状を呈し、丁寧な研磨がみられる。1764・1766安山岩を石材に用いたもので、敲打痕もみられる。研磨によりやや湾曲した研磨面をもつものである。1765は欠損しているが小型の砥石で砥石よりも研磨器の可能性もある。



第288図 石斧 (V層)



第289図 石斧（V層）

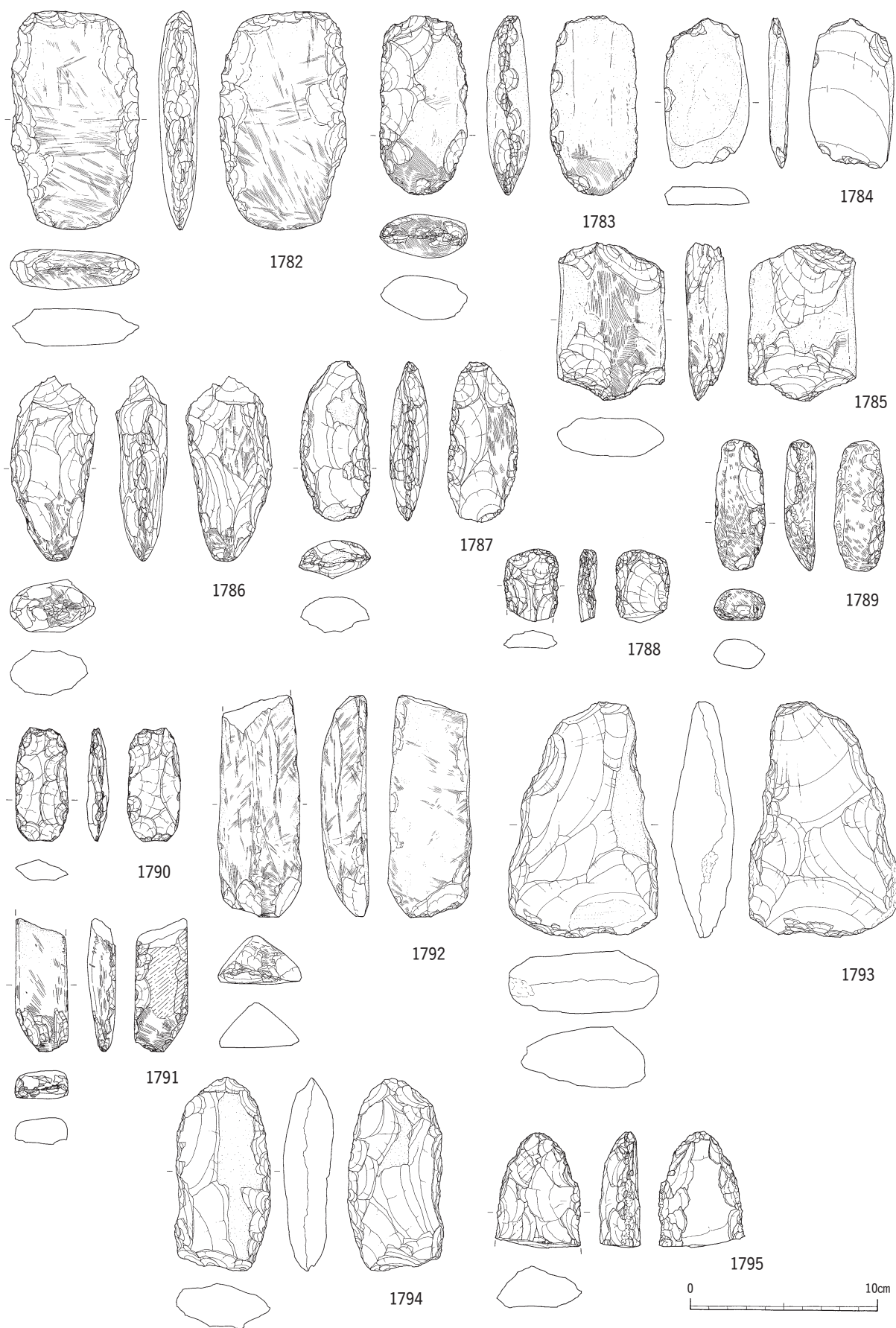
石斧

1767～1780はV層出土の磨製石斧である。石材は頁岩が主であるが一部安山岩や砂岩も用いられている。1767は完形品で安山岩の自然礫を石材に用い刃部を丁寧に研磨を行っている。刃部は蛤刃で使用痕がみられる。1768・1769も刃部を丁寧に研磨した磨製石斧である。頁岩・砂岩を石材に用い、刃部は片刃である。1770・1771は整形痕と研磨痕はみられるが刃部が欠損しているものである。製作途中で破損したものと考えられる。1772・1773は基部である。

1774も刃部を欠損している。1775は磨製石斧の刃部

としたが、形状より鎌状石器の可能性もある。1776～1780は小型の磨製石斧で1779を除いて片刃石器となっている。ノミ状石斧に分類した。1779は小型の蛤刃をもつものである。1781は頁岩の自然川原石を用いた打製石斧である。

1782～1795はIV層出土の石斧である。やはり石材は頁岩が主であるが、安山岩・砂岩も用いている。1782・1783は刃部を丁寧に研磨し、刃部を蛤刃に仕上げている。1784は整形を行ったもので製作途中のものと考えられる。1786・1787は刃部が幅狭くなるもので、刃部は蛤刃である。1789は小型の磨製石斧で片刃の刃部をもつものである。1793～1795は打製石斧である。全て頁岩を石材に用い、刃部は蛤刃である。



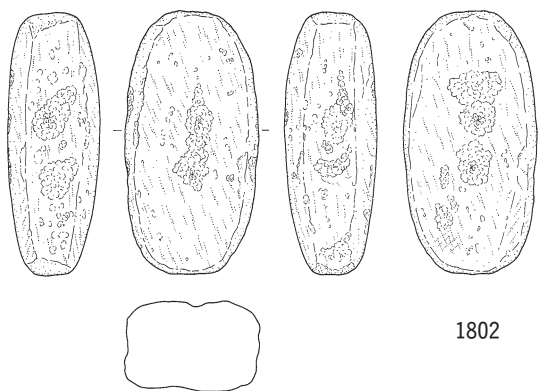
第290図 石斧 (IV層)

第32表 B地区V・IV層石斧一覽表

番号	器 種	石 材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量 g	長さcm	幅cm	厚みcm	備 考
1767	磨製石斧	安山岩	B	E15	V	179.22	54725	465.5	13.4	7.4	3.7	完形品
1768	磨製石斧	頁岩	B	C16	V	179.98	33399	86.0	10.6	3.8	1.7	
1769	磨製石斧	砂岩	B	G17	V	178.59	58700	120.0	12.3	4.5	1.8	
1770	磨製石斧	頁岩	B	G17	V	178.71	58000	220.0	12.0	4.9	2.6	製作途中
1771	磨製石斧	頁岩	B	F15	V	179.08	52241	450.0	12.9	6.5	3.6	楔形石器, 製作途中
1772	磨製石斧	頁岩	B	G15	V	178.71	21353	80.0	7.8	3.6	2.0	基部
1773	磨製石斧	頁岩	B	H17	V	178.63	60527	150.0	7.6	4.9	2.7	基部
1774	磨製石斧	頁岩	B	H16	V	178.90	48000	45.0	7.9	2.7	1.5	
1775	磨製石斧	頁岩	B	F15	V	179.12	51474	33.0	7.3	3.7	1.0	鎌状石器
1776	磨製石斧	頁岩	B	E20	V	177.30	22818	10.0	3.9	3.0	0.9	基部
1777	磨製石斧	頁岩	B	G15	V	178.76	58400	48.0	7.6	2.6	1.6	
1778	ノミ状石斧	頁岩	B	G17	V	178.28	60011	39.0	7.9	1.4	2.3	
1779	磨製石斧	頁岩	B	D20	V	175.88	42475	14.5	4.4	3.2	1.1	刃部, 小型
1780	磨製石斧	砂岩	B	D15	V	178.12	58850	10.2	3.4	2.7	1.1	
1781	打製石斧	頁岩	B	E15	V	179.16	53242	400.0	13.5	7.2	3.5	
1782	磨製石斧	安山岩	B	G16	IV	179.04	52000	245.0	11.7	6.8	2.1	完形品
1783	磨製石斧	頁岩	B	F17	IV	178.87	53923	130.5	9.5	4.7	2.4	完形品
1784	磨製石斧	頁岩	B	G17	IV	178.57	49070	57.0	8.0	4.5	1.2	石斧の石材
1785	磨製石斧	頁岩	B	E15	IV	179.26	51272	145.0	8.5	5.8	2.3	
1786	磨製石斧		B	C14	IV	179.32	29663	130.5	9.9	4.5	2.7	基部
1787	磨製石斧	頁岩	B	D15	IV	179.44	32600	66.0	8.6	3.7	2.0	
1788	磨製石斧	頁岩	B	G17	IV	178.97	47050	14.3	3.9	2.9	1.0	基部
1789	磨製石斧	頁岩	B	G15	IV	179.09	54000	42.0	7.0	2.7	1.7	小型片刃石斧
1790	磨製石斧	頁岩	B	H17	IV	178.27	57073	22.0	6.1	2.8	1.1	完形品
1791	磨製石斧	砂岩	B	H17	IV	178.04	57000	43.0	7.1	2.9	1.5	
1792	磨製石斧	頁岩	B	F15	IV	179.25	44204	160.0	11.8	4.5	2.4	
1793	打製石斧	頁岩	B	D18	IV	179.62	50980	380.0	12.6	8.0	3.3	
1794	打製石斧	頁岩	B	G17	IV	178.80	50496	163.8	10.3	5.0	2.6	
1795	打製石斧	頁岩	B	G17	IV	178.77	49551	76.0	6.1	4.6	2.2	基部



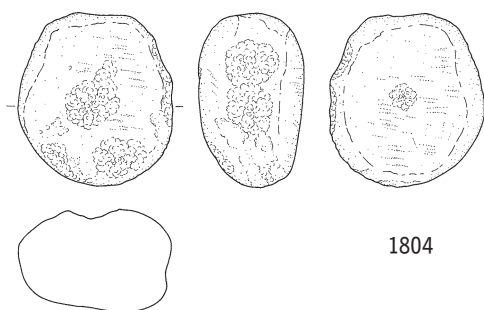
第291図 凹石 (V層)



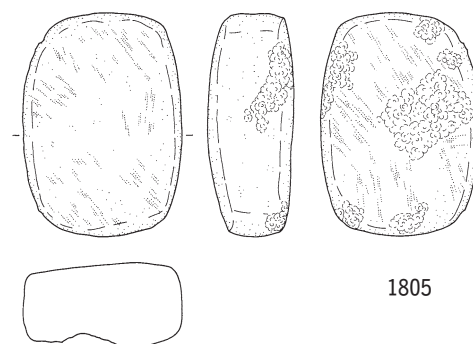
1802



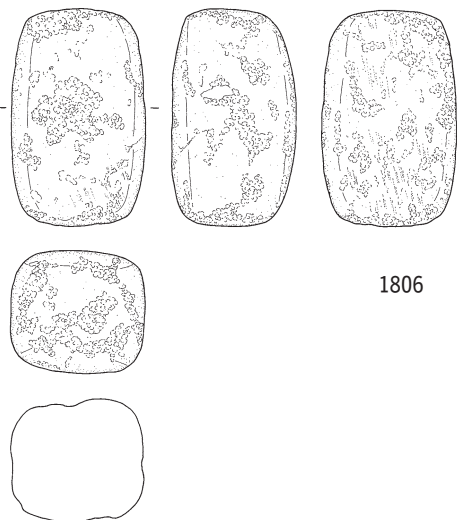
1803



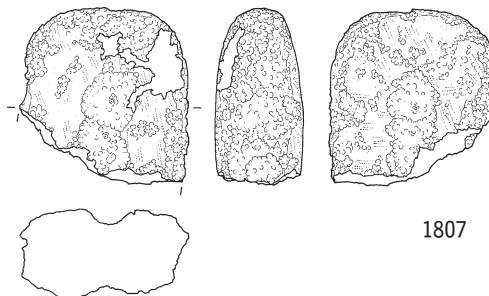
1804



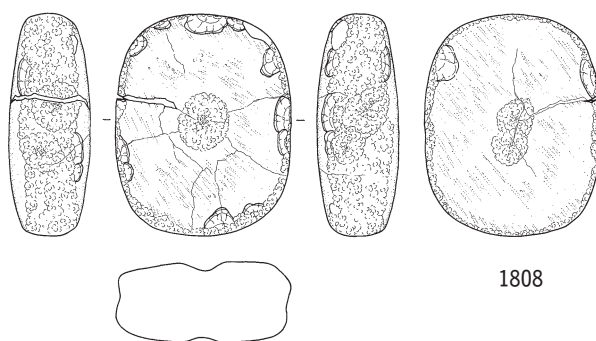
1805



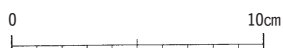
1806



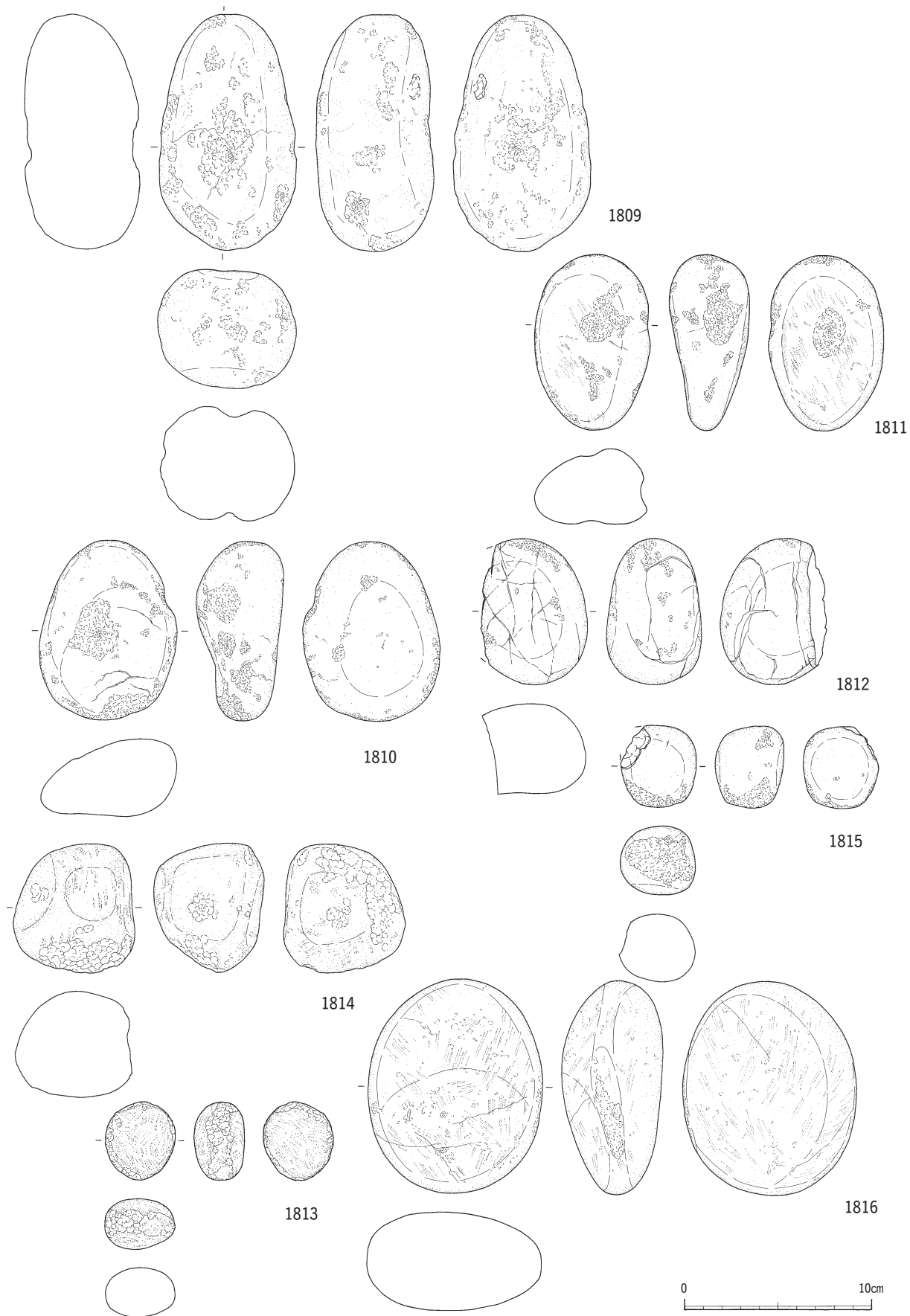
1807



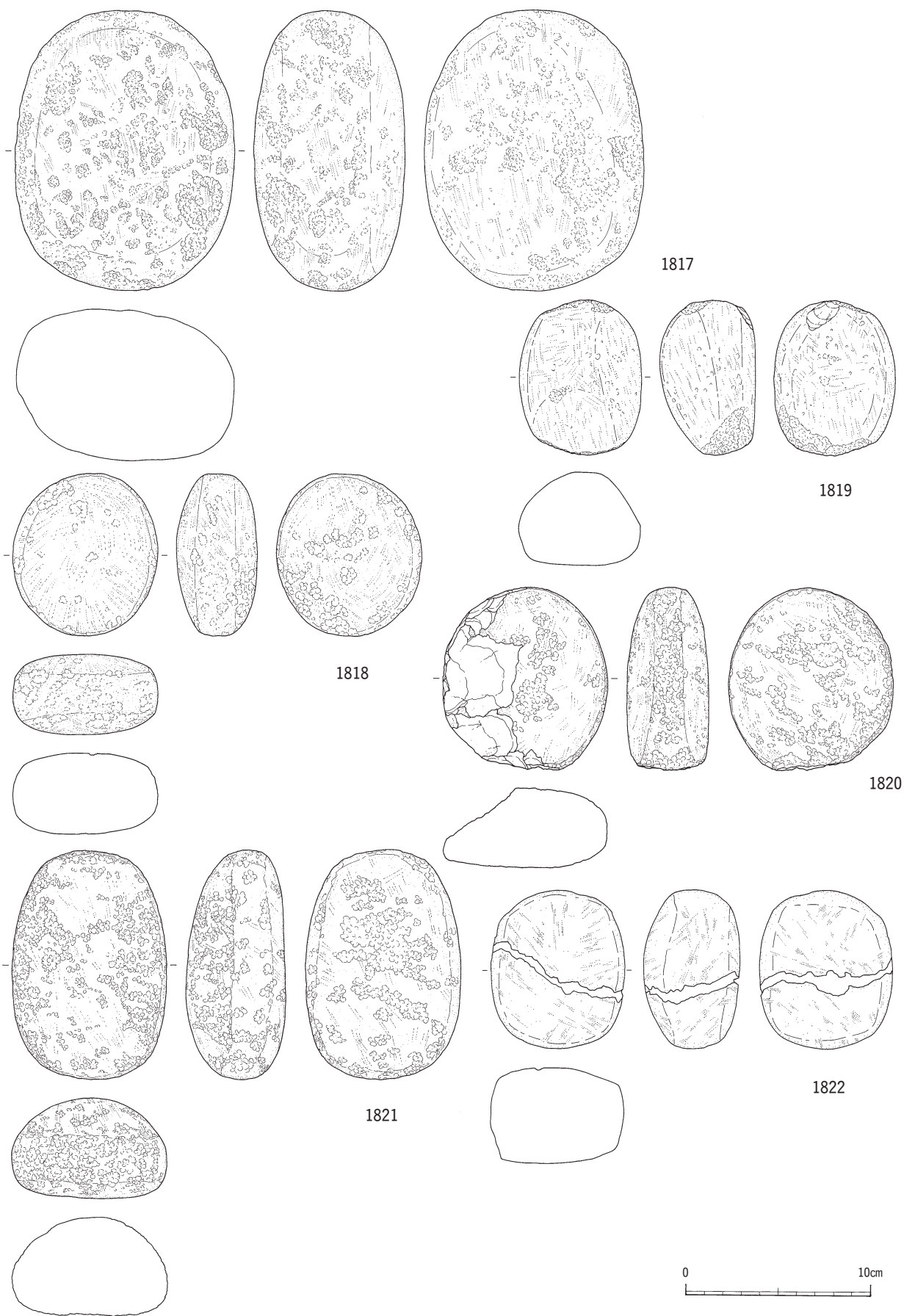
1808



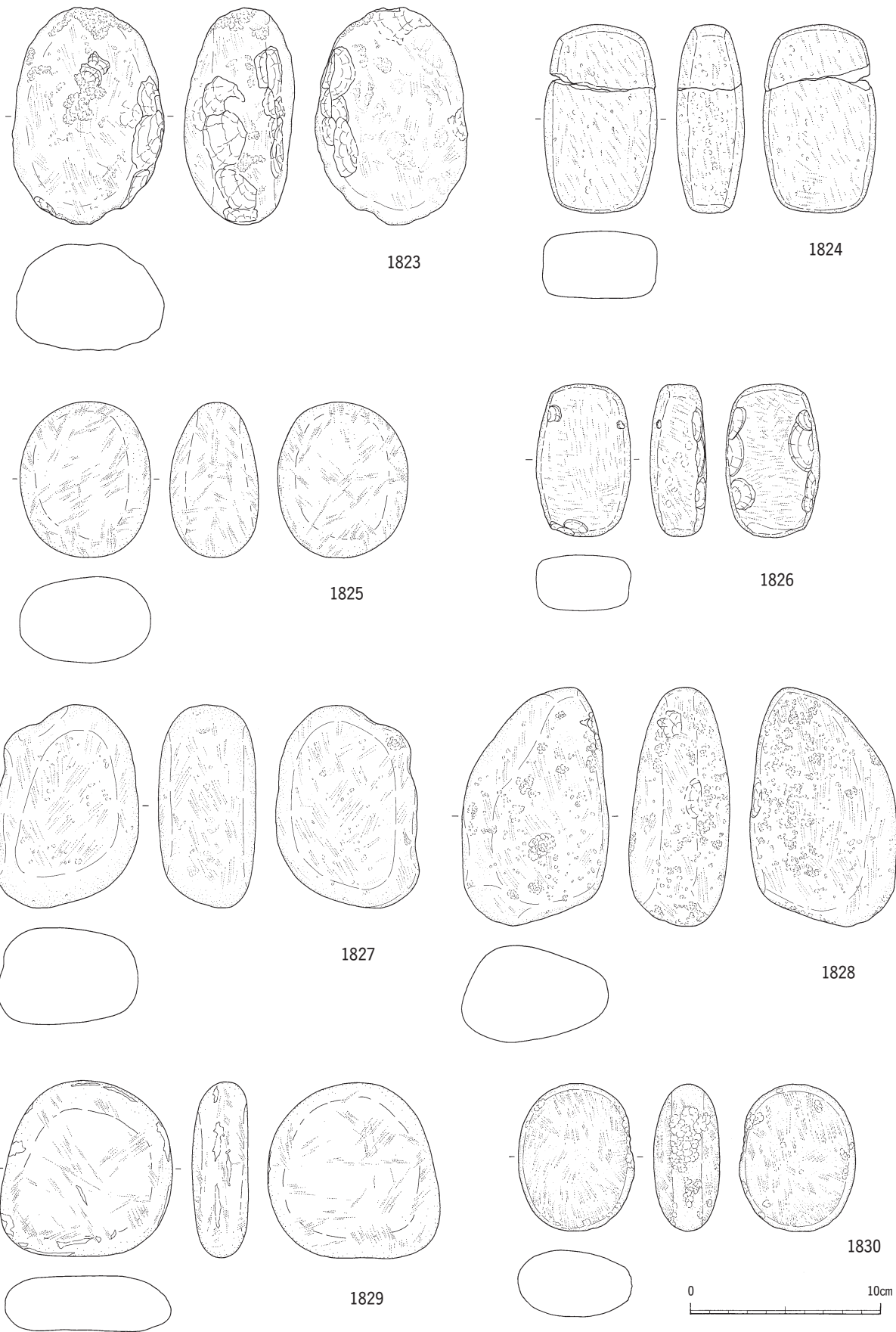
第292図 凹石（V層）



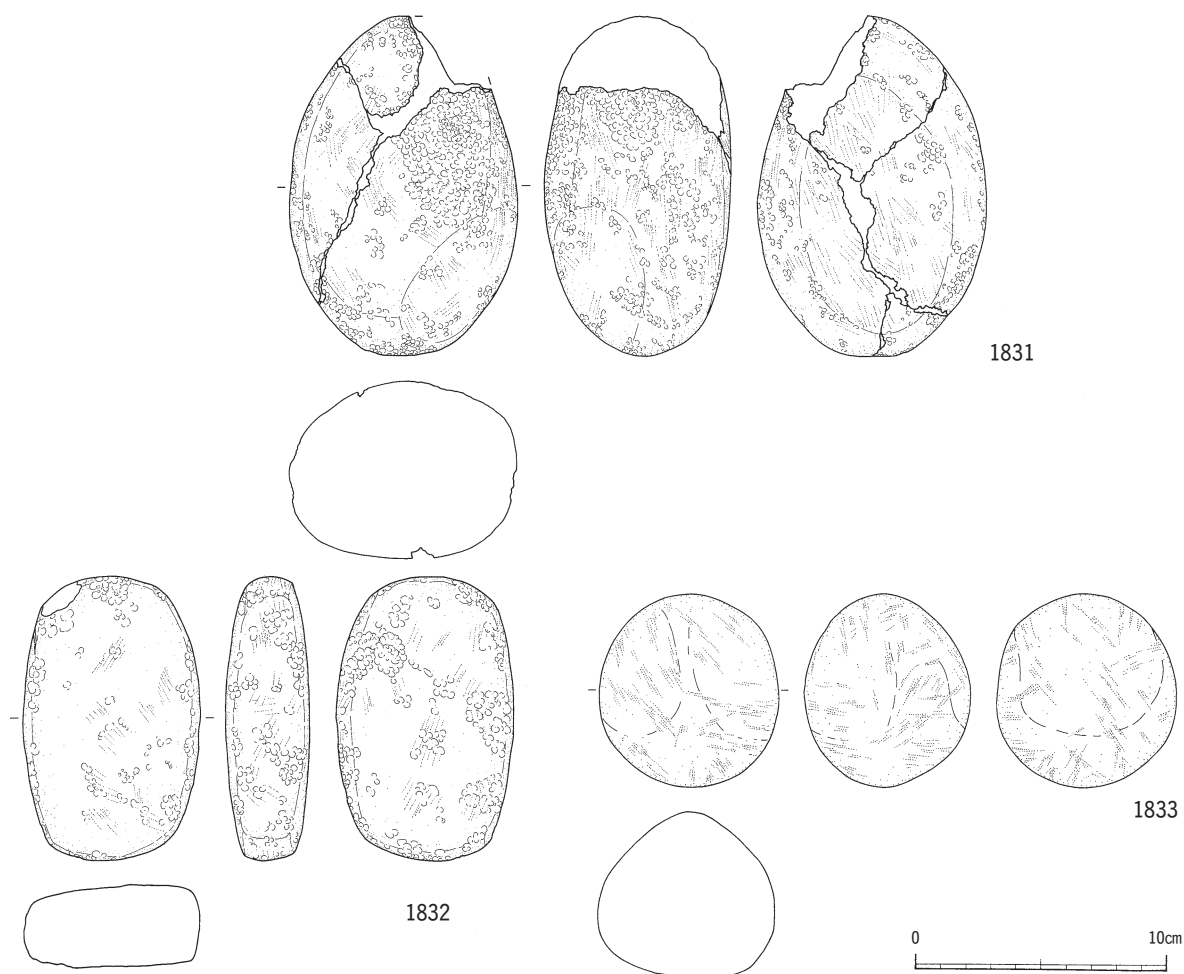
第293図 凹石・敲石（V層）



第294図 敲石・磨石（V層）



第295図 磨石 (V層)



第296図 磨石（V層）

凹石・敲石・磨石（V層）

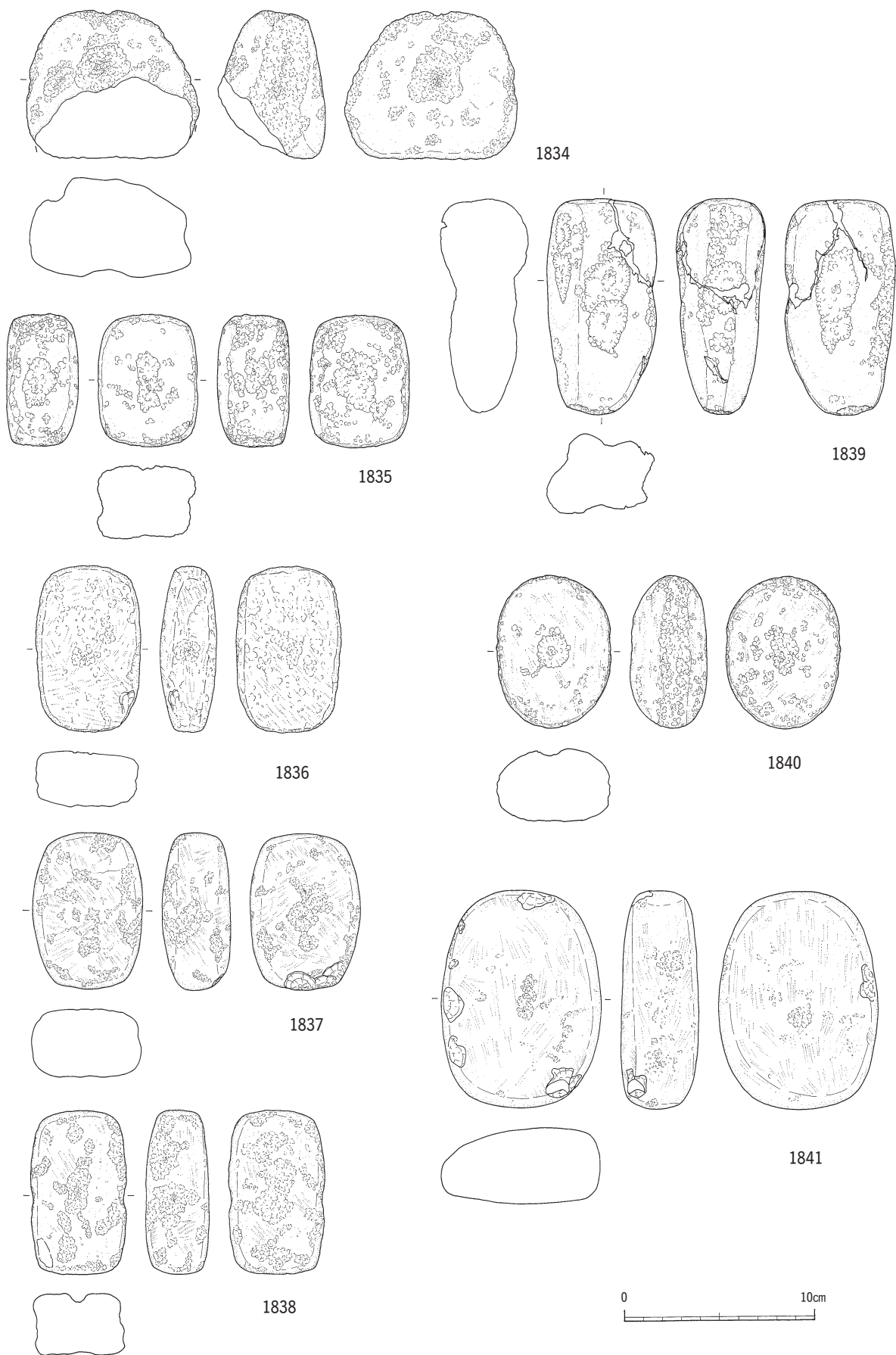
凹石

凹みのあるもの全てを凹石で取り扱った。その形状により、a 凹みのみ、b 磨り面と凹み有り、c 敲打痕と凹み有り、d 磨り面・敲打痕に凹みのあるものの四分類を行った。

V層出土の凹石は16点出土している。凹みのみ1点、磨り面と凹みのあるものが8点、磨り面・敲打痕に凹みのあるものが7点である。石材は安山岩・凝灰岩・砂岩である。1796は楕円形の川原石を素材に用い、3面に4か所の凹みがみられる。

1797～1804は磨り面のみられる凹石で、全て安山岩を石材に用いている。1797は欠損部もあるがやや円形のもので、3面に5か所の凹みがみられる。1798～1801は石鱗状の形態を呈するもので、石材は粗めの安山岩を用いている。1798は2面3か所に凹みがある。凹みのある面は平坦であるが、裏面は湾曲している。側面にも凹みがみられる。1799は大型のものである。3面4か所に凹みが、1800は側面2面に2か所凹みがみられる。1801は4面に2か所ずつの計8か所の凹みがみられるものである。1802も1801同様の凹みがみられる。1803は2面2か所、1804は3面4か所の凹みがみられる。

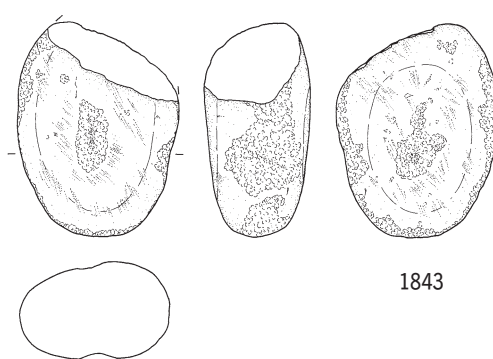
1805～1808は石鱗状の形態を呈し、磨り面・敲打痕のある凹石である。1805の凹みは平坦面に1



第297図 凹石 (IV層)



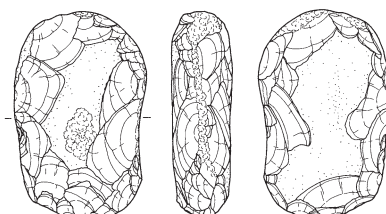
1842



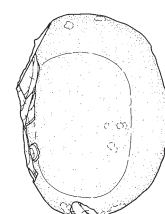
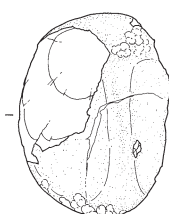
1843



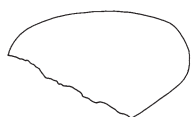
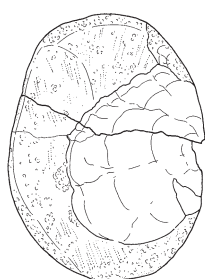
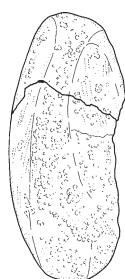
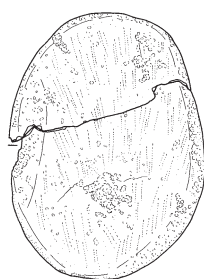
1844



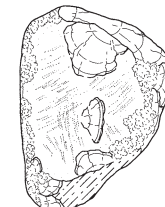
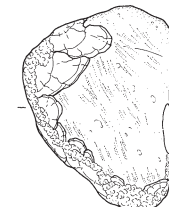
1845



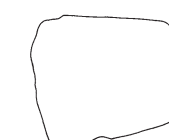
1846



1847



1848



第298図 凹石・敲石 (IV層)



第299図 敲石・磨石（IV層）

第33表 凹石・敲石・磨石一覧表（V層）

番号	器種	石材	地区	区	層	型式	標高	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	石鱗状	備考
1796	凹石	安山岩	B	D17	V	Aa	179.81	33010	270.0	8.4	5.5	4.5		3面 ③
1797	凹石	安山岩	B	C16	V	Ab	179.96	29364	378.0	8.7	8.2	5.9		3面 ④
1798	凹石	安山岩	B	D16	V	Ab	179.43	52726	210.0	8.9	6.3	3.4	○	2面 ②
1799	凹石	安山岩	B	D17	V	Ab	179.33	15226	885.0	13.0	7.9	5.5	○	
1800	凹石	安山岩	B	F15	V	Ab	179.06	52242	235.0	9.7	5.5	3.0	○	3面 ③
1801	凹石	安山岩	B	F15	V	Ab	179.18	51516	285.0	10.4	5.0	3.5	○	4面 ④
1802	凹石	安山岩	B	G16	V	Ab	178.42	59361	280.0	10.5	5.3	3.6	○	3面 ⑥
1803	凹石	安山岩	B	G17	V	Ab	177.94	61115	475.0	12.0	7.7	5.0	○	
1804	凹石	安山岩	B	G19	V	Ab	176.29	29568	220.0	6.8	6.1	4.2		3面 ④
1805	凹石	安山岩	B	C17	V	Ad	179.91	33002	302.0	8.9	6.3	3.4	○	1面 ①
1806	凹石	安山岩	B	C17	V	Ad	179.93	30450	363.0	8.6	5.3	5.0		1面 ①
1807	凹石	凝灰岩	B	D15	V	Ad	179.42	42772	150.0	7.0	6.7	3.5		3面 ④
1808	凹石	砂岩	B	E17	V	Ad	179.22	59839	310.0	8.7	7.0	3.2	○	4面 ⑦
1809	凹石	砂岩	B	F21	V	Ad	175.87	28483	666.0	12.6	7.3	6.2		4面 ⑦
1810	凹石	砂岩	B	F21	V	Ad	176.07	27502	350.0	9.6	7.3	4.6		2面 ②
1811	凹石	砂岩	B	G16	V	Ad	178.81	57994	284.0	9.4	6.2	4.3		3面 ③
1812	敲石	瑪瑙	B	E16	V	Bc	179.36	59192	336.0	7.8	5.7	5.1		
1813	敲石	砂岩	B	F19	V	Bc	169.95	36816	55.0	4.2	3.7	2.7		
1814	敲石	安山岩	B	H17	V	Bc	178.56	58187	365.0	6.9	6.5	5.9		
1815	敲石	安山岩	B	H19	V	Bc	175.82	30014	97.0	4.4	4.0	3.6		
1816	敲石	安山岩	B	B17	V	Bd	179.61	44041	830.0	11.4	9.3	5.4		
1817	敲石	花崗岩	B	C17	V	Bd	179.74	53872	2240.0	15.2	11.9	8.2		大型
1818	敲石	安山岩	B	D17	V	Bd	179.61	35200	445.0	8.8	7.9	4.3		
1819	敲石	安山岩	B	E16	V	Bd	179.21	61796	400.0	8.4	6.6	5.2		
1820	敲石	安山岩	B	F16	V	Bd	179.01	59609	584.0	9.9	9.0	4.5		
1821	敲石	安山岩	B	H17	V	Bd	178.51	57119	830.0	12.4	8.4	5.4		
1822	磨石	安山岩	B	A20	V	Ca	179.38	43435	465.0	8.6	7.3	5.2		
1823	磨石	安山岩	B	B18	V	Ca	179.29	36921	695.0	11.4	8.0	5.6		
1824	磨石	安山岩	B	C17	V	Ca	179.82	35000	295.0	9.9	5.9	3.6	○	
1825	磨石	安山岩	B	D15	V	Ca	170.23	52989	385.0	8.2	6.9	4.7		
1826	磨石	安山岩	B	E16	V	Ca	179.01	59729	184.0	8.0	5.0	2.9	○	
1827	磨石	安山岩	B	E17	V	Ca	179.42	52664	687.0	10.7	7.5	5.1		
1828	磨石	安山岩	B	E17	V	Ca	179.32	56775	685.0	12.6	7.3	5.2		
1829	磨石	安山岩	B	F15	V	Ca	179.02	60300	410.0	9.2	9.1	3.0		扁平
1830	磨石	安山岩	B	G15	V	Ca	178.97	54934	240.0	7.8	6.1	3.5		
1831	磨石	安山岩	B	G17	V	Ca	184.00	58081	1155.0	13.5	9.1	7.4		
1832	磨石	安山岩	B	H17	V	Ca	178.57	61159	404.0	11.3	7.1	3.3	○	
1833	磨石	安山岩	B	C16	V	Cc	179.59	54435	506.0	7.6	7.2	6.6		

か所みられる。1806は厚みのある凹石で5面6か所に凹みがみられる。両端部に凹みが1か所ずつあるのが特徴である。1807は凝灰岩を石材に用い、欠損しているが凹みが2面3か所にみられる。1808は砂岩を石材に用いたもので4面7か所に凹みがみられ、周縁部には敲打痕、表裏面には研磨痕がみられる。1809～1811も磨り面・敲打痕のある凹石で、川原石を素材に用いたものである。1809は安山岩を石材に4面7か所凹みがみられる。1810・1811は砂岩を石材に用い、1810は2面3か所、1811は3面3か所に凹みを施している。

敲石

1812～1815は球状を呈した敲石である。1812は瑪瑙を石材に用い、側縁部に敲打痕がみられ、使

第34表 凹石・敲石・磨石一覧表（Ⅳ層）

番号	器種	石材	地区	区	層	型式	標高	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	石鱗状	備考
1834	凹石	安山岩	B	F15	Ⅳ	Aa	175.79	40178	420.0	7.7	9.1	5.6		5面 ⑤
1835	凹石	安山岩	B	C16	Ⅳ	Ab	179.91	35750	229.0	6.9	5.2	3.8	○	6面 ⑪
1836	凹石	安山岩	B	C18	Ⅳ	Ab	179.86	33533	190.0	8.8	5.5	3.0	○	3面 ③
1837	凹石	安山岩	B	F15	Ⅳ	Ab	179.17	53435	255.0	8.2	5.8	3.6	○	1面 ③
1838	凹石	安山岩	B	G15	Ⅳ	Ab	179.01	54347	185.5	8.6	5.0	3.3	○	4面 ⑤
1839	凹石	砂岩	B	C17	Ⅳ	Ac	179.97	30423	404.0	11.3	5.7	4.6		5面 ⑦
1840	凹石	安山岩	B	C16	Ⅳ	Ad	179.76	35700	235.0	8.0	6.0	4.0		3面 ③
1841	凹石	砂岩	B	E10	Ⅳ	Ad	178.15	34810	605.0	11.5	8.4	4.0	○	3面 ④
1842	凹石	砂岩	B	E20	Ⅳ	Ad	175.97	27056	465.5	10.5	7.5	4.6		1面 ①
1843	凹石	砂岩	B	G21	Ⅳ	Ad	176.17	25415	295.0	8.5	6.5	4.2		2面 ②
1844	敲石	砂岩	B	A17	Ⅳ	Ba	179.41	35521	405.0	16.3	5.1	4.2		
1845	敲石	安山岩	B	F19	Ⅳ	Bb	171.90	36164	160.0	8.3	5.2	2.4		袂部あり
1846	敲石	瑪瑙	B	H17	Ⅳ	Bc	178.57	50192	330.0	8.0	6.0	5.1		
1847	敲石	安山岩	B	B16	Ⅳ	Bd	180.05	52107	445.5	10.6	7.7	4.4		
1848	敲石	安山岩	B	B20	Ⅳ	Bd	176.61	50101	355.0	8.2	6.0	5.2		
1849	敲石	安山岩	B	E15	Ⅳ	Bd	179.26	51288	330.0	7.8	6.3	4.7		
1850	敲石	砂岩	B	F15	Ⅳ	Bd	179.16	51345	240.0	7.4	6.9	3.2		
1851	敲石	安山岩	B	G16	Ⅳ	Bd	178.47	49888	585.0	10.5	7.8	5.1		
1852	磨石	安山岩	B	C15	Ⅳ	Ca	179.73	52811	310.0	8.6	6.7	3.6	○	
1853	磨石	安山岩	B	C16	Ⅳ	Ca	179.90	35755	330.0	9.4	6.7	3.9	○	
1854	磨石	安山岩	B	E15	Ⅳ	Ca	179.36	51230	510.0	8.8	7.0	5.3		
1855	磨石	安山岩	B	F21	Ⅳ	Ca	175.97	27055	355.0	8.7	7.1	5.2		

用により一部欠損している。1813は砂岩を石材に用いた小型の敲石である。側縁全周に敲打痕が認められる。1814・1815は安山岩を石材に用い、側縁部に敲打痕がみられるものである。

1816～1821は磨り面と敲打痕がみられるものである。1817は花崗岩を石材に用いたもので、長さ15.2cm、幅11.9cm、厚み8.2cm、重量2240gを測る大型の敲石である。その他は安山岩を石材に用いている。1830～1832も磨り面と敲打痕がみられる敲石である。やはり安山岩を石材に用いている。

磨石

1822～1829は磨り面のみみられる磨石である。石材は全て安山岩である。

1833は球状の自然礫を石材に用いたもので、全周に磨り面のみみられる磨石である。

凹石・敲石・磨石（Ⅳ層）

凹石

Ⅳ層出土の凹石は10点出土している。1834は欠損しているが残存部でも5面に5か所の凹みがみられる。1835～1838は石鱗状の形態を呈し、磨り面のある凹石である。1835は6面に11か所の凹みが施されているものである。形態は長方形を呈している。1836は3面3か所、1837は1面3か所、1838は4面5か所に凹みがみられる。

1839は砂岩を石材に用いた、敲打痕のみみられる凹石である。敲打痕は先端部及び側縁部にみられ、5面7か所に凹みがみられる。

1840～1843は磨り面・敲打痕のある凹石である。1840は安山岩を石材に、3面3か所の凹みがみられる。1841は砂岩を石材に用いたもので、石鱗状を呈す。側縁全周に敲打痕があり3面4か所に

凹みがみられる。1842も砂岩を石材に用い、1面1か所の凹みのあるものである。1843も砂岩を石材に用い、側縁部に敲打痕が認められる。凹みは2面2か所である。

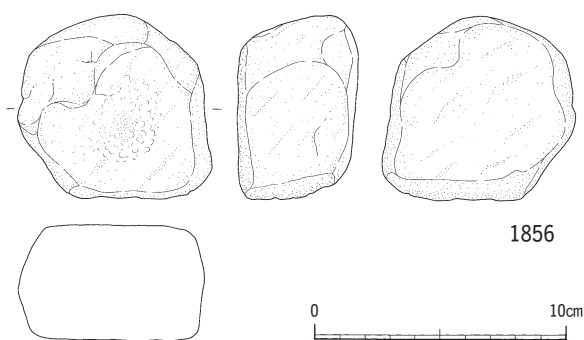
敲石

1844は砂岩で棒状の川原石を石材に用いたもので、両端部及び側縁部に敲打痕がみられるものである。

1845は石斧の再利用として分類したが、当初より敲石を意識して整形を行ったことも考えられる。安山岩の楕円形川原石を石材に用い、側縁部を両面加工により調整を施し、敲打痕がその先端部にみられる。

1846は球状を呈した敲石である。瑪瑙を石材に用い、両端部に敲打痕がみられ、使用により一部欠損している。

1847～1851は磨り面と敲打痕がみられる敲石である。1850は砂岩であるが、その他は安山岩を石材に用いている。



第300図 台石

磨石

1852～1855は磨り面のみみられる磨石である。石材は全て安山岩であり、1852・1853は石鱗状を呈している。

台石

1856は拳大の安山岩礫を石材に用いたもので、平坦面の一か所の中央部に使用による敲打痕がみられ、台石と思われるものである。

出土縄文石器 B地区V層

番号	器種	石材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
1856	台石	安山岩	B	F16	V	179.13	59709	450	7.3	7.7	4.7	

石皿

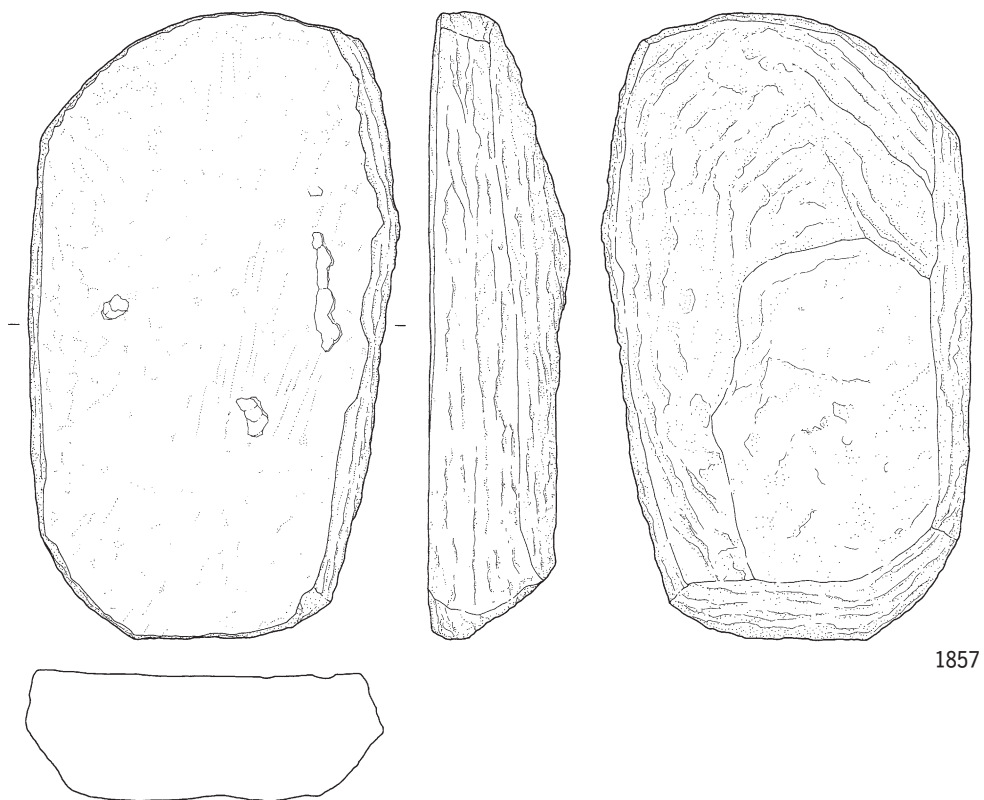
B地点のV層76点、IV層から57点の大量の石皿が出土した。V・IV層あわせて凹みのないもの43点、凹みが弓状のもの72点、凹みの深いもの18点である。石材は安山岩が主体であるが、砂岩・花崗岩・黒曜石も一部石材に用いられている。

1857・1858は周縁加工を施し、磨り面に凹みのないものである。1857は完形品で14kgの重量を測る大型の石皿である。1858は欠損しているが、敲打により周縁加工を施して整形しているもので、表裏2面に研磨痕がみられる。

1859は川原などにある転石を利用したもので、円形の平面形を呈している。やはり磨り面に凹みが無い。これも完形品で5.3kgを測る。

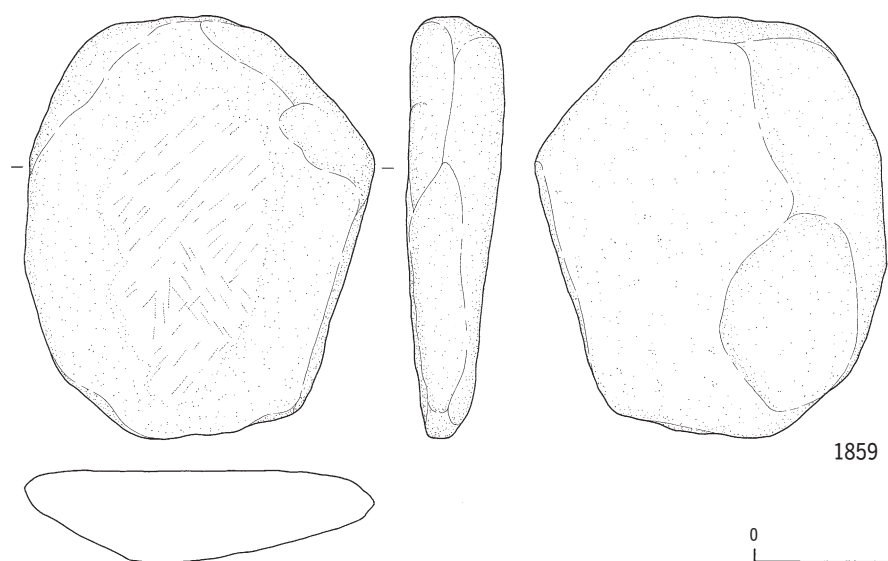
1860は板状の角礫で磨り面に凹みのないもので、二面に研磨痕がみられる。これも大型の石皿で10kgを測る。

1861は周縁加工を施し、中央部が断面で弓状に凹むものである。

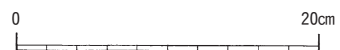


1857

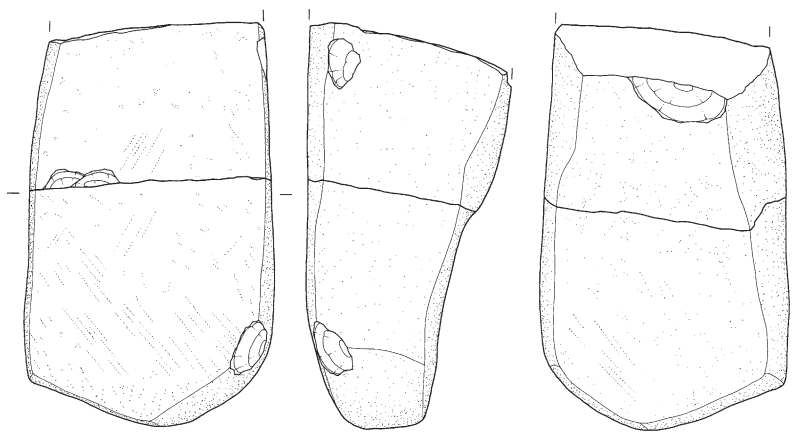
1858



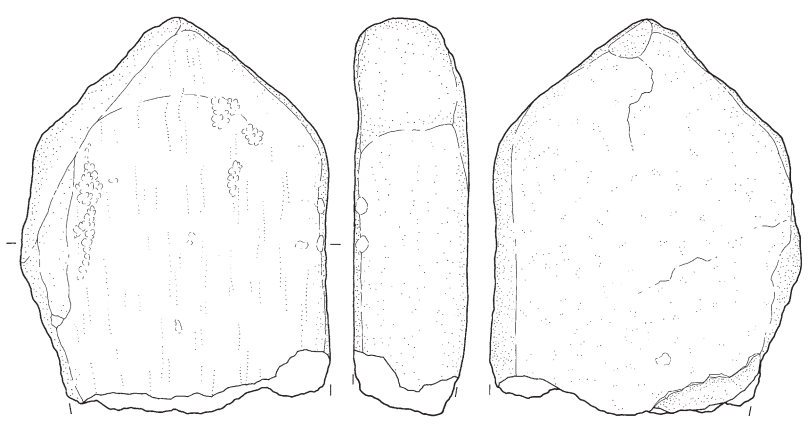
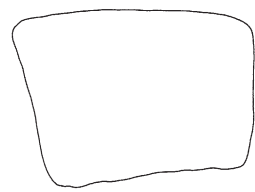
1859



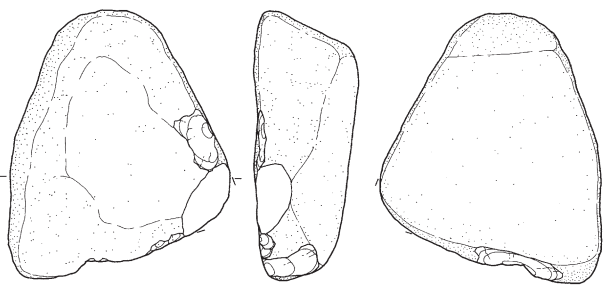
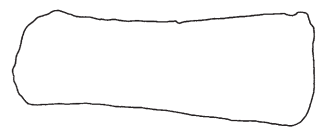
第301図 石皿(1)



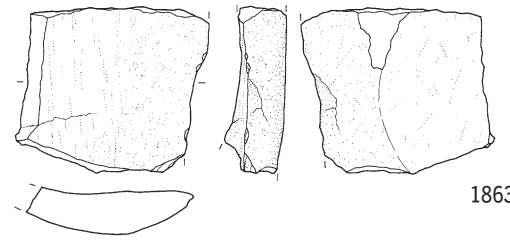
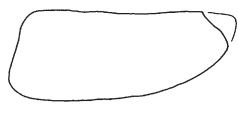
1860



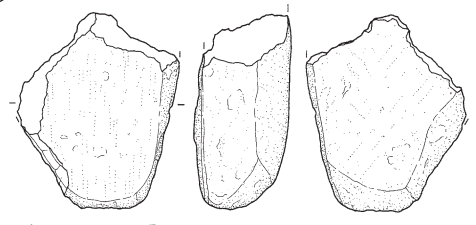
1861



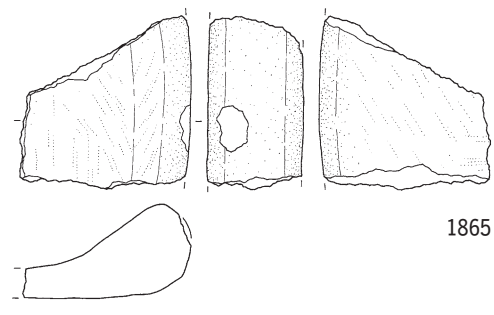
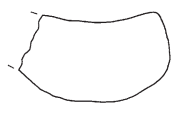
1862



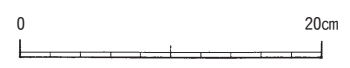
1863



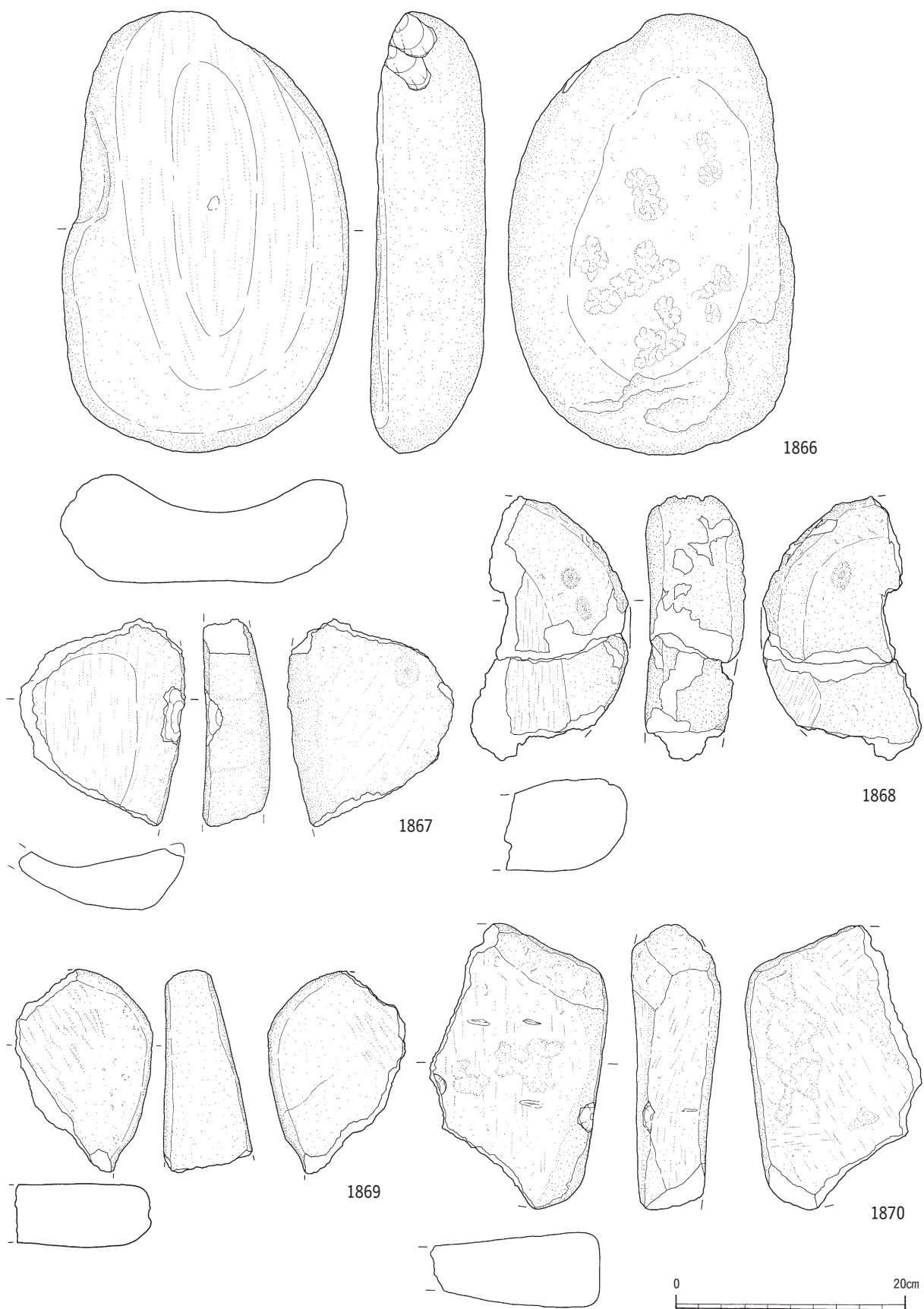
1864



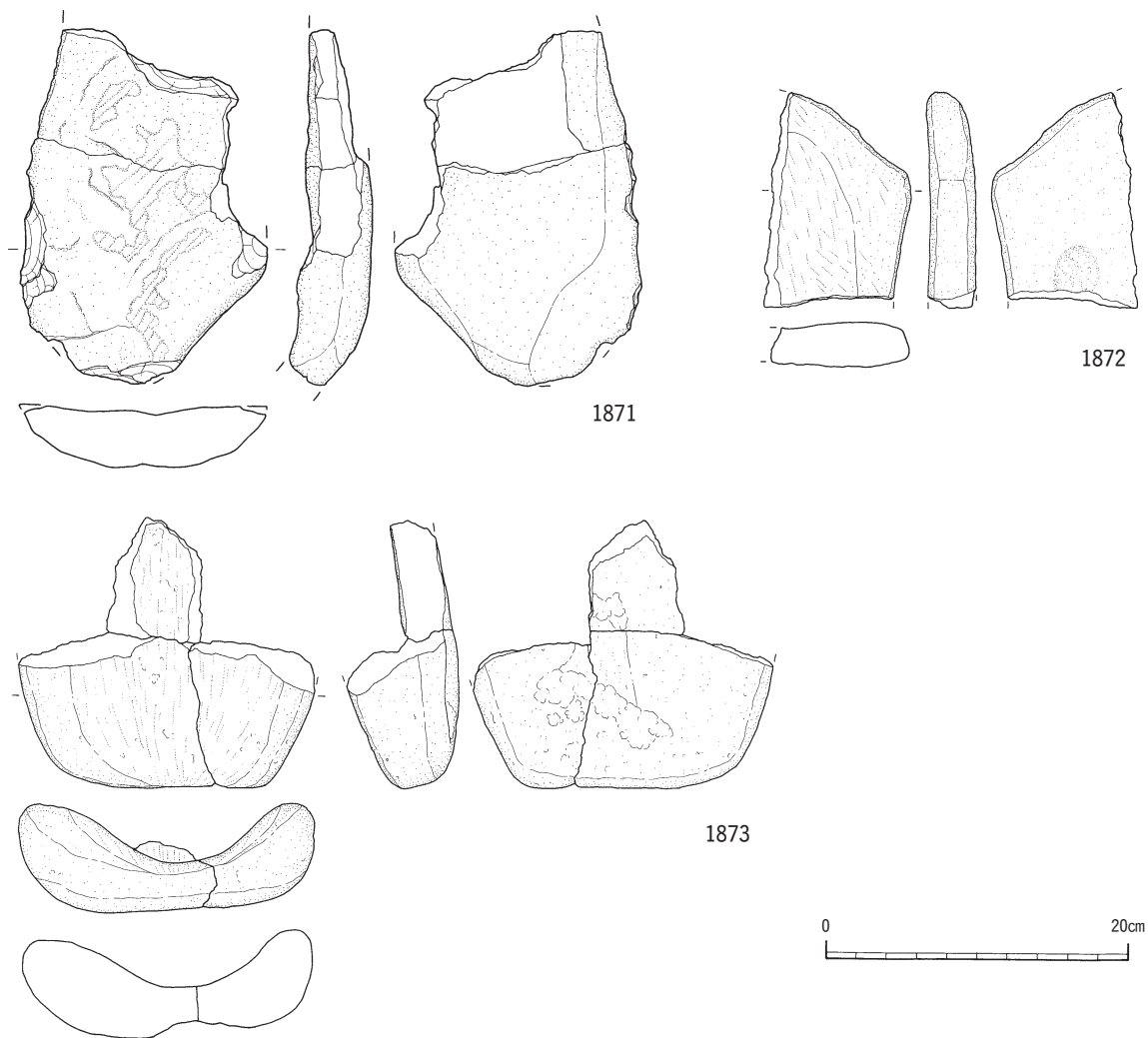
1865



第302図 石皿(2)



第303図 石皿(3)



第304図 石皿(4)

1862は安山岩の川原石を石材として用いたもので、完形品である。片面のみ研磨痕がみられ、中央部の断面が弓状に凹んでいる。

1863～1867は周縁加工を施し、凹みが深いものである。1863は砂岩を石材に用いたもので凹みが深くなっているが、裏面にも研磨痕がみられるものである。1864も砂岩で凹みの深い厚みのある石皿である。やはり、裏面に研磨痕がみられる。1865は安山岩を石材に用い、敲打整形により周縁加工を施したもので、裏面にも研磨痕がみられる。1866は完形品である。11.8kgを越える重量で大型のものである。1867も同様のものであるが、裏面に若干の研磨痕が認められる。

1868～1873はIV層から出土したものである。

第35表 B地区石皿一覽表(1)

番号	型式	石 材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量 g	長さcm	幅cm	厚みcm	備 考
		安山岩	B	F16	V	179.13	59709	450	7.3	7.7	4.7	
1857	I a	安山岩	B	C16	V	179.8	33333	14600.0	41.4	24.5	9.3	
1858	I a	安山岩	B	D14	V	176.46	29618	880	12	14.1	3.4	
1859	I b	安山岩	B	F16	V	179.08	60444	5300	27.9	23.1	6.2	
1860	I c	安山岩	B	H16	V	179.01	47976	10100	26.9	16.5	13.5	
			B			178.86	56386					
1861	II a	安山岩	B	C17	V	179.87	32944	6200	26.3	20.5	7.5	
1862	II b	安山岩	B	C16	V	179.76	34611	2520	17.7	14.6	7	
1863	III a	砂岩	B	B20	V	176.59	42566	500	11	12.8	2.7	
1864	III a	砂岩	B	D17	V	179.64	34900	840	13	10.6	6.4	
1865	III a	安山岩	B	G17	V	178.27	60000	770	11.5	11.4	6.4	
1866	III a	安山岩	B	C16	V	179.74	34400	11800	38.3	25	9.4	
1867	III a	安山岩	B	G16	V	179.05	51925	1480	18.2	14.4	5.8	
	I	砂岩	B	A17	V	179.30	44025	40	4.4	4.5	1.7	
	I	安山岩	B	D17	V	179.65	34775	60	6.7	3.4	2.3	
	I	安山岩	B	E15	V	179.24	53219	95	5.4	3.2	3.7	
	I	安山岩	B	E15	V	179.05	53234	55	7.3	2.7	3.4	
	I	安山岩	B	E15	V	179.13	53538	200	5.7	5.7	5.2	
	I	安山岩	B	E17	V	179.33	58475	190	7.6	7	2.8	
	I	安山岩	B	F17	V	179.19	57585	85	6.8	6.7	1.5	
	I	安山岩	B	G15	V	178.93	20915	185	5.5	4.6	4.8	
	I	安山岩	B	G16	V	178.64	58089	725	8.5	7.2	9.2	
	I	安山岩	B	H19	V	177.00	61686	145	7.7	7.3	5.6	
	I a	安山岩	B	G17	V		66621	50	5.6	3.6	2.2	
	I a	安山岩	B	G17	V	178.43	59096	680	13.7	8.7	4.6	
	I a	安山岩	B	G17	V	178.69	59397	290	6.6	11	4	
	I b	安山岩	B	G16	V	179.17	51900	400	9.2	8.6	4.8	
			B	G20		175.81	29030					
	I c	安山岩	B	F16	V	179.11	59700	2130	17.1	16	6.3	
	I c	安山岩	B	F17	V	179.22	56799	550	7.6	6.9	7.4	
	I c	安山岩	B	G17	V	178.07	61296	785	12.5	6.5	6.5	
	I c	安山岩	B	G19	V	176.19	36462	130	5.7	4.4	3.6	
	I c	安山岩	B	H17	V	178.18	58979	1230	11.4	11	7	
	II	安山岩	B	C16	V	179.86	54509	260	7.5	7.5	2.5	
	II	安山岩	B	C16	V	179.84	43249	285	7.5	5.5	5.8	
	II	安山岩	B	C17	V	179.82	54528	410	7.8	5.4	6.6	
	II	安山岩	B	D17	V	179.22	62009	685	13.3	8.3	4.3	
	II	砂岩	B	D16	V	179.57	34875	340	8.9	5.3	5.1	
	II	安山岩	B	D17	V	179.28	51307	60	5.5	3.2	4.3	
	II	安山岩	B	E16	V	178.53	59334	2200	15.4	9	7.4	
	II	安山岩	B	G16	V	178.66	60524	475	6.2	5.6	6.3	
	II a	安山岩	B	B16	V	179.67	61981	70	5.4	3.3	3.8	
	II a	安山岩	B	B18	V	179.05	36966	370	9.9	7.7	5.6	
	II a	安山岩	B	C16	V	179.90	43832	130	4.4	4.1	4.9	
	II a	安山岩	B	C18	V	179.64	43764	3390	15.4	13.7	9	
	II a	安山岩	B	D15	V	179.44	42890	440	7.4	6.7	4.9	
	II a	安山岩	B	D17	V	179.59	34856	195	9.4	5.5	2.9	
	II a	黒曜石	B	D28	V		横転	360	9.3	10.5	3.6	
	II a	安山岩	B	E16	V	179.31	61813	325	10.9	7.2	5.4	
	II a	安山岩	B	F15	V	179.04	53581	3060	22	13	6.5	
	II a	安山岩	B	F15	V	178.78	61043	465	8.9	7.1	5.1	
	II a	安山岩	B	F15	V	179.11	60290	450	13.4	5.7	4.1	
	II a	安山岩	B	G17	V	178.30	59944	1410	15.3	7.9	8.1	
	II a	凝灰岩	B	G19	V	176.85	35010	630	16	12	3	
	II a	安山岩	B	H17	V	178.19	58810	190	5	10.6	4.5	
	II b	安山岩	B	C17	V	179.49	60146	2130	16.4	15.6	6.6	
	II b	安山岩	B	C20	V	175.83	42448	1580	12.8	11.6	8.4	

第36表 B地区石皿一覽表(2)

番号	型式	石 材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量 g	長さcm	幅cm	厚みcm	備 考
	II b	安山岩	B	D15	V	179.65	29158	1000	10.4	10.3	5.6	
	II b	安山岩	B	D16	V	179.55	34211	675	10.2	9	6.5	
	II b	安山岩	B	F17	V	178.7	59430	250	7.9	6.1	3	
	II b	安山岩	B	G17	V	178.68	50486	120	5.3	5.1	4.3	
	II c	安山岩	B	A19	V	176.33	57606	440	12.8	9	4.2	
	II c	安山岩	B	D16	V	179.67	31400	405	11.6	6.3	5.2	結合
	I b	安山岩	B	C18	IV	179.71	32366					
	II c	安山岩	B	D16	V	179.29	58527	615	8.1		6.3	
	II c	安山岩	B	F15	V	179.25	52167	2200	13.1	11.5	9.3	
						179.13	53549					
	II c	砂岩	B	F17	V	179.22	54701	220	9.2	6.6	4.2	
	II c	安山岩	B	G16	V	178.68	58316	2200	15.1	11.5	8.5	
	II c	安山岩	B	G17	V	178.18	58315	2050	14.4	10.3	8.8	
	II c	安山岩	B	G17	V	178.67	58072	2750	18.1	9.9	7.6	
				G16		178.63	58093					
	II c	安山岩	B	G19	V	168.3	28568	1340	17.9	13.6	3.3	
	II c	安山岩	B	G20	V	175.9	28148	125	6.6	6.3	2.4	
	II c	安山岩	B	H17	V	178.17	58815	465	12.2	6.3	4.7	
	III a	安山岩	B	A19	V	176.03	57631	1100	14.6	10	6.1	
	III a	安山岩	B	C15	V	179.52	42968	510	10.2	8.1	5.2	
	III a	安山岩	B	C15	V	179.68	52873	1390	13.3	13.2	6	
	III a	安山岩	B	D17	V	179.2	58573	145	6.9	6.1	3.4	
	III a	安山岩	B	F16	V	179.02	60882	210	7.7	4.4	3.8	
	a	安山岩	B	F18	V	178.65	50912	80	6	4.7	2.7	
	a	安山岩	B	H16	V	178.87	56393	400	6.8	6.3	5.3	
		安山岩	B	G19	V	177.18	28510	325	9.2	7.2	5.7	
		安山岩	B	F19	V	177.25	36186	680	11.7	7	6.2	
1868	II a	安山岩	B	C16	IV	179.74	35773	2160	22.9	13.7	8.7	
				E16		179.35	55412					
1869	II a	安山岩	B	G16	IV	179.11	48171	1800	17.5	12	5.5	
1870	II a	安山岩	B	G16	IV	178.94	57264	2470	25	15.5	7.8	
1871	II c	安山岩	B	C17	IV	179.8	35878	1660	23.4	16.2	5.4	
				E20	V	177.3	22817					
1872	II c	花崗岩	B	F19	IV	177.23	36600	570	14.2	9.7	3	
1873	III a	安山岩	B	D18	IV	179.68	32239	1390	17.8	19.7	7.3	
				G19	V	170	28857					
				F15	V	178.99	56180					
	I	花崗岩	B	B16	IV	179.93	52145	50	6	5.7	1.2	
	I	安山岩	B	E16	IV	179.25	57456	185	6.1	4.8	5.6	
	I	安山岩	B	F15	IV	179.22	51408	400	10.5	12.5	3.5	
	I	安山岩	B	F16	IV	179.27	46201	205	6.1	5.5	4.2	
	I	安山岩	B	F16	IV	179.2	50564	50	6.3	5.2	1.1	
	I	安山岩	B	F17	IV	178.83	50682	105	4.2	3.4	4.4	
	I	安山岩	B	F17	IV	179.22	49682	190	5.7	3.6	7.5	
	I	安山岩	B	G17	IV	178.34	59133	150	5.4	4.9	4.6	
	I	安山岩	B	H17	IV	178.44	50225	500	8.8	7.6	7.3	
	I a	安山岩	B	B13	IV	178.7	29688	2080	21.6	13.8	6.4	
				E15	V	179.15	53522					
	I b	安山岩	B	D10	IV	176.33	35556	575	11.5	7.6	4.5	
	I b	砂岩	B	E16	IV	179.42	50632	525	12	9.5	3.7	
	I b	安山岩	B	G16	IV	179.15	49485	520	12.4	9	4	
	I c	安山岩	B	C12	IV	178.73	26661	835	9	8.3	7.4	
	I c	安山岩	B	D16	IV	179.9	30950	685	7.8	7.4	9.4	
	I c	安山岩	B	D17	IV	179.7	34745	1060	14.9	11	5.7	

第37表 B地区石皿一覽表(3)

番号	型式	石 材	地区	区	層	標高 m	遺物番号	重量 g	長さ cm	幅 cm	厚み cm	備 考
	I c	安山岩	B	E15	IV	179.24	52164	1290	13.5	12.5	5.7	
	I c	安山岩	B	F19	IV	177.15	36623	650	10.6	8.7	7.5	
	I c	安山岩	B	G16	IV	178.89	55696	230	6.5	5.9	4.1	
	I c	安山岩	B	G16	IV	179.16	48212	520	12.6	6.0	3.6	
	II	安山岩	B	C16	IV	179.72	52804	280	8.9	5.7	4.1	
	II	安山岩	B	D17	IV	179.48	53840	240	5.1	4.2	7.0	
	II	安山岩	B	E16	IV	179.45	46263	150	7	4.0	4.0	
	II	花崗岩	B	E16	IV	179.37	54579	150	5.8	3.2	4.9	
	II	安山岩	B	F15	IV		53033	85	8	5.9	3.5	
	II	安山岩	B	G20	IV	176.20	25539	250	7.7	6.3	5.4	
	II	安山岩	B	H17	IV	178.62	50251	345	6.1	5.6	7.4	
	II a	安山岩	B	C16	IV	178.73	35960	590	11.9	9.1	4.2	
	II a	安山岩	B	E15	IV	179.25	51297	2080	17.1	9.6	7.7	
				G16	IV	179.07	53962					
	II a	安山岩	B	F15	IV	179.12	53434	1560	21.0	13.0	5.0	
				G16	IV	178.43	59366					
	II a	安山岩	B	F17	IV	179.04	50890	1260	13.1	10.1	6.6	
	II a	安山岩	B	G16	IV	179.10	47026	260	5.3	5	5.6	
	II a	安山岩	B	G16	IV	178.85	57168	350	9.4	5.2	6.6	
	II b	安山岩	B	C15	IV	179.73	52823	1260	21	11.6	3.7	
				E16		179.55	45354					
	II b	安山岩	B	C18	IV	179.78	53859	630	13.0	6.1	4.5	
	II b	安山岩	B	D16	IV	179.53	35831	175	6.1	4.4	5.2	
	II b	安山岩	B	G16	IV	178.93	49458	1520	15	14.5	4.5	
	II c	安山岩	B	B15	IV	179.87	51206	1850	13.3	10.6	9.2	
	II c	花崗岩	B	B16	IV	179.99	53901	535	7.8	7.2	5.9	
	II c	安山岩	B	C17	IV	179.77	35904	1790	11.8	10.2	8.7	
	II c	砂岩	B	C20	IV	176.78	40099	3710	21.4	14.1	9.4	
				D17		179.73	34750					
				E18		178.94	50944					
	II c	安山岩	B	D17	IV	179.88	30735	620	11	8.6	4.7	
	II c	安山岩	B	E15	IV	179.29	52165	650	10.3	5.9	7.8	
	II c	安山岩	B	F16	IV	179.18	50533	2640	13.5	12.5	8.7	
	II c	安山岩	B	G16	IV	179.07	49532	1500	14.2	8.3	7.6	
	II c	安山岩	B	H17	IV	178.80	49435	2080	11	10.2	9.5	
	III a	砂岩	B	C16	IV	179.92	32394	280	8.3	5.7	5.8	
	III a	安山岩	B	C18	IV	179.71	33508	1010	15.1	12.0	4.3	
				H17		178.66	50268					
	III a	安山岩	B	E16	IV	179.32	57546	300	7.2	6.6	4.1	
	III a	安山岩	B	E17	IV	179.42	50644	390	10.2	87.0	3.9	
				E16	V	179.27	59557					
	III a	安山岩	B	F17	IV	179.17	49745	620	12.3	12.5	4	

C 地 区

3 C地区の調査

C地区の確認調査は平成3年度に行った。C地区は1～9区の範囲であり、 $8\text{ m} \times 2\text{ m} = 2$ か所、 $16\text{ m} \times 2\text{ m} = 2$ か所、 $20\text{ m} \times 2\text{ m} = 1$ か所のトレンチ調査を行った。

その結果、縄文時代早期の土器・石器がIV・V層から出土した。

確認調査の成果を踏まえて、平成4・6年度に調査を行った。

平成4年度は、A～H-1～9区の調査を行った。調査面積は $6,000\text{ m}^2$ である。その結果、縄文時代早期の遺構（住居跡・集石・土坑等）、遺物（土器・石器）が多く出土した。

遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑数10基、集石2基である。遺物は、志風頭式・加栗山式・吉田式・石坂式土器が主体で、ほとんど円筒形土器であるが、一部角筒土器が出土している。

石器は、石槍・石鏃・スクレイパー・凹石・敲石・磨石・石皿が出土した。また、石材については、黒曜石・チャート・頁岩・鉄石英・安山岩・砂岩がみられた。

石槍は、G6区IV層下部で出土したもので、研磨された石槍で完形品である。また、安山岩製の砥石とセット関係で出土している。

平成6年度もA～H-1～9区の調査を行った。調査面積は $7,800\text{ m}^2$ である。遺構は前年度の続きを行った。

「薩摩火山灰」より下層の調査を行い、縄文時代草創期から旧石器時代細石刃文化までの遺物および礫群が検出された。

礫群は、C3区VII層から検出されたもので、 $2.5\text{ m} \times 1.5\text{ m}$ の楕円形状の範囲に散在しているものであった。掘り込み等はみられなかった。

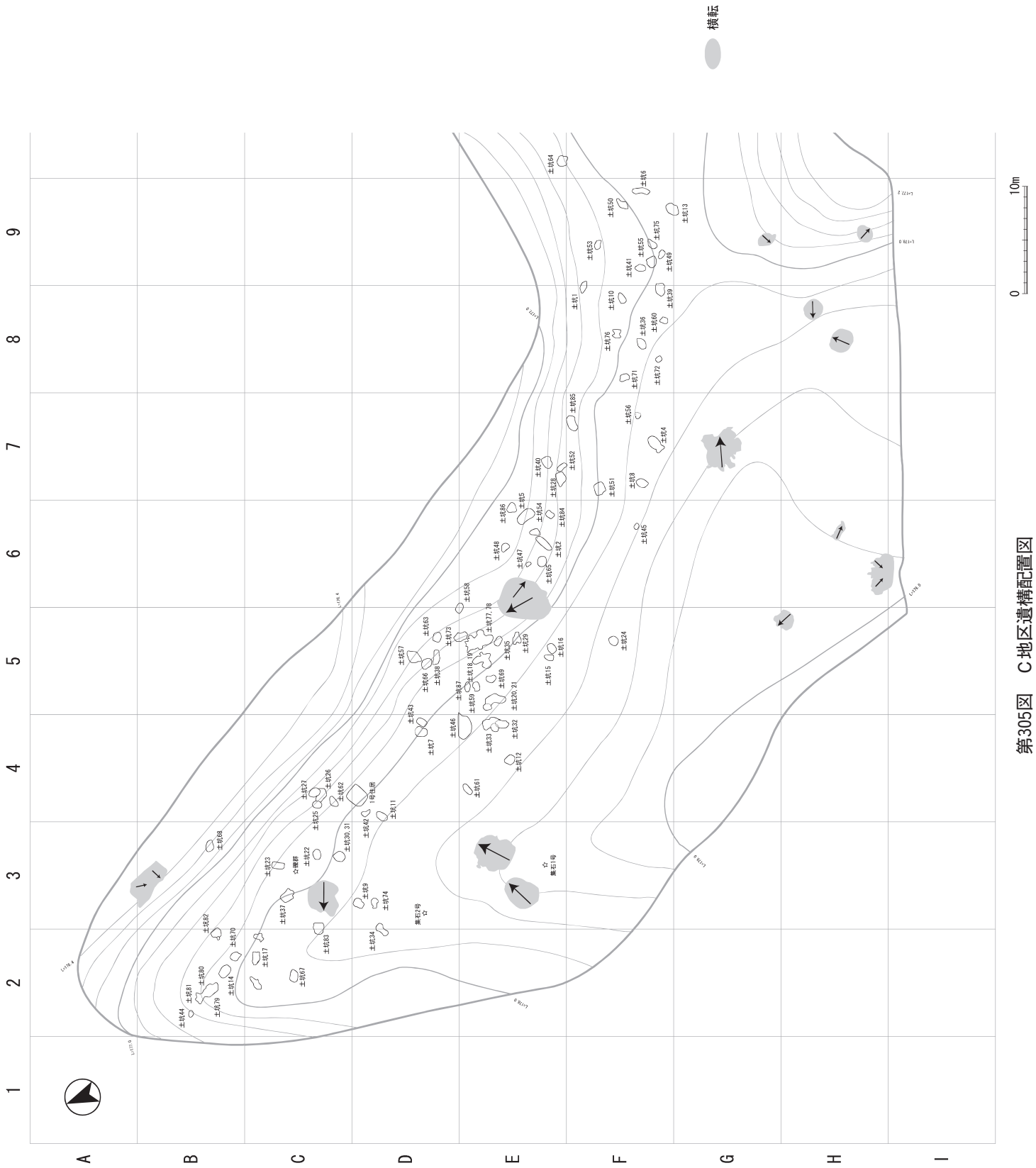
縄文時代草創期から細石刃文化の遺物は、石鏃・細石刃・石核・剥片がみられた。

C地区においては約1万点の遺物が出土している。

C地区でも縄文時代早期に多くの遺物と多彩な遺構が確認された。竪穴住居跡1軒、集石2基、土坑87基が検出された。

C地区は他の地区に比べると土器の出土量は極端に少なかったが、土坑周辺を中心として、加栗山式土器及び小牧3Aタイプの土器が集中している箇所が確認できた。

C地区でも縄文時代早期の集落形態について多くの情報が得られた。



第305図 C地区遺構配置図

(1) 竪穴住居跡

前原遺跡のC地区からは、1基の竪穴住居跡がC・D4区で検出された。C地区はB地区側から「足」形状に広がるシラス台地上にある。遺構は「足」の甲にあたる部分、すなわち東側斜面を中心に検出されているが、1号竪穴住居跡は傾斜が緩くなった平坦面で検出された。

長軸198cm、短軸164cmの方形を平面プランとする遺構であるが、残念ながら南隅を地層横転で失っている。推定床面積は2.5㎡と狭小である。これを竪穴住居跡と呼ぶべきかどうか議論の分かれるところであろうが、形状が方形であること、他の土坑と比較するとかなりの大きさをもつことなどから、ここでは竪穴住居跡として取り扱った。

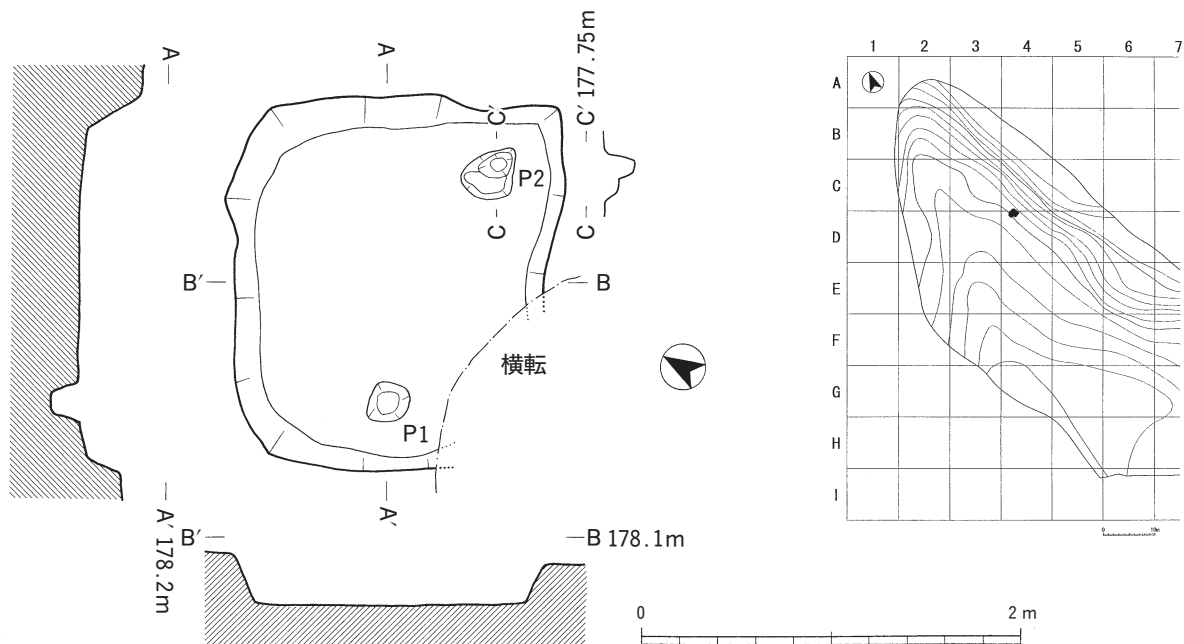
同様に床面積が3㎡に満たない例は、A地区の2号、4号竪穴住居跡がある。これらは、竪穴の周囲を柱穴状ピットが巡るタイプと捉えたもので、ピット列を含めた空間はかなりの広さをもつと考えられるものであった。本住居跡の場合は、床面に2個の柱穴状ピットが検出されたのみで、竪穴の周辺においてそのようなピットを確認することはできなかった。

床面にある2個のピットが主柱としての役割をもつものかについては不明であるが、A地区やB地区で検出された小型の竪穴住居跡の中には、2本柱の構造をもつ可能性が考えられる例がいくつかあった。例えばA地区の9号、10号、B地区の4号、8号、9号などがそうである。

本住居跡からの遺物出土はなかった。詳細な時期設定についても不明といわざるを得ない。C地区で多く出土した4類（小牧ⅢAタイプ）土器や5類（吉田Ⅱ式）土器との関連が注目される。

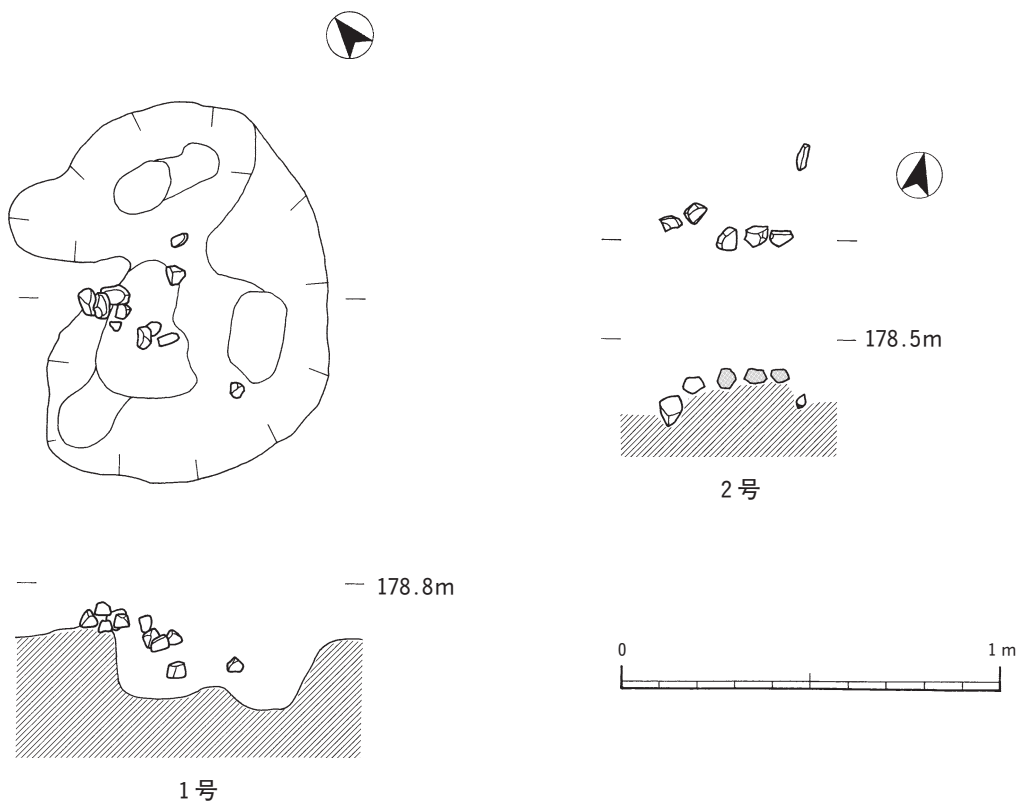
第38表 C地区検出の竪穴住居跡

遺構名	検出区	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	検出面 からの 深さ (cm)	床面積 (㎡)	炉跡	ピット	遺物 総数	挿図 番号	備 考
1号竪穴住居跡	C・D4	方形	198	164	24	(2.5)	無	2	0	306	地層横転により一部欠



第306図 1号住居跡

(2) 集石



第307図 集石 1・2号

(3) 土 坑

前原遺跡のC地区では、87基の土坑が検出された。これらの多くは西側の斜面上での検出であった。A地区やB地区と同様に、明瞭なタイプ別分類は行わないが、特徴を整理しながら概要を簡潔に紹介していきたい。

① 1～6号土坑

これらの土坑は、(隅丸)長方形の平面プランをベースとするものである。短軸÷長軸の数値がおおむね0.3～0.5を示し、一見細長い感じのする土坑である。C地区において連穴土坑は検出されていないが、これらの中には、ブリッジが崩落した土坑が含まれている可能性もある。数値が0.52と比較的高く、検出面からの深さも浅い5号を除く全てに、その可能性があると考えられる。

② 7～18号土坑, 21～24号土坑, 27～30号土坑

これらの土坑は、底面の中央あるいは壁際に小ピットを有するものである。A、B地区両方でもみられたが、C地区で多く検出された特徴的な土坑である。基本的には深い小ピットと共に、土坑本体も小ピット以上の深さをもつ場合が多い。また、小ピットが壁際にあり、斜めに掘られているタイプのものが多い。

18号は19号、21号は20号、27号は25号と26号の2基と、30号は31号とそれぞれ重複して検出された。15号も2基の土坑からなる可能性がある。

これらは、C3区やE5付近に集中域がみられるものの、西側斜面全体に広がりをもつ。

③ 19号, 20号, 25号, 26号, 31号, 32号, 48～87号土坑

これらの土坑は、平面プランが(楕)円形あるいは隅丸(長)方形、小判形を呈するもので、検出された土坑の中では、比較的小型のものである。底面はおおむねフラットである。

77号と78号、79～81号は重複して検出された。前者の場合は、3基以上が重複している可能性がある。

20号、50号、53号、54号、56号、65号、66号、72号、73号、76号などのように、土坑の断面形が袋状を呈しているものも多い。

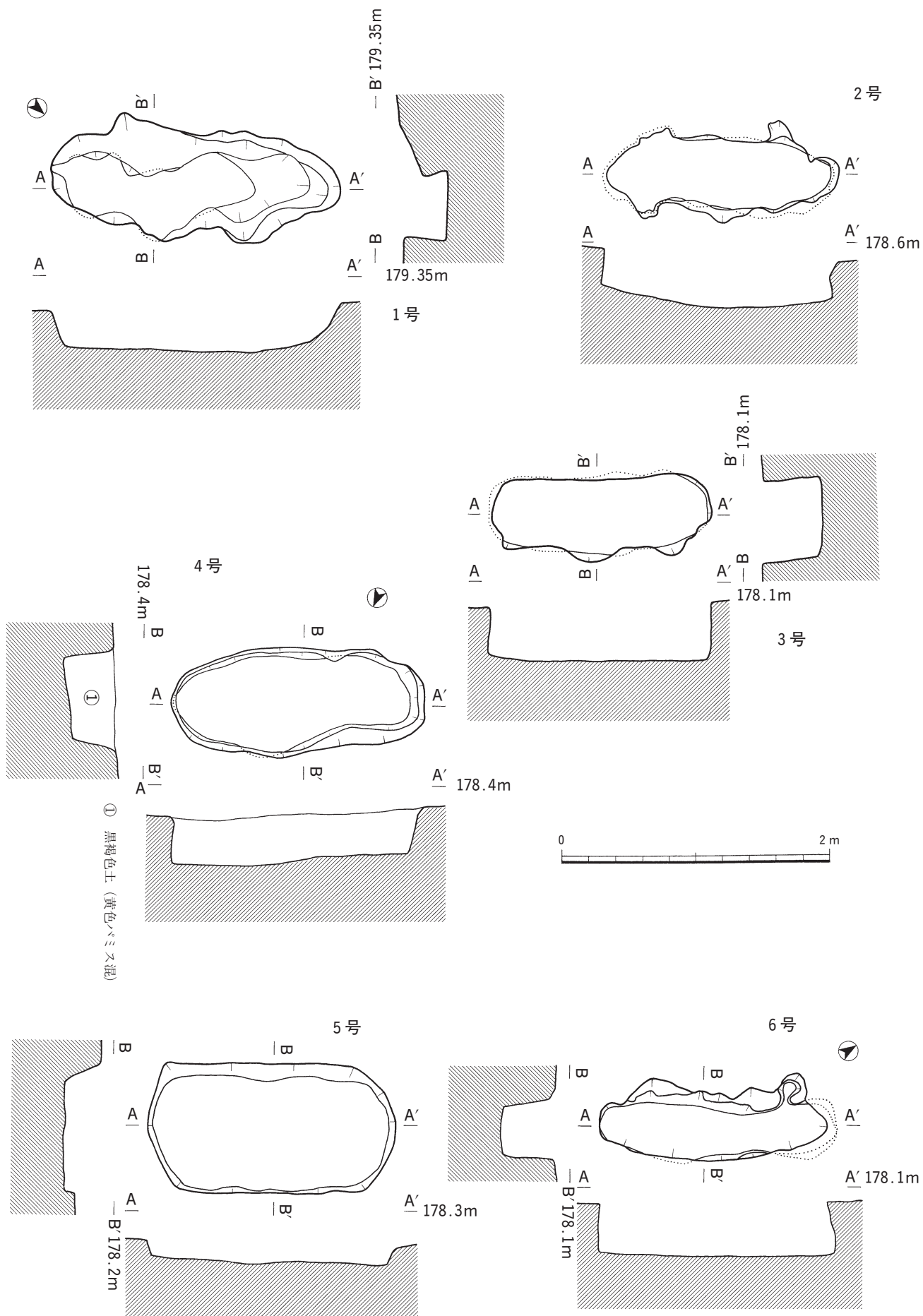
②で紹介した底面に小ピットをもつ土坑が、C地区の土坑の中で特徴的であることに変わりはないが、このグループの土坑の方が数的には多く検出されている。端正な平面形をもち、サイズも似たようなものが多い。さらに、単独で検出されたものが多いことも含め、注目される土坑であるといえよう。

④ 33～43号土坑

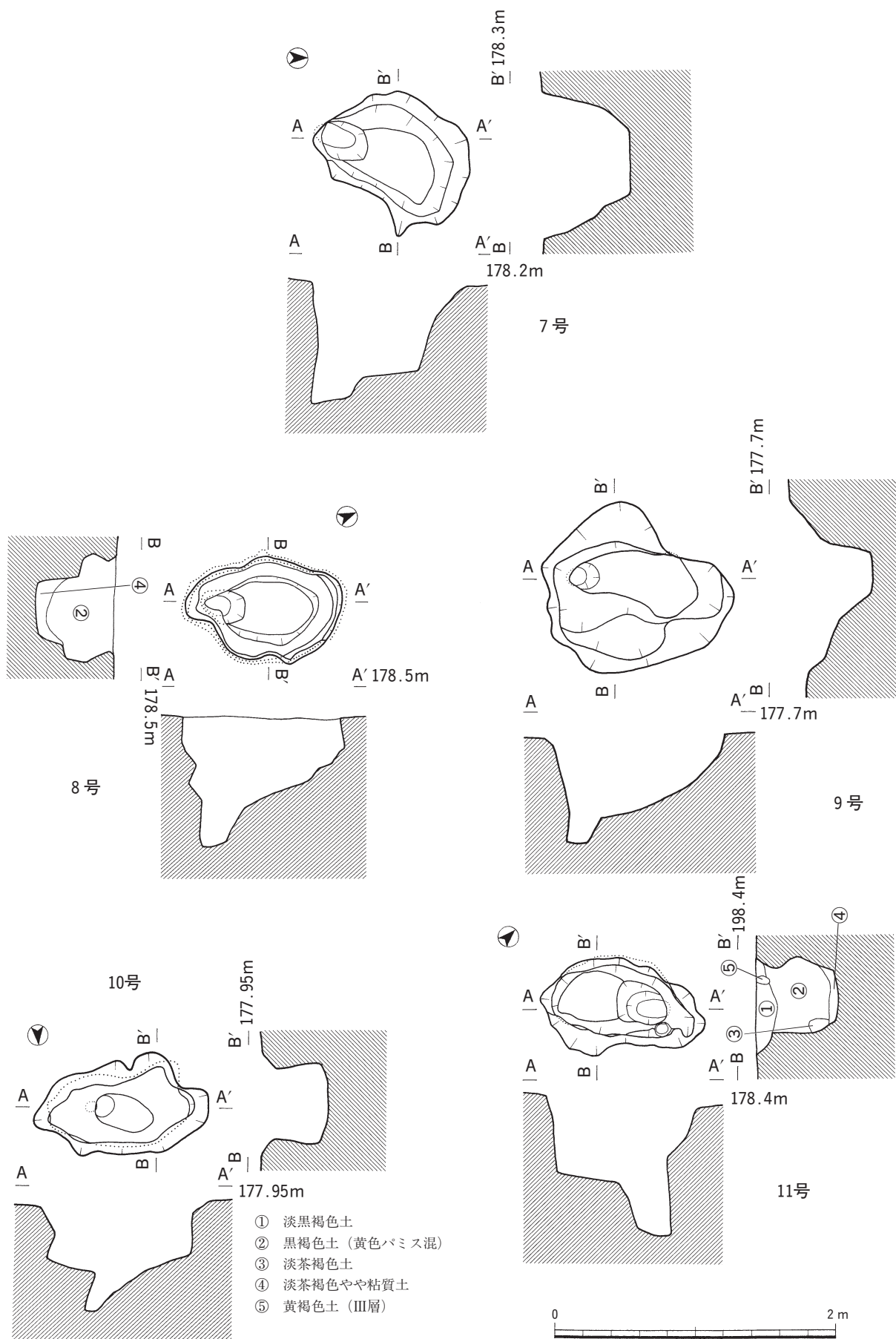
これらの土坑は、底面に段差や浅い小ピットを有するものである。33号、35号、43号などは、②で紹介した土坑と類似した形状をもつが、小ピットが浅いという違いがある。検出不足の感もあるが、関連が注目される。33号は32号と重複して検出された。34号、37号、39号、42号などは、土坑2基が重複している可能性もある。

⑤ 44～47号土坑

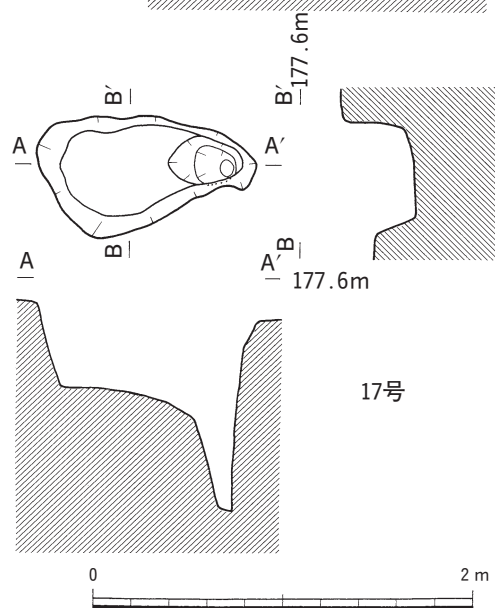
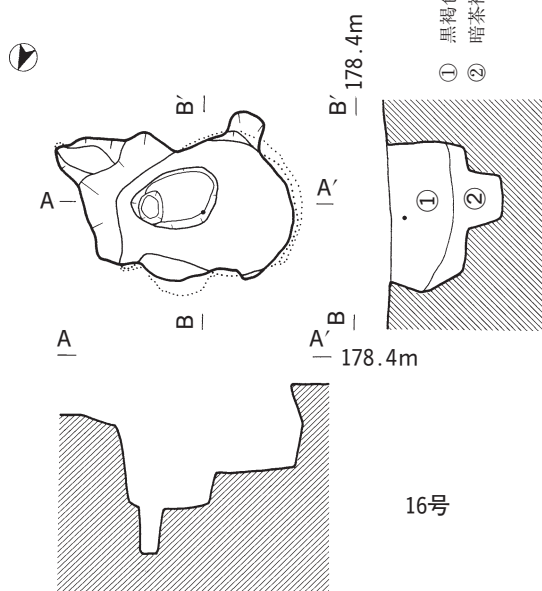
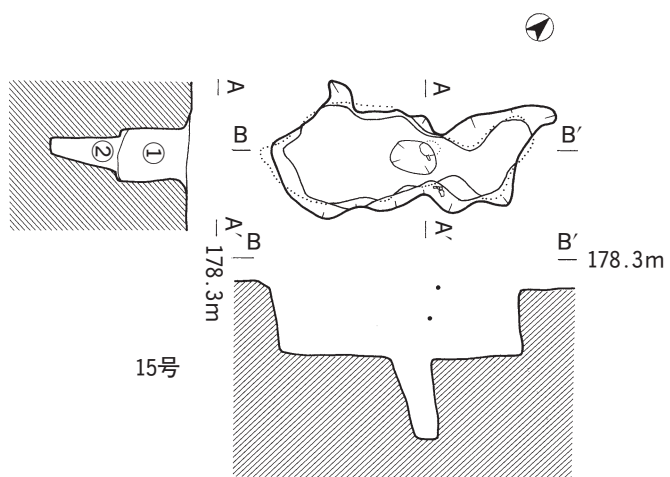
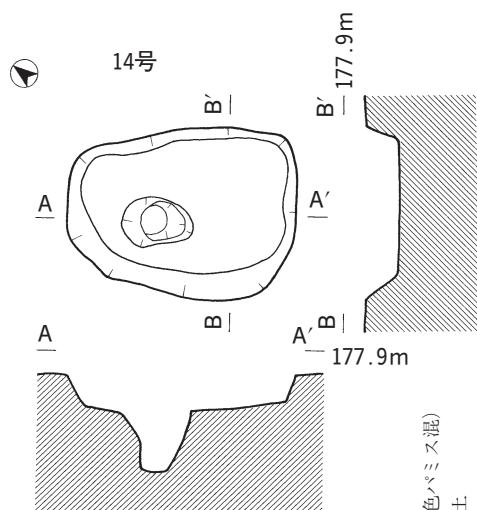
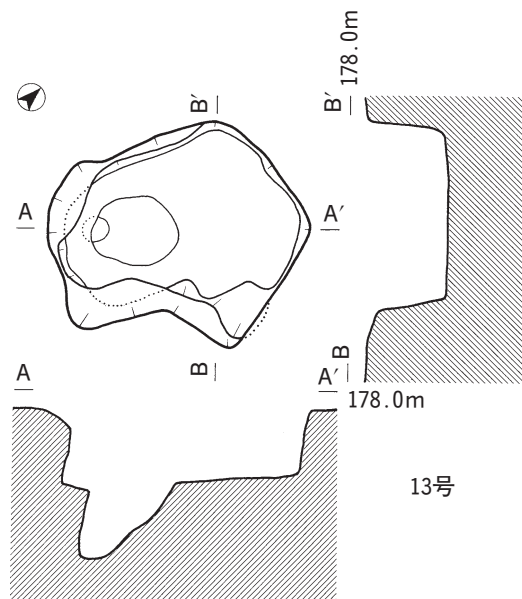
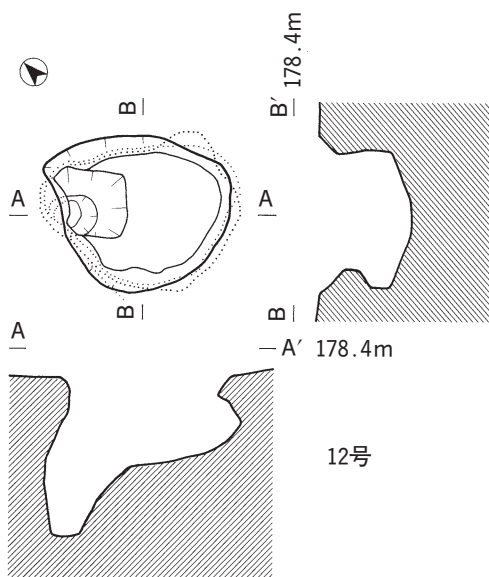
44号、45号、47号は③のグループの中でも極めて小型のものである。46号は一見竪穴住居跡状を呈するが、欠落部分が多いためここでは土坑として取り扱った。住居としての機能も当然考えられる遺構である。



第308図 土坑(1)

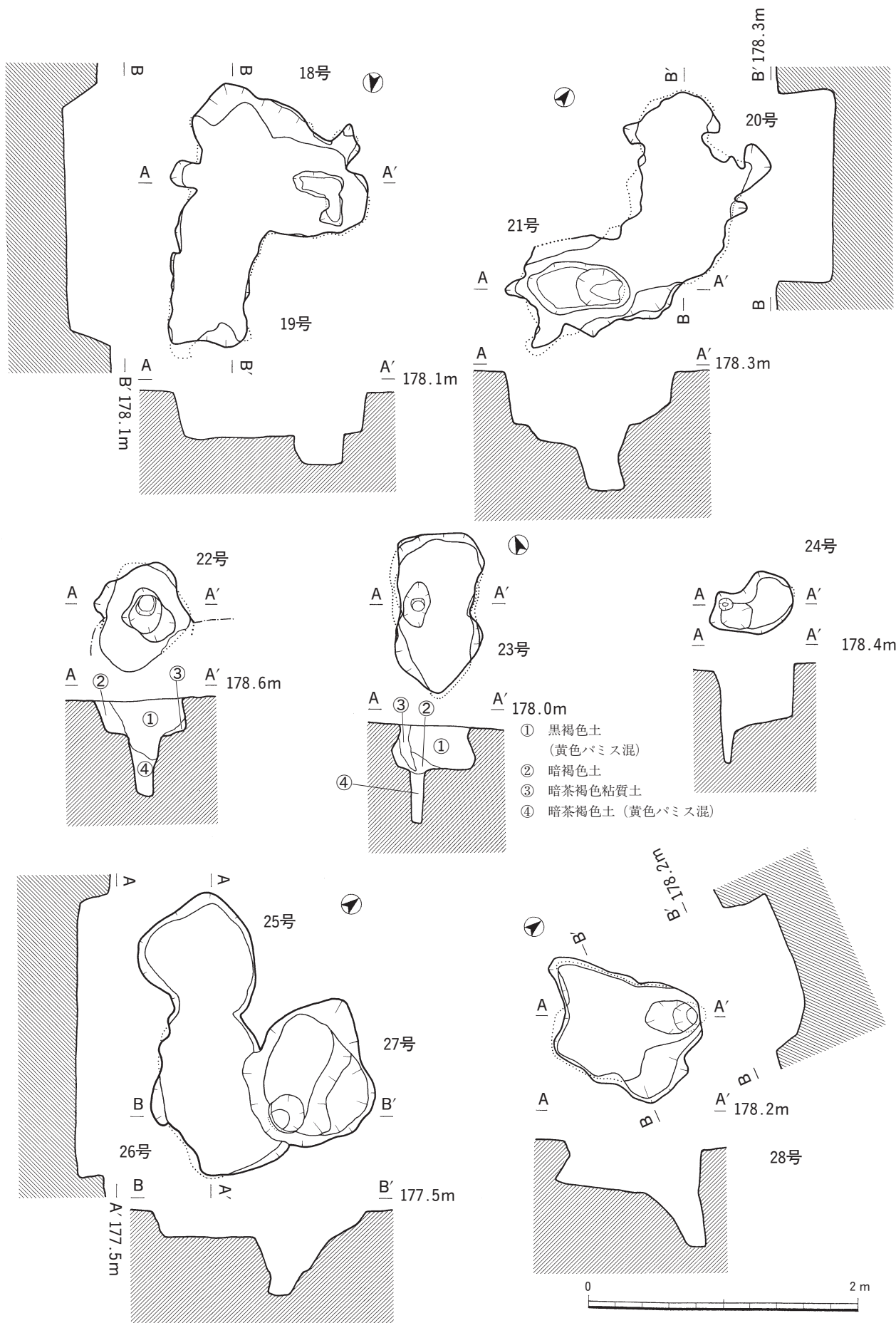


第309図 土坑(2)

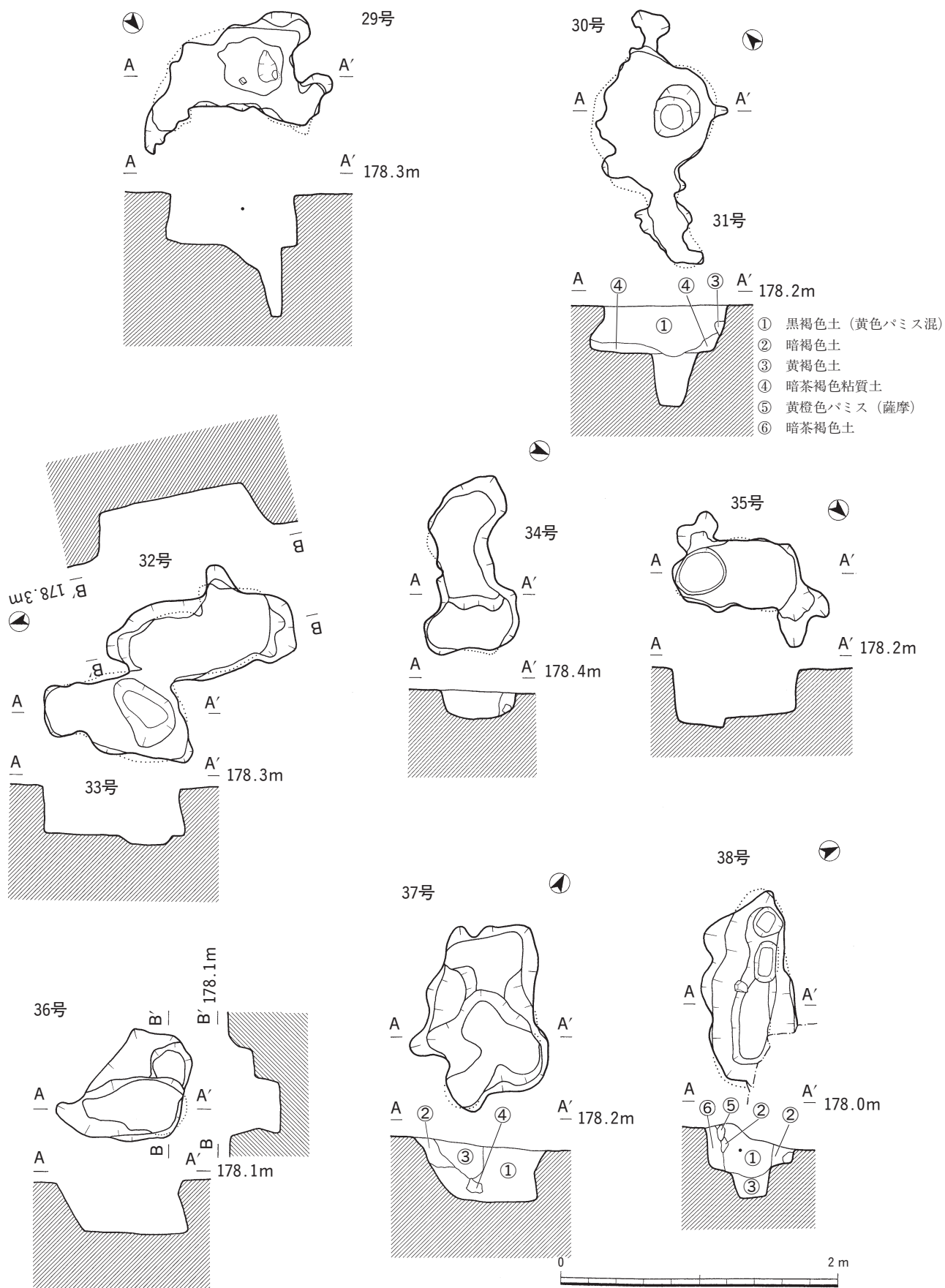


① 黒褐色土 (黄色・ミス混)
② 暗茶褐色粘質土

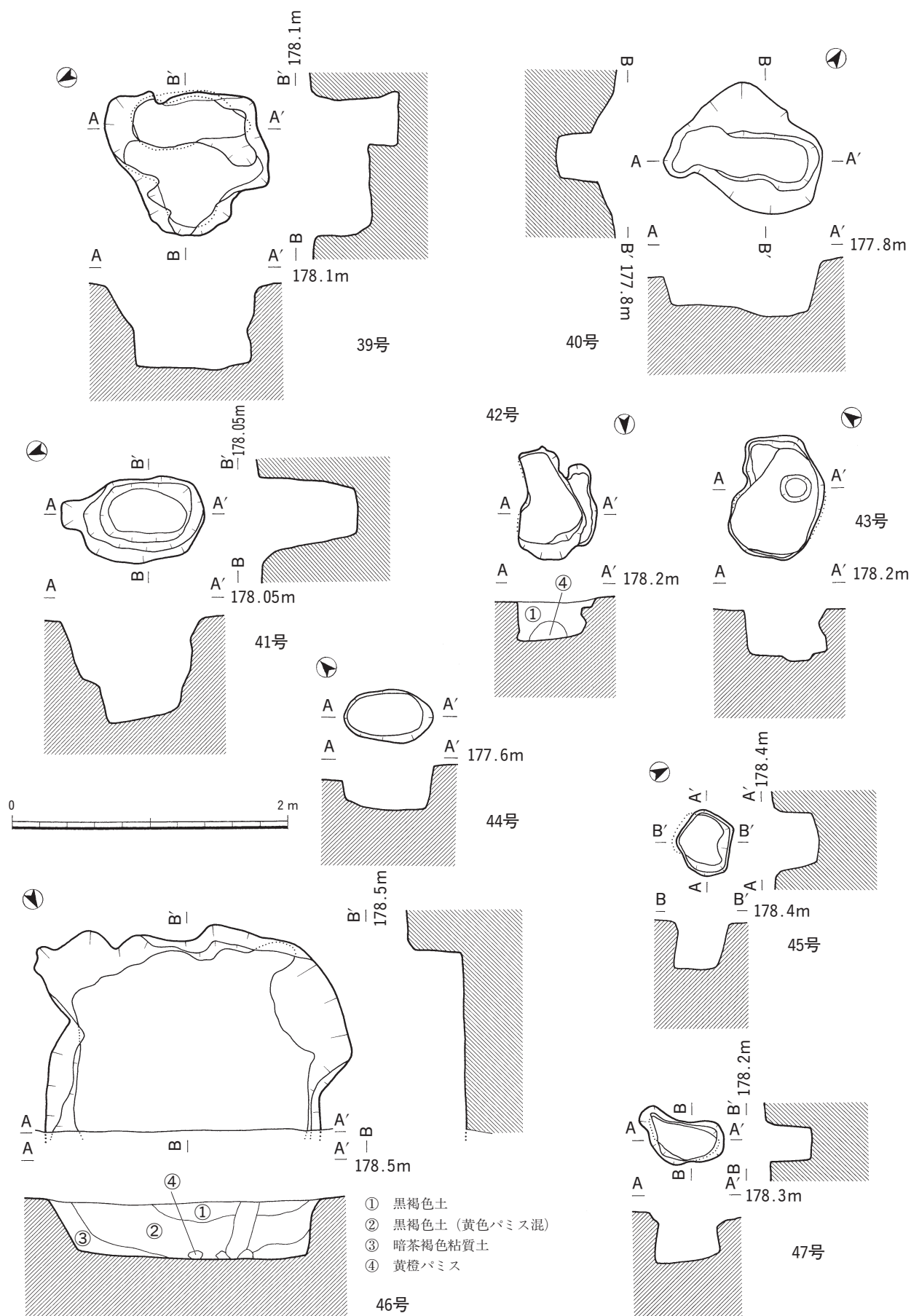
第310図 土坑(3)



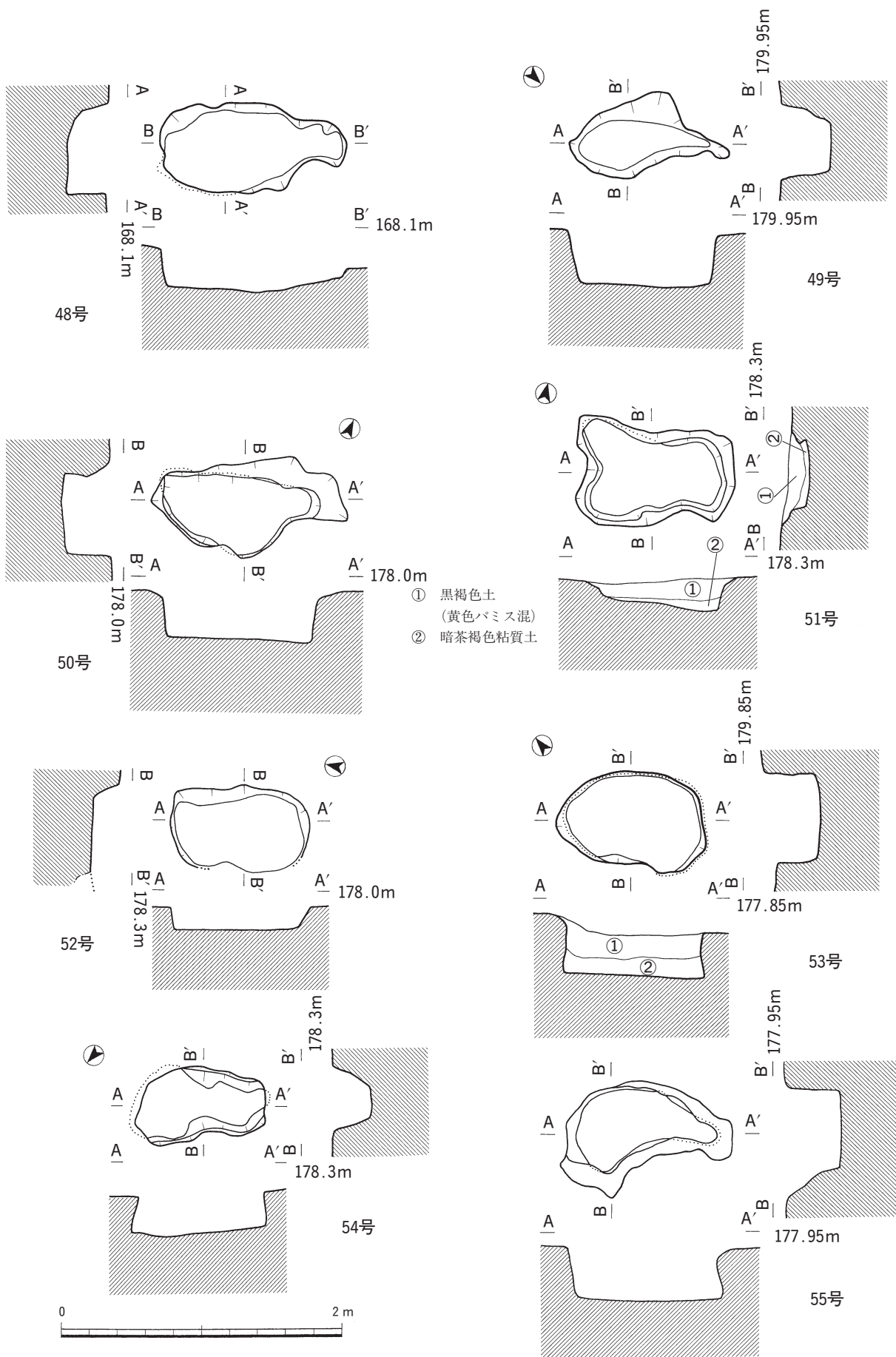
第311図 土坑(4)



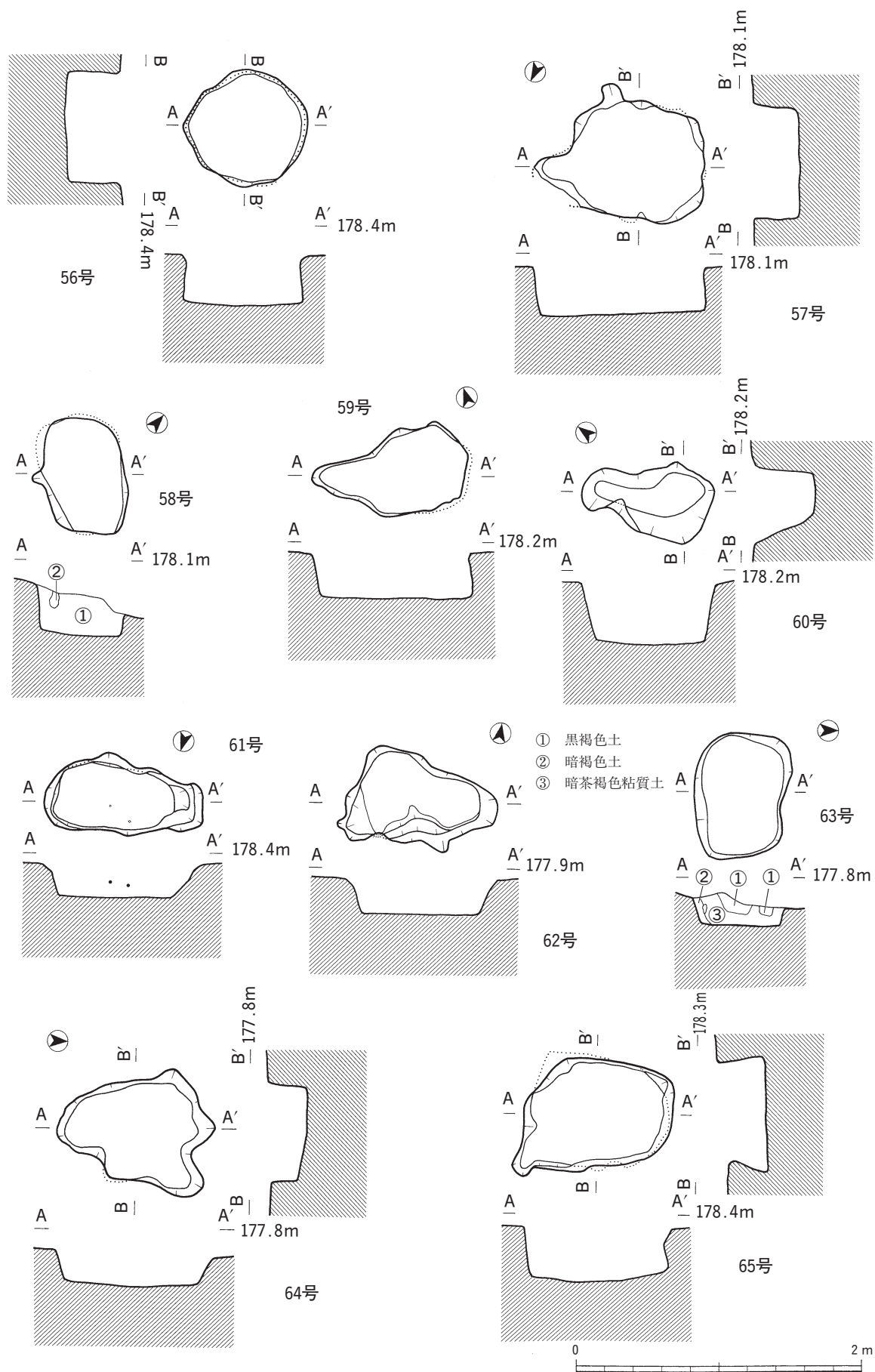
第312図 土坑(5)



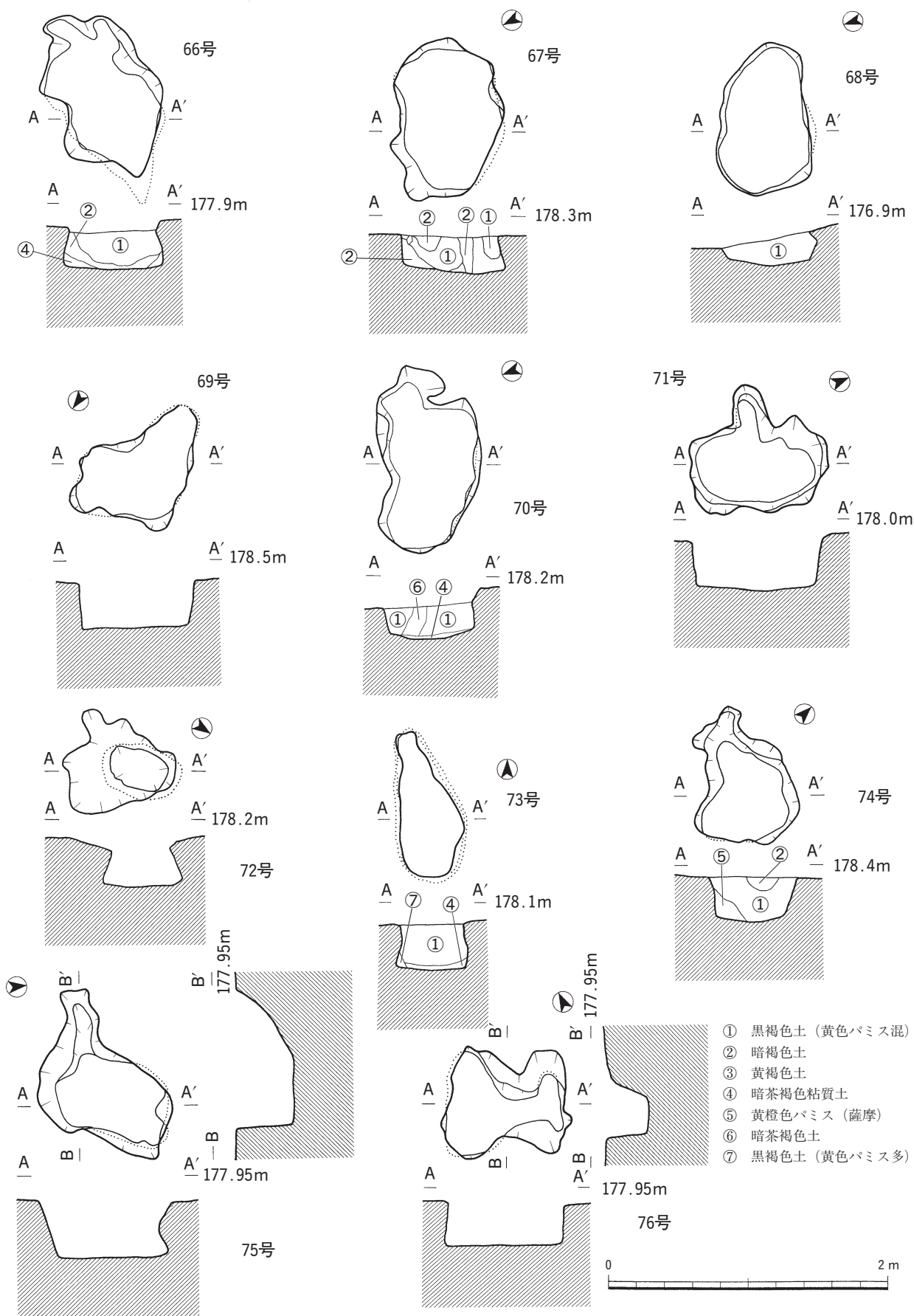
第313図 土坑(6)



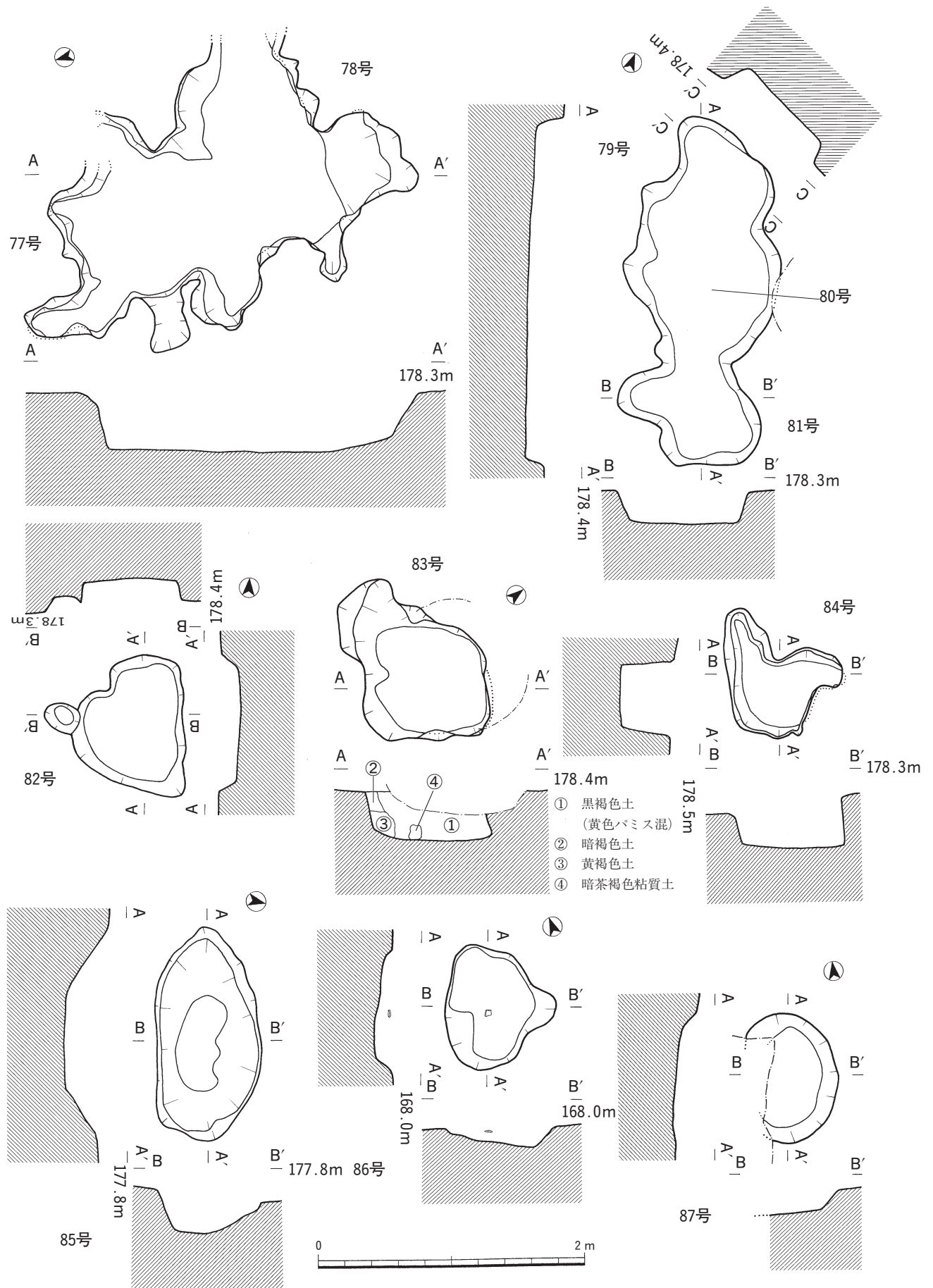
第314図 土坑(7)



第315图 土坑(8)



第316図 土坑(9)



第316図② 土坑(10)

第39表 C地区検出の土坑（1）

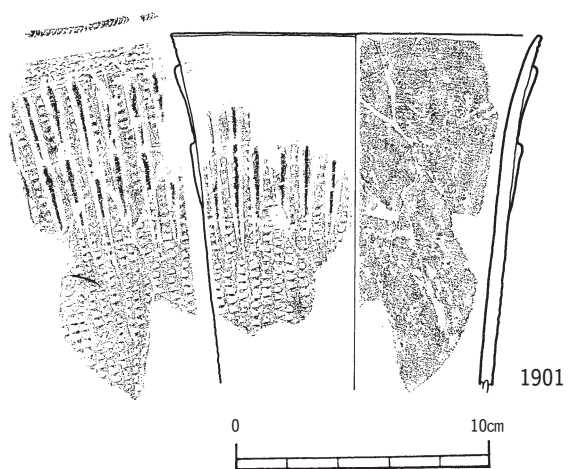
遺 構 名	検出区	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物番号	備 考	旧番号	挿図 番号
1号土坑	F8・9	VI層上面	215	84	32			101	308
2号土坑	E6	VI層上面	174	57	39			37	308
3号土坑		VI層上面	164	62	36			100 ?	308
4号土坑	F7	VI層上面	190	79	34			27	308
5号土坑	E6	VI層上面	185	97	16			42	308
6号土坑	F9	VI層上面	170	52	40			89	308
7号土坑	D4	VI層上面	118	103	60		底面に深いピットあり	48	309
8号土坑	F7	VI層上面	111	70	55		底面に深いピットあり	28	309
9号土坑	D3	VI層上面	129	122	37		底面に深いピットあり	63	309
10号土坑	F8	VI層上面	121	71	48		底面に深いピットあり	100	309
11号土坑	D4	VI層上面	106	68	56		底面に深いピットあり	49	309
12号土坑	E4	VI層上面	88	82	45		底面に深いピットあり	14	310
13号土坑	F・G9	VI層上面	138	116	37		底面に深いピットあり	88	310
14号土坑	B2	VI層上面	121	92	17		底面に深いピットあり	77	310
15号土坑	E5	VI層上面	134	41	34		底面に深いピットあり	4	310
16号土坑	E5	VI層上面	111	71	40		底面に深いピットあり	1	310
17号土坑	C2	VI層上面	114	61	24		底面に深いピットあり	65	310
18号土坑	E5	VI層上面	146	(80)	33		底面に深いピットあり，19号と重複	8	311
19号土坑	E5	VI層上面	(94)	58	24		18号と重複	8	311
20号土坑	E5	VI層上面	140	126	40		21号と重複	12	311
21号土坑	E5	VI層上面	112	72	46		底面に深いピットあり，20号と重複	12	311
22号土坑	C3	VI層上面	76	64	26		底面に深いピットあり	20	311
23号土坑	C3	VI層上面	118	52	31		底面に深いピットあり	21	311
24号土坑	F5	VI層上面	59	45	43		底面に深いピットあり	2	311
25号土坑	C4	VI層上面	90	82	22		25～27号は重複	61	311
26号土坑	C4	VI層上面	130	82	23		25～27号は重複	64	311
27号土坑	C4	VI層上面	118	(100)	20		底面に深いピットあり，25～27号は重複	62	311
28号土坑	E7	VI層上面	113	104	33		底面に深いピットあり	34	311
29号土坑	E5	VI層上面	115	61	36		底面に深いピットあり	5	312
30号土坑	C3	VI層上面	162	89	33		底面に深いピットあり，31号と重複	19	312
31号土坑	C3	VI層上面	(70)	34	30		30号と重複	19	312
32号土坑		VI層上面	138	60	32		33号と重複	13 a	312
33号土坑		VI層上面	115	52	32		底面に深いピットあり，32号と重複	13 b	312

第40表 C地区検出の土坑（2）

遺 構 名	検出区	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物番号	備 考	旧番号	挿図 番号
34号土坑	D2・3	VI層上面	123	54	20			17	312
35号土坑	E5	VI層上面	92	47	34			6	312
36号土坑	F8	VI層上面	90	74	39			103	312
37号土坑	C3	VI層上面	125	97	40			23	312
38号土坑	D5	VI層上面	130	65	32		底面に深いピットあり	46	312
39号土坑	F8, 9	VI層上面	111	103	40			99	313
40号土坑	E7	VI層上面	116	85	35			32	313
41号土坑	F9	VI層上面	104	61	70			98	313
42号土坑	D4	VI層上面	78	55	28			50	313
43号土坑	D4	VI層上面	89	59	33		底面に浅いピットあり	47	313
44号土坑	B2	VI層上面	65	36	27			78	313
45号土坑	F6	VI層上面	48	40	32			29	313
46号土坑	E4	VI層上面	199	137	40		竪穴住居跡の可能性あり、一部欠	16	313
47号土坑	E6	VI層上面	54	28	32			39	313
48号土坑	E6	VI層上面	132	65	21			40	314
49号土坑	F9	VI層上面	109	54	37			96	314
50号土坑	F9	VI層上面	135	68	35			90	314
51号土坑	F7	VI層上面	105	66	14			30	314
52号土坑	E7	VI層上面	99	60	16			33	314
53号土坑	F9	VI層上面	104	65	28			94	314
54号土坑	E6	VI層上面	88	47	25			36	314
55号土坑	F9	VI層上面	118	78	35			97	314
56号土坑	F7	VI層上面	86	82	36			26	315
57号土坑	D5	VI層上面	121	81	30			53	315
58号土坑	D・E5	VI層上面	80	62	26			44	315
59号土坑	E5	VI層上面	107	58	32			10	315
60号土坑	F8	VI層上面	93	54	43			102	315
61号土坑	E4	VI層上面	110	54	23			15	315
62号土坑	C4	VI層上面	107	63	22			60	315
63号土坑	D5	VI層上面	87	64	14			45	315
64号土坑	E・F10	VI層上面	110	70	26			91	315
65号土坑	E6	VI層上面	104	75	37			38	315
66号土坑	D5	VI層上面	105	65	25			52	316

第41表 C地区検出の土坑（3）

遺 構 名	検出区	検出面	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物番号	備 考	旧番号	挿図 番号
67号土坑	C2	VI層上面	112	64	24			25	316
68号土坑	B3	VI層上面	106	63	18			24	316
69号土坑	E5	VI層上面	80	62	30			9	316
70号土坑	B2	VI層上面	113	62	26			76	316
71号土坑	F8	VI層上面	96	92	35			107	316
72号土坑	F8	VI層上面	77	61	28			108	316
73号土坑	D・E5	VI層上面	100	45	32			43	316
74号土坑	D3	VI層上面	95	65	32			18	316
75号土坑	F9	VI層上面	100	95	40			95	316
76号土坑	F8	VI層上面	82	51	30			104	316
77号土坑	E5	VI層上面	142	-100	45		78号と重複	7	317
78号土坑	E5	VI層上面	162	-120	45		77号と重複	7	317
79号土坑	B2	VI層上面	98	-50	17		79～81号は重複	80	317
80号土坑	B2	VI層上面	146	108	18		79～81号は重複	81	317
81号土坑	B2	VI層上面	110	80	25		79～81号は重複	84	317
82号土坑	B2・3	VI層上面	103	102	19			85	317
83号土坑	C2・3	VI層上面	91	87	33		一部欠	22	317
84号土坑	E6	VI層上面	85	58	31			35	317
85号土坑	F7	VI層上面	160	77	28			31	317
86号土坑	E6	VI層上面	91	84	11			41	317
87号土坑	E5	VI層上面	98	53	11		一部欠	11	317



第317図 遺構内遺物

3 遺構内出土遺物

遺構内遺物は、土坑24の1点を図化した。

1901は、外反する円筒の口縁から胴部にかけての5類の土器片である。

文様は、ナデ調整の後、口縁部に横位の貝殻刺突文が3条めぐる。胴部は、縦位の貝殻押圧文を密に施し、口縁部直下に楔形貼付文を2段貼り付ける。楔の長径は3.4cm程度で、ナデによって貼り付けられ、上部に横位の沈線を施している。口唇部は平坦で、斜位の刻みを付する。器壁は薄い。

内面は、ケズリを施した後、ナデで調整される。また、外面には煤が付着している。

2 土器

① 1 類

出土数自体は少ないものの、胴部まで復元できるほぼ完形の土器も 1 点確認できる。

1 は、口径 17.5cm のほぼ完形の復元土器である。器形は、口縁部が直行し、直線的な胴部をもつ。文様は、口唇部から口縁部にかけて縦位の刻みを施す。胴部には、横位もしくは斜位の貝殻条痕文を全面に施す。内面に関しても同様に斜位の貝殻条痕文による調整が施すが、口縁部付近では横位のケズリを施す。

2 ～ 5 は、口縁部片である。上部に肋 2 ～ 3 条の貝殻腹縁押圧文を縦位に施す。2 は、口径 20.9 cm を測る。口唇部から口縁部上部にかけて押圧文が凹点状に施され、内面は斜位の貝殻条痕文で調整される。3 は、全体に浅い貝殻条痕文を横位に施す。4 は、内面はケズリが施され、口縁部のみナデで調整される。いずれも焼成は粗い。

② 2 類

他の地区と比較して極端に出土数が少ない類で、本地区では角筒形の胴部片が数点出土したのみである。

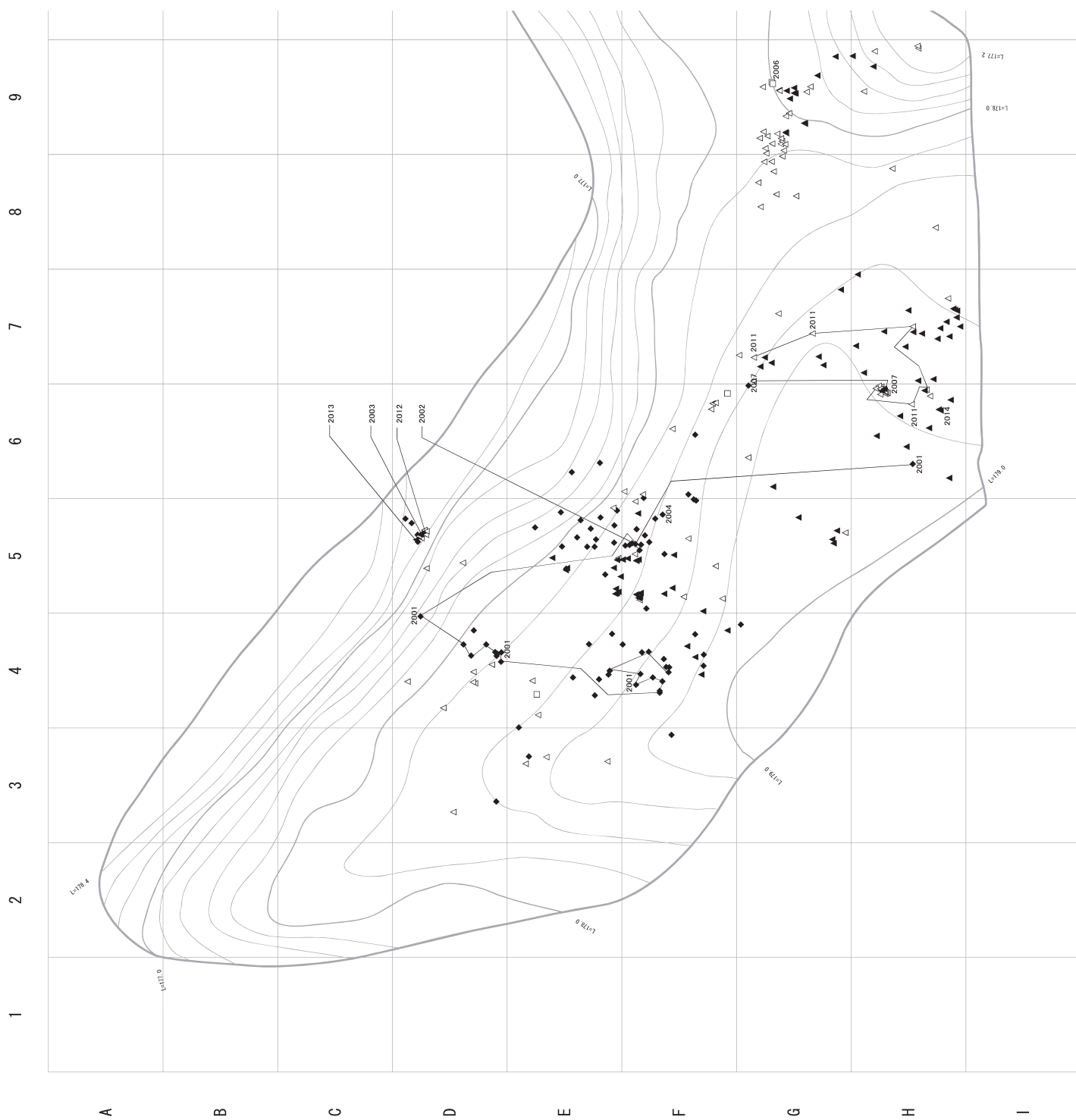
6 は、角筒形の胴部片である。斜位の貝殻条痕文の上に、縦位 2 本程度の流水文を施す。内面にはケズリで調整される。また、外面には炭化物の付着が確認できる。

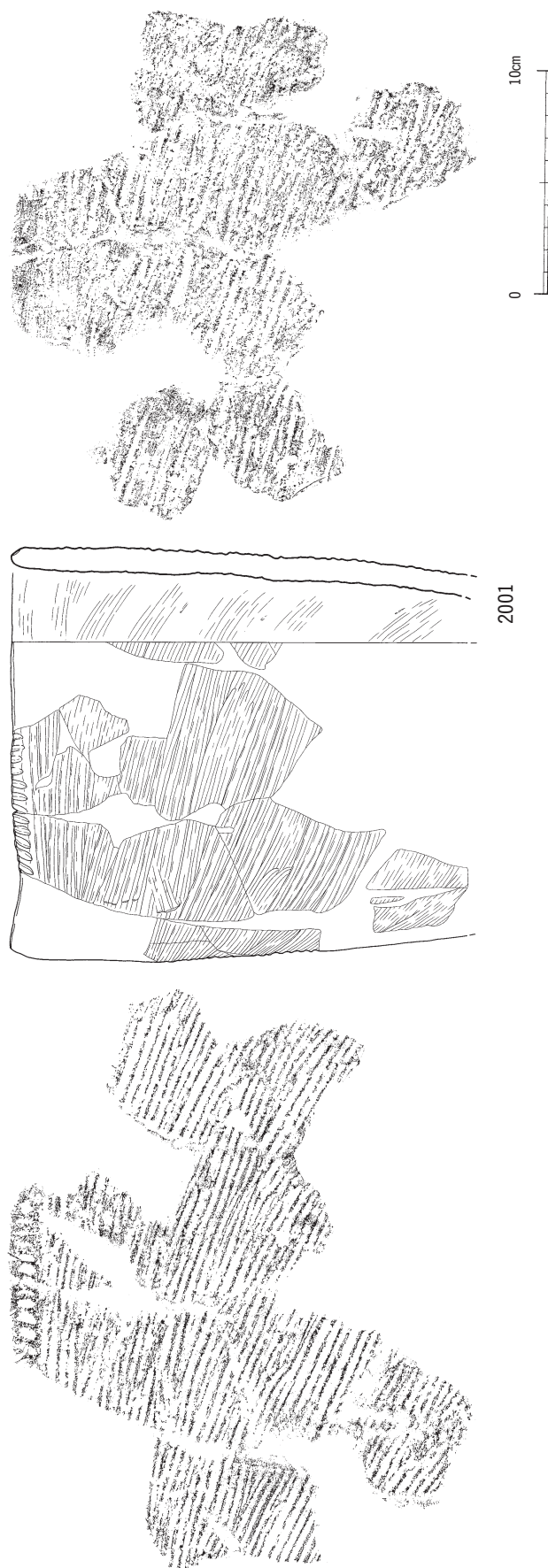
③ 3 類

出土数はさほど多くはないが、円筒形と角筒形の 2 タイプが確認できた。文様は、口唇部に刻みを施し、口縁部に 3 ～ 4 条の横位貝殻刺突文がめぐるものが多い。

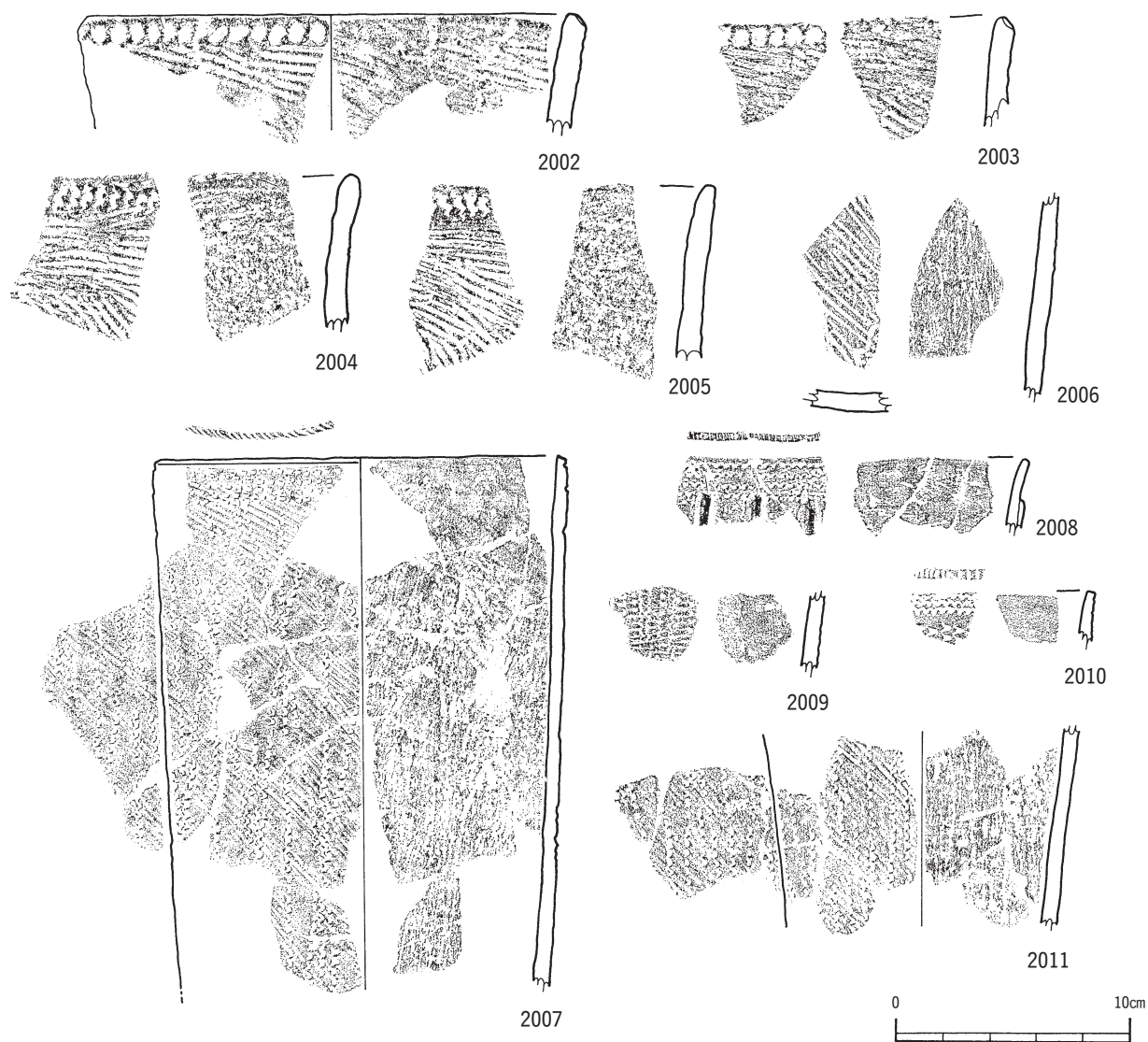
7 ～ 11 は、円筒形土器の一群である。

7 は、口径 17.6cm の口縁部から胴部までの破片である。斜位の貝殻条痕文の上に縦位の貝殻刺突文を施し、斜位の貝殻刺突文を X 字状に重ねる。内面は口縁部のみナデで調整される。8 は、連点状の刺突文を縦位もしくは斜位に施し、口縁部直下には、楔形貼付文をナデによって貼り付ける。9 は、全体的に摩耗しており、施文ははっきりしない。10 は、縦位の貝殻押圧文を施す。11 は、7 と同様の文様を施すものと思われる。

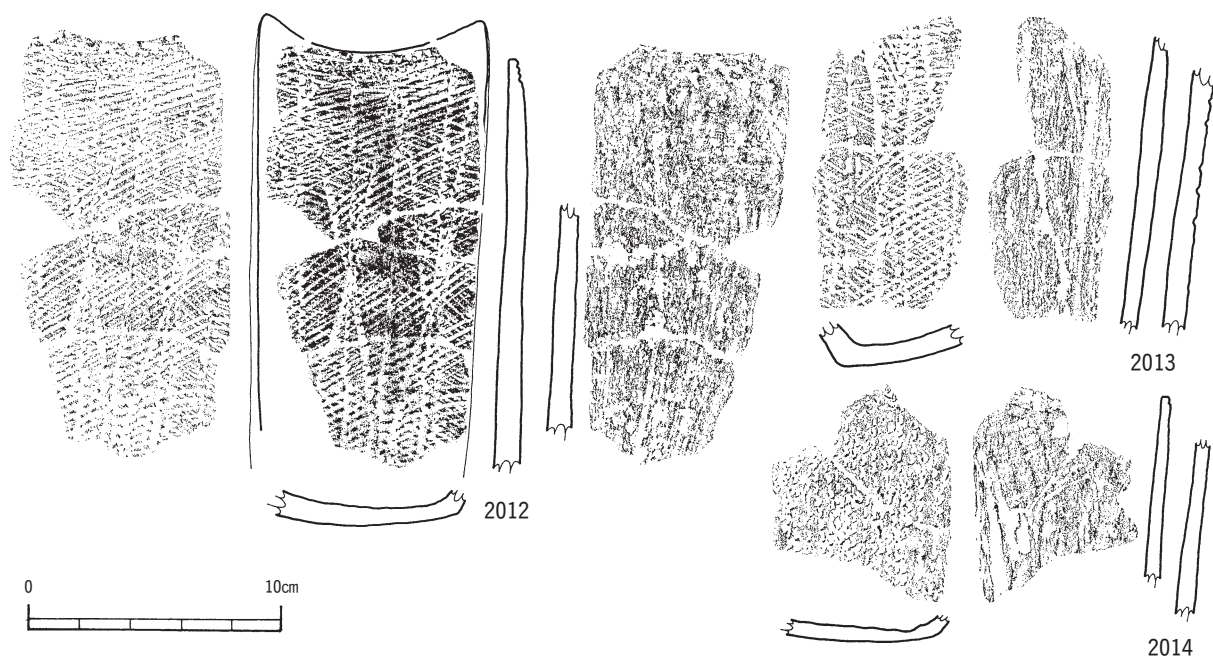




第319図 1類土器



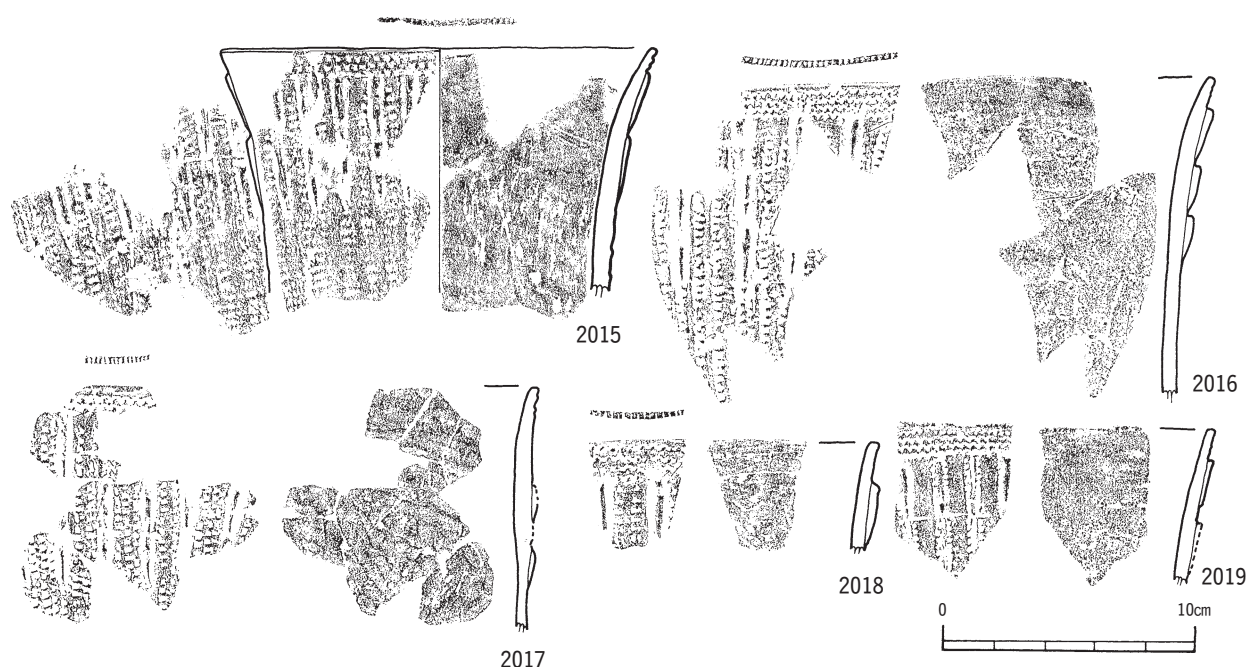
第320図 1, 2, 3類土器



第321図 3類土器

2012～2014は、角筒形土器の一群である。

2012, 2013は同一個体である。器形は、口縁部がわずかに内傾し、口径は8.7cmを測る。文様は、斜位の貝殻条痕文を左上がりに施した後、右上がりのものを重ねる。胴部には、縦位の貝殻刺突文を面に対して4条施し、斜位の貝殻刺突文をX字状に重ねるが、中心施文はずれている。2014は、丁寧なナデで調整した後、胴部に斜位もしくは縦位の貝殻刺突文を密に施す。斜位の貝殻刺突文はX字状を呈するようにも見えるが、はっきりしない。



第323図 4類土器(1)

④ 4類

大きく外反する完形復元土器1点と胴部まで復元できるほぼ完形の復元土器を1点含む。

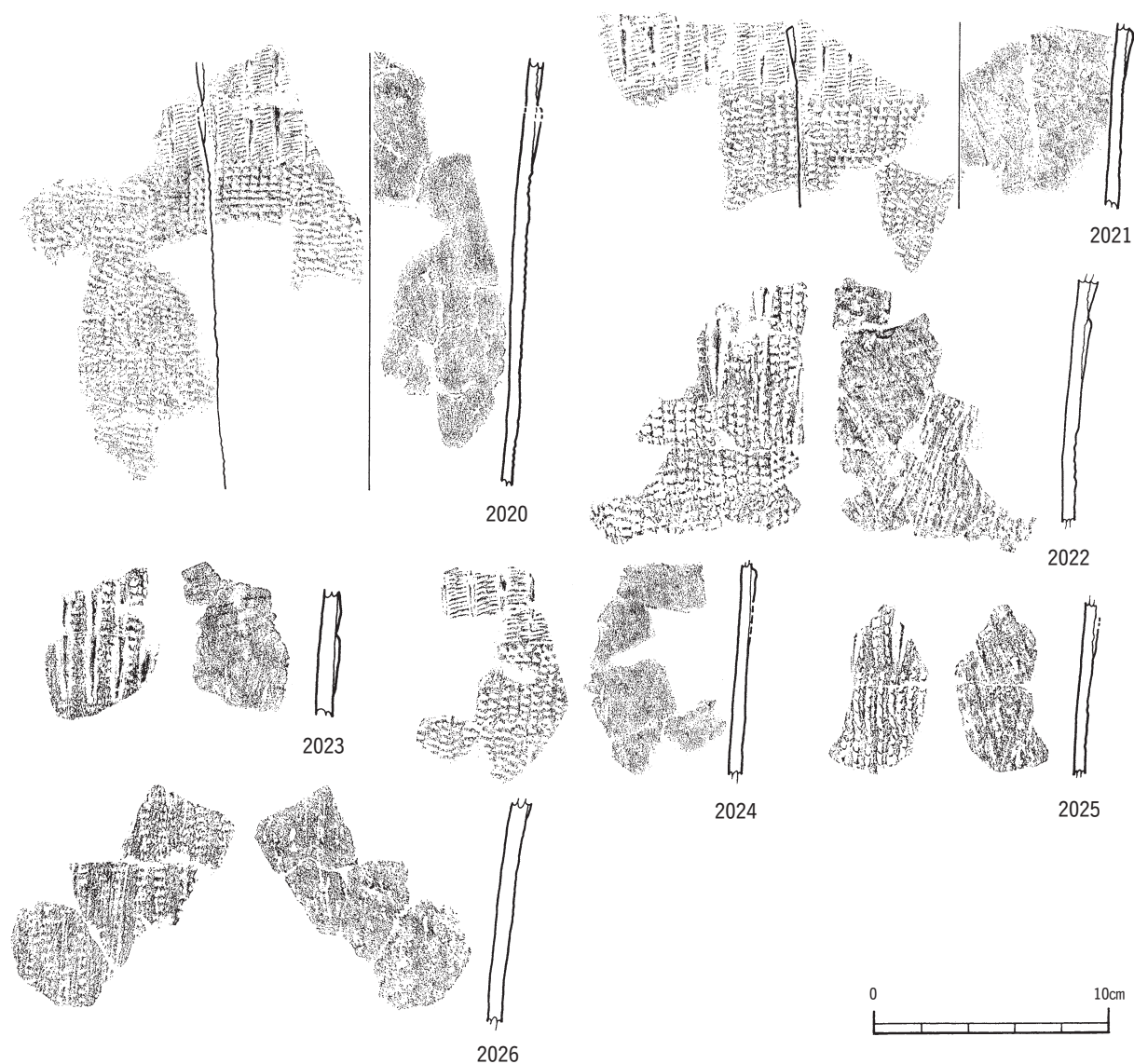
2015～2016は、口縁部直下に楔形貼付文を貼り付ける一群である。

2015, 2023, 2026は、同一個体の可能性がある。口径は17.4cmで、口縁部直下に縦に長い楔形貼付文が2段貼り付けられる。貼付文はナデで貼り付けられ、上部には横位の刻みを付する。2016は、口縁部直下に楔形貼付文を3段貼り付け、貼付文の左右に刺突を施す。2017～2019は、いずれも口縁部片である。口縁部直下にナデによって楔形貼付文を貼り付けるが、2017では3段、2018では2段を貼り付ける。2019では3段貼り付けるが、楔の左右には刺突、上下には明瞭な刻みを施す。

2020, 2021, 2024は、同一個体と思われる。口縁部直下に楔形貼付文を2段貼り付け、左右に7mm程度の長く鋭い刻みを横位に施し、その下位には縦位の貝殻刺突文を密に施している。いずれも貝殻刺突文は、貝殻押圧文に近い形状を呈する。

口縁部直下に楔形貼付文を貼り付けない一群は、2点の完形土器が確認できたのみである。しかし、胴部片または底部片にも含まれている可能性はある。

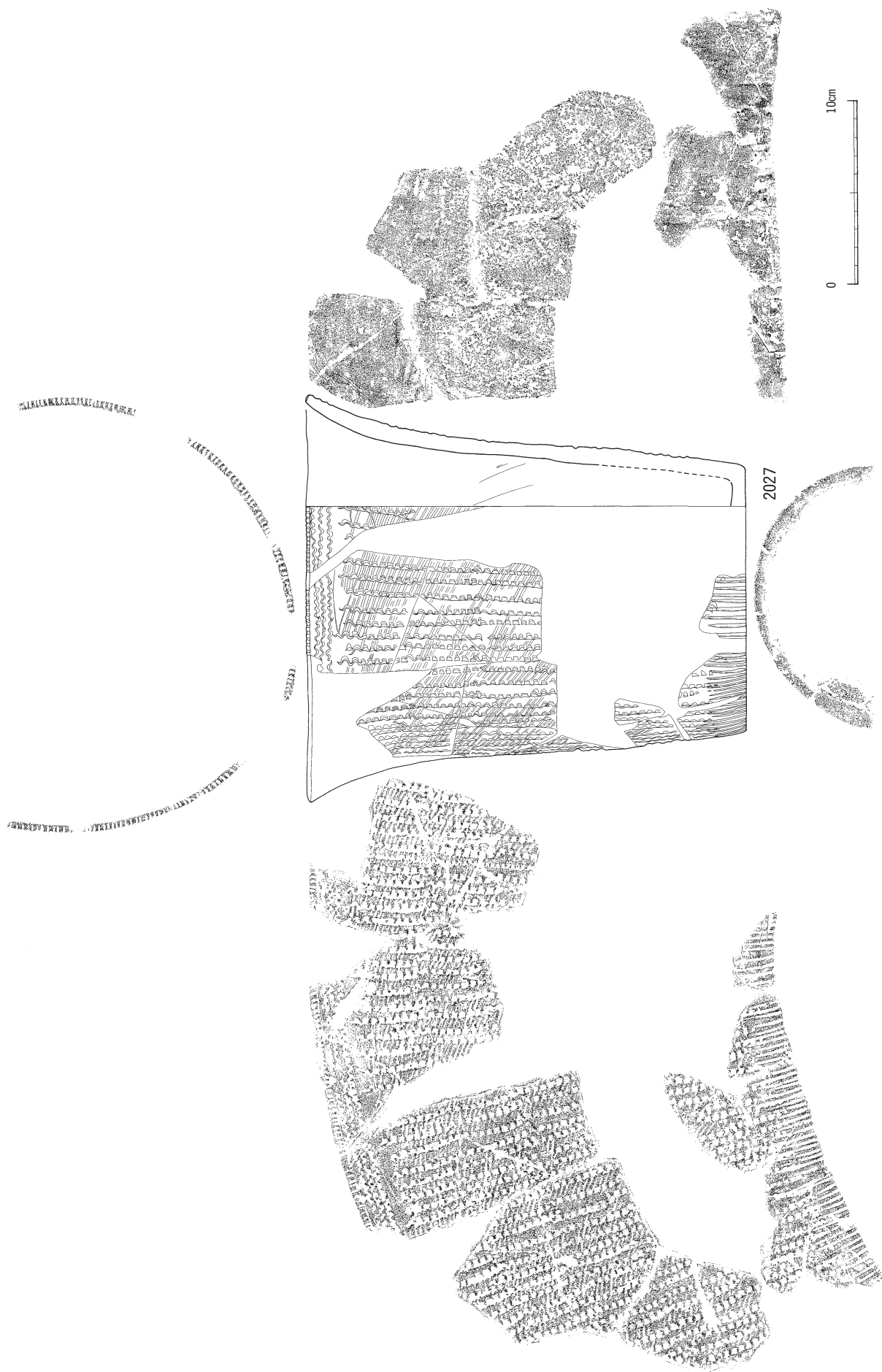
2027は、器高23.9cm、口径23.0cm、底径14.1cmの完形復元土器である。口縁部が外反する器形を呈する。文様は、口縁部に横位貝殻刺突文を3条施し、胴部は斜位の貝殻条痕文の上に方形に近い縦位の貝殻刺突文を重ねる。特筆すべきは、方形の貝殻刺突文の中であって1箇所だけ肋の小さな貝殻を用いた刺突文が確認されている点である。胴部の残存率とも関連するが、この施文が対であるのかあるいは施文の分割などを意図したものであるのかなどに関しては確認することができな



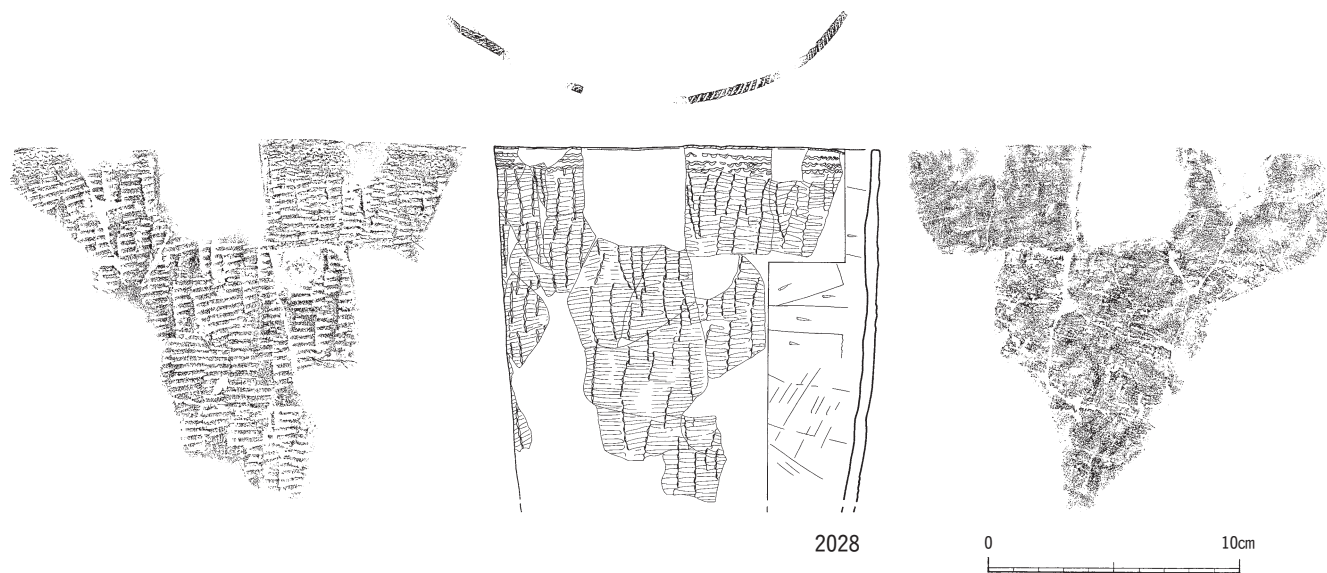
第324図 4類土器(2)

かった。内面は、丁寧なナデを施している。

2028の器形は、口径15.3cmのほぼ完形の復元土器である。口縁部が直交し直線的な胴部をもつ。文様は、口縁部に横位の貝殻刺突文を3条めぐらせ、口唇部には刻みが浅く入る。胴部は、貝殻押圧文が反時計回りに下から上へ施されている。器壁は薄い。器面調整は、内面がケズリで口縁部付近ではその後にナデを施している。



第325図 4類土器(3)



第326図 4類土器(4)

2029～2033は、楔形貼付文より下位の胴部片もしくは底部片である。

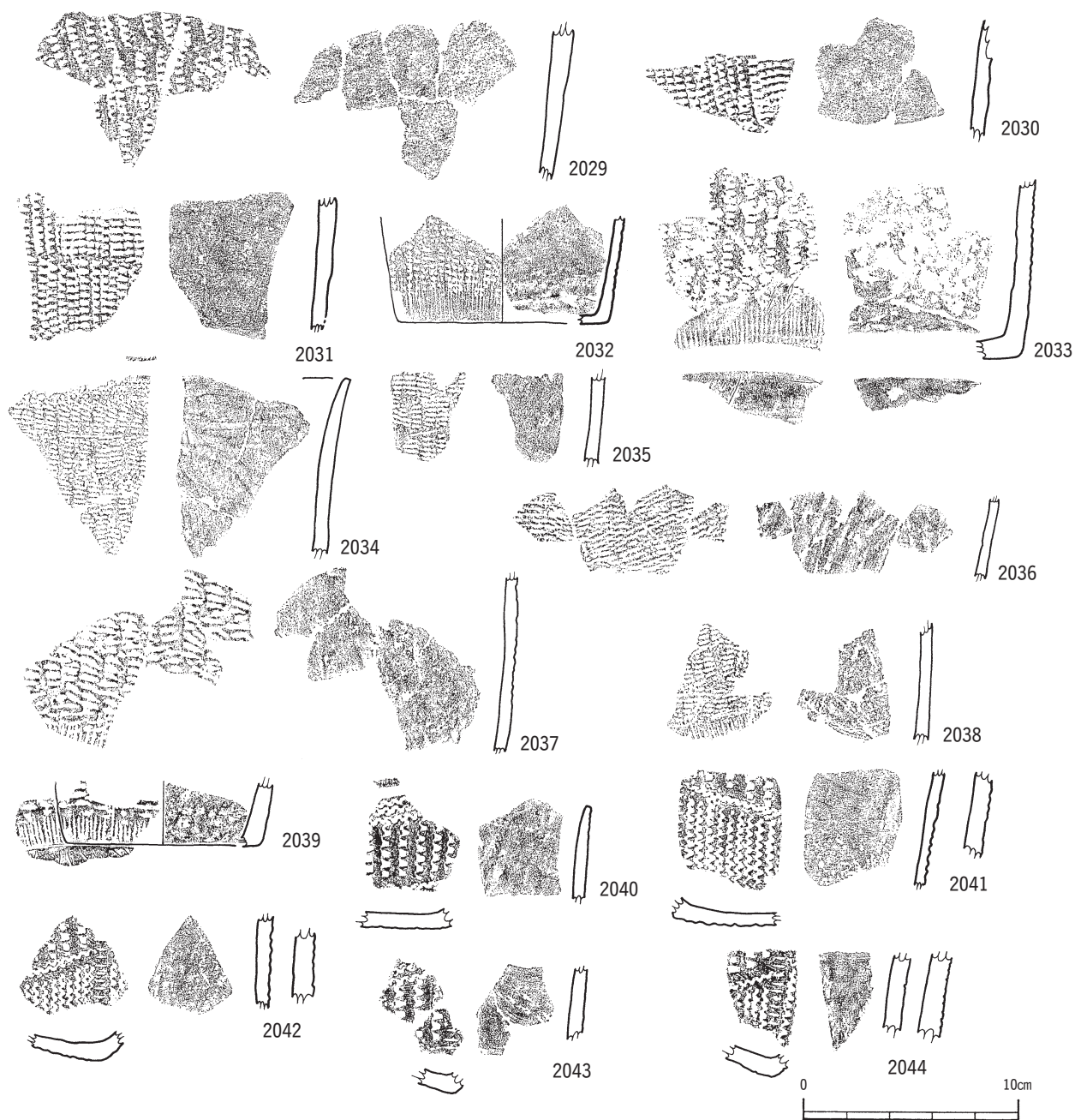
2029, 2030は、方形状の縦位貝殻刺突文をやや間隔を開けて施している。2031は、縦位の貝殻刺突文を施すが、施文の際に横位を意識しているように見える。2032は、胴部の立ち上がり部分に、浅い縦位の沈線を貝殻刺突文へ重ねて施す。2033は、2032と逆の順序で文様を施す。内面はケズリを施した後、丁寧なナデで調整されるが、大部分が剥落している。いずれも刺突文は押圧気味に施されている。

2034～2039は、貝殻の背面を利用した横位の貝殻押圧文を施している一群である。

2034は、口縁部に横位の貝殻刺突文が4条めぐる。2036は文様の向きがやや乱れる。2037, 2038は、胴部の立ち上がり部分に近いため、下部に縦位もしくは斜位の刻みが確認できる。2039は、底部もわずかながら残存しており、底径は9.0cmを測る。胴部の立ち上がり部分には縦位の刻みを施し、底部の内外面共に丁寧なナデで調整される。

2040～2044は、4類の施文の特徴がありながら、波状口縁を有する一群である。本遺跡では、わずかに5点出土したのみである。

2040は、口縁部に横位の貝殻刺突文が3条めぐる、肋6条の縦位の貝殻刺突文を1段施す。さらにその下位には、横位の貝殻刺突文が1条めぐる。2043も同様の文様を施すが、貝殻刺突文は方形状に施され、角部に横位の刻みが付される。2041～2043は、口縁部に貝殻押圧文を縦位に施し、直下に横位の貝殻刺突文が1条めぐる。さらにその下位に縦位の貝殻刺突文を密に施す。角部には、横位の刻みを付する。内面はミガキで調整される。



第327図 4類土器(5)

⑤ 5 類

完形復元土器 1 点を含む。長石と金色の雲母片を含む特徴的な胎土を有するものが数点見られた。

2045は、器高33.6cm、口径32.0cm、底径20.7cmの完形復元土器である。口縁部が外反し、緩やかに底部へ至る器形を呈する。文様は、ナデ調整の後、口縁部に斜位の貝殻押圧文を連続して鋸歯状に施し、楔様の施文を形成し、その頂部にあたる部分に横位の貝殻押圧文を 1 条施す。胴部には、貝殻押引文を下段から上段へと施しているが、一部に貝殻押圧文の様相を色濃く残している。口唇部と底部外面には刻みを施している。器面調整は、内面で丁寧なナデを施している。胎土には、1mm大の長石及び金色の雲母片を多量に含む。

2047～2054は、口縁部片である。2047、2048は、同一個体の可能性が高い。口径19.4cmを測る。口縁部には、横位の貝殻刺突文が 2 条めぐり、直下に 8～9 条の肋で縦位に密接した状態で鋸歯状に施すことで、楔様を呈する。2049は、口径24.0cmを測る。口縁部の横位の貝殻刺突文が 2 条めぐり、緩やかなカーブを描く箇所もある。貝殻刺突文の間には斜位の刻みを施し、直下に楔様の肋 6 条程度の貝殻刺突文が V 字状に施され、楔様の文様とする。2050、2051は同一個体であると思われる。2049と同様の文様を施し、口径は19.1cmを測る。2052は、胴部の文様が貝殻押圧文に近い。胎土には、金色の雲母片が含まれる。2053は、肋 1 条の大型の貝殻による刺突が 1 段施される。2054は、へら状工具を上下に動かして楔様の文様を形成する。口唇部はやや丸みを帯び、鋸歯状の刻みを付する。

⑥ 6 類

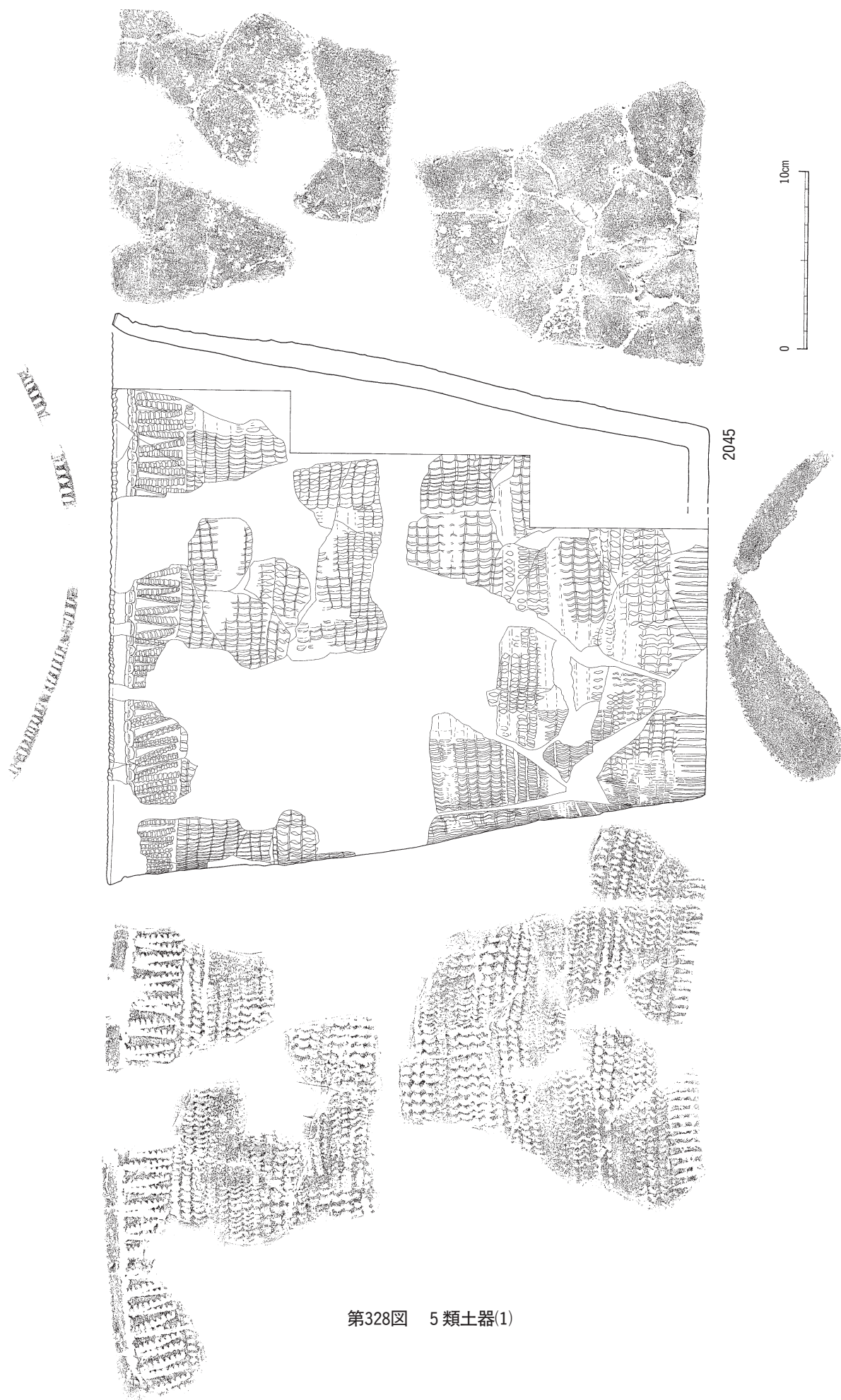
完形復元土器 1 点を含む。7 類と同じく、長石と金色の雲母片を含む特徴的な胎土を有するものが見られる。

2046は、器高20.2cm、口径24.3cm、底径15.0cmの完形復元土器である。口縁部がやや外反し、緩やかに底部へ至る器形を呈する。文様は、口縁部に貝殻押圧文が横位に 2 条めぐり、押圧文の間に、肋 7 条の方形状の貝殻刺突文を縦位に施す。胴部は、貝殻押引文を施す。口唇部には刻み、底部外面には縦位の沈線を施している。器面調整は、内面でミガキを施す。胎土には、1mm大の長石及び金色の雲母片を多量に含む。

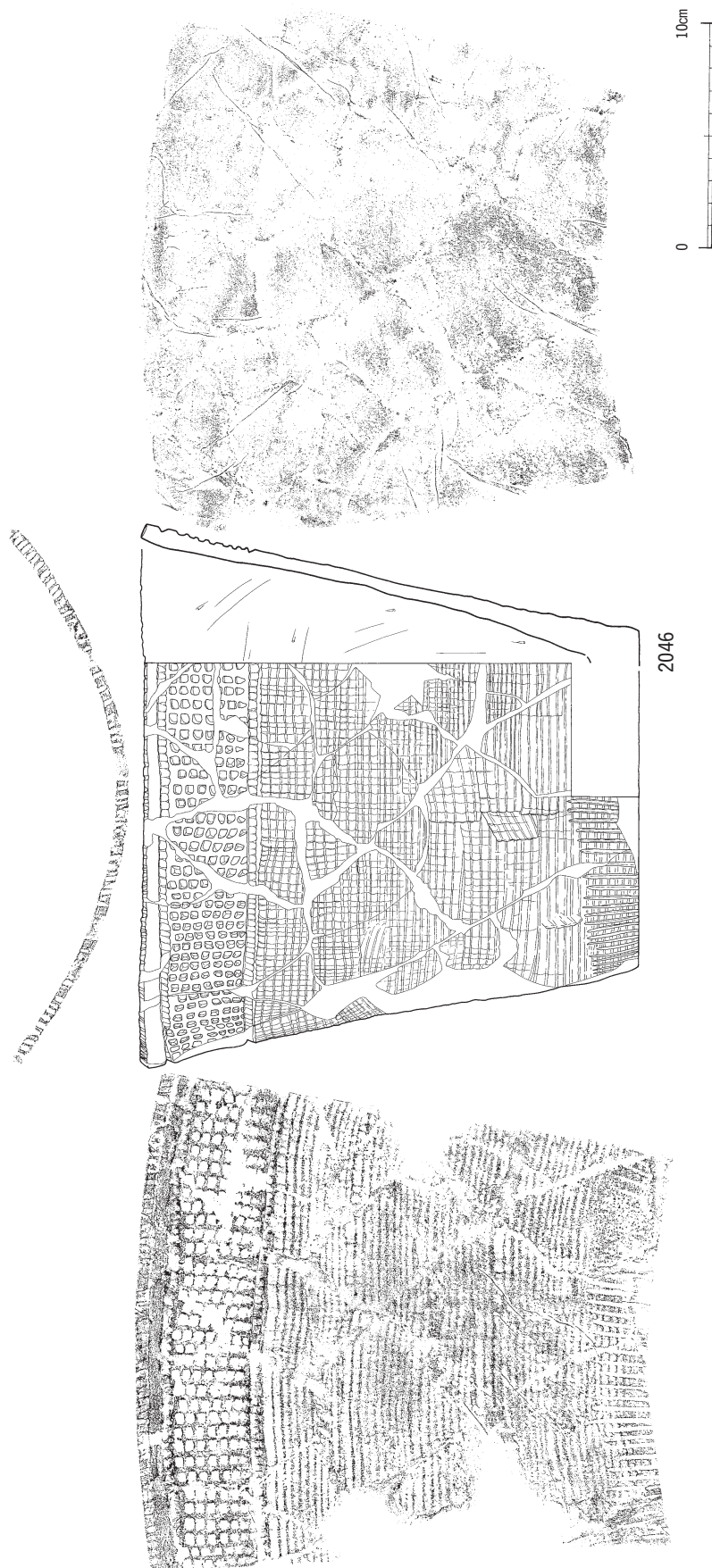
2055は、口縁部片である。口縁部は、横位の方形状の貝殻刺突文が 2 条めぐり、口唇部には斜位の刻みを付する。

2056～2063は胴部片または底部片である。正確に 7 類または 8 類に分類することが難しいため、まとめて掲載する。

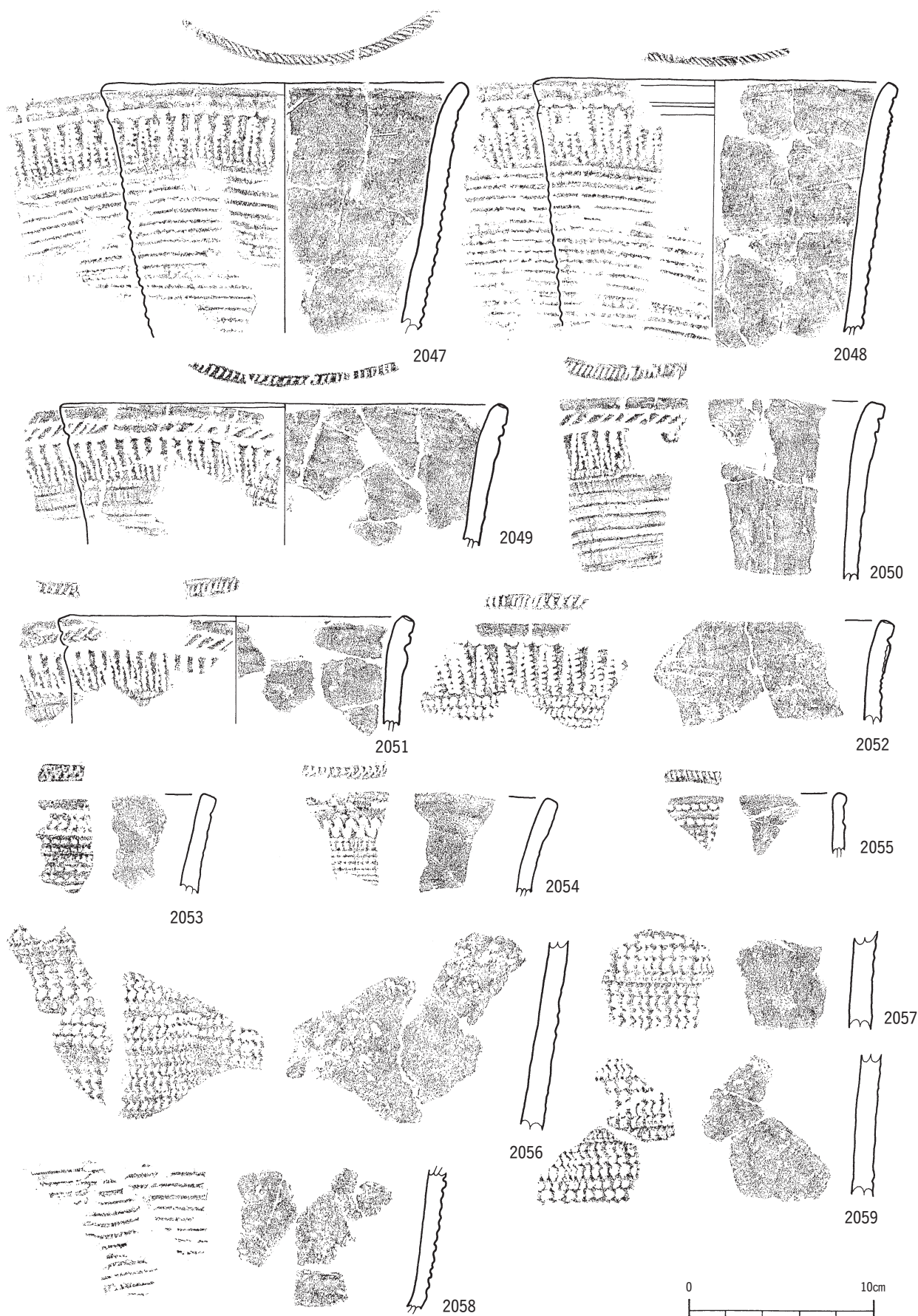
2056、2057、2059、2060は同一個体と思われる。胴部全体に、大型の貝殻による横位の貝殻押引文を施す。胎土には、1mm大の長石及び金色の雲母片を多量に含む。2056は、貝殻を寝かせて施文するため、横位の条痕がはっきりと残る。また、内面は黒色化が確認できる。2057は、胴部下部の破片であるが、貝殻押引文ではなく貝殻刺突文の様相を呈している。2059は、外面がやや摩耗して



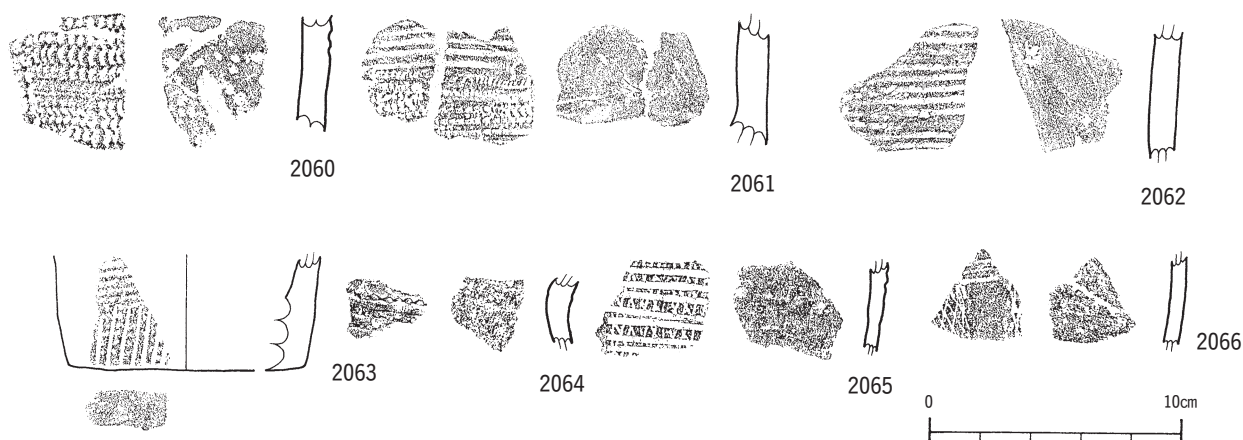
第328図 5類土器(1)



第329図 5類土器(2)



第330図 5類土器(3)



第331図 その他の土器

おり、文様ははっきりしない。

2060は、底径9.4cmを測る底部片である。ナデ調整の後、貝殻押引文を施し、底部の立ち上がり部分に縦位の刻みを付する。胎土は、1～2mm大の長石と金色の雲母片を多量に含む。

⑧13類

2065、2066は胴部片である。2065は、ナデ調整の後、縦位の撚糸文を施し、その上から横位の貝殻条痕文を一定間隔に施す。内面は、ミガキで調整される。2066は、上部に横位の貝殻条痕文を施し、その下位に縦位の撚糸文を施している。内面は、ナデで調整される。器形については不明だが、間隔をおきながら縦位の撚糸文を回転押捺していることから、塞ノ神式土器の中のA a式ではないかと思われる。

⑦14類

2064は、く字状にくびれて口縁部に至る頸部片である。ナデ調整の後、凹点状の浅い刻みを1条施す。内面は、ケズリで調整される。施文の様子から、妙見式土器もしくは天道ヶ尾式土器ではないかと思われる。

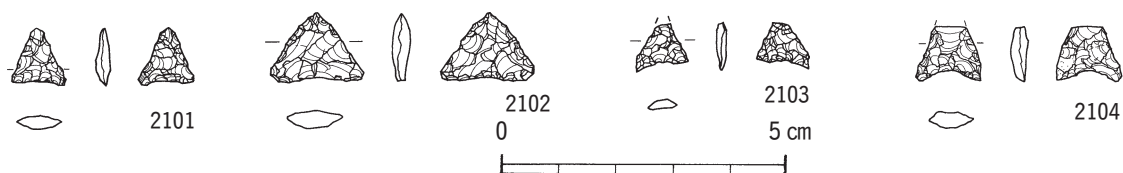
石器

C地点では、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層から、石鏃52点・スクレイパー2点・磨製石槍1点・砥石1点・石斧6点・凹石1点・磨石9点・石皿7点が出土した。

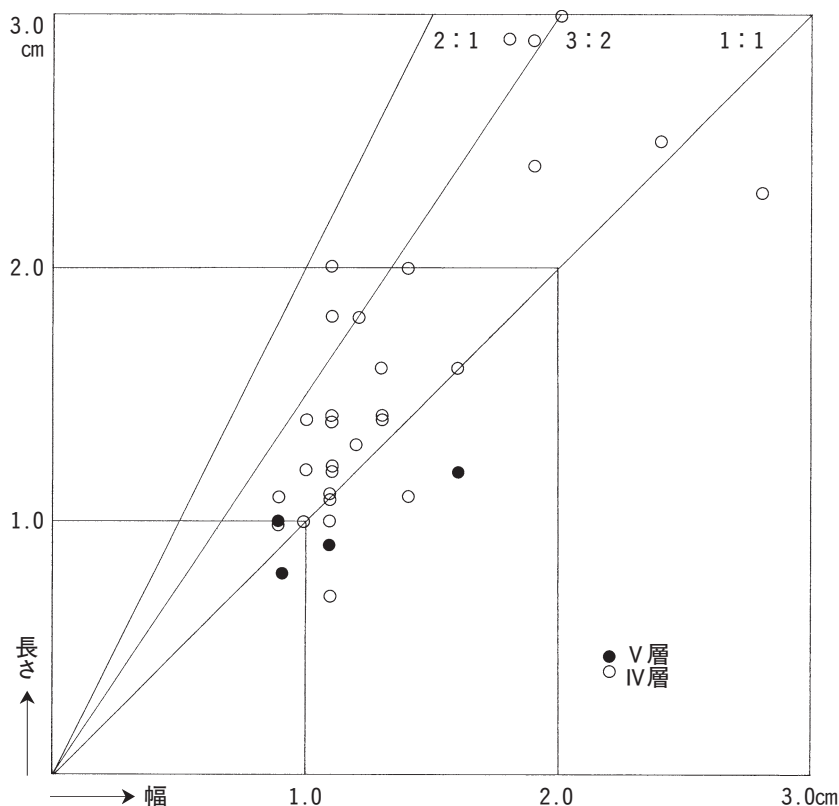
石材には、黒曜石・安山岩・ハリ質安山岩・玉髄・鉄石英・チャート・頁岩・砂岩・花崗岩等がみられた。

石鏃

C地点の石鏃はⅤ層で7点、Ⅳ層で40点が出土し、また、F・G—5区では安山岩の石材を用い、石鏃の製作を行ったと思われる出土状況がみられた。石材は黒曜石を多用し、一部安山岩・頁岩がみられた。石鏃製作場と考えられる地点では接合資料もみられた。



第332図 石鏃（Ⅴ層）



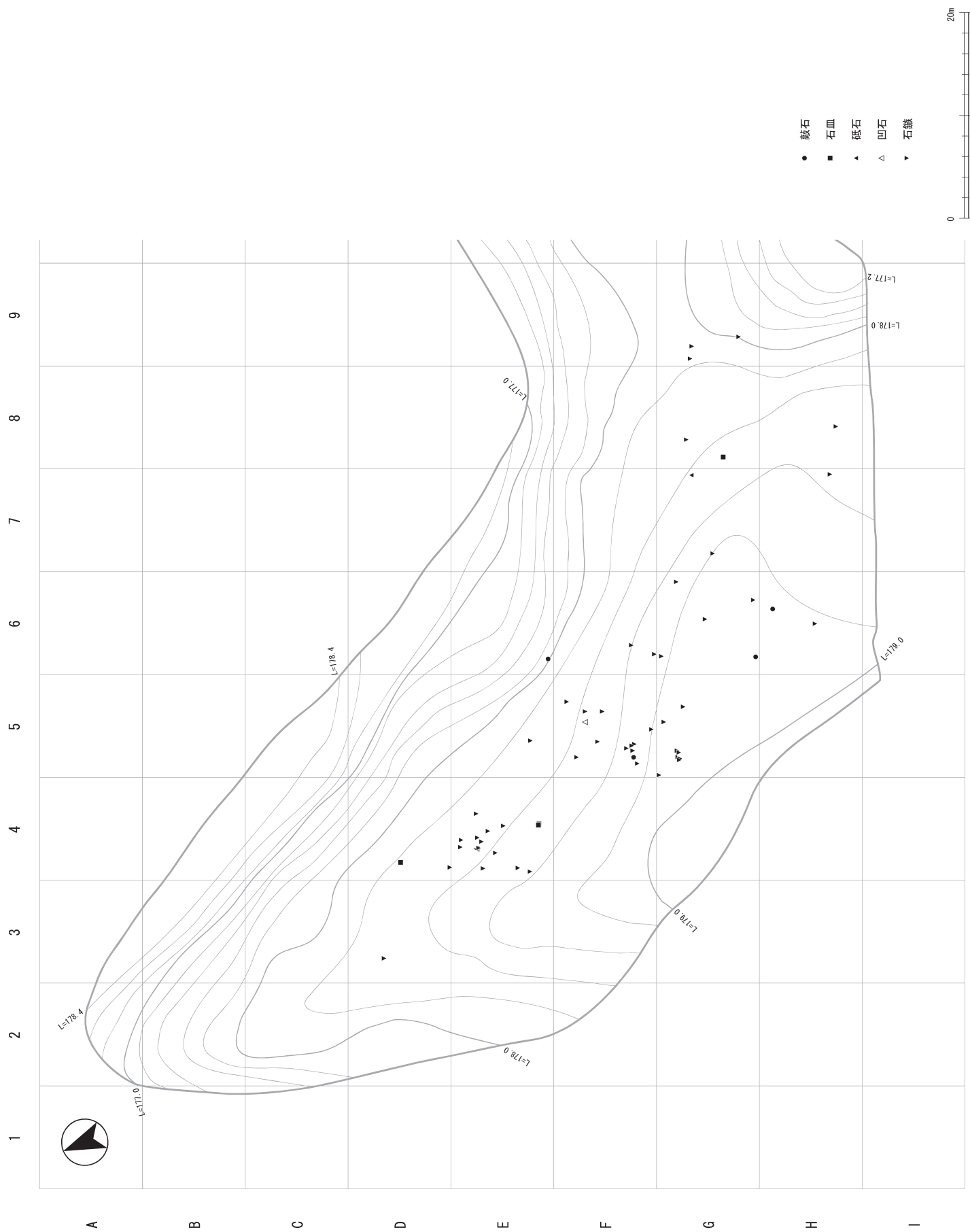
第333図 C地区Ⅴ・Ⅳ層出土石鏃法量相関図（長さ×幅）

Ⅴ層出土の4点はいずれも小型石鏃に分類されるものである。2101の先端部は鈍く側辺は直線的で基部は逆刺が円く抉りは浅い。2102は幅広の石鏃で先端部は鋭く側辺はやや外変的で最大幅が下方にある。

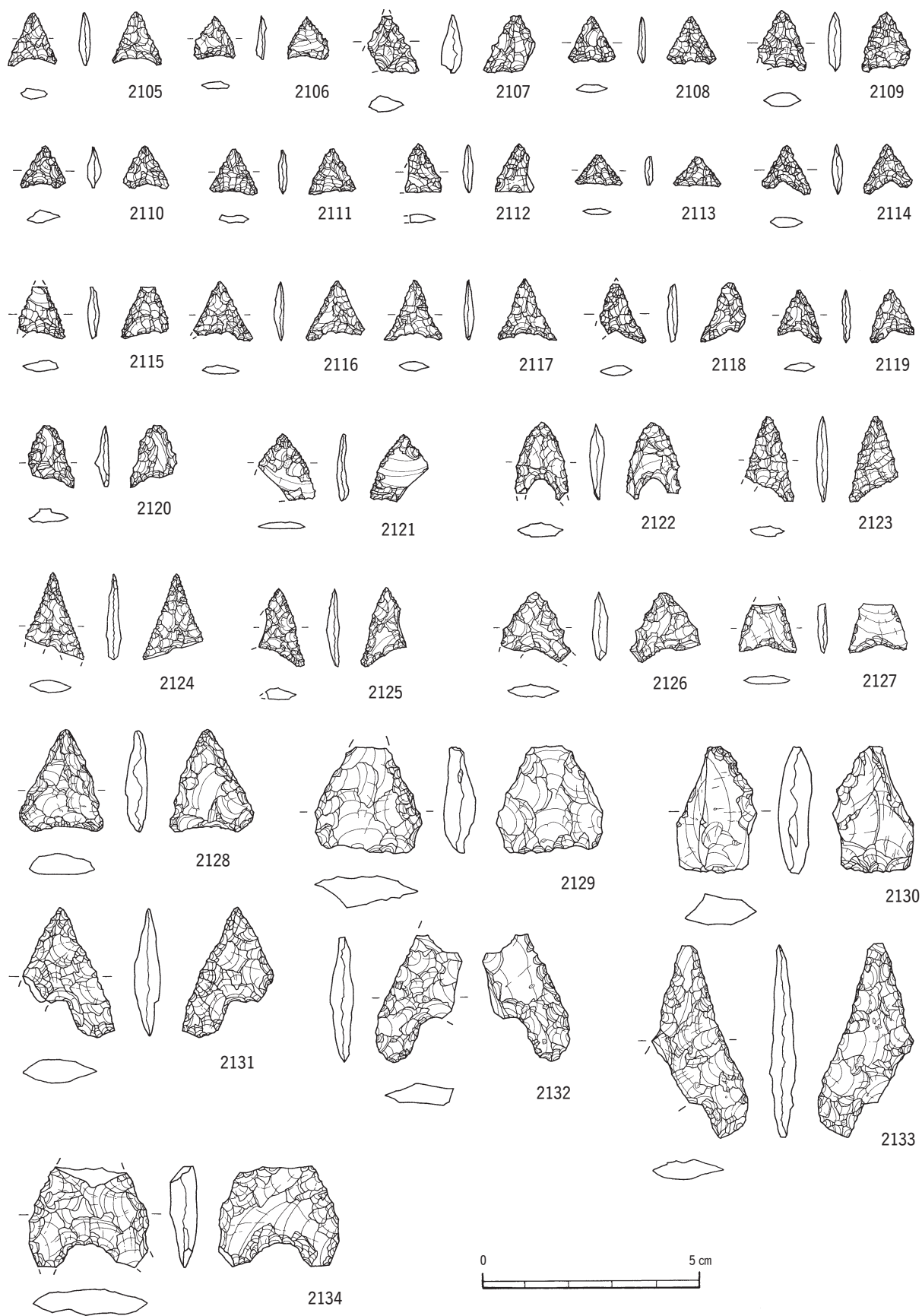
基部の逆刺は鋭く抉りは浅い。2103・2104は先端部を欠損しているが、側辺は直線的で基部は逆刺が鋭く抉りが浅いものである。

Ⅳ層から出土した石鏃には黒曜石を素材に用いた小型鏃と石鏃製作所の安山岩を用いた大型の石鏃が特徴的である。

2101・2102は先端部が鋭く側辺は直線的で基部は逆刺が



第334図 C地区器種別石器出土状況



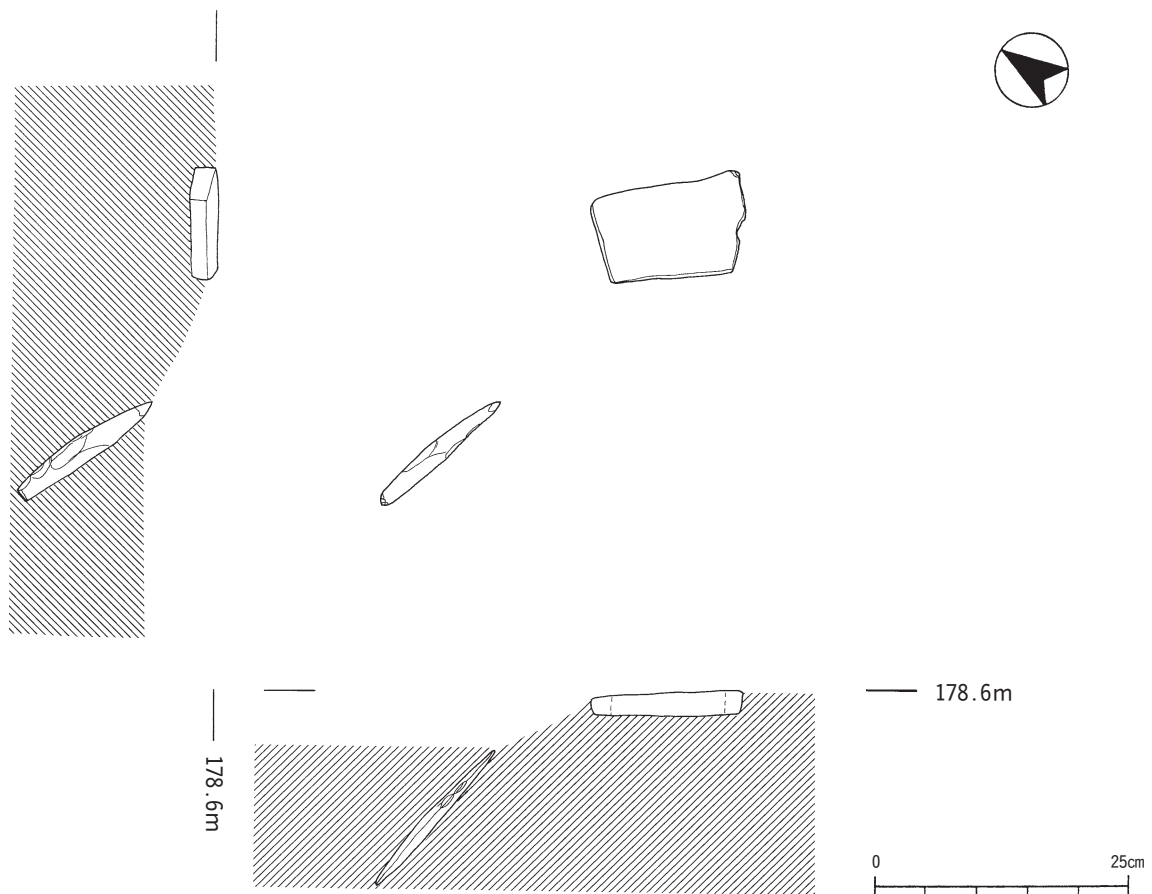
第335図 石鏃 (IV層)

第42表 C地区 V・IV層 石鏃一覧表

番号	地区	区	層	石 材	先端	側辺	基部	標高	遺物番号	重量 g	長さ cm	幅 cm	厚み cm	備 考
2101	C	G 6	V	黒曜石椎葉	B	A	Bb	178.69	15555	0.15	1.0	0.9	0.3	小型鏃
2102	C	D 3	V	ハリ質安山岩	A	Ca	Ab	178.54	11293	0.5	1.2	1.6	0.3	横長
2103	C	F 6	V	黒曜石桑木津	-	A	Ab	178.71	15561	0.11	0.8	0.9	0.2	小型鏃, 先端欠
2104	C	G 9	V	黒曜石腰岳	-	-	Aa	178.05	16911	0.3	0.9	1.1	0.3	先端欠
2105	C	H 8	IV	黒曜石桑木津	A	A	Ab	178.51	16712	0.2	1.2	1.1	0.3	
2106	C	G 5	IV	黒曜石三船	A	A	Bb	179.01	13471	0.2	1.0	0.9	0.2	小型鏃
2107	C	E 4	IV	黒曜石桑木津	B	A	Bb	178.77	11336	0.4	1.3	1.2	0.5	片脚欠, 鋸歯
2108	C	E 4	IV	黒曜石上牛鼻	B	A	Bb	178.60	12348	0.2	1.1	1.1	0.2	小型鏃
2109	C	F 5	IV	黒曜石上牛鼻	B	A	Bb	178.80	12560	0.4	1.4	1.1	0.3	片脚欠, 小型鏃
2110	C	F 5	IV	黒曜石三船	B	A	Bb	178.57	12919	0.2	1.0	1.0	0.3	小型鏃
2111	C	E 4	IV	黒曜石桑木津	B	A	C	78.64	12157	0.1	1.0	1.1	0.2	小型鏃
2112	C	E 4	IV	黒曜石針尾?	B	A	C	178.52	12608	0.2	1.1	0.9	0.2	側辺欠, 小型鏃
2113	C	G 6	IV	黒曜石腰岳	B	A	C	178.84	14505	0.1	0.7	1.1	0.2	小型鏃, 横長
2114	C	E 4	IV	黒曜石桑木津	B	A	E	178.89	11665	0.2	1.1	1.1	0.2	
2115	C	E 4	IV	黒曜石上牛鼻	-	A	Ab	178.56	12625	0.3	1.2	1.1	0.3	先端・片脚欠, 鋸歯
2116	C	G 5	IV	黒曜石腰岳	A	B	Aa	178.91	13525	0.2	1.4	1.3	0.2	
2117	C	H 7	IV	黒曜石腰岳	A	B	Ab	178.44	1155	0.2	1.4	1.3	0.2	
2118	C	F 5	IV	安 山 岩	B	B	Aa	178.99	11507	0.2	1.4	1.1	0.2	片脚欠
2119	C	E 4	IV	黒曜石椎葉	A	A	E	178.68	11673	0.1	1.2	1.0	0.2	小型鏃
2120	C	E 4	IV	黒曜石椎葉	C	Ca	Aa	178.66	12154	0.4	1.4	1.0	0.3	剥片鏃, 片脚欠
2121	C	E 4	IV	黒曜石腰岳	B	Cb	C	178.72	11671	0.3	1.6	1.3	0.2	片側辺欠, 剥片
2122	C	G 8	IV	ハリ質安山岩	A	Ca	Ba	187.54	16000	0.6	1.8	1.2	0.4	
2123	C	G 6	IV	頁 岩	A	A	Ba	178.91	14377	0.4	2.0	1.1	0.3	片脚欠
2124	C	E 4	IV	黒曜石針尾	A	A	-	178.84	11328	0.5	2.0	1.4	0.3	脚部欠, 鋸歯
2125	C	E 4	IV	黒曜石椎葉	B	A	Ba	178.87	12091	0.3	1.8	1.1	0.3	片脚欠
2126	C	G 9	IV	黒曜石針尾	B	A	-	178.42	16088	0.6	1.6	1.6	0.3	片脚欠, 鋸歯
2127	C	G 6	IV	頁 岩	-	A	Ab	179.06	14216	0.3	1.1	1.4	0.2	先端欠
2128	C	G 9	IV	黒曜石上牛鼻	B	A	Bb	178.02	16866	2.0	2.4	1.9	0.5	
2129	C	F 5	IV	ハリ質安山岩	-	Ca	C	178.98	11793	4.3	2.5	2.4	0.8	未製品
2130	C	G 5	IV	灰色黒曜石	-	-	-	178.89	13738	3.3	2.9	1.8	0.7	未製品
2131	C	G 5	IV	灰色黒曜石	A	A	Ba	178.89	13528	2.0	3.0	2.0	0.6	未製品
2132	C	G 5	IV	灰色黒曜石	-	A	Ba	179.05	13732	2.1	2.9	1.9	0.6	未製品
2133	C	F 5	IV	灰色黒曜石	C	B	Ba	178.68	13562	3.5	4.4	2.2	0.6	未製品
2134	C	F 5	IV	ハリ質安山岩	-	Ca	Ba	178.82	12180	3.8	2.3	2.8	0.6	未製品

鋭く抉りが浅いものである。2103～2110は先端部が鈍く側辺は直線的なものである。基部は逆刺が円く抉りが浅いもの（2103～2106）、直線的なもの（2107～2109）、片脚が違うもの（2110）に分かれる。2109は幅広の形態のものである。2112～2114は側辺が内弯的なもので、2112・2113の先端部は鋭く基部の逆刺が鋭く抉りがやや深いものである。2114は先端部・片脚を欠損しているが、逆刺は鋭く抉りは深い。2115は先端部が鋭く側辺は直線的で基部は逆刺が鋭く、抉りはやや深い。片脚が違う。2116は先端部が円く、側辺は外弯的で最大幅が下方にある。基部は片脚が違うが、逆刺は鋭く抉りもやや深い。2117は剥片鏃で、先端部は鈍く側辺は外弯的である。基部は一部欠損しているが、直線的である。2118は安山岩を石材に用いたもので先端部は鋭く側辺は外弯的で最大幅を下方にもち、基部の両端は欠損しているが抉りの深いものである。2119・2120は先端部が鋭く側辺は直線的なもので基部は欠損しているが、抉りの深いものである。2121は側辺の片面を欠損しているが、先端部は鋭く側辺は直線的なものである。基部は逆刺が円く抉りが深いものである。2122はや

や幅広を呈するもので、先端部は鋭く側辺は直線的である。鋸歯状を施す。基部は欠損しているが、抉りはやや深いものである。2123は頁岩を石材に用いた剥片鏃である。先端部を欠損しているが、側辺は直線的で基部の逆刺は鋭く抉りは浅い。2124は先端部が鋭く側辺が直線的で基部の逆刺は円く抉りが浅いものである。2125～2130は石鏃製作所から出土した大型の石鏃で長さ3cm、幅2cmを超えるものであり全て製作途中に欠損したものと考えられる。先端部はやや鋭く、側辺は直線的なものが多いが、2129は内弯的である。基部は直線的なものと、逆刺が円く抉りが深いものに分けられる。



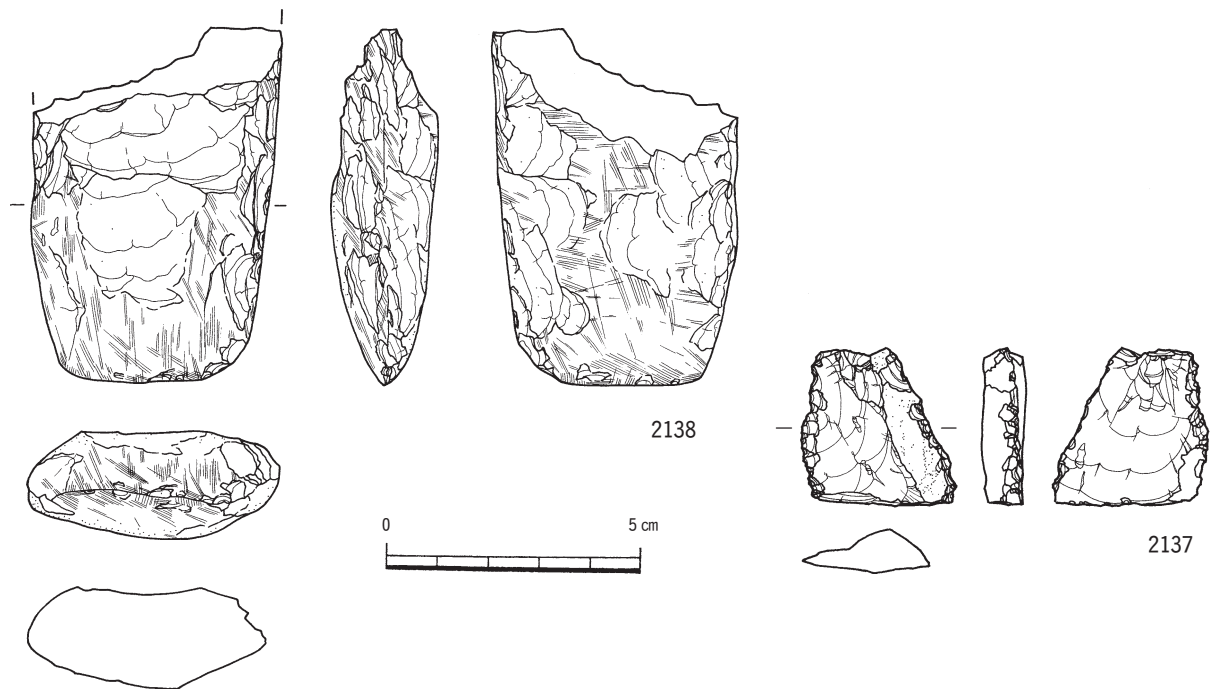
第336図 磨製石槍・砥石出土状況図

磨製石槍・砥石

2135は、G6区IV層下部より出土した研磨痕のある石槍である。出土状況は第336図に示したように、先端部を上方にし、約45度傾斜した状況で検出された。掘り込み等はみられなかった。また、約20cm離れたところから砥石が出土した。セット関係と想定される。押圧剥離で周辺加工を施した後、研磨したとみられる。長さ20.3cm、幅3.6cm、厚み1.2cmを測り、全面に研磨痕がみられ、両側縁部はより鋭く尖る。片側縁部に4か所刻み痕が認められる。形態的に石剣状を呈する。



第337図 磨製石槍・砥石



第338図 スクレイパー・石斧

スクレイパー

2137は上牛鼻産の黒曜石を素材に用いたスクレイパーである。縦長剥片の両側辺に交互剥離による刃部を施している。

磨製石斧

2138は頁岩を素材にした磨製石斧の刃部である。敲打による整形の後、丁寧な研磨を行っている。刃部は蛤刃で使用痕がみられ、側縁部には敲打痕が認められる。

凹石・敲石・磨石

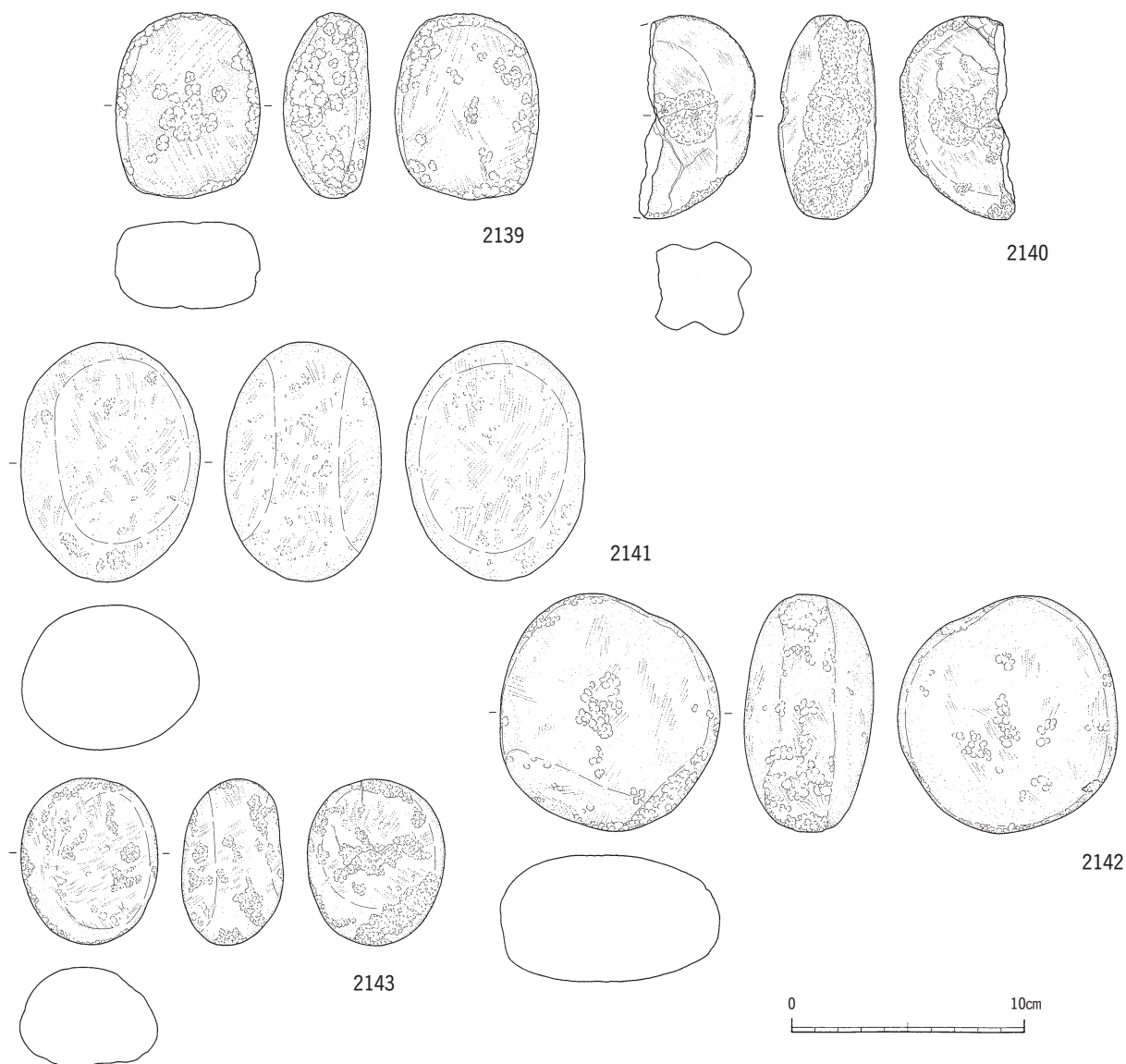
C地点ではIV層から凹石2点、磨石3点が出土した。

2139は磨り面のある凹石である。安山岩を石材に用い、石鹼状を呈している。弯曲している面に凹みが1か所在り、裏面は平坦である。

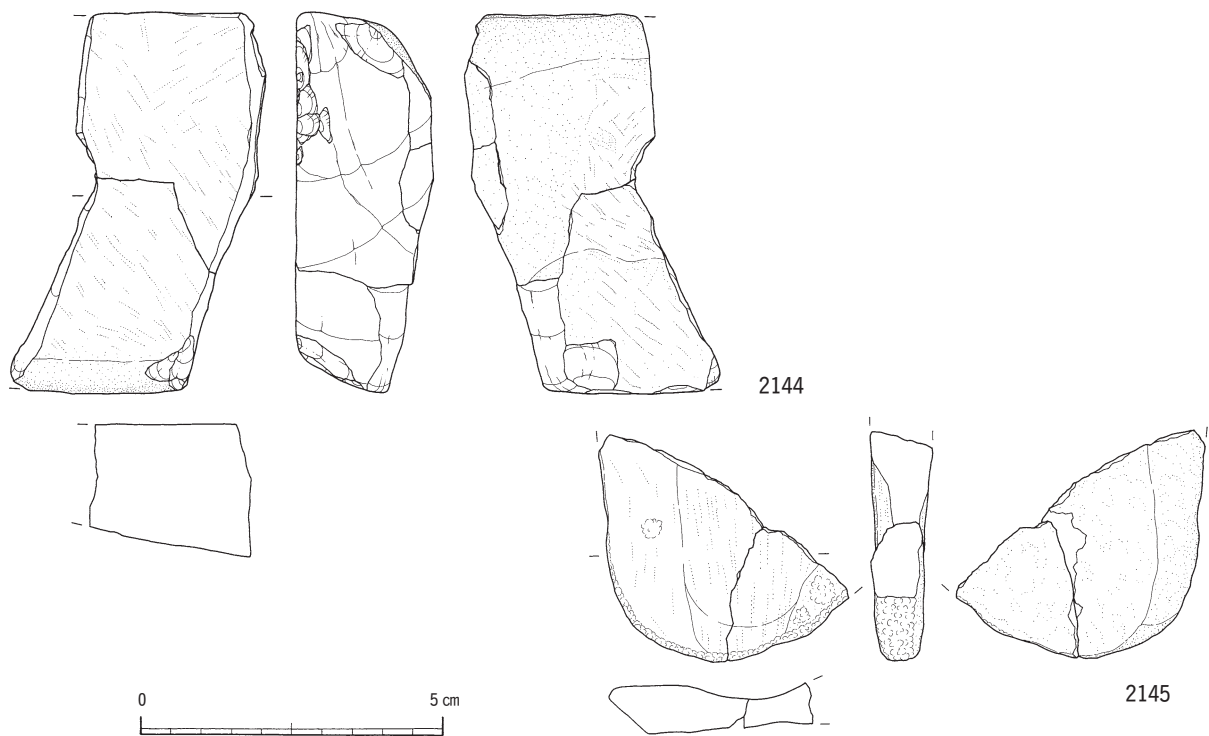
2140は磨り面・敲打痕のある凹石である。砂岩を石材に用い半分欠損しているが、3面7か所に凹みがみられる。また、側縁部は全周に敲打痕がみられる。

2142・2143は磨り面・敲打痕のある敲石である。安山岩を石材に用いたものである。

2141は磨り面のみられる磨石である。やはり安山岩を石材に用いている。



第339図 凹石・敲石



第340図 C地区 石皿

石皿

2144は欠損しているが安山岩で板状の角礫を石材に用いている。加工による磨り面に窪みはみられないが、表裏2面を使用している。2145は砂岩を石材に用い、周縁加工を施したものである。窪みが深く、周縁に敲打痕を残している。

第43表 出土縄文石器一覧表C地区

番号	器 種	石 材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備 考
2137	スクレイパー	黒曜石上牛鼻	C	D 5	IV	178.26	1767	8.6	3.1	3.1	0.9	
2135	磨製石槍	頁岩	C	G 6	IV	178.82	15480	115.0	20.3	3.6	1.2	
2136	砥石	頁岩	C	G 6	IV		15481	625.0	10.4	16.1	2.2	
2138	磨製石斧	頁岩	C	H 7	IV	178.96	14080	80	7	4.8	2.1	刃部

凹石・磨石 一覧表

番号	器 種	石 材	地区	区	層	型式	標 高	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	石 鱗 状	備 考
2139	凹 石	安 山 岩	C	E 4	IV	Ab	178.71	11353	270.0	8.0	6.2	3.7	○	2 面 ②
2140	凹 石	砂 岩	C	F 5	IV	Ab	178.74	11615	235.0	8.6	4.6	4.2		3 面 ⑦
2143	敲 石	安 山 岩	C	E 6	IV	Bd	178.44	13894	225.0	7.1	5.9	4.4		
2142	敲 石	安 山 岩	C	G 6	IV	Bd	178.90	14820	795.0	10.2	9.5	5.5		
2141	磨 石	安 山 岩	C	F 5	IV	Ca	179.01	11072	730.0	10.3	7.7	6.7		

石皿一覧表

番号	型式	石 材	地区	区	層	標高m	遺物番号	重量g	長さcm	幅cm	厚みcm	備 考
2144	I c	安山岩	C	E 4	IV	178.81	12077	850	25.1	16.8	9	
						178.7	12742					
2145	III a	砂岩	C	G 8	V	178.37	37255	4900	15.1	16.5	4.2	
	II b	安山岩	C	D 4	IV	178.55	13868					
		砂岩	C	集石 4				335	7.2	7.1	4.9	

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（107）

まえ
前 ばる
原 遺 跡
（第Ⅰ分冊）

発行日 2007年1月

編 集 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811（FAX 0995-48-5821）

印 刷 株式会社トライ社
〒892-0834
鹿児島市南林寺町12-6
TEL 099-226-0815